

# メス堕ちしたくない俺の苦難八割TSチートハーレム記

丸焼きどらごん

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

「これでチートハーレムだうっひょく！ って思ってたのにいい！」

魔王を倒したはずが呪われて女になってしまった主人公。しかも”メス堕ちポイント”なるものが溜まり切ると二度と男に戻れないらしい。

そんな(元)彼が持つチートスキルは”あらゆる経験値を十倍取得”！ つまりメス堕ちポイントも十倍取得！ 日常の中でも常にメス堕ちの危機である！

これは呪いの元凶に寄生されたり、仲間の女の子達にチョロク落とされそうになったり(メス堕ちは相手が女の子でも可)、野郎にまでモテたり、悲鳴をあげながら元に戻るため旅するTS娘の不憫系チートハーレムコメディ。

※3000〜5000文字くらいのさくつと読めるお話を週1くらいで更新しています。スナック菓子感覚でお気軽にどうぞ。

※カクヨムさんにも投稿しています。

※現在加筆修正中(37話まで修正済み)

←表紙絵(作者絵につき苦手な方は注意)

## 目次

一章 TSした俺のイベントが渋滞してる一日

1話 ▶ 呪いゝ魔王を倒したら女の子にされた | 1

2話 ▶ 事の顛末ゝマンホール転移から魔王退治に至るまで | 11

3話 ▶ 寄生魔王と俺ゝ急募。こいつを殴る方法 | 19

4話 ▶ 謎の音ゝ胸キュンを知った日 | 25

5話 ▶ 幸せ谷ゝ仲間の様子がちよつとおかしい | 33

6話 ▶ 襲撃ゝ服って弾け飛ぶものなんだ…… | 43

7話 ▶ 対峙ゝメス落ちポイントってなんですか!?! | 53

8話 ▶ プロポーズは突然にゝ心を折ろうと思っただけなのに

62

9話 ▶ 呪いと祝福ゝ本日の天気、晴れ時々雷雲時々俺の悲鳴

72

10話 ▶ 職業ゝメス落ちと女子力は違くない?? | 85

11話 ▶ それってなんてエロゲ?ゝ呪いと祝福がほぼイコール

95

12話 ▶ 真夜中の女神ゝ普段結ってる子が髪の毛おろしてるとめ

ちやくちやときめく | 104

13話 ▶ 月夜の告白ゝ俺のパーティの女騎士が河愛くてイケメン

過ぎる | 113

14話 ▶ 明晰夢ゝ寄生野郎が顔のいいシヨタガキになったの何

124

15話 ▶ 秘密の花園ゝ女になったら女にモテています。ナンデ?

139

16話 ▶ 方針ゝそして始まる絶対男に戻りたい苦行八割の旅

本編を読まなくてもだいたいわかるかもしれない一章のあらすじ

## 二章

17話 ▶ 賢者の住居を目指して〜俺のチートハーレム記、始動！

18話 ▶ 雌伏（魔王視点）

19話 ▶ 断崖都市〜俺は下着イベントから逃げました

20話 ▶ 冒険者ギルド〜な、何イ!?と驚かれないお年ごろ

21話 ▶ 謎の金髪幼女〜ホールケーキ二個分奢らされた

22話 ▶ 竜人〜新たなチートスキル、マジ捨てたい

23話 ▶ ? 買い物①〜まな板の上の鯉

24話 ▶ 買い物②〜試着室の変態大魔王

25話 ▶ 母性と嗜虐心（ガーネット視点）

26話 ▶ 再来〜馬鹿が式場ごと来やがった

27話 ▶ 求婚者×2〜ネタでも俺のために争わないで!とか言わ

んからな

28話 ▶ 精霊の町〜大賢者は引きこもり

29話 ▶ 歓待〜賢者の食卓

30話 ▶ 事情説明〜勝利宣言はフラグだとあれほど

31話 ▶ 光明〜目指せ迷宮! 目指せお宝! 俺たちの戦いはこれか

らだ!

本編を読まなくてもだいたいわかるかもしれない二章のあらすじ

## 三章

3 2 話 ▶ 闇堕ちくと思っていた時期が俺にもありました | 288

3 3 話 ▶ 無垢の一撃く冷や汗が止まらない | 295

3 4 話 ▶ 勉強と迷宮トイレ事情く色々瀕死です | 300

3 5 話 ▶ 散歩く晴れ時々血の雨 | 307

3 6 話 ▶ 悪意の化身(少年視点) | 312

3 7 話 ▶ 暴虐の炎くおニューチートと八つ当たりファイト | 318

3 8 話 ▶ 弟子入りく結局魔王が全部悪い | 327

3 9 話 ▶ 探求者くやつと運が向いてきたかもしれない翌日正座し

てる俺 | 332

4 0 話 ▶ 熾火は執着の風に煽られて(魔王視点) | 344

4 1 話 ▶ 急造師弟く初ナデポが互いに男という地獄を避けたい

349

4 2 話 ▶ 嵐来襲くマジでこれが男じゃなかったらなし可言えない

357

4 3 話 ▶ 部屋割りくなんか弟子がめちやくちやキョドってる

363

4 4 話 ▶ 君を待つく都合にいいことだけ聞いて生きていきたいく

370

本編を読まなくてもだいたいわかるかもしれない三章のあらすじ

377

#### 四章

4 5 話 ▶ 世界の形く異世界はやはりちよつとおかしい | 383

4 6 話 ▶ 一方その頃、花婿志望共(ルリル、アルマデイオ視点)

388

4 7 話 ▶ 天空都市マシユラバく剛腕マイペースと現実逃避 | 396

48話 ▶ 幸せ花園計画（シャティ視点） | 408

49話 ▶ 迷宮入り口く乙女の照れ顔は破壊力高い | 414

50話 ▶ 天空迷宮く馬鹿と弟子と密室 | 420

51話 ▶ 窮地く自分を追い詰めるのはいつだって自分だが納得は  
出来ない | 428

52話 ▶ 貧血く最強の俺、体調不良が今のところ一番の敵 | 435

53話 ▶ 嫉妬心とガールズトーク（パーティ視点） | 441

54話 ▶ 罨くさよなら神秘的な迷宮 | 448

55話 ▶ 千里眼のバシユトレーゼ（魔族バシユトレーゼ視点） | 456

56話 ▶ 窮地の後にく腹痛で死んでいます | 463

本編を読まなくてもだいたいわかるかもしれない四章のあらすじ | 468

## 五章

57話 ▶ 留守番くガーネットのハーレム家族 | 473

58話 ▶ 地下迷宮を求めてく馬鹿が死ぬほどしぶとい | 484

59話 ▶ モテとはく惚れた弱みに付け込もうとしてみた | 493

60話 ▶ 灼熱迷宮く立ちはだかる環境脅威 | 500

61話 ▶ 娘のような息子の花嫁候補（竜王視点） | 512

62話 ▶ ルルナリアス温泉街く技師を求めて | 517

63話 ▶ 消えた力の行方（バシユトレーゼ視点） | 528

64話 ▶ 技師の工房く余計なおまけ二人付き | 532

65話 ▶ 性別って誤差らしいく現実逃避が追い付かない | 539

66話 ▶ 再戦タイムリミット（魔王視点） | 545

67話 ▶ 魔術工芸核く変身はロマン | 552

	68話 ▶ 権能回収 (ガルドウド、魔王視点)	560
	69話 ▶ 感情の名前 (パーティ視点)	565
	70話 ▶ 温泉宿くたまにはうま味も欲しい	571
	71話 ▶ なすがままに洗われてくなんか思ってたのと違う	578
	72話 ▶ 温泉雑談タイムくスライム風呂って本当にあるんだ……	587
	73話 ▶ 取り合いっこく本体じゃなくて髪	596
	74話 ▶ それはとある”誰か”の過去語り (魔王視点)	604
	75話 ▶ 夢のあとく賑やかで、だけど静かな一日の始まり	612
619	76話 ▶ 新・魔術装甲く鎧が布にジョブチェンジしたんだが	

一章 TSした俺のイベントが渋滞してる一日  
1話▶呪いゝ魔王を倒したら女の子にされた

異世界に召喚される。

すごい力を手に入れる。

その力で悪い奴をぶっ倒す。

モテ期が到来する。

俺の現状を最低限の言葉で表すならば四行で済むだろう。

だが待つて欲しい。世の中そんなに甘くないのだ。

「まあ、体が凝っているようですわ。わたくしがほぐして差し上げます！」

美少女の巨乳に挟まれてエッチな感じにマッサージしてもらっても。

「今日も君は素敵だね。……手を握っても良いかな」

はにかみ笑顔の凛々しい美人に恋人つなぎを求められても。

「あのね……ぎゅつと、して?」

拙い話し方のケモ耳美少女にハグをねだられても。

「寂しくなったらいつでも来な。優しく抱いてやるからさ。それとも熱いのがお望みかい?」

お姉さま系迫力美人に夜のお誘いを頂いても。

これらの欲望に身を委ねず、全て堪えぬかなければいけない現状が今の……俺なわけで……!

何も無かったら飛び上がって喜んで身を委ねてたっつーのによ!!

もう完っ全に!! 「これでチートハーレムだうっひょく!」って

思ってたのに! 思ってたのにいい!

俺の現状を最大限シンプルに言うと、こうなる。

呪いで女にされた上に「メス堕ちポイント」とかいうふざけたポイ



ントが溜まり切ると二度と男に戻れなくてしかもそんな俺が持つてるチートスキルが「あらゆる経験値を十倍取得」でつまり俺のメス落ち経験値が溜まる速度も十倍でその上メス堕ちは相手が女の子でも適応されるらしいっていう地獄だよ誰か助けろくდასაი!!

(くそ！ クソクソクソクソクソオツ！　なんで俺がこんな目にいいッ！)

あれもこれもそれも、全部全部全部！  
事の発端は数週間前だ!!



死を纏う攻撃がすぐ真横を横切り、肌を淡く撫でていく。堅い建材をバターののように切り裂くそれが直撃すればただでは済まないだろう。

そんな攻防が何時間続いただろうか。しかし不思議と高揚感はずけず恐怖心も麻痺していた。ただただ目の前の敵を見据え、それを倒すための一撃だけを考えている。

そして訪れた最高、最適の一瞬。その時だけ全てが噛み合った。上空を白銀の翼で縦横無尽に飛び回る仲間から回復の力が降り注ぎ、力がみなぎる。

地を低姿勢のまま凄まじい速度で駆け、時に跳ねる桃色の軌跡が鋭い爪の斬撃と共に相手をかく乱する。

こちらを仕留めんと振るわれた凶刃を、清爽な青を纏った鎧と盾が受け止める。

遠方より飛来した流星のような無数の赤い弾丸が、相手の下半身を穿ちバランスを崩させる。

今しかないと脳が判断する前に、体が動いていた。

「これで……終えだ!!」

犬歯をむき出しにして吠えた俺は血まみれで、もともと三白眼で目つきが悪いってのに更に柄が悪い見た目になっている事だろう。これじゃどっちが悪役かわかりやしねえな。

だが俺にとつての悪。否、敵は目の前のこいつ。たった今急所に剣を突き立てた。

悪だの正義だの、正直そんな興味はないし意味も無いと思ってる。そんなもん視点次第でいくらでも変わるってもんだからな。短い間に色々見てきた。

……けどな。こいつが今後、俺や仲間の人生で障害になりうるって一点が分かってくれば、戦う理由には十分だぜ。

「……！ オ……ラァツ！ くたばりやがれ！ 魔王様よお！」

突き立てた剣を真一文字に振り抜けば、炎と風を纏った斬撃が馬鹿でかい胴体を上下に両断する。

ぎらぎら黒光りするムカデのように連なった堅い装甲が引き裂かれ、紫の血しぶきが舞った。剥き出しになった獣に似た頭蓋骨の眼窩がんか。そこに鎮座する赤い光がひととき強く輝く。まるで目を見開いたかのように。

命を絶つ手ごたえ。

同時に己の魂へと流れ込んでくる大量の『経験値』に、残心を怠らずも勝利の確信が生まれた。

(……………っしやあ！ ようやく倒したぜえツ！ これで安心してこの世界で過ごせる。それにこの後はお楽しみの……………むふふ)

『馬鹿めー！』

「え」

嘘。残心を怠らずとか嘘でした。どうしよう、あとで古参の仲間には「君は強いが油断と慢心が過ぎるといつも言っているだろう！」って説教されること確定なんだが。想像余裕すぎる。

「ぐあっ!？」

一瞬気がそれたタイミングに付け込まれ、ガアンと大槌で頭蓋を叩かれたような衝撃が走る。そのまま視界は明滅し……………暗転。

次に意識を取り戻した時。

周囲から仲間は消え、俺は紫の靄に囲まれた訳の分からない空間に放り出されていた。

「な!？」

『ようこそ、我を追いつめし英雄よ。心より賛辞を送ろうではないか』  
目の前には姿かたちが判然としない黒く蠢く何かの塊。だがその気配と俺に向けられた言葉で、これがたった今倒したばかりの魔王であることを察した。

「ここは……………！ それに、お前!？」

『ここは狭間の空間。現実時間が何倍にも引き延ばされた、精神のみが存在しうる空間だ。……………安心するがよい。貴様は見事、この我を倒してみせた。今ここに居るのは肉体から零れた魂の残滓に他ならぬ』

先ほどまで感じていたプレッシャーが嘘のように落ち着いた声色。貫禄すら感じる。

しかもこちらを褒め称えるような口ぶりだが……………。まさかこんな

所に引き込んでおいて、ただ自分を倒した相手を褒めるだけとも思えない。

「さつきは油断したが、ここで気を緩めるほど俺はお気楽じゃあないぜ。」

「……本当は一瞬でも油断しちゃ駄目だったんだけど。」

「だあつ、もう！ 畜生！ 勝利を確信した瞬間が一番気を付けるべきだって、俺は今まで散々漫画とかアニメとか映画とかのキャラに思ってきただろ！ 自分がその立場になったらこれかよ！」

「あくあ。馬鹿だなあ。『倒した！』とか『やったか……!?!』は口に出しても脳内で考えてもフラグなんだよ」とか言ってきた根暗オタクな過去が猛烈に恥ずかしい!! ごめん、苦戦した後でようやく倒せたら油断するよな。今ならわかる！」

「こうなってしまった今、「く戦う理由には十分よ」とかキリつとモノローグしてたのも全部フラグに思えてくる。マジで恥ずかしい。死にたい。いや死にたくないけど気分的にこうなんかあれ。床をゴロゴロして死にたええ!! って叫び周るテンションの死にたい感情。羞恥の極致的な？ ははは。」

「いや、そんな後悔今はいいんだよ。誰でも失敗する。肝心なのは失敗した後、どう行動するかだってばあちゃんが言った！」

「心のばあちゃんに敬礼しつつ、気を取り直して俺は魔王に止めを刺すべく剣を握ろうとしたが……手は虚空を掴んだ。」

「それどころか。」

「きゃー!?!」

『……………乙女のような悲鳴をあげるのだな』

「う、ううううううううるせっ！ うるせーやいッ！ おい、俺の服！ 俺の服どこいったよ!!」

『言ったであろう。ここは精神のみが存在できる空間だと』  
「だからってさあ!!」

「剣どころか服と他装備もろもろ消えてんじゃねえか！ うおおおお！ 魔術装甲もかよ！ 弱ってるとはいえ魔王の前で勘弁しろよ死ぬわ！」

こ、こうなつたら魔術攻撃で……。いやでも、魔力装甲も消えてんだ。使えるか!? 魔術!

焦る俺の姿が愉快なのか、ノイズがかった魔王の耳障りな声が愉悅の色を含む。

『ククククク。何かしようとしても、この空間に入った時点で貴様は負けている』

「なに!?!」

『英雄よ。貴様は確かに我を倒してみせた。だが……』

瞬間。先ほどまで感じていたプレッシャーが蘇った。

戦闘中ずつと何トンもの重りを肩に乗せられているようだった威圧感。肺に取り込む空気の量さえ減ったように感じる。

……ッ、クソ! これのどこが残滓だ!?

そして魔王は先ほどまでの落ち着いた調子をかなぐり捨て、耳が腐るような哄笑をあげた。

『あっはははははははははははは!! この我が!! ただで死ぬことなどありえぬ!! 光栄に思うがよい。厄災の魔王と呼ばれた大魔族が放つ呪い。それを一身に受けることができるのだからなあ!!』

「何!」

ま、まずい。呪いを弾く装備もなにもかも消えている! 今の俺は文字通りの無防備だ! パンツすらないんだぞ! ぎげんな!

せめてもの悪あがきで両腕を体の前でクロスさせるも、そんなものに意味があるはずもなく。

黒い靄が津波のごとく広がり、覆いかぶさってくる。するとその中は悲しみと怨嗟を孕んだ老若男女さまざまな声が上下左右から襲い掛かる地獄のような空間だった。

声を聞いているだけで狂いそうになる!

まずい。まずいまずいまずい! こいつが言う呪いはマジでやばい!!

こいつは普通の魔王じゃない。「厄災の魔王」……災害に等しい存在だ。

魔王が力を蓄えて、世界に放つはずの呪い。それを食い止めるためにここまで来た。だってのにその呪いが……俺ただ一人に向けられているとしたら!?

『今の我では世界を呪いで覆う事は不可能。だが貴様を媒介にすれば話は別だ。さてさて、貴様の希望はなにかな？ 己や仲間の存在そのものか？ 積み重ねてきた記憶か？ 帰るべき故郷か？ 今の貴様が最も望み求めるものの対極をくれてやる！ さあ、望みを見せろ！  
そしてそれは……』

【反転する】

呪言じゆごんだ。

分かっていても防げなかった。呪いは俺の鼓膜を、脳を貫き、抜けない棘となつて体に浸透していく。

「あ……がっ！ あ、あああああああああああああああ  
!!!」

内側から焼き鑊ごてを押し付けられているような灼熱の痛みが全身を襲った。次いでがくんと体温が下がり極寒が体内を蹂躪する。荒れ狂う体温の波は外傷なんかよりよっぽど苦しかった。

まさに今、俺は「厄災」に侵されている。身を焦がされている。

しかもこれがもたらすのは単純な痛みだけじゃない。俺の望みを知り、その真逆となるよう呪いは体現されるのだという。

冗談じゃない!

(でも、俺の希望と絶望って……なんだ?)

故郷へ帰る術を探すのはもう諦めた。それにさすがの魔王も「あんな遠い」場所へ干渉することは不可能だろう。

なら……他は?

仲間達の顔が脳裏をよぎる。

「や……めろおおおお!!」

最悪を想像して叫ぶ。だがもう俺は呪いに飲み込まれた。あとは呪いが完成する様を見ているしか出来ない。

無力感を噛みしめ……そして。

呪いは”成った”。

「……………」

……動けない。視界も開けない。

いや、視力は無事なんだ。ただ俺が自分で顔を覆っているだけで。しゅうしゅうと煙に包まれる体を縮こませてうづくまる。

『……………え?』

「やめろ。やめて」

呆然とした声は俺じゃない。というかそんな声を出さないでほしかった。

つーかおめえはどうやってたら消えるんだよ! 今の流れは完全に最後の力を使い果たして貴様を呪ってやるぞお! ってやつだっただろ!! いつまで残ってんだよ! 消えろよ!! そして見るな。今の俺を見るなああああああああ!!

『は? どういう……………こと? いや呪いをかけた本人だ。理解はしている。理解はしたが……………は?』

「あの、本当にやめ……………」

『お前、仲間の命より性欲が勝つたの?』

「やめてええええええええ!! 人間として恥ずかしくなるから言葉にしないでえええ!! ばあちゃんに顔向けできない!!」

妙にフランクになった言葉使いが、素で話してる感伝わってきて辛いんだが! 辛いんだが!!

「ひうつー！」

ぶんぶんと頭をふつっていると、顔を押しさえていた腕の側面が柔らかいものとその先端をかすめる。思わず変な声が出て余計に居た堪れなくなった。

おいここ精神だけの空間なんだろう？　なんてこういう感覚はあるんだよ！

「せめてなんか布くれ!!」

『無理だ。ここは精神のみが存在する空間だと言ったであろう』

恥も外聞もなく敵に助けを求めたが、それは無慈悲に叩き落された。

『……いやしかし、ふむ。ほくう』

顔が見えなくてもわかる。こいつ今、絶対意地が悪い顔でニヤニヤ笑っていやがる！　声がそうだ！　ギーギーノイズかかったような声だけど！　分かるぞ！

『まあ納得はしよう。雌と交配して子孫を残せなくなる。雄としてはさぞ辛かろうな？　だがまさか我が呪いを、そのような欲で最小限にとどめるとは……恐れ入ったぞ英雄』

「やめて！　ほんとやめて！　お願いします！」

現在俺の身に起きている変化がどういったプロセスでこうした結果につながったのか。呪いをかけた魔王はもとい、受けた俺も理解している。頭に直接流れ込んできたからな!!

確かに俺は夢見ていたさ！　これが終わったら俺って大英雄じゃん！　モテモテ間違いなし！　脱童貞するための確約だつて取り付けてあると！　楽しみにしてたさ！　ああそうだよ俺はまだ童貞だよ！

でも、そんな、まさか。

『大災厄の呪い。よもや女になるだけの効果に置き換わるとは思わなかったぞ。よほどおなごと交わりたかったのだなあ貴様。それが貴様の希望か。清廉潔白な英雄ならば世界平和の願いが反転し大惨事だったものを。……まあよくも低俗な煩惱で救われたものだよ、この



世界も』

「やあああアああめええてええくううれええエエ!!」

まっつっつたく馴染みのない甲高い悲鳴が謎空間に反響する。

魔王を倒したその日。俺は女の子になった。  
は？

2話▶事の顛末くマンホール転移から魔王退治に至るまで

素朴な宿屋の食堂で、明るい声が弾けた。

「一時はどうなるかと思いましたが！ でも本当に、みなさまご無事でよかったです。もうもうもう、さっすがミサオ様です！ 本当に魔王を倒してくださるなんて。わたくしの眼に狂いはありませんでした！  
最強！ 最優！ 最高！ ですわ〜！」

白髪の美少女が上機嫌な笑顔を浮かべ、樽に似た木のジョッキを掲げる。その際に後ろに垂らされた長い三つ編みが揺れ、前ではぼよんつとビッグで柔らかかそうな塊が揺れた。ナイスおっぱいありがとうございます。

背中から生えている二対の翼などよりよっぱど特徴として覚えてしまう。張りがあっても柔らかかそうで。何よりでかい至宝のようなおっぱいである。包まれない。

前から見たら清楚なのに背中にはぱっくり開いてる服と相まって、もうこれは童貞殺戮兵器だと思う。俺は何度か死んでる。ありがとうございます眼福です。

「だね。彼の力が無ければこの勝利はあり得なかっただろう。……随分と差をつけられてしまつて悔しいけれど、それ以上に誇らしいよ。だって厄災の魔王を倒したのに誰も欠けることなく、どこも欠損することなく生還できたのだから。……素晴らしい成果だ。まさか本当に成し遂げることが出来るとは」

艶やかな青い髪をポニーテールにした切れ長目元の美人が表情を綻ばせる。白髪美少女が差し出したジョッキに自分のそれをガツンとぶつけて酒を飲み干すさまは、豪快でありながらも洗練された所作によりどこか優美だ。

こちらのおっぱい様は比較的慎ましやかさんだが、形が素晴らしい。あと小ぶりなお尻がきゅつと上がっていて最高ですありがとうございます。

普段はいかつい鎧に包まれている白い肌も、今はくつろぎモードで露わになつていた。黒いノースリーブのインナーから覗いている脇やうなじ素晴らしいですありがとうございます。これは拝みたくなる。拝んだ。

ポニテつていいよな……。

……あの、でも、その！

その発言にちよつと物申したい。褒めてくれるのは嬉しいし、みんな無事だったのは本当に喜ばしいんだけども！ 言わせてほしい！

「俺が無事ではないし、欠損、あるんですが……」

病める時も健やかなるときも長年苦楽を共にしてきた相棒が、ですね……？

代わりに「ハイ！ ワタシ、ジエーンよ！ ワアオ！」とばかりに生えてきたニューフェイスがぶらさがっているわけですが……いやジエーン誰だよ。

二人にそつと目をそらされた。

待ってくれ。反応に困る気持ちも分かるが、見捨てないでくれ。

「ミサオパパ……小さくなつた。モモと、おなじくらい。…………。ミサオママ？」

桃色の髪からぴよこんつとはえている大きなリボンのような黒い狼耳と、人間の耳と同じ位置にある桃色の毛におおわれた兎耳。四つの耳をびくびく動かしながら、赤い瞳が不思議そうにのぞき込んでいる。

表情は幼げかつ乏しいものの、ぶんぶんと動いている尻尾を見るに好奇心が刺激されているらしい。動作可愛いな。

でもやめて。パパ呼びでも色々どギリギリなのに、ママ呼びは駄目だって。可愛すぎて母乳出ちゃうだろつて、うわいや何言つてんだ俺マジで気持ちわる自分で引くわ。ぐああああああああ!!

「あつはははー！ そうだねえ。背丈は同じくらいじゃないかい？ いや、それにしても随分と愛らしくなったもんさ。態度までしおしおしちやつて。……ふふつ、ミサオは可愛いねえ」

ゴージャスな赤い巻き毛と頭部の片側にだけ捻じれた角を持つ迫力美人様が、完全に面白がつている様子でつんつんと俺のほっぺたやらわき腹をつついてくる。

え、こちらは筋力を兼ねそろえた、たいへん素晴らしく張りのあるお胸様でございます。黒いレザーに覆われた太もものラインも逞しく美しく、お尻様は最高の安産型。敷かれない。

ボンキュボンってよりはドンツキュバンツ！ って擬音が似合うメリハリの神が降臨されたような絶景です。

この世全てのおしりとおっぱいが生み出す光景は世界遺産に登録すべきだろ。

まあ絶景かどうかはともかく今の俺にもくつついてんだけどな山が二つ。

現実逃避してたらそこに考えが行きついてしまい心が死んだ。本日何回目の死亡かもう数えてない。

とうかさ！ みんなさ！ もつと他にリアクションないのかよ!?! 仲間の性別が変わってるのにさ！ なあ！

「まあ、そのさ。気を落とすなっつて方が無理だけど元気出せよ」

「サンキュ……へへ……」

初めて気遣いの言葉をかけてくれたのは宿屋の息子だった。前からいい奴だとは思っていたが本当にいい奴。親父さんと一緒にこうして祝勝会の会場と料理まで整えてくれたし。

だけど元気出せつて言われても難しいぜ。お前も男なら、俺の気持ちかわかるだろ!?!

目で訴えれば顔をそらされ、そそくさと立ち去られた。ナンデ。何故みんな目をそらす。

(なんで。なんでこんなことに……)

机に突っ伏す俺の周りで仲間たちがきやいきやいと楽しそうに、祝杯の盃を手に好き勝手言いながら騒いでいる。

俺はと言えば祝勝会にはしゃげる余裕などあるはずもなく、どうし

てこうなったのかと死んだ目でこれまでの記憶をたどっていた。



藍染芽 操。十六歳。学生。

それが数年前までの俺のプロフィール。実にシンプルなものだ。

二十一歳となった今。……そこには「異世界転移者」とかいう妙な称号がくっついている。

はい、転移しました。しましたよ。現代日本から異世界にな！ クソが！

五年前、俺は異世界に来た。

と言っても山奥の祠だとか打ち捨てられた廃墟だとか、そういった神隠しされそうなベタな場所へ行つたわけではない。

……なんか学校の帰り普通に歩いてたら、マンホールのふたが開いてて。気づかず穴を踏み抜いて落ちて、そのまま。

今考えても転移の経緯が雑すぎるだろ！ トラックに轢かれたいわけじゃないけどさ！ いやあれは転生か！ ジャンル違いだったわ!!

気を失い、次に目覚めた時はヤバそうな鳥獣類の声に囲まれた深い深い森の中。

この時点で「ははあくん。なるほどね。俺にもようやく異世界転移の機会が訪れたってわけだな。よっしゃ！ チート能力こい！」……なんて考える暇、あるわけねえんだわ。「あ、死んだ」とは思った。

だって三カ月くらい泣きながらモンスターに追いかけてまわされたんだぞ。

よく死ななかつたと思う。正直、その期間の記憶は曖昧だ。

で、その危険地区から抜け出したあとだよ。よくやく、俺はこれがワープやタイムスリップでなく異世界転移だと気づいたわけ。

街にたどり着いたらめっちゃファンタジーだったもん。モンスターに追いかけてまわされてる時に気づけよって話したが。

これがちよつと変わった服装とか建物とかだけなら、海外つて可能性も少しは考えたかもしれぬ。でも翼を生やしたお姉ちゃんやら、耳と尻尾をくつつけた獣人ちゃんやら普通に闊歩してるの見たからな。これはもう異世界転移で決まりだろうと。

さすがに三カ月ものサバイバルの後で、ドツキリの可能性は捨てた。

それで、だ。

好んで読んでいた異世界転生や異世界転移の小説や漫画のように、俺にもいわゆる「チート」の類と思われる能力はしつかり備わっていた。神様からの説明は無かつたけど、なんとかかんとか把握したわ。その能力っていうのが、雑に言うところ「レベルアップ」。内容は「あらゆる経験値を向き不向きに関わらず確定で十倍取得」というもの。

この世界にも強さを情報として視覚化できる方法と基準はあるが、俺の場合はゲームのような数値として見ることが出来る上に「一度レベルアップしたら弱くならない」のが最大の特徴だろう。筋力や経験も、どうしたって鍛錬をさぼって期間をおけば鈍る。それが俺には存在しない。

俺にしか把握できない「レベル」概念の中で何を基準に十倍なのかはよく分からないし、ここはもつと百倍とか千倍とか景気よくいけよって気がしないでもないが……まあチートだわな。

だって一度強くなつたら弱くならない上に、そのための経験値の取得方法がめっちゃ簡単なのだ。本当にあらゆる経験から経験値が入る。なんたってウォーキングしてるだけで経験値たまるんだぞ。万歩計かよ。

下手に超強力な攻撃が出来る！　みたいなものよりよっぽど汎用性あるぜ。

三か月モンスターから逃げ回っていたのも、今思えばこれが発動していたおかげだ。

でもって帰る方法を探すために冒険者登録なんかもして、能力様のおかげでめきめきと実力を伸ばしていった操くんなわけですよ。

腹筋が六つに割れた時は感動したね！　それまでの俺って普通を絵に描いたような中肉中背だったからよ！

俺は高校デビューする度胸も無かったから、髪も地毛の色そのまんなまでかつ眼鏡。我ながらかなりもさかった。もつと言えばそばかすもあるし猫背だし、もう地味を具現化した存在か？　って感じ。

それが五年で身長は百八十センチを超え、引き締まった筋骨隆々のいい男ってもんよ。ふふん。

鍛え抜かれた肉体ってのは最高の服であり化粧でありアクセサリーだと思っただね。高校デビューは出来なくても異世界デビューは上手くいったわけだ。能力様様である。

多分調子に乗っていきり散らかしてたよな俺。昔の知り合いに会ったらドン引きされるやつ。

……まあそれも今や全部失ったんですが。

俺の筋肉どこだよ！　一気に自信無くしたわ！　しおしおもするよ！

無駄にプロポーションよさげなのは筋肉の代わりってか!?　おい！

『さすがにそこまでは分からないな。仕様だと思って諦めなよ』  
(……………)

脳内での嘆きに何故か返事が返ってきたが、無視である。

俺は今過去を振り返る事で忙しいのだ。

冒険者となった俺は世界中を旅した。もちろん帰る方法を探すためだ。

だが世界一の賢者に訊ねても帰還方法が分からなかった時、俺はついに諦めた。もうここに根を下ろして生活していくしかない、と。……となれば、今まであえて無視していた存在が気にかかる。

魔王である。

この世界、魔族も普通にいち種族として他種族と交流しているため、明確に「悪い奴」でひとくくりに出来る魔族はいない。けど「厄災の魔王」って呼ばれてる奴は別。

それは数百年に一度現れて、世界に厄災をまき散らしていく。その内容ってのが厄介で、侵略とかを現した比喻じゃないんだこれが。……いや、侵略もあるんだけどさ。一定数その魔王を信望する魔族も居るため、俺がゲームなどで目にしてきたような「悪い魔王軍」もぼつちり居るんだわ。

けど真に面倒なのはそこじゃない。

第一の厄災は世界中から魔力が吸われ、その影響から自然災害などが発生する事。この時点ですでに厄介すぎるだろ。

第二の厄災は蓄えた魔力を糧に大魔術を展開し、特級の呪いとして世界に放たれることだ。大迷惑である。

呪いの魔術が完成する前に倒さないと、下手すりゃ文明が滅びる寸前まで弱体化するというのだから恐れ入る。ここ数千だか数百年だかは討伐に成功しているため事なきを得ているらしいんだけどな。

この世界、長命種も多いのでかなり前の記録もわりと具体的な歴史として残されている。旅の途中で過去の勇者や軍を率いて魔王を討伐した英雄の話はよく聞いた。

俺が転移したのはちようど魔王が現れる「数百年に一度」のタイミングだったらしく、世間の空気はひりついていた。

けどまあ、俺はと言えば魔王軍に出くわした時に護身のため交戦はすれど、いくらなんでも魔王退治まではちよつとなあくと思っていたんだ。その時は帰る気満々だったし、いくら強くなっても本質が勇敢ってわけでもないし。



勇者でなく凡人。

棚ぼたで凄い力を手に入れただけのいきりオタクなんだわ、俺。

でもこの先ずっとこの世界で過ごすなら話は違ってくる。見過ごせないだろ流石に。

……と言つても俺が魔王退治に踏み切った決定打は、仲間になった美少女に乗せられたからなんだけど。「あなたの力は伝説の英雄様と同じです！　どうか、わたくしと一緒に魔王を倒してください！」なんてお願いされたらその気になっちゃうよ。

そんなこんなで、あれよあれよという間に魔王退治までの道を辿つていき。

「厄災」がばら撒かれる前に魔王を倒したのが数時間前。

魔王が最後の力を使い、俺に向けて発動した大災厄の呪い。……それはある意味、ある意味、不発に終わった。

俺の男としての象徴を引き換えに。

こう……なんだ。美少女に期待されたら、俺にもようやく春が来た！　とかも、思うじゃん？　この世界つて一夫多妻制も場所や種族によつては多いようだし、ハーレムも夢じゃないって、思っちゃやうじゃん？

正直「俺がこれからモテモテになって可愛い彼女達といちやいちやするつてのに世界を呪うとかふざけんなよぶっ飛ばすぞ!!」つて気持ちで魔王倒したよね。

そりゃ呪いもこんな形で現れるわな……。

しかもその時、呪いに加えてとんでもねえお荷物抱えちゃった。

『ねえ、そろそろ僕に構ってくれても良くない？　過去を振り返るより今を見るのが大事だよ』

(じゃかましいわ元凶!!)

現在、俺は何故か倒したはずの魔王に憑りつかれている。

### 3話 ▶ 寄生魔王と俺く急募。こいつを殴る方法

—— 祝勝会、数時間前。魔王作成精神空間。

「精神の空間だつてんなら、心の形は男のままであれよ……！　ざっけんなよ……！」

魔王の前でこれ以上無防備な姿を晒したくないと思いつつ、体はいう事を聞いてくれない。

俺は呪いを受けたあと四つん這いで膝を付き、これでもかというくらい頂垂れた。その体勢だと直視したくない体の部位をもろに見てしまうためすぐ直立体勢に戻ったが。

魔王はそんな忙しく間抜けな俺の様子を見ても、これ以上何かをしてくる様子はない。それが逆に不気味だ。

しばらく沈黙が続く。

精神のみが存在できるとかいうその場所で、魔王を名乗る「何か」は言った。

『はあ……。ああもう、興ざめだ。どうせなら最後まで魔王ロールやらせろよな〜』

「あ!?!　何言つてんだテメエ」

黒い靄のような魔王の精神体だが、何故か表情が分かる気がした。どこかつまらなそうで投げやりで、呆れたような様子。

それにしてもいよいよ口調がおかしくねえか!?!　さっきまでの重圧や貫禄は何処へ行ったんだよ。

俺の疑問を見透かすように、魔王はすぐに言葉を続ける。

『僕の正体に興味はないかい?　”転移者”』

俺が異世界からの転移者であること。仲間には自分で話したが、この世界で俺の出自を言い当てたのは霊峰の大賢者だけだった。

それをあつさり看破してみせた魔王だが……今の口ぶり。

魔王だから見破れた、というわけでもなさそうだ。

『ピンときた顔してるね。君もその手の話を好んで読んでいたんだろう。ふふつ、僕たちは話が合いそうだ』

「……転生者」

『ご明察』

可能性を口にすれば、帰ってきたのは是。そういうことかよ。

異世界転生。異世界転移。……そうした類の話は昔からなかったわけじゃないが、ある時から爆発的に増えて故郷で流行っていたのだ。

そのバリエーションは豊富で、魔王に転生つてのもあった気がする。でもってこいつは、自分もそうであると名乗ったわけだ。マジかよ。

つまり中身は俺と同じ世界の人間。多分。

『呪いが成就したことで、僕と君の間には魂の繋がりが出来た。まさか僕を殺した英雄くんがご同郷とはね！ 驚いたよ』

自分を殺した、と言う割に口調は笑いを含んでいる。何だこいつ……。

『流行っていたよねえ、異世界転生もの。昔は異世界転移の方が多かったのに、いつの間にかたつくさん増えてた。みんな一から人生やり直したいつまんない人生送ってる奴らばかりってことかな？ あはっ』

「性格悪いなお前！」

『だって魔王だよ？ 僕』

悪びれなく返されて言葉に詰まる。

「……魔王ロールって、言ってたよな。じゃあお前は魔王として何の目的もなく、転生した体で遊んでたってわけか？」

『強いて言うなら遊んで派手に死ぬのが目的？ 前は早々に死んじゃったし、生まれ変わったらあの体だしさ。どうせなら好き放題やって、次に死ぬときは盛大に、道連れいっぱい引き連れて死んでやるっかなあって。僕にとって厄災の呪いはそのための手段だよ。世

界丸ごと僕と心中！ 素敵だろ？』

「うわお前生理的に受け付けない」

『え〜？ 酷いなあ』

気味悪いというより、気持ち悪い。自分に酔ってる感じが腹立つな。拳で殴らせろ拳で。

けどそんな気持ちであれだけの巨悪を演じられるなら大したもんだぜ。劇団員か何かだったのか？ ……それか、もともとヤベー犯罪者だったとか。

旅で出くわしたもろもろを思い出すに、常人の精神では出来ないよくなえげつない事を結構やっていた気いするが。

『まっ。それは君に阻止されて、僕は道連れも無しに消えゆく運命だったわけだけど。 ……でもねえ、気が変わった』

俺が胡乱な目で見ていることを気にも留めず、奴はクツクツと笑い声を響かせる。

『そこで！ 僕は決めたよ』

「な、なにを？」

妙に明るい調子に警戒心が増し、及び腰になる。これ、絶対俺に良くないことが起きる前触れじゃないか!? これ以上なにがあるっていうんだよ！

そして奴は高らかに宣言した。

『君が受けた呪いのナビゲーターに再就職しようと思う！ 転生の次は憑依モノってね！』

「はあ!？」

とんでもない事を言い出した魔王にぎよつとする。憑依って、俺にか!?

「冗談じゃねえ！ 女にされた上に体まで乗っ取られてたまるか!!」

『ああ、違う違う。ナビゲーターって言っただろ。その呪い、どうも面白い事になってるようだから。解説役が必要なあって。君を乗っ取れたならそれも楽しそうだけど、そもそも僕の魂の力は尽きかけている。同郷の魂を持つ君にひっついて間借りさせてもらうまでが精一杯だよ』

そんな事言われても一切安心できないんだが！

『……本当はそんな無様な状態で残る気はなかったんだけどね。終わったらそこでゲームオーバー。次なんて無くていいって思ってた。けど……ふふっ』

「何が面白いってんだこの野郎!!」

『あつはははは！ だって面白いもん！ 面白いだろ!? 何が面白いって、全部だよ！ 女の子になっちゃうだけでも面白いのに、君があまりいい反応するからさあ！ 魔王ロールとしては興ざめだけど、新しい楽しみを見つけたよ！ これは近くで見届けないともつたいないお化けが出るんじゃない？ おお怖い!』

「魔王が何言ってるんだぶっ飛ばすぞ!」

続けざまに面白い面白い言いやがって！ 四回は言ったぞこいつ!

『僕、ぶった切られたばかりなんだけど？ ふふ、ははは。でも、つとに、面白い。馬鹿みたいで！ あははははははははははははははは!』  
(こ、こいつ……)

『コンティニュー無しは惜しいよこの状況。……というわけで。これからよろしくね?』

誰がよろしくするか!!

そう叫んだはずなのに、現実世界で目が覚めた時。

……奴はきつちり、俺の中に居候を決め込んでいた。



「うくん。やはり駄目ですねえ。原初の魔術式がちがちに組まれています。結び目すらわたくしには見つけ出せません」

「そ、そんなあ」

「でもそのお姿。とくつても魅力的ですわよ、ミサオ様！」

「そんなお世辞や慰めいらない！」

「お世辞ではないのですが……」

祝勝会の前に呪い<sup>これ</sup>どうかしてくれよ、男に戻してくれよ！ と魔術に秀でた仲間泣きついてよくよく見てもらったのだが、出てきたのは無慈悲なお言葉。

そこをなんとか！ と食い下がったが眉を八の字にされてしまった。困らせたいわけじやないし意地悪されてるわけでもないのは分かっているのだが、俺としては死活問題なので簡単に納得できるはずもない。

『クク。そりゃあそうさ。こんな形になったとはいえ、世界規模で影響を及ぼすはずだった大魔術。そう簡単に解かれては困る』

「ぐぎゅっ」

「どうされました？ カエルが潰されたような声をだして」

「い、いや。何でもない……」

脳裏に響いた声に叫び出しそうになるのをこらえたら変な音が出た。それを不思議そうに見てくる白髪の魔術師に曖昧な笑みを浮かべ誤魔化すと、俺は表情が仲間に見えない角度でギツと目尻を吊り上げた。

（テンメエエエ!! 俺の中からさっさと出てけ！ 家賃とんぞ!!）

『家賃？ 君、僕からしこたま経値搾り取っていったじゃない。あれでいいでしょ。君、レベリング関係のチート持ちのようだし。……あ！ レベル見る時つてき、やっぱりステータスオープン！ とか言うの？ 今度見せてよ。というかさあ、むしろ僕にはお給料払ってくれていいんだよ？ 言ったでしょ、僕は君専属の呪いナビとして就職したって。社員にはお給料だよ、社長くん』

（一方的にな！ 俺は一切納得してないんだがな！ 誰が社長だ！

そもそも呪いナビってのがなんだよ!!)

『説明してもいいけど、君がさせてくれないだろ』

(余計なことはべらべら喋るんだからそのノリで言えばいいじゃん！)

っーか今聞いたんだから今言えばいいじゃん！)

『注文が多いなあ』

もう魔王ロールとやらをやめたからか、奴は好き勝手喋る。そのノリは妙に軽くて、これと数時間にわたる死闘を繰り広げていたとか情けなくなるんだが。

こう、激戦を繰り広げた敵には“格”を求めなくなるもんだろ？

それがこれだけ。嫌になる。腹も立つ。こいつ無限にムカつくな!!

『ああ、そうそう。もう魔王ではないから魔王呼びはやめてよね。長い付き合いになることだし』

(長い付き合いにするつもりねえんだよ！)

『まあまあ。君が嫌でも、すでにこういう形になったわけだし……ね？ ふふふ。せいぜいその呪い、リアルタイムで解説実況してやるよ』

(く、くそがあああああ!!)

死ぬはずだった魔王。否、魔王とか呼ばれていた「何か」。  
どうやら俺はそんな訳の分からんものに寄生されたらしい。

マジでふざっけんなよ!! 絶対いつか追い出して、男にも戻ってやるからな!!

『それってフラグ?』

(心読むな!!)

#### 4話 ▶ 謎の音く胸キュンを知った日

現在俺たちが祝勝会をしているのは行きつけの宿屋。酒場を兼ねた食堂が会場だ。

今日は店主の好意で俺達が気兼ねなく寛げるよう、食堂のみ貸し切りとなっている。急だつてのに助かるな。

(こんな姿のままじゃ迂闊に出歩けねえしな……うう……)

本来なら世界を救った功績を高らかにギルドなどへ報告し、世界中から賞賛され褒賞などもらいたいところ……。

が、この姿のまま行けば「勝ったけど女にされたまぬけ野郎」としても名を馳せることになってしまう。そんなのは勘弁だ。

魔王を倒したあとすぐに転移魔術で駆けこませてもらったため、今俺達が魔王を倒したことを知っているのは世界中でここの店主とその息子だけだ。

どういうわけか回復魔法を受けるまでもなく女になった体から怪我は消えていたし、体力もそこそこ回復している。

だが精神的にがつつり疲労していたため、こうして一息つける場所を借りられたのはマジでありがたい。みんなも疲れてるしな。

テーブルの上には店主が腕によりをかけたうまい料理や酒が山のように振舞われている。それら全てが本当にありがたいのだが……。腹がすいているのにも関わらず、どれに手を伸ばす気にもなれなかった。

「ミサオ」

机に突っ伏してどんよりした暗雲を背負っている俺に、青髪ポニテの女性……アシュレ・ノーヴァが声をかけてきた。

彼女は俺が冒険者になってから初めて出来た仲間で、パーティーメンバー内で最も長い付き合いになる。

アシュレは「騎士<sup>ナイト</sup>」という職業<sup>クラス</sup>を修得しており、そのイメージに違わず礼儀正しく真面目で、女性にこの表現が正しいか分からないが紳士的な人柄だ。

だが初期からの付き合いという事もあって俺にはなかなか厳しい。



いやあ……まあ。チートで強くなつて生きつてた頃からの付き合いだからな。よく怒られたし説教された。冒険者としての心得も教えてもらったりしてるから、基本頭の上から相手である。いや俺基本的にこのパーティーの誰にも頭上がらんけど。

そんな彼女の事だ。さつきは褒めてくれたけど、「めそめそ落ち込んでいてもどうにもならないだろう？ 情けないな、君は」とか言われるのになくと身構えたのだが……。

「ごめんね。一応これでも戸惑っているんだ。だが当事者であり落ち込んでいる君を放っておくべきではなかった」

最初に心底申し訳なきような謝罪をうけて、予想外だったのと「なんのことだろう」という疑問でポカンとする。

……もしかして、さつき悲痛に訴える俺から目をそらしたとかか？ そのまま祝勝会してたことも？ 他のみんなは時々俺を構いながらまだ食事を楽しんでるけども。

思わず口を開けたままぼうつとアシユレを見つめっていると、彼女はそつと俺の頬に手を添えてきた。

おふあっ!?

「だけどね。気持ちは察するが、そのままでは体に良くない。ひとまず着替えて食事をしてはどうだい？ 体の変化に伴い傷も消えているようだが、君は多くの血を流した。軽いものでもいい。まずは何か腹に収めねば血が足りないだろう。そんな時は余計に気分も沈むというものだよ」

「え……」

慈愛の眼まなこに落ち着いた声色。そつと丁寧かつ繊細に俺の頬を撫でた手は温かく、心底こちらを気遣ってくれている様子に胸がキュンとした。なるほどこれが胸キュンってやつかと理解わからせられた。

(ど、どうしたのアシユレさん？ 優しいんだけど。やだイケメン……)

正直この五年間、冒険者としてけつこう名を馳せた割に俺がモテなかったのはアシユレが隣にいたからじゃない？ って思ってた。

原因の一つくらいに考えてたけど、これメイン理由じゃない!?

だってだいたい女の子がアシユレに流れるんだよ！ でも中性的で高身長で優しくてかつこよくて紳士で顔のいい女、俺よりモテるのはよく考えなくても納得しかないわ！

前は身長近かったけど、見上げる視線でこれはヤバい。あ、これが大抵の女の子の視線ってこと!?! やばいって。これはやばいって。

キュンっ！ の次はドツドツドとエンジンのように鳴る心臓を自覚する。

うわー！ うわーっ！ アシユレってこんなにかっこよかつたっけ!?!

これは新たな扉を開いてしまいそ……。

なんて考えていた時だ。

【メスメリンツ♪】

(!?)

脳内へ鳴り響いた間抜けな音に動揺が走る。

「? どうかした?」

「い、いや！ なんでもない！ けど、そうだな！ まずは、その、着替えてだな！ 飯を食う！ うん！ 俺部屋で着替えてくるわ！」

突然聞こえた形容しがたい奇妙な音にぎよつとしたが、結構な大音量だった気がするけど、他の皆には聞こえていないっぽいし……頭の  
中、となれば奴だろう。

(あんつの野郎……！ 何が力ないだ変なこととしてきやがって！)

と、ともかくだ。自分の中にせっかく倒したはずの魔王が居ると知られるなんて、冗談じゃない。

仲間の事は信じたいけど、万が一。……万が一にもだ。魔王に寄生された事実が広がれば、下手すりゃ今度は俺が討伐対象ってこともあり得る。

相談したくもあるが、まずは俺がこの事実を受け止めきれぬまで黙っておいた方が良いでしょう。

受け止める前にあの寄生虫が消えてくれりゃあ一番いいんだがな！

そう文句を心の中に並び立てると、俺は我ながら慌てふためいた様子で食堂から借りている部屋に退散するのだった。

部屋に戻った俺はボタンと部屋の扉を閉め、そのまま扉にもたれかかりズルズルとへたりこむ。

はああ……！ 焦った……！

つたくよお！ なんだよさっきの馬鹿みたいな音！ びつくりすんだろぅがッ！！

『有翼族の魔術師に、人族の騎士。獣人族の闘士、加えて半魔族の銃士……ね。なかなかの精鋭だったが、よくもまあ。この人数で僕に挑もうと思ったものだ。あ、半魔の彼女はもともとうちの子だったかな？』

俺の中から周囲の仲間を観察していたらしき魔王は感心したように述べるが、その言いざまは上から目線だ。

（負けたくせに！ 負けたくせにいいッ！！ ばーかぎーこまぬけー！！）

『勝った方が負けた雑魚の捨て台詞みたいなこと言うのはいただけないなあ。君、自分で自分の格を下けているよ』

「うっせえっー！」

腹立つ物言いについて声が出てしまう。

しかし奴はそんな俺の反応など意に介さず、余裕たつぷりといった

様子で鷹揚に構えている様子だ。声だけだけど。

『確かに優秀なお仲間達だが……君がいなければ僕は負けなかったよ、大英雄くん？ 誇りたまえ』

クスリと笑ったような雰囲気と共にそんなことを言われるが、果たして俺は勝ったと言えるのだろうか。

男としての象徴を剥奪された上に現行で魔王に寄生されてるだけだ。

『寄生とは失礼だなあ！ 僕はアニサキスかなんかか？』

(それ遠回しに俺の事イカ臭いつて言ってる？)

『あつははは。ずいぶん深掘りしたねえ。疑心暗鬼かい？ やっぱり君って面白いなあ』

(不名誉！)

この妙に軽い自称魔王……いや、自称呪いナビゲーターだったか？ よくわかんねえけど。こいつの正体が正体だけに余計に腹立つ。これ見よがしにこの世界じゃ通じない寄生虫の名前だしよってからに。

アニサキスくらい知ってらあ！ イカとか魚とかに居るやつだろ！ 昔兄貴の釣りにくつついて行くととき、散々食って腹壊すなよって脅されたんだよ!!

ともかくこいつはめっちゃや性格悪い。

魔王に転生するのも分かるってものだ。

俺はちらつと部屋の姿見に映った自分の姿から必死に目をそらしつつ、魔王に問いかけた。

『おい魔王。なんだよさっきの間抜けな音は。お前だろ？』

『だくかくらあ。もう魔王はやめてくれて。さっそくナビゲーターとしての役割もこなせそうだし、ここは可愛くナビくんとかさ』

『ナビゲーターとしての役割？ その……呪いのか？』

『君、ノリ悪いね』

お望みの呼び方をしなかったからか、どこかぶすくれた感情を滲ませる魔王。

……こいつの声も変なもんだな。含む感情は分かるってのに、声の

音自体は機械音声みたいでどうも慣れない。

ただ、気のせいだろうか。最初に比べてノイズらしきものは減ったように思える。だからなんだよって話だけど。

『うくん。説明してもいいけど、その前に着替えたらどうだい？あまりに煽情的な恰好で、宿屋の彼が目のやり場に困っていたよ』

「煽情的って、あのなあ」

このボロボロな男物がどうしたらそう見え……。

「ああ、うん」

改めて自分の格好を見てわかった。ああ、うん。

『彼シャツに萌え袖に破損肌チラ見え服だね』

「言い方」

混ぜるな混ぜるな！ 言いたいことは分かるが。

……というか俺、微妙にこいつが脳内で喋る現状に慣れてきてないか？ やだやだ。そんなもんに慣れたくねえ。

それにしても、あれだな。確かに服まで気にする余裕無かったけど、これはよろしくない。

まだはつきり自分の全体像は見えないが、筋骨隆々と言って差し支えない俺のスペシャルなボディは背丈も横幅も小さくなつてしまっていた。そうなれば当然、服のサイズが合うはずもない。

腰は細くズボンはゆるゆる。これまで使ってたベルトじゃ絞められないからヒモみたいに縛って使っている有様だし、上の服はうっかりすればずり落ちて肩がむき出しになる。袖口も長すぎて手が出ないから、萌え袖ってより幽霊袖だ。まくつてもすぐ落ちてくる。

更には怪我こそ治っているものの、魔王との戦闘で服はズタボロ。結構際どい肌色が見え隠れしている。

これが自分じゃなかったらうつひようつてなもんだが、自分なんだよなあ……。はあ……。

宿屋の彼こと店主の息子は俺と同じ年。俺の正体を知っているようだが、そりゃ視線の置き場に困るだろうよ。

(……………。このまま見ないわけにもいかねえか)

先ほどからちらちら視界の端で姿見に映る女。当然、俺。

まだすっかり自分の姿を見ていないんだよな。体つきと髪の色はわかるが、顔は鏡が無いと無理。

ちなみに髪色だが黒々としたやぼったいもさもさ髪は、色素が抜けたような淡いオレンジ色に変化していた。長さも腰くらいまで伸びていて落ち着かない。

(どれどれ。こういうのはお約束として美少女になってるもんだが……)

事実こそ認めたくないが、ちよつとばかりわくわくしながら鏡を覗き込む。そこには……。

「じ、地味……」

思ってたよりずっと地味。

圧倒的、地味……！

髪と同じで目の色もオレンジに変わっていたが、三白眼がそのままでくりくりした可愛い眼なんてどこにも無いし、癖毛が伸びた影響で余計に暴れまわっていて野暮も野暮、さいっこうにやぼりたい！

俺の期待外れに連動するように、なかなか外れないよう特注の魔術がかけてあるはずのメガネがずり落ちた。

妹が居たらこんな感じになつてくらい元の俺の顔をそのまま女に置き換えた容姿で、なんかめちやくちや萎える。テンション駄々下がりである。

「こ、これが現実……。せめてもつとこう、可愛くあれよ」

『そう？ 磨けば光るタイプじゃないの』

(中途半端になぐさめるの何、お前)

憐れみをかけられたようで、ただただ不快である。

もとの鍛えた体が置き換わったからか、体のメリハリはまあまあだよ？ でもそこじゃねーんだよなあああッ！

その割に背は縮んでパーティー内で一番小さいモモと同じくら

いの背丈になってるし。

なんかことごとく想像していたものと違う。

「ま、まあ……。これなら逆に性別変わった自分を下手に受け入れることも無くて安心……。なのか？　これがめちやくちや美少女だったらまんざらでもない気分になるところだったぜ。ふう、危ない危ない」

そう言って自分を納得させようとした時だ。

「安心してください！　あなたは磨いて光る原石です!!」

『えっ。』

魔王と似たような台詞と共に、背後の扉が勢いよく開かれた。

## 5話 ▶ 幸せ谷く仲間の様子がちよつとおかしい

俺の独り言を聞いていたとしか思えない内容の言葉と共に勢いよく開いた扉。

そしてその角に後頭部を強打される俺！

「ぐえっ!？」

「きやつ!？」

思ったより扉との距離が近かったがために、俺はべしやつと無様に床に突つ伏す破目になった。

か、角は。角はどんなにレベルアップしても痛いんだって！ぬ

おお……！

『え、だっさ』

(馬鹿野郎！ 角をなめるな！ 脚の小指ぶつけた時とかも痛いんだから!!)

人の痛みが分からない魔王野郎に文句をぶつけつつ痛みに悶えて蹲っていると、ふわりといい香に包み込まれた。

……同時に何やら後頭部に柔らかい感触。

????

え、なに。頭サイズのマシユマロ？

俺はかつてない柔らかさに一瞬思考が停止した。

「……え？ ん？」

「み、ミサオ様。そんなところにいらしたのですね。ごめんなさい、気づきませんでした。……でも大丈夫。すぐにこのシャティが治してさしあげますからねっ」

申し訳なさそうな様子のあと、一瞬でとろける様な甘さを含み変化した……聞き慣れた声。

それと共に頭部へ回復の魔力がそそがれる。とても温かい。

向きの見えないが、それをしているのが誰かは分かっている。

分かってはいるんだが……身に起きた現実があまりにもファンタ



ジーすぎて脳が処理しきれない俺である。

だ、だって！　だってこれは……！

夢にまで見た……！

(魔王魔王。ちよつと聞きたい)

恥を忍んでこの場においての唯一の第三者、魔王に問いを投げかける。

『……………。なんだい？』

しばしの沈黙のあと、どこか微妙な空気をはらみつつ魔王が答えた。

(俺もしかして今、幸せの谷に居る?)

『……………。デカパイに包まれてるよ』

(魔王でもデカパイとか言うんだ。へへ)

『君の語彙力に合わせて分かり易く言っただけだけど？　どうも脳みそがお花畑に旅立っているようだし』

(誰が脳内お花畑だ!!　いやでもお花畑をエデンと言い換えるならばやはりここはお花畑!?)

『うわ……』

(急にドン引きするなよ)

……………じゃなくて!!

あまりのことに魔王なんかと妙なやりとりしちまったけど、今はそうじゃなくて!!

ようやく脳内とのタイムラグに現実の思考が追いついた俺は、体を硬直させたまま叫んだ。

「う、うおおあああああ!?　しゃ、シャテイ!?　シャテイさん!?　なん、なん、なにを」

「?　治療ですよ。大人しくしてくださいね、ミサオ様」

床に倒れた俺を抱え起こし、背後から抱きしめながら頭部を癒していたのは白髪三つ編みに神秘的な緑瞳の美少女。その背中には一對の翼が生えており、今は慎ましやかにたたまれている。

パーティの参謀兼超有能魔術師であるシャティだ。俺を魔王退治へ奮い立たせた張本人でもある。

けど、なん。なんだ!?

おかしい。この距離感はおかしいぞ！

柔らかく抱きしめられている俺の頭部は現在、シャティの豊満なおっぱい様のだ真ん中に居る。

巨大マシユマロの正体はおっぱい様なのである。神々しすぎて様をつけて敬うしかない、おっぱい様！ なので！ ある!!

性格は陽気で親しみ易いところもあれど、基本的には清楚で潔癖。そのシャティがこんなスペシャルお色気サービスをしてくれるなんてどういうことだよ!? これって夢!?

むしろ臨死体験している可能性まで出て来た。ここはもう彼岸の先なのかもしれない。俺、魔王倒したしやっぱいいことしたんだなあ……。天国に行けるんだなあ……。それとも極楽……。あ、なんかばあちゃんが手を振ってくれてる気が……。

『そこで出演させられるご祖父母かわいそうじゃない？ 現実だし生きてるよ、君は』

(マジ?)

魔王の一言でふわふわしていた思考が引き戻される。しかし頭部には未だ楽園確認！ 確認よおーっし!! ヨーソロー!!

『………………。僕、これに負けたのか。改めて考えると情けなくなってきた。すけべ』

(男の子だもんっ!)

『もん、とか言うなよ』

(うるせえやいッ！ これが冷静でいられる状況かよ!)

魔王にはさんざん言われるが、考えてもみてほしい。

二十一年間、女子との身体的接触がほぼなかった俺にこれはあまりに劇薬過ぎる。

俺以外のパーティメンバーが全員女子なのに、それでも一度のラツキースケベもなかったんだぞ!!

そ、それが急に……！ おかしくなるわ！ ふわっふわになるわッ  
！  
シャツィは二次元でも無ければお見かけしないレベルの至宝おっ  
ぱい様の持ち主であるため、俺はよくその体に鼻の下を伸ばしてい  
た。

服も背中がドーン！ とバツクリあいていているものだから、隙間  
から横乳見えないかな〜って期待してチラチラ見てしまってもいた。  
それもあつて「ミサオ様、えっちなのはいけません」「わた  
くしの服は翼の動きを阻害しないための一族伝統の服です！ いや  
らしい目で見ないでくださいまし！」と……俺とは常に一定の距離を  
保っていたのに！

なのに今、めちやくちやえつちな状態じゃない!? シャティさん、  
ねえ！

あ！ そういえばさつき酒も飲んでたな!? なに、ちよつと酔っ  
ちやつたうふふんなイベントってこと!? マジで!? ファイクシヨン  
じゃなかったんだこういうの！

「ふふっ、良い子ですね。そうです……そのままじつとしてくだ  
さいな」

「は、はい」

またとない機会にぼやぼやとした思考のまま、美しい有翼人へと身  
を委ねた俺だが……。

……………。

おかしいな。素晴らしいシチュエーションなのに、今までこの世界  
で経験値を積み重ねた防衛本能が危険信号を発している。

Hey、何を怯えてるんだ防衛本能？ 初の体験にビビったか？  
やれやれ、喜びこそすれど何を怯えると……。

すぐさまその場から飛びのこうとする体の本能を押さえつけて、  
じつと大人しくしたまま未知の感触を堪能する。

意識がゆらゆら溶けていくようだ。相棒を失ってしまったので反

応ずるものこそないが、体の熱がじわりと上がっていく。顔も熱い。  
……………ん？

「ふふっ。ふふふふふ。ミサオ様。とおつても、いい香りです  
う」

「うひよあッ!？」

突然頭を前に倒してきたシャティが、身体全体で俺を包むような体勢になる。

そのままくんと首元を嗅がれて流石に声が出た。

「俺まだ風呂入ってないぞ！ あ、汗臭くない!? 大丈夫!？」

いや待て。今言うべきはもつと他にあるだろ俺！ その何かがなんなのかは分からないけど!!

俺得なようできて、体臭を美少女に嗅がれているシチュエーションはかなりの羞恥心が呼び起こす。だけどシャティはお構いなしだ。

これってやっぱり酔ってるよな!？」

「と、とにかく！ 嗅ぐのはやめてくれええッ!」

「むう。しかたありませんねー。いい匂いなのに……」

シャティはどこか不満げにしつつも（その反応自体は可愛い）俺の希望通り嗅ぐのはやめてくれたが、それでも治療をしながら俺の頭部を撫でまくってくる。その様子は酔っ払いは酔っ払いでも、マタタビの香りでもついたボールにじやれて構い倒す猫のようにも感じられた。

いやほんと、何!？」

「と、ところで！ シャティは何をしにこの部屋へ!？」

混乱する中、とりあえず部屋に来た目的を聞く。

シャティは「そうでした!」と、たつた今思い出しましたとばかりに俺の目の前に一つの袋を出してみせた。

「わたくしですね、ミサオ様にお着替えが無いと思いきりまして！  
こちらを持ってまいりましたの!」

「あ、うん。それは助かる」

まさに今このボロボロの服をどうするか考えていたのだが、元の自分の服ではサイズが合わない。

シャティはそれを考慮して、おそらくサイズの合う服を持ってきてくれたのだろう。

ただならぬ様子には戸惑うけど、服は単純に助かるぜ。でも買いに行ってる暇は無かつただろうし、そうなると思った誰の服を……。そんなことを考えつつシャティのもつ袋に手を伸ばす俺だったのだが、それはさつと取り上げられる。

「シャティ?」

「うふふふつ。ミサオ様、お着替えもこのシャティめにお任せください! ええ、もうバッチリシヨツキリお任せくださいませ!」

「バッチリはともかくシヨツキリって何!」

お任せくださいを二回も言う張り切り具合。その勢いにちよつとばかり押される。あ、圧……!

「まあまあ、細かい事はいいじゃありませんか。……慣れない体でしよう? わたくしがちゃんとお手伝いしますからねっ! それにご安心ください。女の子はみんな磨けば光る至宝であり宝玉なのです。地味? そんなことありません。今のミサオ様はとつてもお可愛らしいです。魅力的です。ちゃんと整えて、わたくしが立派な淑女にしてさしあげますっ!」

「いや、レディにされたくはねえよ!」

「まあまあ、そう言わずにいゝ遠慮なさらずうゝ。うふふふふ」

妙に間延びした声が耳に絡みつくようで、ぞわぞわと何か背筋を這い上がる。心なしか体に伸びてくるシャティの手の動きが怪しいような。なんかこう、ワキワキと指が動いてる。

体の奥が騒ぐような感覚を覚えながら、しかしまたとない機会でもある。

美少女による着替えお手伝いチャンス……! 言動がちよつとおかしいけど、逃すわけないだろ!

……と。我ながらだらしない顔で身を任せていたのだが。

俺はこの自分の思考をすぐに後悔する破目となる。

『あ、二回目。おめでとっ!』

(えっ)

そんな魔王の声と共に響く音。それは……。

【メスえろリンツ♪】

(だからなんなんだよこの音オツツ！)

二回目に鳴り響いた間抜けな音は、さつきとは微妙に違っていた。

妙に気が抜ける音に、桃源郷へ旅立ちかけていた意識が戻ってくる。

二度寝してる時の最高に気持ちいい微睡みに冷水をぶっかけられた気分だ。

さつきといい、本当になんだ今の音。気のせいじゃなければ「メスえろリン」とか聞こえなかったか？

もう嫌な予感しかないんだが。

「ああ、ミサオ様。本当にお可愛らしくなって……！ シャティは感動しておりますわ〜！」

そんな俺に構わず背後から俺の頭やら顔やら腹やらを撫でてくるシャティだったが、少し冷静になると本当にこの様子はおかしい。俺としては大歓迎だけど、酔ってるにしてもそれだけじゃない気がする。

とはいえ振り払うにはこの極上ポジションを失うのは惜しすぎだな……！ 俺の意志は弱い……！

ど、どうしよう。

そう困り果てている時だ。

「失礼するよ」

「きゃんっ!?!」

再びバンつと扉が開く。

今度その角に頭をぶつけたのはシャティで、俺は前のめりに倒れる彼女の下に押しつぶされた。

……………当然!!

俺の頭部は!!

幸せの谷に挟まれたままである!!

ほわああああああああつ!!

さつき以上に柔らかさが押し寄せてくるううううツ!!

「シャティ、やはりここに居たのか」

「アシユレ! いったい何をするんですの〜!」

「あ、頭を打ってしまったことはすまない。けどシャティ、君こそ何を?」

「え? 治療ですけど。あとミサオ様のお着替えを手伝おうと思いまして〜」

「…………胸に挟む必要は、無いと思うのだけど」

入ってきたのはどうやらアシユレのようで何か言っているが、やわらかマシユマロ幸せの谷にぽよぽよ耳を塞がれていてよく聞こえない。

こんな贅沢な耳栓ある? え、俺って今日死ぬの? 人生の運、全

部このラツキースケベに使い果たしてたりしない???

「…………ともかく、治療がすんだら着替えだけ置いて出て行こうね」

「え〜?」

「え〜じゃないよ。君が怪しい動きをしているから、気になって来てみればこれだもの。…………酒を飲んだにしても、ミサオがこんな姿になったにしても。どちらにせよ、少し抑制が外れているんじゃないか? ほらほら、抱え込まない」

胸に挟まれ押しつぶされたままの俺を、シャティがぎゅっと抱きしめてくる。それを見たアシユレが深くため息をつく、やんわりとシャティの腕をはずさせ俺を幸せの谷から引きずり出した。

ああああ。俺の幸せの谷〜!

「むう。見てくださいよ、ミサオ様のこの残念そうな顔。ミサオ様はさっきのままがよかったですよね〜?」

「あ……えと。へへ……」

「コラ。……まったく、こーういふところを見ると君はミサオだなど思  
い知るよ。その伸ばしている鼻の下、どうにか収納できない?」

ね? ね? と俺に聞いてくるシャティを嗜めると、アシユレは鼻  
の下五メートルくらい伸びてるんじゃないかって俺に呆れのこもつ  
た冷ややかな視線を向けてくる。あ、いつものアシユレだ。

アシユレがさつき見せた優しさは嬉しかったけど、いつもの調子  
を見ると落ち着く。シャティの様子がおかしかった分、なおさら。

……まあ、嫌ではなかったけどな! うん! たいへんご馳走様で  
した後生大事に大切な記憶として胸の奥に抱き続けます!

『君って……』

魔王がなにやら呆れた様子を見せるが、俺は誰が何と言おうとこの  
輝かしい初ラツキースケベメモリーを心の糧として生きていくぜ!

(あ、そーういやいい加減さつきの妙な音のことを……)

魔王が声を発したのをきっかけに、ラツキースケベインパクトで吹  
き飛んでいた疑問を問いただそうとした俺だったが……今はまだ仲  
間達が居るから脳内会話は避けるべきだなと疑問を引っ込める。

アシユレは冷ややかな視線のままため息をつく、少々の笑みを浮  
かべた。

「とりあえず、ミサオ。君に言うておくことは一つ。シャティは女性  
との距離感が近いから、色々と気を付けてね」

「気を付けることなんて何もありませんか?」

「シャティ?」

少々眉尻を下げて人差し指をシャティの口元に添えるアシユレ。  
めちやくちやんわりとした「ちよつと黙ろうか」である。

シャティは残念そうに俺を見つつも、「しょうがないですねえ」と引  
き下がる様子を見せた。

「ミサオ様、こちらに着替えが入っております。わたくし達の服だと



大きいですから、モモの服を借りてきました」

「あ、ありがとう」

「じゃあ、ミサオ。食堂で待っているからね」

「う、うん」

二人のやり取りに対する疑問と、先ほどまでの幸せの余韻にぼうつとしている俺。しばらくそのまま放心していたが、改めて受け取った袋を見下ろした。

確かにモモを除いてみんな今の俺に比べて身長あるからなあ。特にシャティの服は有翼人仕様で特殊だから、まあ妥当というか……。

「ん？ いやいやいや。ちよつと待てよ！ モモの服って……」

考えている途中ではたと思い当たり、冷や汗を浮かべて中身を確認しようとした時だ。

「貴様がここに居ることは分かっているぞ、アイゾメミサオ！ 魔王様の仇！ 我が宿敵よ！ 貴様はこの俺様が倒す！」

「なん!？」

『おや?』

聞き覚えのある嫌みな声と盛大な爆発音と共に、部屋の壁が屋根ごと吹き飛んだのだった。

## 6話 ▶ 襲撃く服って弾け飛ぶものなんだ……

「マジかよ……。どうすんだよ、こんなに壊しちゃって」

俺は青空天井になった宿の一室を呆然と見回してから、元凶を睨む。

半壊した部屋の向こう側。二階に位置するこの部屋の外ということは空中なのだが……。そこには現在招かざる客が、黒いマントを羽のように広げて浮遊していた。

青々とした快晴を背負って浮いているのは、その背景が似合わない、なまっちろくて不健康そうな肌色をした魔族。獣のようないかつい脚部と、複雑に捻じれた二本角が特徴的である。

深紅の前髪から覗く眼光が鋭く俺を捉えるが……。

そいつは俺を見た途端、きつく細めていた金眼をキョトンと丸くした。すると冷たくクールな印象が途端に間抜けになる。

「ん？ アイゾメミサオでは……。ない？ おかしいな。奴の魔力を追ってきたはずだが……。むむう？」

爆破の影響で埃と煙が立ち込めている中だが、流石に前の俺と体格差がありすぎてシルエツトで違和感に気付いたらしい。

今の俺の身長、パーティー内で一番背が低いモモと同じくらいだから……。せいぜい百五十cmそこそこだ。

三十cmも低くなった視界には未だ慣れない。

それにしても……。

(め、面倒くさい奴が来やがった……！)

あの魔族とはそこそ長いつきあいなのだが、ぶちのめしてもぶちのめしても復活しては挑んでくるので苦手としている相手である。しつこさが凄い。

『おや、あの子か。そういえば君たち、僕に対峙した時無傷だったけど……。まさか魔王軍スルーしてきたの？』

(決まってるんだろ。こっちは五人だぞ？ 魔王を倒そうって時に馬鹿みたいに戦って消耗できねえし、少人数の利点を活かさない手はねえだろうが)

『それもそうだねえ。ってことは魔王軍は無傷か。ふうん』

魔王の元を目指す時、当然奴を守護する魔王軍がいたのだが。こちらには以前魔王軍に所属していた仲間が居たので、道案内をしてもらい潜伏したままラスボスの元へたどり着くことが出来た。

その後は邪魔が入らないよう結界を張り、孤立無援になった魔王を倒したってわけだ。

倒せてないけどな！ そいつ今俺の中に居るけどな!!

卑怯というなかれ。俺は単発で強い奴を相手にするのは得意だが、持久戦、消耗戦には向いてない。出来なくはないが、仲間の負担を考えれば避けるのは当然だ。

誰も欠くわけにいかないからな。それが魔王と戦うにあたっての最低条件だった。そうなりや当然、短期速攻電撃作戦一択ってわけだ。

魔王相手に五人とかいう人数で挑もうってんなら、これくらいする。

辿りつけさえすれば俺が勝てるって確信もあつたし、下手にどっかの王国の軍に頼んだり他の冒険者パーティを頼つても連携取れると思わなかったからな。

んでもって、たつた今俺を襲撃してくれやがったこいつは一応……魔王軍の幹部だ。

名前はえっと……なんだっけ。いつも聞く前にぶっ飛ばしてたからよく覚えてねえな……。

魔王城からとんずらする時にシャティが攪乱の魔術を撒いてきたはずだが、どうやらこいつはそれを突破したらしい。

俺は油断なく魔族を見つめるが……。

ふと、とんでもないことに気が付いてしまった。

「おい貴様。アイゾメミサオは何処にいる?」

当然ながら俺が本人だとは一ミリも気づいてないらしい魔族が尋ねてくるが、俺は今ちよつとそれどころじゃない。たつた今なくなつた。

(おいおい。おいおいおいおいおい。ちよつと待てや)

怪我はない。

体力も回復してる。

こいつごときに負ける気はしない。

だけど今、別の事でピンチだ。

大変情けなくも、死活問題である。主に俺の尊厳的なものの。

『あちやく。ぶふーっ』

(なんで俺はお前を殴れないんだろう)

ば、馬鹿にしやがって……!!

何がピンチって、たった今こいつがぶちかましてくれた魔術でボロボロだった服が全部千切れて吹き飛んだんだよ!

おいここの魔王の時みたいに精神世界でも何でもなく現実世界だぞぶぎけんな!

自分自身のラッキースケイベントはいらねえよツ!! ラッキーでもなんでもねえツ!!

奴の攻撃に対し、とつきの判断で防御魔術を発動出来たところまではいい。

だがすでに魔王との戦いでボロボロ同然だった服は爆風と魔力障壁の摩擦に耐えられなかったらしく、ギャグ漫画かよってくらい派手に弾け飛んだ。

かろうじて煙で隠れちやいるが、風がひゅうとでも吹けば俺はこの馬鹿野郎の前に全裸を晒すことになる。

まだ自分でもちやんと見てないのに、何で真っ先にこんな野郎に裸を見られないといけないんだよ!?

(よし、このままぶちかまして空の星になってもらおう)

俺の判断は早かった。でかい魔術一発ぶちかまして追っ払おう。幸い相手は空だし、他に被害は出ない。

そう思い拳に魔力を溜め始めたのだが……。

「おい貴様、なんとか答えたらどうなんだ。それともアイゾメミサオはやはりこの部屋にいるのか? ……チツ、煙が邪魔だな。……はっ!」

「ぎゃああああああ!! テメエ馬鹿やめろ!!」

この野郎、風の魔術で煙を吹き飛ばしやがったああああッ!

馬鹿————!!

俺は咄嗟に股間と、次に今はこれがあるんだったと気づいて胸を隠した。すると両腕が塞がってしまうため、溜めていた魔力が霧散する。そんなアホな。

(し、しまった!)

「よし、これで見えるように……。……。!」

「うおおああああああ!! こっち見んなッ!!」

ざあっと煙が晴れた中、隠すものが無くなった中ででの対峙。

大事などころを隠しちやいるが、俺は馬鹿魔族の真ん前で裸を晒す事になってしまった。

極力見られる面積を減らすべくしゃがみ込むが、戦う者としては完全に無防備となる悪手である。

けどしようがないじゃん!? 全裸ファイト出来るほど俺のメンタル強くはねえよ!! 魔王戦ラストの時みたいにハイになってれば話は別かもしれないけど! 今もう完全にしらふだよ!

これどうすんだ、と頭が真っ白になった時だ。

ガアンッ

「がっ!」

一発の銃声が鳴り響き、苦悶の声があがった。

ダメージを受け声を発したのは俺ではなく相手魔族のもので、見れば頬から青い血を流している。

俺は体を抱え込んだまま……銃声の発生元、背後を振り返った。

「アルマディオ。あんた、何の用だい？ ……つて聞くのは愚問だけどね。けど、その子に何してるのさ。女の子を引ん？くなんて、品の無い子だね」

「ち、ちがつ」

「この絵面で言い逃れする気かい？」

「誤解だ！ ぼつ、俺様はそんな破廉恥じゃない！」

「どうだか」

灼熱を思わせる鮮やかな赤い巻き毛を翻し、一本走る顔の傷に挟まれた金の瞳が魔族を射抜く。

頭部の片側に位置する一本角がうねる様に伸びて腕に絡み、複雑に変化し銃の姿になっていた。

その武器を構えているハイパーいい女の名は、ガーネツタ。元魔王軍所属の半魔族だ。

俺のパーティーにおける超優秀な狙撃手である。

ちなみに今撃たれてあわあわしている馬鹿野郎の姉だったりする。

確かガーネツタ本人に聞いた話によると腹違いだっか。髪と目の色は似ているが、青白い馬鹿魔族の肌に対してガーネツタは健康的な褐色肌だ。

そう思い出していると、「ああ、思い出した」と脳内魔王の声。

『そうだった。アルマディオだ、アルマディオ』

（俺はともかくお前は部下の名前覚えてろよ。幹部だぞ。しかもお前の仇をとるためにその日そのまま速攻で駆けつけてくれた奴。忠義者じゃねえか）

『だって微妙に長くて覚えにくいし』

（いや……まあわかるけど……。五文字以上の名前、長いよな）

『でしよ〜っ。』

しまった、つい共感してしまった。

どうやら俺と同じく名前を憶えていなかったらしい魔王。そのことについてだけ馬鹿魔族をちよつぴり不憫に思いつつも、俺はガーネツタに感謝しながらさつと物陰に隠れた。幸い先ほど受け取った

着替えは無事だ！ 今のうちに着替えよう……！

サンキュー、ガーネットタ姐さん！

「……ふ、ふんっ。貴女か。魔王様亡き今、この俺様こそが魔王軍の頂点。それに角を向ける意味を分かっているのか？ 姉さん！」

「あんたが？ 馬鹿言うんじゃないよ。厄災の魔王は死んだ。ならあの魔王軍も誰が引き継ぐまでもなく、そこまです。あんたはさっさと実家帰んな」

(実家あるんだ……。兄妹の会話って感じだな)

呆れたように述べると、ガーネットはアルマディオへ向けて雑に銃を乱射した。

その勢いはすさまじく、さながら地上から空へ流れる逆流星群。奴はそれをタツプダンスするように避けている。

角が変形しているガーネットの武器は、そこから自在に魔術の弾丸を放つことが出来るのだ。つまり魔力さえあれば弾切れの概念は無い、一人マシンガンである。しかもその状態で長距離狙撃可というぶっ壊れ性能。

「う、うるさい！ 魔王軍を裏切った姉さんは黙っていてくれないか！ 俺様は魔王様の仇を討ちに来たのだ！ ぼ……ごほん。俺様は主君の無念を晴らし、我が好敵手ライバルと決着をつける。だからそんな女になど興味はないしひん剥いてもいない！ 事故だ！ さ、さあ！ あいつは何処だ？ 死んではいないだろう。この俺様がわざわざ出向いてやったんだ。出てくるがいい！ 我が宿敵、アイゾメミサオオオオッ！」

(お前がウルセエワツ!!)

見た目の貫録と噛み合わない間抜けさがにじみ出ているアルマディオだが、厄介なことに町一つ軽く消し飛ばすくらいの力はあるんだよな、こいつ。

すでに宿への損害が出ているし、下手に戦うと勝つ分には問題なくとも周囲への被害が心配だ。

ちなみに宿敵とかライバルとか言われてるが、あいつ的にはそれは奴の一方的な認識。俺はあんな暑苦しい馬鹿とそんな関係築きたく

ない。というかライバルか宿敵かどっちかに統一しろよ。

「……ミサオママ、大丈夫？」

物陰に隠れて着替えを漁っていると、ひよこつと目の前に赤い瞳が収まった愛らしい顔が現れる。

桃色の髪を高い位置でツインテールにした獣人の少女、モモだ。

ところどころ自然に呼ばれてしまっているんだが、モモ？ ママじゃないよ？ パパだよ？ いやパパでもないんだけど性別的に適してるのはパパ呼びだよ？

「も、モモ。なあ……ママ呼びは固定されちゃったのか？」

「だってミサオママ、いま女の子……」

「それは、そうなんです……」

純粹な瞳で見つめられてはどう返していいか分からなくなる。これが無垢の力というものか……！

とりあえずその話題は落ち着いて、改めて話すとして。

俺は姿の見えない二人の仲間の事を問いかける。

「モモ、シャティとアシュレは？」

「シャティは結界。アシュレは避難」

「おお、流石……」

襲撃から数分も経っていないが、仲間たちはすでに自分たちの判断で動いていたようだ。

シャティは周囲に被害が出ないための結界を。アシュレは宿に居る人間の避難誘導を。そしてガーネットとモモは騒ぎの中心へ戦闘要員として来てくれた、といったところだろうか。

ふと空を見れば純白の翼を広げて飛び回り空から結界を構築し始めているシャティが、地上に目を向ければ蒼銀の鎧を身に纏ったアシュレが人々を誘導しているのが見えた。

『ふうん。君のパーティー、優秀だね』

(ふふん、そうだろう。そうだろう)

感心する魔王に得意げに頷くが、そんな場合じゃなかった。

シャティの結界があるなら周囲への被害は心配しなくていいな。ならさっさと着替えてあいつをぶっ飛ばし……たいところだが。



「うーん……」

今はガーネツタが姉の貫録を發揮しているため時間稼ぎ出来ているが、実のところ純粹な力はアルマディオのが上だ。だからすぐに俺も加勢しなければならいんだけど……。

袋から持ち上げた服……否。布を見る。

そう、布。

俺にこれを服と称するのはちよつと難しい。

服より布のきれっぱしに見える面積しかないのが、さつき渡された着替えの実態である。

めちやくちやぎつくり言うとはマイクロビキニ。下は超がつくミニのホットパンツ。履いたら多分、ちよつとケツがはみ出る。上はもつとやばい。

(大は小を兼ねるんだし、持ってきてくれるなら大きくても他の服でよくないか!? それか自分の服着るよこれ着るくらいなら!

さつきの爆発で荷物全部吹き飛んだけどよオツ！)

シャティはサイズの問題を考えてモモの服を持ってきてくれたらしいが、モモ……彼女の服は特殊すぎる。

モモはつたない喋り方に幼げな表情こそしているが、見た目は十四五歳ほど。本来その体に合う服なら縮んだ俺に問題ないはずなんだけど……これは流石に……。

「俺が、これを……?」

一見布面積が少なくエッチな服だが、モモは獣人。各所に自前の毛皮を備えているため、そんな服でもけしてエロく見えないのだ。胸も発展途上なのでマイクロビキニに見えるこのサイズも彼女の大事なところを隠すには十分である。

獣人はいくつかの形態を持つ場合があり、モモもそれに該当する。その変化に対応しどんな姿でも動きを阻害しない機能美に優れた逸品なのだが……。

俺が着るには、やっぱり、ちよつと……!」

俺が服を前に渋っていると、それを見たモモがへにやりと眉尻を下げた。それに連動して黒い狼耳もピンクの兎耳もしおつと折れる。

「ミサオママ、そのお洋服、いや？ ……モモとおそろいは、いや？」  
「着させていただきます」

即答だった。

着られる服があるだけでもありがたいことだよな！

『変わり身早くない？』

(うつせ)

モモはとある理由から記憶喪失であり、保護して名前を付けた俺の事を親のように慕ってくれている。

そんな子が目を潤ませながら、悲しそうにおそろいは嫌かと聞いて来たんだ。断れる奴がいるか？ 居たら鬼だ。俺は違う。俺はパパだぞ！

そんな俺の熱いパパパッションがほとばしった時である。

【メスママリント】

「今!？」

「!？」

突然大きな声を出した俺にモモがビクツとするが、曖昧な笑みで「いや、はは。なんでもないぞモモ」と言って誤魔化した。 ……誤魔化せたかなあ？

また例の謎の音だ。今日でもう三回目。

だからこの気が抜ける音はなんなんだよ。微妙にバリエーションあるところがなんか嫌だな！

それとまだ意味は分からないものの、なんとなく含まれていた音にすごく不満を覚える。何故だ。

(本当になんだよこの音……)

『メス堕ちポイントが溜まる音』

(なんて?)

聞き捨てならないワードが聞こえた気がするんだが。

だが魔王に聞いたただしている暇はない。……アルマディオの奴、本気の気配を出し始めた。

「ええい、もういい！ 出てこないなら、出てこさせるまで。仲間がいたぶられているとあらば、奴も隠れておられまい？ ……姉とはいえ、容赦はせんぞ」

アルマディオは言うなり、宙を片腕で薙ぐ。

それを見たモモが兎耳の方をぴくぴく動かしたと思うと、四つん這いとなり戦闘態勢に入った。

モモの耳はふたつある。

物理的な音を鋭くとらえる狼の耳と、魔力的な反応に敏感な兎耳。

キメラ種とも呼ばれる特殊な獣人であるモモは、あらゆる驚異を瞬時に察する。

それがこの様子ってことは……。

「結界を張ったようだが、この数に耐えられるかな？ 出でよ、我が下僕ども！」

アルマディオの周囲に紫色と金色の魔方陣が無数に出現する。

そしてそこから顔を覗かせ始めたのは、魔王城でスルーした魔物の軍勢だった。

## 7話 ▶ 対峙くメス堕ちポイントってなんですか!?

アルマデイオの発声の後、晴天を埋め尽くし規則的に並んだ魔方阵はその威容から次々と魔物を吐き出し始めた。

幸いその中に魔族の姿はないけど……多いな。しかもとびきり凶暴な奴らばかり出しやがる。

（おいおいおいおい。言っちゃなんだが、ここってポジション的に「はじまりの町」だぞ?! そんな場所を出していい魔物じゃねえし、数! なんだよこれ!? 馬鹿じゃねえの!）

いや、まあ原因は俺らがいるからなんだけどさ……!!

魔王倒した相手なら、これくらいぶつけるわな。

シャテイの結界で空間が遮断こそされているが、視覚までは無理だ。魔物を目した町の人たちから悲鳴が聞こえはじめる。

……この声の数、結構近くに人居るな。流石にアシユレ一人じゃ町全体の避難誘導は無理だ。

「! あんた、それは……!」

「ふはははははは! 言っただろう。現在の魔王軍の頂点は僕……じゃない、俺様だと! このくらい容易き事よ!」

さすがのガーネットも驚くが、それも仕方がない。俺だって驚いてる。

奴が使っているのは召喚術の類だが、普通こんな同時に呼び出すことは出来ないはずだ。

……どうなってるんだ? 前はこんな術使えなかったはずなのに。

『へえ、なるほど』

（お前、一人で納得するなよ。……なにか知ってるのか?）

『さあ、どうだろうねえ』

（このヤロ……ッ）

意気揚々とナビゲーターを名乗っていたくせに、こちらが知りたい情報は一切よこしやがらねえなこいつ!

『だって僕、呪いナビだし。呪いについては答えてあげるけれど、それ以外で君の疑問に答えてあげる理由はある?』

(家主様だぞ。敬意)

『あつはっは。いいね、それ。……でも、僕を問いただしている暇は無  
いようだが?』

「……チツ」

非常に癪な気分だが、魔王の言う通り問い詰めるのは後にするか。

魔物は悠長に待ってくれる気はなさそうだ。

まず五匹ほど、鋭い歯を持つ狼に似た魔物が飛び出しガーネットを襲った。

彼女はすぐさまそれを撃ち殺すも、魔物の影にはもう一匹隠れてい  
たようで……真つ黒な鮫がガーネットの腕に噛みつく。

「ガーネットー!」

咄嗟に動こうと思ったが、それよりも早く桃色の残像が目の前を横  
切った。

「ガーネット」

「! モモ」

ガーネットに噛みついた魔物はすぐに引き裂かれた。いつの間  
に俺の側を離れていたモモが鋭くのびした爪で迎撃したのだ。

相変わらず咄嗟の判断と俊敏性はぴか一だな。この反応速度は真  
似できねえや。

現在モモの腕は部分的に発達しており、黒い毛皮に覆われた狼のも  
のとなっている。

彼女の戦闘フォーム、その一だ。攻撃時は肉食獣の特徴が前面に出  
るみたいなんだよな。

「モモ、助かったよ。ありがとね」

「ううん、いいの」

笑顔で礼を言うガーネットとそれをうけて首をふるモモだったが、  
それも一瞬。すぐにお互いから視線を外し、敵を見据えて戦闘態勢へ  
と戻った。

彼女たちは可愛いし美しいが、チートを使って五年で急造英雄と  
なった俺と違って経験豊富な戦士なのだ。その様子からは油断や思  
考のほころびは見受けられない。流石である。

『僕を倒して油断した君とは大違いだねえ』

(うつせ！ 俺だつて戦闘中は警戒するさ！ あ、あれは倒したと思つたから……)

『一級フラグ建設資格とか持つてたりする？ 悪い方の』

(ぎいいいいッ!!)

『虫みたいな声出すじゃん』

(こ、この……！ 罵倒の語彙力無駄に豊富野郎め……！)

『魔王だもの』

(ぐぬうう……ッ！)

『君はうめき声の語彙力豊富だね。あ、これつて語彙力つていうのかな。君、知ってる？』

(知らねえよ!!)

自分でも分かつてる事をわざわざ言われるのは腹立つなこの魔王野郎!! その上次から次へと減らず口を。ミュート機能ねえのかよ。

……つて、だからこんな奴にかまつてる場合じゃないんだつて!

「くっそ」

イライラしつつも気を取り直す。

にしてもこのタイミングでの襲撃……みんな頑張つてはくれてるが、実のところ結構きつそうだ。

それもそのはず。俺達、数時間前に魔王と戦つたばかりだからな!?

怪我の治療はすんでいるものの、みんな体力が回復しきつていないためとてもじゃないが万全とは程遠い。

その事に少々を焦りを覚えると、その気配を察したのかモモがこちらを振り返つた。

「ミサオママ、大丈夫。モモたち、強い。ミサオママは今、大変なんでしょう？ 任せて。がんばる」

「も、モモー」

幼げな言葉使いながら、そこに込められた思いやりの感情がたっぷり伝わってくる。

………パーティー内で最も幼く、記憶すらない少女に気を遣わせてしまった。

俺みたいなのを親のように慕ってくれるモモは、本来俺が気遣う立場だつてのに。

(……ああもう！ 服がどーだあーだ言ってる場合じゃねえか！ 情けねえッ！)

我ながら女々しかつた。さつきモモより反応が遅かつたのだから、未だ全裸なこの姿で動くのに躊躇したのも原因だろう。

仲間守る方が優先だつてのに馬鹿なこと考えたもんだ。

あー！ やめやめ！ 羞恥心は一回捨てる、俺！ 女になろうが変えちやいけねえ所はあんだろ！

みんな自分の役目を果たしてるのに、俺が頑張らなくてどうすんだよ!!

俺はわずかに残っていた迷いを振り払うと、モモの服をひつつかんだ。

………藍染操<sup>あいぞめみさお</sup>、二十一歳！ マイクロビキニデビューしてやんよッ

!!

いや………ぎりぎりマイクロビキニではないけど。下はホットパンツだし………だし………。

『君、締まらないね』

(ほっとけ！)

「おいテメエー！ お望み通り相手してやるから、さっさとその雑魚どもしまいやがれ!!」

モモの服に着替え終わると、散らばった荷物の中から剣を探し出した俺は物陰から躍り出た。

でもって溜まった鬱憤を晴らすように馬鹿魔族……アルマディオを怒鳴りつけたのだが。

「……ん？ お前はさっきからチヨロチヨロしてる破廉恥地味女」

「誰が破廉恥地味女だアツ！」

不名誉な呼び方しやがってぶっ飛ばすぞ!!

こちらとら一大決心でこの服を着たつてのに、人の勇気を踏みにじるような事を言いやがって！

「裸だと思ったら次はそんなはしたない服を着てるんだ！ 破廉恥地

味女で何が間違ってる！」

「う、うううううううるせえッ！」

く、くそ。上手く言い返せなくて盛大にどもちまった……！

確かに肌色面積は大きいし胸に至ってはいつポロリしてもおかしくない有様だが黙れ!! 心が折れそうになるから黙れー!!

………や、やっぱりこの服はモモみたいに毛皮がないと許されない服なのでは……だあぁッ!! 考えるな!

「っーかお前、地味とか言う割にはちよつと顔赤いじゃねーか！」

「!? な、なにを寝ぼけたことを！」

「寝ぼけてねーわ！ 青白い肌の血色良くなるとすぐわかるんだよオツ!! 照れてんじゃねーよ気持ちわりいな！」

「き、気持ち悪い!?!」

………。

なんか思いのほか気持ち悪いと言われたことにショックを受けて



るっぽい。

あいつ顔だけはイケメンだから、もしかして生まれてこのかた言われた事ないとか？

よし殺す。

『驚くほど心が狭いよね、君』

(わずかな糸口から相手を倒すためのモチベーションを高めてるだけだが?)

『急に早口』

よし決めた。魔王殴れない分、部下のあいつを殴る。ぶちのめす。テメエのムカつく上司の分も蝟殴りにしてやるからな覚悟しとけよ!!

羞恥心を超えて一気に高まった闘争心に目をギラギラさせていると、ガーネットが魔物の相手をしながら問いかけて来た。

「ミサオ、その体で大丈夫かい？」

「ああ、問題ない。強さはそのままだぜ」

頷くと、手をぐーぱーと握って調子確かめる。

だけどそこに女の体になったからといって、不安要素は見受けられない。

そう。性別こそ変わったが、俺の強さそのものには影響が出ていないっぽいのだ。

俺にのみに適応される「レベル」という概念。これはガワがいくら変わろうとも、レベルアップの恩恵がもたらした強さ、頑丈さ、素早さ。あらゆる要素はそのままだ。

そんな便利な能力を持って五年間も旅して、更には魔王を倒してザクザク経験値が入った俺である。

「負ける要素はねえよ」

自信を持って頷いた。

するとガーネットは真紅の髪のかきあげ、艶やかに笑う。

「そうかい、だったら任せた。……けど、無理するんじゃないよ?」  
「ありがとな、ガーネット」

氣遣いに感謝しつつ剣を構える。最終的にマウントとってボコス  
カ殴ってやりたいけど、それを初手から許してくれる相手でもないか  
らな。

そうこれからの戦いに意識を向けていた俺の耳元に、後ろへ下がる  
ガーネットがすれ違いざまに囁いていった。

「ミサオ。……ちゃんと約束、覚えてるからね。ふふつ。これが終  
わったらご褒美にたっぷり可愛がってやるから、楽しみにしてなよ」  
「えっ!」

格好つけていた顔面の筋肉が一気に溶けたかと思った。

そしてドクンつと熱く高鳴る鼓動。だって、ガーネットとの約束つ  
て……!

思い出すのは決戦前夜。

—— な、なあガーネット! こんなことお願いするのもなん  
だけどき。もし魔王を倒せたら、俺の初めてを貰ってくれたりとか  
……してほし……なんて……いや、なんでも……。

—— おや、可愛いことを言うじゃないか。ミサオなら構わな  
いよっ。

—— 本当!? やったあああああッ!!

つとまあ。そんな会話があつたわけで。

『浅い回想だね。というか君、ごにごによしすぎ。最後何言ってる  
か分からなかったんだけど』

(勝手に人の回想を覗き見しておいて罵倒するのやめろよ)

……ともかくだ！

そう！

実は俺、魔王を倒したらご褒美として経験豊富なガーネットにいわゆる筆おろしをしてもらおう約束をしていたのだ！

こんなことになってしまったけど、まだその約束は生きてると！

さ、さすがだぜ。夫が十人いるお人は懐がでけえや！

『夫が十人!?!』

感動してたら魔王がなんか驚いてた。

(ん？ ああ。ガーネットは旦那さん十人、子供十二人のビッグママだぞ。つーかお前がそんな驚くのかよ。魔族は一夫多妻も一妻多夫もそれなりにいるって聞いたけど)

『僕は普通の魔族の生態とか知らないし……。え、すご。逆ハーの主じゃん』

魔王の癖にめちやくちや驚いてるのはどういことだよ。

なにか？ やっぱり厄災の魔王って他の魔族とちよつと違うのだろうか。

にしても、そうなんだよな。俺が憧れるハーレム主の先輩がこんな身近にいるんだよな性別逆だけど！ やっぱあの包容力かなハーレムのコツは。俺も見習いたい。

ガーネットの安心感マジ半端ないもん。包まれない。

こう、姉御肌なんだけど男前つーの？ 頼れるんだよなあ。

美人で強くて包容力あって色気もある。最高かな？

……と。つついそんことを考えてしまった時だった。

【メスメロリンツ♪】

(また!?)

本日四回目となる謎の音。

だけど今度はそこに明確なアナウンスが入った。

『はい、おめでどう！ 英雄くん、メス堕ちポイント四回目の取得だよ。わーぱちぱちぱち。君の能力、経験値十倍取得のレベルアップだったけ？ だからメス堕ちポイントも十倍取得だねえ。お得く』  
(だからメス堕ちポイントってなんだよ!? さっきも言ってたよな！ 少なくともめでたくもお得でもないことは分かるけど！)

『あ、聞きたい？ どうしようかな』  
マジでこいつミンチにしたい。

『とうかき、君。もともとメス堕ちの素質あったんじゃない？ チョロすぎ。この分だとあつという間に溜まりそうなんだけど』

魔王の野郎、不穩に不穩を重ねてくる。

気になる！ 気になりすぎるけど……！

(くっ！ 今はこいつが先だ！)

俺はざわつく心を落ち着けると、赤髪の魔族に目を向ける。

………？ 追撃も無しに妙に静かだなと思ってたら、何やらブツ

ブツ呟いてるな。

「気持ち悪い……この俺様が、気持ち悪い……!?!」

まだ気にしてたのかよ！

こつちとしては余裕を持って助かるが。

(色んな意味で気が散ったけど……ここからは真剣勝負だ！ 真剣に

こいつをぶっ飛ばす！)

すうつと鼻から息を吸う。

そしてさっき以上に声を張り、魔族アルマディオに向けて宣戦布告を言い放った。

「俺がお探しの藍染芽アイゾメミサオ 操だよ！ さあ、とつと終わらせちまおうぜ！」

8話▶プロポーズは突然にく心を折ろうと思っただけなのに

俺の名乗りを聞いた魔族アルマディオだったが……口をへの字に曲げて、いかにも嫌そうな顔をして見下ろしてきた。

「お前がアイゾメミサオ？ 何を馬鹿な。破廉恥だけでなく法螺吹きとはな！」

「破廉恥はやめろ!! あと法螺吹き言うな！」

こんな姿だしそう言われるのはまあ納得しかないんだが、それを認めたら普段からこの服を着てるうちのモモまで破廉恥扱いになるだろ!! おそろいなんだぞ! いや、モモは今の俺みたいに肌色面積多くないけどさ。もふもふしたピンクと黒の毛皮のおかげでいつさいのいやらしさが無い。

……気を取り直そう。

ちなみにだが、この世界の言葉も俺の発する言葉も自動で翻訳されているっぽいんだよな。異世界転移あるある助かるく! で納得してるから、仕組みはさっぱりなんだけど。おかげで五年、この世界で意思疎通に苦労せず生きていられるぜ。

どうも特定の固有名詞などを除いて、お互いが知っている似た言葉に変換されるようなんだよな。法螺吹きって、実際に法螺があるのか別のものを指して例えが変換されているのか、どっちだろうか。

ま、そんなもんは後だ、後。

閑話休題的思考終わり。

アルマディオは俺が目当てのアイゾメミサオだと一切信じていないようだったが、俺としては信じようが信じまいが、この馬鹿を撃退するだけである。

眉根を寄せ、いかにも不愉快そうな表情を作った男とその背後を見据える。

そして、構えて一閃。

「なッー！」

「はんっー！見たかバーカっー！」

魔王の堅い装甲をも切り裂いた俺の斬撃は、容易く多くの魔物を真っ二つにした。

対魔王の時は近距離用だったが、こちらは遠距離用の魔術剣。風の属性に特化している。

詠唱とタメの時間を端折って威力も広範囲に用いた分拡散したが、雑魚を散らすには十分だ。

まだいるだろうが、これで魔方陣から顔出してた分は片付いただろう。

(奴の方は……チツ。わかっちゃいたが、無傷か)

アルマデイオは先ほどの俺のように魔術結界を瞬時に構築、攻撃を防いでみせたようである。

傷とまでいかなくともあわよくば赤っ恥かかせてくれたお返しで服をひん剥いてやろうと思ったが、流石にそう簡単にはいかないか。

ざあつと切り裂かれた魔物の血が雨のように降りしきる中、アルマデイオは眉根に深い渓谷を刻む。

「……………ふんっ。アイゾメミサオだなどという戯言はともかく、只者ではないようだ」

(そう簡単に信じねえか)

俺がお前の狙うべき相手だぞ、と名乗った上で実力も示したのだが効果は今ひとつ。

まあ信じなくても注意を引けたのなら上々。さつきみたいに余計な事される前にさつきとケリつけるか。

そう割り切ると二、三。体の感覚を確かめるようにトーントーンとその場で跳ねてみた。

……。

体は、縮んだからか男の時より軽い。各部位の柔軟性も上がっている気がする。見た目はともかく筋力も落ちていない。近距離戦を仕

掛けるにしても問題ないだろう。

が。

思わぬ弊害が発覚した。

(こ、これは！ あかん……！)

『すつごく揺れてるけど大丈夫？』

(言うな！)

なにが問題かといえば、心もとないマイクロビキニチックな布面積で包まれた俺のなかなか立派なおっぱい様が、ジャンプするごとにゆさゆさ揺れているのだ。ちよつと痛い。

このまま戦ったら色々で大惨事な予感しかしない。

具体的に言うとかいつの目の前で剣を振りかぶった瞬間に何がとは言わないがポロリといく気がする。これはそういうパターン。俺は詳しいんだ。

(……落ち着け。戦う前に気づけたことはいいことだ。お約束のラツキースケベのパターンは全部頭に入ってる。俺はそれをみすみす自分で体現する馬鹿じゃあないぜ)

『それって堂々と自慢する事？』

(………。ふっ、俺にはこれがある！)

『誤魔化したねえ』

誤魔化してねえし。魔王なんか構ってる暇がないだけだし。

俺は心を落ち着けると、見えてる地雷的大惨事を回避するべく、そして相手をなめていない証拠に自分の全力を発揮することにした。

……魔術装甲の展開である。

全身から”核”となる物体、特殊な技術で背中に刺青のような形で

平面的に格納されている魔装工芸核アーティファクトに魔力を集中させる。  
すると肩甲骨と背骨を軸に、パキパキとクリスタル質の物体が体を覆っていく。

それは形を変えるにつれて、質感と色を硬く黒い金属質のものへと変化させていった。

これはこの世界における魔術形態の一つ。  
特別な技法によって作られたアイテム、魔装工芸核アーティファクトを介して自分の魔力を物質化させ身に纏うことが出来る。

現れた物質は使用者の適正と核となるアイテムの調整によって様々な形となるが、それらは総じて”魔術装甲”と呼ばれていた。

でもって俺の魔術装甲は、安心安全な全身鎧だ！ これでポロリの心配は無え！ わーっははは！

体が完全に鎧で覆われた安心感にほっと息を吐いていると、アルマディオが目を見開いた。

「ほう、魔術装甲まで扱えるとはな……。ッ!? 待て、その形は！」  
（お、つちよつとは信じたかな。いやいざ信じられても何だって気はするが……）

魔術装甲はオールオーダーメイド。滅多な事じゃ同じデザインの物は存在しないのだ。まず物自体が貴重だし、扱える人間も少ない。だってのに、奴が探すアイゾメミサオと俺が同じもん着てりやあ驚くよな。

口元以外は全て黒と藍色を基調とした重厚かつスタイリッシュな鎧に防御された。赤い飾り房がワンポイントオシャレだぜ！ 魔術工芸核の技師と話し合い、めっちゃうちゃデザイン頑張って考えた俺の一張羅だ！

いいだろ〜！ かっこいいだろ〜！

『あ、僕がバッキバキにかみ砕いた奴〜』

（水差すなよ！ 今俺かっこいいところだから!!）

……そう。魔王との戦いするとき、自慢の鎧はほぼほぼ砕かれて最終



的には素の装備だけにされていたんだよな……。

ふ、ふんっ！ けどな、この魔術装甲の良いところは砕けても核が無事で魔力さえある状態なら、何度も構築しなおせるところだ！

魔王戦でぼろっぼろに剥がされた鎧も、この通り新品同様！ コスパ最強！

『コスパって。君さあ、根が庶民だよ。僕に挑める実力あるなら冒険者として結構稼いでただろうに』

(うるっさいよだからお前はよお！)

せっかく戦闘態勢へ入ったのに、頭の中でいちいちうるさくされては集中できない。

相手してみれば俺は無言のままに百面相している(実際は心の中で魔王に怒鳴っている)有様だ。さぞ奇怪に映っているに違いない。「奇妙な女だ。まあいい……その魔術装甲に、奴と似た魔力。無関係でないことは分かった。向かって来るなら叩きのめして、アイゾメミサオについて聞くまでだ！」

言うなりアルマディオもまた魔術装甲を展開し始めた。こいつも使い手である。

奴の場合は俺のように全てを覆う鎧でなく、胸当てなど部分的な防御に特化した鎧。それに加えて武器を強化する装甲を用いている。

だが相手の変身を待つほどお人よしでもない。自分は待つててもらったとか、そういうのは考えないからな！ ぼうっとしてるほうが悪いんだ。

我ながら英雄的思考ではないが、そんなもん気にしてたら元男子高校生がファンタジー世界で生き残れるかよってんだ。

「い……つくぜえ!!」

気合の掛け声をあげると床を踏み砕かないよう気をつけながら、跳躍した。

……相手の変身を待つ様式美は無視するけど、宿の修理代は気にするのだ。

『やっぱり君、庶民だよ』

何も言い返せなかった。

目前に迫る赤い髪色。視認と同時に剣戟が響く。

俺が袈裟懸けに振り下ろした長剣と、アルマディオが構えた大剣がぶつかったのだ。

その勢いに金属がこすれ、一瞬火花が閃いた。

その間、約二秒。

正面からとはいえ、今のタイミングと速度は不意打ちに近い。そんな攻撃にもそつなく対応してくるあたり、やっぱりこいつ普通に強いんだよな。並の相手なら、大抵今の一撃で終わる。

奴の魔術装甲が施された武器は身の丈ほどもある黒い剣。くそつ、こいつロマンだけは分かってるよな……。正直見た目はかなりかっこいい。クソデカイ剣とかめちやくちや憧れる。俺の身長だと男の時でも使い勝手悪くて断念してたけど、こいつ獣の下半身も相まってかなりの長身だから使えるんだろうな。羨ましい。

といつても、もとは俺のと同じサイズの長剣だ。今は攻撃に特化した魔術装甲で覆われ巨大になっている。

装飾は奴の角に似ていた。

「ほう、なかなかいい剣筋ではない………かつ!？」

「バーカー!」

剣を受け止めてにやりと笑っていた奴の頭に俺の踵落としがきま

る。打ち込んだ勢いのままそこを起点にぐいつと体を回転させ振り下ろしたのだ。

この魔術装甲という武装は一見通常の鎧のように硬質な素材に見えるが、構成するのは自分の魔力……見えない力が具現化した魔術物質なのである。そのため結構な融通が利き、柔軟性も可動域の広さもばっちりなのだ。

だからこそ全身鎧でもこんな動きが出来る。

鎧の堅牢さと生身の柔軟性を兼ねそろえた最高の防具というわけだ。

作ってくれた技師には感謝してもんよ。

「っのー！」

「おっと」

アルマディオの二本角が枝分かれするように伸び俺の体を貫こうとするが、力を抜いて落下に身を任せることでそれを避ける。

そのまま飛行魔術を使い上昇、今度は股下から裂くように剣を振り上げた。装甲の甘い部分を狙われ、奴は慌てたように避ける。

「な、ななななんてところを狙うんだ貴様！ 破廉恥変態地味女め！」

「へっ、守ってない方が悪い！ 男なら金玉ガードくらいつけとけ！」

不名誉な呼び名のお返しとばかりに煽ってみるが、まあこいつの場合下半身は獣のような毛皮で覆われてその防御力が高いから、武装はそんな必要ないんだよな。

当然理解した上での煽りである。

「げ、下品な」

よくしよし、段々と狼狽してきてるな。

顔真つ赤じゃねーか。煽り易くて助かるぜ。

ぶちのめすのは簡単だ。

実戦で慣らして確信したが、魔王を倒し経験値を得た俺は魔王戦前より格段にレベルアップしている。

正確な数値は調べる余裕が無かったためまだ分からないが、なんかこう……えぐいレベルアップしてる気がするだよな。

ともあれ、余力を残しつつこいつを倒すには十分だろう。

これまでも勝ってきたけど、初期の頃は下手に接戦を繰り広げたばかりにライバル認定されてんだよなあ……。

魔王の仇とか言ってたし、このままただぶちのめすだけに終わるとまたしつこく追ってきそうな気がする。

ならば今、俺がすべきことは。

(確実に奴の心を、折る！)

そう決めると、奴が反撃する間もないほどの連撃を繰り出していく。

そこそこ認めながらも、まだ俺の実力を低く見積もっていたアルマデイオには隙があった。そこに躊躇なく付け込んでの連撃は、奴に攻撃の暇いとまを与えない。

「ぐううううっ!? これほど、とは！」

「気づくのが遅エんだよっ!!」

一方的に攻撃する高揚感に体が熱くなる。鎧を身に纏い姿が隠れていることもあって、今の自分の性別も見たい目も気にならなかった。

ただただこの相手をぶちのめす! という意志でもって攻撃を続ける。続ける。続ける!

そしてその勢いのままに……ある部位を破壊すべく、最速で剣を振り抜いた。

キンツと甲高い音が響き、黒い欠片が舞う。

「なあッ!?!」

俺が叩き切ったのはアルマデイオの胴体ではなく……頭部の角。

魔族の間で角は命の次に大事なものと聞いたことがあるので、決定的な負けを突きつけるためにへし折らせてもらったのだ。

こいつとはそこそ長い付き合いになるが、いい加減付きまとわれ

るのは鬱陶しいんだよな。

……でもまあ、敵とはいえガーネットの弟だ。倒しちまったら寝ざめがわりいから、おそろくこうするのが最適解だ。

せいぜいかなわなない相手俺との実力差に打ちひしがれてくれ。

角が折れたことを認識した男が目を見開く。

だが激昂させる隙すら挟ませない。

俺は剣を鞘に納めると、体をひねってアルマディオの顔面に拳を叩き込んだ。

角を叩き折られたうえで見下してた地味な女に拳でボコボコにされる！ これはしばらくトラウマだろ。

わーっはっは！ 家で膝抱えて引きこもってる！

アルマディオは俺に殴られた勢いそのままに上空から一直線に落下、叩きつけられた地面の舗装が砕けクレーターが刻まれた。

人除けの効果も含まれたシャティの結界が正しく機能していたため周辺に人はいなかったが、結界の外で恐る恐るこちらを伺っている者がちらほら見える。それがアルマディオが落下した音に驚いて飛び跳ねた。

「ああ、悪いわりイ。驚かせたな。まあ、心配はいらねえから安心してくれや」

出来るだけ安心感を与えるように気さくに声をかけてから、地面にのめり込んでいる魔族を窺う。

(……よし、泡吹いて気絶してるな)

満足げに頷いていると、ガーネットとモモがこちらに向かってくる。

俺は褒めてもらえるかとぱつと表情を明るくしたのだが、対してガーネットの表情は微妙なものだった。

あ、あれ？ やっぱり弟さん相手にやりすぎました……!?

「あくあ……。やっちゃったねえ、ミサオ。いや、知らなくて当然だから仕方ないんだけど……」

「え？ だ、大丈夫だってガーネット！ ほら死んでない！」

俺はその反応に焦って、地面からアルマディオを引っ張り出してガーネットに見せつける。

泡ふいてるし眼を回しちやいるが呼吸してる！ 生きてる！

『くはっ！ ぷ、ククククク』

(あん!? なに笑ってんだテメエは!!)

ほらほら、とアルマディオの肩を掴んでガーネットに見せていると、今まで静かだった魔王がムカつく笑い声をあげはじめた。

『し、知ら、知らないなら教えてあげようか？ ククク。これは僕でも知ってる。あのね、魔族にとって異性の角を折る行為っていうのは……』

魔王が言い切る前に、がしつと両手を掴まれた。

「うおっ!」

俺の手を掴んでいるのは、たった今ぶちのめしたばかりの魔族アルマディオ。一瞬前まで気絶していたくせに、ゼーゼーと荒い呼吸をしながら自分の足で立っていた。

復活速いなこいつ!!

少なくとも半日は寝てるよって気持ちでぶん殴ったのに!

「……けた」

「あ?」

何かぼそぼそ喋ってるな。攻撃してくる気はないようだけど逃げられないように手を掴んでるって事は、呪文の類かもしれない。

一日に二度も呪われてたまるかよ! と。掴まれた腕ごとブン回して地面に叩きつけようと思ったんだが……。

「その求婚、受けた!!」

「なんて!」

予想の斜め上からの言葉に、俺の思考は停止した。

## 9話 ▶呪いと祝福く本日の天気、晴れ時々雷雲時々俺の悲鳴

「その求婚、受けた!!」

「なんて!?!」

がばつと顔を上げたアルマディオの熱い視線と、投げかけられた言葉。

かろうじてつつこみは口から飛び出てくれたが、思考はまったく追いついていない。

今こいつなんて言った? きゆうこん?

球根じゃねえよな流石に。けどもう一つ変換されたきゆうこんの字面が嫌すぎてどうしても認めたくないんだが。

……そうやって、敵の前で不覚にも隙を晒した俺が悪かったんだろ  
うな。

「嗚呼、愛しい人……!」

「は?」

うつとりと蕩けるような表情が、気づけば目前に迫っていた。

視認と同時にぶわつと総毛立つような感覚に襲われるが、フリーズしていた脳からの指令が体に届くよりも早くおとがいにがちり指がかけられて固定。ど真ん前には無駄に長くてばっさばさした赤い睫毛が縁取る金目のドアップ。鎧の中で唯一肌が露出している部分、口元に生暖かい他人の息がかかる。

更にはそのまま息つく間もなく息ごと飲まれ……………。

唇が柔らかいものに塞がれていた。

「~~~~~!?!」

声にならない絶叫が喉の奥で暴れた。





女美少女に囲まれているわけだから余計に！

なのに現実には女の子ですらなく野郎とファーストキ……うわああああああああああああああああッ!! 認めたくないいいいいいいッツ!! 嫌だああああああああッ!!!!

求婚って、プロポーズってなんだよ馬鹿あああああ!

『あはっ。その程度で発狂するの？ 乙女じゃん』

(その程度!?! 大惨事だわボケがツ!!!)

魔王のデリカシーの無さに余計に怒りの感情が上限を突破していく。

ガーネットには悪いけど、ごめん。こいつ塵も残らないかもしれない……。

どこか冷静な部分で考えながら、体は圧倒的な怒りに支配されて突き動かされていく。

そして拳のラッシュをやめ、再び剣を抜き放った時だった。

「古来より……女と女の恋路に挟まる男は処刑してよい、という教えがあります。なくてもわたくしが。このわたくしが今、作りましたわ……!」

上空から、底冷えするような声色がふってきた。

声質は鈴が転がるようなのに、響きがひどく冷徹だ。そして荒げていないというのに、よく通る。

真冬の極寒の中で夜空に燦然と輝く星のような、そんな声。美しくも恐ろしいとはこういう事だろう。

「えっ。」

見上げると白い柄に星の結晶を思わせる飾りがついた杖を構えて

いるシャテイの姿。表情には温度というものはなく、冷たくこちらを見下ろしている。

あまりに印象的な声と、その内容のギャップに俺の思考からざっと怒りの熱が引いた。

怒りより困惑が勝ったのだ。

(女と女の恋路？ 誰と誰？ それはいわゆる百合の間に挟まる男は死ぬというやつですねわかります)

困惑の中でも無駄に動きの良いオタク的思考がそこまで考えたが、そこまでだった。

「ミサオ様の初めてを……初めての口づけをおおおおおッ!!」

(女の片方つてもしかして俺……!!)

一転して激昂へと変じたその声に、俺の赤裸々なプライベートが拡散される。

やめ、やめて!?! シャテイさん!?! 俺がこれまでキスも経験なしという事実をご町内の方々に聞こえるように言わないで叫ばないで!?! 上空からよく通る声で大声出されたら普通に町内放送だからね!?! やめて!?!

というかシャテイ、なんで俺がこれまで経験なしだって決めつけてるんだよ! 事実だけど話したこと、ないぞ!?!

『にじみ出てるんじゃない？ 童貞臭』

(マジでお前はいちいち腹立つことを律儀に挟んでくるのやめろ!!)

『だって面白いんだもの』

(俺は面白くねえよ!!)

「ミサオ様！ 今すぐそのボロ雑巾を手放して遠くへ放り投げてくださいましっ!!」

「へあっ!?!」

アルマデイオボロ雑巾の胸倉を掴みながら魔王と脳内バトルしていると、シャテイから鋭い声飛んできた。

反射的にその指示に従い、ボロ雑巾を渾身の力で放射線を描くように投げる。  
そして。

【天空を支配せし雷閃妃よ、あまねく雷雲を構築し光を束ねて収束せよ。薫風は紫電を孕み大輪の花を開花するべし。望むは有翼族が巫女姫、シャテイ・テイテイシエール！】

シャテイが言葉を紡ぐと周囲への被害を防いでいた結界の光が黒く染まり空へ吸い込まれる。

すると快晴は瞬く間に分厚く黒い雲に覆われて、バチバチと龍のような紫電がうねり始めた。

そして。

インパルスパニッシュメント!!  
【天花烈雷閃光刺!!!】

「おわあああああ!?!」

瞬間、轟音と共に一条の落雷が地を穿った。その刹那、雷光に他全ての光源が奪われたように周囲が暗くなる。

俺の魔術装甲ならたとえ直撃しても無傷だが、その迫力にビビり思わず叫び声をあげてしまった。

なんの迫力って、雷そのものよりシャテイのだよ。いや人間の本能として落雷にも普通にビビったけどな？

え、シャテイ……当事者の俺以上に怒ってない？ 逆にこっちの怒りが覚めちまったよびっくりして。

そして女と女のどうのこうのはともかく恋路うんぬんについては詳しく聞きたいんだけど？ 是非とも聞きたいんだけど！

俺が困惑していると、「ふむ」と魔王が納得したような声を出した。

『彼女、順調に魅了の効果が出ているね』

(は？ 魅了!?)

その予想外の言葉に思わず背後を振り返る。

魔王は俺の脳内に声のみを響かせているので、当然後ろには誰も居ないのだが。

『ああ、そうだよ。僕が君に与えた呪い祝福のひとつでも思ってもらえればいいかな？ 彼女の場合はそれだけじゃなく、君の性別が変化したこと自体が大きな要因となっているようだけど。……ふふっ。好かれてるんだね。魅了と言っても正確には好感度の倍増化みたいなものだから、もともと好かれていないと効果は薄いもの』

(まてまてまて、情報処理が追い付かない。聞いただけなら美味しい話に聞こえるけど絶対そうじゃないだろ俺は騙されんぞ)

『用心深いなあ。魅了だよ？ 君みたいなスケベ野郎からしたらおおはしやぎするスキルでしょ。喜べよ』

(お前今祝福とか言ってたけど呪いって言葉にルビつけるニュアンスで言ってたかった？ 騙されんぞ)

『メタ読みおつ。なんでわかるかな……これだからオタクは』

(その発言がもうお前も俺と同類なんだよなアツ！)

『君と一緒ににはされたくないな。……ま、色々と気になるようだけど、とりあえず僕に感謝したまえよ。その姿になった事で、ミサオには新たな“チート”が発現しているんだから。おそらく君にとって垂涎物の』

(チートって……)

『おやおや……おやおやおやあ？ 呪いナビに興味津々かな？ 色々聞きたくてたまらないのかなあ？ そうだろう、そうだろう。君はもつと僕の存在に興味を持つべきなんだ。……ふふん、いいだろう。落ち着いたらちゃんと説明しよう。呪いが呼び寄せた奇跡のような祝福を』

芝居がかった口調で魔王は上機嫌に述べるが、俺としては喜ぶどころか不安が増したただけだ。さつきメス堕ちポイントなんて不穏なワードを聞いたばかりだったのに、今度は新たなチート能力だった？

う、うさんくええええツ！

俺は心労による頭痛を覚えつつ……目の前でぷすぷす煙をあげながら焦げている魔族を眺める。

「これ、どうしよう」

そしてすっかり困惑で塗りつぶされ、行き場を失った怒りの感情を  
持て余すのだった。

シャティによる怒りの高難易度攻撃魔術が直撃した馬鹿魔族は、魔術装甲のおかげで死んでこそいないが轢かれたカエルのようにべしやつと地面に張り付いて痙攣していた。

(こ、こわ……)

『でもこれ、主に君が与えたダメージだと思うのだけど?』

(え、そう? まあ殺す気で殴ったから……)

なんとも言えない気分になっていると、先ほどとは打って変わった可愛らしい声に呼ばれた。

「ミサオ様〜! このシャティが、不埒なやからに制裁をくだしましたわ〜! 褒めてくださいまし〜!」

声につられて上空を見上げると、シャティが笑顔で手を振っている。翼を犬が「ほめてほめてっ!」と尻尾を振るようにぱたぱた動かしている仕草が可愛い。

可愛いけど、たつた今の攻撃を見たあとだと……うん!

「あ、ありがとう。シャティはすごいな〜!」

我ながら棒読みになってしまったが、シャティは満足したようだ。

「えへへ。とんでもないですわ〜! お役に立てたのならばなによりです〜!」

(あ、かわいい……)

朱に染まった頬を両手で押さえる姿はあざと可愛くて、まあ可愛いならなんでもいっかなという気分になってくる。可愛いは正義であ

る。ジャステイスオブかわいい。いえあつ！

「あ、でも今の一撃に結界を作っていた魔力を注いでしまいましたのー！ まだ油断も出来ませんし、今ある魔力残量でもう一度結界を張ってまいりますわー！」

「た、頼む〜」

ブンブンを手を振りながら再び魔力を振りまきながら空を飛び回りはしめたシャティ。

俺はそれを見送ると……ようやく困惑と衝撃の波が引いていき、先ほどの感触が蘇ってきて全身に鳥肌が立った。

「うええええ……ッ！ ペっぺー！」

顔を覆う魔術装甲だけ消し、ごしごし口を擦って唾を吐き出す。

は、吐き気が。

「魔族にとって異性に角を折られるってのは、最上級の求婚なのさ」

俺が涙目になっていると、ガーネットがそんな説明をしながら歩み寄ってきた。

モモはといえば、その後ろで周囲への警戒を続けせわしく耳を動かしている。

にしてもさつき魔王に聞いちゃいたが、そんな文化今回初めて知ったよ！

とんだトラップである。受ける方も受ける方だが。

「求婚……」

「ああ。自分が折れた角の代わりなって添い遂げようっていうね。まあ受けるかどうかは結局相手次第なんだが、その様子だと随分気に入られたようだねえ。ふふ。あの子、強い相手は男でも女でも大好きだから」

「笑い事じゃないんですが!! たった今俺のファーストなキッスがクソボケ勘違い野郎に奪われたんですけどお!!」

「なんだい、ミサオ。本当に口づけは初めてだったのかい？」

「うゝ」

ぼ、墓穴を掘った。

「あははっ。世界を救った英雄様だっていうのに、本当に今まで縁がなかったんだね」

筆おろしを頼んでいた相手にそれを知られるのに何を今さら恥ずかしがることがあるんだという気もするが、それでも恥ずかしいものは恥ずかしい。羞恥で顔に熱が集まってきた。

(ううううううううううう……泣きてええ……！)

我ながら情けないが、いくら(おそらく)この世界においての最強格の実力を手に入れたとはいえデリケートな部分はそうそう克服できるものではないのだ。俺の心は繊細なのである。

そんな風に落ち込む俺がガーネットタの視線から逃げるように俯いていると……ふつと影が差した。

「……………それなら」

「え」

顔をあげると、ガーネットタの金眼と至近距離で視線がぶつかる。さらに形の良い爪がおさまる手で、くいつとおとがいを持ち上げられた。

先ほどとほぼ同じシチュエーション。だけど今度は相手が違う。

(こ、これって)

期待に胸を高鳴らせると、頭の後ろに腕を回され力強く抱き寄せられた。やだ、男前……………！

そして、そのまま。

唇が柔らかく花びらのように繊細なもので塞がれて、その間で互いの吐息が交じり合った。

(ひよあああああああああああああああッ!!)

柔らかいし気持ちいいしなにかいい香りがする!! 薔薇? え、こ

こつて楽園？ 楽園再び!? 一日に二回目の楽園!? うおおおおお  
おおおおお おおお!! さっきの悪夢が霧散してい  
くううううううツ!!

「……………。ふふっ、どうだった？ 弟の不始末はこれで勘弁しても  
らえるかい、なんてね。お詫びというには私の方が得したかね。あは  
はっ」

(ほ、包容力うううううううう！ ガーネットタ姐さん、一生ついて  
いきます!!)

ファーストから間を置かずしてセカンドぶちこまれたんだけど、は  
いさっきのは地獄。今のは天国!! 楽園!! ……………いや地獄なん  
て無かったが？ あんなものカウントしてたまるかってんだ！ 今  
のが俺のファーストキス！ 甘酸っぱい思い出!! たいへん素晴ら  
しかったですごちそうさまでした!! よ、よければサードもいかがで  
す!? そのまま満塁しましょう！

なんて、脳内でホームランが打たれ宴が開催されていた俺だったの  
だが。

【メスメモロリンツ♪】

(まったかよおツ!! この、いい気分にあ水差しやがって!)

本日五度目？ の例の音が響いた。宴、瞬く間に強制終了である。  
いい加減この音がなんなのか魔王のあんちくしょうに答えてもら  
わねばなるまい。

(おい、魔王!! だからこの音、なんなんだよ!)

魔王に問いたですと、奴はあっさりともない内容を答えた。

『そうだね、いい加減君にかかっている呪いの事を説明しておこうか。  
なんたって僕は呪いナビだし』



(もったいぶらずに、はよ！)

『ほしがりさんだね』

(そういうのいいから！)

『はいはい。……では祝福スキルについては後回しにして、まずは君にとって呪いと言える部分から教えようか。……あのねえ、これは君に現在発現してる「職業クラス・女ファイメール」の経験値が溜まる音だよ。僕はこれを仮に”メス堕ちポイント”って呼んでる。分かり易くていいでしょ？ちなみに音は僕が調整して君に聞こえるようにしたものさ。ナビとしてのサービスだね』

……は？

『えーとね。例えば君がその性別姿のままときめいたり、肉体的な快楽を感じたり……あとは、そうだな。母性を刺激されたり？ そんな時にポイントが溜まるわけ』

溜まるわけ、じゃないが??

『……でね？ ふふふ。これが溜まって溜まって溜まり切って……  
【職業クラス・女ファイメール】がレベルアップし、最高ランクまで上がって定着すると、だ』

ごくり、と生唾を飲み込んだ。

「ミサオ？ 顔色が悪いけど……私とじゃ、弟に似ていて嫌だったかい？」

「そんなことはありえませんか！へん素晴らしかったですありがとうございます！ございました！一生の色あせない思い出として心に刻み脳みそに感触と共に永久保存します！」

「そ、そうかい？ じゃあ、体調でも？」

「ま、まあそんな感じで……」

歓喜の表情から一転。神妙な顔になった俺を、ガーネットが不思議そうに覗き込む。

キスが嫌だったのかという問いに関してはきっちり否定して全身全霊の感謝を述べつつ、しかしそれとは別に嫌な緊張感が走る。

だって、だって……この魔王の言葉の、流れって……！

『クラス職業… プレイヤー女』の最高職に上り詰めた時。君は一生……男に戻れなくなる』

……………は？

「嘘だあああああああああああああああああああああツツツ  
!？」

「ミサオ!？」

「ミサオママ!？」

叫ぶと同時。何故か身に纏っていた魔術装甲が砕け散り、勢い余ってマイクロビキニ（仮）もほどけ落ちた。

なんで!？」

天国から一転。地獄の底まで突き落とされたうえで泣きつ面に蜂である。

正面に居たガーネツタとモモには完全に全部見られた。

更に。更に更に更に!

『あ、ちなみにだけどね。君のチート能力、経験値確定十倍取得だっけ？ さつきも言っただけど、それメス堕ちポイントにも適応されるよ。うだから。今のところ僕が想定していた十倍の速度で溜まっているよ、ポイント』

更に地獄の地下フロアまで通じる情報追加されたんだけど!! も  
うお腹いっぱいだよ! やめろよツ!!

俺の……俺の超お得チート能力がこんなことで、裏目に……! 馬  
鹿な……! !

馬鹿なあああああああツ!!

『いい悲鳴だねえ。耳に心地よい。……さあ、ミサオはいつまで、自分  
に向けられる好意に耐えられるかな?』

「うわあああああああああッ!!」

本日の天気。

晴れ時々雷雲時々俺の悲鳴。

# 10話 ▶ 職業くメス堕ちと女子力は違くない???

職業。

一般的な意味の他に、この世界でそれは「魂の指針」とされる職業クラスのことも指し示す言葉だ。

七歳を超えるとすでに何かしらの職業適性クラスに目覚めており、専門の機関で調べてもらうのが通例らしい。

その適正は生まれながらもつ先天的なものか、成長の過程で育まれた後天的なものかのどちらか。

種類は多岐にわたり、戦闘系の職もあれば「一般的な意味での職業」に対応する職業クラスも存在する。

例えば農家に生まれた場合、親の仕事を見て育ち【職業・農業師クラス】を取得していたり、とか。

その場合その所業に適したスキルや魔術を覚えやすくなるので、適性に合った職を選ぶ者が多いとのことだ。

この世界ではどんな種族でも職業クラスの階級ステージを高め、魂の力を磨くことが生涯を通しての共通目的とされている。

単純に階級が上がると出来ることが増えて便利だし、なんでも種族内で階級上位者が増えることに属する種族全体の力が増すというのだ。

なんとも不思議な話である。

でもって職業の種類つてのは、俺が思っていた以上に多いようだ。

………というか基準がガバすぎるだろ！

なんだよ、【職業クラス・女フェイメイル】つて!! 性別は職業じゃねえ!!

いや待て。もしかして「女」は種族のカテゴリーとしてカウントされてる？ 稀に取得することによって種族を変える職業が存在するらしいから……。

女しかない種族もいるって聞いたことがあるし、その二つの特性

が嫌な感じに合体しちゃった感じ?? 最悪だよ。

「むむむむむむ!! ……ふうくむ。確かに、今のミサオ様には【職業：女《クラスフイーメール】が追加されているようですね。なるほど、これが性別反転を引き起こした呪いの正体ですか」

奇妙なメガネをかけて俺に内包された職業を見定めているのはシャティだ。

彼女は魔術師ソウサラーの他に神官プリーストの職業も取得しており、道具こそ必要とするが本来専門機関でなければ調べることが出来ない職業を鑑定することが出来るのだ。

魔族アルマディオによる襲撃の後、壊れた宿について店主に謝りつつ再び宿の食堂へ落ち着いた現在。

俺は魔王に寄生されている事実だけ伏せて、身に起こった悲劇を仲間たちに説明していた。

先ほど知ったばかりのこと……「メス堕ちポイント」と【職業：フイーメール女】のことも含めてだ。

何故それを知るに至ったかについては「頭の中で声がする」と事実でありながら苦しい説明をするしかなかったが……それについてはあつさりと受け入れられた。

神託のようなものだろうってことで、この世界ではよくあるらしい。いや、神託どころか魔王託なんだけどな!?

ちなみにアルマディオの野郎だが、あんなズタボロだったくせにしぶとくも起き上がって一度退散している。

去り際に「婚礼の準備が出来たら迎えに来る!」とかほざいていたが、二度と来ないでほしい。来るなら次こそ殺される覚悟で来いや。それまでにお前ガイの姉ネツちゃんタに許可とっておくから。

「呪いの正体が職業とは、いったいどういうこと？」

アシュレの問いかけにシャティはうくと人指し指を顎に添えて考えてから、自分の考えを述べた。

「ええとですね。まず呪い自体はミサオ様の望みを逆に叶えるもの……でしたね？」

「あ、ハイ……」

思わず肩をすくめて小さくなる。

俺が受けた呪いは、俺が抱いていた一番の望み……女の子といちゃいちゃラブラブしたい！ 出来ればえっちな事もしたい！ という性欲が反転した結果だ。

それはもう呪いの事を魔王の存在意外、あらいざらい話した時に仲間みんなに知られているのだが……今思うと素直に話さず誤魔化していればよかったと後悔する。

か、肩身！

「なんといいですか……呪いそのものは「望みの逆」という結果に誘導する役割を果たしたにすぎないのですよね。呪い自体は効果が成った時に消えたも同然でしょう。後に残ったのはもたらされた結果だけ、というわけですわね」

え、呪い<sup>魔王</sup>はゴリゴリに残ってるんだけど……!?

「つまりその結果が【職業…<sup>クラス</sup>…<sup>ファイメイル</sup>女】というわけか。女にする、という事象を引き寄せるために必要だったんだね」

「ええ。……私がさつき申し上げたガチガチに組まれた原初の魔術式。あれはその結果をミサオ様に結び付けているもので、強いて言うならそれが”呪い”ですわ。呪いと言うにはすでに厄災の魔王が放っていた、あの毒々しいまでの気配は発していませんが」

(本人<sup>魔王</sup>が俺の中に居るのに!?)

つつこみたくても、隠しているため押し黙るしかない俺である。

でもってシャティはそうキリっとした顔で説明を述べながら……何故かずっと、俺の頬をぶにぶにと柔く揉んでいる。

そのせいもあつてほぼ喋れないんだけど、シャティのおっぱい様を

眺められる最高のポジションなので文句を言うに言えない。

「アシユレが言うように女性になるという結果をもたらすにあたって必要だったもの。それが「職業：女」です。しかもミサオ様の特性である「一度強くなったら弱くならない」という、存在の維持をつかさどる力と変に絡み合っている様子も見受けられます。つまり呪いで引き寄せ職業として定着させられた所に、その職業を維持する力が働いて……いわば二重ロック状態なんですよね」

「そ、そんな……！」

ただでさえメス堕ちポイントとかいうものがレベルアップの効果で溜まりやすくなってるのに、その上この職業を引き剥がせない原因の一つになってるってのか!?

「まあまあ、そう落ち込まないでくださいな。肉体変化を伴う職業なんて貴重ですよ！ ミサオ様っ！」

「貴重でもいらなくて！」

俺は頬つぺたを揉むシャティの手をそれぞれ掴んで離させると、涙交じりに訴えた。

「な、なあ！ 職業を消す方法ってないのか!？」

それに答えたのはアシユレだ。

「……基本的に職業はひとつ取得するだけでも難しいし、みんなクラスステージ職業階級を上げることが目指しているからね。少なくとも私は消そうとした、という事例すら聞いたことがない。果たしてそんな方法があるかどうか……」

その情報に絶望感が増す。ベテラン冒険者のアシユレでも事例を聞いたことが無いって、いよいよもって希望が小さくなってきた。

これが単純な解呪案件だったらどれだけ気楽だっただろう。

俺はこの世界に来てから初めて、自分が持っているチート能力を恨めしく思った。

俺が打ちひしがれていると、シャティが気遣わしげに声をかけて来た。

でもその気遣いはちよつと斜め上だったんだけど……!

「み、ミサオ様。元氣出してください。厄災の魔王の呪いですよ？」

それを受けても無事どころか、こんな貴重な職業を身につけられるなんて豪運です！ それも女の子になれる職業だなんて、強運です！

もう、世界の運命はミサオ様に味方しているってことですね！」

「俺にとつては不運以外のなにものでもないんだけど!？」

そりゃ、死んだり仲間がひどい目にあったりするような呪いを受けるよりはマシだろう。でもラッキーと受け入れるのはちよつと無理かなあ!? シャティもかろうじて言葉を選んだのか幸運とまでは言わなかったけど!

っていうかさ。俺が女になってから、シャティの様子がちよいちよい変じやないか？ 魔王が言う「魅了」の効果もあるかもだけど、なんかこう……それとは別の違和感もあるっていうか……具体的にアルマディオに雷ぶつ放したあたりの台詞とか……。

俺の中に蓄積されたオタクとしての知識、勘がひとつの答えをはじめ出しそうんだけど、俺の理性がそれを拒否している。

「あ、そういえば。えーと……メス堕ちポイント、でしたっけ？ 神託

が告げた【職業…<sup>クラス</sup>…<sup>ファイメール</sup>女】のクラスアップに関する数値の名前は。神託

といえど、その名前は少々頂けませんわね。だって女の子になる職業<sup>クラス</sup>ですよ。なんて尊い！ それを”堕ちる”と表現するのは不愉快ですわ。例えばですけど、堕ちるでなく昇るといふ表現が適切だとは思いません？ つまりメス昇り、もしくはメスという表現も気に食わないので女の子昇りポイントという名がふさわしいかと思うのです

が！」

「それはそれで卑猥な響きじゃない!？」

いよいよもって発言おかしくない!? 女の子昇りポイントってなんだよ!

俺が置いてけぼりをくらっているのを察したのか、シャティはひと



っ咳払いした。

「……とりあえず、その名称は仮に女子力と呼ぶことにして」

『まさかのセンス』

「とんでもないところに落ち着いて納得しないでくれシャティ！メス堕ちと女子力じゃ意味合い違いすぎるからな!?!」

確かに魔王が命名したメス堕ちポイントをそのまま口にした俺もアレだったけど！

でも違う。女子力と呼称するのは間違いないで違うって！ 初っ端の命名者の魔王ですらつつこんだじゃん！

「まあまあ、いいじゃないですか」

流された……だと!?!

「ともあれ、ミサオ様の現状をもっと把握する必要がありますね。職業についてもですが、まさか魔術装甲が碎けるなんて……驚きました。一度魔装<sup>アーティファクト</sup>工芸核も抽出して確認した方が良いかと」

身に起きている最大の問題を置いておかれた……。

確かに普通なら魔力切れや魔装<sup>アーティファクト</sup>工芸核破壊以外で碎けることなどありえない魔術装甲が壊れたのも気になるけど、俺的にはそれってもっと後でいいんだけど！

「ねえ、シャティ。それもそうだけど、今のミサオには服が先じゃないかな？ 彼女をあられもない姿のまままで居させるわけにもいかないよ」

「アシユレ、彼女って言うのやめてくれない!? わざと? わざとか!?!」

「あ、すまない。……君が可愛らしいから、ついね」

「う……」

なんかめっちゃ爽やかイケメン笑顔で返されて黙らされてしまった……。これが顔の良さか……!

ちなみにあられもない姿とは言われるけど、流石に裸ではない。

そーいやあ、様子が変といえばシャティだけでなくさりげなくアシユレもなんだよな。

気のせいかと思ってたけど、やっぱり俺に対するあたりが柔らかく

なっている。というか、変にキラキラして見えるのはなんだ？ いや、もともとからアシユレは美人だしキラキラしたエフェクト纏っついてもおかしくないんだが。でも今はこう、妙に胸がざわつく感じのキラキラなんだよな。

イケメン力？ くそう、上手く言えない俺の語彙力がカス。

「ミサオママ、いいにおい」

「も、モモ？」

肩を落としていると、いつの間にか近くに寄ってきていたモモにすりつと頬を擦りつけられて困惑した。

わあ、柔らかあい。すべすべ……じゃなくて！

モモは俺の事を親のように慕ってくれているが、出会う以前の経験によつて男に対しての警戒心が強い。それは懐いてくれている俺に對しても例外ではなく、接するにあたつてけして触れてくることはなかった。

それが……ほっぺすりすり……だと!?

(女になつたからつて事!?! あ、あのモモが。あのモモが俺に触れてくるなんて)

感動のままに、しかしモモを怖がらせないようにそつと手を伸ばし頭を撫でる。すると尻尾をブンブンとふつて胸元にぎゅぐつと抱き着いてきてくれた。

……………!

か、感動だ。

これはけして下心ではない。純粹に感動！ しているので！ あ  
る！

見た目は中学生くらいなんだけど、仕草やたどたどしい言葉使いからもつと幼く感じるモモのその行動に俺の中の父性が疼く。これが庇護欲というものだ。

しかしそんな俺の感動に水を差すのは、例によつて魔王である。

『ねえ、ミサオ。感動している所悪いけどさあ』

(あん?)

【メスママリソリソリソリ♪】

「がふっ!!!」

血を吐くような勢いでむせた。

「ミサオママ?」

「あ、いや……なんでもないよ、モモ。はは……」

しかし俺の胸元から不思議そうに顔を見上げてくるモモに「メス堕ちポイントたまっちゃうから離れてくれない?」とは言えない。俺はただただ、引きつった笑みで首を横に振るしかできなかつた。

お、おぎや……。

『やつぱり、これはメス堕ちも時間の問題かな? あ、君の仲間が言うには女子力だっけ! あはは。ミサオって母性強いんだね』

(父性だが???) ちよつとこのメス堕ちポイントくんさ、判定が雑じゃねえか? 女の体になったからって女フィルターかけてくるのマジでやめねえか?)

『ん〜? そういうわけじゃないと思うけど。君って女の子になる才能あるよ。僕に裸を見られたときの反応も女子だったじゃん』

(言・う・な!!)

嫌なことに脳内で喋られることに大分慣れてしまった。クソがよ。

……そういえば、さつきこいつが呪いとは別の部分。祝福とか言ってたのが、もしかしてこの妙にいつもよりみんなが距離近いやつのことか? 多分、魅了とイコールで繋がると思うんだが。

(そういえば呪いナビさんよ。祝福<sup>スキル</sup>ってやつの説明はまだかよ)

『あ、やつとナビって呼んだね! ふふふん、いいだろう。教えてやろうとも。いいかい? 君が手に入れた職業には当然職業特有の技能<sup>スキル</sup>があるわけだけど……』

魔王はナビと呼ばれたことに上機嫌になると、さつそく説明を始めようとした。

しかしその直前。ぴとりと首筋に冷たい何かがあたり、「?」と振り

返れば間近に迫力美人顔。

俺はガーネツタに首元を嗅がれていた。

「が、が、が、ガーネツタ!？」

「なんだ、面白い子だね。ガチヨウの鳴き声みたいだよ？」

「……………ふむ」

クスクス笑いつつガーネツタは俺を観察するように眺めると、次は……首筋を舐めてきたああ!？」

「うひ!？」

さすがに飛び上がる様にして後ずさった。

ガーネツタさアん!? 例の約束は是非とも実行したいのですがさすがにみんなの前でっていう高度なプレイは俺にはまだ早いですけど!？」

心構えが何もできておらず慌てる俺だったが、ガーネツタはお構いなしに俺の両頬を掴んで視線を自分に固定した。

「が、ガーネツタ!? なにをしてらっしゃいますの!？」

シャティが慌てたように俺とガーネツタの間に入ろうとするが、彼女はガーネツタの言葉に動きを止めた。

「魅惑的な芳香に……甘い体液。さらに、蠱惑的な魅了眼……ってね。シャティ、これを聞いて心当たりは?？」

「……………まさか、それはっ」

「ああ。シャティにアシユレ、モモ。そしてこの私もすでに影響を受けている」

「……………!？」

シャティは何か思い当たる節があるのか少々考えた後。……恐ろしい事を述べた。

「あの……ミサオ様? 落ち着いて聞いてくださいいね?」

「え……」

『……………』

なにになになに。前振りか怖いんだけど!

「……………ひよつとすると、あなたはとんでもない職業クラスを得てしまったの

「かもしれません」

「とんでもないって……具体的に？」

「すでにとんでもない事になってるのにこれ以上があるの!？」

「そうビクビク構えている俺に……シャティは言いにくそうに、本当にとんでもない事を言ってくれた。」

「えくと……です、ね？ もし、その職業……クラス……ファイメール女を極めてしまった場

合、なのですけども……。ただでさえミサオ様は魔王を倒した優秀な戦士ですのに、その職業によつてとおつても貴重な存在になつてしまった可能性がありました……その……」

「う、うん。いいぞ、言ってくれ。出来れば一思いに」

「わ、わかりました!」

気分は断頭台前の囚人である。何も悪いことしてないはずなのに、言葉の刃のギラつきを感じずにはいられない。

そして、言葉の刃は振り落とされた。ギロチン

「ミサオ様はこれから、世界中から貞操を狙われることになるかもしれませんね!」

シャティ。一思いには言つたけど、明るくサムズアップつきで言われても俺のダメージは軽減されないツ!!

11話▶それってなんてエロゲ?〜呪いと祝福がほぼイコール

「チョットイミガヨクワカラナイ」

え、いや……マジで意味わからないんだけど? ていそう……貞操???

吐き出す言葉が片言になってしまう程度には衝撃を受けた俺の頭には、現在ヒヨコが二、三羽ほど飛び交っている。ぴよぴよしている。美少女から「世界中から貞操を狙われちゃうぞ☆」なんて言われる経験、一生しなくていいんだけど!?

まったくご褒美でもなんでもないんだけど!?

『優秀、というのも考え物だね。僕の役割が横取りされちゃうじゃないか。せつかく呪いナビゲーターの初仕事だったのに』

どこか不満そうな魔王の声。

気づけばノイズは随分減っていて、もともと声だけでも感情豊かな奴だったが更にそこに含まれた感情を察するのが容易になっていた。特にうれしくは無えよ。

つーかよお……!!

(テメエさつき祝福とかなんとか言ってたじゃねえか!! それがなんで貞操を狙われるとかいう話が出てくるんだよ!?)

『祝福だし、君が僕の呪いによって手に入れた職業は間違いなくチートだよ。だってその力を極めたら、世界中が君の虜だ。僕をも倒せる力を有した上で求心力まで手に入れたら、それこそ最強。……………世界征服も夢ではないくらいにね』

「はあ!?!」

つい声が表に出してしまうが、シャテイ達はそれがたつた今言われた事に対しての驚きだと思ったのか、特に不思議がつてはいないようだ。

あ、危ない危ない。魔王へのリアクションは表に出ないよう気をつけなければ。

「驚かれるのも無理はありません。……しかし不覚です。ガーネットに言われるまで気づきませんでした」

「私も微弱なものとはいえ魅了眼持ちだからね。多少の耐性があるのさ」

「ねえ、二人とも。どういうことか、私達にも分かるよう説明してくれないかな？ 当のミサオも困っている」

訳知り顔のシャティとガーネットにアシユレが問う。

彼女はさりげなく俺を落ち着かせるように背に手を添えてくれたのだが、剣だこで固くなっている頼もしい掌にうっかりときめきそうになる。

いや耐えろ、俺。今その感覚は危険だ。

ちなみにモモだが、話に興味がないのか、それとも少し難しいのか。俺のそばに身を寄せて先ほどのように俺の匂いをかいではごろごろ鳴いている。……猫かな？ 獣人の特徴としては狼と兎のはずなんだけどな……。

シャティはそんなモモの頭を撫でると、少し困ったように笑った。

「モモは鼻がいいですからねえ。直に影響を受けてしまっているようです。今のミサオ様はマタタビのようなものなので」

「お、俺って今なにか臭ってるの？」

少し焦って体の匂いを嗅いでみるが、自分では汗の匂いしか感じられない。

「ええ、とても香っておりますわ。すごくいい香りです……うふふ」

「しゃ、シャティ」

さつきまで冷静だったのに、すいっと近寄ってきて俺の首元に鼻を寄せるシャティはうっとりとした表情で頬を染めている。部屋での様子と同じだ。

「シャティ、ミサオが困ってる」

「ああんつ、アシユレのいけず〜」

「はいはい」

どうしようかと困っていると、アシユレがシャティを引き剥がしてくれた。助かる。

嬉しいんだけど、美少女たちとの急な接近で俺の心臓がちよつともたない。今は別のことでドキドキしているのもあって、かなり情緒は乱れている。

シャテイやモモをこんなふうにして、俺が世界中から貞操を狙われる力ってなんだよ……！ 得体が知れなくて嬉しいどころか怖いわっ!!

「え、えへへ。失礼しました。……まだミサオ様が女性になって数時間ですからね。もう少しすれば慣れて落ち着きますわ」

「本当に？」

「ええ、多分」

「多分なんだ……」

不安に眉尻を落としていると、シャテイは気を取り直すようにひとつ咳払いをした。

「ごほん。まずミサオ様が取得した【職業クラス・フェイメイル女】には常時発動型技能スキルがあると思われませう」

「常時発動型って……」

「【魅了チャーム】ですね」

「ぶっ!?!」

魔王から魅了がどうのこうのと先に聞いてはいたが、いざ言われるとむせる。

つまり、やっぱりみんなの様子がいつもと違ったり……あとクソ馬鹿阿保魔族に迫られた理由はそこにあるってことか……。じゃないといくら角を折ったからって、いきなりあんなことしてくるのはおかしい。

クソツ！ 女の子にだけ効いてくれたらいいのに！

しかし俺の疑問を察してか、シャテイはゆるく首を横にふった。

「……ですが、ミサオ様の職業階級クラスステージはおそらくまだ序階。魅了と言っても、そこまで強い力ではありませんわ」

「だね。せいぜい元からミサオが好意を向けている、もしくはミサオに好意を向けている相手の印象を良くしたりするくらいさ。だから



街中でいきなり襲われたりはしないだろうから、安心おし」

『あまり僕の役を奪わないでほしいなあ』

魔王が不満そうな声を発するが、聞こえていないシャティはそのまま説明を続ける。

「ご存知の通り職業は最高で十の職業階級まで確認されています。ですが階級が上がったとしても、それは階級が上へ行けば行くほど維持することが困難。上位階級を維持している者は世界でも少数です。ここまではよろしいですね？」

おさらいするように述べていくシャティは、冷静であれば良き教師なのだ。

俺はこくりと頷いて続きを促した。

「ミサオ様の場合、ご自身そのものの身体的な強さと、一度上がった職業階級クラスステージが下がることはありません。これは過去の英雄の中にも何人か現れた特性です。しかもミサオ様の成長速度は異常なほど。これだけでも特異……わたくしも探してはりましたが、まさか本当にお会いできるとは思っていませんでしたわ」

俺のレベルアップというチート、ここだけ聞けばめっちゃやくちや便利なんだけどな……。

そしてシャティだが、彼女はこの特徴を持った英雄になりうる存在を探して旅しており俺に行きついたそうだ。なんでも一族の使命らしい。

そんな風に俺がシャティの話に耳を傾けている時だ。

『……。暇だし、職業についての専門的な話は彼女に任せて僕からはメス堕ちポイントについて話そうかな。これは僕にしか出来ない説明だし』

(今!?)

『今』

ここ、こいつ！ 自分が暇だからって大事な説明聞いている時にもう一つの重大な説明を同時進行する気か……!?! なんてマイペースな！

『ええとね、メス堕ちポイントが溜まる条件は大きく分けて三つ。さつき軽く述べたね。一つ、何かに心をときめかせる。二つ、肉体的

な快楽を感じる。三つ、母性を抱く。この辺の判断基準はけつこうがばがばだけど、それに関しては僕に文句をいわれても仕方ないからね？ 職業クラスそのものが”経験値”として判断しているものだから、いわば世界の意志さ。システムと言い換えた方が正確かな。少なくとも僕はそう捉えている』

(まてまてまて！ ま、魔王！ ナビの役割ととられて不満なのは分かっただけど、お前の話はあとで聞くから！ 頼むから今はこれ以上の情報を俺に詰め込まないでくれ！ 目の前の事を受け入れるだけで精いっぱいだから！)

シャティの説明を聞くだけでいっぱいいっぱいなのに、副音声みたいに同時に二つの声が聞こえたらどっちに集中していいかわかんなくなるだろうが!!

普通なら魔王の方を無視すればいいけど、今は俺の知りたかった情報を話しているので軽率に無視も出来ない。

俺がプライドを捨てて心底頼み込むような態度を見せると、魔王は『ああ、そう』とだけ言って静かになった。

……頬を膨らませてそっぽを向いているように思えるのは、気のせいだろうか。

こいつ自分の役割をとられて拗ねたり、結構精神的にはガキだよな。

「ミサオ様、大丈夫ですか？」

「あ、ああ。うん。続けてくれ」

俺の内心百面相が表にも出ていたのか、シャティが心配そうに顔を覗き込んでくる。

とにかく！ 魔王も静かになったことだし、きりがいいところまで聞いちまおう！

俺は心が変わりと瀕死ながら、話の続きを促した。

「本当に、くれぐれもご無理はなさらずに」

「ありがとう、シャティ」

「……続けますね。ミサオ様はすでに職業クラス剣士を七階級まで昇級させています。たった五年でその域に達することは奇跡といって良い

でしょう。……その例を顧みると、このまま【職業：女】を保持したままの場合、女子力が溜まることに他の所持職業と同様に昇級してきます。そしていざれ行きつく先の最高階級が問題なのです。……なんだと思いますか？」

「女の最高職……？ うーん……。アシユレ、分かる？」

「女性そのものを職業と定義する上での上位職か……。ごめんね、ミサオ。私にも想像がつかないな」

「だよな」

アシユレ同様、俺も首を傾げる。

職業は階級ごとに呼び名が変わったりもするが……【職業：女】つてのがそもそもわけ分からないのに、その上位階級がどんなものかなんて想像できねえよ。

早々に考えるのを諦めて答えを聞こうとシャティを見るが、先に口を開いたのはガーネットだった。

「私も【職業：女】なんてのは初めて聞くんだけどね。……あるんだよ。今のミサオの特徴に似た魅了の技能スキルを持つ、最高職の記録が」

ガーネットが補足するように述べると、シャティが頷く。

「ええ。……最早おとぎ話や伝説と言っても良い存在。しかし確かに存在した職業クラス」

もったいぶっているのか、言うのを憚はばっているのか。

シャティは少々の間を置いた後……その名を告げた。

「【職業クラス：女神アーケレディ】。功績と名前だけが知られており、そこに至るまでの下位職業が謎とされてきた超レア職業クラスです」

【職業：女神】  
クラス アークレディ

その名前と意味が翻訳され俺の中で合致した時、目が丸くなった。だって……神様アツ!?

そこからのシャティによる説明は怒涛だった。

「これまでの歴史上、人類の危機……厄災の魔王が呪いを成してしまった後に人族の中から現われ、衰退した文明に救いをもたらした、という記録が残っています」

スケールいきなり大きくなったし。

「魅惑の瞳で人々をまとめあげ、甘い香りが導しるべとなった。甘露なる体液は恵の証」……といった具合に、存在を伝え聞いております。彼女を迎え入れ子を成した種族は、今？榮している全種族の祖先と言っても過言ではありません」

なんか存在がエロいし。

「なのでミサオ様がそこへ至る可能性のある職業クラスを持つていると知られたら、我先にとミサオ様に子を産んでもらおうとモテモテになっちゃうわけですね！ どちらにせよ職業クラスステージ階級が昇級して魅了の力が増したら、そんな事実知らなくても男女両方寄ってくる可能性も大きいわけですが！」

その説明が俺の持つてる職業に関するものだって認めたくないし  
!!!!

なんなんだよその職業————ツ  
!?!?!?

「待つて待つて待つて！ それ、本当に!? 本当にこの職業がランクアップしたらそんな事態になっちゃうの!?!」

「可能性はかなり高いですね」

言い切った〜！ とばかりに額の汗をぬぐうシャティだったが、俺としては心構えをしても到底受け入れられない事実をねじ込まれパニックである。

なに、いい香りがして体液が甘くて全種族にモテモテになる可能性のある存在って、エロゲか何かの設定？　そして今現在その存在は俺だよ！

これが男の時だったらいい。世界中から美女が俺との子供が欲しいって押し寄せてくるってことだろ？

でも！　今！　俺は女なんだよ体だけ！！

ってことは……………！

あまりに怖気立つ想像に、ざっと血の気が失せた。

『ほぼ全部言われた…………』

青くなる俺をよそに、ぶすくれた様子を隠もしない魔王。

『…………ま、だいたい彼女が言ったとおりだね。伝説の神になれる職業なんて、チートそのものだろう？　魅了だけでなく、他にも便利なスキルが盛りだくさん！　神だからね。君のような柵チートから牡丹餅チートを得ただけの凡人がそんなものになれるんだ。すごいだろう？　結果的にはいえ、この祝福呪いを与えた僕に感謝してほしいものだよ。ねえ？』  
相変わらず腹の立つことしか言わない奴だが、俺は怒鳴りつける気力も湧かず、へなへなと力が抜けた。

(い、いらねえ〜!!)

そこまで逸脱した存在になりたくねえし、しかも男に戻れなくなる  
こと前提なんだろう!?

マジいらねえ!!　俺は男として女の子といちやいちゃしたいんだよ!!　まだ相棒を一回も使っていないんだぞ!?　なんだよこの悲劇！  
最悪だ！　祝福どころかシンプルにただの呪いなんだよクソがツ

!!!!

『ちなみにこの職業に関しては、僕意外に溜まった経験値や昇級を確認する方法はないと思うよ。その有翼族にもせいぜい職業の名前を見るまでが精一杯さ。僕の呪いが結び付けている職業だからねえ。…………だから説明役は取られたけど、僕が呪いナビであることに変わりはないから、よく覚えておくように』

奴はそう言つてクスクス笑うと、おまけとばかりに俺を更に煽り散らかした。

『よかったねえ、ミサオ。この職業を極めれば、ちよつとお目にかかれ  
ない規模のハーレムも夢じゃないよ。チートハーレムってやつだ。  
嬉しいだろ？ 喜べよ！ さあさあ、這いつくばり地面に頭を擦り付  
けて僕に感謝をしたまえよ。おめでとう！ おめでとう!! あーっ  
ははははははははは！』

(この邪悪の化身があああああああツツ!!!  
!!!)

魔王による祝福は、やっぱりただの呪いだつた。

畜生が！

見てろよこいつ。俺は絶対、男に戻つてやるからな!!

12話▶真夜中の女神く普段結ってる子が髪の毛おろしてるとめちやくちやときめく

「んお……暗い」

重い瞼を持ち上げれば、見上げる天井は夜闇に染まっていた。

シャティと魔王の説明の後、つめこまれた情報量にパンクした俺は早々に寝て休むことにした。キャパ越えした情報量の処理には寝るのが一番だからな……。

そのおかげもあってか、ほんの少しだが脳みそがスッキリしている。なにも解決はしてねえんだけどな！

ちなみに今着ている服だが、不憫に思った宿の店主が亡くなった奥さんの服を貸してくれた。ありがたすぎて足を向けて眠れない。宿の一室が破壊されたというのに、懐がデカイお人である。

部屋の修理代は当然出したが、次にあの馬鹿魔族に会ったら身ぐるみ剥いでも金をむしり取ろうと思う。冒険者として結構稼いでる俺としては懐が痛む額ではないが、それとこれとは話が別なのだ。

……にしても濃い一日だったな。

朝一番で魔王を倒しに出発して。

死闘の末に魔王を倒して。

その日のうちに女になったり魔王に寄生されたり魔族に襲撃されたりたり初チューを経験したり。

………とんでもない職業を取得してることを知ったり。

………。

これ、頭パンクしても仕方ないよなア!? 一日に体験するイベントの量じゃねえんだよ!

普通魔王退治だけで腹いっぱいだわ!! つーか疲労の元凶が突き

詰めると全部魔王！　がああああッ！！

戦いはかなりきつかったものの、奴を倒せる自信も確信もあった。だつてのに魔王退治の代償が斜め上すぎだわバーカ！　勘弁してくれ。

「あー……だるい」

すっかり寝たものの、そこまで長い時間は寝ていないため倦怠感が残っている。

新たにあてがってもらった部屋に戻り夕方から爆睡して、今は真夜中みたいだな。月明かりが妙に明るくて、少し目が慣れると部屋の中を見渡すには困らなかつた。

耳を澄ませても、宿の中も外も静か。酔っ払いの声も聞こえないってことは本当の真夜中だ。……変な時間に起きちゃったぜ。

昼間の襲撃で騒ぎになったと思うんだが、この時間まで眠れたつて事は仲間たちがうまく対応してくれたようだ。

おそらくシヤテイとアシュレあたりが、町の人や冒険者ギルドに説明してくれたんだろう。

自分の事で手いっぱいだったとはいえ、一番面倒な部分任せちゃまって悪かつたな。……あとでお礼言おう。

サイドテーブルの水差しからコップに水を注いで口をつける。喉がカラカラだったからめちやくちや美味い。

……少々お手洗いに行きたくはあるが、自分の体を見下ろしてまだ我慢できそうだしと尿意に気づかないふりをした。

日常の行動ひとつひとつに覚悟が要りすぎるのマジで嫌だな！

寝汗もかいちまったし、少し夜風で涼むか……と部屋を出てそくと歩く。本当にド深夜らしく人の気配がないから、音をたてないように気を遣うんだよ。

静かすぎて廊下のわずかな軋みさえもよく耳につく。

(あれ)

窓から差し込む月光に照らされて、宿の共同バルコニーへ続く廊下に誰かが居ることに気が付いた。

それが最初誰か分からなかつたのは、いつもの髪型でなかつたから



だと思う。

「……ミサオ？」

「ああ、アシュレか」

声を耳にしてようやく理解する。アシュレだ。

丁度バルコニーへ出る扉が開いていて風が吹き込む。普段はきつちり髪を結っているアシュレだが、今はそれがおろされて……青く長い髪が、ゆるりと舞った。

その様子はアシュレの背後から降り注ぐ神秘的な月光も相まって、女神になる可能性を秘めた職業を取得している俺なんかよりずっとずっと女神のように見えた。

風呂上がりなのかいい香りも風に乗って流れてきてドキツとする。

(あ、やべっ)

ときめきはメス堕ちポイントになるのでは!?! と一瞬身構えたが、あのふざけた音は鳴らなかった。そのことにほっと息を吐く。なんだよこの緊張感。

『僕にも基準は分らないけれど、どうも心のときめき全てがポイントに換算されるわけではないようだ。あ、普段髪を結ってる子が髪おろしてるのっていいよね。かわいい』

(同感だが今の今までお前が居る事忘れてたからふと感じた仲間へのときめきも台無しだよ!)

これまで言葉を発しなかっただけで、魔王はやっぱり俺の中に居るらしい。静かだから魔王寄生のあれこれはもしかしたら夢かもと期待してたのに!

『ひどいなあ。僕らは一心同体の相棒だつていうのに』

(やめろやめろ。相棒? 一心同体? ふざけんな。お前はただの寄生虫!)

『でも考えることは同じだろう? 今のとか』

(知識のベースが一緒だからだよ同郷者! それ以上でも以下でもない!)

「ミサオ、どうかした? 体調でも悪い?」

……あつ。

話しかけられてから、慌ててアシュレを見た。

魔王と話していると現実とのタイムラグが発生するのだ。畜生やっかいな!

名前を呼んだまま黙り込んでたら感じ悪いよな。

「ごめん、ぼーつとしてた。起きたばかりで寝ぼけてるみてえだ」

「そう。ならよかった」

一瞬焦ったが、アシュレは特に気にしたふうもなく微笑む。そして外に視線を移した。

「いい夜だね。ほら、月が綺麗だ。……今のミサオの瞳に、少し似ている」

「そ、そうか?」

「うん。今日の月は低くて大きい。そんなときは少し赤みがかって見えるから、ちようど変化した君の瞳と同じ色だなと。……月を見ながら、ミサオを思い描いていたよ。美しいと」

「美しい!? おいおいアシュレ、女になったからって俺にそんな世辞使ってどうすんだよ……って、月が、な。ははっ」

一瞬ぎよつとしたが、思い出していただけで美しいの対象は月だよなどと思なおす。は、恥ずかしい勘違いをした。

「君も美しいよ? ミサオ。……これ、お世辞じゃないんだけどな」

「またまた……」

さらっとそれを言えるアシュレすげえよ……。

あれかな。昼間から妙に俺に対しての対応がいつもより優しいなって感じてたけど、これも魅了チャームの影響だよな多分。勘違いしそうになつていけない。

俺がどぎまぎしていると、すつと導くように手を取られた。

「色々あつて疲れただろう? 良く寝たようだし、外へ出ないか。少し風にあたるといい。……ああでも、そのためにここに来たのかな?」

だとしたら邪魔をしてしまったね。一人で考えたいだろうに」

「いや、アシュレが居てくれて助かる」

一人になりたくても姦しい奴が頭の中に居て一人になれないからな!

だったら気心知れた仲間と話す方がずっといい。

「ふふっ。ならっ」緒してもっ。レディ」

どこか嬉しそうなアシユレは悪戯っぽく笑うと、自然な動作で俺の手の甲に口付けた。

「!? お、ちよ、おま、アシユレ。そういうのやめろって！ レディじゃねえし！ いつもそんなことしないでくせに、その、なんだ急にびっくりする」

「あははっ。ごめんごめん」

「……あ、あれか？ 例の魅了ってやつの影響か？」

恥ずかしいくらいに慌ててしまつて、それが更に恥ずかしさに拍車をかけた。

それを誤魔化すように早口で問いかける。

「魅<sup>チャーム</sup>了か。……ちようどいい。そのことで少し話したいことがある」

アシユレは少し困つたように眉尻をさげると、俺の手を引いてバルコニーへ出た。

もう……あれだよな。エスコートが様になりすぎてて、気づいたらされてるって感じた。同性からもモテるわけだよ。

そう。

アシユレは女の人からめちやくちやにモテる。

俺の百倍モテる。

それは顔の良さに加えて、平然とスマートなエスコート仕草が出来るからだと思う。いつもよくさらつとそういう事ができるよなあと感じてたが、いざ自分が受ける側になるとかなり照れるぞ、これ。

普通なら滑って様にならないようなことも、アシユレがすると似合うのだ。

多分それは洗練された動作や話し方、落ち着いた声のトーンなどが影響している……と思う。

アシユレって冒険者とかいう荒事が多い仕事を長く続けてる割に、育ちの良さが滲んでるんだよな。

なにより、彼女は相手との距離の取り方が上手い。けして人が嫌がるパーソナルスペースを侵さない上で、適度な位置から好意を示すのだ。

相手が触れてほしい、触れても構わないと思っっている場合はその距離が近くなる。その絶妙な判断を素でやるからすごいよ。

距離をとるだけなら誰にでも出来るけど、もうちよつと近くに居てほしいなって時に触れられたらドキツとするよな。そりゃモテるって。

でもって今、俺は我ながら不安を抱えている。そんな時に触れられた手は温かくて、かなり安心感を抱いた。

ガーネットとはまた違った包容力である。

冒険者としての先輩である彼女は、やっぱり頼れる存在だ。

……これまで一度もここまで柔らかい対応で優しくしてもらった事は無いけどな！

頼れるけどめっちゃくちや厳しく指導されてたよ！

や、やっぱり魅了の効果か？ それとも単に俺が女の子になったからか!?

『あつはっは。複雑な感情に迷走しているねえ』

(これも聞こえてんのかよもうヤダお前)

俺の赤裸々な気持ち全部魔王に駄々洩れなの、マジでなんの罰ゲーム？ 薄々感づいてたけど、この様子だと話しかけなくても全部聞こえてるじゃん俺の内心。この悪霊どうすれば駆除できるんだ。

そんな俺の考えも聞こえているだろうに、魔王はマイペースに自分が話したいことだけを話す。

『ああ、そうそう。魅了は職業階級クラスステージが昇級したら、ある程度の制御は出来るようになるよ。その分、発動時の魅了力は増すけどね。制御したかったら頑張って階級をあげるといい』

(真に受けたら本末転倒な事とお前が特にそれを隠す気も無いことは分かった。弄びやがって！ あのな、制御するために男に戻れない状態に近づいてどうすんだよ!!) とかだな、これから大事な話があ

るっほいから少し黙っとけお前。できれば永遠に沈黙しててほしいけどな！)

『えく？ つれないことを言うなよー』

(かわいい子ぶってんじやねえよ)

『文句が多いなあ。うーん……そうだね、五分くらいなら黙っててもいいけど？』

(短けえよ！)

『お願い聞いてもらえるだけありがたいと思っただら？ ……あ、そうだ。彼女と話すのなら、面白いものを見せてあげようか』

(は？ 見せるって何を。というか、どうやつ)

言い切る前に、脳内に鮮やかな映像が再生された。

!?! なんだこれ！

~~~~~

『……ですが、ミサオ様のクラスステージの職業階級はおそらくまだ序階。魅了と言っても、そこまで強い力ではありませんわ』

『だね。せいぜい元からミサオが好意を向けている、もしくはミサオに好意を向けている相手の印象を良くしたりするくらいさ。だから街中でいきなり襲われたりはしないだろうから、安心おし』

~~~~~

シャティとガーネットの声だ。これはついさっきの出来事みたいだけど……俺が見ていた視点じゃないな？

ってことは……。

『どうやら、僕が見たものをリプレイして君に見せることが可能らしくてね』

(なんだよその機能！)

『便利でいいだろ? ところでこれ、君はどう思う?』

魔王の視点だというそこに映っていたのはアシユレ。

目を見開き、普段の冷静沈着な彼女からは考えられないような表情で俺を見ている。頬は赤く、口元を手で押さえていた。

それはまるで、少女漫画かなにかの恋する乙女のように……。

……え!?

(おおおおおおお、落ち着け俺! これは! 勘違いだった場合恥ずかしいやつだ! 落ち着け! これは魔王野郎のなにかしらの策略だ!)

しかしそんな思考とは裏腹に俺の鼓動は激しく高鳴っていく。同時に自分に都合のいい想像で期待する感情もこみ上げてくるが、勘違いだったら恥ずかしいので必死に蓋をしようと試みた。

でもこんな可愛い表情見せられたら期待しちゃうじゃん!? なんでももの見せるんだ! これ本当にさっきの出来事の映像か!? 捏造してたりしないか!?

……そして件の魔王だが。

こんなものを見せておきながら、俺に冷水をぶっかけることも忘れなかった。

『ちなみにさつき手の甲にキスされた時もしっかりメス堕ちポイントたまってたからね。いい雰囲気だったから、空気を読んで音量下げたおいた僕を褒めてくれていいんだよ?』

(デメエあつ!!)

やっぱり迂闊にときめけないだろこの状態じゃ!

(でも話って……なんだろう)

俺は内心で張り上げた怒声でわずかばかりの冷静さを取り戻しながら、俺の手を引くスパダリ系女騎士の背中を期待と不安でもって眺めるのだった。

### 13話 ▶ 月夜の告白く俺のパーティの女騎士が河愛 くてイケメン過ぎる

メス堕ちポイントが新たに溜まっていたことにキレつつ、アシユレに向き合うために息を整える。

もしこの内心が表に出たら、俺一人でわちゃわちゃやってるだけの  
変な人だからな!!

.....

.....

.....!!

(だ、ダメだ。アシユレに向き合おうとしたらそれはそれで緊張して  
きた！ なに、あの表情!! めちゃくちゃ可愛かったんだが!?)

結局落ち着かない俺である。

しかし「話はある」と言っていた当のアシユレはバルコニーへ出た  
後、月を眺めたまま口を開かない。

俺は戸惑ったまま、その端正な横顔を見つめた。

鎧をまとっていない今はそのほっそりとした顎や首筋が良く見え  
て、いつもより女性みを感じる。.....やっぱり、美人だよなあ.....

そういえば出会った頃、アシユレは兜で顔を隠していた。

初心者冒険者だった俺は「強そう！ 頼りになりそう！」って鎧姿  
のアシユレを男と勘違いしてパーティに誘ったんだけど、ごつい兜の  
下から涼やかで綺麗な声が返ってきて驚いたものである。

実際アシユレは強いしめちゃうくちや頼りになったんだけど、最初か  
らこの素顔を知っていたら照れて声かけられなかった。

今だって毎日見て見慣れても、こうしてよく見惚れてしまう。

でもって、そこそこ長い付き合いになるアシユレなわけだが.....  
彼女はいつだって余裕があつて落ち着いていた。

だからこそさつき魔王が見せたアシユレの様子には驚いたわけで。



……つい、俺に都合の良い考えが浮かんでしまう。いくら自分を戒めても、引つ込めて蓋をしたはずの考えはどんどん膨らんでいる。

た、ただ……！ これは己惚れると、違っていた時になかなか痛い。いや、なかなかどころじゃねえな!! 大事故だよ!!

(こ、ここはさりげなく！ さりげなく、探りを入れるんだ……！) 俺は部屋で休む前に「ミサオ様は癖毛ですし、そのまま寝たら盛大に暴れると思いますよ。なので緩めに結っておきますね。わたくしとおそろいに！」とシャティに結ばれた三つ編みを手慰みにいじりながら、ちらちらとアシュレの様子を窺った。

そして意を決して口を開く。

「そ、そういえば！ その、魅了の力って今のところ俺が好きな相手か、俺の事を好きな相手にしか効かないって話だったろ。俺はアシュレの事好きだからさ。それでいつも厳しいアシュレが優しくしてくれたのにな……なんて」

『もしもの時、冗談ですませるための保険みたいに「なんて」とか「なんちゃって」とか最後につけるダサイ奴っているよね。あと全然さりげなくないからな?』

(お前マジでちよつと黙っててくれ)

『でも五分経ったよ』

(早っ!?)

この魔王、一応律儀に五分は待っていたらしい。けどそれはそれ! ここは空気読んで黙っておくべきだろ!?

そういきり立つ心を押さえて我ながら曖昧でへらへらした笑みを浮かべて、今は頭一つ分以上高い場所にあるアシュレの顔を見上げた。

……聞くにあたって必要だったから好きとか言っちゃったけど、好きの種類がライククラブかってのは分からない感じに言えたよな?

俺。

まあ俺がアシュレが好きだって事は本当なんだし、どんな受け取られ方をしても俺に損は無い。最悪、的外れてあっても気まづくなることはないはずだ。

『マジでクソ雑魚ヘタレじゃん、君。僕に魔王としての格を求めながら自分はそれなんだ？ ショックだなあ。僕を倒した英雄がこんな奴だなんて。やあ、ぎーぎー』

(だからお前はよお!!)

『しかも半魔の彼女に筆おろしとか頼んでおきながら、女騎士のことも好き？ うわあ……って感じだね』

(しようがないだろあんな美女美少女に囲まれて好きにならない方がおかしいだろ!! みんな性格だっていいんだぞ！ 頼もしいし！)

『ふーん。ほーん。へー。みんな好きなんだ』

(あぐっ)

言い訳みたいに言葉を重ねる俺に対して魔王は白けた声を出すばかり。

俺は思考が隠せない分、どんどん墓穴を掘る。墓穴っていうか、もう墓穴を地下に突き抜けて地獄の五丁目くらいだと思っ

(……と、今はこいつに構ってる場合じゃなかったぜ)

俺はビークールを己に言い聞かせ、アシュレの言葉を待った。

アシュレは俺の言葉を聞いてから、やっとな涼しげだった表情をわずかに崩した。少し目を見開いて俺を見つめている。

その視線はしばらくさ迷ったが、最終的に俺へと定まった瞳の色に迷いはなく。……真摯な光を宿したアメジスト色に縫い留められて、少し緊張する。

「……。ミサオが私を好いてくれているのなら、嬉しく思う」

そう口にしながらかアシュレが距離を詰めてきたので、思わず後ずさると壁に背がぶつかった。

でもって、顔のすぐ横の壁にアシュレが手をつく。

(こ、これは!!)

ドクンつと心臓が高鳴り。

【メスメロリンっ♪】

知ってた!!

(今こそ！ 今こそ空気読んで音量を小さくしろよおおおッ!!)

『壁ドンにときめいたの？ ベタだねえ。でもベタは言い換えれば王道だからね。しかたないね』

(うるせえバーカ！)

あいでのみさお  
藍染操二十一歳、生まれて初めて壁ドンされる側を経験しました。自分でしたことも無いから真正銘の初体験である。

(うおおああああッ!! あかんあかんあかん！ これ、相手との距離が単純に近いし体全体で囲われてる感じがドキドキする！ うおおお！ これ以上たまるな俺のメス堕ちポイント!! 頼む!! このシチュ自体は美味しいけど、頼む!!)

「あ、アシユレ？」

初壁ドンに挙動不審さを隠せない俺に、アシユレは緩く笑んで口元をほころばせた。

「ミサオの魅了が私に効いたのは、君からの好意だけでなく。……私が君を好きだからだよ。普段から優しくしたいと思っていただけ、上手いかなかった。それがどうやら、魅了の力で緩んだらしい」

壁ドンというイケメン仕草をしておきながら、それを口にしたアシユレは……どこまでも乙女らしい、可愛く照れた表情をしていた。

そしてそれを直視した俺が耐えられるわけがないのである。

だって……だって!!

(よっしやあああッ!! 勘違いじゃなかったああああああああああああああ!!)

『うわッ!! ミサオ、うるさい。思考がうるさい!』

(はあ!? 俺の内心だぞ文句言うなら出てけ! f o o o a o o o o  
o  
『うっせ!』  
!!!!!!!)

(へへーんだ! なんでも言えー!)

アシュレの言葉で一瞬にして俺の内心がお祭り騒ぎになる。魔王の言葉も今は微塵も気にならない。

うおおおおお! 宴だー!ー!ー!

あの時のつて、やつぱりそういう!? え、マジ!?

あれってあれってそれだろ!? 隠してた好意がバレて照れたとかそういうやつだよな! 俺はそういうの詳しいんだ! 漫画で読んだ!

『ちよつと……。君、そういうのやめてくれない? なんだか共感性羞恥で僕まで恥ずかしい』

(はあ〜? そういうのってなんだよ)

『漫画で読んだとか、そういうやつ! この童貞オタが』  
(……………)

一瞬でフイバータイムの俺を冷静にさせるとはやるじゃねえか魔王……。スンってなったわ。

思いがけずダメージを負って俯いていると、すぐ近くからアシュレの落ち着いた声。

「あんな形で自分の気持ちが露呈するとは思っていなくてね。君は自分の事で手いっぱい、気づかなかったようだけど。……顔にあんな熱が集まったのは初めてだ。ふふっ。このまま黙っていても、そのうちバレると思ったから。それならと、自分の言葉で伝えたくなったんだ。……私は運がいいね。そう考えていたら、寝ていた君が起きてきたんだから」

「えつと……」

「いきなりで驚いただろう? 君の言うように、私はどちらかといえば君に厳しく接してきたからね。……ただ、今はそのまま話を聞いてほし」

「う、うん」

されるがままというか流されるままというか。

完全にリードを奪われていて、我ながらこれでいいのか？　と思いつつ頷いた。

「まあ、厳しく接したことはしようがないと思ってくれ。君は調子に乗り易いしすぐ油断するし、力を傲慢に振りかざすこともあった。しかも女性に対しての視線がだらしなくて不躰だ。先ほども落ち込んでいるくせに私たちの体を舐めるように見ていただろう？」

「う、それは……」

「どこを見られているか。そういった視線は、案外わかるものだよ」

それはちよつとわかる。さつきモモの服を着ていた時、あの魔族野郎が破廉恥破廉恥言いながらしつかり見るとこ見てたからな。あれは分かる。

「けど、突然十六歳の少年が今まで生きてきた世界から切り離されたんだ。どうにか正気を保とうと、降ってわいた力にすぎるのも無理はない。それが傲慢さにつながるのも、経験が足りない若さゆえだ。だから厳しく接しても、私が君を嫌ったことは無いよ」

「そ、そっか。へへ……」

ここにきて急に今までの、それこそ黒歴史に該当する自分も認められたような気がして嬉しくなる。

「……それにね、ミサオ。君の力は簡単に言えば「急速成長」と「強さの維持」だろう？　たとえどんな簡単に強くなれたとしても、踏み出す一歩がなければ宝の持ち腐れとなる能力だ。だが君は、多くの困難に立ち向かった。そしてついには厄災の魔王すらも倒したんだ」

「それは……それは、アシユレが仲間になってくれたからだ。俺一人だったら町の周辺でスライム狩りでもして、安全の範囲内で経験値をかせいでたぜ。だけどアシユレが仲間になって色々教えてくれたから、いろんな場所へ行けたし、たくさんの経験を得られた」

認められていたのは嬉しいが、妙に過大評価されてるような気がしてこそばゆい。だからそれ以上言われる前に、事実を口にした。

本当に、きつと一人じゃ色んな事が無理だった。それくらいは俺

だって分かってる。

「そう言ってもらえるのは光栄だね。しかし、だとしてもだ。たった五年で魔王をも倒せる力。それを身につけられる力は破格だが、成し遂げるための経験を積んできたのは……紛れもなく、ミサオ自身の力だよ。特別な力だけで、今の君があるわけじゃない」

「……！」

ストレートな褒め言葉にどう答えていいか分からなくて、口をもごもご動かすしか出来ない。

俺はいつだって褒めてほしいし、出来ればちやほやしてほしいけど……。いぎ直球に来られると、恥ずかしさが上回った。

これでは魔王にヘタレと言われても仕方がない。

そんな情けない俺の頬にアシユレの手が添えられ、優しく上向かされる。

俺の瞳に似ているという月が浮かぶ夜空を背景に、アメジスト色の瞳と視線が絡まった。

「そんなミサオが危なっかしくて、放っておけなくて。……見ている内に、愛しくなった」

ゆっくりと、しかし力強く告げられる。

そして。

「私は君を愛しているよ。魅了の力などなくともね」

感じるのは慈愛と包容力。

「もしこのまま女性でも、男に戻れたとしても。私は君自身を愛し続ける」と誓おう」

「アシユレ……！」

限界だった。

ぼろりと涙腺のダムが決壊して、俺は無様に滂沱の涙を流し始める。



あの音が!! あああああああああああ!! 助け  
てええええええええッ  
!!!!!!

『あははははは。音量をもとに戻しておいたよ。ちよつと大きくもして  
おいた。親切だろ? 気づかなければもつと溜まっていたんだか  
ら。あ、でも気づいても止まらないか。あつははは』

(狂うわっ!!)

『ほんつと文句が多いよね、君。面白いからいいけど』

魔王にいくら文句を言つてもメス堕ちポイントは俺のバクバク脈  
打つ鼓動と連動するかのようには鳴りやまない。

「そ、それはすまない! 私がかっこよくて性格イケメンばかりに  
! ……とところでイケメンとはどういう意味? ごめん、ミサオの使  
う異界の言葉は時々単語がわからなくて」

「ごめんちよつと今説明する余裕ないから察して! おうあああああ  
!」

鎮まれ! 鎮まりたまへ!

祈祷するように踊り狂うと、だんだんとメス堕ちポイントの音が鳴  
りやんできた。

どうやら感情によるドキドキを身体的な疲労を伴うドキドキが上  
回つたらしい。

だからどうなつてんだよこのシステム!!

膝に手をつけてぜーはー息を整える俺だったが……そこに新たな  
珍客が現れた。

いや、仲間なんだけどな? でも色んな意味で珍でしかなかった。

「話は聞かせてもらいました!」

バサバサバサ! と純白の翼を羽ばたかせ、なんとバルコニーの下  
からシャティが現れたのだ。

え、何!? 今までそこに居たの!? 待つてくれ俺まだいろんなこと  
が落ち着いてない!!



しかしシャティはお構いなしとばかりに、芝居がかつた仕草で胸に手を添え、もう片方の手は舞台女優のように大きく広げた。

「聞いてください！ わたくしもまた、ミサオ様を愛しています！」

「え！」

「そして、アシユレの事も愛しています！」

「は!？」

なに、まさか俺をはさんで修羅場なの？ という想像は秒で否定された。

告白された次の瞬間、別の相手に告白されるとかある???

困惑する俺の手を、シャティが華奢な手で力強く握る。

「ミサオ様！ 世界を救ってくれたあなた様の事は、なにがあってもこのシャティがお守りしますわ。そしてアシユレもミサオ様を愛しているなら話が早いです！ これからもミサオ様と共に歩みましよう！ 愛し合いながら！ ミサオ様の貞操をお守りしながら！」

「シャティ、まずは落ち着きなさい！」

「落ち着いてなどいられませんわ！ 見た様子だとミサオ様もアシユレに告白されて嬉しかったんですよね？ 受け入れるってことですわよね？ 目の前でわたくしの愛する二人が愛し合う。素晴らしいですわ。ですがそれならわたくしも混ぜてくださいませ！ 愛し合う相手が多ければ多いほど幸せだと思いませんこと!？」

「だから落ち着きなさい！」

「あんっ」

そのあまりの勢いに温厚になだめることを諦めたらしいアシユレが、シャティにヘッドロックを仕掛けた。

だがシャティはなんだか幸せそうな顔をしている。……マゾかな？

「……夜中にずいぶん、賑やかだね」

「ママ……?」

どうすればいいかわからずオロオロしていると、あくびをかみ殺しているガーネットと眠たげに目を擦るモモが現れた。

救世主が現れたとばかりに安堵が心を満たすが、にやりと笑った

ガーネットは俺の期待を見事に裏切っていく。

「面白そうな話をしてたね。……なんだつたらあんた達の嫁になるかい？ 私もあんた達を愛してるからさ」

「ガーネットさああああああん!」

これ以上ひつかきまわさないで!! そう思ったが、思わぬ伏兵もいた。

「お嫁さん……? ミサオママがお嫁さんになるの? なら、モモもほしい。そしたら、本物の家族」

「モモ……!」

ぎゅつと腰に抱き着いてそんなことを言い始めたモモ。

可愛いが、同時に脳内で「メスママリんっ♪」とか鳴り始めたことで……再び俺のキャパシティが限界を迎える。

結果。

「ミサオ!」

「ミサオ様!」

「おや」

「ママ?」

人生で初めて、思考回路の破裂で目を回してぶっ倒れた。

『うわ、漫画みたい』

(おめえも漫画どうこう言うんじゃねえか!!)

そんな魔王へのつつこみを最後に、俺は意識を手放した。

## 14話 ▶ 明晰夢く寄生野郎が顔のいいシヨタガキになつたの何

明晰夢。

夢の中でそれが夢だと自覚できるもの。

俺が今体験しているのもまさにそれで、広々とした湖に半分身を沈めている廃墟群の中をぺたぺたと歩いている。

ちなみに歩いているのは水の上だ。

崩れた建物の残骸などが沈んでいるわりに湖の水はやけに透き通っていて、すぐ下を見れば魚の影が横切る水底が見渡せるし、少し遠くを見れば鏡のように夜空を映し出していた。

夜空といつても実際は少し違う。

湖をぐるりと囲うように三百六十度、星の瞬く濃い藍色の夜天から裾野へ行くにつれて、夕焼けのような朝焼けのようなグラデーシヨンで彩られていた。

そんな夜のふもとがぼんやりと明るいから、湖の中や建物の輪郭を見ることができらんだろう。

(でも夢だし、明かりが無くても景色がわかったりするのか)

ぼやけた思考のままゆっくり歩く。

妙に静かに感じるのは、今日一日さんざん頭の中でうるさくしてくれた魔王の声が聞こえないからだろうか。

さすがの奴も夢の中までは干渉できないと見た。

(え、夢だけ？ 夢だけしか俺の安息の地ないの!?)

はたと気づいて、とてつもない疲労感に襲われた。夢なのに。

水面を覗けば昨日まで慣れ親しんでいた男の姿ではなく、見慣れない髪と目の色をした女の自分が映っている。

それを見て疲労感が増すばかりだ。元の体が恋しい……。

クツソ長かった今日一日で、俺の異世界人生ゴールデンロードマツ

プが大きく崩れてしまった。

本当、明日からどうしよう……。

「はあくくくくあああつ」

ため息と声の中間のような半端な音が出る。

今のところ夢も覚める様子は無いし、このまま気分転換に少し歩くか……。

奇妙なところだけど、景色はまあまあ綺麗だし。

「」

「ん？」

自分が発する以外の音は聞こえない。だというのに、誰かに話しかけられたような気がした。

呼ばれたとかでなく、話しかけられた。問いのような色を含んだ、音のない空気の振動。

特に目的もなく歩いていたら、目覚めるまで夢の探検もいいだろう。

自分の夢なんだしと、俺は特に警戒することもなく気配の感じる方向へ足を進めた。

目に映る廃墟群はこの世界に来てから目にしてきたファンタジー色増し増しの建造物ではなく、五年前まで見慣れていた日本の一般的な家屋やビル、電柱がほとんど。時々神社の鳥居みたいなものも見え隠れしていた。

どこかの町の一部を巨人が無造作に掴んでぐしゃっと丸めて、放り投げたような雑多さだ。中には苔むして真緑になっている建物もある。

時折ちやぷんと魚が跳ねて静寂を破る以外は本当に静かだ。

さつき話しかけられたのも気のせいな気がしてきた。実際、声は聞こえていないんだし。

だがあるビルの角を曲がった瞬間。世界が一変した。

「……」

墨汁をぶちまけたような黒に息をのむ。次いで赤の光に心臓を掴まれた。

「

人だ。

黒い帯のようなものが無数に廃墟へ張り巡らされ蜘蛛の巣状になっっているその中心に、瓦礫に王のごとく座した誰かが居た。

よくよく見れば黒い帯は“彼女”の髪の毛だとわかる。あまりに長くて、一瞬そうとは分からなかったけど。

「

ぱくぱくと口が動かしている。しかしその桜色の唇から音が出ることは無く、苛立たしいのか彼女は不快感に眉根をよせた。次いでジロリと俺を見る。

切りそろえられた前髪、白い肌。影を落とすほどに長い睫毛に弓型の綺麗な眉毛。すつと筋の通った鼻に艶のある唇。

普段仲間たちのそれぞれ違った美貌を近くで見ている俺からしてみても、恐ろしいほどに整った容姿だと思った。

中でも湖を囲う黎明と夕日を溶かして流し込んだような、複数の色が混ざり合う赤い瞳はそこそこ距離があるつてのに間近で見ているかのように鮮明で鮮烈で、黒と白の中で映える色が印象的だった。

人形のような少女だ。

それが夢の主である俺を差し置いて、この場の主人だとばかりに足を組んでふんぞり返っている。

(中学生……？ いや、高校生か？)

容姿に気を取られたが、よく見ればその服装は黒いセーラー服だ。

靴も靴下もはいていないようで、素足で組まれた脚を見ているといけないものを見ている気分になる。

……多分だけど、この世界に来た時の俺と同年くらいではなからうか。

「あの〜」

特に話しかける内容も決まっていないのに口を開いたから、その後が続かない。

どうしたもんかと思ったが、これ夢だしなど気楽に構えることにした。

「マジで綺麗だな……」

しげしげと眺めて呟く。特徴として容姿以外で目立つのは、頭に添えられた小さな王冠だろうか。

セーラー服に王冠なんて不釣り合いに見えそうなのに、その場にあるのが当然のようになりきっている。

そうして呑気に観察していた俺だったのだが……ふと瞬いたら、目の前に紅が迫っていた。

「えっ？」

同時に襲い来る衝撃。

「がっ!?!」

ものすごい力で肩を掴まれて水の上に押し倒されたと分かったのは、少女の美貌と空を見上げてからだだった。

体が水に沈むことは無いが、ぎりぎりど掴まれている肩が痛い。

爪も食い込んでいるようで、傷ついた肌から滲んだ血が俺の白い服を汚した。

(おいおいおい、マジかよ！ 俺の体を傷つけられる奴、そうそういねえぞ?! あと、速っ!?)

痛みがリアルすぎて夢だという事を一瞬忘れる。

いや夢かこれ!? 疑わしくなってきた!

瞬きの間に俺に近づいて、そのまま押し倒し拘束している。それを今の俺相手にやってのけるのが、いかに難しい事か。夢とはいえ魔王以外では久しくこんな緊迫感を味わったことがなく、ぶわつと汗が噴

き出した。

少女は端正な容姿を歪めて俺に何かを叫んでいるが、先ほどと変わらず声が聞こえない。

「……のっ」

いよいよ痛くて反撃を試みようとして体に力をこめたが……俺が反撃する前に、ぼたつと顔になにか冷たいものが落ちてきた。

夢の中で初めて感じた明確な温度に、体がビクツと硬直する。

しかも……。ええー!?

(そ、それは反則だろ!)

そう、反則だ。

眉間にこれでもかと皺が寄っているし、歯は剥き出しで眼もきつく吊り上がっている。そんな鬼のような壮絶な表情を浮かべているくせに……少女はぼろぼろと涙をこぼしていた。

女の子に泣かれるとどうしていいか分からなくなる。

掴まれている肩は痛いけど、反撃する気分がしよぼしよぼと小さくなつた。

っーかそんなに水分出して大丈夫か!? ってくらい出てるんだが。

涙ってこんなに出るものだっけ。

……ここは、あれだな。

俺つてもう年齢的にはイケてるナイスガイだし? 成人してるし

? 未成年の恐慌を優しく受け止めてなだめるくらい、こうさ。できるし? お兄さんだからな!

「ふっ、お嬢さん。一体何を泣いているんだい? よければ僕に話してごらん」

出来るだけ優しい声色を心掛けて話しかけてみる。イメージしているのはアシユレだ。なんかちよつと違う気もするけど、まあまあいい感じじゃないか? ふふん。

「」

「うひっ!」

歯をむいて威嚇された。え、今の駄目だった!? ちよつと待って、やり直しさせてくんない!?

なだめるどころか火に油を注いでしまった感が強く慌てるが……その時。少女の頭が何かに引つ張られるようにぐんつと上向いた。そのまま少女の体ごと何かに引つ張られて浮き上がり、どんどん遠ざかっていく。そして彼女はドカツとなかなか大きめの音を立てながら……もといた瓦礫へ叩きつけられるように座らされた。

……自分の髪の毛に。

「

あ、今は分かった。クソツつて言ったぞあの子！ 口の動きでわかる。

俺はじくじく痛む肩を押さえながらゆっくり身を起こす。

これが本当に夢なのか分からず不安になるが、その前に奇怪な動きをした少女を窺った。

見た所あの子は今、廃墟に巡らされた自分の髪の毛に引つ張られた様子だった。まるで生き物みたいに蠢いた髪が彼女を引つ張ったのだ。

普通あんな長い髪の毛あるはずないもん……実は髪じゃない、とか？

……あ、こつち見た。

先ほどは不機嫌そうに俺を見ていたし、その後は憎々し気とまで言える目つきで俺を押し倒した少女。

だってのに、今度はしばらく俺を眺めた後……ぽかんと目を見開いて、しばし考え込み……ぽんつと手を打った。

次に浮かべた表情は、あで艶やかな微笑。

「……っ」

それがあんまりにも綺麗で、さつきあんな目にあわされたのに心臓が脈打つ。『チヨロさの化身なの？』とかいう魔王の幻聴が聞こえたような気がするが、気のせいだ気のせい。ここに今あいつはいねえ。

しかもあの綺麗な子、来い来いとばかりに手招くではないか。

俺は操られたようにふらふらと、少女に向かって歩みだす。

歩調に合わせるように胸の鼓動も早くなっていた。

そして目の前まで来た俺に向かって、少女はふわりと笑って手を差



し出した。

ぼやくつと霞む様な思考の中で俺はその手を掴み、そして……。

「!!」

バネ仕掛けの人形のように飛び起きた俺は、キョロキョロと周りを見回した。

そこには湖も廃墟も無くて、なんの変哲もない宿屋の一室があるのみ。

俺が乗っているのも水ではなく簡素なベッドだ。

『どうかした?』

「あ、魔王……」

脳内に響いた声でようやくここが現実だと認識する。いや待てこいつの声で認識するのなんなんだよ。

……ん? というか。

「お前、声かわった?」

寝ぼけた頭がストレートに感じた疑問を口に出させる。

そう、ずっとノイズ交じりの機械音声のようだった魔王の声が……明らかにクリアになっていた。

しかもその声は思っていたより高い。ソプラノボイス? に、似合わねえ……!!

とかなんとか思っていたら、寝起きに魔王はとんでもないことを告げてきやがった。

『ああ、これ? ふふ……それはね。君のメス堕ちポイントが溜まって、クラスステージ職業階級がひとつ上がったからさ』

「はあ?」

寝ぼけていた頭が一気に覚醒する。

いやいやいやいや! 早すぎるだろいくら何でも!!

他の職業でもさすがに一日でクラスアップとかこれまでなかった

ぞ!?

『あれだけポンポン溜まってたら当然だと思っただけだ。……ああそれで、僕の声? これは君と呪いの結びつきが強くなったからだ。それはつまり僕とのつながりも強くなったと、そういうことでもあるからね。まあ御覧の通り、弱体化した僕の魂ではこの姿が精一杯出来る自己表現のだけど。君意外には見えないし、疲れると消えちゃうし』  
「姿って……」

嫌な予感がしていると、視界の隅に黒いものが映る。

……おそろおそろ見下ろせば、そこに見えたのは艶やかな黒髪の一つむじ。

「ぎゃ!?!」

『あつはは。驚いた? 驚いたあ? でもこの美しい顔を見ておいて「ぎゃ」は無いんじゃないかな。賞賛の言葉を述べてくれても構わないよ』

愉快そうに笑っているのは十歳にも満たないだろう容姿の男の子。生身でないことは半透明の体が実証している。

耳のあたりで切りそろえられた艶のある黒髪をさらりと耳にかけてながら、子供の口からはムカつくあの声が吐き出されていた。

「お、おま、おまえ」

『この姿を見るのは僕も久しぶりだよ。なんといつたつて、前世の姿だもの。……少々若すぎるけどね』

どこかい学校制服のような黒いシャツにベスト、タイに半ズボン。それを身に纏っている抜群に顔の良いシヨタガキが魔王の前世の姿!?

若いつて事は本来もつと年上なんだろうが、この容姿ならよほど崩れない限りモデル並みのイケメンになることしか想像できない。

あんなに性格悪いのに、顔がこれかよ!?

「ふ、不公平……」

『世の中は常に不公平だよ。公平だったことなんて、あるの? ふふ』

少し泣きそうになりながらぎりぎり歯を食いしばるも、魔王は涼やかに笑うのみだ。

視覚情報が追加された分余計にムカつくなあ！ おい！！

『ところでさあ。飛び起きたようだけど、変な夢でも見た？』

そう言つて魔王はいっそう笑みを深めるが、俺は目の前のクソガキやらメス堕ちポイントが溜まって女に近づいたことやらがどうでもよくなるほど……夢を思い出して顔が熱くなった。

『……………ん？』

その様子に魔王が首をかしげる。

しかし俺はそれに構わず、芽生えたばかりの感情を口にしたいくしょうがなかった。

「俺、好きな子が出来ちゃったかも……………！」

『はい？』

それまでこまっしやくれたクソじやりだった魔王が、心底驚いた顔をした。

魔王の驚いた顔。それを見て気分を良くした俺は、感情を怒涛の如く垂れ流し始めた。

早朝なのにテンションは深夜のそれである。

でもたつた今見た夢の感想を、すぐに語れる相手が目の前に居るんだぞ。これが黙っていられようか。もうその相手が魔王でも何でもいい。とにかく今すぐ語りたい！

「あのさあのさ、今すっげーはつきりした夢を見てたんだけどさ！！めちやくちや綺麗な子が出てきたんだよ！なんかすげえ怖かったんだけどその百倍すげえ綺麗で可愛くて、なんかこう……心臓を鷲掴みにされるってああいう事を言うんだらうなって……………！マジ、目が離せなかった」

思い出すと体と顔がぼっぼと熱くなってくる。

攻撃？ されたり睨まれたり泣かれたりしたけど、俺の中に鮮烈に残っている感情はけしてマイナスなものではなかった。

夢の中では呆けていたけど、目覚めた今……抱く感情を強く自覚する。

目覚める直前。彼女の手をとったとき、俺は確かに胸の高鳴りを自覚した。

「ちよ」

「でさ、でさー！ 笑った顔が可愛くてえ！ その前は泣いてたんだけど、俺に笑いかけてくれてさー！ ……はっ！ あれ、もしかして泣いてたのは……あれか!? 俺に何か助けを求めて、テレパシー的なものを送ってきたから、とか!? 夢だけど夢じゃなかったパターンのやつ!? だよな、あんなハッキリしてて痛みまで感じて意味深な夢がただの夢なわけが無い！ つまりワンチャン、あの子は現実に存在する可能性がある!! ヤベー！ テンション上がってきたー！ うんうん、この世界なら十分ありえる！ 存在自体が不思議の塊だし！ でさ！ その子、俺の世界の制服着てたんだ。セーラー服！ 俺と同じ転移者か？ 髪だけど髪じゃない何かに捕まってたっぽいし、これは同郷の俺に助けを求めてんだよきつと！」

『うざいうるさい。話に中身がない。うざい黙れ。うざい妄想キモイ。うざい』

「そこまで言うっ?」

思った以上に手痛く叩き落された。今うざいって何回言われた!?

無駄に顔の良いビジュアルがくつついた分、声だけの時よりダメージデカいんだが。

『というか、君さ。昨日……青髪の女騎士に告白されたばかりだよね。

あと、白髪の有翼族。そんな時に夢で見た見知らぬ女を好きになっただってぬかすんだ？ ふくん?』

「そ、それは」

正論をつきつけられて、熱に浮かされていた思考がだんだんクリアになっていく。

けど心はあの赤い瞳に捕らわれたままだ。それほどに彼女の印象

は鮮烈だった。

俺はアシユレに告白してもらって嬉しかったし、シヤテイもその言動全てに関する感想はともかく好かれていたと知って嬉しかった。俺も彼女達が好きだから。

でも、でもでもでも！

「す、……………好きになっちゃったんだからしょうがないだろおツ！  
恋ってそういうもんだ！」

なんとか絞り出した言葉は、我ながらあまりにもお粗末で陳腐な内容だった。羞恥で顔に熱が集まる。

だけど告白されてめちやくちや嬉しかったのも本当だし、夢で見た女の子に一目惚れしたのも本当だし……………ああもう！

俺は今寝ぼけているが、寝ぼけているからこそ嘘もつけない。

「お、俺はなあッ！ 女の子が大好きなんだよ！ いちやいやしたすぎて望みが反転したら女になるくらいに！ それはお前も良くわかってんだろうが呪い主！ だからあんな綺麗で可愛い子、しかも泣き顔と笑顔を両方見て手まで握られちゃったら……………好きになっちゃまうっつーの！」

……………。

がああッ！ 自分で言ってるんだけど、俺今一切胸を張れない事言ってる!!

これはまた何か言われるなど身構えた俺だったのだが……………。

『……………。そんなに綺麗だった？ 可愛かった？』

「え？」

ど、どうしたんだ？

絶対にさっきの倍以上の罵倒、もしくははからかいの言葉が返ってくると思ってたのに。

投げられたのは問いかけだ。

「うん。綺麗だし、可愛かった」

俺もまだ寝ぼけているのもあって、問いには素直に答えてしまっ

た。

すると魔王はしばし沈黙した後……にんまりと笑った。

『へくえ。ふうくん。ほうう。そうか、そうか。そうなんだ。あれだけの美女と美少女に囲まれている君から見ても、そんなに素晴らしかったんだ。へくえ。そうかい、そうかい。一目惚れするくらいに……ねえ。ふうくん』

「な、なんだよ」

妙に上機嫌だなこいつ……。気味悪い。

『ところで何か気づくことはない？』

「気づくこと……？」

職業階級クラスステージがひとつあがった事についてか？ 急に話題変えるなあ、こいつ。

そう言われても体に特に変化は見られない。……いや、これ以上変化されても困るからいいんだが。

自分の体を見下ろしていた俺に、魔王の奴が眉根を寄せた。

『ちがうちがう。そつちじゃなくて、こつち』

「お前？」

不機嫌そうに自分を指差した魔王。

気づいたことって……ただただあの化け物がこんな美少年姿で実体化しやがった事が腹立たしいくらいで、あとは別に。

『……………』

首を傾げる俺に魔王は更にむっとした顔で、なにやらぐそぐそポケットを漁り出した。

そして取り出したものを頭に乗せてむんつと胸を張る。

「は？ なんだよ王冠？ 魔王様にしちやしよぼいな。手作りかあ〜？」

『……………』

ぷつと噴き出しながら魔王が頭に乗せたおもちゃのような王冠を小突く。すりぬけて触れこそしないが、小さいし薄そうだし、全体的にしよぼい。

昨日からさんざんからかってくれた魔王が面白いくらい不機嫌さ

を増す。おく？ なんだなんだ、怒ったか？

俺がニヤニヤ笑っている、今度はずいっと顔を近づけてきた。

「おわ!? な、なんだよ」

無表情な顔の良い子供。無言でぐいぐい迫られると顔がいい分ホラーじみてて怖いんだけど。

手を前に伸ばしてもすり抜けてしまうので、奴の顔を見るしか出来なくなる。これも幽霊と変わんないっていうか幽霊だな。

……………にしても、こいつの顔ほんつと嫌になるくらい整ってるな。

黒っぽく見えたけど、目の色はよくよく見ると濃い赤のようだ。微妙に赤に紫っぽいのが混じってる感じ？ けどなんかこう、ハイライトが無くて暗い色だ。

珍しい色してるけどなんか全体的に濁ってんなあ。まあ魔王だもんな。

まじまじ魔王の顔を観察していた俺だったが、時間の経過と同時に魔王の顔がどんどん不機嫌に染まっていく。

『チツ』

「なんで俺が舌打ちされるんだよ!？」

ついには盛大な舌打ちをくらわされた。

すかさず文句を述べるが、魔王は顔をしかめるばかりだ。

『自分で考えたら? ……あのさ。僕って鈍感系主人公とか嫌いなんだよね。縊り殺したくなる』

「は? なんで急にサブカル談義? ええ。俺は鈍感主人公結構好きだけど? だってその分、恋が叶うまでの焦れたい様子をたくさん見れるじゃん。俺、付き合ってからより付き合うまでのじりじりした過程を見るの好きなんだよな」

『はああ? 今さ、そういう話じゃないんだよね』

「ええ…………?」

魔王の情緒がわからねえ…………。

ただでさえムカつく奴なのにこれ以上面倒くさくなるのとか勘弁しろよ。情緒不安定か? 幽霊か?

『……まあいいや。じゃ、僕は消えておくよ鈍感くん。賑やかな子が来たからね』

言うなり、少年姿の魔王は空気に溶けるように姿を消した。

「え、おい。俺が鈍感ってなんだよ」

突然妙な行動をして突然消えやがった……。どうせ俺の中には居るんだが。

どうも不完全燃焼な気分だが、ドアをノックする音が聞こえて気を取り直す。

やべーやべー。俺、このままじゃ独り言しやべりまくってるヤバイ奴！ ……聞かれてなかったかな？

「ミサオ様、起きてらっしやいますか？」

「ああ、起きてるよー」

シャティだ。

起きてるか確認されたってことは、今の独り言は聞かれなかったみたいだな。よかった。

……とりあえず、夢で見た女の子の事は胸にしまっておくか。

淡い恋心は大事にしたいし彼女が本当に俺の想像通り実在する人間なのかも確かめたいが、まずは自分の事を整えないと何も行動できない。

「……はあ」

現状を思い出したら、ため息しかでねえ。

見下ろせば、胸にくつついた二つの山は一晩寝ても変わらずそこに鎮座している。

女になってから二日目の朝が始まった。





15話 ▶ 秘密の花園く女になったら女にモテています。ナンデ？

「昨日は取り乱してしまいすみませんでした」

「あはは……」

朝食の席でぺこりと頭をさげたシャティ。

俺はもさもさ咀嚼していたパンを飲み下すと、どう答えたもんかと頭を悩ませた。

アシユレに続き、シャティからの突然の告白。

嬉しくないわけがないんだけど、出来れば二人とも俺が女になる前に言っただけで済ませたい……って。うん……。

なんで性別変わった途端にモテるんだよー!?

いや、アシユレ話を思い出す限り……俺が女になって【職業…クラス…フイメール女】の魅了が出たから、その効果で気が緩んだのが発端で告白してくれたんだけどさ。

あ、でもこれってシャティも同じか？

『それもあるのだろうけど、彼女の場合は君が「女になった事そのもの」に理由もあるんじゃない？』

(それは俺も薄々感じてたけど……)

……いかん。もう魔王が脳内で話しかけてくることに完全に慣れちゃってる。我ながら順応性高すぎないか俺。まだ一日だぞ。

『自覚はあるんだ……。さしもの僕も、君の順応力には感心しているよ。同時に呆れてもいるけどね』

(ぐっ)

これに関しては言い返せねえ……!

ともあれ今はシャティだ。昨日も言葉の端々から感じてたけど、も

しかしてシャティって……。

俺は行儀悪くテーブルに肘をつくとか「あー」とか「うー」とか言いつつ少し迷ってから、意を決して麗しの魔術師に問いかけた。

「あのさ。………もしかしてだけど、シャティって女の子が好き？  
恋愛的な意味で」

「はいー」

即答されたー!?

「あー！ 別にそれだけがミサオ様に愛を向ける理由じゃないですからね!? そんなに短絡的ではありません！ ミサオ様のことは前から可愛らしいなと思っていましたわ」

（そこは「かっこいい」とか「頼りになる」じゃなくて可愛いなんだ……）

自分なりに精一杯かっこつけていい男アピールをしてきたつもりだったので、少しショックである。

どうも俺の「つもり」は本気でただのつもり、だったらしい。

「でも、そのですね。魅了の効果もあつてのことですが、女性になった姿を見たら歯止めが利かなくなりまして……。愛は元々ありました。その種類が変化したというか……」

「ライクからラブになったって受け止めていいのかなこれ……。それが女になって起きた変化だつてなら、それはそれでかなり複雑なんだけど。というかさ、俺可愛いって思われてたの？ かっこいいとかそういうんじゃないか？」

一縷の望みをかけて聞き返してみたが、直後に希望は断たれる。

「ええー！ すっごく強いのに、とっつても素直なところとか！ わたくしのお願いに一生懸命取り組んでくれたところとか！ こちらが気づいていないと思つて成果を上げた後にチラチラ「褒めて！」て顔で見てくるところとか仔犬みたいで本当に愛らしいな可愛らしいなつて思っていましたし、あれだけの実力がありながらコロコロ転がされてくれて本当に……あらいやだ。今のは忘れてくださいまし。ほほっ」

顔を手のひらで挟んでうっとり頬を染めるシャティ。……うん。

それってジャンルの愚<sup>おろ</sup>か面白いって奴じゃないかな……!?

あと今、仔犬って言った!? やっぱり女になる前の俺、恋愛対象としての好意は向けられてなかったじゃん! それが女になった途端に昇格するとか複雑でしかたがねえよ!! ねえ、シヤティさん!?

そんなシヨックを受ける俺に、俺達を見て笑っていたガーネットから更に追加情報もたらされる。

「今さら気づくミサオもにぶいね。その子、旅の途中私たちにずっと愛を囁いてたよ」

「!?」

え、昨日アシュレにも愛してるって言ってたけど……ガーネットにも!? しかも「私達」ってことは、もしかしてもしかして、モモにも!?! 旅の間、ずっと!?

それで女になった途端俺にもって、いやいやいや。節操なさすぎだろ!

俺の中のシヤティの清楚イメージがたった一日でガラガラと崩壊してきているんだけど……!

白い羽に白い髪、白系の衣服という全体的に白くて清楚な百合の花を具現化したような天使のような美少女がそちの方面で百合なんてまさかそんな。

『節操無しって、それを君が言う? みくんな大好きなんでしょ?』

しかも今日は夢で見た女にも惚れたと言うじゃないか。節操ないねえ』

(速攻で痛いところ攻めてくるのやめろお前)

『僕は常識的観点からの正論を述べているだけ。よかったねえ、こんな親切的魔王は他に居ないよ』

(お前は人の反応楽しんでるだけじゃん!)

魔王と忙しく脳内会話をしつつも、女になってから知る仲間の真実がこれってどういうことだよと未だ挙動不審となっている俺である。

愕然としている俺に、向かい側でお茶を口にしていたアシュレが苦笑した。

「ええと……うん。流石に魔王を倒すための道中、君の前では彼女も自重していたから気づかないのも無理は無いだろうさ。君の目が届かないところ……宿屋では毎晩ベッドにもぐりこまれて困っていたけれど」

「女子部屋でそんなことが!？」

つまり俺の彼女候補が彼女候補に寝取られそうになったた……つてこと!？」

『付き合っていないんだから寝取りではないでしょ』

(そうだけど！ 今そこはいいだろ！)

『そのちよつとした認識の差で戦争は起こるんだよ』

(……。薄々感じてたけど、お前って俺の事をとやかく言えないほどにオタクなんじゃねえの？ わりと根深めの)

『………………。さて、どうかな』

こいつ自分に都合が悪い時ははぐらかしやがって……………!

俺の意識は駄々洩れだったのに、ずるい！ ズーりいッ!!

ぎいいいいッ!!

(……にしてもこれまでの旅の中。宿屋では当然俺は別室だったから、まさかそんな魅惑の花園が女子部屋で展開されていたとは……!)

ショックはショックである。しかしそれはそれとしてめくるめく妄想が脳内で展開し始める俺である。許してほしい。だってこんな美少女同士がこう。あれやこれやなことになってる可能性を考えたら……………こう……………!

「いら」

「あだっ」

妄想していたらデコピンされた。

「あ、あしゆれ?」

「あのね、ミサオ。何を考えているか、君は顔に出すぎるよ。……一応言っておくけど、変な間違いは起こっていないからね」

「ぐ、ごめん」

『心を読めなくても駄々洩れじゃない。君の考え』

ぐうの音も出なかった。

俺が気恥ずかしさに肩をすくめていると、アシユレはデコピンで赤くなった俺の額を撫でた。

「まったく。もう一度、はつきり言った方がいいかな？ 私もシャティのことは好きだけど、それは仲間として。愛しているのは君だ」  
「うぐ!!」

い、イツケメエエエエン!!

さらつと愛を囁いてきたアシユレに心臓をおさえる俺。顔が熱い。

(あ、朝からそれ言えるのすごくない!? しかも人前で! さらつと! すさまじいイケメン力……! これはアシユレレベルでなければ許されない所業……!)

めちやくちや嬉しいけど、ちよつと気を緩めるとすぐメス堕ちポイントたまりそうで怖い。

今は音しなかったし、多分耐えられたはず。……いや耐えられることもあるんだ、これ!?

「もうつ、アシユレったら。ミサオさまを愛しているなら、教えてください。さればよいのですわ。わたくしは丸ごと愛しましたのに! 今までつれない態度をとられて、わたくしとおくつても傷つきました」

「おや、シャティ。その時は私が慰めてやったじゃないか」

蠱惑的に笑うガーネットの発言に、俺の脳内では再度めくるめく百合の花園劇場が展開されかけた。

「ミサオ。もう一度言っておくけど、誰が誰とも変な間違いは起こっていないからね。モモは私が守ったし、ガーネットはシャティを抱きしめて甘やかしていたくらいだよ」

「ぞ、そうなんだ。へく。ふくん。抱きしめて甘やかして……」

再びアシユレに念押しされたけど、俺としては新たに刺激的な情報を手に入れてしまった状態である。

そんな風にどこかソワソワした気分を味わっていると、次いで口を開いたのは卵料理を食べていたモモだ。

ジト目でシャティを見ている。

「シャティは……あつくるしい」

「まあ、モモ。わたくしの翼はご不満でした？」

「羽根布団はきもちいいけど、べたべたくつついてくるのが嫌」

「そんなあ〜」

「ちよつとその辺詳しく」

一番の間違いは起こってないとアシユレ印の安心が得られたので、その他に女子部屋で何が起こっていたのかすごく気になる。モモ、ちよつとパパに詳しく話してみなさい。

俺が机に手をつけて乗り出していると、コトンッと机に木の器が置かれた。

中では野菜と肉の腸詰がたっぷり入った滋味深そうなスープが旨そうな香りと湯気を放っている。

「おまちどうさん」

「おつ、サンキュー！ ジャン！」

「……今日は大丈夫そうだな」

「んー、まあな。結局昨日なんも食えなかったし、腹が減ってしょうがねえよ」

「そりやよかった」

そう気さくに笑って肩を叩く茶髪の男は宿屋の息子、ジャン。

厨房の奥で寡黙に料理を進めている店主とは異なり、よく喋る人懐こい男である。

……実を言うと、男友達って呼べる相手はこいつだけかもしれない。めちやくちやいい奴。

「あー、なんだ。元気になったんなら、仲間同士でよく話し合っておけよ。昨日の事は冒険者ギルドにシャティさん達が上手く説明してたようだけど、魔王を倒したこととか、呪いをうけた事とかも、まだ俺と親父しか知らないんだろ」

「それなあ」

女になって。

告白されて。

夢で恋して。

そっちの方に考えが偏ってたけど、そういえば昨日って馬鹿魔族に

襲撃されていたし、魔王を倒したのも昨日だった。

『君、記憶の上書き保存しかできないの？ 部下の彼はともかく僕を倒したことを忘れるなよ。魔王だぞ』

（魔王らしい態度をとってから言えよ。それに、だから倒せてねえんだわ……）

不機嫌そうな魔王をおぎなりにあしらうと、スープにパンを浸して口に運びつつ考える。

「……あ、報告ありがとな。なんか言われなかったか？」

シャティの趣味やらなんやら考えだすと話が進まないの、まず昨日の処理を気絶してた俺に代わって済ませてくれたらしい仲間に礼を言う。

「ふふっ、お気になさらず。あの魔族とは以前からいざこざがありましたからね。魔王の事を除いて説明するのは難しく無かったですし、周囲への被害無く終わった事もあり報酬を頂けたくらいですわ」

「石畳の舗装代は？ バキバキにしちゃったろ、俺」

馬鹿魔族を叩きつけた時にクレーターを作ったし、あと魔物の血とか切り落とした肉とかで住んでる人間にとっては結構な大惨事だったんじゃないの。

「その辺はギルドと町が負担してくれるとのことだよ。掃除もね。あれだけの魔物の数を見た後で無事に終わったとあって、ずいぶん感謝された」

「相手の狙いは俺だったんだし、その辺は責められなかったか？」

「シャティが上手く言ってくれたさ。あと冒険者ギルドとしては「いい宣伝になった」、だとき。所属する者が強さを提示すれば仕事を幹旋する組織自体の信用も上がるからね。ああいった分かり易い形で多くの人間が冒険者の戦いを見る機会はそう無いし、すっかりパフォーマンス扱いだよ」

可笑しそうに笑うガーネットタに続き、笑顔のシャティがぐっとサムズアップした。

「あ、ミサオ様も魔術装甲を纏っていましたが、今のお姿もバレていませんよ。装甲が砕けた時はすぐアシユレが隠してくれましたし」



そうそう。あの後、避難誘導していたアシユレが颯爽と駆けつけてマントでばさつと囲って周りから見えないようにしてくれただよな。だから俺……冒険者アイゾメミサオがこんな姿になってることは、まだ馴染みのギルドの奴らも知らない。

……その前にちよつと顔出ししてしまった気もするが、シャテイによる雷魔法の直後だったからな。光で眼がくらんで、見物人も俺の顔見るどころじゃなかっただろ。多分。

「魔術装甲もどうすつか……。修復したいけど、その前に呪いの事で賢者を訊ねた方がいいか……。う〜ん」

「そうですねえ。色々考えることは多いですが、まず今後の方針を決めなければ動くに動けません。ここはすぱつと決めてしまいましよ〜」

俺のぼやきにシャテイが居住まいを正す。

今までもそうだったが、こうして基本となる舵取りをしてくれるのはいつだって彼女だ。

ずいぶんイメージは崩れたけど、ちゃんと締めるところは締めてくれるようでほつとする。

『それをコロコロ転がされてるって言うんじゃないの？ 完全にパーティーの主導権握られてるじゃない』

(ち、ちがつ！ 違う！ 適所適材つてやつだ！)

なんだかパーティーのリーダーとしての存在意義が揺るがされた気がする。でも乗せられた自覚はあるけど、決めたのは俺だから。転がされてねえから！

こう、リーダーは決断するのが仕事じゃん？ 方針を決めるのは参謀。うん、大丈夫大丈夫。魔王に惑わされるな、俺。

「では、改めて。少し情報を整理してから、今後のわたくしたちの身の振り方を決めましょう」

内心でキョドる俺をよそに、シャテイが穏やかに笑って仲間達の顔を見回した。

## 16話 ▶ 方針くそして始まる絶対男に戻りたい苦行 八割の旅

シャティは前置きの後、お茶に口をつけてから本題を始める。

「厄災の魔王に関しては黒星草こくせいそうが枯れたため、討伐については知れ渡っていることでしょう」

黒星草こくせいそう。

それは厄災の魔王が現れた時に世界の各地で咲き誇り群生する、星のような形をした黒い花を咲かせる植物だ。

これが厄介な雑草で、焼こうが薬品をかけようが引っこ抜こうが……魔王が死ぬまで決して枯れることが無いんだと。

本人並のしぶとさである。文字通り、あいつ今雑草魂だし。

「そうだね。しかし誰が倒したか……までは知られていない。どこの国も表立った大侵攻が出来ていない以上、過去の例を顧みて『英雄』が現れた上での少数討伐、という事実は把握しているだろうけど」

ちらつとシャティとアシュレがこちらを見る。

「……討伐報告をするとなれば、ミサオ様の状態も知られてしまいませんね。どうします?」

「黙つとこうぜ!」

即答した。

「報酬は惜しいけど、俺はこの状態を知られる方が嫌だ」

「ミサオ様が言うなら、その件についてはギルドへの報告は無しという事でいいですね」

「……いいの?」

あまりにもさっくりあっさり納得されてしまったが、まわりを見渡せば仲間たちはみな頷いている。

「榮譽を得るより、君の名誉を守るべきだろう。私は構わないよ」とアシュレ。

「私もだ。厄災さえ防げたならそれで十分。魔王陛下を倒せたのも、ほとんどミサオの功績だからね。あんたが決めればいい」

「モモは、ママが嫌なことならすすめない」

ガーネツタとモモもそんな風に言ってくれる。

「わたくしは一族への報告だけさせていただけなのですが、それ以外は特に望みません」

一族の使命として俺を探し出したシャティの申し出は当然で、それくらいならと頷く。

……あれ、もしかしてこの中で一番物欲と名誉欲強いのか、俺？

納得してもらえたことにめちやくちや安心したんだけど、報酬も英雄の誉れも大分惜しいなって気持ちなんだけど……！

『みんな君に甘いね。……ふふつ。それにしても、物欲まみれの英雄か。恥ずかしい？ ねえ、自分が恥ずかしい？』

(隙あらば人が気にすることをツツコミで挟んでくるんじゃねーよこのじやりガキ!!)

『失礼だなあ。今の見た目はこんなんだけど、魔王として生きた時間は君より遥かに長いよ。年上なのだからもつと敬いたまえ』

(図々しさの世界チャンピオンでいらっしやる?)

どうしたら敬えなんて言葉が飛び出てくるんだこいつ。

「ミサオ様?」

「あ、ああ。なんでもない。えーと、納得してくれてありがとな。じゃあこの後どうするかって話か」

「行き先についてですね。わたくしの一族への報告はついでで構わないので、アーティファクト魔術工芸核技師の元へ行くか賢者の元へ行くかだけ決めてしましましょう」

シャティはそう言うと、確認するように仲間達を見回した。

「その前に。みなさんはどうされます?」  
どうする。

その問いかけに、俺はふとある事実を突きつけられた気がした。

シャティは俺に英雄としての役割を求め、それはもう果たされた。

ガーネットもだ。厄災の魔王を共に倒すために仲間になってくれたのが、はじまりだった。

アシュレはずっと俺と組んでくれているけれど、冒険者パーティーなんてよくメンバーが入れ替わるのが一般的。この先も一緒に居てくれる保証なんて無い。

モモは記憶が無いから俺についてきている。今の彼女はともかく、もし記憶が戻ったらもと居た場所に戻りたいのではないだろうか。

厄災の魔王討伐という大きな目標がなくなった今、当たり前のようにこのメンバーで旅する事への保証がなくなったような気分になって……。

俺は少し、体の奥が震えるような気がした。  
しかし。

「あ、ちなみにわたくしは今後もミサオ様にお供しようと考えていますわ。当然ですが！ 当然ですが!! ミサオ様はわたくしが愛するお人なので。それにミサオ様はお強いのに危なっかしくて、放っておけない方ですからね。これからもしつかり！ お役に立てるよう頑張るつもりですわ」

問いかけながら真っ先に自分の考えを述べたのはシャティだ。

これからも一緒に居てくれるという言葉聞いて、その勢いに押される前にほっとする。

続いてシャティに伝えるように、アシュレ。

「私もだ。もとからミサオとパーティーを組んでいたし、愛する人が困っているのを放っておけないからね。ミサオが元の姿に戻りたいというなら、協力する」

「あ、アシュレ……！ ありがとう！」

「ふふっ。どういたしまして」

初めて明確に「男に戻りたいなら手伝うよ」と言ってもらえて心が高揚する。

「そうだよな！ 男に戻った方がアシユレだって喜んでくれるよな！」

でもシヤテイといい、「愛する人」ってさりと云うのは嬉しいけどやめような!? 不意打ちでくらくらうと俺の鼓動の高鳴りからメス堕ちポイントが生まれてしまう……!」

「アルマディオ……愚弟の件もある。どうせまた来るだろうし、私もまだしばらく同行しようか。家の事は夫と子供たちに任せてあるし、旅行がてらついていかせてもらうさ。ミサオが嫁に來たいというならいつでも故郷に歓迎するけどね」

「出来れば夫でお願いします!! 男に戻ってから夫ポジションでお願いします!!」

嫁なんて言われて思わずそう言ってしまうが、はっとなつてアシユレを見た。

俺としてはみんな好きなんだけど、一般的に考えて好きな男が別の男になびいていたら嫌な気持ちになるよな。

しかしアシユレは慈母のような笑みで全てを察したように首を横に振る。

「君はミサオだからね。女性にふらふらするのは、今さらだ」  
「え」

「ちなみにガーネットに”ご褒美”を貰おうとしていたことも知っているよ」

「え」  
「人に言っちゃいけないなんて言われてないだろ？ 話の種にさせてもらったよ」

「ガーネットさあん!？」

まさかの俺の恥部が情報共有されてたんだが！ つまりセットで俺が童貞つて事もバレてるってこと!？」

俺がジャンからの憐みの視線を受けながら口をぱくぱくさせていると、アシユレはするりと俺の前髪を持ち上げた。

「それを知っている上で君が好きなんだ。もし独り占めしたいなら、私が他を見る余裕がないくらいミサオを惚れさせるまでのこと。そ

の覚悟だけは、しておいてね」

涼やかな微笑とこの発言が俺に効かないはずもなく。

「ぐううッ!!」

【メスメロリンっ♪】

こ、今度は耐えられなかった……!!

「ミサオ?」

「アシユレ。多分あなたの発言でメス堕ちポイントとやらが溜まったんだと思うよ」

「!? す、すまない。そんなつもりでは……」

「い、いいんだアシユレ。俺がアシユレのイケメンさに耐えられなかっただけだから……!」

俺が床に崩れ落ち息も絶え絶えになっていると、モモが気遣うようにそつとよりそつてきた。

「モモは、ミサオママとずっといっしょがいい」

「モモ……!」

その健気な様子にぎゅつと心を掴まれる。それに対して「メスマッ」まで鳴りかけたので「これは父性だから!! 母性じゃないから!!」と考えて無理やり打ち切らせた。……頑張れば途中キャンセルもできるんだ!?

ともかく、まだまだみんなは俺と一緒に居てくれるらしい。

そのことにとつともない安心感を覚えて、体から緊張が抜ける。

「では全員このままパーティーを組み、ミサオ様に同行するということよろしいですね」

わちやついてきた場をシャティが取り仕切ると全員が頷いた。

……昨日暴走してアシユレにヘッドロックされてた子と同一人物とは思えないぜ。俺が知るいつものシャティはこっちなんだけど。

シャティは確認が取れると、改めて俺に問うた。

「ミサオ様。まず何処へ向かいましたよ！」



それから数週間。

現在俺たちは世界一と名高い賢者の元へ向かっている。

賢者は住居の周囲に結界を巡らせているため、転移魔術でさくつと移動が出来ないのだ。

慣れない体で苦労も多いけど、本格的に陰鬱とした気持ちにならないでいられるのは仲間たちのおかげかもしれない。

……………おかげというか、せいというか。

落ち込んでる暇がないんだよな……………！

「まあ、ミサオ様。体が凝っているようですわ。わたくしがほぐして差し上げます！」

「嬉しいんだけど変なところ触らないでシャティ！」

ぱつと見清楚な積極的美少女のスキンシップには肉体的快樂を感じないよう耐えなければならぬ。

「今日も君は素敵だね。……………手を握っても良いかな」

「は、はい……………」

中性的なスパダリ系美女の口説き文句やイケメン仕草にもときめ

かないよう耐えなければならぬ。

「あのね……ぎゅつと、して？」

「いぞモモ！ ほくら、こっち来なさい！ パパがぎゅつとしてやろう。パパが！」

ケモ耳愛娘系美少女の甘え攻撃にはうっかり母性を抱かないよう

「俺はパパ、俺はパパ」と自己暗示で耐えなければならないし。

「寂しくなったらいつでも来な。優しく抱いてやるからさ。それとも熱いのがお望みかい？」

「その約束は元の姿に戻れたらで……是非……是非……！」

豪華な男前お姉さま系美女からの夜のお誘いには一瞬でメスにされる自信しかないので血涙を流しながら断らねばならない。

『頑張るねえ。さくつとメス堕ちした方が楽し、人生きつと楽しいよ？』

（黙れ！ 俺は男に戻りたいんだよ!! メス堕ちなんかしてたまるか!!くそ！ クソクソクソクソクソオツ！ なんて俺がこんな目に！）

元凶である脳内寄生系シヨタガキ魔王は相変わらずうるさい!!

こうしてモテたはいいが素直に受け取れない……そんな苦行八割を味わいながらの、俺が男に戻るための旅が始まった。

絶対！ 絶対絶対絶対！

男に戻って、男の体で！ いちやいちやラブラブチートハーレム生活を手に入れてやるんだからな——！！



本編を読まなくてもだいたいわかるかもしれない一章のあらすじ

「本編を読まなくてもだいたいわかるかもしれない一章のあらすじ！」

藍染芽あいぞめ 操ミサオは五年前、現代日本から見知らぬ異世界へ転移した。

最初こそ死にかけたものの、転移の際に手に入れていた能力は「レベルアップ」！

操のみが認識できる「レベル」概念で、向き不向きに関わらずあらゆる経験値を十倍取得できるというものだった。

その力を活かして冒険者として強くなり、ついには世界に厄災をふりまくという魔王を倒すに至る。

しかし魔王は死に際、世界にかけるはずだった呪いを操に向けて「心からの望みと反転した事象がおこる」呪いとして放った。

それはもし世界平和を願う者が受ければ世界が破滅するというような呪いだが、ミサオは違った。

心底モテたい、女の子と(男として)スケベしたい！ イチャイチャしたい！ という願いを強く抱いていたがために、それが一生できぬようにと「女になる」呪いとして現れたのだ。

しかもその呪いには自称「呪いナビ」として魔王の魂までついてきた。

聞けば魔王はミサオと同じ世界からの転生者だという。

もう魂の力は付きかけておりほとんど何もできない様子だが、面白そうだからと同郷である操の魂に間借りし、自分がかけた呪いのナビゲーターに再就職したなどと主張。

女にされた上に魔王に寄生され落ち込んでいたら祝勝会の途中で魔王軍幹部に襲撃されるわ、その魔族に何故か求婚したと勘違いされるわ、仲間と過ごしている時にたまたま鳴っていた奇妙な音が「メス堕ちポイント(魔王命名)」なるものだと聞かされるわ、呪いの効果で取

得した職業クラスのせいでもしかしたら世界中から貞操を狙われることになるかもしれないと聞かされるわ。

散々な気分を味わいつつも、その中で共に旅していた仲間から恋愛の意味での好意を向けられていたと知ることになる。

だがそれは喜ばしくあると同時に、操にとって苦行の始まりだった！

操が受けた呪いの効果。

女になるという事象を引き寄せるため取得させられた【職業：女クラス《フイーメール》】は、操がときめいたり、肉体的快楽を感じたり、母性などを感じるとたちまちメス堕ちポイントが溜まるのだ。

それも操がもともと取得していたレベルアップの能力と合わせて、溜まる速度は十倍である。

最高職である【職業：女神アーケレディ】になれば一生元に戻ることは出来な  
いとか。

何が何でもまっとうに女の子とイチャイチャしたいし出来れば  
ハーレムが夢な藍染芽あいぞめ 操みさお。

これは惚れっぼく調子に乗り易く大分ちよろいこの男が、メス堕ち  
に抗いながら元の姿に戻るため旅するためのお話である。

### 【ざっくりキャラ紹介】

■ 藍染芽 操（あいぞめ みさお）

■ 種族：人間族（異世界種）

■ 性別：元男、現女

■ 取得職業：剣士、女、その他複数

■ 能力：レベルアップ】>>あらゆる経験値を向き不向きに関わら

ず確定で十倍取得できる。この概念は操にしか適応されず、最大の特徴は一度強くなったたらその最高値から能力が下回ることが無い事。つまり訓練をさぼっても鈍らない。

■呪いで女にされた元・男。現在二十一歳。五年前、十六歳の時にマンホールに落ちて異世界へやってきた。すげべかつイキっているが、本質はクソ雑魚ヘタレオタク。強いが調子に乗り易く油断もしやすい。惚れっぼくてちよろい。

■シャテイ・テイテイシエール

■種族：有職族

■性別：女

■取得職業：魔術師、神官

■ミサオの能力に可能性を見出し魔王退治を頼んだ張本人。

パーティの参謀兼回復職だが、結界や攻撃魔術も使いこなす有能な魔術師。

清楚潔癖だとミサオに思われていたが、実際は女の子にしか興味がないだけで好きな相手には積極的。

ミサオに告白したが、一緒に旅していた仲間三人も口説いていたらしい。ミサオが取得したスキル【魅了】の効果で余計にタガがはずれ暴走気味。

■アシユレ・ノーヴァ

■種族：人間族（現地種）

■性別：女

■取得職業：騎士

■ミサオが冒険者登録してから初めて出来た仲間で、一番付き合いが長い。

能力で強くなり調子に乗っていたミサオを度々諫め、冒険者としての心得を教えたのも彼女。

蒼銀の鎧を身に纏い、片手剣と盾を使い前衛もしくは中衛を務める。

礼儀正しく紳士的なスパダリ系女子。女の子によくモテる。ミサオを愛していると告げたが、態度発言がいちいちイケメンなので現状一番ミサオのメス堕ちポイントが溜まる原因となっている。

■ ガーネットタ・グラナタス・アネアドラ

■ 種族：魔族（半魔）

■ 性別：女

■ 取得職業：銃士

■ 仲間を裏切り操たちに協力した元魔王軍の女性。腹違いの弟が魔王軍幹部を務めている。

頭部の片側にだけ生えている角を銃に変化させ戦う。狙撃による遠距離攻撃が得意。

豪快で男前な性格。姉御。

夫が十人、子供が十二人居る。魔王に勝ったらご褒美にミサオの筆おろしをする約束をしていた。

■ モモ

■ 種族：獣人族（キメラ種）

■ 性別：女

■ 取得職業：闘士

■ 記憶喪失の獣人の少女。狼と兎に似た耳、二対の耳を持つ珍しい獣人。

ミサオが保護し名前をつけたため、ミサオを親のように慕っている。

表情は乏しいが感情表現自体は豊かで主張もはっきり示す。

本当の家族になればずっと一緒に居られるからと、ミサオを嫁に欲しいと思っている。

■ 魔王

■ 種族：魔族（厄災の魔王）

■ 性別：???

■世界に厄災を振りまくとされている魔王。

その正体はミサオと同じ世界からの転生者。自身がふりまく厄災の呪いで世界丸ごと自分と心中させる気で居た。

ミサオに阻止され、腹いせとばかりに呪いをかけたら面白い事になったのでミサオに憑依している。

性格は悪いがミサオに対するツツコミ自体はまっとう。

ミサオにかけられた呪いが強くなったことでつながりが増し、その影響で実体化できるようになった。ちなみにミサオにしか見えない。

自身が見たものを記録し、ミサオに見せることが出来るリプレイ機能付き。

十歳に満たない少年のような姿をしている。

■夢の少女

■ミサオの夢に出てきた謎の美少女。非常に整った容姿でミサオは一目ぼれした。

■アルマデイオ・カーネリアン

■種族：魔族

■性別：男

■ガーネットの腹違いの弟で魔王軍幹部。

魔王が倒された後、すぐに痕跡を追って敵を討とうとミサオを襲撃した。

以前からミサオに戦いを挑んでは返り討ちにされており、本人はミサオの事をライバルだと思っている。性転換したミサオがミサオだとは気づいていない。

本人も強いが、襲撃では多くの魔物を召喚する術を使った。

■ジャン

■種族：人間（現地種）

■性別：男

■行きつけの宿屋の息子。

気さくな人柄。彼と彼の父だけが現状でミサオたちが魔王を倒したと知っている。

## 二章

17話 ▶ 賢者の住居を目指して俺のチートハーレム記、始動！



今日から男に戻るまでの記録として手記を残そうと思う。

というのも、脳内でいつも魔王の野郎がうるさくて頭の中だけでは考えが纏まりにくいからだ。心底迷惑な奴である。

今も横から茶々を入れてきているが、この白紙上は俺だけのもの。邪魔者もこの手記には介入できないのだ。

内容として記していくのは今後の目標と、それを達成するために何をするかという予定。

そういった記録を残し途中で振り返るなどしていけば、流されっぱなしになることはないはず。俺は成長するのだ。

手記のタイトルは、そうだな。

俺のチートハーレム記！

これでいこう。

魔王がセンス無いだの欲望丸出しだの言ってくるが、俺としてはこれ以上のタイトルは無い。

元居た世界に帰れなくなっただ。だったらその代わりに、とびきり楽しい人生送ったっていいだろう。

チートはある。今の状態はハーレムと言えなくもない。唯一のネックは今の俺の状態異常もとい職業クラスもとい呪い。つまり呪いさえなんとかすれば、俺には薔薇色の未来が待っているというわけだ。

メス堕ちなんぞ誰がするか。俺は絶対男に戻ってやるからな。

でもって俺と、俺の事好きになつてくれた女の子も全員幸せにして

ハッピーエンドだ！

ともかくにもそのためにも、現在は知恵を借りようと世界一と名高い賢者の元へ向かっている。

以前は俺に元の世界へは帰れないという事実を突きつけ絶望させてくれたが、その実力や功績は本物。今度こそいいアドバイスがもらえることを祈っているぜ。

【俺のチートハーレム記 1 ページ目の記録より】



青空の下、遠くまで広がる濃い緑の森。それを真つ二つに割っているのは、底の見えない大渓谷だ。

ここも賢者の元へ向かう道中の一つである。

魔王に呪われ妙な職業クラスを取得した俺は、どうにかそれを剥がせないかと、かつて尋ねた賢者に知恵を借りるべくその住居へ向かった。

……このくだりは後で手記に記録しておこう。

文章書くの慣れなさ過ぎて、まだほとんど白紙だけど。

ちなみに仲間達だが、俺の「男に戻りたい！」という希望については手伝ってくれる様子なんだが……。

明確に協力を申し出てくれたのはアシュレだけで、シャティあたりは協力はしてくれるが積極的に俺のメス堕ちポイントを溜めてこようとしている節がひしひし感じられる。直で「女の子になった方が楽しいですよ？」とかも言われたし。



ガーネットも同様で、彼女については性別そのものにこだわりが無いようだ。「性別ってそんな気にすることかい？ 交わった時に子供が出来るか出来ないかくらいの違いだろう」「私は愛すれば女でも男でも抱くよ?」と言い切られてしまい、自分の常識ごとちやぶ台返しされた気分だった。さすがハーレム主の先輩である。

モモはもともと男という存在が苦手だからか、俺が女になった事でスキンシップ出来るようになったのが単純に嬉しいらしい。嬉しいけど嬉しくない。複雑。

……あれ。

よくよく考えなくても、俺が女になった事を重要視している仲間が一人もいない!?

アシユレについても彼女としては、こう。精神的なつながりを重視しているというか……。

俺が望むなら男に戻るための協力はするが、女のままでも愛してくれるってスタンスのようで。つまり極論、男じゃなくてもいいってことだ。

俺そのものを愛してくれてるって状況は贅沢なんだけど、それでもこう……やっぱり複雑だよ!!

『だからさっさとメス堕ちした方が楽だって。むしろお得?』

(黙れよこの悪魔が)

『悪魔っていうか、魔王なんだけどね。元。……でも君さあ、悪魔って表現するということは、僕の発言を甘言と認識しているってことだろう? 悪魔のささやきってやつ。こうして見ていると君の場合、僕の言葉など無くとも耐えるだけ無駄だと思うけどね。一年かからず堕ちるんじゃないか?』

(堕ちてたまるか!)

『たった一日で職業階級クラスステージをあげた奴が良く言うよ』

(ここ数週間は耐えられてる!)

『一日目に比べれば、だろ。着実にポイントはたまっている』  
(うぐぐぐぐ……！)

否定できずその発散も出来ず、俺はただただ鼻息を荒くしつつ仲間達の先頭をずんずん歩く。

(つーかさあ！ 普通、メス堕ちって言ったら男にどうこうされてするもんじゃねえのかよ!? そっちは普通にあり得ないって言うのに、女の子まで範疇に入ったら俺的TS唯一のお得ポイントである百合なお楽しみも出来ねえのは詐欺だろ！)

『受け入れたらすぐに出来るよ?』

(それが出来ないから嘆いてんだっつの!!)

『ところでミサオ。君、この世界に来る前は十六歳だったはずだよね? 【職業：<sup>アーケレディ</sup>女神】のことをエロゲっぽいとか言ったりメス堕ち展開の作品を良く知ってるっぽかったり……隠れてR十八作品見てたでしょ』

(!!)

『……うわ、すけべ』

(あーあーあーあー!! やーめーろーろーろー!!!)

こいつには頭の中身筒抜けだから俺が見てきた作品全部知られちまう! やめる質問するな考えちやうからあああッ!!

俺はこうして頭の中の絶叫を隠すべく、日々無駄に表情筋だけが鍛えられていくのだった。

「お、もう端まで来たか。あとちよつとだな」

魔王の相手に疲弊しつつも、目的地までの道中はなんだかんだ順調である。

俺達が現在向かう先。そこは鋭角に地の底へと続く断崖だが……宙に足を踏み出した途端、ぐるりと重力が回転し俺は崖の側面を踏み

しめた。今はこちらが地面なのだ。

「断崖都市へ行くのは久しぶりですね」

一人だけばさばさと翼を動かし宙を移動していたシャティも、断崖エリアに入れば体の方向が九十度変化する。

断崖都市ベテルキクス。

そう呼ばれるエリアがこの大渓谷の中ほどに存在しており、都市へ続く道はこうして崖を歩けるように魔術が施されているのだ。

「ああ。あそこならきつと、今のミサオにもいい装備が揃う」

「ついでにその姿での冒険者登録もしておいた方がいいね。冒険者証が使えないのは不便だろう？」

「あー……。まあな」

賢者の元へたどり着くためには徒歩でいくつかのポイントを通過しなければならぬが、ベテルキクスもそのひとつである。充実した商業施設もそろっているの、この体に合わせた装備や服を見繕うつもりだ。

……ちなみにここ数週間、俺は着替えてないし風呂にも入ってない。

汚いというなかれ。一応体は最低限の清潔さを保っている。

シャティが使える魔術に身を清潔に保つものがあるから、現在それに頼りきりだ。本来ダンジョンへ潜った時などの緊急用なんだけだな。

性別の変化した体。

一日目は混乱が勝ったが、いざ冷静になって向き合おうと、そうそう慣れるものではない。

トイレは流石に我慢できないけど、まあ見なくてもギリギリ用を足せる……ようになった。

だが着替えをすればもろに自分の体を直視しなければならない。せめて新しい服を買うまでは！　と言いつつ、俺はまだ自分の体がありようから目を背けている。

『いくら便利な魔術があるからって、本当に意気地なしだねえ君。受け入れなよ情けない』

(お前が居る前で着替えたくないってのもあるんだよ！ 変に実体化なんか出来るようになるもんだから視線が気になるっつの！)

『気にしなくていいのに。僕は君なんかよりよほど見慣れているから、ミサオの裸を見ても何も感じないよ』

(唐突に自慢された。何、俺と違って女に困ってないって!? おうおうおう、言うじゃねえか！)

『涙目で凄まれても可哀そうになるだけなんだけど。……自慢でなくてただの事実だよ。心が狭いね、英雄くん』

……この調子だから、柄にもなく手記なんてももの書き始めたんだ！  
いつつもうるさくてかなわねえ！

それに気にするなと言われても、まだ俺にとってこの体は他人みたいなものなんだ。

裸を見られそうになった時、必要以上に隠すのも見知らぬ女の子が裸を見られている気分になって。……こう、申し訳ないというか、すわりが悪い。

(うう……でも着替え買ったら、いよいよ着替えなきやな……)

そう。いつまでも先延ばしには出来ないのだ。

俺は深く長いため息を吐き出しながら、暗い崖底を背景に燦然と生活の明かりを燈している断崖都市を眺めるのだった。

## 18話 ▶ 雌伏（魔王視点）

”それ”は淀む意識の中で瞑目する。

そうすれば仮初の賑やかさは遠のいて、深く深くへと沈んでいき……己がどういった存在か再認識できるのだ。

厄災の魔王。それが呼び名だった。

魔族としての個体名もあった気がするが、生まれて間もないころに発現した運命に吞まれ、それもはるか彼方の記憶。

……否、運命などという陳腐なものに踊らされたのではない。自ら望んだのだ。

呪いあれ、呪いあれ、呪いあれ。

強き者も弱き者も幼い者も老いた者も女も男も人間も人外も、全て噛みちぎってすりつぶして、己が呪いの坩堝<sup>るっぼ</sup>たる腹の中に飲み下すのだ。

そして最高で最悪の最期を手に入れる。信望していれば自分たちは助かるなどと愚かにも信じる同族もろともに。

それら全てを悦楽と感ずる精神は、前世の記憶があらうと人のモノではありえなかった。

悪徳の象徴。世界そのものを厭う呪詛の塊。

それが存在そのものを”魔王”と定義されたモノの本質。

……しかし、そんな毒物を身の内に宿しながら正気を保つ阿呆が現れた。

（本当に、あれはどこまで呑気で鈍感なんだ？）

魔族の歴史で伝え聞いていたように単独で魔王を倒しうる英雄。

それが目の前に現れ立ち向かってきた時、初めて世界を呪う以外の

楽しみを見出した。

真正面から戦い、敗北する。

そのこと自体は屈辱だったが、生まれてこの方、己に比肩しうる存在に出会わなかった魔王にとって英雄の魂は魅力的だった。

いったいどんな想いでここまで来た？　どんな気持ちで勝利を渴望した？　どんな望みを抱いている？

……それをぐちゃぐちゃにしてやったら、どんな顔をする？

そんな喜びを抱きながら最期の力で呪いをかけた。

しかし訪れた悦びは魔王が想定していたものとまったく異なっていたもので。

(英雄どころか俗物で小物もいいところだよ。異様にチヨロいし)

英雄の蓋を開けてみれば、目の前の事しか考えていない、考えられない阿呆であった。

まず全世界を汚染してもおかしくない呪いを受けて性別が変わるだけなどと、想定外である。

呪いそのものの強さを表すように引き寄せた事象は「神」にも至ることが出来る強力なものであったが、その根本が「モテて女の子といちやいちやラブラブしたい」という望みなのだから引き寄せられた破格の職業も憐れである。

その職業というのがまた、かつての厄災の魔王が滅亡寸前まで追い込んだ人類の救世主なのだから皮肉なものだ。

加えてその俗的な小物は、ある意味だけでは大物と言えた。寄生されたのだ、さっさと出て行けだの、うるさいだの。

身の内に宿る魔王に向かってぎゃーぎゃー騒ぎこそすれど、厭っている気配は感じるのに嫌悪が伝わってこないのだ。

それは男の意識が高潔だからとか、そういったことでは一切ありえない。

(こいつ、慣れやがった)

それが魔王の見解である。

驚くほどの順応性。

英雄たりうる力を世界の壁を超えた時に手に入れたようだが、男の最も優れた能力はそれだろうと魔王は分析する。

普通自分の頭の中で他人の声でしたら。自分の中に異物があるとしたら。自分の考えが全てだ漏れていたら。

……狂うないし、少なくとも凄まじい嫌悪感に襲われるはずだ。

しかも身の内に巣くった存在は、同郷の魂とはいえ呪いの煮凝りのような世界の怨敵である。

だというのにあの男、たった一日で器用に魔王と脳内会話をしている。

魔王ロールだのなんだのと男に語ったことに偽りはないが、いくら気さくに振舞おうと男は魔王がしてきた所業を知っているだろうに。

暇つぶしに生き物の生活圏を焼いた。

暇つぶしに世界を毒で染め上げた。

暇つぶしに争わせ見物した。

皮を剥ぎ、肉をそぎ、骨を砕くように丁寧に。

存在を侮辱し、尊厳を奪い、生命そのものを否定した。

それらの行為に快樂以上の意味はなく、二度目の最期を迎えるまでの最高に贅沢な暇つぶし。

方法は様々だが、軽く思い出すだけでもこれだけの事をしている。

そして魔王はそのことに全くの罪悪感を抱いていない。

女にだらしない英雄に正論でもってつつこみなど入れているが、そんなもの魔王からしてみれば悪行とも言えない可愛いものだ。

力が削げたことで前世の記憶が全面に出ているが、本質は未だ変わらない。

(……それが君の魂に居座っているモノの正体だよ？ ミサオ)

だというのに魔王が読み取ったミサオの嫌悪の程度と云えば

「わっ、カメモシひっついてきた！」くらいのもの。

都合はいいが不服である。屈辱である。この魔王をカメモシと同列扱いとは。

そう。都合は良いのだ。

(いつまで耐えられるのかな)

クスリ、と嗤う。

傍から見れば呪いが転じて神へと至る祝福を手に入れたすさまじく幸運な男なのだが、やはりそれは呪いである。

「どっちにしろ僕に損は無いんだよね」

女になってしまった事で慌てふためく様子がめちやくちや面白いなど眺めているが、その実感を増していくのはこれからだろう。

自身の性別が変わった事をじわじわと本質的に理解してきた時……あの鈍感男は耐えられるのか。見ものだ。

「世界丸ごとに対して能天気鈍感スケベ男一人が死出の道連れってのはみすぼらしいけど、まあ悪くもないかな」

あわよくば精神崩壊してくれないだろうか。

尊厳を奪われボロボロになっていくところが見てみたい。

そして耐えられず心か体が死んだとあらば、それを絡めとって共に魂を連れて逝く。

もしくは。

順応性が化け物すぎて、なんだかんだメス堕ちしきって「女神」という最高職クラスを手に入れたなら。

それは職業クラスを結び付けている呪い、魔王とのつながりも完全に溶け合い交わることを意味する。



ともなれば、こうして現在は居候に身を落としている身なれど……  
体も精神も魂も、乗っ取ることが可能だろう。

共に死ぬか。乗っ取られるか。英雄に残されている道は極論、その  
ふたつだけ。

ミサオは知らないが、彼は未だに窮地に立たされているのだ。

彼の魂に憑りついた時点で、魔王の勝利は確定していた。

「僕は魔王だぞ？　もつと警戒心を抱けよ、バーカ」

現状どうすることも出来ないにしても、せめて無視をすればいいの  
に。話しかければ絶対やかましく言葉が返ってくる。

本気で心を閉ざせば所詮、男曰く寄生虫である魔王からの干渉は不  
可能だ。だが男は当然のように反応する。

最終的に全てを奪われることも知らないで、実に呑気だ。

しかも、だ。

ぞろりと少年のようだった魔王の体が溶け、再構築される。

白い面おもてに桜色の唇、切りそろえられた艶やかな黒髪。セーラー服を  
纏う体は非常に華奢だ。

瞳は美しい黎明色だったが、それはすぐに濁って光を飲み込む。

「呪いが強まって僕の深層心理とリンクしただけなのに、運命的な夢  
だと思ひ込んだ上に……惚れただっけ？　僕に！　あつはははは！

はははははははははははは！！　馬鹿な！　魔王だぞ、僕は！」

少女は心底可笑しそうに笑う。

その体はすぐに崩れ、再び少年に似た幼少期の姿を形作った。

「チョロい！　君は本当にチョロいし馬鹿だよねえミサオ！　あはは  
はははははははははは！」

本人は嘲っているつもりだろうが、その笑い声は純粹に楽しそう  
だ、と。もしこの場に他の人間が居たら、そう評するだろう。

頬は紅潮し、瞳もわずかに光を取り戻している。

巨大な湖に沈む瓦礫の群れ。

己の内側に広がる世界の中で、みすばらしい王冠を頭にさせた麗しの魔王は笑う。

そんな中。

しばらくすると、中心の瓦礫に座する魔王にざわざわと黒いものが這いよってきた。

それは髪の毛に似た黒い束なのだが……よくよく見れば、それは黒く小さな腕の集合体だと分かる。

腕はうごうごと蠢いて魔王の体に纏わりつき、どこかへ引つ張って行こうとしていた。

それに動じず、魔王は足を組み口端を吊り上げて鷹揚に述べた。

「まあ待ちたまえよ。まだそっちに行く気はないんだ。せいぜい今は、僕をここに縛り付ける役割に甘んじるんだね」

黒の集合体。それは絶え間なく怨嗟の声を放っているが、絡みついてくる鬱陶しきこそあれど魔王にとってはさながら素晴らしいオーケストラだ。

魔王は閉じられた世界で孤高に笑む。

「呪いが成った時点で君は僕の物だ。せいぜい僕の手中に収まるまで、愉しませておくれよ」

指をぱちんと鳴らせば、その姿は再び美しい少女へ変わった。維持することが難しくとも、それが矜持だと言わんばかりに。

「僕に惚れたんだらう？ だったらそれは、君にとって幸福だ」

呪いあれ。

祝福あれ。

魔王と呼ばれたそれは、今はただ雌伏の時を過ごす。

# 19話 ▶ 断崖都市く俺は下着イベントから逃げました



せつかく手記をつけはじめたのだ。これからは訪れた場所の記録もつけて、俺だけの冒険の書にしよう。

今までそんな余裕が無かったとはいえ、記録を残していなかったことは残念に思う。

けつこういろんな場所冒険したのにな。

まあそれはこれから記録していけばいいだけの事だ。

今日訪れた場所は断崖都市ベテルキクス。

リオン大渓谷の中にある大都市だ。

中というのは文字通り、中。

渓谷を降りていくと、岩肌にはぽっかり口をあけている。

土妖精ノームの魔術により歩けるようになった崖を垂直に下って行くと、暗がりの中に燦然と明かりがともる場所が見えてくる。

それは俺が元居た世界の大都市の夜景に引けを取らない、と思う。

こちらは全部魔法石による明かりなのだが。

赤、オレンジ、紫、緑、青と光の色は様々。

全体的に夕方が夜みたいに暗いし地形も複雑だから、始めはよく迷ったものだ。

ここは遠くから見ると大きな竜が口を開けているようにも見える。

魔法石の明かりはその上あごにもずらりと並ぶが、なんとそこにも人が住んでいるのだ。

崖と同じく土妖精による魔術で重力が反転しているらしい。

上部と下部は巨大な植物の根を利用した道で繋がれている。

そんな地形なものだから、一度迷ったら本当に何処にいるか分からなくなるんだよな。

最初に来た時は崖を歩きで降りられるなんて思わなかったし、こんな場所に人が住んでいるとも思わなかったから驚いた。

ここにもともと住んでいる住民は土妖精とドワーフがほとんど。

彼らの集落に迷宮ダンジョン攻略目当ての他種族が寄り集まって発展した場所なのだと言ダンジョンが教えてくれた。

そうそう。ここ、迷宮もあるんだよな。けっこうデカめの。

先を急ぎたいしまだ金に余裕はあるから今回は寄らないつもりだが、珍しい鉱石が迷宮魔物からドロップするから結構楽しい。

その鉱石を持ってドワーフの工房を訪ねると、面白いものを作ってもらえるのだ。

そんな街での目的は賢者の元へ行くためのポイントの通過と、俺の着替え及び装備調達。

加えてこの姿での再冒険者登録だ。冒険者証、便利だから無いと不便だし。

さて宿もとつたし、これからそれらもろもろの用事をすませに出発だ。

残りの記録は帰ってきてから。

シャティが妙に張り切っているが、間違っても女の子の子した服を買わされないよう頑張ろう。

【俺のチートハーレム記、○ページ目の記録より】



そこかしこから賑やかな音楽が聞こえ、人々の喜びの声が満ちている。

祭りの様相を呈した有様はここに来るまでの町、村、集落と同じで、

ここでは人口も多いからか魔王討伐から数週間経った今でも喜びの宴は続いているようだ。

なんの宴かって、当然それは厄災の魔王が倒されたことを祝うもの。

誰が倒したかなんてみんな知らないが、やはり黒星草が枯れたことで厄災の魔王が居なくなっただけは知れ渡っているらしい。

こういうの見てるとさして使命感も正義感が強くない俺でも「ああ、戦って良かったな」って思うんだけど……。

その魔王が俺の中に居るとか口が裂けても言えないぜ。

「ふう……。えらいめにあったな……。疲れた……」

「ミサオママ、だいじょうぶ？」

賑やかな祭りの様子を見ながらも、出てくるのはため息ばかりだ。

けど愛娘同然のモモが気遣ってくれたから、疲れながらも顔は自然と笑顔になる。

「おー、モモ。大丈夫だぞ。それより何か食べたいものとかないか？ パパがなんでも買ってやるからな！ パパが」

『もとの君の見た目だったら軽く通報ものだよね、その発言』

（お前からの俺の元の姿評価、そんななの!?!）

『もとの君、無駄にデカいしガタイがいいからその子と並ぶと犯罪者じみてるんだよ。なにより表情がデレデレで犯罪者臭すぎい』

道なりに並ぶ出店を見ながら隣を歩くモモに「パパ」を強調して話している、魔王野郎から不当な評価を下される。

魔王に犯罪者臭すぎいって言われるのなんなんだよ！ マジ遺憾の意。

現在俺はモモと二人でベテルキクスの繁華街を歩いていた。

……というのも、俺がシャティとアシユレから逃げてきたからだ。

遡る事、数十分前。

町に入って宿の確保だけすると、俺達はさっそく買い物へ行く運びとなった。

……その買い物初手から俺にとって試練すぎたわけだが。

「わたくし、ずっつと我慢していたのです。覚悟なさいませ、ミサオ様っ！」

「へ？」

シャティにそう言われ腕をがちりホールドされたと思つたら、反対側をアシユレにもかためられ……連れていかれたのは下着屋だった。

俺は当然大絶叫した。

「い、いいってば！俺はこのまんまでいいってばあああッ!! まだそこまで心の準備が出来ていないって！せめて他の装備からでもいいじゃんっ！」

「ダメです」

「駄目だよ」

ばっさり却下された。

「ミサオ様、何週間わたくしの清浄魔術に頼りつきりでした？それはそれでかまわないのですが、着替えとなれば話は別です。特に下着！もう、もうもうもう！女の子なんですからちゃんとしなくちゃダメですよ！」

「女の子じゃないし！」

「心はどうあれ体は女の子です」

再度ばっさり言われた。

やめて。俺の心はもう赤ゲージだよ。

一応、あれだ。ノーブラは流石に俺もまずいと思って（俺だったらノーブラの女が居たら絶対見る）適当な胸鎧をつけて誤魔化していた。けどシャティとアシユレにしてみれば、それがどうしても気になっただけらしい。

俺の気持ちを考えてここまで我慢してくれたのが彼女らの慈悲だ

ぞどガーネツタに言われてしまったけど、その慈悲もつと継続しても  
らいたかった。

どうか。どうかお慈悲を……！

「せっかく綺麗な形をしていますのに、そのままでは垂れて形が崩れ  
ます！ ミサオ様のお胸元は大きいのですから特にですよ！」

「ミサオ。鎧では下着の代わりにならないよ」

彼女たちの攻めの姿勢は変わらない。

俺もなんとか抵抗を試みようと思口を開くが……。

「でも、その！ まだぬぐ覚悟が」

「ご安心召されませ。ミサオ様が脱げないなら、わたくしが脱がせま  
す！ まず大きさをちゃんと計らねばなりませんしね！」

「うえ!?」

藪蛇った。

「アシユレ、押さえていてください」

「承知した。ごめんね、ミサオ。でも清浄魔術も万能ではないし、汚れ  
は少しずつ溜まっているんだ。……言っては悪いが、流石に少し臭い  
も、ね。清潔にしなければ君の健康にも悪い。なに、一度脱いでしま  
えば慣れるものさ」

「それは最近モモがちよつと距離とつてたから俺も気にしてたけど！

でもお願い待つて待つて待つて！」

「待ちません。ふふふふふふふ。ベテルキクスは色んな職人が居ま  
すからね！ 下着のワイヤーの加工もこの辺では随一です！ 草原  
都市フロキオンとの交易も盛んですから、良い布も揃っています！

ミサオ様の体にぴったりりの素晴らしい下着を作ってもらいますよ  
う！ 店員のお姉さま、よろしくお願いいたしますわ！ 金に糸目はつ  
けません！」

「かしこまりました」

鼻息荒いシャティと、ほがらかな笑顔なのに有無を言わせない雰囲気  
でしつかり俺の脇を押さえるアシユレ。

そして上客を見つけたとばかりに、にっこにこの店員。



そんな女性陣に囲まれた俺は……逃げた。

魔王を前にしても一步も引かなかった俺でも下着屋には敵わなかったのである。

短距離転移魔術まで使って本気で逃げたわ。

そんなこんなでの現在である。

「いずれは向き合うにしても、なあ。心の準備もしたいし、先に冒険者ギルトだ、冒険者ギルト」

『心の準備はたっぷり数週間あったと思うのだけどね』

（うっせ！　そうだけど……あの迫力でこられたら、普通に怖いんだよ！）

『僕、これ言うべきかな。やあい、ざあござあこ♥　へたれの英雄くん情けない♥』

（このシヨタガキがよ！　ぐうの音もでねえのがクソ腹立つな!!　ちくしょうっ！）

魔王の煽りにやめればいいのに反応してしまう俺は、現在モモと共にベテルキクスの冒険者ギルドへと向かっていた。

何故モモが居るかといえば、下着屋から逃げ出した俺を真っ先に見つけたのがこの子なのだ。

もともとから優れている抜群の感知能力を遺憾なく発揮したモモだったが、特段連れ戻す気は無いようなので一緒に行動している。

……見つけられたとき「今のミサオママ、臭うからみつけやすかった」と言われて心に致命傷を負ったので、登録が終わったら手ごろな店で着替えを買おうと思う。

シャティ達に見つかる前に、さくつと。

ちなみにガーネットだが、家族へ土産を買いたいからと下着屋へ行く前から別行動中である。なんでも旦那さんの一人がベテルキクス

特産の酒が好きなんだそうなの。

ここデカイ都市だからガルーダ便があるんだよな。買い物して、それをそのまま送りたいんだろう。

「お、あつたあつた」

賑わう通りを歩いていると、比較的目立つところに冒険者ギルドを見つけた。

……………ふっふっふ。

実は冒険者の再登録、結構楽しみだったりする。

レベルという概念は俺にしか見えないが、この世界にも強さを視覚化できる方法がある。

その一つが特殊な金属で作られた冒険者証なのだ。

俺は自分が女になった事を知られたくないけど、冒険者証は無いと不便だから再登録するんだが……。

このイベントがわくわくしないはずがない。

だって最初に登録した時と違って、今の俺は最強クラスの冒険者！

少し前にレベルを確認したらカンストだと思いついてたレベル余裕で超えてたからな……………！

正直、期待値……………大。大・大・大！である。

これは、あれだろ。お約束のあのイベントができるだろう！

今の俺の見た目なら確実に舐められるだろうから、そこからの……………あれを！ぐふふ。

「な、何い!? こんなお嬢ちゃんがきがね黄金級だとい!」

そうそう。例えばこんな……。  
ん？

妄想を膨らませていた俺は、何やらざわついている冒険者ギルドを覗き込んだ。

ごつい冒険者たちの視線の先に居たのは……この場に似つかわしくない、可憐な意匠の青いドレスを身にまとった女の子。艶やかでふわっとした巻き毛は見事なもので、色も輝かしい金色だから遠目にも目立つ。

しかも木箱に乗ってようやく受付に届くくらいの、小さな子だ。  
ビスクドールってあんな感じだろうか。

夢で見た少女とはまた違った趣の人形を彷彿とさせる容姿に一瞬見惚れた俺だったのだが。

「おーっほっほっほ！ 当然の結果よ！ ふふん。このルリルちゃん様を、そこいらの凡俗と同列に扱わないでちょうだい！」  
(あ、変な子だ。関わらんようにしとこ)

秒で関わるという選択肢を放棄した。

これ以上変な奴に関わるのは勘弁だぜ。

20話 ▶ 冒険者ギルドくな、何イ!?!と驚かれないお年ごろ



【冒険者ランク把握メモ】

▶ 登録名：ミサオ

▶ 冒険者証硬貨色：白金しろがね

▶ 実績：無し

今日は今の姿で新しく冒険者登録をした。

色々あったのだが、疲れたから今日は割愛。全部書くと眠る時間が無くなる。なんだよ本当にもう。

明日は今日ばっくれた下着選びに今度こそ連れていくってシャティとアシユレに念押されてるから、体力と気力を回復しておかないといけない。鬱。もう心を無にして全部店員さんに任せようかな。

さくつと自分で適当な下着と服を仕入れてきたら「サイズがあつていない」と取り上げられてしまった。ナンデ。

それより冒険者登録について記しておこう。

今日はいざ自分が知っている知識を人に説明するって難しいなと思つたから、この機会にまとめておくのも良いだろうし。

魔王の奴も結構世間知らずで色々聞いてきてうるさいからな。

冒険者に発行される冒険者証。

それは硬貨の形をしており、大抵の奴は加工して首飾りなど身につけられる物にしている。

基本機能には「練度」を測るものと「実績」を記録するものがあるが、冒険者としてのランクが上がるとオプション機能も追加可能だ。

「練度」は強さ。

身体能力と魔力総量によってはじき出された個人の力量を色で計測、表現する。

ランクは全部で銅金、赤金、青金、銀金、黄金、白金、黒金の計7つ。

銅が一番下で黒が一番上。俺にとつてのレベルみたいなものだ。ちなみに俺の把握するレベル認識の方は「技術力」まで込みで計算されるっぽい。冒険者証にその機能はない。

だから技術が達人級だけど老いて体が弱っている元冒険者とかは、冒険者証では正確な強さを測れなかったりする。

「実績」は文字通り。

冒険者としてこなした仕事の実績が特殊な文字で記録、上書きされていく仕様だ。

この文字というのが宝石によって刻まれており、加工は冒険者ギルドでしか不可能。偽ることは出来ない。

実績が上がるにつれて宝石文字の石も高価なものになっていくが、こちらは文字を刻む者の好みで決めているとかなんとか。

その二つを総合した上で冒険者としてのランク付けがされるのだ。

こちらは職業階級と同じで、全部で十段階。

俺のレベルなら硬貨の色は間違いなく最初から練度最高ランクの黒金になる。

けど黒金の冒険者はめちゃくちゃ少ないから目立つのだ。これは女になった事を隠したい俺としたらよろしくない。

故に今回は魔力を低下させるデバフアイテムを用いて、白金の冒険者証を手に入れた。これでもかなり目立つし目立つたけど。

でも目立つタイミングは完全に間違えたよな。

俺は「な、なにイ!? こんな弱そうなやつが白金級!?」みたいなイベントを起こしてニヤニヤしたかっただけに、変な子に会ってし

まったので先を越されたし、変な感じになった。

「少しのつもりが書きすぎた。」

「明日もあるし、今回はここまでにしておこう。」

「頑張れ、明日の俺。」

【俺のチートハーレム記 ○ページ目より】



「……………はあ」

俺はまだまだ白紙の多い手記を閉じると、今日の昼間を思い出して深くため息をついた。

+++++

下着屋から逃亡し目当ての冒険者ギルドに訪れた俺は、ざわつく冒険者たちの中心を意図的に無視しながら受付へと向かった。

「つす。冒険者登録したいんですけど」

人ごみを縫って、注目が集まる方とは反対側の受付にたどり着く。受け付けは三つあるのだ。

「はいはい、いらっしやいませませ〜！ 本日はご依頼でしようか〜？」

「いや、だから冒険者登録で」

「おつとつと。それは失礼しました」

俺の挨拶より遙かに軽い調子で迎えた受付嬢。

最初に言ったことをまったく聞いていなかったので再度申し出れば、彼女は軽く目を見開きつつ、小さな体でぴよいつとカウンターを超えてきた。

そして金色の光をまき散らしながら俺の周りをくるくる回る。

……これ、言葉だけで元の世界の奴に説明したら「どんな受付嬢!?!」ってなるだろうな。

けど視覚情報が加わると、その動作は特におかしくはない。

受付嬢は手のひらと同じくらいの、透明な羽の生えた妖精さんなのだ。

この世界の冒険者ギルドは全て妖精が運営管理しており、ギルドマスターなんかは妖精王なのである。

「ふむふむ。一見弱そうですが、身のこなしに隙がありませんね。ひやかしてはいないようで安心しました」

「冷やかしてわざわざベテルキクスの冒険者ギルドには来ねえって」

「いやいや、たまにいますですよ。妖精王様の作る冒険者証は美しいですからね。登録だけしてえ、手に入れたらベテルキクスの職人に加工してもらってお土産のアクセサリーに！　なんて人とか」

「マジ？　まあここで加工してもらったら、そりゃいいもん出来るだろうが」

ベテルキクスはゲームで言ったら中盤以降の街。ダンジョンの難易度も高いから、自然と集まる冒険者のレベルも上がる。

だからそんな歴戦の冒険者が集まるギルドに入って、なおかつ登録するのは観光目的の一軒さんには難しいはずなんだが……。中には居るんだな、そういう奴。

ちゃんと冒険者証について知ってたら、まずそんなことしようと思わないんだが。

受付妖精が言うように冒険者証はとても美しいのだが、一定期間冒険者としての実績が無いと消えて妖精王の元へ返還されてしまうのだ。

だからアクセサリーに加工する事や、冒険者証そのものを換金する目的で冒険者登録しても意味は無い。

冒険者ランクが上がれば実績が無いまま時間経過しても消えないオプションをつけられるんだけどな。

「あ、そうそう」

ふと思いついて、俺の後ろにくっついてきていたモモを振り返る。

……前は身長的に見降ろしていたのに、今は目線が同じなの変な感じだな。

「モモは実績の更新してもらえな？」

「ん、わかった」

俺の言葉にコクリと頷いたモモが自分の冒険者証を取り出す。

それを見た受付嬢の妖精が感嘆のため息をついた。

「まあ。まあまあまあ〜！ その若さで銀金ぎんがねですか〜!! すばらしいですよ〜！」

「……そう？ あっちは、もつとすごいのが出たようだけど……」

妖精の褒め言葉に淡々と返したモモは銀色に紫色の宝石文字が刻まれた冒険者証を受付に置くと、まだざわついている奥の受付に視線を向けた。

注目も人も全部そちらに集まっているので、こちらはすつかすかである。

「ああ。みたいですねえ〜。最初は迷子のお嬢さんかな？ って思ってたんですけど。どうしても冒険者証が欲しいって小一時間ごねられて、渋々許可したらあれですよ。びっくりですよね〜。初手黄金きかねなんて久しぶりに見ました〜」

確かにベテルギクスだと高位冒険者でも青金と銀金あたりまでだもんな、確か。

実を言うとモモは通常形態では銀金レベルだが、獣人としてのス



ペックを最大限生かせば黄金に届きうる力を持っている。

ただ本人がそこまで冒険者というものに執着が無いし、ギルドで力を開放した上での再計測が面倒だという事で銀のままだ。

ちなみにアシユレは黄金で、シャテイとガーネツタは白金。

「あ、そちらのあなたは登録でしたね。ではこちらを噛んでくださいませ〜」

「ども」

両手で抱えて差し出されたのは無色透明の硬貨。これを噛むことによつて力に応じて硬貨の素材が変わるのだ。

俺は周りをちらちら窺うが、残念ながらこちらを見ている奴は誰もいない。

『さつさとすませなよ』

(わーかってるよ！ けっ)

ちよつとは注目されていい気分を味わいたかったなと思いつつ、かみ砕く勢いで冒険者証に噛り付いた。すると変化はすぐに表れる。

無色透明だった効果の内側に虹色の光が渦巻いたと思つたら、それが花火のように弾けて半径一メートルほどに光の粉をまき散らした。

それは幾重にも重なって、一瞬視界が白く染まる。

(おわっ!?)

『なんで驚いてるの』

(いや、もともと色がついてる硬貨がランクアップするときはこんな派手じゃないし……)

最初から高ランクのすごい色を出すとこんな演出あるのか。レベルアップチート持ちの俺もさすがに最初は低ランクからだったから知らなかったぜ……。

(そりゃ、あのお嬢さんも目立つわけだよな。多分似たような感じだったろうし)

でもって。こんな現象が起きれば当然、女の子に向いていた視線のいくつかがこちらに向くわけで……。

「おっ、おっ、おおおおおおおっ!」

一番驚いてるのは受付の妖精だ。

見る見るうちに変色し、白金へと染まっていく冒険者証を見て……。彼女はどこからか、福引とか当たった時に鳴らすベルに似たやつを引っ張り出した。

カランカランカラン！ と、ギルド内にベルの音が響き渡る。

「おおおおおおお！ でーまーしーたー！ 出ましたよー！ このララベルの受付からも、超大型新人がでーまーしーたーよー！ ひよっほー！」

(テンション高いな!?)

妖精も性格はそれぞれだが、この子のテンションは特別高い。ほどほどに目立って褒められたいなんて思ってたけど、思ってたのとちよつと違うな!?

こんな福引当たったみたいなき感じじゃなくてき……！ もつと、こう……！ なんか、もつといい感じの無かった!?

しかし、困惑する俺の耳に周囲の音が届くとその内容は……。

「何イ!? 白金だと!? あ、あんな小娘が。今日はどうなってんだ!？」

「白金……俺、初めて見た」

「二人とも女の子……。なに、ドラゴンかオーガにでも育てられたのか? どう生活してたら黄金だの白金だの出るんだよ!」

「俺、十年冒険者やってて青金だぜ……自信無くす」

「何かの間違いじゃないか?」

再度ざわめきを増したギルドの中。

全てを聞き取れないが、いくつか耳に入った声に「これこれ、これだよ!」みたいな気分になって口の端がもによもによと緩む。

おっと、いけねえ。ここで変に嬉しそうな顔したら格が下がる。キリっとしてないとな!

『ほんっと、英雄くんは小物だよね性格が。実力はあるのに』

(え、なに。気分が水差す天才でいらっしやる?)

『いやあ、それほどでも』

高揚した気分もすぐ魔王に鎮火されちゃったけどな。お約束だから言わないけど褒めてはねえよ！

ああ、もう！

もうちよつと今の気分に戻りたかったのにー！

「すごいですね！ 私、久しぶりに興奮しちゃいましたあ！ どうやってそんな強くなったんですか？！ 白金なんて全世界で百人も居ないですよお！ わく！ レア！ サインください！ 今後の活躍に期待してます！」

「はっはっは。気が早いですよお嬢さん」

回復した。手放して褒めてくれる妖精ちゃんが可愛すぎる。

俺は上機嫌で差し出された紙にサインを書こうとしたのだが……その時。くいつと服に裾がひっぱられる。

「ん？ どうした、モモ」

当然モモだと思つて振り返つたのだが……そこには誰もいない。

肩を叩かれ反対側を振り返るとそこにいたのがモモで……じゃあ服を引っ張つたのは誰だ？ ともう一度反対側を振り返つて、今度は視線を下に落とした。

そこにはきらつきらした赤色の目でこちらを見上げてくるちんまい金髪の女の子。

「……えーと？」

しゃがんで視線を合わせるべきか？ 子供に対する対応がよくわからなくて一瞬固まっていると、女の子は満面の笑みで俺に言い放つた。

「あなたのそれ、とくつても綺麗ね！ ルリルちゃん様に献上する権利をあげるわ！」

「……は？」

その数時間後。

見知らぬ口りに懇切丁寧に冒険者とは何か説明した上に、何故か  
ケーキを奢らされている俺が居た。  
何で???

## 21話 ▶ 謎の金髪幼女くホールケーキ二個分奢らされた

光り輝く魔石で作られた花が色とりどりに咲き乱れるフアンタジックなカフェっぽい店。

そこで俺はなぜか幼女にケーキを奢っている。

奢っているというか、奢らされているというか。

目の前に座っているのは、ふわりと広がる柔らかそうな金髪に青いドレス、赤い瞳の美幼女だ。

見た目はたいへんお可愛いそれが、我が物顔の満面の笑みで数種類のケーキをぱくついていた。

人の金であることなどまったく考慮していない食べっぷりだが、そもそも小さな体のどこにそんな化け物みたいな量入るんだ??? という疑問が尽きない。

俺なら一個食べれば満足というか、それ以上だと胸焼けするつてのに幼女はすでに二ホール分くらい食っている。

いっそ清々しくはあるものの、見てるだけで腹いっぱいだわ……。見た感じ七歳くらい……。かな。小学一年生とか、多分そんなくらい。

いつ自警団に通報されるかと若干ひやひやしているが、今のところ周囲の女性客からは「似てないけど姉妹かしら? 仲いいわねえ」みたいな視線が送られている気がするので大丈夫だと思う。思いたい。

実は「やだ似てないわ。きつと姉妹じゃないわ。誘拐よ」とか思われてたりとかしない……。よな!? モモだっているし、少なくとも怪しまれてはいないと思いたい。

この子の保護者は何処だよ……。早く引き取りに来い!

「……ってわけだ。冒険者証はそう簡単にあげたり、交換できる代物じゃねえんだよ。わかったか?」

「あら、そうなの。綺麗だから欲しいな〜と思って手に入れたのだけど、しばらくすると消えちゃうなんて詐欺だわ」

「詐欺じゃねーよ！ 冒険者として実績積まないんならギルドにとって穀潰しだからクビってだけだ」

「ふうん。でも残念。あなたの冒険者証、欲しかったのにい」

「ゲーキで我慢しろ」

「はあい」

ギルドで冒険者証を献上しろなどと言われた時には見た目の良さなど関係なく「なんだこの高飛車なガキ」としか思えなかったが、餌付けしてみれば反応は思いのほか素直だ。

って、あくあ。こぼしてるこぼしてる！ 上品な身なりのわりには雑だなこいつ！

「おいおい、綺麗なドレスが汚れちまうぜ。あと顔にクリームついてるぞ。ふいてやるから、こっちむけ」

こぼれた食べかすをつまんで取り除き、べっとり幼女の顔についているクリームを塗れ布巾でぬぐってやる。

……頬つぺたもちもちしてるな。

『この子もとびきり綺麗な容姿だけど、さすがにチョロい君でもデレないんだ』

(つたりめえだろうが！ 俺をなんだと思ってるんだよ！)

『惚れやすくてチョロい雑魚』

(俺に負けたやつがなに言ってるんだあああ!? あゝ!?)

『強さ的な意味で雑魚って言ってるわけではないの、わかってるだろ?』

(………………。あゝあん!?)

『はい、そこで間を挟んじゃったから君の負けー。凄んでも怖くないし、どっちかというところも負け犬の遠吠え？ 心の声で濁音出せるのすごいねえ。えらいえらい』

(はあー!? 負けてねえし!! 誰が負け犬だ！ 負け犬に負けた雑魚はお前だろうが!)

『今のだと自分のことを負け犬って認めたことになるけど?』

(ああ言えばこう言う!)

落ち着け俺。こいつに付き合っていたら精神力がいくらあっても足りない。

けどな、魔王。確かにこの子は一見天使かな？　って見た目してるが、相手は幼女だぞ。

ならば……俺達には鉄則があるだろう！

(ロリには紳士たれ。イエスロリシヨタ、ノータッチ！　当然だろ)『うわっ、言い方。それ本当に言う人初めて見た。なに、自分ではかっこいいとか思ってる？』

ドン引かれた。

うっせーやい、うっせーやい！　他に言い方が思いつかなかったんだよ！

ノータッチ、は貫けなかったが(ここまで抱っこで運んできて今も口もとをぬぐっているため)幼女には紳士であることが求められるのは基本！

断じて邪まな視線で見たりなんかしないぜ。

……けど、なんで俺が世話焼いてるんだろうな。

何故こうなったかといえば、幼女本人の駄々と冒険者ギルドの奴らのせいだ。

この金髪幼女、冒険者証の中でも三番目のランクである黄金きかねを出すほどだからただ者ではない。

体は子供らしくなよちいから、想像するに桁外れの魔力をもっているとか、魔術方面の強さがあるとかそんなところだろう。

だがそんなただ者ではない幼女が冒険者ギルドに入ったのは、単にたまたま見かけた冒険者が持っていた冒険者証が綺麗で自分も欲しくなったから、らしい。

俺は再登録で手に入れた白金しろかねの冒険者証をよこせと言われたわけだが……。

当然断つたら、その場で床に転がり「やだ！ やだ！ ほしい！  
ルリルちゃん様のと交換してあげるから、ちようだい！」と駄々をこ  
ね始められてしまった。

ほとほと困っていたら、受付嬢の妖精に「おめでとうございます！  
さつそく冒険者としてのお仕事ですよ！ さあ、初心者さんに冒険  
者とはなにか教えてあげてくださいい」とかなんとかいいように押し  
付けられてギルドの建物からほっぽりだされたのである。

いや、俺も今登録したばつかの初心者だろあんたから見れば！ そ  
う思ったけど「面倒見てやれよ白金のお嬢ちゃん」「黄金だす力のある  
子に何か言っても俺らじゃ返り討ちにされるかもしれんし」とか  
よおお……！ 他の冒険者の連中まで言い出しやがってよ……！

押し付けやがって、マ〜ジで納得いかねえ！

今の俺には実績こそないが、白金ランクだぞ！ もつと敬えよ！

『押せば押し切れる奴だなんて思われたんだよ。強さはともかく、性  
格が舐められてるね。君、分かり易いし。その子の手を振り払えな  
かった君の負けじゃないか？』

(ぎいいいいい!!)

仕方がないからギルド近くの飲食店に入り、駄々をこねる幼女を甘  
いもので懐柔。その後冒険者とは、冒険者証とはなにかをかみ砕いて  
かみ砕いて説明し終わったのが今さつきだ。

つ、疲れた……。

幼女は納得したようだが、ケーキを食べる手は止まらないし勝手に  
追加注文までしやがる。凄まじく凶々しい。

あと。

「……………」

モモがさつきからめちやくちや不機嫌なんだよな……！

ど、どうしよう。この空気。



モモは途中まで何も言わず見守っていたのだが、少し前から視線がひりついてきているし、尻尾の毛も逆立っている。

分かり易くめっちゃ機嫌悪い。どうした。

と、ふいにモモが幼女の口元をぬぐっていた俺の腕をぐいっと引き寄せ抱きしめてきた。

「ミサオママは、モモのママだから」

(キリっとした顔で何を言うかと思えば、それ!?)

いやママではないが。パパだが。

「え、二人つて親子なの？ でもあなた獣人じゃない。しかも珍しいキメラ種。……ああ失礼？ この呼び方はあなた達にとって不愉快なものだったわね」

「それは別にいい。でも、ママはモモのだから。とらないで」

「まあ、独占欲？ 可愛いしいわね。世話を焼かれているルリルちゃん様を見て羨ましくなっちゃったのかしら！」

「……………」

「むくれちゃって、凶星？ 可愛い子。ほくっほっほ！ でも安心おし。ルリルちゃん様は世話を焼かれて当然なの。この世全てはルリルちゃん様の下僕！ ママではないわ。下僕よ！」

「散々世話焼かせておいて下僕呼びかよ!?!」

「図々しいけど懐いたのかな、まあまあ可愛いところもあるなと思ったらそうじゃなかったんかい！」

「それでも、ダメ。ママに甘やかされるのは、モモの特権」

「ふうん？ ……ねえ、あなた。良かったらあなたがその子をママと呼ぶ理由を教えてください？ ルリルちゃん様、とおっても興味があるわ」

頬杖をついてニンマリ笑う幼女。

「……………んんー？ さつきから思ってたけど、こいつの態度にちよいちよい違和感を感じるな。」

こう、ただの我儘なクソガキだと考えていたわけだが。

モモに対する態度が少々お姉さんぶってるというか……つーか俺の事も「その子」呼びっておかしいだろ。

子ってなんだよ！ お兄さんだが!?

モモは俺との関係を聞かれたことで張り切ったのか、立ち上がって腰に手を当てむんつと胸を張る。

「わかった。話してあげる」

……お？

なんというか、モモは基本的に人見知りだ。それがこんなに自分から積極的に話すなんて珍しいな。

それだけパパをとられたくないって事か。そうかそうか。可愛いなあモモは。

と思っていたら。

【メスママリんっ♪】

「なんでだよ!!」

「うわっ、なによ」

モモの可愛さにデレデレしていたら、最近耐えられていると思っていたメス堕ちポイントが溜まってしまった。

今のはどう考えても母性でなく父性だっただろうがよ……!?

これは一度腰を据えて魔王にメス堕ちポイントや【職業：クラス…フェイ…メール】の他スキルについて聞かねばなるまい。

あいつ自分は呪いナビだぞって言う割に、普段は俺をおちよくるばっかでこちらから質問せねばろくにナビしやがらないのだ。

思わず机に額を打ち付けると、幼女にドン引かれた。

でも許してほしい。こうでもしないと衝動が発散できないのだ。

ち、ちくしょう……！

しかし俺の反応にも慣れたもので、モモは気にせず自分の話を始めた。

マイペースな子である。

「……モモには記憶が無いの。自分がどこから来たのか、本当の家族が何処にいるのかも分からない。何も分からないまま見世物小屋につかまって、ミサオママに助けてもらうまで、ずっとそこにいた」  
「やだ、獣人奴隷？ 今どき流行らないわ。馬鹿なヤツって居るのね。でもあなたがここに居るってことは当然ぐちよぐちよにすり潰して消し炭にして根絶やしにはしたのよね」

恐ろしいこと言い出したぞこの幼女。なんかこう……表現！ 言い方！

ま、まあいいや。えーと、モモを捕まえていた奴らの事だな。

このままだとあらぬ誤解を与えたまま話が進みそうだったので、俺もちよつと捕捉する。

「国からの依頼だったから、しよつびいて騎士団に突き出したよ。罰はそつちでしてくれたろうさ。……まあ、その前にぼっこぼこにしてやったけどな」

突き出した、のくだりまで眉根を寄せていた幼女に最後ニヤリと笑って付け加えると、たいへん満足そうな笑みを頂いた。

こいつ結構血の気が多いな？ 嫌いじゃないが。

………そう。

俺とモモの出会い、冒険者として獣人奴隷の解放を国から依頼された事が始まりだ。

これは人族の国でのことで、獣人国家と友好を築きたいってのに国内で獣人を奴隷を違法取引やらVIP向けの闇見せ小屋みたいなものやらやってる奴らが居るから、見つけて潰してくれてなものであった。

……今思うと冒険者に頼む仕事か？ って気はする。

何でも屋みたいなところはああるけどさあ、信用とかそつちの面では来は騎士団とか国の戦力で解決するべき問題じゃねえかなって。よくわからんけど。

でもってそれを無事見つけて潰したまではよかったんだけど……。保護された獣人の中で、モモだけが記憶を失っており帰る場所が無かったのだ。

あんまりにも心細そうで、うっかり「一緒に行くか？」と聞いたらものすごい勢いで頷かれて今に至る。

更に名前も無いのは不便だからって名付けたら「パパ」と呼ばれるようにもなった。

色々旅する中でモモの記憶を取り戻すことや、故郷を探すことも目的のひとつとなっている。

「まあ、そうなの。あなたもたいへんだったのねえ」

話しを聞き終えてはわくといった感じに頬に手を添えてモモに同情の視線を送る幼女。

我儘なだけでなく、ちゃんとこういう事に対し同情できる心はもっているらしい。

「でもあなたのように目立つ特徴の子なら、すぐに身元が分かりそうなものだけど」

「だよなあ。初めは俺もそう思ってたんだけど、これが一向にみつからねえ」

「まあ、獣人国家や集落は多いものね。閉鎖的なところも少なくないし」

「そうそう」

……それにしても。最初の駄々やわがままさはともかく、やっぱりなんだか幼女と話している感じがしないんだよな。

なんとなくこの年齢にしてはものを知っている話し方をする。

そして同情をよせられた当の本人であるモモはそのことについては特に気にする風でもなく、ぎゅつと俺の腕を抱き込んでひつつき幼

女を睨む。

「……だからミサオママは、モモのママなの。ママに手を出さないで、おじさん」

「……ん？」

なんか今変な単語混ざらなかった？

俺は「そういえば赤ちゃんが生まれると上の子がかまってほしくて幼児返りするって聞いたことがあるなあ。モモもそういう感じ？かわいいい」とにやけていた顔がさつと真顔になった。

え、なに、おじ……さん……。おじさん言った？

「あら、ばれてしまったの？ 鋭いのね。でもおじさんはやめてくれないかしら！ 一族の中では立派な子供なのよ！ ぷんぷん」

「は？ え……え!？」

待て。

二つの意味で、待て!!

盛大に困惑して二人を交互に見つめる俺だったが……。

「!？」

突如背後に現れた殺気に身をひるがえした。

避けた瞬間、俺が座っていた椅子が木っ端みじんに砕けた。しかもそれにとどまらず、床までが一部破碎され周囲で悲鳴が上がる。

それを成したのは一人の男で……何故か小奇麗な執事服を着ていた。

とても荒くれ者には見えないのに、今の一撃には確実に殺すと言わんばかりの殺意。

だというのに表情は真顔なものだから不気味だ。

「……………」

「ちっ」

何かを問う間もなく、男は予備動作すら感じさせない鋭い動きで脚を鞭のごとくふるう。

それを片腕で受けきると、流して男の懐に飛び込み胸倉を掴んだ。褐色の肌に灰色の短髪、くすんだ灰青色の瞳。

そして一番の特徴は……額からのびる、一本角。

「竜人か！」

掴んだ胸倉を引き寄せて男の腹に膝を叩き込んだ。堅い鱗を感じ取ったが、俺の前では無意味である。

男は息を詰まらせるが、そこで気を緩めて下手に暴れられても困るからな。反撃すら許さず男の首裏に、今度は組んだ両手を振り下ろした。

めきつとなにやら不穏な音を立てながら、男の体からぐったりと力が抜ける。俺はそれを受け止めると、ごろんと床に転がした。

……まあ竜人なら、この程度でどうにもなるまい。

「おお〜」

ぱちぱちぱち。

そんな拍手をしていたのは、モモにおじさん呼ばわりをされた金髪幼女。

「マイヨールを倒すだなんて、なかなかやるのね。闘士ファイターの職業かしら」

「一応それも持つてる。……つーかお前の知り合いかよ！」

「ええ。……マイヨール、起きなさい」

幼女が声をかけると、一本角の竜人がのそりと身じろぎしてからぶるぶる震えつつも立ち上がった。

……手加減はしたけど、タフだな。

「……ルリルベレスぼっちゃま、ご無事ですか」

「それはあなたでしょ？ まったく、ルリルちゃん様が心配なのはわかっただけけど、相手の力量をちやあんと見極めなきや駄目よ？ その前に状況もね。も〜。見た目に似合わず脳筋ちゃんなんだから〜」

「しかし……」

「あとルリルベレスと、ぼっちゃまと呼ぶな！ 可愛くないでしょ？

ルリルちゃん様！ こう呼びなさいっていつも言ってるじゃない  
「……申し訳ございません、ルリルちゃん様」

俺は目の前のやり取りを見つつ、壊れた椅子と床の修繕費と店への  
説明は当然こいつがするんだよな？ と考えることで現実逃避した。  
俺もケーキ食べようかな。

## 22話 ▶ 竜人く新たなチートスキル、マジ捨てたい

「あらあら、どうしたの？ しけた顔しちゃってえ」

そう言つて可憐に笑う金髪の美少女であるが、その正体はおっさんらしい。

しかし俺は未だその事実を受け入れられず、妙にあわあわとした態度になってしまう。

「女の子だと思つてた奴がおじさんだつたらしけた顔にもなるわツ!!」

「ええ？ でもルリルちゃん様、なんにも嘘ついていないわよ？ 騒がれたら面倒だから種族の擬態はしていたけど、この愛らしさはありのままのルリルちゃん様だもの。勝手に騙されたのはそっちだわ」  
そう言うと幼女……ルリルはパチンと指を鳴らした。

するとパキパキと音を立てて柔らかい餅のようだった肌に鱗がわずかに浮かび、ケーキをパクついていた口の中にはずらりと尖った歯が並ぶ。

頭部からは小さく青い角が二本ぴよこんと生えて、赤い瞳の中心……瞳孔も縦長となった。

極めつけに青いドレスの下からはなかなか太くて立派な尻尾が現れて、ドスンと床の上に落ち着く。

ルリルは「見て見て」と言わんばかりに自らの角を指差していた。

……竜人つて、擬態できるんだ。

いやいやいや、竜人だとかその辺はどうでもいいんだよ！

「そうでなくて、服とか喋り方とかさあ！俺が言いたいのは性別だよ性別！あと年齢！」

「それ、貴女が言う？自分の事「俺」つて言ってるじゃない。ルリルちゃん様もこの姿に相応しくて最高に可愛いと思うものを選んで着ているだけだわ。好きな恰好をして好きな話し方をする。なにかおかしくて？」

「~~~~~！もうそのへんは、いい！とにかく俺は男に、しかも年上に奢るような趣味は無いんだよ。ちゃんとケーキ代払えよな！」



「つーかお前いくつだ!」

「みみつちい子。で……なに、年齢? 四十六歳だけど」

「マジでおじさんじゃねえかつ!!」

「失礼ね、さつきも言ったけど一族の中じゃ子供も子供よ! あなたたち人族で言えばじゅ……ゴホン。七歳くらいだもの!」

「子供である事をかさに着る行為を躊躇しねえなお前!! しかも今、十って言いかけたよな? 種族差をいいことに鯖読んでるんじゃねーか!? 見た目は確かに七歳くらいだけど、本当はもつと上だろ!」

「細かい事はいいじゃない!」

ぎゃんぎゃん騒いでいると、店主に頭を下げていたマイヨールとかいう執事服の竜人が戻ってきた。

俺は男をぎつと睨むとルリルを指差す。

「ざつざつこいつ連れてけ!」

「……」迷惑をかけたことはお詫び申し上げます。ですがルリルちゃん様に無礼な態度をとるのはおやめください。ルリルちゃん様は竜王様のご子息ですよ」

「ぶっ!!」

気分を落ち着かせようと飲みかけの茶を口に含んでいたら、とんでもないこと言われて吹いた。

俺タイミングわってるいな!

というか竜王……竜王!?

この世界においてそれはけして将棋のタイトルの名前だとか、そういったものではない。文字通りの意味だ。

『へえ、引きこもっていた竜の王族が外に出てきたわけだ。僕が居なくなつたからかな』

魔王が何か言つてやがる。

竜族……その中には純粋な竜と、人に似た姿をとれる竜人が居る。

他種族に比べて数は少ないが、まあ時々会うかなくらいなのレア度だ。けど竜王や王族ともなれば違ってくる。

……文字通り、竜王は竜を統べる王。その息子ともなれば王子様

だ。

少なくともこんな所でエンカウントする奴じやねえんだよな。真偽はともかくとして!!

「ふふふんっ、驚いたのかしら? まあ寛容なルリルちゃん様は無礼な態度も許してあげるけど」

「……モモ、竜人は初めて会った」

「まあ、そうなの。なら竜の姿も見せてあげたいところだけど、ここは狭いしやめておきましょうか。翼も出せないくらいだし。残念だわあ〜」

「あたりまえだ」

ただでさえさつききの蛮行で「さつきと出てけ」って視線で店の奴と他の客に見られてるのに、そんなことされてたまるか。

というか、ああー! このやろっ、いくら弁償して謝ったからって更に追加注文しやがった! 店員の顔ひきつってるぞ!

「……はあ」

……なんか一人で焦ってるのが馬鹿らしくなってきた。

俺は脱力したまま椅子に倒れるように座ると、店員のおねーちゃんに特大パフェを注文した。

モモも欲しそうだったので追加で更にもう一つ。

食うしかねーよ、こんなん。今ならでけえパフェも食えるわきつと。

俺は店員の無言の圧を無視すると、机に頬杖をつき竜人ルリルをジト目で眺める。

「……で? 竜の王子様がなんだってお供一人だけ連れてぷらぷらしてんだよ。そのお供もさつきまでいねえし」

「撒かれました」

「あんたはそれ堂々と言っているの?」

なんかこの執事、出来そうな男って見た目してる割に色々駄目だぞ。

主人には撒かれるし、見つけたと思ったら一緒に居る人間を前触れ無しに襲ってくるし。

……………。いや本当に駄目だな!!

俺だから対処出来たけど、他の奴だったら死んでもおかしくないからな!?

色々な種族が暮らす割に共存が成っているこの世界であるが、こういったバグった認識や価値観の違いやらには未だ慣れない部分もある。特に強い種族にとっては他種族の命など吹けば飛ぶような軽さであることもザラなんだよな。

そのことに頭痛を覚えながら、俺は新たに来たケーキ(店員の人、もう面倒になったのか最初からホールケーキでもってきやがった)をパクつくルリルを見る。

すると竜人のクソガキ様はフォークをぶらぶらさせながらあっさりと答えた。

「ルリルちゃん様が何をしていたか知りたいの？ そりやあ観光よお。厄災の魔王が居なくなっただでしょ？ やあっと外出の許可が出たのよ!」

「ルリルちゃん様、観光ではございません」

「似たようなものだわ! それに本命の目的、もう済ませられそうだし」

「……なんと! このマイヨール、感服いたしました。私の目から逃れて遊びほうけるつもりだとばかり」

「ふ、ふふん。そんなわけないじゃない」

いたく感動している様子の執事だったが、まあその辺の目的とやらまでは聞かなくていいか……。どうせここで切れる縁だ。

そう思つて運ばれてきたパフェにありつこうとスプーンを構えた時だ。

比較的静かだった魔王が、何やら不穏な事を言い出した。

『君さあ。この間、クラス【職業…ファイメイル女】クラスの職業階級が上がったこと、忘れていない?』

(あ? 忘れてねえよ)

パフェのアイスうめえ……。チョコ味かな。

この世界、魔術器具が発達してるから普通にこういうもんあるのあ

りがたいんだよな。

『だったら僕にその内容を聞くべきだと思うのだけど』

(ナビを名乗るならテメエから言えっつーの)

『本当に危機感が無いなあ。待ちの態度はあまり感心しないね。僕と相対した時の慎重さはどこに家出しているんだい?』

(うるへー)

疲労がたまった脳が甘味を求めているため、魔王への反応がおぎなりになる。

……ただザワザワと胸騒ぎを感じるのは、これまで培ってきた経験ゆえだろうか。

これ以上聞きたいような、聞きたくないような。

そんな複雑な気持ちを抱きつつばくばくパフェを食い進めていると、ふいに魔王が実体化してビクツとなる。

俺にしか見えていないとはいえ、心臓に悪い。

魔王は少々物欲しげにパフェを見た後、咳払いしていつものごとく勝手に話しはじめた。

『現在の君の職業階級は第二ステージ、【職業：クラス乙女メイデン】。昇級に伴い

【魅了チャーム】の力も増している。もう一つ加わった技能スキルもあるけど、その説明はあとにしようか』

(……………)

『その魅了の力も、無差別とまではいかないけどね。せいぜい君に好意を抱いた者の好感度増加具合が序階より増した程度さ。……でもねえ、ククツ。君、悪態つくわりに面倒見良いだろう。意外と律儀だし。……ふふふつ。相当心象良かったみたいだねえ』

(なに笑ってんだよ)

嫌な予感が増してくる。

魔王は濁った色の眼をにやりと細め、口を三日月形に歪めた。

『やっぱり、あそこで振り払えなかった君の負けって事さ』

魔王の言葉とほぼ同時に、その華奢さからは想像できない力で腕ががちりつかまれた俺。

そして……。

「ルリルちゃん様、お嫁さんはこの子でいいわ。強いし、なんだか運命的なものを感じるの！ だからお嫁さん探しの目的は、これで完遂ね」

聞いた瞬間、今度こそ振り払ってモモの手を引いて全力で逃げた。

なんなんだよ、もおおおツ!!

ベテルキクスについて早々、妙な厄介ごとは勘弁だ！

「……はあ」

手記を簡単にまとめ書き終えて、時刻は夜。宿屋の一室で俺はぐったりとベッドに沈み込んだ。

魔王を倒して女になった日ほどではないが、濃い一日だった……。「つたく。なんだって竜の王族に出くわしたただけでなく嫁だなんだって言われるんだよ。っーかあのガキ、いやおっさん？ あんな格好しておきながら恋愛対象は女なのか……」

下着屋から逃げたことでシャティとアシユレには怒られるし、モモには逃げる途中から姫抱っこされて恥ずかしかったしで散々だ。

モモは「とらないでっつて、手を出さないでっつて言ったのに！ モモ、あの子きらい！」とご立腹だったが、いくら取られたくないからっつて抱えて逃げなくても……！

パパ、「やだ、うちの子逞しい……！」っつてうっかかりときめいたらメス堕ちポイント溜まっちゃったよ……はは……。

『モテモテだねえ、英雄くん。さぞ幸せだろう』

「男に戻った状態でならな！ いや戻れてたとしても、いくら可愛かろうが男は勘弁っ!! 俺は女の子が好きなの！」

実体化してひよいとベッドに腰かけたクソガキ魔王は、それはそれは楽しそうな笑顔だ。

……そういえばここにもいたな。見た目がシヨタなムカつくクソガキ。

こいつもルリルも実年齢がシヨタではないし、ルリルの方はといえばカテゴリ的には男の娘だったけど。

考えてたらぐったりしてきた。

もう今日はこのまま寝落ちだなと、のそのそ枕の方へ移動する。

が、そんな俺に待ったをかける声。……魔王である。

『ところで君がナビとしての仕事をしろというなら、もう一つ教えてあげようか。さつきは言うのを控えたものだけだ』

「控えたあ？ もったいぶってる、の間違いだろ。謙虚な表現を使うなよ凶々しい」

『はいはい、ごめんね？』

素直に謝られたら謝られたで俺の方がガキみたいでムカつくな……。

これ以上何か言っても流されるか煽られるだけだと判断して、歯噛みしながらも魔王の言葉を待つ。

早く寝たいんだけど普通に気になるし、見た目だけでも子供になれると微妙に断りづらいんだよな……。こいつも中身はおっさんどころかジジイのくせに、卑怯な。

……話の内容って、多分さつき言っていた「追加された」技能についてだよな？

魔王は黙り込んだ俺をつまらなそうに見るが、「まあいいか」といった態度であつさり口を割った。

『職業：乙女』には新たな技能が追加されている』

「ふーん」

『興味ないフリが一秒も持つかな？ ふふふ。……その技能名は……』

『運命の出会い！』



いらんいらんいらん！ そんなスキルも運もいらん!!

こんなもんチートでもなんでもねえッ!! いや俺が男のままだったら間違いない超絶ラッキーチートスキルだったけど!! でも今の俺は体だけとはいえ女なんだよ！ 認めたくねえけど！ あああああああああああ!!

衝動的に叫びたい気持ちを我慢して、床をゴロゴロ転がりまくった。宿屋の床がびっかびかになるくらいには転がりまくった。俺はコロコロローラーかよ。

(俺の苦難、これ以上追加されなくてよくない!?)

疲れて寝落ち寸前だったのに、結局その日は朝近くまで眠れない俺なのであった。

寝られるかッ!!



## 23話 ▶?・買い物①くまな板の上の鯉

年貢の納め時ってこういう時に使う言葉なのかなって、なんとなく考える。

合っていない気もするし、納めるものは年貢じゃなくて俺の羞恥心なんだけど。

「ではミサオ様！ 覚悟めされませー！」

「はい……」

現在、俺が居るのは昨日来た下着屋。リターンズである。

俺の前ではシャティが目を輝かせながら、わきわきと怪しげに手を動かしていた。

なに、そんな楽しい!?

昨日は妙な輩に絡まれたから早々にベテルキクスを出たかったのだが、まだ当初の目的を果たせていないのだからとずるずるここまで引きずられてきたのだ。

次に逃げたら寝てる間に勝手に測ってヒラヒラでセクシーな下着を買ってくと脅されたので、もう覚悟を決めるしかない。

せめて、せめてシンプルなものを頼む……!

「ふふっ、そう身構えなくても結構ですよ。わたくし共にお任せください」

「は、はあ」

いい匂いのする店員のお姉さんが完璧な営業スマイルで対応してくれるのだが、俺としてはこの美人に色んなところを計測されちゃうのか? と考えると変にドキドキする。

シャティはといえば「ミサオ様! サイズを測っている間にわたくしがミサオ様にぴったりの下着を選んでおきますからね!」と言って、鼻息荒く店頭に並ぶ色とりどりの下着をあれこれ物色していた。

最近俺の中にあつたシャティの清楚なイメージ、どんどん崩れていて悲しい。

明らかに際どい見た目の物を手に取っているのが見て取れて一瞬間が引きつったが、シャティの後ろでアシュレが「任せろ」とばかりに笑顔で手を振ってくれたので胸を撫でおろす。

良かった、ストッパーがいて。きつとアシュレならなんとかしてくれる。

ガーネットは今日も別行動だが、ついでもいいものあったら買っておいてくれとスリーサイズの書かれたおつかいメモなどを渡された。

あの……たいへん魅惑的なメモなのですが、俺は男なんですけど……！

せめて俺じゃなくてアシュレかシャティに渡してほしい。そう思ってたら「あんたが選ぶ下着が着てみたいんだけど、選んでくれないのかい？」なんて蠱惑的な笑みで言われてしまったのだ。

そういうことなら全身全霊でもって俺好みの下着を選ぶしかないじゃない……!! って意気込んだものの、その前に自分のなんだよな……。はあ……。

「では、失礼いたします」

「は、はい。おねしやす……」

我ながら視線が泳いでいるしきよどっているが、店員のお姉さんは慣れた様子だ。

いわく。「胸部の下着は出回っていない地域もそれなりにあります。ですから初めて選ぶという方も珍しくありませんし、そう緊張しなくて大丈夫ですよ」とのことらしい。

フォローしてもらってありがたいような、こそばゆいような……！ただでさえ今まで足を踏み入れることが無かった、女性もの下着売り場という聖なるフィールド。

なにも魔術なんてかけられていないのに、デバフ効果を受けているような感覚がすごい。

う、動けねえ……！

もといた世界のデパートでも、下着売り場の前を通るときはやましい気持ちが無くとも妙に気恥ずかしく足早に通り過ぎていた俺が、そのど真ん中にあるのだ。

もうただただ恥ずかしく、まな板の上の鯉となるしかなかった。  
笑えよ。これが魔王を倒した大英雄様の姿だよ。

『あっはっは』

(お前が笑うんじゃねえ！)

『じゃあ誰に向けて言ってるんだい』

(察しろよ！ モノローグ的な奴だよ！ 実際に誰かに言ってるわけじゃねーよ！)

『ホント、撃てば響くような反応するよねミサオって。太鼓かな？』

(こ、この……！)

あいかかわらず、俺の心が休まる瞬間が無い。

そして現在の俺の姿だが、さすがに全裸になれとは言われずほつとしたものの……店貸し出しの薄く簡素な服に着替えさせられた。正確に測るため、だそうだ。

その際は流石に覚悟をきめて自分で脱ごうと思ったんだが、気づけば店員のお姉さんに全部脱がされてたし着替えさせられていた。

て、テクニシャン!?

もうあとは、成すがまま。

俺は極力心を無にし、採寸が終わるのを待つのであった。

……悟りの境地、至ったかもしれない。

「ありがとうございました〜！」

満面の笑みな店員さんに見送られ、俺はぐったりとした気持ちで持たされた紙袋を見た。

中には高級下着が綺麗に畳まれ納まっている。

採寸が終わったと思つて安心していた俺は甘かった。

……そこからが更に大変だったのだ。

「ではミサオ様、デザインを選びましょう！　ちなみにわたくしのおすすめはコレとコレとこれなんですけど……！」

「私はこちらかな。刺繍が美しいのだけど、意外と丈夫で機能性にも優れている。職人在中の店だし、出来合いの物を選ぶだけでなく調整もしてもらった方がいいね」

「ですす！　いいですか？　ミサオ様。女性冒険者にとって下着は必須と言つても過言ではありません。わたくし達は日常では考えられない激しい動きをするわけでしょう？　それだと胸の形が崩れやすいのに加えて、胸が動きを阻害すればそれは戦闘中に大きな隙となります！　その可能性を極限まで抑えるために昨今まで発展し、現在も更なる進化を求められているのが女性下着なわけですよ。下着を侮る者は下着に泣くのです！　……ですから、ちゃあくんど。じっくりしつかり、選びましょうねっ♡」

そんな調子のシャティとアシユレ、そして店員のお姉さまに挟まれて小一時間ほど下着を選ばされたのだ。

モモがあまり興味を示さなかったのだけが幸いだろうか。モモにまで下着を選ばれていたら泣く。

ブーイングを受けながらもなんとかボクサータイプのパンツもあつらえてもらったのだが、最後までブラとデザインをそろえたものと進められて、結局何個かは買わされた。

え、この布面積少ない奴を俺がはくの……？　嫌だが……!?!  
しかも。

「さくて、次はお洋服ですわ！　靴も買いますよー！」

「その次は他装備だね。いくら強くても、今のミサオの姿は見ていて心もとない」

「日用品も買い足さないとつ。ですしね。女の子は色々入り用なんですよ、ミ・サ・オ・さ・ま!」

「シャティのノリノリ加減が凄い。」

アシュレが実用面でしつかり見繕ってくれると分かったからか、もうシャティの方は完全に自分の趣味嗜好で遊ぶ気満々である。これ、俺の気のせいではないよな……!?

そう。これからまだまだ買い物は続くのだ。  
うええ……。

これを買う物にくつついていくだけならキャツキヤと物を選ぶ女の子って可愛いしいくらでもニコニコ見守れるんだけど、選ぶのが俺用の女の子の服だなんなのってのがもう脳みそバグるんだよ。

俺の目が死んでいることに気付いたのか、アシュレが身をかがめて顔を覗き込んでくる。

「ミサオ、大丈夫? なんなら休憩をはさむけれど」

「サンキュ……でも早く終わらせたいからがんばる……」

「気遣いありがたいが、さっさとすませて宿で休みたい。」

こりやベテルキクスでもう一泊だな……。思った以上に気力が削れてる。

「そう。でも無理はしないでね」

「大丈夫です! もうミサオ様のサイズはこのシャティが隅から隅まで記憶しておりますからね。わたくしに全て任せて、ミサオ様はのんびり構えていてくださいませ!」

「それが心配なんですよねえ!」

俺だって出来たらあとは脳死でフラフラついていくだけにしたい。だけど放っておいて、妙に女らしい服ばかりチョイスされても困るのだ。

せめて脱スカートしたい。一応厚手のタイツは履いてるけど、譲ってもらった服をそのまま着てるから俺ここ最近ずっとスカートなんだよ……!」

ズボン！ズボンをくれー！

「シャツと下履き。あと上着……かな。小物はベルトも欲しい。それだけでいいから。かさばりそうなもんは無しな」

「んもうっ、ミサオ様ったら。前にも言いましたがミサオ様は磨けば光る原石ですわ！もつとオシヤレしましょうよ」

「いいって！光らなくていいから俺は！ほ、ほら。あれだよ。シヤテイ達が可愛くて綺麗なら俺はそれで十分だからさ……おしやれ服は自分たちの服で選んだら……？」

「それはそれ、これはこれです。モモだってミサオ様の可愛い格好見たいですよね？」

「あー！しゃ、シヤテイ！モモに聞くのは卑怯だぞ！」

「……モモ、ミサオママのかわいい姿見たい」

「ほらああああああ！もおおおおおお！」

下着には興味を示さなかったモモが途端に目を輝かせ始めた。

こうなつてくると抗えるか色々かいものと怪しい。

……俺の戦かいものいはまだまだ始まったばかりのようだ。

## 24話 ▶ 買い物② く 試着室の変態大魔王

下着屋で精神のHPとMPをぐりぐり削られた俺が次に連れていかれたのは、シャティの宣言通り服屋だ。

俺としては「宿に帰ったらいいよ着替えなといけないのか……見るのかこの体……」と、今まで散々逃げて来た女体化マイボディとの本格対面をもう少し後だと想定していた。

だが服屋に到着するなり「ではミサオ様、手始めにわたくし達が見繕ってきますからどんどん試着してくださいね！ あ、先にさっき買った下着を身に着けるんですよ！」といった言葉と共に問答無用で試着室にぶち込まれたのだ。

え、え？ つと戸惑っている内に試着室に持ち込まれる服の数々。それがちゃんと俺の要望通りシャツやズボンなど……冒険に適したシンプルなものであるため、着るのが嫌だと拒否も出来ない。

俺は思いのほか早く訪れた初着替えの機会に、覚悟を決めるしかなかった。

……で。

今まで胸の支え兼下着をつけていない胸部を隠すのに使っていた皮鎧と、もらったまま清浄魔術で誤魔化しながらずっと着ていた服を脱ぎにかかったわけだ。

ボタンをひとつひとつ外していくと、鎖骨の下へ視線がすすみふたつの白いふくらみが見えてきて、緊張のためか頬をツウつと伝った汗がふくらみの間に滑り落ちる。

それが妙に生々しい。

荒くなる呼吸を自覚しつつ目を瞑ったまま震える手でボタンを一番下まではずす。

そして目を開けると、今までずっとシャツの下で存在を主張していた双丘が現れたわけだが……！

「でっ………！」

デカイ。

それは思わず口をついて出てしまった、自分の新たな胸部装甲への初感想である。

二つの山は立派な渓谷を作れるくらいには、大きかった。

『感想それなんだ』

(だって……言うだろこれは！ つーかお前は見るなよ！)

『無理だよ。君と僕は一心同体なんだからね』

(その言い方やめろや寄生虫)

すかさず茶々を入れてくる魔王に文句を言うが、相手はどこ吹く風だ。

こいつ下着選びの時はまだ大人しかったのに、服屋の試着室に入った途端に存在感出してくるのやめろよ。着替えにくくて仕方がねえ。

……それにしても本当にでっけえな、おい。

素直な感想である。

重いなあと感じていたけど、インナーマッスル強者である俺としては普通に支えられていたから視覚的に目の当たりにするまで実感が無かったぜ。

これ、今の俺の身長からしたらバランス悪くないか？ いや大きいのはいいことなんだが。……違う！ この場合はよくねえよッ!!  
だってこれ俺のだもん!!

ああああああ!! 胸好きの自分とでもその胸は俺のなんだよ  
なってアホみたい矛盾で情緒が迷子!

(くっ!! 本来ならいい眺めのはずなのに、自分のだからか特に興奮しねえ……ッ!)

『興奮したらしたで困るんじゃないの?』

(それもそうなんだけどさあ……。というかお前はお前で平然として



るのなんか腹立つ)

『そう言われてもね。ふくんって感じ』

なんだろう。

こう、本当に興味無さそうな雰囲気で言われると妙に屈辱を感じる。

それにしてもなかなかのものでは？ と感じてはいたけど、どうも着痩せするタイプだったららしいな俺。想像していたより俺のお胸様は迫力がある。

鍛えたげた胸筋がこれに変換されたのかと思うと微妙な気持ちだ。筋肉もしつかりあるにはあるんだけど……脂肪になった比率、高くない？

「……………」

シャティから散々ブラの付け方をレクチャーされたので、それを付けるためだから！ と誰にしているのかわからない言い訳と共に胸に手をかける。

「……………！ おお……………！」

ずんつと手に感じる独特の重量感と柔らかさ。自分のものとはいえ感動を覚える。

ここ数週間シャティがその肉体を存分に活かしてくつついてきたので、女性の胸の柔らかさというものを女になって初めて知った俺だったのだが。

……同時に彼女は怪しい動きで体を触ってくるため、うつかり欲に身を任せるといつメス堕ちポイントが溜まるか気が気ではなかった。だから堪能するとまでいかなかったし、流石に堂々と揉ませてくれ！ とも言えるはずもなく……。ちゃんと触るのは初めてなわけ。

何度も言おう。

感動である。

初めてが自前の胸つてのが塩っ辛くてしょうがねえけどな!!

しかし一回見てしまえば、まあ気楽なもんだ。

これからしばらく付き合っていく体相手に毎回わたわたししてられない。

あとは着替えるだけ。そう考え下着をつけようと買い物袋に手を伸ばしたのだが……。

『顔真つ赤だけど大丈夫？』

「はあ!？」

魔王の言葉に思わず下着をとり落す。

真つ赤とかそんなはずないだろ。俺はこんなに冷静で……。

しかし俺が反論する前に、魔王が試着室の鏡を指差した。

そこには言い訳のしようもないほどに赤く染まった顔の俺が映っていて、見た途端かつと熱を自覚する。

「こ、ここここここここれはだな！ 室温が高いだけで、熱いだけで！

あゝ、熱い熱い。熱こもってんなあ!! ここ！ あちいなあツ!!」

『興奮しないとか言っておいてしつかり照れてるじゃないか。へえ』

「だから照れてない!」

反論するが我ながら説得力がない。

魔王はそんな俺の反応を楽しんでいるのか、うんうんと頷いている。なにを納得してんだ teme!!

『いや、ふふ。いいよ、そんなに恥ずかしくなくても。君って十六そこらでこちらに来たのだろう？ だったら多少ネットや本で何かしら見ていても、十八禁のものとか本格的に触れる機会無かったんじゃないの。いや、それは隠れて見てたのかな？ 一番性に興味があつて多感な時期に馬鹿正直に守ってる子なんて少ないでしょ。でも生は無理だよねえ。画面からお嫁さんは出てきてくれないもんねえ』

(妙に理解を示すのヤメロ!!)

『それで、ええと……五年？ 童貞のまま、僕の呪いが反転して女になるほどそういったことに興味津津な君。そんなミサオが初めて生で見た女性の体なわけだから、照れても僕は仕方のない事だと思うよ？ たとえそれが自分の体でもね』

「言うな言うなみなまで言うなあツ!!」

分かっているから安心しろとばかりの慈愛すら感じる声色が逆に気持ち悪いし、赤裸々に俺の照れを分析されてたまらず心の声に留まらず悲鳴をあげる。

すると試着室の扉がコンコンと叩かれた。

「ミサオ様、どうかなきいました?」

「何でもないです!!」

試着室といっても商品売り場からは薄い扉一枚隔てただけ。

当然、宿の部屋に居る時の感覚で魔王と肉声で話せば俺の声だけはシヤテイ達にも聞こえるわけだ。

今の俺はデカイ独り言を喋っている不審者である。

俺はなんとか心を落ち着かせて内心で会話できるよう切り替える。

でも冷静になればなろうとするほど、頭の中を言い訳だけがぐるぐるまわって纏まらない。

それが魔王には全部筒抜けだってんだから最悪だよ!!

『そういえば、今の君はメス堕ちポイント溜まらないみたいだね。反応は処女みたいなのに。一応自分の体だからってこと? なんだかおもしろいね』

(処女言うのやめろ! そこは童貞のがまだマシだよ! ……けど、そ、そうなのか? 俺、メス堕ちポイントに抗えてるのか? まあそ

うだよなあ。自分の体見て自分で溜めてたら馬鹿みてえだよなあ!)  
ほんの少しだけ気分を良くした俺だったが、俺は「上げて落とす」概念をもう少し理解しているべきだったかもしれない。

『……でも触ってみて、どう? 手のひらの感覚を感じてる胸の方は、どう感じる? 指と手のひらが沈んでる触られ心地は……どう?』  
「えっ」

『気持ちよかったりするのかなあ? ねえ、ミサオ』

安心していた所にふいにぶち込まれたその言葉に、特に意識していなかった部分が急に気になり始める。

不本意だがこれは俺の体だ。

自分の体を自分で触っている……ただそれだけ。

の、はずなのに!

魔王が余計なことを言うから触っている方の手から触られてる方の胸に意識する場所が移り変わりやがった！

するとむず痒い感覚が這い上がってくるようで、ぶんぶんと頭を振ってそれを振り払う。

だがこの俺をおちよくすることを生きがいに行っていると云わんばかりの魔王野郎が、そこで黙るはずもなく。

『せっかく大きな姿見もあるんだし、もっと初めて見る女性の裸体を観察したらどうだい？ ほら、その胸の下とかさ……おへそ周りやくびれとか。そんななだらかなライン、男の時は無かっただろう。最初ベルトが合わずに困っていたよね』

(……………)

『……それだけじゃない。首も手首も足首も、以前の君に比べると頼りないほどに細い。可愛いと思わない？ ふふっ、だけど女性の体の魅力は曲線美とふくよかさにもある。細いくびれから豊かな丸みを帯びている場所に繋がっていて、華奢さと豊満さを兼ねそろえているってわけさ。そんな体の部位はミサオにとって。どこも新鮮だろう？』

(……………!!)

『なあに、罪悪感を感じることは無いさ。だって、それはミサオの体なんだから！ どこをどう見たって誰も怒らないし、軽蔑しない。……見たいところ、たくさんあるんじゃないかなあ。……………ね？』

(……………!!)

こいつは妙な言い方をしてからかっただけだ。

そう分かっているのに、ここ数週間そむけていた自分の体の変化が気になって仕方がなくなる。

平静を装いたいの、すでに顔だけでなく全員が内側から発熱しているように熱い。

そりや気になるわ!! でもそれを自覚したら……ッ。

【メスエロりんっ♪】

（ああああああああああもおおおおおお!! 悪魔がああああああああ!!）

『悪魔ではなく元・魔王ね。……ふふっ。それで、どうかしたの？ 今のはどういった気分でポイントが溜まったのか、僕としては是非聞きたいものだよ。ああ、そういえば仲間の体を見ていた時は良いおっぱいだなんだって考えてたのに、さっきから胸って考えてるよね。なに、おっぱいって言うの恥ずかしくなっちゃった？ あははっ。そうだねえ。胸だと体の一部位だけど、おっぱいだと性的な意味をおびて聞こえるもんねえ』

（分析をするな!! へ、変態変態変態！ お前なんか変態大魔王で十分だ！）

『大魔王って、昇格してるの？ やったね』

（ポジティブの塊かな!? アホ！ 馬鹿！ ぼけ！ もうやだお前！）

『かわいそうに。語彙力、そんなのしかないんだ』

（うわああああああ!! お前なんか嫌いだああああ!!）

（ここぞとばかりに俺を追いつめるこの悪霊をどうにかすべく、やはり早々に冒険を進める必要がある。）

賢者！ 助けてくれ、賢者!! 早くあんたの所へ行きたい！ 馬鹿

野郎！ 決まった道順で行かないとたどり着けない結界とか余計なものも張ってんじやねえよ!!

うああああああ!!

男に戻れなくなるのも、こいつとずっと一緒にいるのも嫌だぞ！

俺！

その後なんとか羞恥心を振り切り、下着を身に着けるのに成功した俺だったが……。

基本の服をそろえた後、さんざんシャティにお勧めの服を「買わなくてもいいから着てください！」と彼女が満足するまであれこれ着せ替えられるはめになったので追加ダメージがヤバかった。

……大事なものを失った気がするのは、気のせいだと思いたい。

## 25話 ▶ 母性と嗜虐心（ガーネット視点）

断崖都市ベテルキクス。

せり出した崖の内部にあるこの都市だが、外から見た時に最も目立つのは中央に鎮座する大きな扉だろう。

それは迷宮ダンジョンの入り口であり、表面には封印の魔方陣が精密に描かれ淡く発光している。迷宮の魔物が外へ出てこられないようにするための措置だ。

その入り口の左右上下に人々が日々の営みをする居住区があり、前方には大きな貯水湖。

これらがベテルキクスの全貌である。

そのベテルキクスの入り口から最も近い場所に、ひとつの塔が聳そびえていた。

蟻塚を思わせる作りのそれからは、時折大きな荷物を抱えた有翼人が崖の外へと飛び立っていく。

「これも頼むよ」

「はいよ、任された」

赤髪の魔族ガーネットが渡した一抱えもある荷物を受け取ったガルーダ便の宅配員は、小気味よい返事と快活な笑顔を返す。

彼の背中にはシャティとはまた違った種類の立派な翼が生えており、近くには荷物を入れる専用の箱が用意されていた。

その大きさは宅配員の倍以上あるのだが、彼ら「ガルーダ一族」はそれを苦にもせず運び世界中を駆ける。

有翼人が一部族、ガルーダ族の宅配便。

大きな都市へ行けばだいたい居を構えている、世界最速の宅配業者である。

ガーネットは故郷で待つ夫と子供たちへのお土産を見繕い、それを

たつぷりの愛情と共に荷物へ詰め込んだ。

彼女は十人いる夫も、十二人の我が子達も皆愛している。

その愛は非常に大きく、人数が増えても色あせることは無い。一人一人が愛おしいのだ。

もし今より愛する対象が増えたとしても、その愛は有り余るほど。

例えばもしミサオが望むなら、それが婿入りでも嫁入りでもガーネットは受け入れるつもりでいる。

それほどの溢れんばかりの愛を備えているのが、ガーネットという女なのである。

……だからこそ、彼女は魔王軍へと入った。愛した者達とこの先も共に暮らすために。

そしてその魔王軍を裏切ったのもまた、同じ理由である。

魔王については先の未来は無いと見切りをつけたのだ。

(シヤスビスあたりなら現魔王軍の動向も掴んでくれるだろう)

土産がたつぷり詰まった荷物には手紙が忍ばせてある。

その内容は夫達へのラブレター兼、魔王軍残党の情報を求めるものだった。

魔王軍がほぼ無傷のまま厄災の魔王は倒されたが、弟のように魔王の仇を討とうとする者などほとんど居ないだろう。魔族の多くは切り替えが早く、ドライなのだ。

しかし弟が見せた“召喚”の力を見るに……”噂”の方は本当だったらしい。

だとすれば魔王の敵討ちなど関係なく、妙な動きを見せる者が居たとしてもおかしくない。

そう思い、お土産を送りがてら手紙で夫に軽い探りを入れてもらうようお願いするつもりなのだ。

厄災の魔王。



その特異な存在に付き従う魔王軍を構成する魔族には、それぞれ思惑がある。

ひとつ。厄災の魔王そのものを魔族の神と考え崇拜する者。

ふたつ。厄災の魔王により世界に滅びが振りまかれた時、助かるために従属する者。

みつつ。厄災の魔王が倒れた時、近いものにその権能が付与されるという噂を信じて力を狙う者。

大きく分けてこの三つ。

ちなみにガーネットは二つ目、家族と自身の保身のため魔王の傘下へと加わった者だ。

弟のアルマディオはガーネットと違い崇拜者の類だが……その中でも少々派閥がわかれる。

純粋に厄災の魔王を魔族の神として崇め敬う者と、若年魔族に多い「最近のひよった魔族と違って世界中から恐れられる魔王様マジかけー！」勢だ。アルマディオは後者である。

その考えの違いから、同じ崇拜者にも関わらず両者の溝は深い。そして三つ目の魔王の権能狙いの者達だが……。

(権能讓渡……。まさか本当にそんな現象が起きるとは)

数週間前の襲撃の際、弟が見せた力。あれは「眷属召喚」という魔王が持っていた権能の一つだ。

ミサオと戦う際はシャティの結界に阻まれて発動されなかった力だが、魔王が何処かを襲撃させるときに用いられていたのを見たことがある。

あれは魔物たちを従属させる力に加えて、自らの魔力を糧に新たに魔物を作り出すことが可能だ。更にはそれを任意の数だけ召喚できる力。

魔族の神と崇める者達がいるだけあって、厄災の魔王の力は性能が破格のものばかりだ。

……弟が行使した力を見る限り、半ば眉唾と思われてきた権能讓渡

はどうやら本当だったらしい。

違和感があるとすれば「近いものに」譲渡されるという部分。それが弟アルマディオに譲渡されたというのがどうにも解せない。

幹部とはいえ弟がそれほどに魔王に近しく、信頼されていたとは思えないのだ。

（いや。……あの魔王陛下が近いと感じる相手などいたのかどうか、そこがまず疑問かもね。みんな同列だったと考えたら、物理的に近くで過ごしていた相手が譲渡相手に選ばれたって可能性もあるか）  
ふと厄災の魔王と呼ばれていた者、その孤独について考えるも……今の自分には関係ないなと首を横に振った。

ともかく噂が本当だとするならば、他にも魔王の権能を受け継いだ者が居るかもしれない。有力候補としては幹部たちだろうか。

相手によっては少々厄介である。それが厄災の呪いに連なるような系譜能力であればなおさらだ。

譲渡された権能の種類的全貌は分からないが、魔王が有していた力全てを指すならば可能性は十分あり得る。

（気にしすぎなだけかもしれないが、一応ね）

魔王軍といつても、肝心の魔王が倒ればそれまで。

崇拜者ですら積極的に魔王の仇を討とうなどと考える者は少なく、多くはそれぞれの生活に戻るのだ。その辺の割り切りは良い種族である。

しかし権能を引継ぐ魔王の後釜が居るとなれば話は別。

擁立する者が居ないとも限らない。

現在確認できているのは弟の力のみだが……。権能讓渡の件を考えると、弟本人の「現在は自分が魔王軍の頂点」だという発言にも信憑性が出てくる。

「変にかつがれて調子にのらないといいけど」

そんな懸念を抱きつつ、そういえば婚礼の準備が出来たら迎えに来るなどとミサオに言っていたなと思いつく。

おそらくアルマディオには二度と会いたくないであろうミサオには悪いが、来るならさっさと来てほしいものである。

直接確認出来れば一番手っ取り早いのだ。

(そういえばミサオ、服は決まったのかね。ふふっ、シャティが張り切っていたから大変だろう。……私もそのうちひと揃え選んでやるか)

その時のミサオの反応を想像しクスクス笑うと、ガーネツタは宿への帰路につくのであった。

そして宿に帰ったガーネツタが目にしたのは、大量の紙袋に囲まれて頭を抱えるミサオの姿だった。

「な・ん・で！ 結局全部買ってんだよシャティいいいいッ！ かさばらないようにって言っただろ!？」

「だって、ミサオ様ったら……最近体を清めていなかったでしょう？ わたくしの清浄魔術があるとはいえ、そんなお体で試着した服を買わないなんてお店に失礼ですもの〜」

「買ったな……！ それでやたらめったら試着させたのか!？」

「なんのことやら〜」

「買わなくていいって言うから着たのに！ 返してくるか売ってくるかしてくんない!？」

「嫌です！ 買ったのわたくしの金ですもの！ わたくしがどうしようかとわたくしの自由です！ ミサオ様には買わなくていいと言いました、わたくしが買わないとは言ってません〜」

「へ、屁理屈！ 俺、お金渡したよね!？」

「あ、そうでした。はい、こちらお預かりしていた金額です。全部お返ししますね〜」

「シャティいいいい!!」

「おやおや」

宿に戻ると買い物を終えたらしい仲間たちが戻ってきていたが、ミ

サオはずいぶんと遊ばれたようだと言ったガーンネッタは苦笑する。

ここ数週間、脱ぐのが嫌だからと同じ服を着続けていたミサオだが、現在は町娘から冒険者らしい服装へと変わっている。

……といつても、ところどころにシャツイが口出ししたであろう洒落た仕様となっているが。

仕立ての良いシャツにベスト、やや裾が長い上着に体の線に沿いつつ伸縮性のありそうな下履き、機能性に優れたブーツ。腰にはアイテムを収納しやすいカバンをベルトにつけて巻いている。

だがその横の紙袋から飛び出しているのは、それらとまったく趣の異なる繊細なレースだ。

ミサオが服屋でどういった扱いを受けたのかは想像に難くない。

このひたすらおちよくられている元・青年が、魔王を倒し世界を救った立役者だとは……この場面を見る限り、誰も思うまい。

本人ですらその偉業を自覚しているか怪しい。

そう思わせる一因は自分たちの対応なのかもしれないが。

ミサオは賞賛や報酬が欲しい！ 出来ればモテたい！ といったように単純な欲望は持っているが、彼が成した功績はその程度の見返りに収まらないほどのもの。……それこそ世界史に刻まれるほど大きい。

そんな偉大な英雄と言って差し支えの無い相手なのだが、どうもいい反応をしてくれるため、ついからかいたくなってしまうのだ。

ガーンネッタは家族に加えて、この子供のこれからの平穏を守りたいと考えていた。

ガーンネッタはふと、彼に協力を申し出た時の事を思い出す。

——— 厄災の魔王を倒せる可能性のある個で強力な力を有した英雄。

その英雄は過去幾度となく現れ、中にはミサオのような異世界からの客人も居たという。

これは古代書庫で調べた記録だ。

厄災の魔王には同族にすら向ける愛は無く、自ら共々滅びる気だと知り魔王軍を裏切ったガーネットタ。

そうなれば彼女には家族を守るため魔王を倒す必要性が出てくる。故に敵対してきたミサオ達に協力を申し出たのだ。

彼らを選んだ理由は単純に一番強く、英雄を見出す使命を代々受け継いでいる有翼族の巫女が共に居たからである。

当然初めは断られると思っていた。

だが蓋を開けてみれば、罨かと思うほどの快諾。

『敵が味方になるイベント、来たー！ 美人が味方になってくれてうれし……ゴホンっ、じゃなくて。うんうん、俺にはあんたがいい人だつて分かつてたぜ！ 戦いを挑む相手以外傷つけなかつたし、子供とか戦闘の余波から守ってくれたもんな！』

などと言つては直後に『君はもう少し考えてものを言え』とアシュレに叱られ、『ミサオ様、相手に一定のポリシーがあるのは確かです。ですけどね？ すぐ信用するのは、あまりに軽率ですわ。相手は魔王軍ですよ？』とシャティに窘められてはいたのだが。

その後無事に仲間となり、旅をする中で最初はこちらを警戒していたアシュレやシャティとも仲を深めることもできた。

……そして旅の中で、ガーネットタはミサオがもう元の世界には戻れないと告げられていたことを知ったのだ。

同時にミサオがガーネットタをすぐに受け入れたのは、単に軽率な性格やガーネットタの美貌に魅せられたからだけではないことも知った。

『ガーネットタはき、家族と仲良く暮らしてくれな』

旅の中で何気なく告げられた言葉だが、そこから滲む郷愁の色があまりのも濃く……ガーネットタの耳に残った。

ミサオは帰リたかつたのだ。

だがそれが不可能と知って、諦めた。

諦めたからにはこの世界に居場所が欲しい。

その一心で魔王と戦う事を本格的に決めたように見えだし、家族のために元居た場所を裏切ったガーネットタを受け入れたのも「大事な居場所を守ろうとする」相手として見たからなのだろう。

本人がどこまでそれを自覚しているかわからないが、少なくともガーネットタの目にはそう映った。

呪いが反転して女性になるほどの性欲も、純粋な欲望に加えて血のつながった家族を求めるとの故。

ミサオはその欲望を知られた事に恥ずかしいと頭を抱えていたが、ガーネットタはその気持ちを理解できていた。

家族は力、生きるための縁よすが。それを求めることになにを恥じらう事があるのか。

(アシユレじゃないが、放っておけない子なんだよね)

強い力に反して未成熟な中身。

そのアンバランスさがガーネットタを惹きつける。

庇護欲に似たそれは恋とはまた性質が違えども、紛れもなく愛だった。

もし魔王を倒せたら自分の初めての相手になってほしい。そんな要望を受け入れたのも、けして遊びや気まぐれなどではない。

ガーネットタは確かに愛多き女だが、その対象でないものを抱くことなどはあり得ないのだ。

ガーネットタはアイゾメミサオを愛している。

ガーネットタはクスリと笑うと、華奢になったミサオの肩に後ろからのしかかった。

「ただいま。私の下着は選んでくれたのかい？」

「が、ガーネットタ！ ええと……はい」

ぐいっと胸を押し付けるとミサオはデレつと顔をだらしなくにやけさせながらも、恥ずかしそうに体をもじもじさせる。その様子がど

うも嗜虐心がくすぐられてしかたがない。

守りたいと感じる母性と、いじめたいと考えてしまう嗜虐心。それが絡まり合って、ガーネツタがミサオへ向ける愛情となっている。

……おそらく、それは自分だけではないだろうが。

「じゃあ、買ってきた下着はミサオがつけておくれよ」

「は!? それは……えつと!」

「いいじゃないか。つけかたは習ったんだろう? ……外し方も、教えてやろうか」

後ろから顎を掴みくいつと上向かせ、口づけるほどの位置で述べれば面白いようにミサオの顔は朱に染まる。

ガーネツタはからから笑うと、その頬に軽く口付けた。

「はーっはっは!! 待たせたな、我が花嫁よ! 迎えに来たぞ!」

翌日。

ガーネツタが夫からの返事を受け取る前に、求めていた情報源がやってきた。

……受け継いだ魔王の権能を、これでもかと無駄遣いした状態で。

## 26話 ▶ 再来く馬鹿が式場ごと来やがった

俺達がベテルキクスを訪れた本命の目的は、現在目指している賢者の住居が「いくつかの場所」を通過しないとたどり着けない場所にあるからだ。

ベテルキクスはそのポイントのひとつである。

加えて冒険者登録や買い物なども終えた俺達は、早々にベテルキクスを発つことにした。

アシュレが買い物で疲れ果てた俺の様子を見てもう一日休養してはどうかと提案してくれたが、そもいかな理由がある。

……あの妙な竜人が、まだおそらくこの付近でうろついているからだ。

買い物で疲弊していたため伝えるのが遅くなったが、俺はそこで初めて「ベテルキクスを早く経ちたい理由」として冒険者協会で竜人ルルに絡まれたことを仲間達に話した。

あとこつちは出来るだけ話したくなかったけど、【職業：クラス：ファイメール女】が【職業：メイデン：乙女】へと職業階級がひとつ上がったことも。

……そして厄介な技能、【運命の出会い】が追加されたこととかも。血反吐でも吐きそうな気分で説明したわ!!

竜王族とのエンカウントと求婚(?)については、シャテイが少し考えた後に「わざわざ旅に出てお嫁さん探し、ですか。おそらく他種族の血を受け入れたいといったところでしょね。そうなるよ、その子は末の王子かもしれませぬ」と、なにやらあたりをつけてくれた。やっぱりシャテイは色々知ってるな。単純な知識だけでなく、そういった他種族に関わる世情にも詳しい。

最近暴走気味の場面ばかり見ているせいで忘れがちだが、こうした彼女の知識には何度も救われてきた。

ともかく厄介な相手に絡まれたことは理解してもらえたので、俺達はスタコラと断崖の都市を後にした。

街中歩いてばったり遭遇、とか嫌だしな。

ちなみに旅立つ前、着替えを手に入れて初着替えというハードルを



クリアしたので風呂にも入りたいところだったが……。あいにくベテルキクスには公衆浴場や温泉といったものはない。

ので、宿で湯を用意してもらい部屋で頭を洗って体を拭くにとどめた俺である。

試着室で散々魔王におちよくられたから、体を拭くときは無心、無我。

もう二度とうろたえるものかと頑張った。まだ色々慣れなくはあるんだけど。

ともあれ色々不安を残しつつも、心身さっぱりしての再出発である。

賢者の住処まで、あと少しだ。

……そう思ってたんだけど、なあ……。

「はーっはっは!! 待たせたな、我が花嫁よ! 迎えに来たぞ!」

「誰が花嫁だバーカ!!」

リオン大渓谷を挟む大森林。

その中を進む途中……急に閃光のような炎が上部を通り抜けたと思ったら、前方半径一キロメートルほどの森が円形状に爆炎のドームで覆われ焼き尽くされた。

とんだダイナミック森林破壊である。

森林の中で突如ぽっかり出来た焼け土の円形広場。

そこにふざけたことをほざきながらひらりと着地したのは、しばらく

く見ていなかった馬鹿魔族……アルマデイオだった。

出来れば金輪際見たくも会いたくもなかったよ俺は!!

しかも奴は以前の出で立ちと違い、おそろく。おそろくだが……タキシードっぽい、黒地に金の装飾が施された婚礼衣装みたいなを着ている。

髪もなでつけ整えてあり、明らかにおめかしをしました! といった様子だ。

初手森林破壊しておきながら、どうも戦いに来た感じではない。けどその装いを見て、俺の嫌な予感加速している。

というか初っ端のセリフでその目的は分かり切っているんだよね……!

聞かなかつたふりをしたいんだけど、奴の勢いは困惑する俺にお構いなしだ。

「おま、」

「すまない。あのような熱烈な求婚を受けておきながら、これほどに君を待たせるなど! しかしその分、素晴らしい婚礼を準備した。見てくれ!」

俺の言葉を堂々とぶち切ってくれた馬鹿野郎は、青白い顔に嬉々とした笑みを浮かべて指をパチンつと鳴らした。

すると前回の襲撃時同様、数多の魔方阵が展開され上空を埋め尽くしていく。

ガーネットに聞いたところ、これは俺たちが戦った時には使用されなかつた魔王の力の一つ……【眷属召喚】というものらしい。

それを魔王が倒れた時、どういうわけか幹部である馬鹿魔族アルマデイオが継いだらしいのだ。

魔王本人にも確認をとったが、あれが自分の持っていた力だという事は認めた。でもそれが部下に引き継がれた経緯はよくわからないらしい。なんとも曖昧なものである。

『だって自分が死んだ後の事なんて、わかるわけないだろう? 興味もない』

そう言われてしまえば、まあそうだよなーってこっちも納得するし

かないんだけど。

……まあ、力の出所なんてどうでもいいか。  
俺は目の前のもんを対処するだけだ。

そう思い、俺は魔方阵から顔を出し始めた魔物どもを睨んだ。

この間みたいにも首を全部掻っ切つてやろうか。

今回は前回と違い魔術装甲は魔術工芸核アーティファクトが壊れているため使用できないが、もとよりそれが無くても圧倒できるだけの力量差はあるはずだ。

前回だって服代わりに鎧を展開しただけで、装甲が無くても処理できる自信はあった。

それにしても、婚礼準備がどうの言いなからこの有様だ。

こいつやつと俺がアイゾメミサオだとわかって、魔王の仇を討ちに再襲撃に来たのか!?

ふざけた格好もセリフも演出か何かで、こちらの隙をつくためのものかもしれない。

……とか思つて身構えたんだけどさ。

なんならそつちの方がよっぽどマシだったぜ。

無数に並んだ魔方阵から顔を出していた魔物達がその全貌を露わにし始める。

大木のように太い腕を持つミノタウロスっぽい奴、凶悪な歯並びをぎらつかせる巨体のスツポンもどき、ケルベロスのように三つの頭を持つ二足歩行の鯨。

まず初めに魔方阵から排出され、地に降り立ったのはそいつらなのだ……。

「??」

魔方阵から出てくる前に倒すつもりだったのに……俺は剣を構えたまま口を開けて、魔物が降り立つのを見守ってしまった。

なぜならそいつらが凶悪な見た目にそぐわないものをそれぞれ持っていたからだ。

ずんつと重々しい地鳴りをあげながら着地し、馬鹿魔族……アルマデイオが背後に従える魔物達。

その背や手には、これから戦闘が始まるにしては違和感しかないようなものが見える。

出来れば気のせいであってほしかった。

魔物達が持っていたもの。それが何かといえば……。

十段重ねのケーキ。

レースとフリルがクソほど重なったゴテゴテのウエディングドレス。

ステンドグラスがはめ込まれた禍々しい教会。……教会!?

教会を乗せて踏ん張ってるスッポンもどきがかわいそうになってきた。めちやくちや歯を食いしばってるんだけど。

……あの巨体をもつてしても重いんだ。そうだよな。建造物だもんな。

「……ええと。ガーネット、あれは……何？ 君の弟さんは何をしているの？」

「……………」

俺と同じくぼかんとそいつらを見ていたアシュレが、馬鹿魔族の姉であるガーネットに問う。

問われたガーネットはと言えば、片手で額を押さえて天を仰いでいた。分かり易い「あちゃー」のポーズである。

どうも姉であるガーネットとしても、あれは予想外だったっぽい。

あ……うん。あんな姿の身内が現れたら、恥ずかしくて見てられないよな……。

俺はガーネットになんて声をかけていいか分からず、攻撃の出鼻もくじかれて完全に相手にペースをもつてかれたのだった。

俺達の困惑など知った事ではないとばかりに、奴はぼつと両腕を広げる。

すると魔力の波動が焼け焦げた地面に伝播し、途端に白と紫色の花で埋め尽くされた。

更には俺と奴を繋ぐ直線状にだけ、血のように赤い薔薇が絨毯のように咲き乱れる。

『うわ』

「うわ」

不覚にも魔王と声が重なってしまった。

つーかこの魔族野郎、上司の魔王にも引かれてんじゃねーか。

俺達がドン引いている間に、他の魔物達も魔方阵から出てきた。

見ればそれぞれが別々の物を持っていて、それらが瞬く間に花の咲き誇る円形の広場に設置され始める。

果てはど派手な噴水まで登場し、焼け野原は一瞬でガーデンウエディングの会場へと様変わりした。は？

おいおいおいおいおい、なんだよこれ。馬鹿が式場ごとやってきたんだが。

今度はこれ、俺が焼き払っていい感じか？

「ケーキ、おいしそう」

「モモ、いくら美味しそうに見えても近づいてはなりませんよ。馬鹿が移りますわ」

「シャティの言う通りだぞ。モモ」

困惑する俺たちの中でモモだけがマイペースに中央に用意されたケーキへの感想を述べるが、感心しないでほしい。

魔王の力を式場丸ごと運んでくるために使うとか馬鹿か？ 馬鹿なの？ 馬鹿だよ!!

「といふかなあッ!!そもそも、俺はお前に求婚してねえよ!!」

このままだと妙な勢いに押し流されそうだったので力の限り叫んだ。

だがアルマデイオは青白い頬の血色を良くすると、うっとり俺がへし折った角の断面を撫でる。

「ふふっ、そうか。やはりな。……もちろんその可能性も考慮した。角を折ったのは、敵対者である俺様を排除したに過ぎない行動だと」「なら……」

「だが、角を折られた瞬間!! 俺様の体内に電流が走った!! 血が滾った!!」

それシャティに落とされた雷と錯覚してたりしない？

「この感情に蓋など出来ない。ああ、そうだ。魔王様の仇を後回しにするくらいに!! 勘違いであるというならば、今度は俺様から求婚しよう! さあ俺と結婚してくれ我が花嫁、我が妻よ! そのために全て準備してきた!!」

『ミサオ、あれ殺していいよ』

こちらの意志などお構いなしで一人の世界にどっぷり浸かっている馬鹿を指差すのは、実体化したシヨタ魔王。

その表情は能面のように、自分は幹部である部下の名前すら忘れていたことを棚上げて「後回し」にされた事実が気に食わないようだ。勝手な奴だな、おい。

でもさっさとあの馬鹿をぶっ殺した方がよさそうだなってのは俺も同意見だ。

ほら、馬鹿つて死なないと直らないって言うじゃん? つまり俺がとるべき行動も一つってことだよ!

俺は構えた剣に炎を付与し始める。

高熱は空気を熱で歪め、余波でレッドカーペットのごとく広がっている赤い薔薇が一部水分を失い枯れ果てた。

しかしそれを見た馬鹿は何を勘違いしたのか、ドヤ顔で懐から何かを取り出した。

「ああ、君が不機嫌なものも分かるとも。指輪だろうか？ 安心してくれ、この通り素晴らしい品を用意して……」

取り出されたのは立方体の物体。それを奴がぱかりと開けると、中からは眩いばかりの寶石がはめ込まれた指輪が現れたのだが……。

俺がその全貌を目にすることは無かった。

何故ならその直後、アルマデイオが何か青い物に衝突され、広場横の森までぶっ飛んでいったからである。

「え……」

これには俺もポカンとせざるを得ない。

なんか唐突に目の前で衝突事故？ が起きたんだけど。

「あの子、また来た」

認識の追いついていない俺とは裏腹に、モモがむすつと頬を膨らませて視界を遮る青いものを見ている。

そう。馬鹿魔族を吹き飛ばした青い物体は、俺の視界を遮るほどに大きいのだ。

「……………」

剣を構えたまま恐る恐る視線を上にあげていけば、ようやく臃げに青い物体の全容がわかってくる。

青と紺碧がグラデーションを織りなす鱗を、黄金色に輝く羽毛が彩っている。

そして青と真逆の紅玉のような目が、薄い皮膜の向こう側でぎよろりと動き俺の視線と重なった。

「ど、ドラゴン……」

『やあつと見つけた〜！』

小山のようにそびえる優美かつ強靱な青き竜。

それが見た目にそぐわない愛らしい声を発したかと思うと、次に感じたのは抱き着かれる衝撃だった。

「ぐえっ」

「もう。ルリルちゃん様に挨拶も無しに行くなんてどういうこと？

せつかくお嫁さんを選んであげたのに」

そう言つて頬を膨らませるのは昨日会つたロリもといシヨタもといおっさん竜人。

いやこの見た目でオッサンだと認めたくはないが、四十六歳は俺から見たらおっさんでしかないんだよな。

とにかく俺の倍以上生きている見た目超絶美幼女な竜人が、俺の首に手を回して抱きついていたので。

前方で太陽の光すら遮っていた竜の姿は無いが、当然だ。あれがこいつの正体なんだろう。

「ルリルちゃん、ミサオママからはなれて」

俺に抱きつくルリルに真つ先に文句を言ったのはモモだ。

しかしルリルはふふんつと笑うばかりで離れる様子はない。

「あら、惜しいわね。獣人ちゃん、ルリルちゃん”様”よ。まあ別にそう呼んでくれてもいいけどね。でもあなた、まず自分が名乗ったらどうかしら。二人ともまだ名前も聞いていないのに、いなくなっちゃやうんですもの。探したわ」

「モモは、モモ」

「うふふつ、素直な子は好きだわ！ それで、あなたは？ ルリルちゃん様のお嫁さんっ」

「いや、嫁じゃねえし。……ミサオだよ」

げんなりしながらモモが名乗ったんだしと渋々名前を告げる。モモに関しては一人称が名前なんだから分かつてただろうに。

というか、待て。

人に名乗らせておきながら、よくよく考えてみるとこいつもちゃんとな乗って無くないか!?

「そう、ミサオというのね！」

「……あんたは。一人称でまあ分かるが、ちゃんと名乗られてないぞ。人に言わせておいてそれはねえんじゃねーか？」

「まあ、そうだったかしら？ でも目上の者があとから名乗るのは当然だし、結果的に問題ないわね！」

「へいへい」



一応年上なのは事実のようだし、いちいち突っ込むのも面倒くさいのでそこは流す。

美少女は俺の首から腕を離し飛び降りると、仁王立ちで胸を張り名乗りを上げた。

「ルリルちゃん様はこの名前で呼ばれるの好きではないのだけど、教えてあげる。ルリルベレス・ファアレン。これが、あなたの夫となる偉大なるルリルちゃん様の名よ。よく覚えておいてね、ミサオ！」

27話 ▶ 求婚者×2くネタでも俺のために争わないで！とか言わんからな

高らかに名乗りを上げたルリルこと、ルリルベレス。

さてこの夫だなんだと馬鹿いうロリおじさん竜人の世迷言をどう叩き落してやろうか。

……というかこいつ、自分を嫁でなく夫と称するってことは、女装してるけど性認識はやっぱり男なんだ。

よう分からん奴。

ただ冒険者ギルドでのごね方を思い出すに、下手な断り方をして諦めなさそうなんだよな。

こいつがどれだけの執着をもって嫁だ夫だと言っているか知らないけども。

さくつと「あんたが俺に好意を感じてるのは【魅了】<sup>チャーム</sup>の影響だぞ」って言って納得してくれたら話は早いんだけどなあ……。

そもそも魅了事態の効果も自分じゃどの程度か分からないから微妙に説明しづらい。

不本意ながら職業階級<sup>クラスステージ</sup>がひとつ上がっているため、以前より効果が強いのは間違いないだろうが。

（うくん。俺が元は男だぞって、言うとか？ いやでもなあ……さらに説明がややこしく……）

俺がどうこいつを追い払おうかと考えあぐねていると、ふいに肩に手を置かれぐいつと後ろへ引き寄せられた。

「おわっ」

「……………。竜族の御仁。申し訳ないが、彼女は私が愛する者です。お譲りするわけにはまいりません」

とんつと背中当たる堅い金属鎧。

しかし耳に言葉と共にあたる吐息は温度を伴っていて、柔らかく包まれているような気分になる。

「!!」

突然に表れたルリルの存在や言動に、それまで困惑と共に成り行きを見守っていたアシュレ。しかしそれらを全て飲み込んで、俺が困らないようにきつぱり断りの言葉を告げてくれた。

見上げてみれば、柔らかく涼やかな笑顔。

ただ瞳に宿る光は強く、芯の強さが伺える。

礼儀正しく、しかし決して譲らないという強い意志を秘めた言葉でもって、俺を守るように抱き寄せたアシュレ。

……その仕草は、あまりにもスパダリムーブが……過ぎた。過ぎてしまった。

その不意打ちに俺が抗えるはずもなく。

【メスメロリンっ♪】

あああああああああああッ!!!  
(知ってた!!)

『彼女、善意と好意と無自覚でどんどん君を追いつめるよねえ。あはー。おもしろっ』

(面白くねえよ！ でもアシュレは……アシュレは悪くねえ！ 俺が耐えられないだけで……ッ！ ちくしょー！)

メス堕ちポイントが溜まる音に膝から崩れ落ちそうになるが、そんな場合ではないとなんとか耐える。

そして俺がひそかに狼狽える中……ルリルベレスはギザギザにとがった歯を覗かせながら、アシュレを見て口を三日月形に歪めにんまりと笑った。

「あらっ、素敵。奪う恋って燃えるわよねえ〜」

(予想はしてたけど一切引く気がねえなこいつ……!)

アシュレの対応に不機嫌にこそなりはしなかったが、妙に楽し気な様子が逆に不穏なルリルベレス。

ちんまい体だというのに、そこからは先ほどまでの巨体と同等の存

在感を発している。

!?!? それにしても俺の周り、性認識がガバな奴ばかりじゃねえか

ルリルの奴、アシユレのセリフを聞いても俺達が（今は）女×女つてことには一切突っ込まれなかったんだが。

いや、いざそれ言われたらルリルベレスお前はなんなんだよって話になるけど。……いやいやいやいや。えっと、こいつ男だったわ。

性認識が男なら今は女の俺に求婚するのは一般的にはおかしくないのか。

女といっても女じゃないけどな俺。

ああもう、俺の方が分からなくなってきたぜ！

俺が頭を抱えたくなくなっていると、次に俺の前にはずいっと出たのはシヤテイだった。

その純白の翼を広げて俺をルリルから隠すようにしてくれている。

「……ゴホンっ！ ええと、失礼？ ルリルベレス様と、おっしやいませしたね。どういった目的でミサオ様に求婚したのか分かりかねますが、ミサオ様はわたくし達の大切な方です。いきなり嫁によこせ！

なんて言われても困りますわ。というか、お断りです！ ね？ ミサオ様」

「あ、ああ」

シヤテイもキツパリと言い切り、俺にも確認をとるので領けばルリルは首を傾げる。

「まあ、他にも仲間がいたの。ふふっ、華やかだわあ」

今気付いたとばかりに改めて俺の周り……アシユレ、シヤテイ、ガーネット、モモを見回すルリル。

その視線は一見、友好的。

……多分だけど冒険者証が綺麗だから欲しかったって言うくらいだし、こいつ見た目が良いもの好きなんだろうな。

それを考えると地味な俺に求婚したのはマジで「魅了」の効果だけな気がする。

などと考えていると、ルリルはシヤテイに対しこちらも堂々と己の

考えを述べた。

「それにしても、どういった目的で求婚したか……ですって？　目的。目的ねえ。あるにはあるけど、愛しいと思える相手以外に求婚するほどルリルちゃん様は暇でも酔狂でもないのよ」

「い、愛しいって。あのなあ、ほぼ会ったばかりだぞ?!　俺、好かれるようなことなんもしてねえし……」

『なに〜によごによ言ってるの？　もしかして照れてる？　……へえ、まんざらでもないんだ？』

(うつせ！　ちがわい！)

あまりにも自然に愛の告白をされたもんだから、相手が男と分かっ  
ていてもうろたえる。

きつと見た目だけは美少女だからだ。見た目だけは。

あああ、もう！　めんどくせえ！

そういやあの執事はどうしたんだよ！　また撒かれたのかあの人  
!?　早くこいつを回収してくれ！

動揺する俺の内心など知るはずもないルリルベレスは、俺をちらと  
見た後にシャティへ視線を移し言葉を続けた。

「まあ、愛するのに時間なんて必要？　……あなたもその子に好意を  
向けているのなら、目的がどうのこうのというのは、野暮というもの  
じゃないかしら。だって誰かを好きになる時、明確な理由なんて好意  
の後付けでしかないわ」

「それは……」

悠然とした態度で返されたシャティは一瞬言葉につまる。

どうもこの竜人、年の功なのかその堂々とした態度が妙にこちらを  
納得させるような響きを言葉に伴わせているのだ。

が。

突然上機嫌なルリルベレスの顔を歪めさせる怒声が、真横から響き  
渡った。

「き、さまあああ!! この俺様に喧嘩を売る意味が分かっているのか!?!」

「……はあん?」

声の方を見れば、身体中に葉っぱやら枝やらをくつつけた馬鹿魔族がふらふらと森から出てきたところだった。

竜による正面衝突からの轢き逃げ事故はなかなか効いたらしい。だが轢き逃げ犯もといルリルベレスは悪びれる様子もなく、むしろ小馬鹿にするようにせせら笑った。

「あーら、ゴミ虫みたいに小さかったから気づかなかったわ。ごめんあそばせ? 悪気はないの。ただ気づかなかっただけなの! あまりにも存在が小さすぎて!」

あ、見た目がいいだけが気に入る基準じゃないんだ。アルマディオもガーネットの弟だから顔だけは良いのに。

……男だからか? 態度が気持ちいいくらいに反転するなこいつ。 「……………それにしても、ぷっ。俺様? なあに、それ。自分の事をそんなふうに呼んで恥ずかしくないの?」

いやそれはお前が言うなよ。自分の名前にちゃんと様つけてるやつもたいがいというか、その類では上位種だぞ。棚上げの天才かよ。

そう思ったがアルマディオのやつはといえれば一人称を貶されたのが相当気に食わなかったのか、カツと目を見開きルリルを睨みつけた。

「無礼なトカゲめ……………! これから俺様は花嫁と婚礼をあげるのだ!

貴様のように生臭い輩がいたら場が汚れる! さっさと我が花嫁から離れて立ち去れ!」

「はあく? 花嫁? このルリルちゃん様をトカゲと称した事実も許し難いけど、それ以上に馬鹿なことを言わないでくれる? この子はルリルちゃん様のお嫁さんにするんだから!」

「馬鹿なことを言っているのは貴様だ! ガキのままごとに付き合ってる暇はない!」

「あん? てめえいくつだ魔族のクソガキがよ」

「五十五歳だが?」

「はあん、一応ルリルちゃん様より年上なんだあ。でも九歳くらい誤差よね、誤差。ガキと言われる謂れはないわあ」

あいつ子供としての身分は振りかざす癖にガキって言われるの嫌いなんだな……。

「っーか今めっちゃ声低くなかったか？ なに、あの声つてもしかして作ってる？ どっちが地声？ こわ……。」

ルリルは基本的にあどけない子供の声できやびきやび話すのだが、先ほど口悪く発した声はまさしくドラゴンの唸り声。

どっちが素の声か考えたと怖くなるので考えるのをやめた。ロリ女装おじさんの真実とか知りたくねえよ。

何やら言い争いどころか一触即発の雰囲気になってきたルリルベレスとアルマディオ。

双方魔力を高めており、いつ戦いが始まってもおかしくない雰囲気である。

……けど、今ってチャンスじゃないか？

「なあ、今のうちに行かないか？ あいつら放っておいて」

「あ………。それもそうですね。潰し合ってくれるなら大歓迎です。争ったからといってどちらかが死ぬような実力でもないでしょう。確かあの方、黄金<sup>きかね</sup>級の力はあるのですものね？」

「うん」

アルマディオの実力を考えるに単純な力ではルリルベレスが劣りそうだが、これだけの数の魔物に囲まれても動じないんだし、危なくなっても逃げることもくらい出来るだろ。

……見た感じ、周囲の召喚魔物の方がルリルベレスを警戒して動けないようだしな。

「ならミサオ様の言うように、今のうちにとんずらです！ 時間ももったいないですわ」

「確かに、長くなりそうだしね。付き合う義理も無い」

「こそこそ提案した俺に、シャティが冷えた視線で目の前で行われている魔族と竜人の争いを眺めながら頷く。」

アシユレも少々疲れた様子で是と答えた。

「弟には聞きたいことがあったんだけど……どうせまた来るだろうし、今は先を急いだほうがよさそうだねえ」

「モモも、それでいいと思う」

額をおさえていたガーネットも、不機嫌そうにルリルを見ていたモモも同意する。よし、全員合意だな。適当にずらかるか。

間違っても……ネタでも「俺のために争わないで!」とか言わんかな。

どんどんつぶし合え。男に興味はねえんだよ!

「クソガキイツ!!」

「雑魚があツ!!」

……あ、丁度始まったっぽい。

二重に重なる怒声を合図に、爆風が中心から巻き起こる。

何らかの魔術がぶつかり合ったようだが、丁度良い目くらましだぜ。

あばよ! お前らに付き合ってる暇ねえんだわ!

そう心の中で捨て台詞を吐くと、俺達は求婚者<sup>バ</sup>どももの戦いの余波に紛れてその場を後にするのだった。



## 28話 ▶ 精霊の町く大賢者は引きこもり

■ ■ ■  
途中で妙なトラブルこそあったが、どうにか賢者の結界内へ入るための準備は整ってきた。

次の目的地、リーデルを通過すれば賢者のもとまであと少しである。

ヘラトリクス、キヤミタン、ハルニラム、アルファイターク、ベテルキクス、リーデル。

これら六つの土地にある中継ポイントを通過しなければ、賢者が施した結界内に入れないどころか場所すらも分からない。

今でこそ面倒ではあるものの手順さえ踏めば到達できるが、最初は苦労したものだ。

俺の頼もしい仲間達であるが、最初にアシュレ、次いでモモ、その次にシヤテイと来て最後にガーネツタが仲間になった。

賢者の所を訪ねたのはモモが仲間になってすぐの時くらいか。

アシュレの冒険者としての経験、知識とモモの感知能力。それらが合わさった上で更には運も味方してくれたのか、なんとか賢者の元へたどり着けたんだよな。懐かしい。

当時は元の世界へ帰りたくて仕方がなかったから、俺も結構必死だった。

ものの見事にその希望は打ち砕かれて、直後仲間になったシヤテイに乗せられてあれよあれよと魔王退治の旅になっていったんだけど。

全てが順調なら、今頃俺の人生どう転がっていたかな。

そう。帰れないなら世界を救って英雄になって女の子にモテてハーレムでウハウハ！ とか思ってたのにな。

なんで俺は今、せつかくモテてるのにぐったりした気分になってるんだろうな。

体が女になって野郎にまでモテてるからだよ!! いらんわ!!

俺が異世界人であることは一目見ただけで看破した癖に元の世界へ帰るための方法は知らないと絶望を叩きつけてくれた賢者だが、今度こそ頼むぞという気持ちである。

悔しいけどあの人以上に物を知っているような存在を他に知らないし。どうしたって頼るほかない。

世界一の大賢者。それを聞いてほとんどの者が一人の名をあげる。

彼は迷宮ダンジョンの探索にて主に古代の知識を集め、それを持ち帰り独自に研究。技術へと昇華して数多くの文化の発展に貢献したという実績を持っている。

常に知識を求め、それを組み合わせ、種族や身分など関係なく知識と知恵を広める賢人。

広く評価され、崇められてすらいる存在だ。

だが近年はもっぱら住処に引きこもっているようで、滅多に外へ出てこなければ知恵を広めることもなく……半ば伝説の存在とささやかれていた。

そんな人と知り合いになれて困ったら尋ねに行けるんだから、きっと俺はラッキーだ。

だからマジで頼むぞ頼むぞ。俺が男に戻る方法を知っていてくれ賢者！

【俺のチートハーレム記 ○ページの記録より】



賢者の隠れ家。そう聞いて思い浮かべる場所は人それぞれだろうが、少なくとも辺境の土地を想像するはずだ。

だが俺達が前にしているのは鬱蒼と生い茂る森……なんてベタなところではなく、人々が行きかい客寄せの声飛び交う賑やかな商店街だった。

リーデルではさっさとポイントを通過し、最終的に向かった目的地がここである。

だが商店街と言っても、それが収まる町は虚像。本来ここに……”人が住む”町など存在しない。

……商店街を賑わせている通行人や商売人。それらはみな、人の姿を模した精霊なのだ。

よくよく見れば髪の毛の先などが空気に溶けて揺らめいていることなどわかるだろうが、一見してみれば本当に普通の人間である。

ここは賢者が快適に暮らすために作り出した精霊の町。

通常のルートでここに来れば草一本はえていない不毛の土地が荒涼と広がるばかり。

霊峰と呼ばれてはいる場所ではあるが、滅多に人など来ない。

しかし俺たちはポイント……”扉”となる場所を通過してきたため、こうして空間のずれた精霊街へ入ることが出来たってわけだ。

ちなみにここで生活している精霊たちは賢者と契約し、彼の魔力を報酬として人間もどきの営みを行っている。

下級精霊がほとんどだが、町を作れるだけの精霊を一人の魔力で賄っていると考えれば凄まじい。

賢者は知恵ある者としてだけの呼び名ではなく、魔術師を含め数種類の職業をおさめた賢者ワイスマンなのだ。

「話には聞いていましたが、ここに満ちている魔力はすごいですね。歩くだけで魔力酔いしそうです」

「そうか？　俺はなんともないけど……」

シャティがどことなくフラフラしていたので支えようと、これ幸いとばかりにぎゅっと腕に抱き着いてきた。

お胸様の柔らかさに一瞬くらつときたが、なんとか耐える。ここし

ばらく、この程度茶飯事だ。

……素直にデレつけない自分の現状が恨めしいけどなあ！

「ミサオ様は魔力耐性も高いですからねえ」

「ああ。もしくは私のように魔力感知の力が弱い者は平気なわけだが

……。モモは大丈夫かい？」

「ん……。へいき。ここの子達に、悪意はないから」

「ガーネツタもここに来るの初めてだよな。どうだ？」

「魔力酔いはしないね。むしろ力が満ちてくる。きつとここの子達の

気質は私の魔力と相性がいいんだろうさ。……。それにしてもこの様

子じゃ、伝説の賢者様は世捨て人ってわけじゃなさそうだね」

物珍しそうに精霊の町を見回すガーネツタは、食と娯楽にあふれた

様相を見て「気が合いそうだ」と笑った。

そんな風に雑談しながら歩いていると、視界の隅にぴよぴよこ  
ごく玩具の王冠を乗せた黒髪頭がみえた。

どうやら好奇心をくすぐられたらしい魔王は、実態化して町を見る  
ことにしたようだ。

その姿は精霊からも見えないようで、誰も気づかず魔王の体をすり  
抜けて通過していく。

……賢者ならもしやこいつの姿も見えるかもと思っていたが、精霊  
にも見えないようじゃ本格的に俺にしか見えないっぽいな。

実はこれは俺の妄想で本当は魔王の魂なんて居ないとか……。

……。

……。ねえな。無駄な期待はやめよう。

しっかり呪われて女になるっていう結果が出てるし、あまり役に  
立ってないけど呪いのナビされてるし。

……。はあ。

『心の中でため息なんて器用なことするね』

(ため息もつきたくなるわい)

『ふふふつ、まあ勝手に落ち込んでいい。僕は勝手に楽しませてもらうよ。……………バザールって雰囲気だね』

魔王は露店を覗き込んだり行き交う精霊を観察したりしつつ、町をそう評した。

四角い土壁と石造りの街並みに、色とりどりの布が天幕として使われている屋台。

確かに砂漠とかその辺の国っぽいよな。なんというか、アラビアン。精霊たちも布を重ねて巻くような民族衣装っぽいのを着ているし。

こう……なんだ。どこかで願いを叶える魔人が出てくるランプなんか売っていてもおかしくない。

というか、珍しいものが多いから何かしら近いもんはありそうだな。

『ふうん。少し騒がしすぎるけど、なかなか趣味もいい。異界へ座標をずらして作った町か。その賢者ってやつ、面白いことをするねえ。存在こそ僕も知っていたけれど、俄然興味がわいてきたよ』

(さよけ)

こまつしやくれた物言いをしているが、町を見回す魔王の様子はどこか楽し気で、こうして見ていけば普通の子供のようだ。

これで黙ってさえくれてれば、まだ可愛い子供だなんて微笑ましく見てられるんだが。

そう考えているとすぐに『君に可愛い子供とか思われたくないんだけど。身の危機を感じる』とか返ってくるので、叶わぬ夢である。

つか身の危機ってなんだよ!!

俺はシヨタコンでもないし身の危機に晒されてんのはこっちの方なんだよ呪いの意味で!

あとお前は実態ねえだろうがよ!! たとえ触れるんなら引っぱたいてるけどそれもできねえよ!!

ああ本当、早く呪いを解いて男に戻りたいしこいつとおさらばしたい。本当に賢者、頼むぞ。

「そろそろか」

のんびり歩きつつも、寄り道はしないで俺たちは確実に目的地へと向かっていった。

そしてたどり着いたのは他の建物に埋もれるように存在する、くすんだ灰茶色の家屋。

みすぼらしい木の扉が、俺たちの目的地だ。

女になってからそろそろ一ヶ月。

長かった……。ようやく相談に來れたぜ。

なにやら目的地に到着した安心感からか、一気に疲れが押し寄せてくる。

だがまだ目的は何も達成していないのだからと、氣力を呼び覚まし扉の取っ手に手をかけた。

……その時だ。

バンツと音を立てて勢いよく扉が内側に開いたと思ったら、見えな何かにぐいつと胸ぐらを捕まれ中に引きずり込まれた。

なんだなんだ!?! と身をよじって見えない拘束から逃れようとするが、その前に『運んでやるから大人しくしている』と聞き知った声がどこからか降ってきて納得する。

どうやらこれは家主の歓迎らしい。

……前はこんなことなかった気がするんだけどな？

捕まれ引かれるままに体は宙を浮遊し、扉の先にあつた長い階段をすーっと降りていく。

左右に灯つた蠟燭しか光源がなく、雰囲気だけはバツチリだ。何がバツチリか自分でもよくわからないけど。

やがて長い階段は終わり、続いてこれまた長い廊下に至る。体は相変わらず浮いたまま、そこを進んだ。

ちらりと後ろを見ると俺だけでなく仲間四人とも何かに引っ張られるように浮遊しているが、もう慣れたのか自分で飛んでいるかのよ

うに自然体だ。

それを見て俺もようやく体から力を抜き身を任せる。

(インテリア変わったなあ)

運ばれながら周囲を観察すると、迷路のように道が枝分かれしている廊下の装飾は西洋風。

前は中華風だったんだが、模様替えでもしたんだろうか。

(そういや、前来た時も迷ったな。運んでくれるのは素直に親切ってわけか)

『……………、もしかして迷宮ダンジョンかい?』

(お、よくわかったな。そうそう。賢者のやつ、小迷宮を改造して自分の家にしてるんだ)

魔王の言葉に是と答える。

そう。この不思議ハウスに見える物件、上だけはちゃんと建物があるもののそれはガワ。地下は迷宮へと繋がっており、その最奥に賢者の住処がある。

もともとこの場所には迷宮が存在しており、賢者はそこを中心に精霊の町を作ったらしい。

結界内に居るくせに更に迷宮の奥に引きこもっているとあって、本当に会うのが大変な人だ。

にしてもようやくこの浮遊感にも慣れて……………うおっ!?

それまで自転車くらいの早さだった移動速度が急に自動車並になる。

勢いのまま進むと正面に豪華な装飾が施された扉が見えてきて、俺達は観音開きになったその中に投げ込まれるように入室した。

「どわっ」

「きやっ」

「おっと」

「わあ」

「っと」

それぞれ驚きの声をあげつつも、受け身をとる必要はなく体は柔らかいものに受け止められる。

それはクッションの敷き詰められたソファのようで、五つあるそれに一人ずつ座らされる格好となった。

若干目を白黒させていると、鼻腔をくすぐるいい匂いに鼻がひくつく。

見ればソファの前に用意された広いテーブルには、所狭しと湯気のあがる料理やカットされた瑞々しい果物、水滴が張り付きよく冷えていることが窺える飲み物の入った水差しなどが並んでいた。

「久しいな」

そして料理が並ぶテーブルの向こう側。

あぐらをかき体を傾けて、気だるげにソファのひじ掛けに頬杖をついている男が一人。

こちらを観察するように眺めているアイスブルーの視線とぶつかった。

白髪を後頭部の高い位置で結っていて、ゆったりとした下履きを鮮やかな布で腰に留めている。

上半身は軽く布を羽織った他はジャラジャラと重そうな貴金属を身につけているだけで、惜しげもなく逞しく筋肉のついた褐色の肌を晒していた。

尖った長い耳がこちらへの興味を示すかのように、わずかにぴくぴく動く。

ぱっと見、三十代半ば。

しかしこの男が五百を超える年齢よわいであることを、俺たちは知っている。

世界一の大賢者と名高い男の名はカリユキオス・ラトワイヤス。

種族はダークエルフだ。



## 29話 ▶ 歓待く賢者の食卓

「嫌いなものはないか？ まあ俺の料理だから、たとえ嫌いな食材であれ美味しい美味いと食ってしまうだろうが。だが体質に合わないもの、というものは存在する。その場合美味さは関係ないからな。体調に関わる故、そういったものがあれば言っただけほしい」

「あ、ありがとう」

一カ月ほどかけてやつと賢者の元へたどり着いた俺達。

そして到着したら早々に相談を持ち掛けようとしたのだが……。

何故か俺たちは今、せつせと俺たちに料理をよそつては食わせてくる賢者の歓待を受けている。

「獣人の少女よ、肉は好きか？」

「うん、好き」

「うむ、ならばこれを食すがいい。モチモ豚の香草焼きだ。育ち盛りのようにだからな。たくさん食え」

「ありがとう、賢者のおじさん」

初対面ではないけれど、基本男嫌いのモモの警戒心をいともたやすく溶かす賢者。

「騎士の少女よ、肌が少し荒れているな。これを食すがいい。フルフラ鳥のマト煮込みだ」

「少女という年齢ではないけれど……ふつつ。貴方にしてみれば私なほど子供なのでしょうね。賢者殿のお心遣い、ありがとうございます。気を付けていたのだけど、確かにここ最近少し荒れ気味だった。疲れが出たのかもしれないね」

普段大人びた雰囲気纏うアシユレから気恥ずかしそうな照れ笑いを引き出す賢者。

「魔族の女、なかなか甘いものが好きなのかな。こちらの果物は素のままでも甘いけど、加熱するとさらに甘さを増すのだ。食してみるかい？」

「そこは私も少女と言ってほしかったね」

「……失礼した」

「あははっ、冗談だよ！　ありがとね。美味しくいただいたよ」

ガーネットのからかいにも誠実に返し打ち解ける賢者。

「有翼人の女。それだけ見事に脂肪を蓄えているとあらば、さぞ乳料理が好きと見た。こちらのチーズはなかなか珍しい魔物の乳を使っている。栄養も豊富な上に深みのある味でおすすめだ。食すがいい」

「脂肪!?　脂肪って言いました!?　わたくしの胸を見て脂肪とおっしゃいました!?　美味しくいただいておりますが、それはあまりにも失礼ですわ!」

「……………」

「なぜ黙るのです!?　わたくしには失礼した。つて言わないんですか!?」

外面の良いシャテイの仮面を一瞬で剥がしてみせる賢者。

とまあ、食事の場は賢者の気遣いのおかげで大変に温まっている。

みんな美味しい料理に舌鼓をうち、楽しそうだ。

カリユキオス・ラトワイヤス。彼は世界一と名高い大賢者だ。

見た目は年若く整った容姿の偉丈夫なのだが……。

甲斐甲斐しく一人一人に料理を取り分ける様子は、言葉使いこそ厳めしいものの田舎のばあちゃんを彷彿とさせた。

俺がこの世界に来る数年前には他界してしまった祖母だが、遊びに行くと食い切れないほどの料理をいっぱい食えとすすめてくれたわけ。

あれ、思い出したらちよつと涙が……。

などと感傷に浸っていると、賢者が俺を見て口を開いた。

「ところで人間。お前はミサオで間違いないか？」

「今さら!?　これだけ歓迎しておいて、今さら!?」

久しいな。とか言われたから当然俺の現状を言わずとも理解してくれたんだな、さすが大賢者様だなんて感心してたのにな!?

俺が突っ込むと、賢者……カリユキオスはふむ、と顎に手を当てて

俺を頭为天辺からつま先まで観察した。

『ねえミサオ』

(なんだよ)

じつくり眺められてわずかに緊張していると、魔王の野郎が相変わらずの遠慮の無さで話しかけてきた。

しかし珍しい事にその声色はどこか困惑を含んでいる。

……なんとなく、その理由はわかるんだけど。

『何故、彼は裸エプロンなんだい？』

(言うなよ!!! 誰もあえて突っ込んでなかったんだから言うなよ!!!)

せつかく我慢してたのに!

……そう、この世界一の賢者カリユキオスは現在、何故かピンクのフリル付きエプロンと三角巾のようなものを身に着けているのだった。

フリリエプロン。趣味は人それぞれ……自由だ。だからそれだけなら問題ない。

……問題があるとすれば、その下というかなんというか。

上から下まで生の肌が、あられもなく晒されてるんだよなあ!!

何も身に着けていないわけではないが、ぱつと見は完全に裸エプロンである。

ニメートル近くある筋骨たくましい男のフリフリ裸エプロンは、いくらいい男だろうが視界の暴力だろ!

いや、さつきまでの服は何処に行ったんだよ!? 露出は多かつたけどズボンは穿いてたじゃん!!

(で、でも、裸ではないし……)

『僕、賢者の下着がティーバックなことも指摘しなきゃ駄目?』

(だからああ!! あえて突っ込んでないって言ってんだろ!! 俺だつて目のやり場に困ってんだよ!!)

さつきから賢者は厨房と広間を忙しなく行き来しているのだが、こちらに背を向けるとエプロンの後ろ側が見えるわけで。

逞しい褐色の肌が織りなす広背筋を辿ると……その下にはこれまた逞しいケツ筋。黒のレース付きティーバックに包まれたそれが、俺達の視界の端を舞うのだ。

エプロンで前側のふくらみが隠されているのが、せめてもの救いである。

そのことにモモ以外の誰もが何か言いたそうな顔をしていたが、賢者があまりにも自然体でもてなし始めたので完全にタイミングを外したのが現状だ。

俺は突っ込みたくてたまらい気持ちを押しさえながらも、しどろもどろに賢者に問いかけた。

もちろん、裸エプロンとティーバック以外の事で。その話には極力触れない方向で行きたい。

「え……つと。これだけたくさん料理を用意してくれてたってことは、俺達が来るのは分かってたのか?」

「当然だ。各地に設置した結界門を通過した時点で把握していた」

「そ、そうか。俺がミサオってのは、そう。そのお通り。俺はアイゾメミサオだよ」

「ふむ、やはりな。魔力の質が完全に一致している」

俺の答えに満足したのか賢者はうんうんと頷く。

「まあ話は後で聞こう。今は俺の料理を堪能するとよい」

「それはありがたいけど……。あんた、こんな特技あったんだな。料理する人とは知らなかった」

「? むしろ出来ないと思われている方が心外だ。料理は叡智の結晶だぞ。賢者たる俺が出来ないはずなからう」

「あ、はい」

駄目だ。裸エプロンが気になりすぎて話を本題にもってけねえ。  
流れのままに会話するのが精いっぱいだ。

「でも、出来るからって、どうしてこんな盛大に持て成しを？ 前は茶も出してくれなかったのに」

「女性をもてなすのは当然だ。逆に聞くが、男を歓迎して楽しいか？

わざわざ手料理を作ってたまで」

「あ、はい」

秒で納得させられた。

「でも、前だってアシユレとモモは居たのに……」

「お前がひたすらに邪魔だった」

「邪魔は無いだろ!？」

「邪魔だ。でかい凶体の男が俺の住居に入ってくる苦痛を受け入れただけ寛大だったと思え」

「そこまで言う!？」

「それに比べて今の姿はちようどいい大ききだな。しかも女だ」

「それを相談に来たんだよ!!」

叫ぶ勢いでやつと本題を持ち出せたが、残念なことに賢者は興味なさそうだ。

それよりも厨房の鍋をそわそわと気にしている。

「ともかく今は食え。そして肥えろ。俺の目を楽しませるために」

「ちよつと待て今聞き捨てならない台詞が……」

「……ふむ。ミサオ、お前なかなかいい膨れ具合だな」

「ぎゃあああああああ!?! ちよ、おま、あんた！ 腹を触るな!!」

突然服をめくって腹を触ってきた賢者に悲鳴を上げる。

だがそんな俺に構わず、賢者はたくさん食わされ膨れた腹をぽんぽん叩くように触っていた。

無表情だというのに、その様子はどこか楽し気だ。俺はまったく楽しくないが。

「賢者様!! お持て成しは嬉しいですが、いくら何でも無礼ですよ!

ミサオ様になんてことをするのです!」

真つ先にシャティが割り込んで賢者から俺を引き離してくれたが、

賢者とは言えばシヤテイを見てつまらなそうに言う。

「有翼人。お前はいくら食わせても腹が膨らまずつまらんな。みんなその胸に吸収されているのか？」

「ミサオ様。この方、いっぱつぶつ叩いてもいいでしょうか？」  
「いいと思う」

賢者、こんなデリカシー無い奴だったっけ。

俺はかつての記憶に思い出補正かかってんのかなと考えつつ、にわか騒がしくなる食卓を半笑いで眺めるのだった。

### 30話 ▶ 事情説明く勝利宣言はフラグだとあれほど

「して、何用だ。魔王は倒したようだが……わざわざその報告に来たわけでもあるまい。前にも言ったが、いくら俺といえどお前を元の世界に戻す方法など知りえぬぞ。異世界がいくつあると思っている」  
「ぐ……」

思わぬジャブをくらい呻く。

もう納得したとはいえ、改めて聞くとなかなかキツイ。

様々な料理をたらふく食わされた後、しれっと最初の服装にもどった賢者カリユキオスの問いかけ。

ちなみに食事の最中、ついにデリカシーの無い発言の数々に我慢できなくなったシャティが「あなた、その破廉恥な服装はなんなのですか！」と攻勢に出たので裸エプロンの真実は知れたのだが……。 (口が裂けてもシャティの服の背中もなかなかだよとは言えない言わない) なんと「跳ねた油が肌にあたると刺激的で気持ちいいだろう？」という賢者の性癖だった。

知りたくなかったよ、そんなもん。

ティーバックの方については聞けていないが、できれば一生そっとしておきたい……。

俺はばんばんに膨れた腹をさすりつつ、消化に良いという茶を胃に流し込み賢者を見る。

「帰りたいとか、今回はそういうことじゃ……ない。これだよ、これ！ 何に困ってるか一目でわかるだろ!? あんたの知恵を借りたいんだ！」

「これ……とは。そうか、乳が大きすぎて困るのか。確かに邪魔そうだな。だが萎ませるのはもったいないと思うが。女の体は大きければ大きいほどいい」

「ちげえわ!! その前にそれがくつつくようになった原因で困ってんだよ!!」

見当違いなことを言ってくる賢者にわざとか？　と思いつつも全力でつつこんでしまう。

とりあえずさっきの肥えろだのいい膨れ具合だのという発言と合わせて考えて、賢者がふくよか女性趣味ということは分かった。

そのわりにハイパーナイスビッグおっぱいを持つシャティに対するもろもろが何故か雑。部分的に大きいのは趣味じゃない……とか？　いやどうでもいいわ。

うゝ、大声出して前のめりになったら腹が苦しい……！　ズボンが腹に食い込む……！

というか、なんで腹苦しそうになってるの俺だけなの？　みんなお腹いっぱいそうな顔はしてるけど体型そのまんまなんだけど。

代謝か？　代謝の良さか？

モモに至っては追加で出されたケーキを美味しそうに頬張っている。

幸せそうで何よりだが、パパはちよつと心配だぞ。

そのケーキ、俺の目がおかしくなければモモの頭と同じくらいの大きさじゃない？

「……？　別にそのままでもよくないか」

「良くないから相談に来たんだよ！　頼む、元に戻る方法を教えてくれ！　魔王の呪いなんだ！」

俺の悲痛な叫びにカリユキオスはしばし考えるように斜め上を見ると、ぽんぽんつと自分の座るソファの隣を叩いた。

「見てやるから、ここに来い」

「お、おう」

やっとまともに見てもらえるのか。

そう歓喜して賢者の横へ座ったのだが……。

ぽんぽんぽんぽんぽんぽんぽんぽんぽんつ。



「だあああああああッ!! 腹を! 叩くな!!」

この野郎っ、性懲りもなく人の腹を叩き始めやがった! しかも当然のように服に手を突っ込んで!

「カリユキオス殿、そういつたことはお控えを……」

「? そういうこと、とは。なるほど、軽くでも叩くのは駄目と。確かに不躰であったな」

「のわあああああああッ!?!」

「そういうことでもなくてですな賢者カリユキオス殿お!?!」

やや顔をしかめたアシュレが賢者の暴拳を止めようところらへ足を踏み出すが、賢者は納得したような顔で俺の腹の中心を下腹部ギリギリからへソにかけてをなであげ、拳句はへその穴に指を押し込んで撫でまわした。

叩かないからって、どっちにしろ不躰だろうがよ!

ぞわぞわする感覚に背筋が震えあがり飛びのくと、奴は不満そうに眉をひそめた。

「見てやると言っただろう。大人しくしている」

「これってそういうたぐいのもの!?! 本当に!?!」

疑わしくて悲鳴に近い声が出るも、賢者は至極真面目そうに頷いた。

ちらとシャティを見れば、めっちゃめっちゃ眉間に皺を寄せながらも頷く。

「腹部には魔力発生の根幹たる器官が備わっていますので、そこを見るのは間違いではございませんわ。……チツ」

不本意そうに舌打ちまでセットで説明するシャティに、俺は「マジで?」と信じたくなってガーネットタの方も見るが困ったような顔で頷かれてしまった。

魔術に長けた二人が言うなら、それは真実なのだろう。

「見目に反して案外柄が悪いのだな、有翼人」

賢者はさして気にしたふうでもなかったが、極々自然体で相手の神経を逆撫でする。

多分本人に悪気はないが、その分余計に質が悪い。ぴきぴきと、シャティの額に青筋が浮かんだ。

笑顔を崩さないところは流石である。

「あなた様は見目に反して無神経な方ですね」

「そうか？ 照れる」

「褒めてるように聞こえたのですか？ お年のせいかしら。それとも文化の違いなのかしら」

「文化かな」

シャティの反撃も軽くないなすと、賢者は引き続き俺の腹を触ってきた。これが一応正当な検査？ であることを知った今、それも我慢するしかない。

「……………」

分厚い皮の張った硬い指の腹が、ゆっくりと俺のへそ周りを撫でていく。

次いで「香りの確認だ。失礼するぞ」と前置かれたうえで首筋にも顔を寄せられ臭いを嗅がれるもんだから、緊張で汗をかいた首に賢者の吐息なのか鼻息なのか分からない風があたってぞわぞわする。

……確認するのは、あれか。

自分ではよく分からないんだけど、クラス【職業…ファイメール女】はいい香りがするらしいからその確認か。

うう……っ、でもそうと分かっているにも至近距離で触られて臭いを嗅がれるの嫌だな。

相手が女の子ならともかく、野郎にそんなことをされる趣味はない。

しかもこの人ティーバックの下着履いてるんだよなって、変な情報まで得てしまっているものだから奇妙な気分には拍車がかかるのバグだろ。

あああ、もう！ 早く終わってくれえッ！

そしてやつと検診？ のようなものが終わったのか、賢者の手が離

れる。

「……ほう。驚いたな。ミサオ、こうなった経緯を聞いても？」

「順番、普通は逆だよな？ ……まあいいけどさ」

距離をとれたことにほつとすると、俺は賢者にこれまでの事を話した。

魔王を倒したこと。

望みと逆の事象を引き起こす呪いを受けた結果、女になってしまったこと。

そして最重要の話。

俺が呪いを解いて男に戻りたいこと。その方法を知りたいこと。それらをひとつひとつ伝える。

すると賢者はじつと俺の瞳を覗き込んだ後、頷いた。

「有翼人の見立ては正しいな。【職業：クラス女神】は確かに【職業：ファイメール女】を極めた先にたどり着く職業だ。歴史上、そこまで到達できたものはごくわずかだが」

「これまでで下位職業が謎とされてきた、とシャティから聞いていたクラス【職業：アーケレディ女神】と【職業：ファイメール女】の関連性を、賢者は当然のように肯定した。

「わずか……シャティが言ってた、厄災の魔王の後に現れて人々を導いたうんぬんかんぬんっていうやつか」

「その存在も今やおとぎ話程度の知識としてしか知らないものがほとんど。職業の名と共に知る者は少ないのだがな……その有翼人は知識に富んでいるようだ」

「こほん。有翼人でなく、シャティと呼んでくださいませ。先ほど名乗りましたでしょう？ シャティ・ティティシエールですわ。カリュキオス・ラトワイヤス様」

褒められてまんざらでもなさそうだが、賢者の呼び方に不満があったらしくしつかり訂正を入れるシャティである。

「ガーネットタも知ってる風だったよな？」

「ああ。私は元々古代書庫に勤めていたからね。過去の記録には興味があつて、色々読んだ中で知ったのさ」

「ほう！ 魔族の女、古代書庫に居たのか！ あそこは良い。俺も昔はよく忍び込……通つたし、いくつか寄贈もした」

「ガーネットタ。ガーネットタ・グラナタス・アネアドラ、だよ。それにしても忍び込んだつて、その言いつぶりだともしかして最奥の禁書室へ？ 賢者様ほどの方なら、わざわざ忍び込まずとも入れたんじゃないかしらね」

「忍び込んでなどいないが」

「でも今……」

「忍び込んでなどいないが」

（二度言ったよ……）

しれつと直前で発した言葉をしらばつくれる賢者に呆れのこもつた視線を送る。

『あからさまな部分まで言いかけておいて誤魔化せたと思つてる上に、そのまま押し通そうとするとか神経が太いね、こいつ』

（うん）

魔王の言葉に思わず素直に頷いた。

こう……なんだ。

二回目の訪問だからか、それとも俺が女になつて仲間もみんな女だからか分からないけど、以前より賢者との距離が近い。その分会話も増え、今まで知らなかった面を知ったわけだが。

今のところその新しく知った面つてのが「デリカシーが無くて凶太い裸エプロンティーバック」なんだから勘弁してほしい。

寄せていた信頼が怪しくなってくる。

賢者はガーネットタの視線を受けつつ、誤魔化すように賢者と呼ばれる所以である知識を披露しはじめた。

口調がやや早いのは、誤魔化している自覚があるからだろうか。

滔々と語られるのは【職業：女神】クラス  
アーケレディに関する情報の数々。

具体的なスキルや職業階級については内容に含まれていないものの、シャティが話してくれたものより詳しく歴史上で現れた際の記録が提示された。

その中でも聞いてげんなりしたのが、これ。

過去。厄災の魔王の呪いに晒された後の世界で生き残り、その上で現在この地で繁栄している全種族。その祖が元をたどれば件の女神にたどり着くのだとかなんとか。

人族も、有翼人族も、魔族も、獣人族も、竜人族も、妖精族も。……女神、又はその血を受け継いだ者と婚姻を結び、その恩恵を受け血を繋いで今の繁栄につながっているのだという。逆を言えば女神と血縁になれなかった種族は全部滅んだって事だし、賢者に聞いたら肯定された。

ライトめに話してくれたシャティよりも、重々しくその重要性が語られている。

けど職業女神がすごい事は分かるが、その職業に至る可能性を得ているのが自分であり、シャティが言っていた「全世界から貞操を狙われちゃうかも」の意味が具体性を増して嫌な気分にしかならない。

要するに過酷な環境でも生き残れるくらい、強くて優秀な血筋を残せる母体ってわけだ。

母体で。

自分で言ってる気持ち悪くなってきた。産まねえよ!!

話を聞くごとに眉間に皺が寄り口がへの字に曲がっていく俺を見ながら、賢者はそんなレア職業なぜ手放そうとするのかと首を傾げて問う。

待て。同じ男なんだから少しはこちらの気持ちを分かってくれよ！

「俺は！ 男に！ 戻りたいの！ 神様になんてならなくていいの！ 女の子とまっとうに、イチヤイチャしたいの！」

「女のままでも出来るだろう?」

「なんで俺の周りそのへんの境界があいまいな奴ばつかなの!」

その後散々俺は賢者にいかに男に戻りたいかを語り、語り終えた時にはゼーゼーと肩で息をしていた。

俺の嘆きを聞き終えると、賢者はどことなく残念そうにしながらも一冊の本を手取る。

「職業を消すことはほぼ不可能だが、同系統の職業で上書きすることは可能だ」

「マジで?! つつーか、【職業：女】と同系統っていうと……」

「事象にはそれぞれ表裏、対となるものがある。女の対となれば男だろう。……【職業：男】は、確認こそされていないが確実に存在する。

これは俺が責任を持って保証しよう」

「!!」

そ、そうだよな。職業に女があるなら、男だってあるよな普通に考えて!

『チツ』

あ、魔王の奴舌打ちしやがった!? ってことは、これってマジに男に戻る奴なんじゃ……!!

期待に身を乗り出す俺を前に、賢者は本のあるページを俺に見せながら言葉を続けた。

そのページに描かれているのは、神々しい鍵のようなアイテム。

「どこかの迷宮の最奥に、あらゆる職業の可能性を開く宝物が眠るといふ。それであれば【職業：男】を得ることも可能だろうな」

それを聞いて震えが走る。もちろん歓喜によるものだ。

賢者に会いに来てみたものの、本当に男に戻る術を知っているか不安だった。

しかしこの人は俺の期待を裏切らず、労力こそ擁するもののかかなりイージーな解決法を示してくれたのだ。

だって迷宮だろ? 今の俺なら、きつとどんな迷宮だってちよちよいのちよいで攻略できる!

なんとたつて魔王を倒した男だからな!

『倒せてないって、いつも言ってるくせに』

(勝負的には俺が勝ってるからいいんだよ！)

どことなく拗ねたような声を出す魔王に意気揚々と返すと、俺は賢者にぐいっと詰め寄った。

賢者への好感度が一気に跳ね上がっている。これであとはその迷宮の場所さえ教えてもらえれば……っ！

『くくっ。あゝあ』

魔王が何やら変な笑いを含んだ声を出しているが、無視だ無視。

俺は目を輝かせつつ、馬鹿でかい賢者を見上げる。この身長差も、元に戻ればなくなるんだ！

わーっははは！ 勝ったな！ 呪いに！

「で？ で!? その迷宮は!? どの迷宮だ!？」

「知らん」

「え……」

肩透かし。そんな気分を自覚する前に、賢者が詰め寄っていた俺の背に手を回してぐっと引き寄せる。

そして密着したまま、おとがいに手をあてて俺を上向かせた。は？

「ところで、そんな迷宮探しなどやめてここで暮らさないか？」

こちらを見つめる視線に宿るのは、熱い情熱。

「し……」

しまったあああああああああああああ!?

『好感度。出された料理をよく食べて向こうからののが上がった上に、君からも向けちゃったもんねえ。世界一の大賢者の魅了、おめでとう。ひゅ〜ひゅ〜』

(じやかましいっ!!)

ケラケラ笑う魔王の声が、俺の脳内に腹立たしく響くのだった。



31話 ▶ 光明く目指せ迷宫！目指せお宝！俺たちの戦いはこれからだ！

「……は？」

賢者カリユキオスのここで暮らさないか発言。イコールで嫁にならないかという誘いであることは、あからさまなスキンシップで隠せてもいない。

俺の自意識過剰や冗談であつてほしいが、ここへ来るまでに野郎二名ほどから求婚を受けているという嫌な事実が俺の前に横たわっている。

まあ当然、俺がそれを受けるはずもないんだよな！ 当!! 然!!

しかし俺は慌てたままでは魔王を楽しませるだけだと深呼吸して極力落ち着くことを心掛けた。

そして落ち着いたまま勢いよく賢者の顔にアイアンクローをかます。

……手が小さくて思ったように掴めないのが地味に悔しいが見ないふりだ。

顔に手を届かせようと思つたらめちやくちや背伸びしないと届かないのも見ないふりだ!!

「おいおい、賢者ともあろう者が、魅了チャームにかかつてんじゃねえよ」

「魅了になどかかつていない。純粹な好意だ」

「嘘つけ！」

メリメリメリつと指先を食いこませても、賢者は何食わぬ顔で俺を抱き寄せたままである。は・な・せ！

さすがに突き飛ばして距離をとろうかと思つたのだが、その前に賢者の手を引き剥がしたのはアシュレだった。

「それが魅了であれ心からの好意であれ、ミサオをお渡しするわけにはまいりませんよ賢者殿」

「アシユレ……!」

さつと前に出て俺を背に隠すアシユレのなんと頼もしい事か。

自分で何とかすることが出来たとしても非常に安心する。これが、包容力……!」

なんて思っていたら。

【メスメロリンツ♪】

(でつすよねえええええッ!! はいはいはい知ってた知ってた。今さらそう簡単にダメージ受けませ〜ん)

『そう考えている時点でダメージ受けてるようなものだよ』

(黙れ)

抗うという思考を挟む前に鳴り響いた音に、半ば「アシユレのかっこよさを前にしたらしようがないよな……」という諦めに似た感情を抱く。

もう半分日常だもんよこれ……嫌な日常だな。マジでアシユレは悪くないんだけど、俺がいい加減慣れて耐えろよボケがって思う。

地味に落ち込んでいると、それを賢者の求愛にビビっていると思われたのかシャティに「よしよし。ミサオ様、こわかったですよねえ〜」と頭を撫でられた。

あれ、俺って一応この中で一番強いはずなんだけどな……!?! ポジション、おかしくない?」

そう思いつつも、恐る恐るアシユレの背中から顔を出して賢者を窺う。

「馬鹿な事言っていないで、迷宮の場所を教えてくださいよ」

「いや、しかしだな。宝物ほうもつがある迷宮の場所を知らないのは本当なのだ」

一連の流れがまるで無かったかのように淡々と答える賢者に、このジジイのテンションよくわからないなという感想しか抱けない。

「いかに俺が世界一の大賢者と呼ばれているからといって、全てを知らないことはすでにお前は知っているだろう」

「それは……そうなんだけど」

「継るような思いで元の世界に戻る方法を求めたが、突き付けられたのは「何故無理なのか」という理由が添えられた不可能という事実。それを考えれば俺としても頷くしかない。」

「一方的に「世界一の大賢者」という肩書に信頼を寄せているのはこちらなのだ。頼られた方も迷惑だろう。」

「自ら大賢者などと名乗ったわけでもないが、無知を既知と偽る者が賢者などと呼ばれてたまるものか。俺は知らないことは知らないと言おう。教えないという事はあっても、その場合は「知っているがお前には教えない」と伝えるさ。これでも正直者でな」

「賢者カリユキオスはそう述べると、ついつと壁に指先を向け動かし、すると壁に亀裂が入り、次いでぼこつと浮き上がったかと思うといくつもの本へと形状を変えた。」

「その本たちはそのまま飛び出て、ひとつが賢者の手に納まる。」

「残りの本は手招く賢者に導かれるように、彼の周りを緩く回りながら浮遊し留まった。」

「職業。魂の指針、魂の力とも言えるその力を我々は生涯をかけて磨き、鍛え上げる。誰に言われたわけでもなく、進化のための本能でな。高位の職業を極め魂を鍛え上げた者が属する種族は全体にその力が伝播し、より高位の存在へと昇るのだ」

「つらつらと述べられるのは、この世界における生物の形。」

「……まず職業の資質はそう簡単に手に入るものではない。あらゆる経験値が向き不向きに関わらず取得できるとかいう、馬鹿みたいに強い力を持つお前と違ってな。ミサオ」

「魔王の呪いで余計なものも含まれてはいるが、複数の職業を持つ俺を賢者のアイスブルーの瞳が見つめてくる。」

「一応賢者にも元の世界に戻れるならと、前回来た時に俺の力に関しては全て開示済みなのだ。」

「少しでも世界渡りに関する情報の手がかりはあった方がいいからな。」

「ともあれ、そんな職業クラスを司る宝物が何処にあるかなど簡単に知れるわけがないだろう。ただでさえ迷宮の数は多いんだ。かつて二千を超える迷宮を踏破した俺がこれを言う意味が分かるか？」

「にせ……ッ!? そ、そりゃあ……まあ」

思った以上の数の迷宮を攻略していた賢者にビビりつつ、その例を出されては賢者が知らないという事にも納得を示すしかない。

ダンジョン  
迷宮。世界各地に残されている未知の空間。

過去の文明が魔王の厄災から逃れるために作った叡智の結晶だとか、かつてこの世界を創造した神が残した遺産だとか諸説ある。

冒険者を中心にその攻略、踏破は進められているが……。今も未発見だったものがぼこじゃか見つかる程度には多いんだ、これが。

中の空間は現実的な広さの物もあれば、あきらかにこの土地面積に埋まってるのは無理あるしおかしいだろ！ といった物もある。

もしくは一度攻略されたのに、一定期間経過すると中身が変わっていったなんてこともあると聞いた。

そんな不思議空間を……。

「もしかして、しらみつぶしに探すしかない……?」  
く……っ！ 光明が見えたと思ったら再びどん底へ叩き落された気分だぜ。

五百歳越えの賢者ですら全てを知らない迷宮を、人間の俺が生きている間にひとつのアイテムを見つけだすことが出来るのか!?

単純な力だけではどうにもなりそうにない困難を前に、がくりと膝をつく。

『わあ、見事なまでに敗者のポーズ』

(こ、この)

ここぞとばかりに魔王が喜色満面の笑みでつついてくるもんだから、怒りつつもダメージが倍増した。

人がされて嫌だなんて思う事を最高のタイミングで仕掛けてくる本当に嫌な奴である。

だが打ちひしがれる俺に、再び光明は示された。

「しかし俺は賢者と呼ばれし者。……知らずとも、知りうる情報から新たに道を切り開き価値を創造する者だ。知識を無為に蓄えるだけが賢者ではないのでな」

「……と、いいますと。もしや、宝物が存在する”可能性”のある迷宮ならばご存知と」

「!!」

シャテイの問いかけを耳にして、萎んでいた期待の心が一気に膨らんだ。

「察しが良いな有翼人。その通り。そいつがありそうな場所なら、ざっと五つまで絞り込める」

「本当か!?!」

「ここで嘘をついてどうする。俺は正直者だと言っただろう?」

「~~~~~!」

「もちろん、可能性であって確実なものではないぞ」

「それでもいい!」

五つ!

無数にある迷宮の中からそこまで絞ってもらえたなら、もしその五つが駄目でも次点の候補たちも分かるはずだ。

自分たちでしらみつぶしに探すよりも、ずっといい!

飛び上がりそうになる気持ちのままに敗者のポーズから復活した俺は、期待のこもった目で賢者を見る。

「当然、教えてくれるよな! 世界を救った英雄に、そのくらいのご褒美はあっていいはずだぞ!」

何か変なものを情報の交換条件に出されても困るので、俺はここぞとばかりに救世の英雄という称号を振りかざした。

現状、宿屋親子と仲間達、この賢者しか知らない事実ではあるけども。

報酬や賞賛が受け取れないなら、これくらい得したっていいだろ! 前回は結構な金額と希少アイテムを対価にぶんどられたからな

……!

今だと嫁になれば教えるとか言われかねない。

「まあ、よいだろう。ほれ」

賢者はしばし考えるも、拍子抜けするくらいあっさりと了承の意を示した。

彼はひとつ頷くと、先ほどのように指先を動かす。

するとそれまで賢者の周りを浮遊していた本からぱらぱらいくつかのページが抜け出てきて、俺の前に五枚のそれらが並ぶ。

そこには迷宮までの地図と簡易的な迷宮難易度が示されており、示されているのは全て【攻略推奨練度：黄金きがねく白金しろがね】。

相当な高難易度迷宮であることは窺える。しかしだ。

「上等だ……! どんな迷宮でもかかってこいつてんだ! 俺はやるぜ!」

「モモも、ミサオママのお手伝い……する」

俺がメラメラと燃え滾るような気持で五枚の紙を手にとると、丁度ケーキを食べ終わったらしいモモがぎゅつと抱き着いてきた。

静かだと思ってたけど、食べてる間はしゃべっちゃダメだぞという俺の教えをちゃんと守っていたらしい。うちの子めちやくちやえらい。

「ありがとなく! モモく!」

モモのお手伝い発言に嬉しくなり俺からも抱き返す。

俺の娘じゃないけど娘みたいな愛娘、マジ可愛いぜ。パパは嬉しいぞ!

【メスママリント♪】

(パパだっつってんだろうが母性じゃねえんだよクソが!!)

魔王もメス堕ちポイント音も、人のいい気分には水を差すことしかしてきやがらねえ!

「早々に。早々に迷宮へ向かおう。このままだと攻略する前に俺が女から戻れなくなる」

「また女子力ポイント溜まったんですか？」

「え、あ、……うん」

シャティのメス堕ちポイントに対する「女子力ポイント」呼びが未だに慣れなくて一瞬タイミングが遅れるも、こくりと頷く。

シャティさん、どこことなく嬉しそうな顔するのやめない!? 俺は女の子にはならないぞ!

いくらシャティが女の子の方が好きでも、元に戻ったらそっちの姿でも好きになってもらえるよう頑張るから男の俺を諦めないで!?

「完全に女になったらいつでもここへ来るがいい。働かなくても豊かに暮らせる最高の場所だぞ」

「だ・か・らー! 女にはならないって言ってるんだろオ!」

ここぞとばかりにぬるつと近づいてきた賢者がアピールしてくるが、冗談じゃない。

わざわざ住居の外に出てまで俺に求婚を迫る気が無さそうなのは幸いだが、どいつもこいつも俺が男に戻れない前提で考えよってからに! 腹立つなア畜生!

「ほほほ。賢者様は一人で引きこもっていればよいのですわ。ミサオ様はわたくし達と旅をして仲を深めるのです。お呼びじゃないんですよねえ。それにたとえ女の子になったからといって、わざわざここに来る必要がありました? その時はわたくしが責任をもつてミサオ様を幸せにいたしますから、ご安心めされませ!」

賢者の言葉を聞いたシャティがモモとは反対側から抱き着いてきて、笑顔のままにバチバチとした視線を飛ばすという器用なことをやってのけた。

けど俺としては「その時」が来るのをまず回避したいので、素直に喜べず引きつり笑いしか出来ない。感情がもによる。

あの、シャティさん。俺が男に戻ってから一緒に幸せにならない? ねえ。女の子になるの前提で話すのホントやめて?? 本当に協力してくれる気ある???

せっかくの美少女サンドという美味しいシチュエーションだというのに素直に喜べないのが辛い。

モモとかも俺が男のままなら、絶対抱き着いてきてくれないもんな。……はあ。

しかし！ しかしだ！

溜息は絶えないが、これからの方針は決まった！

色々思うところはあるけど、仲間たちはみんな俺が元に戻るための協力はしてくれる気で居る！ 多分!!

なら【職業：男】という職業クラスを求めて、迷宮攻略ダンジョンをするだけだ。

やるぞ頑張るぞ俺なら出来る！

そして目指すのだ！ 男の俺による正当チートハーレム生活を！  
俺達の戦いはこれからだ！

『おーおー。また綺麗にフラグ立ててるねえ』

(だからお前は水差すのやめろ！)

もうお決まりになってきたような魔王のクソ茶々に内心で怒鳴り返すと、俺は「迷宮攻略、やるぞー！」と高々と拳を突き上げるのだった。



本編を読まなくてもだいたいわかるかもしれない二章のあらすじ

「本編を読まなくてもだいたいわかるかもしれない三章のあらすじ！」

賢者カリユキオスより男に戻れる可能性……【職業・女】を【職業・男】で上書きするために「あらゆる職業の可能性を開く宝物」を求め五つの迷宮を目指すことにした操達。

しかしその途中、操は謎の不調に襲われる。

体そのものの不調とイライラして制御の利かなくなりそうな自分に気付いた操は「自分は呪いの影響で闇堕ちしかけているのでは」と考えた。

しかし仲間相談してみれば、なんとその不調は女性特有の現象……生理の前兆ともいえるものらしい。

そのことに悲鳴を上げてのたうちまわる操だったが、その対処を今の内から知っておくべきだと仲間達に生理についてのレクチャーを受けることとなる。

勉強の途中でストレスが限界地に達しそうな操を気遣ったガーネットが気分転換に散歩を勧める。

その言葉に甘えて魔物でも狩って気分を晴らそうと一人町の外へ出た操。

しかし幾分も歩かぬうちに、空から血の雨と共にズタボロの少年が降ってきた。

訳も分からない状態であったが少年は瀕死。

転移魔術に耐えられそうな体でもなくその場での対処が求められたが、操は治癒魔術の加減が上手くない上に遠方からは少年の怪我の原因であろう魔物の大群の影が迫っている。

どうしたものかと考えあぐねていると、そこで魔王が一つの提案をした。

それは現在操が身に着けている「職業・乙女メイデン（職業・女の第二ステータス）」の職業スキルを使ってはどうかというものだった。

そのスキルの名は「乙女の口づけ」。

体液を媒介にある程度無条件に傷を癒すという回復チートだった。効果は破格であるものの方法が方法だけに躊躇するが、そうも言われてられないと回復を実行。

その後回復した少年を背にかばい、迫ってきていた魔物の大群を一掃した。

話を聞けば魔物の大群は少年のパーティが見つけた未発見の迷宮に封印されていた”悪意の化身”を名乗る魔術生命体が生み出していたものらしい。

迷宮から操達が居る町まで村と町をひとつずつ飲み込み進軍していた脅威だったが、その中心にいた魔術生命体を操が倒したことで他全ての魔物も消失した。

その功績により操の冒険者としての実績階級は十階級中の七まで上昇。

更には命を助けられた少年……ルキはミサオに弟子入りを志願する。

ルキの弟子入りを断ろうとしていた操だったが、彼の職業シューカが探索者であると知ると考えは一転。

迷宮での宝探しに役立ちそうだと弟子入りを受け入れた。

新たな仲間をくわえ、操達はシャティの故郷、天空都市マシユラバ近くにある第一の迷宮を目指す。

【ぎっくり新規キャラ紹介】

■ルキ

■種族：クオーターエルフ（四分の一だけエルフの血を引いている）

■性別：男

■年齢：十三歳

■取得職業：探索者、魔術師、剣士

■仲間と共に厄災の魔王が倒れた影響で新たに発見することができた迷宮の探索をしていたが、その最奥で眠っていた古代の魔術生命体の封印を解いてしまう。仲間達は一瞬で殺され自身も瀕死の重傷を負うが、操に一命を救われる。

操に恩返しをするためにも強くなりたいと思ひ操に弟子入りを志願した。

## 【世界観メモ】

これまで出てきた世界観のメモ。

作中で出てきていない部分も少し書いてある気もしますがフレバー的に受け取ってもらえればと。

### ■断崖都市ベテルキクス

・リオン大渓谷中ほどに位置する大都市。人口の半数を土妖精とドワーフが占める。

・土妖精たちによる魔術で街の天井部分にも重力が反転した居住可能地区がある。その上には日光がわずかにあれば育つ樹木類が群生しており、そこで育てた作物（主に根菜類。葉物野菜は高級）や大地水湖でとれる魚が名物。氷室で熟成された酒もうまい。あとは輸入が主。ダンジョンから食べられる魔物（少ない）の肉をとってくと高値で買ってくれる。

・迷宮も有名だが、冒険者のランクは高位でも青や銀がほとんど。

## ■ガルーダ便

- ・有翼人の一部族、ガルーダ族が営む世界最速の宅配業者。大きな都市へ行けばだいたいある。
- ・ガルーダ一族は有翼人の中でも飛翔速度は最速。

## ■冒険者証

- ・硬貨の形をしている。
- ・身体能力と魔力総量から強さを色で表現できる（練度）が、技術力での強さは測れない。
- ・実績は宝石を用いた文字で刻まれ、記録する機能を備えている。加工は冒険者ギルドの妖精にしか出来ないため偽ることは出来ない。
- ・一定期間実績が無いと妖精王のもとに返還される。
- ・冒険者ギルドのマスターは妖精王。
- ・等級が上がるとオプシオン機能の追加が可能。無実績期間の延長や、銀行機能など。
- ・ランクは全部で銅金（どうがね）、赤金（あかがね）、青金（あおがね）、銀金（ぎんがね）、黄金（きしがね）、白金（しろがね）、黒金（くろがね）の計七つ。銅が一番下で黒が一番上。
- ・十のランクで分けられている。（練度＋実績でランクが決まる）
- ・白金級は世界で百人もいない。黒金はさらに少なく、二十人ほど。

## ■迷宮（ダンジョン）

- ・迷宮魔物が徘徊する迷宮。魔物を倒すと肉体は消え去り、あとにはアイテムが残っている。加食部意などを得るためには命を絶つ前に体から切り離すことが必要。

・妖精王が冒険者ギルドを作った目的は厄災の魔王に対抗できる人材を探す、育てるに加えて迷宮に眠る謎を解明することが目的。あと宝。なので冒険者ギルト、迷宮の攻略を冒険者の仕事としてめちやく

ちや推奨している。

・かつて世界から去った神の遺産とも、厄災の魔王が猛威を振るう以前の文明が残した叡智の結晶などと言われている。諸説あり。

・見た目通りの大きさだったり、明らかに見た目より大きな空間が広がっていたり、いつのまにか中身が変わっていたりするらしい。

#### ■職業

・魂の指針、魂の力とも言えるその力を生涯をかけて磨き、鍛え上げる。誰に言われたわけでもなく進化のための本能で。高位の職業を極め魂を鍛え上げた者が属する種族は全体にその力が伝播し、より高位の存在へと昇る。

・職業階級が全部で十段階。その十段階級中、五段階から上に行きなおかつ維持するのは結構難しい。

#### ■迷宮内の仮設トイレと分解紙（賢者カリユキオスの功績）

・迷宮内には魔力を用いた工作技術、魔技術によって作り出された「仮設トイレ」が専門の業者によって設置されている。

・迷宮の奥や新規で見つかった場所に設置するほど報酬が高くなるらしい。ものがあっても設置にはそれなりに知識が居るため専門業者以外が取り扱う事はほとんどない。

・迷宮自体の魔力を吸い取り存在を維持、使用者の魔力で補強し使用可能となる。

・使用者の気配を薄くし魔物を寄せ付けないし排せつ物を分解し、消滅した迷宮魔物と同様に迷宮へ魔力として還元する。その簡易版が分解紙および探索用の下着。

・探索用下着：基本使い捨て。排せつ物を受け止めた後に魔力に還元こそしないが無臭の砂のような物質に分解、変換して専用の付属袋にたまる。その分解紙を更に効果を薄くして量産、安価となった代物がこの世界の女性が多く愛用している生理用品（ナプキン）。流通し始めた同時期から女性冒険者の台頭が目立ち始めた。

■冷凍魔術の魔技術化（賢者カリユキオスの功績）  
冷蔵と冷凍の魔術を家電製品のごとく誰もが使える形にしたもの。

■黒星草（こくせいそう）

世界の土壌全てから魔力を吸い、厄災の魔王の糧とする魔草。厄災の魔王が生きている内は世界中に群生している。燃やしても引っこ抜いても切っても薬品をかけても枯れない厄介な草。

■技能【乙女の口づけ】

ミサオの体液は現在それそのものが回復の力を有しており、口という最も精気の入りがし易い場所と唾液を介して力を注ぐことである程度無条件で癒しを与える。【職業・女神】まで上り詰めることが出来れば、不治の病も癒し瀕死の怪我でさえも一瞬で回復することが可能である。

現段階では対象とのレベル差が大きければ大きいほど回復値も大きくなるが、そもそもミサオのレベルが高いので大体の怪我は治せる回復チート。

■【職業：探求者】

索敵やアイテム探し、マップピングに優れたスキルを得ることが出来る職業。職業適性を得られる場合が少ない。結構なレア職業。

### 三章

32話 ▶ 闇堕ちくと思っていた時期が俺にもありま  
した



賢者カリユキオスから求めていた情報を得た俺たちは、さっそく教  
えてもらった迷宮を目指して旅立つことにした。

後になって思えばまだ聞きたいことは他にもあったのだが、賢者が  
隙あらばべたべたスキンシップしてきてはここに残らないかと無駄  
な色香と共に誘って来るのだ。

もう逃げるように旅立ったわ。

いくら色っぽくても男のそれでは真顔にしかない。

俺がメス堕ちさせられるのを危惧するのは女の子相手だけなんだ  
よな。

ここまで書いて、何で俺は女の子にメス堕ちさせられそうになっ  
てるんだろうって改めて考えてしまった。

アシユレはかっこいい。

知ってはいたけど、俺が男だった時に厳しかった様子とのギャップ  
もあつてか余計に際立って見える。

息をするように俺を気遣いエスコートしてくれる様は正に騎士で  
あり紳士。

ここ最近の変な輩どもから守ってくれるしな。

守られてどうするんだよって思うけど、スーパードーリンってのは  
こういう存在の事を言うのだろうかど納得させられる。参考にした  
い。

こう……素直にときめいてしまうので、メス堕ちというより乙女堕  
ちさせられそうになるのだ。

かっこいいといえばガーネットもだ。

豪放磊落な性格ながら、年上らしく一步下がった位置で全体を見てくれている様子がなんとも頼もしい。

冗談めかして場の空気を緩ませてくれる所なんかには女性らしい包容力も感じて、これが子持ち逆ハークイーンの度量と貫録かと感服する。

うっかり全てを委ねてしまいたい誘惑にかられ、夜のお誘いに乗って嫁入りしそうになる。

……この場合、嫁堕ち？

頼もしいけどかつこよさにときめいたりすることが無いのはシャティだ。

最近清楚潔癖なイメージが崩れているものの、シャティはかつこいよりも可愛いだからな。

自分の魅力を十全に知ったうえでの可愛さ、最高だと思う。

だから精神的にはメス堕ちポイント溜まんないんだけど……スキップが一番激しいので、油断すると女性としての体の”良さ”つてものを教え込まれそうになるのだ。

協力こそしてくれているが、俺が女の子のまままで居ればいいのについて一番思っそう。危険。

今のところガーネットを抜いて快樂堕ちさせてきそうな女子ナンバーワン。なんだよこの字面。

同じくスキンシップが多いものの、邪な思いを一切含ませていない天使は我が娘モモ。

俺をお嫁さんにしたいとか言っていたが、純粹に家族になりたいという気持ち故の発言のようだ。愛おしい。

そんなモモだが、素直に甘え上手で可愛いので俺の中の母性が刺激され実はアシユレに次いで俺のメス堕ちポイントがたまる原因となっている。

俺がいくら父性だと主張してもメス堕ちポイントの野郎は頑なに母性としてカウントしてきやがるの腹立つ。



モモもモモで「ミサオママ」呼びで固定なもんだから、ほださされての母堕ちが危惧される。

乙女堕ち。嫁堕ち。快樂堕ち。母堕ち。

メス堕ちの中にくつもバリエーションあるのおかしくねえか!?!  
と思うものの、カテゴリ分けしておけばメス堕ちポイントが溜まり  
そうになった際、抗う事も多少は出来るようになる気がするので記し  
ておく。

把握、大事。

魔王が無駄な努力とか言ってるが無視だ無視。この手記の中にお  
前の居場所はない。

魔王といえば、忌々しい事に最近脳内で喋るにとどまらずよく実  
体化するようになった。

こまつしやくれた顔の良いシヨタに煽られ続ける日々は常に屈辱  
にまみれている。

勝ったのは俺なのに、いろいろおかしい。

それもあってか、最近妙にイライラする頻度も上がってきた。

よろしくない傾向だと思うので、常に冷静を心掛けていこうと思  
う。

【俺のチートハーレム記 ○ページ目より】



「ミサオ様、なにか怒ってらっしゃいます……?」  
「え」

問われて初めて自分がしかめっ面をしていた事に気がついた。

慌てて「そんなこと無い」と否定するも、最近妙に些細なことが気に障るのは事実だったりする。

手記に冷静さを心がけようと書いたばかりだというのに……いかに、いかに。

でも、こう。多分これって体調の悪さに起因するものなんだよな。熱も無いのに微妙な頭痛が続いているし、加えて体がとにかく重いしだるい。

旅に支障が出るほどではないが、それがひどく煩わしかった。

そのせいなのか思考に鈍色のフィルターがかかったような感覚もあり、仲間の声に反応するにもわずかなタイムラグが発生する。

よくよく考えなくても他意などないだろう言葉に対しても、悪い想像をしてしまい心の中に悪感情がとぐるを巻く。

……などなど。

その感情の変化に対し魔王が気づかないわけもなく、日に日に笑みが深まっていく様子が更に腹立たしい。

八つ当たりのように遭遇した魔物に対して不必要なほどの火力を振るい、無駄な自然破壊までしてしまう始末だ。

頭で駄目だと分かっているのに、重く深く荒れ狂う不快な感情が制御できない。

(まさか、メス堕ちの前に闇堕ちしかけてるのか、俺……!?)

はっ！ とばかりに思い至る。

な、なんてことだ。理不尽に耐えつつも強く逞しく女の体で頑張っていた俺が闇堕ちだっ!?

しかし状態が状態だ。

耐えられていると思っただけで、やはり相当なストレスが溜まっていたに違いない。

あと、職業を得るという結果に落ち着いたとはいえもともと魔王の呪いだしなこれ。

呪いが俺の心を蝕んでいると思えばこのすつきりしない感覚も納得だ。魔王が上機嫌なのもさらに納得がいく。

ま、魔王め！ 直接ふるえる力が無いとはいえ、やはり邪悪な奴！  
だが俺は屈しない！ 闇堕ちに気付いたからには耐えてみせるぜ！  
呪いになんか負けるかバーカ！

そんな風に奮起していた数十分前の俺、お元気ですか。

俺は今死にそうです。数十分後の俺より。

俺は自分の状態を自覚した後、素直に仲間達にその内容を伝えることにした。

こういうのって一人で悩むとドツボにはまるパターンだからな。  
俺は詳しいんだ。

「……って感じでさ。もしかして俺、魔王の呪いで女になるだけでなく闇に吞まれはじめてるんじゃない……」

我ながら深刻そうな面持ちで恐る恐る仲間達の様子を窺う。

しかし俺の予想に反して、みんなの様子は非常にあっけらかんとしたものだった。

魔王でさえ俺が自分の状態を話していくうちに楽しげだった様子から急速に興味を無くし、つまらなそうにあくびを始める始末。「なんだ、そういうことか」って分かったような口ききやがって。何がそういうことなんだよ。

つーかさ！ 俺の闇堕ちってそんな程度なの!? 俺が闇堕ちしたら大変だよ!? 魔王より強いんだぞ!? 闇堕ちして第二の魔王になつたら手とか付けられないよ!? ねえ！

が。俺の悲痛な主張もなんのその。仲間達からの視線はどこか生暖かい。

なにになになに。その優しい気な視線が何故か今とても怖いんだが。

「ミサオ様。女性になってからそろそとひと月が経ちますよね？」

「え？ あー……うん」

い、一か月か。

そこそこ長い期間を改めて自覚して肩が沈む。

落ち込む俺をよそに、シャティはなにやら納得顔で頷きながらアシユレを見た。

「ふむふむ。人族の女性としては順当な周期ですね。どうです？ アシユレ」

「うん。おそらく、そうだろうね。私は対処も慣れたものだが、ミサオにはまだ辛いだろう」

「ひと月ごとに来るなんて、人族は大変ですね……」

「まあ、こればかりは生理現象だから。シャティの回復魔術やガーネットの薬湯にはいつも助けられているよ」

「おや、役に立っていたならよかったよ」

「お世辞抜きにこれまで飲んできたどの薬よりも効く」

「ははっ。そりや良かった。娘達にもよく作ってやってたから、経験が活きたね」

「????」

俺が理解できないままに仲間達が納得しているし、なにやら共通の話題で盛り上がっている。

置いてけぼりにされながらもじわじわ嫌な予感が腹の底からせりあがってくるようだ。

だが俺が身構える前に、シャティがオリハルコンの武器もかくやという言葉の切れ味でもってズバツと述べた。

「ミサオ様、その症状はですね。月のものが近いからなのですよ」

.....。

.....。

.....。

「は？」

一言。

深呼吸。

一拍。

.....。

間をおいてから、すうすうすうすうと鼻から息を吸い、止めた。今口を開けたら色々な感情が溢れてしまいそうで。

待て待て待て待て待て。今聞いた言葉はなんだ。理解してはいけない気がする。まずは落ち着け。

ドクドクと跳ねる心臓の音が耳の近くで聞こえるようだし、冷や汗も背中をびっしり濡らすほど。

きっと顔は真っ青だ。

つきのもの。

月のもの。

そ、それって。まさか……！

『月のもの、月経、女の子の日。……ま、生理だね』

「うわあああああああああああああああああああああああ  
!!!!」

心の準備が整う前に魔王から止めを刺された俺は、大絶叫した後  
に頭を抱えて地面を転げまわるのだった。

### 333話 ▶ 無垢の一撃く冷や汗が止まらない

生理。

女の子にだけ来る、子供を産むことが出来る準備が整った事を示す生理現象。

小学生の頃、初めて授業で習った時はその後しばらく女子に対して気まずい思いをしたし、プールの授業を休んでいる女の子を見ると「ああ、そうなのかな」と考えるようになった。

知識では知っていても、そうそうに触れることは出来ない絶対領域。

……だと、思っていたのに！

(俺、今女の子だったああああああああああああああ!!)

シャティからさつきり告げられた衝撃的な内容に、狂ったように地面を転がりまわっていた俺。

だがやがて体力が尽きて、仰向けで寝転がった体勢で止まった。

ああ、空が青い……。でも滲んで見えるのは、なんでだろうな……。鼻と喉の奥がしよっぺえや……。

「み、ミサオ様。……そうですわよね。はじめてのことですもの、びつくりしますわよね。申し訳ございません。配慮が足りませんでした。ごめんなさい。でも、これだけは安心してほしいのですが……月のものが来る前はとても精神が不安定になり易く、体調にも変化が生じるのです。ですからこれは生理的現象であって、ミサオ様が心配するよな魔王の呪いによる精神の侵食などではありませんわ！ ご安心ください！」

「あ、はい……」

俺の奇行を見たシャティがあせあせと心底申し訳なさそうに謝罪

してくるが、今の俺にとってその腫れ物に触るような態度が逆にづらい。  
かといってきつきのように雑に衝撃の事実を告げられても困るけど。

だが俺はこのすぐ直後。

更なる試練が下されるなど露とも思っていなかった。

「ねえ、ミサオママ」

「は……はは……。なんだ……モモ……ははは……」

力なく倒れている俺をひよこつと覗き込んできた桃色の少女に、俺はひくつき、ふるえる口でなんとか返事をした。

そういえば「わかってる」感を出す女性陣の中で、モモだけ腕組みしながら首傾げてたな。

なんでだろう？ と働かない頭で考える。

モモ。桃か……。

我ながら安直な名前にしてしまったなとも思うけど、それ以上にピツタリの名前だと思う。

この世界は髪色のバリエーションが豊かだけど、桃色の髪っているのは意外と少ない。

こんなに違和感なく人に収まるピンクの髪ってあるんだなと感動したので覚えている。

桃は魔除けになるというし、桃の節句……女の子のお祝いの日に飾られる花でもあるからな。

直感もあつたけれど、記憶を失った少女に少しでも不幸が寄せ付けられることなく、幸せが訪れますようにとつけた名前だ。

その名付けただけの俺を親のように慕ってくれる、可愛いモモ。

そのモモが、小首を傾げて俺を見ている。

「？」

俺も内心首を傾げる。

奇行に走った俺を心配しているというよりは、なにかを疑問に感じている。そんな雰囲気だ。

表情が乏しい彼女の感情も随分わかるようになったなあと考えていると……その珊瑚色の愛らしい唇から、俺への更なる追加試練が放たれた。

「月のものって、なあに？」

「!？」

これに驚いたのは俺だけではない。

他の女性陣がにわかにならなかつた。

「あら!? モモは初潮がまだでしたっけ……? たしか、十四歳くらいでしたよね？」

「そうだね。仲間になつてから一度もそんな様子はなかつたし、おそらく」

「多少の種族差や個体差があつても、獣人の周期は人族とそう変わらないはずだ。そうなることなくはないけど、少し遅いね。モモの種族は獣人内でも希少だから私も詳しくは知らないが……」

「ふ、不覚。有翼人ベースで考えてはなりませんね……! 一度ちやんと見ておくべきでした」

「いや、それは付き合ひの長い私が気を付けておくべきだった。血の匂いについて聞かれたことはあつたけど、あの時はこの子にはまだ早いかと誤魔化してしまつたから。でもそうか……モモもそろそろ知つておくべき年齢だね」

シャティ、ガーネツタ、アシユレの会話でだいたいの察する。

けど俺としては「ああ、種族が違う影響つて発育にも関係あるのかあ〜」などと呑気に驚いている場合ではない。だって俺はまだモモの質問に答えられていないのだ。

ダメーヅ抜けきらない俺に、モモは更に質問を重ねる。



「ミサオママ。ねえ、ミサオママが驚いてる月のものって、なあに？  
教えて。モモ、知りたい。だってそのせいでミサオママ苦しがつて  
るんでしょ？」

「そ、そ、それは……！」

俺はどもりながら、助けて！ と仲間達を見た。

自分に生理が来そうって事実を受け止めるだけで精一杯なのに、更  
には無垢なモモに生理のあれこれ教えなきゃいけないのは流石に拷  
問だろ!?

いくら仮の親とはいえ!! 俺はママじゃなくてパパなんだよ!!!

『さすがにこれは同情するよ……』

(お前が……!?)

憐憫を含んだ声色の魔王にぎよつとする。

ここぞとばかりにからかってくるものと思っていたら、まさかの純  
度百パーセントの憐みである。

これはこれで屈辱だけど、こいつにそこまで言わせるほどってこと  
はやっぱり今の俺って相当可哀そうな状態だよな!?

「も、モモ。それについてはわたくし達が説明いたしますわ」

「シャティ……！」

さきほど俺に致命傷を負わせた口から今度は救いの言葉を述べて  
くれるシャティ。

純白の羽や中天から降り注ぐ太陽の光もあって、さながら後光を背  
負った天使に見えた。

しかし。

「あ、ミサオ様も一緒にお勉強しましょうね」

「え」

ぶわっと冷や汗が吹き出る。

「ミサオ。君も詳しくは知らないだろう？ 特にそうなった時の対処  
法とか、処理のやり方とか。いい機会だし、いざ来た時に慌てるより  
も今のうちに覚えておこうか。ね？ 大丈夫、怖くないから」

「買う物も追加しないとね。……となると、ゆつくり休めてそれなりに  
物がそろっている場所へ行かないと、か」

真つ青になる俺をよそに着々と計画を立てていく三人。

俺は生まれたての小鹿のような動きでなんとか立ち上がると、手を上下にさ迷わせる謎の動きをしながら口をパクパクさせる。

必要性は頭で理解できるが、心がついていかない。言葉が出てこない。

『……僕が説明しようか?』

(お前に教えられるのはそれはそれで嫌すぎるだろうが!! あとなんで教えられるほど詳しいんだよ!!)

『……………。ふん、親切を無下にするとかバチが当たるよ? ま、それなら大人しくお仲間に教えてもらうんだね』

気遣うような声から瞬時に不機嫌そうな声色になった魔王に突っぱねられるが、こいつに教えてもらうのだけはごめんである。

となると…………。

「おねがい……………します……………」

俺は蚊の鳴くような声で、仲間達に頭を下げるのだった。

### 34話 ▶ 勉強と迷宮トイレ事情く色々と瀕死です

女性三人から女性特有の生理現象について娘のように思っている少女と一緒にレクチャーを受けることになりました。殺してくれ。

いや男に戻ってチーレムモテモテ生活で寿命めいっぱいまで元気で生きるまで死ねないし死なねえけどな!!

俺はこの世界でいっぱい幸せになつて、たくさんの家族に囲まれて布団の上で安らかに眠るように死んでやるんだ!

それまでは何が何でも生きてやるわツ!!

落ち着ける場所を求めて最寄りの町へ立ち寄った俺たちは、そこでしばらく滞在することにした。

というのも、俺の様子から生理が来るのが近いんじゃないかってことで……。

まあ、例のお宝が眠る高難易度ダンジョン潜ってる最中に来て困るから、いざその時までには少しのんびりしようという事になったのだ。

魔王退治からなんだかんだバタバタしていたからゆつくり出来る時間こそ嬉しいが、理由が理由だけに複雑である。

件の生理現象も来そう……というだけで、実際はまだ始まってないわけだからな。時限爆弾抱えてる気分だぜ……。

ちなみに俺が闇堕ちだと勘違いした症状なのだが(今思うと勘違いの仕方が我ながら中二病過ぎて恥ずかしい)、魔王いわく「生理前症候群(PMS)」というものらしい。生理が始まる前に起こる体調や感情の変化を示すものなのか。

シャティ達にも同じようなことを言われたけど、だから何で魔王が当然のごとく名称まで知ってんだよ怖いわって震えたわ。男だろうがよお前も……!

『……………。ふん、自分の無知を棚に上げるの

はかつこわるいよミサオ』

やけに間を挟んだ後でそんな風に言われたが、間の長さを考えるにこいつもちよつと恥ずかしかつたんだと思う。

いやでも、女性への理解が深いってことは……あれか。それで彼女とかの不調を慮ってましたよってことか？　ち、ちくしよう。魔王の前世にモテ男の片鱗がちよいちよい垣間見えて敗北感が……！

『君、やっぱり妄想力豊かだよな。勝手に想像して勝手にダメージ受けてるの最高に滑稽。ははっ』

(うるせー！)

……にしても、女の人が生理中に機嫌が悪くなるってのはボンヤリ知ってたけど、生理前まで不調になるのか。

もしかしてそれって下手したらひと月の半分は体調不良ってことか？　う、うわあ……。

しかもこれが今は他人事じゃないんだら顔が引きつる。

アシユレなんかは薬湯や食べ物を変えることで変化を最小限に抑えているというが、聞いているだけでコンディション管理が大変そう  
だ。

そのアシユレが言うには、だ。

「君の様子を見ている感じだと……生理での症状も重そうだね。覚悟しておいた方がいいかな。でもその時は遠慮せず、安心して頼ってほしい。私が支えるよ」

「はは……。ありがとう……ははは……」

相変わらずアシユレは優しく頼もしいが、俺今どんな顔でお礼言ってるんだろう。

宿の一室でモモと一緒に基礎知識から叩き込まれている俺は、メモをとりながらも机に顔を沈ませた。

「ところでミサオ様、あの賢者……カリユキオス様の代表的な功績と

言われているものが何かご存知ですか？」

「え？ ……あゝ…と。冷蔵、冷凍魔術の魔技術化？」

授業が進むごとに目が死んでいく俺を見かねてか、シャティがそんな質問をしてきた。

賢者カリユキオスの功績。

それを聞いて真っ先に思いつくのは、冷蔵と冷凍の魔術を家電製品のごとく誰もが使える形にしたものだ。

ベテルキクスの飲食店でも恩恵に預かったが、あれのおかげでこのファンタジー世界でもアイスなんか食べられるし食料も長く保つ。

賢者の発案までそういった技術が無かったと思えば、まさに画期的と言えるだろう。すごい功績だ。

そんなぱつと思いつたものを述べると、シャティは笑顔で頷く。「ええ。もちろん、それも挙げられますわ。まさに革命でしたね。あの技術のおかげで様々な発展がありました。……それに加えて、同じ

くらい素晴らしい功績として称えられているものがあるのはご存知ですか？」

「へえ、そんなのあるのか。あの人本当に大賢者なんだな。……その功績って？」

生理の話題から逃れられると思つて身を乗り出して興味深げに耳を傾ける。

レベルアップの恩恵もあつて五年で普通以上の知識を蓄えられた自覚はあるが、それでもまだまだこの世界の事について知らないことは多い。

だから単純に聞くのが楽しくもあるんだよな。

しかし。

「トイレ問題です」

「……ん？」

聞き返した俺に、至極真面目な顔でシャティは繰り返す。

「トイレ問題です。特に迷宮内における、と付け加えましょうか。今では迷宮内に限らず各所普及しておりますが」

(あ、これ多分生理と地続きの話だ……！)

「どうやら別の話題で気分転換させてくれようとしたわけではなく、関連性のある話題だったらしい。」

「うおおおおお！ 早く終わってくれ!! 俺の心が持たねえ!!」

「生き物ですからね。どんな英雄や猛者でもどうしたって、排泄行為は必要になってきます。ですが迷宮内でのそれは羞恥と命の危機が隣り合わせの行為……。以前まではとても辛いものでした」

「あ、うん」

俺が内心大絶叫している中でもシャティによる説明は続いていたらしく、はっと我に返って返事をする。

まあ、尿意やら便意やら馬鹿に出来ないから……。戦闘中に便意が襲ってきたらマジで最悪。敵を倒す膂力より紅毛括約筋の力が試されるのだ。

「油断している無防備な状態を迷宮魔物に襲われてはたまらないし、仲間に見張ってもらっている間に事をすませるにも……。その。音とか聞かれないだろうか？ 臭いとかも。でもそこは我慢するしかなかった。加えて用を足した後の排せつ物の問題もあったね。土の地面なら掘って埋めればいいが、石畳だとそのままになる。迷宮魔物に関しては迷宮自体の自浄作用が働くけど、外部の者が残したそれは消えないからね。衛生的にはよろしくはなかったと聞くよ」

アシユレの捕捉を聞いて「な、生々しい迷宮事情……」と眉を寄せ、想像したくねえ。

昔はそんなんだっただな……。

「ですが、そこで賢者カリユキオス様がある技術を広めました。結果と分解の効果を備えた「仮設トイレ」と分解に特化した「分解紙」ですね」

「あれって賢者の発明だったんだ……」

そりや崇められるわって納得した。

迷宮内にはなんとトイレが存在する。しかしそれは特殊な迷宮を除き、元からついていたものではない。

魔力を用いた工作技術、魔技術によって作り出された「仮設トイレ」が専門の業者によって設置されているのだ。

迷宮の奥や新規で見つかった場所に設置するほど報酬が高くなるらしいが、設置にはそれなりに知識が居るらしく専門業者以外が取り扱う事はほとんどない。

その仮設トイレには俺もめちやくちやお世話になっている。

「迷宮自体の魔力を吸い取り存在を維持、使用者の魔力で補強し使用可能となる「仮設トイレ」は使用者の気配を薄くし魔物を寄せ付けないし、排せつ物を分解し消滅した迷宮魔物と同様に迷宮へ魔力として還元します。その簡易版が分解紙および探索用の下着ですね」

下着と言いつつ、シャティが指す分解紙を用いたそれはぶっちゃけオムツのが意味合い的に近い。

こちらは基本使い捨てで、排せつ物を受け止めた後に魔力に還元こそしないが無臭の砂のような物質に分解、変換して専用の付属袋にたまるのだ。

もし迷宮内、緊急時に催したとして仮設トイレも無かったら……まあ命の危機もあるので仕方のない事態となることもある。

そんな時の保険が探索用下着。そこそこ値段するけどな。冒険者になりたての頃、その重要性は嫌というほど実感した。

まだこつちの食べ物に慣れてなかった頃だから、よく腹を壊してたんだよな……。

ううっ、嫌な事思い出したぜ。

「そしてその分解紙ですが、更に効果を薄くして量産、安価となった代物があります。それが何に使われているかお分かり？」

「あー……」

うん、わかった。この流れなら、うん。

その……いわゆるナプキン、というやつか。

用途的に普通にオムツでも使われてそうだけど。

「ご理解いただけただけたようですね。そう、これから買う物の一つです！経血を受け止めてくれますので、普通に処理するより格段に冒險がしやすくなるのですよ。流通し始めた同時期から女性冒險者の台頭が目立ち始めましたからね。わたくし達にとっては必須アイテムです！」

意気揚々と解説するシャティであるが、俺としてはひたすら気まずい。

下着の次は生理用品……もちろん諦めたわけではないが、男としての自分がどんどん消失していく気がする。

もう何度目になるか分からない重く深いため息が自然と口から吐き出された。

……周りが動じていないだけに、こんな自分の反応が女々しくて余計に泣けてくるな。

俺の仲間の女性陣が頼もしすぎるので、女々しいって表現を使うのも憚られるんだけどさ。

「ミサオ」

「ん？ なに、ガーネット」

ちよんちよんつと肩を叩かれて力なく顔をあげると、金色の瞳が俺をまつすぐに見つめていた。

褐色の肌、彫りの深い整った顔。目元に大きく傷が刻まれているが、それが彼女の美しさを損なうことは無く猛々しい美を際立たせている。

そんな美女が俺にひとつ提案をする。

「少し外を歩いてきたらどうだい？」

「！ ならモモも……」

「悪いけど、モモはもう少しお勉強だ。……ね？」

生理については動じることが無くともじつとしているのが退屈だったのか、ガーネットの提案にモモが椅子から腰を浮かせる。しかしやんわりと肩を押され椅子に座らされる。

ガーネットの言葉にはアシユレ、シャティも頷き「あ、気を遣わせ



たな」と理解した。流石に気づかないほど俺も鈍くない。  
きつと気分転換にと、一人の時間をくれようとしているんだ。

！………まあ、今の俺はどうあっても一人にはなれないんだけどな  
ちくしょうめ！

「あく……と。サンキュ。そうさせてもらうわ」  
だが、せつかくの気遣いだ。

俺は彼女達の言葉に甘えて、一人宿の外へ散策に出かけるのだっ  
た。

………ストレス発散と小遣い稼ぎに魔物でも狩るかな。

その約一時間後。

「多いわ!!」

「も、申し訳ない……!」

何故だか当初の予定から数百倍の数の魔物に取り囲まれている俺  
が居た。

### 35話 ▶ 散歩く晴れ時々血の雨

現在滞在している町はベテルキクスほど栄えてはいないが、そこそこ賑やかだ。

商業施設に加えてちゃんと冒険者ギルドもある。

俺は近くの迷宮へ行くか冒険者ギルドで適当な依頼を探して野良魔物を狩るか迷い、結局何も考えず町の外へ出ることにした。

目的は気分転換だからな。

迷宮みたいな閉塞的な場所に行けば余計に気分が沈むし、依頼を受ければいくら簡単なものでも義務感が発生してしまいち目的に沿わない。

だったら適当にぶらぶら歩いて、襲ってきた魔物を倒すくらいがちょうどいいってなもんだぜ。

「あゝあ。せっかくみんなが気を遣ってくれたのに、誰かさんのせいで一人になれないんだよな。邪魔だなく。せめて黙ってくれてたらなく」

町を出て街道からはずれた人気のない林を散策しつつ、ここぞとばかりに文句を言う。

木々の間には大きく間隔が開いてて見通しがいいから、周りに誰もいないのは分かり切ってるしな。

やっぱり脳内だけで話してそれに反応返ってくるのって疲れるんだわ。人気が無い場所なら、口に出した方がまだマシだ。

俺の文句を受けて、魔王が即座に実体化する。

明るい日差しの中で半透明の体が元気に動く姿は本来違和感しかないはずだが、この光景にも少し慣れてしまった。

自分で考えておいてなんだが、慣れたくねえ……！

『君が喜ぶことをして、僕になにか得があるのかい？　お願いするなら見返りを用意してから言いたまえよ』

「お前は敗者だろうが。勝者の俺の言うことくらい聞くべきだろ寄生虫」

『へえ、言うじゃないか。でも今の僕は何もできないけど、君からの干渉も受け付けないんだよね。ま、好きにさせてもらうよ。ふふふ』  
「このクソガキ……!」

楽し気に俺の前をびよこびよこ歩いている魔王。

当然ながらそこに反省の色は無く、俺はどうにかしてこのクソガキをぎゃふんと言わせる方法は無いものかと考えていた。

そんな時だ。

「はっ」

何の前触れもなく、唐突に。

爽やかを絵に描いたような快晴広がる上空から、なにかが振ってきた。

俺はそれが何かを確認する間もないまま、咄嗟に両腕で受け止める。

避けても良かったのだが、何故かそれはまずい気がしたのだ。冒険者の勘、というやつである。

「うおっ」

どきっと結構な質量を伴い俺の腕に収まったのは……中坊くらいのガキだった。

（いや人間かよ降ってきたの!? 山も崖も高い建物もないけど、何処から!?）

更にはそのガキの後を追うように、快晴に喧嘩を売るがごとくざあつと降り注いできたのは血の雨である。

血の雨!?

「何!? なになになに!? 何事!?!」

幾多の激戦をかいくぐった俺でもさすがに声出るわ!

少し前に俺も魔物の血で雨を降らせたが、自分でやるのといきなり

そんな現象に襲われるのでは心構えが違う。

普通にビビる。

おかしい。

さつきまでここは温かい日差しが木々の葉を縫って降り注ぐ、木漏れ日の林って感じの平和を絵に描いたような場所だったはず。

もうちよつと行かないと魔物出てこないだろうなとか、呑気に歩いていたお散歩コースだったろうが。

それが今や降り注いだ血の雨で視界一面赤色に染まった地獄絵図だ。なんだこれ。

しかもよく見なくても、上から降ってきたガキもぐちやぐちやに怪我をしている。そう。ボロボロじゃなくて、ぐちやぐちやだ。ひでえ怪我。

さすがにこの血の雨が全部こいつの血ってことはないだろうが、かなりの出血を伺わせる大怪我である。

見えるところそ全てに打撲痕と切り傷があるし、裂かれるに留まらず肉ごと潰れてるような傷まである。

片腕は骨半ばまで達していそうな深い裂傷で、ぶらんと垂れ下がり欠損寸前だ。

脚は曲がっちゃいけない方向に捻じれて不格好な様を晒している。呼吸も不自然。……もしかして肺も潰れてるんじゃないか!? これ!

まさに虫の息。

その表現がぴったりの少年の前に、俺は咄嗟に回復魔術を得意とするシャティを探すが彼女は居ない。

俺は今、一人なのだ。

「と、とにかく応急処置を……!」

極力揺らさないよう、慎重に少年を地面に横たえる。

衛生的にどうかと迷ったが、両腕が塞がっていることには何もできない。

荷物は最低限しか持ってきていないため、着ていた上着を裂いて千

切れかけの腕を覆い、脚は手近にあった木の枝をへし折り添え木にしてから残りの上着で固定する。

そのうえであまり得意としていない回復魔術の行使を開始した。  
(「こんな事ならシャティに頼り切らないで、もつと回復魔術の知識も極めとくんだった!」)

俺も回復魔術は使えないわけじゃないし、効かないわけでもない。レベルアップに伴い手に入れた膨大な魔力に物を言わせて、そこらの魔術師よりはよほど強い力を使えるだろう。

だがこのレベルの怪我となると、俺の半端な回復だけでは後遺症が残りかねないのだ。

魔力をぶっぱするだけしかできない俺の魔術では、回復に伴いくつついてはいけない場所が接合したりする危険がある。

だから微量の魔力になるよう調整して、まさに応急処置としか言えない治療しか行えない。

回復の魔術はあくまで高度で便利な医療器具のようなもの。高水準で使いこなすには医者のように知識が居る。

そして俺にそこまでの知識はない。すぐに専門であるシャティに診せるべきだろう。

見れば見るほど少年の傷は深く焦りそうになるが、どうかその判断までこぎつけることが出来た。

冷静さを失ったら死ぬのはこの子だ。

しかしせっかく俺が落ち着いた判断をしたつてのに、魔王が横から声をかけてくる。

おい、こんな時にやめ……!

『クラス職業：メイデン乙女』のクラススキル職業技能を使ったら?』

「あ!? んだよ、こんな時に何を言つて……」

『こんな時だから提案してあげてるんだよ。なんといいつつて、僕は呪いナビだからね。僕の呪いが引き寄せた職業……そのスキルの中で、この場に応じた最適のものをご提案させていただいてるってわけ。感謝してくれていいんだよ?』

「……!」

ニヤニヤ笑いのシヨタガキ魔王は気に食わないが、流石に人命がかつてるとなれば俺も文句を飲み込むしかない。

迷惑ばかりの職業だが、たまには役に立ってもいいはずだ。

「で!? なんだよそれは! 教えろ!」

……少年の怪我に気をとられていたが、近づいてくる不穏な気配に気づかない俺でもない。

晴天の中、黒い波のように遠方から何か黒い津波のようなものが近づいてきているのが見える。

それらがすべて魔物であろうことは気配で窺えた。

どう考えたって、このガキがこうなった原因だ。

なんでそんなもんが現れたのかは知らないが、下手に動かせないことを放置したまま応戦すれば少なくともガキは死ぬ。

せめて転移魔術に耐えられる程度に回復できれば、シヤテイ達の所に放り込んで俺は魔物をぶっ倒すだけなんだが。

もどかしい思いで魔王を見る。役に立つスキルがあるならさっさと見え!

『ふっふっふ。その性能、聞いて驚きなよ? まずそのスキルの名は

……【乙女の口づけ】』

「もう嫌な予感しかしねえなあ畜生ツ!!」

悲鳴のような怒声のような声をあげつつ、俺はやけくそで魔王からその使い方を教わることを決めるのだった。

### 36話 ▶ 悪意の化身（少年視点）

少年はその時、死を覚悟した。  
した、というよりも”させられた”と言った方が正しいかもしれない。

それほどに死ぬ前からむせ返る様な自分の死臭を感じていた。

凄まじい衝撃と烈風。

それにより千々に引き裂かれる痛みを体に刻まれ、傷から吹き出る血は溶けた鉄のように熱かった。

しかしその熱も長くは続かない。

自分の状態も何もかもが判然としない中、感じていた灼熱だけが打ち寄せた波が海へ帰るようすーっと引いていく。

熱だけでなく……命、魂までもが引かれ持っていかれようとしているのだと理解した。

——ここまでか。

そんな思考がよぎる。

”あんなもの”、手を出してはいけなかったのだ。

死が迫る中で、どうしようもないほどの恨み言が心を埋めつくした。

厄災の魔王が倒れた事は、おびただしく群生していた黒星草こくせいそうが枯れて風化したことで今や世界中が知るところ。

……そして自分たちのパーティーは、長い間黒星草が塞いでいた土地の下に迷宮ダンジョンがあることを発見したのだ。

未踏の迷宮。それは危険を伴うと同時に幸運でもあった。

なんといったって、第一階層からすでに古代の遺産たる魔術道具や金銀財宝の類が手つかずのまま残っていたのだ。

そうなればさらに奥……下層階への期待は高くなる。

だが、途中で引き返すべきだった。

危機感知に優れた職業と技能クラス スキルを備えていた自分が真つ先に危険に気づき、先へ進もうとする仲間を引き留め戻るように提言した。

しかし「他の誰かに先を越される前に」と欲をかけた彼らは止まらず……結果。

恐ろしいものの封印を解いてしまったのがつい先ほど。

全身に怨嗟を叫ぶ人間の顔を敷き詰めた、かろうじて人型のナニカ。

”それ”は自らを悪意だと名乗った。

意志持つ生物の悪感情を煮詰めて、具現化する太古の呪術が生み出した魔術生命体。

その危険性から作り出した者達自らが迷宮ごと封印の箱として機能させ、今日日までその封印は保たれていたのだという。

悪意はそれを自ら滔々と語った。

おそらくだが……その封印の魔力を黒星草が吸いつくしてしまったのだ。

あれは世界の土壌全てから魔力を吸い、厄災の魔王の糧とする魔草なのだから。

そして自分たちが奥へ進み迷宮の扉を開けていくことで、完全に封印がかき消されてしまったわけである。

幸運どころか最悪だ。

悪意は歓喜していた。

ようやく自分が生まれた意味を実行できると。

悪意の影からはその分身なのか、無数の魔物に似た半流動体のドロドロとしたモノが湧き出てきた。

それは途端に迷宮内を埋め尽くし……圧死する前に迷宮が空間ごと破壊され、気づけば外。

悪意は封印の箱から完全に自由の身となった。

更にその悪意が悪意たらんとすべく、まず意思を向けたのは当然、目の前に居た自分達である。悪意の最初の標的だ。



(僕はやめようと、言ったのに)

しかし恨み言を向ける相手はすでに悪意の化身にすり潰されて、血と内臓、汚物と肉片の入り交じった液体へと成り果てている。

自分は咄嗟に結界を張ることに成功したが、それでもこのざまだ。魔術のような何かで異様な距離を吹き飛ばされ、致命傷を与えられた。……おそらくもう長くはないだろう。

元仲間が無惨に命を刈り取られる様子が肉眼で見た最後の光景とは、なんとも忌々しい。

(ああでも、僕もすぐその仲間入りか)

目は潰れて見えず呼吸もままならない。

体の感覚は痛みを超えて全て消え失せている。

あとはやせ細っていく命の消費を残った意識で感じるだけがせいぜいだ。

いつそ何も考えられないままに命を落とした方がましだったかもしれない。

もつとやりたい事があった。

素敵な出会いも夢見てた。

しかし叶わぬまま、この人生は閉じるのだ。

そう思っていた。

(っ!?! 痛みが……!?!)

ビクツと、もう二度と動かないかと思っていた体が跳ねる。

何も感じなかった体に突如として痛みが戻ってきたのだ。

腕、脚、胸。ドクドクと血が巡りはじめ、再び全身が激痛に苛まれる。

だがその痛みは先程まで感じていたそれとは質が違う。これは死に落ちていく痛みではない。生きようと命が脈打つ痛みだ。

(温かい……)

なにか柔らかくて温かいものが唇を塞いでいる。ほのかな甘みも感じ、いい香りが鼻をくすぐった。

命が再び脈打ち始めたにも関わらず、ここが清き者が死後訪れることが出来る楽園なのだろうかと錯覚する。

だが自分はまだ生きている……生きようとしている！

体の内側から次第に生命力のようなものが湧き上がってくるのを感じ、それが強力な回復魔術を受けている時のものに酷似している事に気付いた。

つまり誰かが自分を助けようとしてくれているのだ。

眼球ごと切り裂かれたため、もう失明しただろうと思っていたが……。

(きつと、今開けば……見える)

確信と共に重い瞼を持ち上げていく。

最初に目に映ったのは、ふわふわとしたオレンジ色の前髪。

次いでその下の眼鏡越しに見える閉じられた瞼。……更には顔の真ん中に渓谷のように刻まれた、深い眉間の皺。

頬に添えられている手の柔らかさに女性である事が分かった。

そして自分が今、その女性に口付けられていることも。

「……………」

狼狽。

声にならない絶叫が体の中を駆け巡った。

(だ、誰誰誰?! だれ!?)

生まれて初めての口づけに、思考のすべてが吹き飛んだ。

あれほど重かった瞼が限界まで開かれ、ぶわつと全身が熱を持つ。

そして狼狽えるあまり口がぱくぱく動き……相手の薄く柔らかかな唇を食ってしまった。

次の瞬間。襲ってきたのは額への衝撃だった。

「おうぎやばあああああアツ!? てっめえ!! 何しやがる!!」  
「~~~~~!?!」

どうやら頭突きをされたらしい。

先ほどまでの死を間近に感じるような痛みではないが、これはこれで痛い額を押さえてうずくまった。

だがそこに情け容赦ない怒声が盛大な音を伴ってぶちまけられる。

「いいか!! 今のは人工呼吸みてえなもんだから勘違いすんじやねえぞガキが!! 目エ覚めたんだったらどっか隅っこで蹲つてろ邪魔だボケ!!」

「え、えええ……?」

状況が何も分からず困惑しながら、命を助けてくれた上に初めての口づけ相手でもある女性を見る。

……そして少年は女性の怒声に負けない大声で、悲鳴をあげた。

「う、うわああああああああああああああああああああああああああああああ!! 口裂け女アアアアアアア!!」

「誰がだよ!! これはお前の血だよ!! さっきまでお前の傷口全部に処置してたんだよ馬鹿!! つーか口裂け女とか懐かしいなおい!

こつちにも都市伝説あんの!?!」

女の顔は鼻から下の顔半分、口が裂けたように赤い血で濡れていた。

すぐさま誤解は解かれたが、ふわふわしていた楽園気分は完全に吹き飛んでいる。

「ええい、それより説明は後だ!! 動けるようになったんだな!? ならマジでどっか引っ込んでろ! 俺はこれからあれ全部ぶった切らねえとなんねーんだよ!」

言うなり胸倉を掴んできた女性に近くの草むらに放り投げられ……そこでやつと、自分がまだ死地を脱していないことを知った。

晴天の下、黒い津波のように押し寄せてくる魔物の群れが間近に迫っている。

その中心には例の悪意の化身……奴があれらを率いているのだ。というよりも、魔物は全てやつが生み出したものだろう。

群れであり、巨大な個。それが魔物の群れの正体だ。

そして脅威を前に、このままでは飲み込まれ蹂躪されることが容易に想像できた。

「だあつ！ クソツ！ 多いわ!!」

「も、申し訳ない……!」

申し訳ないどころの話ではないが、ブチ切れながら剣を構えた女性の背にその声をかける他なかった。

だがすぐにはつとなり、慌てて女性に駆け寄り手首を掴む。

「戦うつもりですか!? 馬鹿な！ 逃げましょう！ 助けてくれたことには感謝します！ ですがこのままでは二人とも……! あだつ!」

必死に言い募っていると今度は頭を拳骨で殴られた。

言葉使いといい、ずいぶんと荒々しい女性である。

「だから邪魔だつっつてんだろ！ いいから引つ込んで。ここは俺がどうにかする」

「どうにかって……!」

信じられないものを見る目で女性を見るが……そこにあつたのは、荒々しくも自信に満ちた笑みだった。

「安心しろ小僧。この俺が、ちゃつちやと終わらせてやつからよ」

### 37話 ▶ 暴虐の炎くおニューチートと八つ当たり フアイト

「……というわけですね」

「何かわからない所はあったかい？」

「ん。だいじょうぶ」

ミサオが出て行った後ものんびりモモへの授業を続けていたシャテイ、アシユレ、ガーネツタ。

モモはミサオのように慌てふためくことなく、淡々と「へえ、そういうものなんだ」とばかりに体の仕組みを受け入れているようだった。

そんな中。

先ほどまで長閑だった町に、突如大音量の警鐘が鳴り響いた。

「！これは……」

何事かと外に目を向ければ、シャテイ達と同じくなんだなんだと困惑する人々が空を見上げている。

警鐘を鳴らしているのは一人の有翼人。

見た所ガルーダ一族のようで、その有様を見てただ事ではないようだ。と察したシャテイは窓からすぐさま飛び出て舞い上がった。

「何があったのですか!?!」

ガルーダ一族の青年は魔術道具で警戒の音を町中に鳴り響かせているが、その体は飛ぶのもままならないほどにボロボロだ。

今にも落ちそうな彼を抱き留めると、シャテイは白金の冒険者証を見せながら問う。

「対処します。説明を」

「！あ、あんた、白金級の人か……！ 運がいいが……、ア、レは……、ダメだ。すぐに、町のみん、なに避難を、呼びかけて……くれ……!」

「……。アレ、とは」

手っ取り早く信頼と安心を与え情報を引き出すため冒険者証を提

示したが、白金の冒険者証を見てなお「駄目」と判断するほどのものとはなんであるのか。

嫌な予感を覚えながらも……シャティは問いに答えが返ってくる前に理解する。

遠方に一列となつた黒い何かが見える。

蠢くそれは段々とこちらに近づいており……人族よりよほど優れた視力を持つ有翼人であるシャティは、それが何であるかを察した。魔物の群れ。しかし青年の必死な様子を見るに、ただの大群ではないのだろう。

「発生は、つい先、ほど。だが……もう、町と村、が、一つずつ、呑まれた。速度も、すさまじい。俺がぎ、りぎり逃げられた」

「ガルーダ一族で、ぎりぎりですか」

有翼人の中でも最速を誇るガルーダ一族が、命からがらに逃げてる相手。

それを聞き”あれ”がすさまじい速度で蹂躪を進めている”脅威”なのだろうと納得はしたが……対処を脳内で組み立てる前に、優れた視力は黒い群れの直線状にもうひとつの影を見つける。

シャティは怪我だらけの青年に回復魔術を施しながら、ふわりと笑った。

「あの方向ならば大丈夫ですわ。ミサオ様が居ます」

++

++

++

(……………なあ、魔王。今の俺の絵面って何?)

『死体にむしゃぶりついて生き血をすするハイエナか山姥』

(だよな。って一瞬頷いちまったけど誰が山姥だ！俺まだ若いだろ！あとこいつもまだ死体じゃねーよ!!)

『ハイエナはいいんだ。……絵面の話だよ、絵面の』

現在俺が何をしているのかといえば、地面に横たえた少年のぐちゃぐちゃになった傷口に急いでキスをしている。

なんだよマジでこの状況。

っーかキスとか考えちまったけどキスじゃねーし!! 人工呼吸みたいなもんだ、こんなもん!

(う、うえ……………！ 血の味がえぐい)

なりふり構ってないから、きつと口の周りも血でべつとりだ。あくあ。

スキル【乙女の口づけ】

呪いナビを自称する魔王が提示した、現在の俺が身に着けている技能のひとつである。

こいつがどういった能力かと言えば、まあこれも性能だけならびつくりするくらいのチートだった。

超絶回復チート。

現在俺の体液は(表現が生々しくて嫌だな…………)それそのものがまづ回復の力を持っているらしい。

それを口という最も精気の出入りがし易い場所と唾液を介して力を注ぐことで、ある程度無条件で対象に癒しを与えるようだ。

しかもこの力、【職業・女神】まで上り詰めることが出来れば、不治の病も癒し瀕死の怪我でさえも一瞬で回復可能となるらしい。

上り詰める気なんざ、さらさらないけどな!!

ある程度つてのは、レベルの差みたいなもの関わってくるよう

だ。

このガキと俺くらい力量差があれば正に死の淵にあつたはずの命も助かるが、もつと強い相手であれば効果は薄くなるとか。

……でも現状でも反則急に強い力だよな。

だって今の俺との力量差、そう近い奴いないだろ。つまり大体の怪我は治せるって事だ。

けど方法がな……！

人工呼吸みたいなものと言っても、施術部位に口付けなければいけないってのがどうにも受付ねえ！

相手が女の子ならいいけど、初使用が男。そんな場合でもないし目の前で死なれるのも寝ざめが悪いから仕方がないけど。

『ほらほら、仕上げに口にちゅーして』

「はあ!? もういいだろ! 怪我はもうほとんど治ったぞ!!」

『部品を直してもガソリンが無いと車は走らないだろう? そして車と違ってその子はガソリンが無いと死んじゃう。生命力が尽きかけてるんだよねえ』

「~~~~~!」

そう言われてしまえば納得するしかない。

魔王の事だから俺をからかい倒すために言っている可能性もあるが、それを俺が確かめる術はないのだ。

(だあああああつ! もう!! ここまでやったんなら、もうヤケだ!)  
ファーストキスはもうガーネットに捧げてるわけだから、まだ軽傷!

そう思うしかねえわ!! いやこれはキスではないんだが!!

(回復チート、すごいはずなのにまったく嬉しくねえ……!)

俺、本当にどういう方向に向かっているんだよ!



でもってスキルの力は……まあ凄まじかった。

口付けた場所はまるで時間が戻るように怪我の無い状態まで回復し、不本意ながら人工呼吸（あくまで人工呼吸!!）すると少年の顔はあつという間に血色が良くなり、生気を取り戻した。

叫んだり、俺が怪我人への躊躇なく頭突きや拳骨を振るえる程度には。

この様子なら転移魔術でシャテイ達の所へ放り込んでも大丈夫だろうが……。

それをするには、魔物の群れが近くまで迫りすぎている。

大群が移動する重々しい地鳴りがすぐ間近だ。

ガキは逃げようと言ったが、冗談じゃねえ。

この俺が尻尾を撒いて逃げる？　ありえねえ。俺は魔王を倒した男だぞ！

………といういきりは建前で。

「ククククク。いくい八つ当たり相手が出来たぜえ………！」

あまりの多さに一瞬ブチギレたが、それは単純にこぼさず対処するのが面倒くさいというだけのもの。

戦う事にまったく異論はないというか、むしろ歓迎だ。

俺はこの現状への溜まりまくった不満をぶつける、八つ当たり相手を探してたんだからなあッ!!

俺は背に携えていた剣を引き抜くと、まっすぐに魔物の群れへと飛び込んだ。

すると以外にもなんか喋る知能のあるやつがいて話しかけてきやがった。

「……ワレは悪意のケシン。人が想像しうるカギリの悪意を実行するために生まれてきた。ワレはそれを遂行す……ごっ!?」

「おらあッ!! 俺のストレス発散にせいぜい付き合ってもらうぜ木偶の棒がよ!! わーははははははははははははははははははははははははッ!!」  
手始めにその話しかけてきたおぞましいやつに剣をねじ込んだ。

なんかこう……見た目的に一番邪悪つつーか、生理的に無理な見た目で視界の暴力だったんだよな。

苦悶に歪んだ人間の顔が体中に敷き詰められていて、全体のシルエツトだけが人の形を保っている。

魔王とは別ベクトルに嫌な感じだ。

『はあく? 僕の魔王体をこんな不細工な人形と一緒にしないでくれる?』

(似たようなもんだろ)

『僕の方がかっこいいだろう!! あの美しい装甲を思い出してもらいたいね!』

(お前、案外自分の外見気に入ってたんじゃん……)

思いのほか気に障ったのか、きゃんきゃん噛みついてくる魔王。

それを無視して剣を突き立てた場所に最大火力の魔力を注ぎ込んでいく。

最近は道中の野良魔物を倒すのがせいぜいで、ここまで思い切り力を振るうのは久しぶりだ。

「爆ぜろ、爆ぜろ、爆ぜろ。渦巻く暴風よ火を纏え。咆哮をあげろ。灼海より押し寄せる煉獄の津波よ災禍を振るえ。爆ぜろ、爆ぜろ、爆ぜろ」

久しぶりに詠唱も挟みながらたつぷりと魔力を注いでいく。

何と言っても数が多いから、最初の一撃である程度吹き飛ばしたいのだ。

魔術の類は俺なら詠唱が無くても使えるためスピード感を重視する戦いでは端折り気味だが、ブースト効果が欲しい時はこうして使

う。

「き……さまアアあ!!」

おぞましい何か黒板を爪でひつかくような金切り声をあげて、四肢から目玉が連なったような触手を無数に伸ばして俺を囲う。

体中に絡みついたそれはどうも俺を絞め殺そうとしているらしいが……正直、マツサージ程度の圧迫感だ。

今は戦闘モードで体中の筋肉に防御力を張り巡らせているからな。多分あのガキあたりがこれくらったら一瞬でミンチだけど、さすが俺。魔王を倒した男! 強靱! 無敵!

でもこの攻撃、見た目がめちやくちや嫌だな……!!  
眼玉の触手で……!! きつもちわりい!!

こんなもん、さつさと焼却処分しちまうに限るぜ。

「おっと」

目の前の化け物に集中していると、その横をすり抜けていくドロドロとした影のような魔物が少年の方へ向かう。

丸腰のガキはこちらを見ながら硬直していて、逃げ出せる感じはない。

「しかたねえな。もうちよい溜めたかったが」

嘆息すると、目を細めて眼前の化け物を睨み据える。

熱くなる腹の底。

丹田から生まれた熱が血液のように体内を巡り、胸、肩、腕へと伝播していく。

その熱は鈍色に光る剣にたどり着き、刀身を夕日色へと染め上げた。

技の完成間近を示すように俺と剣の周囲からはかまいたちのような風の斬撃が発生し、体に纏わりついていた気味悪い触手を切り裂いていく。

金切り声の悲鳴が耳障りだ。

魔王の野郎はそんな無様な悲鳴、あげなかつたぜ。

風の刃は周囲まで広がり、横をすり抜けようとしていた魔物の胴体を裂いた。

そして、仕上げとばかりに詠唱を止め結びとし……技名を解き放つ。

「おらアツ！ 爆ぜ死ね！

アサルトプロミネンス  
【暴虐紅蓮風斬】！！」

瞬間。

化け物の体内から太陽が生まれたかのような光が迸る。

俺はその光源……突き刺していた剣を一気に横に振り抜いた。

すると俺が振り抜いた剣の軌跡が辿る空間全てが炎の波に飲み込まれ、一拍遅れて焼かれた魔物を風の斬撃が切り裂き粉みじんに焼き崩していく。

周囲の自然やら街道の石畳も同時に吹き飛ぶが、まあこれの対処するんだから許容範囲だろ。

この火力、閉塞的な迷宮内や周囲に人が居る場合は絶対に出力できない。

だが視界が開けていて、かつ埋め尽くすように魔物が押し寄せている状況にはハマり過ぎた。

綺麗に焼き刻まれ爆散していく魔物どもがいつそ見ていて清々しい。

「おーおー、綺麗に吹き飛んでくなあ！ わーっはははははははは！！」  
当然、最初に攻撃をうけた例の気持ち悪い化け物は真っ先に消滅している。

……結局、あれなんだったんだ？

それにしても、”これ”を極限まで凝縮した一撃でやっと切り裂けた魔王の装甲、今思うとヤバいな。

『そうだろう、そうだろう』

今は声だけなものの、得意げな顔をしていることが容易に想像できる魔王野郎。

けどお前は結局倒されたんだから誇らしげにすることでは無くないか？

……まあいいけどさ。今の俺は気分がいいから許してやろう。

「うわあああああああああ!?」

「あ、やっべ」

周囲に人はいない。けど後ろ側に一人いた。

直接被害こそ受けていないが、爆風と熱波で後ろに居たガキが吹き飛ばされた。その後ろにはそこそこ大きな岩。

「ちっ」

舌打ちし、地面を強く踏み込み真横へ跳躍するようなイメージで一気にガキのもとまで飛び、その体を片手で抱き込む。

「うぷいっ」

「おい小僧、このまま一回離脱すつぞ」

まだ全部倒したわけじゃないが、これだけ派手にやったんだ。

あとはシャティヤ、町に滞在する他の冒険者。自警団などが気づいて来るだろう。

今の一撃ですつきりしたし、八つ当たりは完了!

結構魔力も消耗したし、あとは他と連携をとって残党狩りしていけばいいもんな。

そう結論付けると、俺は元怪我人のガキを抱えたまま短距離転移魔術で町へと戻るのだった。

### 38話 ▶ 弟子入りく結局魔王が全部悪い

「僕を弟子にしてください!!」

俺は現在、人生で初めて土下座付きのお願いをされている。

された感想はなんというか、気分の良いものではなく……ひたすら困るというものだった。

うん。

断りにくいといった気まずさを相手に与える分、土下座つて実は弱さと下手を装った暴力なんじゃないか？

助けたガキを連れて一度町に戻った俺だったが、危惧していた魔物の残党狩りは発生しなかった。

何故なら俺の攻撃範囲外に居てまだ無傷だったはずの魔物が、全て消えてしまったからだ。

事の次第を当事者である少年に聞きシヤテイが推測したところ、中心にいた「悪意の化身」とやらが魔物の発生元。

そいつが死んだから、連動して生み出された魔物も消えたのだろうとのこと。

今回の相手、俺が思ってた以上にヤバい奴だったっぽい。

発生元はここから結構離れた場所に存在した未発見の迷宮だったらしいが、そこからこの町の間にあった町一つと村一つがまるっと？み込まれて消えたとか。

おそらくあのままならば、この町も同様に地図から消えることになっていただろう。

そのため町長やこの町の冒険者ギルドの支部長からずいぶんな感謝を受け、色こそ白金だが実績がゼロだった俺の新しい冒険者証には七の文字が刻まれた。実績経験値、盛り盛りである。

ちなみに冒険者証へ刻まれた宝石文字は金剛石……ダイヤだ。嬉しいけど白金にダイヤだと色的に見にくい。

にしても、実績ゼロから十段階中の七へランクアップて……。こつこつ活動を重ねてた前の冒険者証の一つ下のランクまで一気に跳ね上がったのなんなんだよ。

どんだけヤバイ奴だったんだその発生源の魔物。怖っ。

でもそれを結構雑に処理出来てしまった自分に「やっぱり俺、強いよな!？」と自尊心は少し回復した。

女にされてから色々見失いがちだったから……! あれだ。パワーこそ力だぜ、やっぱり。

ちなみに俺が魔物を倒した立役者であることは、証人として例の少年が経緯と共に熱心に証明してくれた。

俺の攻撃がどれほど凄かったか。語彙力を駆使して体全体を使いこれでもかというくらい臨場感たっぷりに説明する様子は、なんかこう……特撮ヒーローを見てはしやぐ子供みたいだった。

でもって、こいつにとつてのヒーローは俺ってわけだなあ!

あまりにまつすぐ褒めてくれるもんだから、俺の自尊心と承認欲求はぎゅんぎゅんと満たされた。

少年にずいぶん乱暴に接してしまつて悪かつたなと思うくらいには。

でもまあ、怪我を治したという意味でも、その後で魔物から助けたという意味でも正真正銘命の恩人だしなく、俺! 超ヒーローだよな。

つーか魔王倒してんだし、勇者? そりゃあ憧れちゃうのもしようがないよなく! うんうん。

そんな風に人工呼吸うんぬんを忘れて、感謝を述べる少年に気持ちよく「いいってことよ」と気さくに返した俺ってマジかっこいいない男だなー! って思つてたんだよ。

ここまでは良かった。

その後での、土下座と弟子入り志願である。

「え……やだよ。断る」

「そこをなんとか！」

「でえいつ！ 継るな継るな！」

速攻で拒否った俺の腰にひつつき懇願するように見上げてくるガキ……ルキと名乗ったそいつは、俺が後ろに飛びのくと再度地面に頭を擦りつけた。

「僕の命は貴女に助けていただきました！ つまり僕の命は貴女のもので、お役に立てるくらい強くなつて一生尽くすことを誓いますので、どうか連れて行ってください!! 師匠!!」

「いや重いわ！ あと誰が師匠だ弟子なんざいらねえんだよ!! 俺、今それどころじゃねえから！ マジ!! これマジ!!」

感謝の念も行き過ぎるのは考え物だなど思いつつ、緑色の頭髮が生える頭をぐいつと上げさせた。

ちなみに現在居るのは冒険者ギルドの待合室で、俺は他の事後処理や現地の迷宮調査を申し出てくれた仲間達の帰りを待っている。

大仕事をしたんだから休んでいろという仲間達の言葉に素直に甘えた形だ。

アシユレやガーネットあたりが居てくれたら、上手い事言ってくれたんだらうけどなあ……。

「お前を助けたのは、目の前で死なれても寝覚めが悪いから。あと成り行きだ、成り行き。あんま懐くなよ鬱陶しい」

「貴女にしてみれば大したことでは無かったのかもしれない！ でも僕にとつては一生かけてすら返せない大恩です！ だつて……命を助けてくれただけでなく、あれを倒すことで貴女はこの先起こるはずだった惨劇すらも防いでくれた」

そこまで力強い声で語っていたルキは、尻つぼみに小さくなる声と共にしよぼんと項垂れた。

『ふふつ、繊細だねえ。きつと自分たちが余計なことをしなければ、消



えた町や村の人間は死ななかつたのにと気にしてるんだろう。どうせいつか誰かが開いていた迷宮なのだし、気にするだけ損というものなのに』

(これまでその比じゃない数の人間を蹂躪してきた奴は黙りやがれください。はったおすぞ)

『出来るものなら、どうぞぞ?』

(この野郎……)

マジでこいつひっぱたく方法ねえかな。

というかそもそも、今回の事だって大本を辿れば魔王が元凶だ。

俺は黒星草は厄災の魔王の存在を知らしめず、しつこい雑草くらいにしか思っていなかつたんだが。……ルキに話を聞けば、あれを介して魔王は世界中から力を吸い取り糧としていたらしい。

環境に変化が現れるのもそのせいだとか。

でもって、今回はその厄介な雑草が迷宮を封印する魔力を吸い取つたのがいけなかつたわけで。

つまりルキと亡くなった仲間は運が悪かつただけだ。

しかもルキは途中で危険に気づいて引き返そうと言つたらしいからな。

……欲をかいいた仲間に関しても、俺も同じ状況なら進んでいただろうから悪しざまには言えないし。

死んだ人間の尊厳を蹴飛ばす必要も無いだろう。

つまり魔王が全部悪い。この一言に尽きる。

俺は深く溜息をつくとき、こういうの柄じゃねえんだけどなと思いつルキの頭をくしゃつと掴み、そのまま撫でまわした。

嫌だつたら振り払うだろ。

「わわわっ!?!」

「……………まあ、なんだ。弟子入りだとかは勘弁だが、お前は運悪かつただけだしな。事情を聞いたギルド長も納得はしてるだろうけど、一応俺からお前が責められないように口添えしとく」

「え……………」

ぽかんと俺を見上げてきたルキに、居心地の悪さを感じて目をそらす。

橋場美色はしばみの瞳はあどけなく、実際の年齢より幼く見えた。

やめろ、そんな純粋な目で俺を見るな。弟子入り拒否することに罪悪感わいちゃうだろ。

俺は弟子とつてる暇とかないんだよ。しかも男の!

さつきと男に戻るためのアイテムを探しに迷宮を巡らねばならぬのだ。面倒ごととはごめんだけ。

「……………それと、仲間いなくなっちゃったもんな。何処かのパーティーに入れてもらえるようにも、言っとくか? お前職業は何? どんなポジションだった?」

俺の問いに「やはり弟子入りは認めてもらえないのか」としよんぼりしたルキが、おずおずといった様子で自分の職業クラスを口にした。

「僕は【職業・探求者クラス・シーカー】です。魔術師と剣士の適正もありますが、お恥ずかしいながら、そちらはあまり。危機感知の他、迷宮内では宝や迷宮魔物の位置を把握したりするのが役割でした。ある程度目的のものが定まっていればピンポイントで探すことも可能です」

「お前採用」

「はえ?」

この日、俺は人生で初めて土下座された上に初めて弟子をとることになった。

### 39話 ▶ 探求者くやつと運が向いてきたかもしれない翌日正座してる俺



今日俺は弟子をとるなんてことをしてみたわけだが、結果的に超ラッキーな拾い者をしたっぼい。

ルキ、思った以上に優秀だったわ。

つつい探求者シーカーの職業保持者クラスと聞いてルキに弟子入りを許可してしまつた俺だったが、実力を確認してからにすればよかつたと思ひ至つた。

そのため数日して落ち着いてから、最寄りの迷宮で試験をすることにしたのである。魔王には「許可した後にはそれは鬼畜じゃない？ 実力無かつたら弟子入りは取りやめさせるってことだろう？」つてめちゃくちゃつつかれたけどな。

マジで正論パンチで攻めてくるので何も言い返せなかつたのが悔しい。

ともかくだ。

そこで発揮されたルキの実力は確かなもので、試験として指定したアイテムを見事に探し出した。

先輩冒険者であるアシュレ、有翼人の巫女として多くの知識を蓄えるシャティ、元魔王軍のガーネツタ。そんな俺より遥かにこの世界での経験が多い三人すらも納得させるに足る能力だったのである。

唯一モモは「探し物なら自分が得意」と張り合う様子を見せたが、モモの感知能力と専門職のルキではその質が違う。

モモは生命力や魔力を持つ生き物の感知なら得意だが、無機物……アイテムに関してはルキの方が専門なのだ。

これから男に戻るためのアイテムを探すにあたって、探求者シーカーはもと

もと探すつもりではいた。

けど頭に「優秀」とつく探求者<sup>シーカー</sup>つてのは希少で、だいたいすでに何処かのパーティに所属している。

加えて自分の事情を話さないまま仲間に誘うのもな……と、パーティーに誘った探索者には俺の事情を話す気でいたので少々悩みの種だった。

そこに自分から転がり込んできてきてくれたのが、ルキというわけである。

ルキを襲った悲劇を思えばラッキーだなんだと言うのは憚られるが、本人も俺にくつついてくる事を望んでいたわけだし。

結果的にはお互いにとつて利のある関係性を結べたって事だ。

俺を命の恩人と言つて慕つてるから、事情を話しても俺が魔王を倒したはいいが女にされたまぬけ野郎だと言つて回ることもないだろう。ないよな？ きつと大丈夫だ。

弟子つつつてもなに教えればいいかわかんねえから、それはこれから考えないとだけだ。

基本俺の強さつてチートありきだから、教えられることが少ないんだよな。

まあなんとかなるだろう。

### 【職業：探求者<sup>クラスシーカー</sup>】

これは索敵やアイテム探し、マッピングに優れたスキルを得ることが出来る職業だ。

迷宮探索では必須の様に思えるが、これが意外と職業適性を得られる場合が少ない。

もし迷宮にもぐるだけで適性を会得できるなら、冒険者は全員この職業を持っている。結構なレア職業なのだ。

俺のあらゆる経験値を取得できるチートも、いくらそれっぽい技術が磨けても職業に関してはず適性を得なければレベルアップも何もない。

一応他の人間に比べて職業を得やすくはあるようだが、今のところ探求者を会得できる兆しはないのである。

しかもルキは十三歳という若さで第五階級<sup>ステージ</sup>まで達している。

仲間の優秀さや自分自身のレベルアップチケットで忘れがちになるが、十段階級中、五段階から上を維持するのは結構難しい。

それを剣士と魔術師の職業も習得しつつ、着実に専門分野の職業階級を上げているのだからかなり優秀。

でもってそれが実際に使えるものであるかも、迷宮での簡易テストで実証済み。

改めていい仲間が出来たと思う。

やっと運が向いてきた気がする。

これなら人工呼吸のひとつやふたつ、お安いもんだぜ。

さて、記録はここまでにしておこう。

明日からは賢者が示してくれた中から第一の迷宮を目指すことになる。

俺の体の変化については実際にいつ例のやつがくるか分からないしな。

そこそこゆっくりとしたし、運の良さが乗ってる内に先へ進みたいと主張したのだ。

男に戻れば例のやつへの危惧も無くなるし。

魔王の奴が「例のやつ」で誤魔化して書いてるの可愛いねとか言ってくるの腹立つ。

うるさい。字面で書くとなんか生々しくて嫌なんだよ。

次に目指す先は天空都市マシユラバ。シャティの故郷だ。

シャティの一族に魔王討伐を報告がたら、その近くにある迷宮を攻略する。

どうか一発目で目的のブツが見つかりますように。

【俺のチートハーレム記 ○ページ目より】



求めていた資質を持つ仲間を得て、いよいよ第一の迷宮に向けて出発だ！ と手記を書き終え意気揚々としていた俺だったのだが。

翌日。

俺は現在、アシュレの前で正座させられている。

いや、圧に負けて自分から正座したんだけどさ……！

幸先がいいと思った矢先にこれである。

もう俺、浮かれて自分でフラグ立てるのをいい加減やめたい。

「ミサオ」

「はい」

アシュレの瞳は冷やややかで、冒険者になりたての頃……アシュレと始めてパーティを組んだ時を思い出す。

最近優しくしてくれるようになったから忘れていたけど、アシュレの美貌はこういった表情をすると鋭利な氷の刃のようだ。でもって、その顔で凄まじるとめちやくちや怖い。

顔がいいってのはそれだけで武器なんだよ！ あらゆる意味で!!

「君は弟子をとるといふことが、どういうことか分かってる?」

「い、一応」

「本当に? では彼をどう育て導くつもりか、私にそのプランを聞かせてくれ」

「え、ええと……」

言葉に詰まる。

俺がルキの弟子入りを認めたのは、そのスキルが欲しかったから。いわば俺の都合で、俺側からルキに何か教えてやれるイメージは今のところない。

そのうち考えればいつかーくらいの気持ちで居たのだが、アシユレはそれを早々に見抜いたようだ。

更にはその考えが彼女の気に障ったらしい。

アシユレはため息をつきながら正座する俺の前にしゃがむと、俺の背後にあつた壁にドンつと手を突く。

か、壁ドン二度目……! !

しかも今回は前回ののように甘酸っぱい展開につながる想像が一切できない、ガチ怒りの壁ドンだー! !

「いいかい、ミサオ」

「はい」

「私は君の努力も勇気も認めている。だがその強さの根本となるのは、異世界渡りがもたらした特殊な力だ。つまり基準となる物が違っている。だというのに、なにをどう。教えるつもり?」

一字一句区切る様に問われて目が泳ぐ。

「その、えつと、だな。こう、がーつとやって、バーツと見せて、いい感じに……」

スパーンツ

「いったあ! !」

「馬鹿者! !」

おもいつきり頭を引つ叩かれた。

実のところそんなに痛くないのだが、アシユレに叩かれたという事実がショックで心が痛い。

「話にならない」

「すみません! !」

俺はただただ小さくなることしか出来なかったが、俯いて肩をすくめる俺のおとがいに手を添えたアシュレに顔を上向かされる。

そんな場合ではないんだが、その動作にはドキツとした。……顔も息がかかるくらいに近い。

「いいかい、ミサオ。……弟子をとるという事は、人生を預かるということだ」

先ほどまでの怒りはなりを潜めて、そこには諭すような落ち着いた色。

……アシュレは怒るときは怒るけど、こうして理性的に接してくれるから俺も話を聞く心持ちになれる。

俺の初期イキリはこうして調きよ……修正されたのだ。

「確かに君は彼を助け、人生そのものを救った。しかしだからといって、あずかったものの重さを軽視して良いというわけではない。わかるね?」

「う、うん」

アシュレはひとつ頷くと、何処か遠くを見るように窓の外へ視線を向けた。

「私にもかつて人生を預けた師が居た。さぞ大変だったろうと、今でも思うよ。世間知らずの小娘を騎士にまで育ててくれたのだから」

「アシュレが世間知らず……?」

「ああ。酷いものだった。それこそミサオの初めの頃と変わらない。……いや、もったか」

「へえ〜」

俺にとつてアシュレは頼れる先輩冒険者で、どうもそんな様子を想像できないし結び付かない。

けど、そうだよな。

誰にも始まりはあるし、今の姿になるまでの過程があるんだ。

そういう俺、アシュレの過去ってほとんど知らねえや。

「……ともかくだ。君が私に求めているものがなにかくらい、わかってくれた?」



「……。責任？」

「その通り。引き受けたからには彼の今後のためとなるよう、しっかりと育てなさい。分からないことがあれば教えるし、共に悩みもする。だから適当な気持ちだけは、あつてくれるな」

真摯な視線に居抜かれて、ドクンと鼓動がひとつ跳ねた。

そして、それが見逃されるはずもなく。

【メスメリンっ♪】

(ぐううっ!!)

すでに聞きなれた音に崩れ落ちそうになる。

……だけどしかたがない。

優しいだけでなくて、こうして諫めてくれるアシュレはやっぱりかっこいいんだから!!

(それにしても)

俺はしみじみといった気持ちで、心の底からの本心をポロリと口にする。

「アシュレがお嫁さんになってくれたらさ。俺一生、どんなことがあっても人の道は踏み外さないでいられそうだ」

「!」

「え」

言った途端、アシュレの鋭利な美貌が氷解した。

さつと朱に染まったその顔は、どこかあどけなさを感じるほどに可愛らしい。

「……君は、そういうことを……よくこの場面で……!」

見開かれたアメジストの瞳はキョロキョロと彷徨わされて、口ははくはくと動いている。

手先は青い髪をもてあそび……最終的に口元を隠すに至った。

そしてじろりと恨めし気に見られるが……顔は赤いままだし、瞳はわずかに潤んでいて最早そこに怖さは微塵も感じられない。

「……はあ。突然言われると、驚く」

先ほどまで芯が通りはつきり口にされていた声も、ずいぶん小さくなっていた。

「そ、そうか？ 俺は突然って言うより、ずっと思ってたけど」

「またそういうことを。……君は気が多いからね。私の告白など、もう忘れたものかと思っていたよ」

「忘れるわけないだろ?! あんなに嬉しかったのに!」

思わず身を乗り出すと、そのまま腰を抱き寄せられてアシユレの上に倒れ込む様な形になった。

ち、力づよおい!

「おわ?!」

「他を見る余裕が無くなるくらい惚れさせるから、覚悟してなんて言っただけだね」

迷うように一拍の間が置かれ、少し小さな声で囁かれた。

「……やはり私も、たまにはそういう言葉が欲しいのさ。君も自分のことで精いっぱいだろうから、黙っていたけれど」

「え……。もしかしてアシユレ。……すねてる?」

「……………」

ふいっと視線をそらされた。

けどこの至近距離だ。その耳が赤くなっていることはすぐにわかる。

か……。

(かわいすぎるだろ……! ぐああああ! ギャップの威力がツ!!)

全世界に向かって叫びたい。

俺のパーティーの女騎士がめちやくちやかっこよくれ可愛いですって叫んで自慢したい!!

「か」

熱い気持ちのままに、抱いた気持ちを素直に伝えようとした時だ。

バンつと音を立てて窓から白い何か飛び込んできて、ごろごろ転がってからこちらに飛び込んできた。

身構える前に俺とアシュレは、柔らかくていい香りのする二つの山が織りなす幸せ谷に包まれる。

「アシュレ！ もうもう、そんな可愛い顔を見せてくれるなら、わたくしがいくらでも愛の言葉をささやきますのにー！」

「しゃ、シャティ」

飛び込んできた白いものこと、シャティは困惑するアシュレを豊満な胸に抱き込んで頭に頬ずりする。

「いつもしつかり者のアシュレでも、やはり不安に思ったりするのですね！ とつても可愛らしいですよ、アシュレ！ 安心して下さい。アシュレもミサオ様も、わたくしがぜえつたい、幸せにいたします！」

「少し落ち着こうか」

頬ずりしてくるシャティの柔らかな拘束からさつと抜け出すと、今度はアシュレがシャティを拘束した。……ヘッドロックで。

なんか前にもこんな光景なかったっけ。

俺はアシュレを抱きしめようとしていた行き場のない手をしばらくさ迷わせたが、シャティに全部とられてたまるかと両手をおもいきり広げて二人とも抱きしめた。

なんか、こう。悔しかったから……！

でも、く……ッ！

微妙に背も腕の長さも足りなくて、抱きしめるって言うよりしがみついているみたいになっちまったんだけど！

二人とも背が高いよ！ いや俺が縮んでんだけどさあ！

「やんつ、ミサオ様ったらお可愛らしい。心配しなくてもミサオ様もお構いいたしますわ！」

そうやってシャティが俺に手を伸ばすが、ぐいっとアシュレに額を掴まれてのけぞる。

「……」ほん。話がずれてしまったけど、ミサオ。ともかく弟子をとつたからにはちゃんと導くこと。いいね？」

「ここで話しが戻るんだ!？」

いや、シヤテイが入ってきた時点でさっきの雰囲気は霧散したけども。

もう少しいい雰囲気でしたか?……あ、はい。分かりました。お願いだからさっきまで照れて可愛かった顔を冷ややかなものに変えなideてください温度差で心が折れます。

『よっわ』

(黙ってたと思ったらテメエはよ)

クスクス笑いで的確に俺を煽る魔王のせいもあって、完全に甘いムードは霧散した。

うう……!! せっかくメス堕ちポイントの心配せずいい雰囲気で居られる感じだったのに……!!

……ん? でも収穫はあったな?

俺は受け身すぎるんだ。もっとこう、雄力を出してだな。

俺側から押していけばメス堕ちポイントになんかならず、イチヤイチヤできたりするんじゃないか!?

そうだ、そうだよ! 俺が照れるんじゃないやなくて、照れさせる側になればいいんだ!!

『君に出来るのかなあ』

(できらあー!)

むふふ。いい気づきを得た。心に刻んでおこう。

その後アシユレに師弟とは何たるかを説かれ、今後の指導について話し合った後。

まずは俺の事情をルキに話す事となった。

……仕方がないけど、やだなあ。最初からこのまぬけな現状について説明するの……。

「え……男?」

「そう、男。俺は今はこんな姿をしちやいるが、もともと男だったんだ」

きよとんつと目を丸くしていたルキだったが、へにやりとした笑みを浮かべて可笑しそうに笑った。

「またまた、そんなあ。僕の緊張をほぐそうとしてくれてるんですか？ 師匠は優しい方ですね。ふふっ、でもその方法が突拍子もないですよ。だって師匠はどう見ても素敵な女性で……」

「素敵い？ その年で世辞を使えるってのは大したもんだな。ま、ありがとうとよと言っておくぜ」

「お世辞じゃ……」

言いかけたルキをさえぎって、俺は自慢げに胸を張った。

「お前を弟子として認めたからな。俺も真の俺が何者か話してやろう！」

「真のつて……」

「ふふふん。聞いて驚け見て驚け！ いや見せるもんはないんだけど。……ともかくだ！ いいか？」

もったいぶる様に数秒ためて、俺は高らかに名乗った。

「俺こそが厄災の魔王を倒した男！ 冒険者としての階級は黒金！」

ほぼ初めて俺を知らない人間に大っぴらに功績を名乗れるからか、自然と胸が張る。堂々と名乗れる。

「それがお前の師匠である、アイヅメミサオ様だア！」

「!?」

これが漫画ならばばん！ という擬音が現れ、俺の背後には後光が荒ぶる波しぶきが描かれただろう。

だがそんな俺の肩に、継るように弱弱しい手がかけられる。

………そういえばめちやくちや癩なのだが、ルキって今の俺よりちよつと背が高いんだよな。

前の俺なら見下ろす側なのに、なんで背まで縮むんだか。

この至近距離だとちよつと見上げねえと顔が見えないの腹立つな。

「あの、師匠。冗談やめてください。本当。アイゾメミサオって、あれでしょう？ 黒金で、すごく強くて、でも実力はあるけど粗野で粗暴で性格が小物な冒険者って有名だった……」

「!? そ、それは初めの頃の話で……！ 最近はそんなことねえから！ つーか俺そんなこと言われてたの!?!」

思いがけず黒歴史から成る自分のデイスリ情報が出てきて反発するが、魔王よりまず反応するのそこ？ と冷静になる。

だけどルキとしては、そこが一番重要だったよう。

「だって、だって。もしそれが本当なら、………男じゃないですかあ!?!」

「だから男だつってんだろ!!」

「いや、この弟子を納得させるまでには、もう少し時間があるらしい。」

## 40話 ▶ 熾火は執着の風に煽られて（魔王視点）

ミサオが男。

その事実を受け入れられないのか、頭ををくしやくしやくに搔きむしりながら緑髪の少年がオレンジ頭の元男を凝視する。

「おと、おと、男って！ しかも悪評高いアイゾメミサオって……え、あ、待つてください！ 今、魔王を倒したって言いました!」

「そこに注目するのが先じゃねえかな!? あとさりげにデイスるのもやめろ!! 悪評高いって駄目押しすんなよマジでさあ! え、つか本当に俺そんな評判悪かった!? 本当に!」

「でいす……う? えつと、ごめんなさ……いやいやいや、でも、いや、ええええええ!? でも師匠のあの強さは尋常じゃなかったし、魔王を倒してもそこだけは納得ですけど、でも女性ですし!? アイゾメミサオ!」

「呪われてこんな姿になってんだよ! いいから説明させろ!!」

美しい子供の姿をした魔王は、見た目の年齢にそぐわない老獪な目でもって眼前の騒がしい様子を眺める。

『ふむ……。これも運命の出会いの影響か』

目の前の急造師弟の片割れであるルキという名の少年。

ミサオは一連の出来事の元凶は全て魔王であると言っていたが、それは正しくもあり……。一部間違いでもある。

なぜなら魔王の見立てではルキという少年と出会う運命そのものは、ミサオが現在手にしているスキル【運命の出会い】が引き寄せたものなのだから。

封印されていた「悪意の化身」とかいう人造魔物はいずれ解き放たれていただろう。

だがミサオたちがあの町に滞在するタイミングで、しかもミサオが一人で外に出た瞬間に瀕死の少年と出会ったのだ。それもかなりの距離を魔物に弾き飛ばされるといって、かなり無茶な方法で。

それに元凶である魔物の進軍まで重なった。

もしこれが本当に偶然ならば、なかなかの凶運である。

しかしミサオには魔物を蹴散らす力があつた。

その後に残った結果は自分に絶対的な信頼を寄せる、求める力を持った「伴侶候補」との縁。

ミサオにとつては凶運どころか強運、豪運といつても良い。

(思ったより厄介な力だな。笑ってばかりもいられないね……。神にすら至れる職業というものを、甘く見ていた)

思わず舌打ちする。

自らの呪いが引き寄せた職業ではあるのだが、そのすさまじく強い力の内容そのものに魔王は干渉できない。

出来るのは「知る」ことのみだ。

魔王としてはミサオが完全にメス堕ちして【職業・女神】を取得し、呪いを介して魔王との繋がりが完全なものとなるか、性転換の事実に追い詰められて精神、もしくは肉体的な死を迎えればミサオの魂を道連れにできる。

それが魔王にとつての勝利だった。

故にここ最近鬱屈とした様子を見せていたミサオに「ようやく持ち前の愚鈍さでも我慢できなくなってきたか」とほくそ笑んでいたのだが……。その件に関してはミサオ本人と同じく、完全なる勘違いだった。まさか生理前症候群とは。

ミサオの不調が生理の前兆と知って、らしくもなく心配する様子まで見せてしまったのは前世の記憶と経験がある故の不覚である。

ともあれ、ミサオはいえは魔物を倒して気分転換出来た上に、男に戻れる可能性のあるアイテムを手に入れるための更なる足掛かりまで手に入れて上機嫌。

いざ股から血が出た時の反応が楽しみではあるが、現状では精神崩壊のせの字もない。



もしもこのままとんとん拍子で例のアイテムを見つけれられでもしたら、確定していた魔王の勝利は露と消えるのだ。

—— 【技能：運命の出会い】

自分にとって優良な伴侶となりうる異性と引き合わせてくれる力。

（僕はその意味を知りながら、深くまで理解していなかったのだろうな。テキストだけ読んで分かった気になるなんて、まったく甘いにもほどがある。ミサオの馬鹿が移ったかな？）

”自分にとって優良な”。それは単純に能力が優れた者だけでなく、スキル保有者が望む力を持った相手と引き合わせるという意味も含むのだろう。

しかもミサオには魅了チャームの力もある。その相手は喜んでミサオの好意を得るために力を差し出すはずだ。

（男に戻る可能性を指し示した賢者。彼もミサオに好意を抱かなかつたら、情報と引き換えの代償をなにかしら要求していたはず。僕を倒したご褒美に要求されたからといって、自分が有利な状況にあつてそう簡単に貴重な情報をぽんと教えるものか。あれはそういう類のモノだ）

魔王は賢者カリユキオスをそういった性格だと判断していた。

加えて魔族の元部下や、竜族の王子。

今のところミサオにとっては厄介者でしかないだろうが、いずれも強力な力を持つ。

男に求愛されるというミサオにとっては罰ゲームでしかない状態に目を瞑れば、そういった者達から好意を向けられる事実は生きていく上での強力なアドバンテージだ。

神にも至れる職業クラスがもたらす恩恵は多い。

魔王は以前この呪いを祝福と称したが、なにもそれは嫌味ではなく

正しく事実なのだ。

そして最終的にミサオが女神の職業を取得すれば魔王の勝利へとつながるが、その過程で恩恵を得たミサオが呪いを解いてしまつては意味が無い。

最終的な勝利を確信してただけに、雲行きが怪しくなつてきた現状が少々悩ましくもあつた。

(どうしたものかな……。もつと追い詰めるか)

ミサオが元々持っていた力、経験値十倍取得のレベルアップチートによりメス堕ちする速度は本人のチョロさもあつて魔王が少し引くほどに早い。

だがそれでも、メス堕ちしきるのを待つにはいささか不安だ。

ならば近々来るであろう、自分が女になつた事実を決定的に思い知らせる女特有の生理現象を利用して精神面を追いつめる方が得策に思える。

——君は僕のもの。それは決定事項だからね。そこを変えられてしまつては困る

呪いを上書きしてハイさよなら、などと都合のいい結果には終わらせない。

魔王は死出の旅路の大事な同伴者を、逃す気など無いのだ。

魔王は自分がいかにしてこんな姿になつたかを弟子にあーだこーだと説明をしては疑われ、更に懇切丁寧に説明してはその過程で自分がダメージを受けている阿呆を見る。

『運命？ そんなもの、ぶち壊してこそなんぼつてやつだろう。強いて言うなら僕の意志こそ運命。最後に笑うのはこの僕だ。……』また、神という存在がもたらす何かは僕の前に立ちふさがるなら、今度も。ふふ』

すでに終わった命であるにも関わらず、燃え盛り始めた何かを自覚した。

燻っていた熾火は執着心という風に煽られて、再び勢いを取り戻していく。

『ま、今のところ出来そうなことあんまりないんだけどねえ。とりあえずミサオを追いつめて追いつめて、存分にからかおつと。あつはは』

(おめえはさつきから何を不穏な独り言を言ってるんだよ怖いわ!!)

## 41話 ▶ 急造師弟く初ナデポが互いに男という地獄を避けたい

「すごい……！　僕はあの厄災の魔王を倒した方に師匠になつてもらったんですね……！　わあ……！　こんなことがあるなんて……！」

「ふ、ふふん。そういうことだ。ようやく理解してくれたみたいだな」  
俺の言葉を頑なに信じないルキに懇切丁寧に俺が元男であること、とつてもすごい冒険者であること、厄災の魔王を倒した張本人であることなどを説明して約二時間。

……二時間!!

言いたくない所をなんとか避けたまま、それらの事実を信じてもらう事に成功した。

女の子といちゃいちゃしたい性欲が反転する呪いで女になりましたなんて言った日には師匠としての格が暴落するからな！

弟子とかよくわかんねーけど、師匠って呼ばれるからには“格”を保ちたいじゃん？

……あ、この考えはアシユレにバレたらまだ怒られるやつだ。いかんいかん、考えを改めねば。

「ええ、ルキ。ミサオ様は真正銘の英雄ですよ。わたくしは厄災の魔王を倒せる資質を持った方を探し、サポートすることを使命とした有翼族の巫女なのです。そのわたくし……シヤティ・ティティシエールがこの名に懸けて保証いたします」

「彼の名を聞いたことがあるのなら、私の事も知ってもらえているかな？　だとしたらどうか信じてほしい。彼……今は彼女だが、本当に元は男性なんだ。アイゾメミサオとパーティーを組んでいる、このアシユレ・ノーヴァの言葉を信じてもらえたら嬉しいな」  
などなど。

主にシヤティとアシユレが補足してくれたこともあり、頭の固い新参弟子に信じてもらえたのだ。

逆に言う俺の言葉だけだと信じてもらえなかったのが納得いかねえけどな!

男だったけど女になりましたくなんて事実、出来れば誰にも説明したくなんぞねえんだよ!

そこを苦しみながら説明したつてのによお……! まったく。

ちなみに今回ルキと話す事で知ったのだが、俺こと”アイゾメミサオ”は一部の界限で噂が独り歩きしてかなり評判悪かったらしい。

心当たりがないわけでもないが、態度悪かったのなんて初めのころくらいだぞ。……多分。

おそらくある日突然現れたくせに破竹の勢いで成果を出していき、男女両方の憧れの対象であった麗しの女冒険者アシユレとパーティーを組んだことでやつかみも買っていたんだと思う。

その後で更に超絶美少女のモモやシャティ、迫力美女のガーネットもパーティーに入ってたから……まあ特に男からしたら「女ばかりのパーティー作りやがってうらやま恨めしい」ってなもんだよな。

俺ならそう思う。

だから初期の頃の噂を悪いように膨らまされていてもおかしくない。

悪い噂なんて必要以上に一人歩きするものだし、余計にだな。ルキが耳にしたのはそういうった類だろう。

くそつ、誰が粗野で粗暴で小物だよ! なめやがって!

『全部間違っていないじゃないか。特に最後』

(そこが一番納得いかないんですう!!)

『君とは短い付き合いだけど、納得しかないよ?』

(魔王の言葉なんか信じませえくん! けっ)

『今まさに小物ムーブを目の前でされてるよって話する?』

今日も今日とて魔王がうるさいが、無視だ無視。

ともかく俺の話信じてくれたルキだったが、信じるや否やめちやくちや褒めてくれるターンに入った。

真つすぐに向けられる憧憬の視線が気持ちよくてならない。ふっふーん！ いい弟子じゃねーの！

……でも、そうだよな。本来魔王を倒した俺はこれくらいの賞賛を世界中からされるべきなんだ。

なのに、ああもうー！ こんな姿にならなければ!!

「？ 師匠、どうしました？」

「いや、なんでもない。気にするな」

悶々と心の中で不満を渦巻かせていた俺の不機嫌オーラを察したのかルキが首を傾げるが、無理やり笑顔を作ってごまかす。

師匠だからな。鷹揚に寛容に、どーんと構えているべきだ。うん。

「……ママになってからミサオママは時々こうなる。いつものこと」

「そ、そうなんですか？ モモ先輩」

「うむ」

やや困惑気味のルキの肩を叩いて声をかけたのはモモだ。

その内容にいささか落ち込むものの、どうやらモモもルキを受け入れてくれたようだと安心する。

最初探索役としての対抗心メラメラだったからな。

なぜ態度が軟化したかといえば、ルキがモモのことを「先輩」と呼んだから。

どうもいくつかのパーティを渡り歩いた経験のあるルキは、先にパーティに入っていた相手をそう呼んで敬う癖がついているようなのだ。礼儀正しい奴。

モモはその「先輩」呼びがいたくお気に召したようである。

多分お姉さんぶりたいたいんだろうなあ。かわいい。うちの子かわいい。

「……ごほん。それで、だ。さっき呪いの説明と一緒に話したが、俺は元の姿に戻りたい。でもってそのためのアイテムが難関迷宮にあるって話を仕入れてな」

「……………なるほど。僕はそのお手伝いが出来るんですね！」

「ああ、頼むぜ。代わりにちゃんと師匠してやつからよ」

俺がそう述べると、ルキは目に見えて顔色を明るくした。

「こんな僕でもすぐにお役に立てることがあるなんて……………！嬉しいです！ 頑張ります！」

「よしよし。お手本のような優等生返事、いいぞ〜！」

気持ちよく理解して気持ちよく返事してくれるもんだから、俺の気分も良くなる。

こいつ、昔ばあちゃんの家で飼ってたポチを思い出すなあ……………。犬っぽい。

そう思ったからか、ほぼほぼ無意識にルキの緑頭をわしゃわしゃと撫でていた。

「わっ!？」

「つと、わりい。嫌だったか」

するとルキが跳ねるように後ずさったので、行き場のなくなった手のひらをわきわきさせながら謝る。

この間もついやってしまったが、頭を撫でるって俺が居た世界でも無礼と受け取られる国はあるし、そうでなくてもさして親しくない相手から頭部を触られるってのは嫌なもんだ。

しまったな。ガキ相手というのもあって、ついやってしまった。

「い、いえ……………その、そうでは、なくて、ですね」

しかしルキの反応を見るに、俺の予想は違っていたらしい。

湯気が出そう……………とはこのことか。

酒でも飲んだのかつてくらい顔を真っ赤にしたルキは、うつむきながら手を体の前でもじもじ擽めている。

そしてしばらく視線を彷徨わせると、おずおずと近寄ってきた。

「あの、嫌じゃ……………ないです、ただちよつと、照れてしまって」  
「……………」

俺はルキの肩を掴んだ。

「ふえっ!？」

そして真剣な目でルキを下から見据えると、肩を掴む力を強くす

る。

「あ、あのあの。ししよ……」

「騙されるな」

「え？」

「幻想を抱くな」

「あの」

「お前の目の前に居る女は男だ」

「えつと」

「ナデポ初体験が男とかいう実績を俺に解除させんじゃねえ!!」

「な、なでぽ!? とは!?」

「聞くな!」

「ええ……?」

犬を思い出してつい無意識に……なんて言い訳は通用しない。

こいつにとっても俺にとっても、今のは無かったことにすべきだ。

なでなでしてポツとされるのは女の子がいい!!

『うわ必死』

(必死にもなるわ!)

ルキには念押しで俺の状態を説明しておかないとな……。

「いいかルキ。もう一回言っておくぞ? 師匠のお言葉だ耳をかつぽ

じって心して聞け」

「はい!」

「あのな。今の俺は職業クラスの影響で魅了チャーム垂れ流しの状態なんだよ。忌々しいが。俺が好意を向ける、もしくは俺に好意を向ける相手の好感度を魅了して跳ね上げる。お前にとっちゃ俺は命の恩人なわけだから? その効果も高いだろうよ。だが勘違いするな。それはスキルの方であって万が一でも俺にドキドキしても愛だとか恋だとかそういうもんじゃねーからな。いいか! もう一回! 言うぞ! 俺男だからなよく覚えとけよ!! しよっぱい気持ちを味わいたくなかったらなア!!」

「あ、あああああ愛とか恋だなんて、そそそそそそんな、僕はつ、



そんなつもりはっ」

「顔真っ赤にしてどもりながら言われても説得力ねーんだよ！」

あまりにも狼狽えるものだから深く溜息をつくが、それを見たルキが更に慌てる。

「あの!!」

「お、おう。どうした」

突然大きな声を出した弟子に一瞬ビビりつつ問い返すと、ルキはパッと顔を両手で挟むように叩いてから俺を見る。

「……大丈夫です！ 状態異常に対する耐性は高いので、師匠が魅了を垂れ流しても、僕に影響はありません！」

「え、そうなの？」

「た、多少は。さっきのは、その。家族とは幼いころに離れてしまい、頭を撫でられる経験とかなかったから！ 普通に照れてしまった、だけで！ ……あの、ですので！ 師匠に邪まな思いを抱く事なんてしません！ な、なのでどうか弟子入り取り消しとか、そういうのは……」

「ああ……」

それを心配して必死に弁解しているわけか。こりや俺の方が過剰反応だったな。うわ、はっず。

「だったらいいけどよ。悪かったな、変な勘繰りして」

「いえー！」

「……話は纏まったようだね」

騒がしいやり取りを繰り返していた俺達に声をかけてきたのは、笑いかみ殺しているガーネットだ。

「纏まった……のかな？」

「まあ、今はその辺でいいんじゃないかい。これから一緒に旅するんだし、足りないところはその中で話せば十分さ」

首を傾げる俺にガーネットはそう言うと、次いでルキに目を向けた。

「改めてよろしくね、ハーフェルフのおぼっちゃん」  
「え」

ガーネットの言葉に目を見開く。ハーフエルフって言ったか？

「あ、お気づきで……。といっても、僕はハーフどころか四分の一ですけど。年の取り方も人族と変わりませんし」

「おや、そうだったのかい」

ルキも肯定するもんだから、俺はしげしげとルキを見た。

耳は……とがってないよな。いや、ちよつとだけツンつとしてるかな？

顔は幼げながら整っており、美人が多いエルフの血族となれば納得だ。

贅沢にも周りが美女美少女ばかりで麻痺しがちだが、うん。顔がいい。

でも、へえ。エルフのクォーターか。

そうなるか今のところ純粋な人族って、パーティ内だと俺とアシクレだけのまんまだな。

ともかくガーネットが言うように話はこの辺で切り上げて、そろそろ町を出るか。

目的地も決まってるわけだしな。

今度は賢者の所へ行くときと違い途中までは転移魔術が使えるから、到着まではそう長くないだろうが。

出発の旨を伝えると、仲間達は新たなメンバーにそれぞれ友好的な笑みを浮かべた。

素直な性格のルキをみんな好ましく思っているようだ。

「ルキさん、よろしくお願ひしますね」

「はい！ シャティ先輩」

「よろしくルキ。何かわからないことがあれば遠慮なく頼ってくれ」

「ありがとうございます、アシユレ先輩！」

「……仲良くしてね」

「こちらこそです、モモ先輩！」

「ルリルちゃん様、なにか甘いものが食べたいわ」

「わかりました買ってきます！ ルリルちゃんせんぱ……。

……。

「ん？」

一人一人と挨拶を交わしていくルキだったが、なにか変なの混じらなかつた？

「み〜さ〜おっ！」

「うぐっ!？」

腹に感じた衝撃に呻くも、なんとか倒れず持ちこたえる。

そして視線を下に向ければ美しい金髪に青く艶やかな角……って、うわあ!？」

「ルリル!? おまつ、なんでここに」

「追ってきたに決まってるでしょ! もう、二度もルリルちゃん様を置いていくなんて失礼しちゃうわね。ところでその雄はなにかしら」

俺の腰にぎゅうぎゅうと小さな体に見合わぬ力で抱き着いていたのは、少し前に撒いた筈の見た目は超絶美少女、正体は四十六歳のおっさんである竜族の王子……ルリルベレスだった。

42話 ▶ 嵐来襲くマジでこれが男じやなかつたらな  
しか言えない

転移魔術。

それを使用して移動できる範囲は短距離、中距離、長距離の移動に分けられるが、距離が長くなればなるほど難易度は増す。

俺は短距離と中距離までは使えるが、長距離移動の転移魔術が使えるのはシャティだけだ。

更に言うとその移動も完全な自由選択ではなく、移動ポイントに設定できる上限数が決まっている。

シャティが移動場所に設定できるのは五つまで。これでもかなり多い方である。

当然その中にはシャティ自身の故郷である天空都市マシユラバも含まれているため、最初の目的地へ至ること自体は非常に簡単だ。

……だが現在俺たちは絶賛足止め真っ最中である。

何故かといえば。

「ルリルウツ!! おま、妨害結界とか張るのやめろよ! 器用な奴だな!!」

「そうですそうです! わたくし達、先を急ぎますの!」

「ええ〜? なんのことおく? ルリルちゃん様、わかんなくい」

そうすつとぼけながら三段重ねのパンケーキをパクついているのはルリルベレス・ファールレン。

ベテルキクスで出会い、何を間違ったのか俺に求婚している竜人だ。

ちなみに見た目最強に可愛い美少女だが、中身は四十六歳のおっさんである。竜人の中では若いらしいけど。

「そ・れ・よ・り! ルリルちゃん様は心が広いからミサオが女の子と戯れているのは構わないわ。でも雄は別! しかもこの愛らしくて美

しくて超絶強い完璧なルリルちゃん様を差し置いて一緒に旅しているなんてどういふことよ〜」

「あ、あの。つつかないで……」

「ああん？」

「ひっ!?!」

そして俺の弟子だが、目の前で絶賛絡まれ中である。

「おいルリル、食器で人をつつくな行儀悪いぞ」

「むう」

「もつと言つてやってください。ルリルちゃん様、ミサ才殿の言う通りですよ」

「あんたはもつと自分で自分の主人を諫めろ」

フォークでつんつんとルキの頬をつつくルリルは一見幼い美少女なので周囲からは微笑まし気な視線を向けられているが、相手の強さを感じ取っているのかルキはさつきから顔色が悪い。

……先の迷宮でも真っ先に危機察知したらしいからなこいつ。脅威には敏感なんだろう。

でもって俺の斜め後方からルリルの行儀悪さへの指摘に同調するのは、ルリルのお付きである執事服の竜人マイヨール。

お前は「ソーだソーだ」とばかりに俺に便乗しないでこいつをどうにかしてくれ。

現在俺達だが再度現れたルリルを撒くことに失敗して、マシユラバに移動もできずある町の飲食店でぐだぐだした時間を過ごしていた。

ルリルの奴、どうやら転移魔術を妨害する結界を使用しているらしく、こいつの側に居ると魔術を用いての移動が出来ないのだ。

もういつそ休憩がてらご機嫌伺いでもするしかないか？ と、再び俺はこの女装おじさんに甘いものを奢る羽目になっている。

俺は深く溜息をつく、前は居なかったルキの説明をする。

ルキへのルリルの説明は後回しだな。面倒だから。

「そいつは俺の弟子。変にちよっかい出すなよ。っーか一緒に旅といつても、まさにこれからそれを始めるつて時にお前が来たんだよ」

「あら、そうなの？ ふくん、弟子ねえ……」

「そういえばお前、あの馬鹿どうしたんだ？ 勝ったのか？」

そういえば、と問いかける。

ルリルには「馬鹿」で通じたのか、「ああ、あの魔族」とぼやくようにつぶやいてから眉間に皺を寄せた。

「あの方、強かったですね。ぎりぎりだったので私が回収しました」

「あ、負けたんだ……」

「負けてない！」

ルリルはがたつと身を乗り出すように立ち上がったが、そのむきになる様子を見るにやっぱり負けたんだらうなと察する。

こいつも黄金<sup>きかね</sup>クラスの冒険者証を出せるし竜族の王子というハイスペックさだが、実力としては馬鹿こと魔族アルマディオの方が上らしい。腐っても魔王軍幹部ってことか。

「弟がすまないね」

「あら、あなたの弟さん？ ……まあ、別にいいわよ。次に会った時ぼつこぼこに負かすから。……今回も負けてないけどね？」

ガーネットにそう返したルリルはやけ食いの様にパンケーキを貪るが……。

様子を見るに、こちらを解放してくれる気は一切なさそうだ。どうすっかな。

「ところでルリルベレス殿。私達には早急に済ませるべき目的があるのです。どうか結界を解いてくださいませんか？」

「ルリルちゃん様も一緒に連れていってくれるならいいわ！」

「わり、定員オーバーだわ」

アシユレが軌道修正を試みるが、勘弁願いたい要求をされたので速攻で断った。

するとルリルは頬を焼けた餅のようにふくらませる。

「こくんな可愛いルリルちゃん様に好かれて、ミサオは嬉しくないの？ 一緒に旅したくないの？」

「女の子だったら将来を見越して一考の予知があつた」

「小さい。小さいわ、ミサオ！ 可愛いは性別なんて軽く超越するの

よ!?!」

「すげえ自信だなあ、おい」

確かにルリルは芸術品のように愛らしい見た目をしているが、あいにく俺は贅沢なことに目が肥えている。

そのおかげでなんとか見た目に惑わされないうで居られるし、なによりにこいつにはチンもタマもついてるからな……。

好意を向けられてもお断りである。

俺は!! 女の子と!! いちやいちや!! したいんだよ!!

思い出したくもないが初キスも男。

これ以上野郎どもに俺の青春を消費してたまるかよ。

「ミサオママ。ルリルちゃん、強情。いつそ背中に乗せてもらって迷宮まで運んでもらうとかも、あり」

「おっと強かな意見出て来たな」

ルリルと同じパンケーキをもぐもぐ食べていたモモからまさかの提案が出てきた。

確かに賢者に的を絞ってもらった迷宮、魔術で長距離移動できるポイントから大きく外れてる場所もあるからな……。

すぐに移動できる場所を後回しにして、そこまで一緒に旅と銘打って竜姿のルリルに運んでもらうというのは有りといえは有りだ。

本人が納得するかどうかは別として。

「ルリルちゃん様に乗りたいですって!? モモ、あなたったら大胆ね。でもごめんなさい。ルリルちゃん様、お嫁さんはミサオにするって決めるからその好意は受け取れないわ……」

「嫁じゃねーし乗るってそういう意味じゃねーし。やっぱお前中身は年相応におっさんだよ」

「誰がおっさんよ。ぴちぴちぷりぷりのルリルちゃん様に最も縁遠い言葉だわっ」

「あの、首。首絞めないで……!」

「わあああ!! ルキーーーー!! 大丈夫か!」

おっさんと言われて憤慨するルリルが手近にあったルキの頭を抱き寄せてぎゆうぎゆう抱きしめていたので慌てて回収した。

見た目デイベアを抱きしめる子供って感じだったがいっつ竜だからな。

下手したらルキの頭がトマトみたいに潰れる。

「むきゅっ!」

引き寄せた勢い余ってルキの頭が俺の胸に沈んだ。

そういえばこの間魔物から逃げる時もやっちゃまったなこれ……。

すでに俺が男であることを知っているルキにとつては複雑だろうと、弟子の気持ちがいよいよぱさでいっぱいになる前に開放して庇うように後ろに追いやった。

「あー! あー! ずるい! ルリルちゃん様の事もぎゅっとして!」

「嫌だね! ともかく俺たちは先を急ぐんだ。ついてくるのは勝手だが、お前の嫁にはならねえからな」

「そんなこと言っちゃって。一緒に居れば嫌でもルリルちゃん様の魅力に気づいちやうわよ? でも、そうね。じっくり色々教え込んでもいくのもありだわ」

「ミサオ様、ご安心を。わたくしがお守りいたしますからね」

むふふと意味深な笑いをこぼすルリルを見てシャティが真剣な顔できゅっ手を握ってきた。

この際俺に色々教え込もうとしているのはシャティも一緒だよな?

という野暮なセリフは飲み込もう。

なんかもう、俺一人じゃ対処できないから色々頼む!

「ですがルリルベレス様。伴侶を見つけたらすぐに里へ戻る様にと竜王様が……」

「ええ? いいわよそんなの後で。どつちにしろすぐ帰る気なんて無かったし、ミサオを落としがてら一緒に旅するのも楽しそうだし」

マイヨールに文句を垂れたルリルは俺の側に移動すると、甘えるように抱き着いてきた。



ふわふわの金髪からは良い匂いがして、くりくりした真紅の瞳が収まるつり目が甘えるような色を含んで上目遣いに見上げてくる。

そこには幼い見た目に似合わぬ色気がたっぷり含まれていた。

「ふふっ。ルリルちゃん様から逃げられるなんて、思わないでね？」  
鈴が転がるような声は何処までも蠱惑的で……。

……これで男じゃなかったらなあ!!

そして、俺がルリルがついてくることを半ば覚悟した時だった。

「駄目です。ミサオ殿を連れ帰るのは後で良いので、竜王様にご報告するのが先ですよルリルちゃん様。一度報告に帰らないと私が怒られるので。ああ、ご安心を。マーキングはしたのでミサオ殿の所にはまたいつでも来られます」

「は？。ちよ、まいよ……馬鹿マイヨールちよつと待っ!!」

ひよいとルリルを俺から引き剥がしたマイヨールが、不意をつかれたルリルが反撃する前に一瞬で高度な魔術を構成した。

これは見覚えがある。……長距離転移の魔術だ。

「ではミサオ殿、ごきげんよう。また近々手土産を持って挨拶に参りますので」

「いゝやゝ!! 帰らないいいいい!!」

ルリルが小さな体でバタバタ暴れ、すんつとしているマイヨールの頬に拳を叩き込んだところで……魔術の光が弾けて拡散する中で、二人の姿は空気に溶けるように消えていった。

「……もう来なくていい」

突然来ては突然去っていった嵐に、俺はげんなりとため息をついた。

### 43話 ▶ 部屋割りくなんか弟子がめちやくちやキョドってる

突然来ては慌ただしく強制送還させられていったルリルに奪われた時間はそこそ長く、暗くなってきた空を見上げて俺たちは一泊してからマシユラバに向かうことにした。

先行きがいいかと思えば当たり前の様にトラブルがあるし、なんだかなあ……。

俺はげんなりとため息をつくとき、先ほど危うく潰れたトマトに転職するところだった弟子を見る。

「お前も災難だったなルキ。つーか災難続きか。さすがに同情するぜ」

「ええっと……はい」

ルキの表情は引きつっており、歯切れも悪い。

仲間が文字通り全滅して自分も死にかけた後にルリルに絡まれるのかな……。これは何か旨いものでも食わせて元気づけてやった方がいいか？ 師匠として。

そんなことを考えていると、ルキがおずおずといった様子で言葉を続けた。

「……あの、師匠。一つ聞いてもいいですか？」

「おう、なんだ？」

神妙な面持ちで尋ねられたので少し身構える。あのメスガキおっさんについてはさつき説明したから、来るとすれば師匠として頼られる何かであると思ったからだ。

なんだ、俺はまだ師匠若葉マークだぞ。するなら出来るだけ分かり易い質問にしろよな。

しかしルキの質問とは実に単純なものだった。身構えていた分、少々肩透かしを食らった気分だ。

「どうして僕は師匠と同じ部屋なんですか!？」

「はあくん?」

なんだ、そんなことか。

半ば叫ぶように問いかけてきたルキの質問はなんてことない。現在この宿屋に置おての部屋割りについてである。

俺は男だった時も、そして女になってからも仲間達とは別部屋だ。でもって俺の弟子かつ男であるルキは当然俺と同じ部屋。それがこの弟子にとつては一大事らしい。

でもそれはこいつがいけないんだよ、こいつが。

「いや、だつてお前。迷惑はかけられないとか言つてさ。めちゃくちゃやっすい部屋借りようとしてんだもんよ」

「で、ですから! 僕は気にしませんし、それでいいんですつてば!」  
食い下がるルキに深いため息が出る。

俺はガシガシと頭をかくと落ち着かない様子の弟子にジト目をむけた。

「バツカお前。自分達だけいい部屋に泊まって仲間一人……それも一番若いお前を安いタコ部屋に放り込んだらさ、ほら。嫌な感じだろ。世間の目つてもんがあんだよ」

アシュレにちゃんと面倒見ろつて言われたばかりだし、余計にそんなことは出来ない。

「だけど! その、女性と同じ部屋というのは!」

「だから俺は男だつてんだろ!! いいか。これは最大限の譲歩だ。もう一部屋借りてもいいんだが、それだと今度は申し訳ないから外で寝るとか言い出しかねないだろお前。どうせ泊まり賃は部屋ごとだ。俺と同じ部屋ならタダみたいなもの。これ以上は譲れねーな」  
「ぐ……!」

とうかこいつには見えないけど魔王もいる。

ルキとしては師匠と二人で気まずいんだろうが、俺にして見りや単なるむさくるしい男部屋だ。気にしなくていいのに。

『君つてき……。いや、それより前言を撤回してくれない？ むさ苦しいだなんて侮辱もいい所だ。僕が居るだけで部屋の景観が数段良くなるだろう』

(その自信はどこから来るんだよ)

『え？ 顔』

(自分で言いやがった)

さつきから静かな割に人を小馬鹿にしたような呆れたような視線を向けてくる魔王は、喋ったと思ったら相変わらず面の皮が厚い。こいつ自分好きだな。

俺はルキにばれない程度にベッドに座って足をプラプラさせているシヨタガキを睨むと、言い返せなくなっているルキの肩をぽんつと叩いた。

「……ま、中身が男でも体が女じゃ困惑するよな。でもそこは慣れだぞ、慣れ」

「ええ……」

か細い声をこぼすルキ。……こいつもエルフの血を引くだけあつて線の細い美少年だから、確かにむさ苦しいって感じではないか。

俺がこれ以上はどう声をかけたもんかと考えていると、隣の部屋……女性陣が借りている部屋から楽しそうな笑い声が聞こえてきた。

いいなあ……。せつかくなんて言葉は意地でも使いたくないが、女になったんなら俺も女子部屋にお邪魔したかったぜ。

冗談めかして「俺もこれからはみんなと寝よつかな」と言った時に思いのほかあっさり「いいよー」くらにのノリでOKしてもらったんだが、実際にそれをするとなると問題がある。……メス堕ちという問題が。

一晩でシャティあたりには夜這いされて完全メス堕ちする懸念さえなければな……。いや、モモもか。添い寝とかねだられた日には俺の母性が爆発してしまう。いや父性だが。メス堕ちポイントの野郎が母性認定してくるだけで父性だが。

(いや、俺は誰に言い訳してんだよ)

妙な葛藤をしそうになったので頭を左右に振って考えを振り払う。

……さてルキも黙り込んでしまったことだし、そろそろ寝るか。なんかめちやくちや眠いんだよな。

にしても別に同じベッドで寝るわけでもないのに気にしすぎだこいつ。どうせ野宿の時は雑魚寝だぞ？ まあそれはそれで部屋とは気分違うんだが。……でも俺だけでこれなら他の女の子も一緒の時はどうなるんだよ。

真面目なのは良い事なんだろうけど、ここまで気にされると俺まで居心地悪くなってくる。……さっさと寝ちまう方がいいな。

そう決めるとごそごそ寝る準備を整え始める。すると静かだったルキが突然奇声をあげた。

「今度はなんだよ!!」

「だっ、えっ、ししよっ」

「なんだって?」

「わああああああ!! 来ないでください!!」

「はあ!？」

変な声出された上に来ないで下さいとはどういう事だ。

俺はわけのわからなさにはさすがにカチンときて逆にルキに大股で近づいた。

『あゝあ……』

後ろから魔王の半笑いっぽい声が聞こえたが……。なんだよ。気づいてないのは俺だけで、何かあるのか？

「わっ、ちよっ、とっつと」

「おいおいおい」

俺が近づいた分だけ後退したルキは勢い余ってベッドに足を引っかけ倒れそうになる。反射的に手を伸ばしてその腕を掴むと、俺も少々バランスを崩した。

斜めった体を支えるためにもう片方の腕を伸ばすとちよっどそこは壁で、なんだかルキを壁ドンするような体勢になった。げえっ!

「ひいっ!!」

「だからさっつきからなんだよ!!」

言葉にならない声を発し続ける弟子にいい加減イライラして少し

大きな声を出してしまつた。妙に眠いからさっさと寝たいつづの  
に、寝る前に疲れさせんなよなあ。

我ながらこれは弟子からの評価爆下がりなのでは？ という目つ  
きの悪さで睨む。するとルキは口をぱくぱく動かしたあと……目を  
泳がせ、意を決したように唾を飲み込んだ。

「師匠」

「なんだ。言いたいことがあるならばつきり言え」

「はい！ その……！ たいへん言いにくいのですが……！」

「おう」

なんだこいつこれから死地にでも赴くのか？ って顔して。

ただ視線は絶対こつちに向けず、顔も俺から直角にそらされた状態  
である。は？ 随分頑なだな。俺を見たくない理由でもあるのか？

訝しむ俺にルキは喉の奥から絞り出すような声で懇願した。

「下着を、つけてくださいいいいいいい！！」

「え」

言われて初めて俺はつつつと視線を下に向ける。現在俺の服装は  
部屋着用の黒いタンクトップとゆるめのズボンだ。

下着ってそんなもんつけてるに決まってるだろ人をノーパン主義  
みたいに言いやがって。……そう思ったんだが、俺は今の自分がパ  
ンツ以外にも下着をつけていることを思い出した。正確にはさつき  
までつけていた、だが。

「あくあ……」

口からこぼれ出たのはさっきの魔王と似通った半笑いの声。いや、  
笑い事じゃねえんだけど人って不測の事態になった時には笑うしか  
ないというか。

ちらと自分のベッドを見るといわゆるブラジャーという物体が無  
造作に放り投げられている。

（やべー……。いつもの調子で外しちゃまった……。いやだつて締め付  
けられて苦しいんだよブラジャー……）

言い訳の様に思考するも、眼下には黒のタンクトップから覗く双丘。かなり際どい所まで見えており、俺より背の高いルキからしたらこの距離でその位置は完全に見えてしまうだろう。

俺は流石に慣れるしかなく自分のそれには特に思う事はなくなつたが……思春期真っ盛りのルキではそうはいくまい。

俺も男だ。ルキの気持ちはわかる。

中身が男だとしてもノーブラの女と密室に居たら気まずいだろうよ。

(でも、……俺の部屋だし……。気を遣って俺が苦しい思いをするのはおかしくないか?)

宿でのひと時は唯一許された楽な恰好が出来る瞬間なのだ。だといふのに弟子に気を遣って寝る時までブラジャーをつけ苦しい思いをしないとイケないのか?

結論。

冗談じゃない。

俺は襲ってくる眠気に判断力が低下している自覚を抱きながらも、ふっとルキに笑いかけた。

ルキはそれを了承ととったのか安堵の息をこぼすが、次の俺の言葉を聞いて固まる。

「慣れろ」

「え?」

「俺、これが一番楽な恰好なんだよ。なに、どうせベッドに入るから見ねえよ。すぐ慣れる」

「待ってください!?!」

思わずといった風にそらしていた頭を俺の方に向かせたルキが狼狽えるが、俺は「もうどうにでもなれ」という心境でさっさとベッド





44話 ▶ 君を待つゝ都合にいいことだけ聞いて生きていきたいゝ

同室であることに困惑する弟子を置き去りに死ぬほど眠くて目を瞑った俺は、一瞬で眠りの中へ落ちていき………夢を見た。

記憶に刻まれるのは、黎明を溶かしたような赤い瞳に艶やかに広がる黒い髪。

「君はぼく、……私のことが好きなのかい？」

「でも君は女の子じゃないか」

「男？ ははっ、だとしても今は女だ」

「とても眠かったんだらう？ それも生理前特有のものだよ。人によるけどね」

「もつと自覚した方がいい。君は今、子を孕むことが可能な体になったのだと」

「そんな風に自分の事でいっぱいいっぱいな君が私を助けようというの？ おこがましいね。ああ、実に烏滸がましい！」

「私がどんな状態にあるのかも、なにをしたのかも、何処に居るのかも知らないくせに」

「気持ち悪い」

「忘れていたんじゃないかい？ 私の事なんて」

「ああ別に、責めているわけじゃないさ。だってそれほど君に興味が無いもの」

「どうせ今の君では私の元へなどどり着けない。何も知らない無知で愚かな君にはね」

何か言葉を交わしたような気もするが、自分の声は聞こえない。

ただただ乾いた地面に水が吸い込まれるようにすうっと相手の言葉だけが脳に刻まれている。

その声が誰のものであるかは、初めて聞くにも関わらず理解でき

た。

いつか夢で見た黒髪の少女……俺が一目惚れした相手だ。だがその内容は俺を侮蔑し突き放すもので、繊細な俺のハートには容赦なくダメージが蓄積されていく。

何か弁明らしきものを口にしていた気もするのだが、速レスで完封された。

この間の夢では声を聞くことが叶わなかったが、俺の惚れた相手はどうやら口が達者らしい。

しかし最後に向けられた言葉。

「だけど、待っているよ。……君が私の元へたどり着くまで。私と君は、繋がっているからね」

艶あでやかに笑う美しい少女。

向けられた言葉にもそれまでとは違った好意的なものを感じて、単純な俺の心は一気に回復する。

【ああそうとも。一緒に連れて逝ってやるさ】

最後にもうひとつ何か言っていた気もするが、それを聞き取る前に……俺の意識は浮上し、瞼を朝日が焼いた。

「ミサオ様、ご機嫌ですね」

「そうか？　なんかいい夢見た気がしてさ」

朝食の席で内心が顔に出ていたのか、問いかけて来たシャティい俺

は上機嫌で答えた。

「へえ、どんな夢です?」

「や、内容は忘れたんだけど」

『……………』

さりげなく俺が欲しいと思っていたジャムを手渡しながらの問いかけであり、シャティって清楚なイメージは崩れたけど気が利く子だよなとしみじみ思う。

先日俺の不調に真っ先に気が付いて声をかけてきたのもシャティだったし。

そんなふうに関心していると、横から消え入りそうな声が耳に入る。

俺の弟子、ルキだ。

「あは、はは。師匠はよく眠れたようだなによりです……」

「あんたは大丈夫かい? すごい顔をしてるけど」

「ガーネット先輩、お気遣いありがとうございます。でもこれは僕らの精神修業が足りないせいなので、どうかお気になさらず。そうだ、これは師匠からの試練なんだ。きつとそうだ……」

「なにブツブツ言ってるんだよ。それより食え食え。育ち盛りだろ? それで足りんのか?」

明らかに大丈夫じゃない顔をしたルキ。

思いつめた顔で独り言を言い始めたので、少々怖くなって俺の分のウインナーを分けてやりながら絡んでみた。

ちなみにそれを見て気を遣ったのか、横から自分の分のウインナーを分けてくれたモモが良い子過ぎて可愛い。

わかったわかった。普通におかわりして自分でも食うから、モモは自分の分ちゃんと食べなさい。

「ミサオママ、お肉ちゃんと食べておいた方がいい。今のうちに血を作っておくの」

「おぶっ」

変な声出た。

あ、いや。気を遣ってくれるのは嬉しいんだけどさあ!?

まだ実際には来てない生理の事で娘の様に思ってる子から気を遣われるのって俺どんな顔すればいい!?

俺が机に突っ伏して頭を抱えていると、下から魔王がひよっこり顔を出して俺の顔を訝し気な表情で覗き込んだ。

あ？　なんだよ。

『君、……本当に夢の事は覚えてないの？』

(ん？　ああ)

『でも、いい夢だったって？』

(おう。なんか目覚めた時にふわふわした気分でさあ。よく覚えてねえけど、いつか夢で逢ったあの子が出てきた気がするんだよなく。やっぱ運命ってやつかなあ)

『はあ？　惚れたとか言って結局探せてない相手が出てきてそんなに嬉しい？　適当なこと言って、罵倒されたんじゃないの。それでいい夢とか、君マゾだね』

(誰がマゾだ！　なに人が見た夢勝手に決めつけてるんだよ。あ……でも罵倒はされたような……?)

聞かれた内容が昨晚見た夢の事だったので、魔王が相手でも気分よく答えてしまった。

相変わらず魔王の言う事は気に食わないが、そんなもの気にならない程度には浮かれている。

モモに血を作れと言われて落ち込んでいた気分がもうこれとか、自分の事ながらテンションの上下が激しいぜ。ジェットコースターか？

(！　そうそう！　君と私は繋がっているとかが言ってたんだよ!!　これは脈ありだろ!)

『都合のいい所だけ覚えてやがるこの単純鈍感まぬけ馬鹿……!』  
(なんて?)

浮かれ調子の俺と違い、非常に珍しく……こちらを小馬鹿にするでもなく、憎々し気というか悔しそうな表情を浮かべている魔王。

なかなかレアな表情に何を言ったのかは聞き取れなかったものの、俺の機嫌は更に良くなった。

嫌いな奴が気分を害してる様は見てて気持ちがいいよなあ！  
わーっははは！

『……まあいいや。それより君、夢で会った存在不確定な女にまでうつつをぬかしているようだけど。一度自分に向けられる好意について、彼女たちに聞いておいた方がいいんじゃない？ 女騎士と有翼人は君が好き。愛している。半魔も抱いてもいいと思うくらいには君が好き。獣人は君をママと慕い、君が誰かに取られるのを嫌う傾向。お互いが君を好きなことも知っているわけだろう。今のなあなあとした状態で旅してて、いいのかなあ』

(アドバイスめいた様子をよそおつての言葉。その心は?)

『なんか順調に進んでつまらないからちよつとつついてパーティ内での愛憎劇でどろどろしてみてよ』

(この邪悪がよ!!)

突然思いついたようにベラベラ喋ったと思っただらこいつ……!

いや、まあ俺も聞こうと思つてたよ? 主に……俺はハーレムしてもいいんですかとか!

主にシャティの乱入でその辺曖昧になっているんだけど、ハーレムが夢の俺としてはハッキリ聞いておきたいっていうか……!

だつてこんな姿になつたとはいえ、人生で一番のモチ期が到来してるんだぞ!! それも倫理的にアウトな日本じゃなくて、一夫多妻も珍しくないこの異世界で……!

シャティは俺を含めたメンバーで自分が百合ハーレムの主を狙つてないか? って感じだし、ガーネットに至ってはすでに逆ハーレムの主という少々おかしいところはあるんだけど、みんな仲いいし。

俺が男に戻った暁には全員お嫁さんになつてもらうのはありですかと聞きたい!!

あ、でもガーネットと場合は俺は嫁に娶られる側になる……?

いやちげえちげえ。婿! 嫁じゃない!

『うっわ。ミサオってさあ……』

(素直にドン引きの声)

『素直にドン引いたからね。僕、ミサオのそういう所どうかと思うよ。』

日本育ちならもつと奥ゆかしさとかそういう精神を持ち名よ』

(うるせーわ！ こちとらそれを希望に生きてるんだよ!!)

『ああ、反転した呪いで女の子になっちゃうくらい性欲強いんだもんね』

(急に本質で突き刺すなよ心臓止まるだろうが)

本当にそれを言われると羞恥心で辛いんだけど、欲望に忠実で何が悪い！

……でもなきや、元の世界に帰れない気持ちの行き場がないだろうが。

俺はいっぱい愛されたいし、いっぱい愛したいし、たくさん女の子といちやいちやして幸せに暮らしたいんだよ！

もちろん、男に戻ってからなアア!!

『ふくん』

「あの、師匠。どうしました?」

「……いや」

魔王に対応している間に突っ伏したままふるふる震えていたらしく、ルキに気遣うように背を撫でられてしまった。

いかん、このままでは師匠としての威厳が……! !

というか、そうだルキ。

こいつが居るから大っぴらにシャテイ達に「ハーレムってどう思う?」とは聞けないよな……。

ルキ潔癖そうだし初心<sup>うぶ</sup>っぽいし、ちよつと面倒になりそうだ。

まあ今は魔王が期待するようなパーティ内でのドロドロも特にないし、その件はまたいずれでいいだろ。

最優先すべきは俺が男に戻る事! これに変わりはない!

でなきやどんなにモテても憧れのイチヤイチヤは出来ないんだからな……! !

く、くそう。地団太を踏みたい気分だぜ。

「まあ……その。気にすんな。それより今日は天空都市に移動するか

らな。長距離転移は経験したことあるか？ 酔わないように気合入れとけよな」

「！ 長距離転移！ すごい、師匠は中距離以上の転移も使えるんですか!？」

「いや、使えるのはシャティ」

「そうなんですか！ さすが有翼族の巫女様ですね。有翼人の中でも特別な血筋かつ、特別優秀でないとなれない役職だと聞きます。僕も将来的に長距離転移を使えるようになりたいと思っていますので、勉強させていただきますね！ シャティ先輩っ！」

「えへん。そうですよ。わたくし、すごいんですよルキ」

手放しにほめるルキにシャティもご満悦だ。

少々大げさであるものの、裏表がないからルキの賞賛は気持ちいいんだよな。わかるわかる。

「ではこの後、消耗品を買い足したら転移しましょう。天空都市にもお店はありますが、しばらく買い物している暇はないでしょうから」「？」

シャティの言葉に多少ひっかかりを覚えたが、そういえばシャティの一族に魔王討伐の報告が先だったな。

そんなに長くかからないだろうが、流星に即迷宮にもぐるとは行かないはず。

「有翼人の住む天空都市か……」

シャティと出会う前に一度立ち寄った事はあるんだけど、その時は”場所”が”場所”だけにビビっちゃってあんまり見て回れなかった。

今なら余裕をもって見られるだろうし、単純に楽しみでもある。

綺麗なんだよなあ、あそこ。

俺は天空都市に思いを馳せながら、モモがいつの間にか追加注文していた大量のワインナーを胃に詰め込むのだった。

本編を読まなくてもだいたいわかるかもしれない三章のあらすじ

「本編を読まなくてもだいたいわかるかもしれない三章のあらすじ！」

賢者カリユキオスより男に戻れる可能性……【職業・女】を【職業・男】で上書きするために「あらゆる職業の可能性を開く宝物」を求め五つの迷宮を目指すことにした操達。しかしその途中、操は謎の不調に襲われる。

体そのものの不調とイライラして制御の利かなくなりそうな自分に気付いた操は「自分は呪いの影響で闇堕ちしかけているのでは」と考えた。

しかし仲間相談してみれば、なんとその不調は女性特有の現象……生理の前兆ともいえるものらしい。そのことに悲鳴を上げのたうちまわる操だったが、その対処を今の内から知っておくべきだと仲間達に生理についてのレクチャーを受けることとなる。

勉強の途中でストレスが限界地に達しそうな操を気遣ったガーネットが気分転換に散歩を勧める。その言葉に甘えて魔物でも狩って気分を晴らそうと一人町の外へ出た操。しかし幾分も歩かぬうちに、空から血の雨と共にスタボロの少年が降ってきた。

訳も分からない状態であったが少年は瀕死。転移魔術に耐えられそうな体でもなくその場での対処が求められたが、操は治癒魔術の加減が上手くない上に遠方からは少年の怪我の原因であろう魔物の大群の影が迫っている。どうしたものかと考えあぐねていると、そこで魔王が一つの提案をした。それは現在操が身に着けている【職業・メイデン】乙女（職業・女の第二ステージクラス）の職業スキルを使ってはどうかというものだった。



そのスキルの名は「乙女コネの口づけ」。体液を媒介にある程度無条件に傷を癒すという回復チートだった。

効果は破格であるものの方法が方法だけに躊躇するが、そうも言っ  
てられないと回復を実行。その後回復した少年を背にかばい、迫っ  
てきた魔物の大群を一掃した。

話を聞けば魔物の大群は少年のパーティが見つけた未発見の迷宮  
に封印されていた”悪意の化身”を名乗る魔術生命体が生み出して  
いたものらしい。

迷宮から操達が居る町まで村と町をひとつずつ飲み込み進軍して  
いた脅威だったが、その中心にいた魔術生命体を操が倒したことで他  
全ての魔物も消失した。その功績により操の冒険者としての実績階  
級は十階級中の七まで上昇。更には命を助けられた少年……ルキは  
ミサオに弟子入りを志願する。

ルキの弟子入りを断ろうとしていた操だったが、彼の職業が探索者シーカー  
であると知ると考えは一転。迷宮での宝探しに役立ちそうだと弟子  
入りを受け入れた。

新たな仲間をくわえ、操達はシャティの故郷、天空都市マシユラバ  
近くにある第一の迷宮を目指す。

### 【ざっくりキャラ紹介】

今回は既存キャラの追加情報はそんなにないので新規キャラのみ。

■ルキ

■種族：クォーターエルフ（四分の一だけエルフの血を引いている）

■性別：男

■年齢：十三歳

■取得職業：探索者、魔術師、剣士

■仲間と共に厄災の魔王が倒れた影響で新たに発見することがで  
きた迷宮の探索をしていたが、その最奥で眠っていた古代の魔術生命

体の封印を解いてしまう。仲間達は一瞬で殺され自身も瀕死の重傷を負うが、操に一命を救われる。

操に恩返しをするためにも強くなりたいと思ひ操に弟子入りを志願した。

#### 【世界観メモ】

これまで出てきた世界観のメモ。

作中で出てきていない部分も少し書いてある気もしますがフレバー的に受け取ってもらえればと。

#### ■断崖都市ベテルキクス

・リオン大渓谷中ほどに位置する大都市。人口の半数を土妖精とドワーフが占める。

・土妖精たちによる魔術で街の天井部分にも重力が反転した居住可能地区がある。その上には日光がわずかにあれば育つ樹木類が群生しており、そこで育てた作物（主に根菜類。葉物野菜は高級）や大地水湖でとれる魚が名物。氷室で熟成された酒もうまい。あとは輸入が主。ダンジョンから食べられる魔物（少ない）の肉をとってくと高値で買ってくれる。

・迷宮も有名だが、冒険者のランクは高位でも青や銀がほとんど。

#### ■ガルーダ便

・有翼人の一部族、ガルーダ族が営む世界最速の宅配業者。大きな都市へ行けばだいたいある。

・ガルーダ一族は有翼人の中でも飛翔速度は最速。

#### ■冒険者証

- ・硬貨の形をしている。
- ・身体能力と魔力総量から強さを色で表現できる（練度）が、技術力での強さは測れない。
- ・実績は宝石を用いた文字で刻まれ、記録する機能を備えている。加工は冒険者ギルドの妖精にしか出来ないため偽ることは出来ない。
- ・一定期間実績が無いと妖精王のもとに返還される。
- ・冒険者ギルドのマスターは妖精王。
- ・等級が上がるとオプシヨン機能の追加が可能。無実績期間の延長や、銀行機能など。

・ランクは全部で銅金（どうがね）、赤金（あかがね）、青金（あおがね）、銀金（ぎんがね）、黄金（きがね）、白金（しろがね）、黒金（くろがね）の計7つ。銅が一番下で黒が一番上。

・10のランクで区分けされている。（練度+実績でランクが決まる）

・白金級は世界で100人もいない。黒金はさらに少なく、20人ほど。

### ■迷宮（ダンジョン）

・迷宮魔物が徘徊する迷宮。魔物を倒すと肉体は消え去り、あとにはアイテムが残っている。加食部意などを得るためには命を絶つ前に体から切り離すことが必要。

・妖精王が冒険者ギルドを作った目的は厄災の魔王に対抗できる人材を探す、育てるに加えて迷宮に眠る謎を解明することが目的。あと宝。なので冒険者ギルト、迷宮の攻略を冒険者の仕事としてめちやくちや推奨している。

・かつて世界から去った神の遺産とも、厄災の魔王が猛威を振るう以前の文明が残した叡智の結晶などと言われている。諸説あり。

・見た目通りの大きさだったり、明らかに見た目より大きな空間が広がっていたり、いつのまにか中身が変わっていたりするらしい。

## ■職業

・魂の指針、魂の力とも言えるその力を生涯をかけて磨き、鍛え上げる。誰に言われたわけでもなく進化のための本能で。高位の職業を極め魂を鍛え上げた者が属する種族は全体にその力が伝播し、より高位の存在へと昇る。

・職業階級が全部で十段階。その十段階級中、五段階から上に行きなおかつ維持するのは結構難しい。

## ■迷宮内の仮設トイレと分解紙（賢者カリユキオスの功績）

・迷宮内には魔力を用いた工作技術、魔技術によって作り出された「仮設トイレ」が専門の業者によって設置されている。

・迷宮の奥や新規で見つかった場所に設置するほど報酬が高くなるらしい。ものがあっても設置にはそれなりに知識が居るため専門業者以外が取り扱う事はほとんどない。

・迷宮自体の魔力を吸い取り存在を維持、使用者の魔力で補強し使用可能となる。

・使用者の気配を薄くし魔物を寄せ付けないし排せつ物を分解し、消滅した迷宮魔物と同様に迷宮へ魔力として還元する。その簡易版が分解紙および探索用の下着。

・探索用下着：基本使い捨て。排せつ物を受け止めた後に魔力に還元こそしないが無臭の砂のような物質に分解、変換して専用の付属袋にたまる。その分解紙を更に効果を薄くして量産、安価となった代物がこの世界の女性が多く愛用している生理用品（ナプキン）。流通し始めた同時期から女性冒険者の台頭が目立ち始めた。

## ■冷凍魔術の魔技術化（賢者カリユキオスの功績）

冷蔵と冷凍の魔術を家電製品のごとく誰もが使える形にしたもの。

## ■黒星草（こくせいそう）

世界の土壌全てから魔力を吸い、厄災の魔王の糧とする魔草。厄災の魔王が生きている内は世界中に群生している。燃やしても引っこ

抜いても切っても薬品をかけても枯れない厄介な草。

■ 技能【乙女の口づけ】

ミサオの体液は現在それそのものが回復の力を有しており、口という最も精気の出入りがし易い場所と唾液を介して力を注ぐことである程度無条件で癒しを与える。【職業・女神】まで上り詰めることが出来れば、不治の病も癒し瀕死の怪我でさえも一瞬で回復することが可能である。

現段階では対象とのレベル差が大きければ大きいほど回復値も大きくなるが、そもそもミサオのレベルが高いので大体の怪我は治せる回復チート。

■ 【職業：探求者】

索敵やアイテム探し、マツピングに優れたスキルを得ることが出来る職業。職業適性を得られる場合が少ない。結構なレア職業。

## 四章

### 45話 ▶ 世界の形く異世界はやはりちよつとおかしい



今日は天空都市へ向かうにあたって、この世界と俺が居た世界の違いについて少し記録しておこうと思う。

俺が異世界転移してきたこの世界だが、元居た世界の常識は基本的に通用しないものだと思っている。

それが何故かといえば世界の構造そのものが違うからだ。

異世界なんだしそりやそうだというものだが、旅をしているとその事実をもつごく分かり易い形で目の当たりにする。

俺は旅する過程で”人族領”を出た時、早々に目を丸くした。もはや懐かしい記憶である。

宇宙があつて、空があつて、大地があつて、海があつて、俺達が住む星は丸くて太陽の周りを回ってる。

そんな常識からしても通用しないのがこの世界だ。

とはいえ俺も義務教育の中で得た知識を信じているだけに過ぎず、実はこれまで学んだ常識も情報操作されて元居た世界の本当の姿も知らないとか、そんな可能性だってある。

それはもう確認のしようもないのだし、考えるだけ無駄なのだが。

ともあれ、世界の形である。

この世界では多様な種族が暮らしているにも関わらず、種族同士の戦争というものがほとんどない。

あつたとしても小規模から中規模なもので、俺が知る戦争と言えるような大規模なものまで発展しないようなのだ。それは何故か。

厄災の魔王という定期的に表れる共通敵が居ることも大きな要因だが……単純に住んでいる土地が離れすぎている、というのが大きな理由だと思う。多分。

人族、獣人族、妖精族、エルフ族、竜族、有翼族、魔族……などなど。生活形態や寿命や考え方、信仰。

それぞれ違う種族が一つの場所に暮らしていればいくらでも諍いは置きそうなもんだが、この世界は“一つの場所”と定義するには広大だ。

多様な種族がそれぞれ本拠地とするエリアを持っており、多くの場合その中で生活が完結している。

でもって、その離れ方つてのが単に距離が離れているというだけではない。

区切られてるんだよな、この世界。

この世界の大地は全てが繋がっていない。

いや、繋がっているといえば繋がっているのだが。その形はとても不思議だ。

俺のいた世界では海で隔てられている大陸や島だが、この世界ではその海ごと。もっと言えば空も含めた“区画”全てが“空間”で隔てられている。

いぎ文字にして書こうとすると少し理解が難しい。

なんて書けばいいんだこれ。

広大な空間があるとする。

そこに大陸や島にあたるものが浮いていて、付随して海や空がある。それを植物の根のようなものが繋いでいるといえば良いのだろうか。

根というにはいささか大きすぎるし、形はともかく材質は鉱石や不定形のスライムのような謎物質やら様々であるのだが。

転移魔術を使ったり空を飛行しない場合、その根を使い上へ下へ、もしくは平行に他エリアへ移動するのだ。

エリア間の移動さえしてしまえば、その中での移動はそう難しくないんだけどな。

上へ下へ、と言つても何処が空間の上部で下部かは分からない。上へ昇れば下から出るし、下へ下れば上に出る。

だからこの世界は大地という形ではないにしろ、何かしら繋がってはいらんだろう。

月やら太陽やらエリアごとに変化する上に、下手したら近づけば三日月に座れるような場所もあるから宇宙って概念があるのかすら不明だが。

距離感や法則がちよいちよいバグってんだよな。

そしてこれから向かう予定の天空都市は、空が大部分を占めるエリアに存在する。

大陸や島と言える規模の安定して地につけて移動できる場所がほとんどなくて、空を飛ぶ手段を持たない者にとってはなかなか困難な土地だ。

土地という言葉を使つていいのかもよくわかんねえよ。

以前は散々恐れおののいた場所だが、さすがに経験を積んだ今となつてはビビることはないはずだ。

弟子も居るわけだし、迷宮という大きな目標もある。ここは堂々としたところ見せないとな！

【俺のチートハーレム記 ○ページ目より】





「……………」

「うふふ、ミサオ様だったら。そんなにくつつかなくても大丈夫ですよ」

「ははっ、ミサオは相変わらずだね。以前も私から手を離さなかったもの」

俺は魔王をも倒した男である。そして黒金級冒険者だ。

ベテルキクスへ行くために大渓谷を下りていくときもビビったりなんかしなかった。

俺は強い。この間ってすごい功績を積んで一気に冒険者としての格をあげたし弟子だって出来た。

尊敬されてる。そう、俺は強い。

なのに……。なのにいいいいいいイツ!!

『なにそれ自己暗示？ だっさ』

(自己暗示じゃないが。事実だが)

『でもビビらないように自分に言い聞かせてるんだらう？ だったらそれは自己暗示だよ』

魔王の言葉に何も返せなくて心の中でも黙るしかなくなった俺は、嫌でも目に入ってくるその光景を見て顔を引きつらせていた。

下を向いているはずなのに空を見上げているような……。眼下に底無く続く、空と雲しか見えないその光景を。

現在俺は転移した先……足場にはいささか小さすぎる浮遊する大地の上で、シャテイにしがみつきながら膝をがくがく震わせていた。

そんな俺の様子をこてんつと首を横に傾けるといいうあざとい仕草で問うてきたのはルキだ。

「師匠つて……高い場所、駄目な人なんですか？」

「高いとかそういうレベルじゃないんだよなあ!! ルキ、逆になんてお前平気なの!？」

「平気じゃありませんよ。けど師匠の怖がり方見ていたら逆に冷静になったといえますか……」

「は、はあ? 怖がってねえし」

思いのほか弟子が強かだったので思わず虚勢を張る。

が、それは秒でバレたらしい。

「ミサオ、流石にそれは無理があるよ」

「が、ガーネツタ姐さあん」

「そんな声を出されてもねえ……」

「ミサオママ大丈夫? まかせて。モモがちゃんと落ちないように見ているから」

「さ、サンキュな。モモ……あはは……」

しれっとしている他メンバーに信じられない気持ちになる。

この光景を見たら地に足をつけて生きる生物として恐怖心を抱くのが普通じゃないのか?

俺はこの場所において最も安心できる有翼族シャテイの腕に抱き着く力を強めつつ、恐る恐る飛び石の様に点々と浮かぶ足場を移動する。

俺だって飛行魔術を用いて飛べないわけじゃないが、だからといって怖くないわけでもないんだよ!

すでに視界内に捕らえている天空都市の入り口が、どうしようもなく遠かった。

46話 ▶ 一方その頃、花婿志望共（ルリル、アルマデイ才視点）

「……っ」

白い肌に刻まれた裂傷に押し当てられる薬に濡れた脱脂綿。沁みたのかわずかに眉根をよせたのは、一見愛らしい見た目の幼女だ。

だが傷のある胸元には脂肪によるわずかなふくらみもない。

未発達ゆえ……というわけでもなく、その理由は彼の性別によるものだ。

ルリルベレス・ファアレン。

竜王の子息である彼は、現在薄明るい洞窟の中で怪我の治療を受けていた。

ルリルベレスは傷の治療をしている自分の付き人をじろりと睨むが、付き人……マイヨールは涼しい顔で治療を続けている。

しかし何分も睨まれていたからか、ようやくマイヨールも口を開いた。

「ルリルベレスぼっちゃま。あまりご無理をなさいますねよう」

「ルリルちゃん様」

「……ルリルちゃん様。あれはおそらく魔王軍の、それも上位に属していた魔族です。加えて周囲には配下の魔物も多くいた。正面から戦うには分が悪い相手でした。私に相手の力量を見極めてから行動しろとおっしゃるのでしたら、ご自身もまた当然そうしてしかるべきかと」

「またお小言お？ ルリルちゃん様は勝手に転移したことに対する謝罪を聞きたいんだけど」

「ルリルベレスぼっちゃま」

「……………」

訂正されたはずの呼び名を再度直されて、ルリルベレスは付き人の有無を言わせない態度に押し黙る。

そして近くに積まれた血だらけの包帯をチラと見たあと、苛立たし気に言葉を吐き出した。

「わかってるわよ」

「分かっただけでないから申し上げているのです。結果その傷を負ったのではありませんか」

「……………」

「花嫁を追いかけたい気持ちも分かりますが、せめて癒えてからにしてください。でないと本当に一度連れ帰りますよ」

「……………ふんっ、だ」

淡々と正論を述べる付き人から顔を背けると、ルリルベレスはこの傷をつけてくれた魔族を思い出し歯ぎしりした。

「本当、やってくれるじゃない……………！ 次に会った時はこうはいかないわよ」

数時間前ミサオ達にまわりついていたらルリルベレスだったが、その実かなりの深手を負っていた。

それは先日ミサオを挟んで対峙した相手……………魔族アルマディオによるものである。

矜持の高いルリルベレスはそのことに気付かれぬよう振舞っていたものの、様子を見ていたマイヨールがこれ以上はいけないと判断し転移を試みたのだ。

建前として竜王の元に一度帰らねばならない、などと述べたがそれは半分真実。半分嘘である。

獣人で鼻の効くモモにもばれないようせつかく工夫をこらしてからミサオ達に追いついたルリルベレスはいたく不満げだったが、これ以上言えば本当に実家に連れ戻されるだろうと口を噤むしかなかった。

普段ならばこの付き人を撒くことなど容易だが、現在自分はひどく

弱っている。それをルリルベレス自身も把握しているのだ。

だがこのまま黙っているのもつまらないと、すぐに意識を切り替えたルリルベレスはぱつと表情を明るくする。

「でもでも、あんな上位魔族にまでお嫁さんとして狙われてるってことはあ。やっぱルリルちゃん様の見る目は大したものじゃないかしらあ〜?」

「ミサオ殿ですか。確かに私の襲撃にも動じないどころか見事に返り討ちにしてくださいましたし、お強い方ですよね」

「ね。ビツクリよね。なんかさらつとやってたけど、普通に死んだと思っていたわ」

「殺す気でしたからねえ」

物騒なことをこともなげに話し合う竜人族の二人だが、彼らにとつて人族などせいぜい愛玩動物程度の認識である。

多少の手違いで命を刈り取ってしまったおうが、愛着もない相手なら罪悪感の字すら湧いてこない。

良くてちよつぴりかわいそうだなあと思うくらいだ。

しかしルリルベレスは、その愛玩動物でしかない人族の中から竜王族の掟により花嫁を選ばなければならない。

「いい子が見つかってよかったわ。あの魔族なんか絶対あげないんだからっ」

「ですがルリルちゃん様。彼女たちとの会話を聞いていて思ったのですが、ミサオ殿ってルリルちゃん様の性別が女性だったら”有り”みたいなこと言ってますでした? ……彼女、女性が好きな方なのでは?」

マイヨールの言葉を聞いて一瞬大きな目をさらに大きくしたルリルベレスであったが……。すぐにふんつとドヤ顔で鼻息を噴き出した。

「問題ないわね! ルリルちゃん様の愛らしさは天の輝き海の慈愛大地の抱擁! あの男男した魔族なんかは望みがないでしょうけど、こ

のルリルちゃん様が性別ごときに阻まれることなどありえないわ！  
だって、見てた？ 口では拒否しながらルリルちゃん様を見るミサオの目、とおっても揺れていたもの。あの子絶対に押しに弱いから、どンドン押ししていけば確実にルリルちゃん様の美にひれ伏すわっ！」

「はあ……」

「なによその気が抜けた返事は。あなたはもつと主の美しさを誇りなさいー」

「誇ってますよ」

「本当？ なんか軽いのよねえ」

マイヨールは「けっこうな深手のはずなのに元気な人だなあ」と思いつながり治療を終えると、主にある場所を示した。

「処置は終わりましたので、あとはこちらに浸かって療養してください。一応呪痕ですからね、それ」

「まったく厄介なものを……」

示された先はまるで星光る夜空が溶けたような湖だった。

洞窟の中がほんのり明るいのは、この湖が発する光によるものである。

「ここは竜の王族が所有する治癒の湖なのだ。」

「ま、ここで傷を癒しつつ更に美しさに磨きをかけちゃうとしましょうか。マイヨール、ミサオ達の所へはいつでも行けるのよね？」

「はい」

「ならいいわ」

ルリルベレスは満足そうに頷くと、体を癒すためにその身を湖に沈めていく。その体はいつの間にか少女じみた華奢な体躯ではなく、雄々しくも美しい巨竜の姿へと変じていた。

（ふっふっふ。でも、忌々しくも燃えるわね。奪い合う恋、嫌いじゃないわ！）

（あ、懲りてないなこの人）

魔族アルマディオ・カーネリアンはじくじくと痛む腕を押さえて瞑目していた。

その眉間には深いしわが刻まれている。

「あの竜人め……！」

ぎりつと歯を噛みしめ思い出すのは先日対峙した竜人族。

愛らしい子供の姿をしていたがその実力はなかなかのものだった。しかしアルマディオにとってはそれほどの脅威ではなく、実際こちらが圧倒しての勝利。

……しかし最後のあがきだけが予想外であり、油断した自身にもまたアルマディオは苛立っていた。

「くっ、僕が……俺様があんなガキに。しかも付き人に古代竜の先祖返りだと？ 奴め、何者だ。まさか竜王族か？ 引きこもりのデカブツ共が、魔王様が倒れたからといってさっそく調子にのりよって……！」

ぶつぶつ独り言を言いながら爪を噛むアルマディオを、黒い翼を生やした魔族のメイドが心配そうに窺っていた。

ここは元魔王城の一角。魔王軍の拠点だ。

魔王が倒れてから多くの魔族が去っていたため人口密度は減ったが、その威容は未だ健在である。

アルマディオは現在、その内部にある自室で怪我の治療を行っていた。

花嫁にと望む女を挟んで対峙した金髪の竜人はとにかく諦めが悪く、一方的に叩きのめされているにも関わらず引く様子を見せなかった。

今思えば初手であの者はアルマディオと自分の実力差を的確に読み取り、油断させる方向へ切り替えていたのだろう。

余力を残し致命傷を受けないまま、アルマディオが完全に自分が有利だと思った瞬間……竜の咆哮と共に放たれた極大の熱線に焼かれた。

しかも背後から竜人の付き人らしき者が襲ってくるという二段構えで、忌々しくもアルマディオは格下に傷を負ったのだ。

傷を負わされただけで帰すものかと、アルマディオもまた相手に傷を負わせた。

それもただの傷ではなく、呪いを込めた一撃である。逃げられはしたがしばらく動くことは困難だろう。

思わぬ邪魔が入ったせいでせっかく用意した式場もドレスも指輪も全てが台無しになった。

しかしアルマディオにとってそれらは再び用意すればよいもので、さほど問題ではない。

問題があるとすれば、それは未だに名前も聞けていない花嫁を見失ってしまった事だ。

”何故か”アイゾメミサオと同じ魔力をしているため最初はそれを追っていたが、竜人との戦いの余波で魔力の痕跡が吹き飛びそれも出来なくなってしまった。

配下の魔物を探索に向かわせているが、すぐに会いに行けない状況がひどくもどかしい。

(ああ……今思い出すだけでも痺れが走る、体が疼く……ッ)

苛立ちながらも、すっかり惚れこんでしまった女との出会いを思い出せば体が熱くなる。

魔王の仇であるアイゾメミサオを追った先で出会った女。



アルマディオは今のところ彼女がアイゾメミサオの妹か姉ではないかと推測していた。

それならばアイゾメミサオの仲間と共に居るのも、アイゾメミサオと似た魔力を持っていることも納得がいく。

おそらく魔王との戦いで深手を負った兄弟をかばうために、自らがアイゾメミサオなどという苦しい言い訳をしていたのだろう。

健気な事だ、とアルマディオは笑みを浮かべる。

その推測は完全に的外れなのだが、宿敵が魔王との戦いを経てなお深手どころかピンピンしており、あまつさえ女になっているなど考え付く方が難しい。

本人が今どこにいるかは分からないが、現在のアルマディオの優先順位は彼女である。

折れた角の断面をなぞる。

……まさか自らの生涯で異性に折られるとは思ってもしなかった。

異性の角を折るのは魔族にとつて最大級の求婚。

アルマディオはその慣習を馬鹿にしながら生きてきた方だったが、実際にやられてみて思い知った。

あれは落ちる、と。

まず魔族の角とは早々に折れる強度ではないのだ。

更に言うなればアルマディオほどの強者ならばなおのこと。それを可能とした時点で相手の力量が測れるというものである。

その上、あの女は使い手が少ない魔術装甲を高水準で使いこなしていた。途中で何故か砕けていたが、それは些末なこと。使いこなせる、という時点ですでに素晴らしい。

自身に並ぶ者などアイゾメミサオくらいだと思っていたが……同等に近い実力で、しかも勘違いとはいえ自分に求婚してきた、性別雌！

自身の伴侶にこれ以上相応しい相手もおるまい。

角を折られた後の猛攻も見事だった。

叩き込まれた拳の感触を思い出し、アルマディオは頬を染めて傍か

から見れば気味の悪い笑みを浮かべる。

「くくく……い！ 待っている。今度こそ我が花嫁に迎え入れてくれよう！」

こうしてミサオのあずかり知らぬところで、厄介な花婿志望共がまったく諦めを見せず心を燃やしているのだった。

## 47話 ▶ 天空都市マシユラバく剛腕マイペースと現実逃避

俺がこの世界に来た時に手に入れた能力は”レベルアップ”。

俺にしか認識できないレベルという概念の元、あらゆる経験値を十倍で取得できる。

更には一度強くなったらいくらサボろうが弱くならないというのも、この能力の大きな特徴だろう。

身体能力と魔力保有量からおおよその強さを色で表現する妖精王作の冒険者証と違い、俺のそれは技量も加味した上で明確な数字として強さをはじき出す。

ゲームなどと違うのは、自分以外のレベルを知るには一定以上の好感度みたいなものが必要になってくることだ。

だから敵や、初対面もしくは親しくない人間のレベルは知ることが出来ない。

この辺の詳しい理屈は知らないが、そもそもレベルアップ自体の能力内容も臆げに掴んで名前を付けているにすぎない。

自分の能力ではあるものの、よくわからない部分はそこそこあるのだ。

そしてレベルを把握するには目視するだけでなく、ちよつとした所作が必要であり……。

「す、しゅ、すてーたす、オープン!!」

『何照れているんだい。噛んだよね? 今』

「うっせええ! いぎ元の世界を知ってる奴に見られると、こう。こそばゆいんだよ! 分かれよー!」

『あはは。分かってて言ってる』

「て、てめえ……！」

……なんて魔王とやり取りしたのはちよつと前。

魔王を倒してから自分がどれくらい経験値を得てレベルアップしたのか確認を試みた時だ。

その倒したはずの魔王におちよくられながら確認するのがすげえ腑に落ちなかったけど。

そう。俺が自分に備わっている能力を知るために試みたのは、異世界転生とか転移ものとかでよく出てくるステータス表示！

実際やってみたらドンピシャで、最初はテンション上がったものだ。

しかし元ネタを知る同郷の奴に見られながらのそれは、まあ恥ずかしくてな……。

こういうのは恥ずかしがる方が逆に恥ずかしいから堂々とやればいいものを、魔王の前ではかなり中途半端になってしまった事が今でも悔やまれる。屈辱だ。

ともあれそんなこんなで俺が可視化できるようになった”レベル”だが、これは三つの強さに支えられた総合力を指す。

身体能力。

魔力保有量。

技量。

その合計値がレベル。

表示されるのはこの四つだけだ。

こうげき、しゅび、すばやさ、こううん。などは出てこない。

仲間達のレベルはシャティが八十八、アシユレが七十五、モモが六十七、ガーネットが八十四。

新参のルキがレベル二十五であることも添えると、このパーティがいかにか強い数字で示すのは簡単だろう。

でもって魔王討伐前の俺はレベル九十九。ゲーム脳が抜けきらず、

正直これでカンストだと思っていた。

この時の内訳が【身体能力：四十】【魔力保有量：四十】【技量：十九】。

しかしいざ確認してみれば……我がことながら、目玉が飛び出そうだった。

現在の俺のレベルは百五十六。

……魔王討伐により、元のレベルの半分以上もレベルアップしていた。

経験値十倍取得があるにせよ、魔王どんだけ経験値の塊だったんだよってなる。

というかそれだけの経験値を得られる魔王のレベルって、結局いくつだったんだ!?

カンストうえうえ! って喜んでいたつもりだったけど、レベル十九が最高値でないなら、もしかして俺とんでもない格上に挑んでいた可能性が……いやいやいや。

実際倒せたんだし、そんな事はないはずだ。そう、魔王が経験値の塊なお得仕様なだけだったって!

とかなんとか考えていたら、その魔王本人が話しかけてきた。

『いつまで現実逃避してるんだい?』

(いや、してねえし。己を振り返ってるだけだし)

『君、本当に強さに精神力が追い付いてないよね。そういうの何回目?』

(うるせえ!! こういう場合は、その。緊張するだろ普通に……!)

思考の底に沈んでいた俺を無遠慮に呼び戻した魔王のせいで、現状に嫌でも目が向く。

……まあ、あれだよ。悔しいけど魔王の言う通りだ。  
いくら破格の強さを手に入れたとしても、俺は中身が釣り合っていない。

圧倒的に！ 人間力が！  
足りねえんだよおおッ  
!!!!!!

「ミサオ様、そう緊張なさらず」

「き、ききききききき緊張？ いや、してないし？ 大丈夫だぜ……だぞ、ですっ」

気づかわし気に俺を覗き込むシャティに虚勢を張ろうとするが、面白いくらいに失敗した。面白くないけどな!!

ガチガチに緊張している俺と違ってアシユレは優雅だし、ガーネットは堂々としているし、モモはいつものマイペース。

唯一ルキだけが俺と同じく緊張しているが、高所にビビっていた俺を見た時の様に「自分以上にビビってる奴を見ると落ち着く」現象なのか俺よりか冷静に見える。先にビビった者が負けというやつだ。

ち、ちくしょう！ 師匠としての威厳が！

どうして俺がこんなに緊張しているかといえば、現在針の筵むしろにされているからである。

針は針でも、視線の針。四方からグサグサと刺さっている。

現在俺達が居るのは東京ドームくらいの広い空間で、観客席のような場所には有翼族達が一糸乱れず整然と並んでいた。

これだけたくさん居るのに話す声どころか衣擦れの音すらなくて、静寂が耳に痛いくらいだ。

自分の鼓動の方がよく聞こえる。

天空都市マシユラバに到着した俺達だったのだが、入り口の門番が真つ先にシャティに気が付いた。

そしてあれよあれよという間に恭しく都市中心にある長の居城へ招かれて、流されるままに風呂で体を磨かれ（有翼人のお姉さま方が体を洗ってくれたがラッキーとか思う以前に羞恥で死にかけた）正装っぽい服に着替えさせられて「長がお会いになります」とか言われてこの場所に放り込まれたってわけだ。

シャティが言つてた買い物してる暇ないって、こういうことかよ!?

しかもこの正装、当然のごとく女物なわけで。シャティ達有翼族の伝統の衣装だけあつて背中がぼっくり開いている。

翼の動きを阻害しないため……だっけ？　なんというか、翼なんて優美なもの持ち合わせていない俺としては着ていて非常に背中が心もとない。すーすーする。

慣れない服装の上に案内された場所が神聖で厳肅な雰囲気の大ホールで、多くの目が俺達だけに向いている。

その中でこれから偉い人に会うとなれば……緊張するだろ!!

少しくらい現実逃避させてほしいもんだが、継るものがチートで強くなったレベルであるあたり俺の人間力の底は浅い。

結局「いくら強くなつても人としての強さは早々に得られるものではない」という事実に行きついただけだった。

だつて！　今まで冒険者らしく！　冒険ばかりだったし！

立場ある人に会う時も！　仕事の依頼とかで！　こんな雰囲気初めてだし!!

高校生で異世界転移したしバイトもろくにしたことなかったから面接すらほぼほぼ未経験な社会人初心者だぞ俺は!?　難易度高いつて！　公的な場面の経験少ないんだつて！

うえああああああん！ 人の視線が怖いよーーーー！！

『君、幼児返りしてない？』

(いつそ赤ちゃんになりたい)

『思ってたより重症』

おちよくつてくる魔王に返す余裕もだんだん消滅してきた。

考えれば考えるほどドツポにはまる俺だったが……そんな俺の肩にぽんつと手がかけられた。アシュレだ。

「ミサオはこういつた場は初めてだものね。緊張するのも無理はない。でも、安心して。私がついているから」

「あ、あしゆれ」

い、イケメン〜！ スパダリ〜！

【メスメロリンっ♪】

(くそがよ!!)

長年頼りにしている先輩冒険者の風格に安心した途端に鳴ったまぬけ音に床ダンしたくなった。

『忙しいねえ、君も』

自分でも思ってるわい！ とキレそうになりつつ……メス堕ちポイントが溜まる音のおかげとは死んでも思いたくないが、感情が高ぶったからか多少緊張が取れた。

これから俺は世界を救った英雄として有翼族の長に会う。

今は一族への報告をするというシャテイの目的のために有翼族にしか言えないが、男に戻れば大々的に魔王を倒したのは俺！ と言って回れるのでこういつた機会も増えるだろう。

今はその予行練習と思って、堂々と長に対峙せねば。シャテイに恥かかせるわけにもいかないしな。

……思ってた以上に人に見られたのは計算外だけど、そこは長さん



によく話して口止めしてもらえばいいだろう。うん。

俺がそう腹を決めていると、静寂を裂いて流麗な音楽が流れ始めた。

「有翼族が長、メルバティア・エラルディア様のお越しです」

シャティの声に顔をあげると、ドームの天井……一部青空を覗かせているその場所から羽が舞い降りてきた。

それはシャティと同じく純白の羽で、まるで雪のようだ。その後を追うようにばさつと羽ばたく音が聞こえ、大きな翼をもつ有翼人の女性が現れる。

彼女はゆつくりと中に入ってくると、ドーム中央にある玉座のようなものに腰かけた。

……長つていうから厳めしいおじさんを想像してたけど、結構若いな。しかも美人！

ちよつとシャティに似てるかも？

「……英雄殿よ。待たせてしまい、申し訳ない」

「あ、いえー！」

急に話しかけられてビビった。

「私はメルバティア・エラルディア。有翼族の長を務めております」

「あ、藍染芽 操です。その、操が名前、です」

名乗られたので反射的に名乗り返すと、横に居たシャティが一步前に出た。

そのまま跪いて頭を垂れるので「え、俺もそうしたほうがいい!？」と焦るが、アシユレが「君は客人であり、英雄だ。膝をつかれても向こうが困るだろうから、そのままでもいいよ」と声をかけてくれて胸を撫でおろす。

よ、よかつた。アドバイス助かる〜！

「メルバティア様。英雄探し、ひいては英雄を補佐し魔王を討伐する任を終えてシャティ・ティティシエル帰還いたしました。そして彼……ごほん。彼女が魔王討伐の功労者であり、英雄とされたミサオ様です」

「巫女姫シャティ・ティティシエル、よく使命を果たしてくださいましたね。大儀でした」

慈愛のこもった笑みを浮かべた長さんは（名前長くて一発じゃ覚えらんねえ……）シャティに労いの言葉を述べると、俺に視線を向けた。そしてそのまま玉座から席を立ち俺の側へとやってくる。

ふわり、と花のような香りは鼻腔をくすぐった。

「ミサオ殿。よくぞ厄災の魔王を討伐してくださいました。僭越ながら命を救われた生命全てを代表して、感謝の言葉を述べさせていただきます」

「いえいえ、そんな。まあ、俺にかかれればちよちよいのちよいつすよ〜！」

いざ近くで見たらマジのマジで美人だった。

あとおっぱいでけえ！ 背が高い人で俺が今縮んでるからおっぱいが俺の目の前にある！！

さつきも美人さんに世話してもらったが、体を洗われる緊張で鼻の下伸ばす余裕はなかったからな。

手を取られてふわっと笑われたら、こう。包容力？ みたいなやばくて。ついデレデレと調子のよい事を言ってしまった。

「むう……。ミサオ様ったら」

いつの間にか立ち上がっていたシャティがジト目で見てくるので咳払いをしてみまかした。

……若干、後ろの仲間達からも冷やややかな視線を感じる。

いやだって、このデカさとこの位置は見ちまうよ！ 男の子だもん

！！

「有翼族は貴女様を歓迎します。ささやかながら、宴を儲けさせてい

いただきますね」

「……………」

おおー！ 宴かあ。

せつかく世界を救ったのに誰にも言えなくて、仲間内での祝勝会以外そういうイベント無くて寂しいなーって思ってたし、これはお受けする以外ないよな！

……とか、俺はお受けする気満々でいたんだけど。

「……………」。あ、ミサオ様。この宴には出なくていいですよ。それより報告も済みましたし、さつさと迷宮に行っちゃいましょう」

「え、シャティ!? 宴やつてもらわないの!?!」

「ええ、そうですよミサオ様。……………そうそう、長。ミサオ様に大義に見合う報酬とわたくしにお小遣いた〜つくさん、くださいねっ！ 宴の費用をそのまんま頂ければそれでよいので〜」

「シャティさん!?!」

さつきまで長への敬意を表していたシャティが、すつげーフランクにとんでもなく大雑把な要求しはじめただけど!?!

驚いたのは俺だけではないようで、今まで静寂を保っていた有翼族達がざわつき始める。

言われた長さんとはいえば……………こめかみにぴくぴくと青筋を浮かべていた。

めっっちゃ怒ってるじゃん!?!

「シャティ…………。貴方という子は」

「あ、もう巫女姫の地位もおりますね！ 役目終わったので！ わたくしはこのままミサオ様の旅に同行します〜」

「そんなことは許しませんよ！ というかですね。ミサオ殿にはこのままとどまっていたら歓迎を…………」

「ミサオ様、ミサオ様。うっかり領いちゃいけませんよ？ 長は有益な血を一族に引き入れたいので、きつといい男をあてがわれてしまいますわ。ミサオ様は結構チョロくていらっしやるので、いくらお強くても酔わされたりなんなりで手籠めにされること請け合いです。メルバティア様やり手ですからね。かくいうわたくしも、英雄が男性な

ら籠絡して子を身籠れなどと言われていましたし」

「だからちよつと待とうかシャティさん!? 情報量多いよ!」

なんか一気にすげえ聞き捨てならない情報量を叩き込まれたんだけど!!?

手籠め……は? 何!? というか俺はチヨロくないが!? 少なくとも男にはチヨロくないが!?

しかしシャティは置いてけぼりの俺達などお構いなしに、両腕を広げて晴れやかに笑った。

「ご安心を、メルバティア様! このシャティ・ティティシエール。当初のご命令通り、ミサオ様と一生を添い遂げます! ええ、それはもう! 幸せになりますとも!」

「待ちなさいシャティ。英雄殿が女性の場合は……あ」

長さんは何か言いかけたが、先ほどのシャティのセリフからまあまあ想像は付く。

マジで男をあてがわれるとかあるの!? 嫌だが!?

そして混乱している俺にぎゅつと抱き着いたシャティは、止めとばかりに言い放った。

「ミサオ様はあ、女の子の方が好きですもんねー?」

「え、うん」

素直に頷いたら長さんが絶句してた。シャティはといえば渾身のドヤ顔である。

あ、いや、そのですね長さん。俺はもともと男で……。

「……というわけで! 用事があるので、わたくし共はそろそろ失礼いたしますわ。帰りにまた寄りますので、報酬とお小遣いをたっぷり用意しておいてくださいまし」

なにが「というわけ」なのか分からないが、無理やり会話を終わらせたシャティが俺を横抱きにする。

ふあ!? 横抱き!?

ちよつと待てポジシヨン的にはシャテイのお胸様が非常に近く役得なのだが姫抱きは俺がする側じゃない!? そうあるべきじゃない!?

アシユレの壁ドンといい、なんでことごとく俺がやりたい側の動作が女の子に奪われて俺がされる側なの!? おかしくない!?  
が、シャテイは俺の混乱など何のその。

我が道を行かんとばかりに、マイペースにドレスアップした仲間達に呼びかけた。

「みなさ〜ん! 迷宮までご案内しますので、わたくしの後についてきてくださいな〜」

顔を見合わせる仲間達。

だか彼女たちの切り替えは、俺なんかよりよほど早かった。

「シャテイ、突然過ぎだ! あとでよく話してもらおうよ!」

「やれやれ、なんだか慌ただしいねえ」

「シャテイ、いつも自分の事になると説明たりない」

「え、な、師匠は女の子が好き!? え!?!」

モモの天然マイペースと違い分かった上でごり押しする剛腕マイペースを発揮したシャテイは、俺を抱えたまま飛行して長さんが入ってきた青天井から外へ出て行く。

慌ててそれを追いかける仲間達を眼下に見つつ、俺は魔王に話しかけた。

(これ、なに?)

『僕に聞くなよ』

今日も空が青い。

最近、現実逃避が得意技になりつつあった。

## 48話 ▶ 幸せ花園計画（シャティ視点）

シャティ・ティティシエールはアイゾメミサオを愛している。しかしそれはつい最近……ミサオが女になってからの話だ。とはいえ、もともと好感度自体はあったのだ。それを阻害していたのは”男性”というミサオの性別。

シャティは女の子が好きだった。

有翼族の中でも白い翼を持つ白翼族はくよくは厄災の魔王を倒せる可能性を持つ英雄を探し出し、その英雄を補佐する使命を担っている。これは世界救済という目的の他、英雄を助けることで優先的にその血を一族に取り入れるという有翼族の生存戦略でもあるのだ。

魂の指針、および格ともいえる職業階級を高め、高位の職業をおさめた者が属する種族は種族全体にその力が伝播し基礎能力が向上する。しかしそれは何も同族でなくとも良いのだ。

優れた力を有する他種族を花嫁もしくは花婿として一族に迎え入れ、その魂の強さを子へと受け継がせる。そうすれば資質を受け突いだ子は同族とみなされ、長じれば結果的に種族全体が強くなれるというわけだ。故にその可能性を広げるため、子は多ければ多いほど良いとされる。

……とはいえ、同族以外で子を為せる他種族は”最も弱い”とされる人族のみであるのだが。

同族間でも縁が遠い種族。例えば草食動物の獣人と肉食動物の獣人では子ができにくいとされている。

個体値の水準が身体、魔力共に高く寿命も長い竜族などは同族間でも子が出来にくく、種族存亡のため定期的に”他種族と子を成せ”て”数における種の繁栄”を得ている人族の血を迎え入れる必要さえ

あるのだ。

有翼族もまた個体それぞれが優秀であり寿命が長い種族のため、同族間でも子が出来ることは人族に比べて少ない。しかし常に研鑽を続けより優れた種族となることに貪欲であり、そのために人族の中でも優れた者……英雄となりうるものを探すのである。

過去。厄災の魔王を退けた英雄や、厄災の魔王の呪いが猛威を振るったあとに現れた「女神」という職業を持つ者。実のところ、それらは全て人族なのだ。

人族以外の傑物の活躍が目立ち勘違いされることも少なくないが、いつの時代も必ず人族の英雄が要となっていた。そして比率的には女性より男性の方が多い。

故に、その優秀な血筋を迎え入れるために有翼族は“巫女”という役職を作ったのである。

英雄を補佐し厄災の魔王を退けるだけの優秀な人材が英雄と縁を結び子を成せば、より資質の高い子が生まれるに違いない……と。

有翼族にとってそれら一連の行為は非常に神聖なものとされていた。

中でも巫女姫は特別だ。

幼いころから巫女として才能を見込まれ選ばれた、数少ない者の中から更に特別優秀な者にのみ与えられる称号なのだから。

シャティはその巫女姫に十歳の時に選ばれた。

そして長きにわたり教育を施されていくのだが……その中には男を籠絡し悦ばせる手練手管も多く含まれており、それを学ぶ過程で男性そのものに嫌悪を抱くようになる。

何故素晴らしい資質を持つというだけで、顔も知らない男を悦ばせ子を生むためにこんなことをせねばならないのかと。

そんな中、シャティの目に映ったのはまだ何の汚れもない巫女の仲間達。



なんて可愛いのだろう。美しいのだろう。

そういった気持ちは成長するにつれて愛へと変化し……ある日を境に爆発した。

シャティは巫女仲間や他の有翼人の女性を籠絡する、魔性の巫女となったのだ。

ずば抜けて優秀だったがために英雄以外の男と恋仲になるよりマシだとギリギリ許容されていたが、シャティは恋多き女だった。

このままではいけないと英雄探しのための時が満ちたとみるや、すぐさま長がシャティを叩き出す程度には。

とはいえ、シャティは欲に忠実だったし男性に対し嫌悪感こそ持っていたが、使命感に対する意識は高かった。ゆえに自分の役割を強く認識しており、旅立ちの際には名残惜しむ恋人たちにキツパリ別れを告げている。自分の事は忘れて幸せになってほしいと。

これを聞いた者は一瞬「なかなか感心だな」と思うかもしれないが、それは間違いである。まず「恋人達」と複数の相手と目くるめく恋模様を繰り広げていたわけだし、恋人の中には同じく巫女の役割を持つ者も居た。彼女らはシャティと恋仲になった影響で巫女をやめており、長はひどく頭を抱えたものである。

しかしいくら恋をしようと、巫女姫の役割だけは放り投げなかったシャティ。彼女の使命感は厄災の魔王の脅威を旅する過程で実際に見るたびに強くなっていた。

英雄と子を設ける。その役割には嫌悪を抱くが、そんなものはこの脅威を取り払った後の話だと。

シャティは愛する者達が住むこの世界を、なんとしても守りたかったのだ。

そして彼女は、英雄となりうる者を見つけた。

「あなたの力は伝説の英雄様と同じです！　どうか、わたくしと一緒に魔王を倒してください！」

そう懇願した相手。初対面時、彼からの視線はシャティの胸に向いていた。

猫をかぶりながらも内心盛大に舌打ちしていたシャティである。

英雄を探すにあたって非常に便利であるためシャティもまた冒険者となったのだが、それは大正解だった。

有翼族とは違ったアプローチで厄災の魔王に備えるべく、妖精王が立ち上げた冒険者ギルド。その中で頭角を現すものに目をつけるのが最も効率的なのだから。

シャティが目をつけたのは短期間で最高位の冒険者証……黒金級くろがねを手に入れた少年。アイゾメミサオ。

最初から黒金ではなかったものの短期間での急激な成長に、ある日ぽつと現れたような経歴。それはシャティに過去の英雄が備えていた、ある能力を想起させた。

その英雄もまた異常な成長速度を誇り、しかもそれは単純な強さに限らずあらゆる職業クラスの資質を備えていたという……伝説の大英雄。

巫女として過去の英雄たちの知識も持っていたシャティは「この人だ」と確信した。

そしてその少年、アイゾメミサオはだいぶチョロかった。

後々もこの世界に帰れないことを知った直後の傷心状態だったと知ったが、魔王を倒してくれというお願いをあつさり引き受けたのだ。

厄災の魔王が振るう恐怖はあらゆる場所に広がっている。だといふのにあまりにあつさり引き受けられたのでシャティはお願いした身でありながら「ちよつとこの子大丈夫か」と少年のチョロさを危ぶんだ。

その後仲間になりたいたいと申し出た魔王軍の女魔族……ガーネツタをあつさり受け入れた時も非常に危ぶんだ。

強さこそ折り紙付きだと一緒に旅する過程で思い知ったが、信頼に比例してその危うさにどんどん心配する気持ちが育っていく。

悪い人間ではないが基本的に単純で、慎重かと思えば時々ものすごく大雑把かつ迂闊で見えていて危なっかしい。

それがシャティイからミサオへの評価だ。

……その根底に確かな好意が存在したのだと、はつきり分かったのはミサオが魔王の呪いによって女になってしまった時。

【職業・女】の魅了の効果も確かにあったのだろう。だがシャティイにとってはミサオが「女になった」ことが何より大きかった。

旅する過程ではつきりミサオへの好意は育っていたのだが、それがどんな形であれ。好意と認めることを阻害していたのは「嫌悪すべき男」という性別。

それが取っ払われた途端……シャティイの愛は噴き出した。

これまで仲間になった女性が全て魅力的なため、いずれミサオを落として子を孕まねばならない鬱憤を晴らすがためにミサオに見えないところで全力で彼女達を口説いていたシャティイ。

だがそのミサオが女になったのだ。

これはもう仕方のない事ではないだろうか？ もう一族の使命など知ったこっちゃなのでは？ 厄災の魔王は倒したんだし十分だろう！ そんな考えがシャティイの頭の中を駆け巡り、彼女はあることを心に決めた。

まず一族に魔王討伐を報告する際、巫女姫とかいう自らを縛る立場を捨てる。厄災の魔王の憂いは取り払われたので、使命の半分は果たした。十分だ。子供？ 知るか！

女になってしまったミサオだが、自分の代わりに一族の男を彼女にあてがわれることを考えるとふざけるなという気持ちになる。もういつそ連れ去ってしまおう。

自分にはもう白金級冒険者という世間一般で通じる立場がある。

一族と縁を切ったところで何も問題はない。

ミサオが男に戻るための協力はする。信頼を失わないためにここは真面目にやる。

しかしそれまでに自分が籠絡してミサオを女の子にしてしまえば何も問題はない。

女の子は最高だぞと教え込んでやればいい。

男に戻りそうになったらその肝心の瞬間を邪魔してしまえばいいことだ。

(そしていずれは、みんな一緒に暮らせたら最高に幸せでは？　ぐふふ)

……第一の迷宮を目前に、ミサオの知らない所でシャティの「幸せ花園計画」は着実に進行していた。

## 49話 ▶ 迷宮入り口く乙女の照れ顔は破壊力高い

「なんだよさっきの！ しかも迷宮行くって……俺もみんなもこんな格好だぞ!!」

突然謁見の場から連れ去られ、現在大きな滝の前に居る俺と仲間達。

流石というか、突然だったにも関わらず空を飛ぶシャティの後の的確に追いかけて……途中何度か見失っただろうに、みんなはちゃんと追いついてきた。今日も俺の仲間は優秀です。

けど着替えさせられた格好そのままで来たもんだからみんな冒険には適さない正装だ。

……というかさ。今はシャティに色々問いただす場面なんだけど、それ以上に気になってること言ってもいいかな。

さっきは緊張で突っ込むどころじゃなかったんだが、ルキお前……。

「ルキ。ちゃんと自分は男だって主張しないと駄目だぞ」

「ぼ、僕だって断りましたよ！ でもお仲間の皆さんと合わせた方がいいって有翼族の方達が……」

「そこで折れて流されてどうすんだよ!! 俺と違ってお前にはちゃんと玉も棒もついてんだろうがツ!!」

「ぐ、ごめんさしいい！」

頭を抱えて蹲るルキだったが、現在その恰好は薄緑色のドレスに包装されていた。髪飾りも添えられて、薄く化粧まで施されている。

ルキは確かに顔がいい。だが女に間違われるかといえば、まあギリギリありそうだけど服装と合わせて考えれば少年だと分かるだろう。だっていうのにドレス着させる有翼族どうなってるんだよ！ 主に倫理観とか!!

それに仲間と合わせるっていつでも……。

「逆になんでアシュレは男物なの？」

「こちらの方がお似合いになりますと言われて……ははっ」

「俺は弟子のドレス姿よりアシユレのドレス姿の方が見たかったよ!!」

そう。アシユレだけ女物でなく男性用の正装を着こまされていた。そこらのイケメンがモブに見えるくらい的美男子っぷりだが、俺としては普段から男装しているアシユレの可憐なドレス姿めちやくちや見たかったよ!!

「まあまあ、ミサ才様。ちゃんと着替えは持ってきてもらっていますから」

「持ってきて”もらって”……?」

首を傾げると遠くから何やら可愛らしい声が響く。

「お姉さま〜! 持ってまいりましたー!」

「まあ、フユリエ。ありがとうございます」

「お姉さまのためですから!」

上空から舞い降りたのは有翼族の少女で、それに続き何人か下りて来た。手には俺たちの荷物。

「シャティの妹?」

「いえ、この子たちは……」

「シャティお姉さまの元恋人で、今は親衛隊をしております!」

「!?」

元恋人という言葉にむせた。シャティはどこことなく気まずそうに頬をかいているが、説明のため口を開いたのは後から来た有翼族のお姉さまだ。

「シャティ様は愛多き方。たいくつなここでの生活に彩りを添えてくれた、ワタクシ共の女神なのです。使命のため旅立つとワタクシ共に未練が残らぬようにと別れを申し出てくださいましたが、たとえ恋人で無くなるうともシャティ様をお慕いする気持ちは永遠で神聖なもの。お役に立てるとあらば、いつでも力をお貸ししますわ」

「まあ、リュシャティ。そんな風に言ってくださるなんて……感動ですわ」

「シャティ様の愛が現在あなた様に向けられていることは我々も理解しております。ですがこの強固な絆は決して色あせないと……心に

とめておいてくださいませ」

「あ、はい」

なにやら目の前でキラキラした薔薇色……いや、この場合百合色？の空間が始まったなあと眺めていたら、俺の分の荷物を持ってきてくれた子に釘を刺された。

え、なに。俺はこれをどういう感情で受け止めればいいの？

ポカンとしている内にシャティの親衛隊を名乗る有翼族の女性たちは、名残惜しそうに飛び去って行く。俺達はそれをポカンと見送り……シャティを見た。

シャティはしばらくの沈黙の後、「てへっ」とばかりに自分の頭をあげとかわいくコツンと叩いた。

「まっ、細かい事はいいですよねっ。さくつと迷宮、行っちゃいましょう！」

「細かくないが!？」

持つてきてもらった服に着替えつつ（当然男女別れて遮蔽物を挟んでいる）シャティに話を聞けば、ぎっくり言うところだ。

シャティは自分の役割に誇りを持っていたが、厄災の魔王を倒せたので自分の使命は完遂されたものと見做した。ので、今後は自分のために生きると決め報告がてら役職……なんでも巫女姫とかいう巫女の中でも特別な存在だったらしいそれを返上しに来たのだとか。

でもって一族が英雄の血を取り入れたいと考えていたことは知っていたため、義務だけ果たしたらさっさととんずらする気満々だったようだ。

これからの自分の人生に愛する相手。俺の存在は不可欠だから自分以外の相手をあてがわれるのは我慢できないからと。

愛する者と言われ、今後のシャティの人生に俺を組み込んでくれている事は非常に嬉しい。嬉しいんだけど……。

「俺がもともと男で、男に戻るため行動してますって言ったらさ。少なくともあんな逃げるように立ち去らなくても、協力とかしてもらえたんじゃないか？」

「あ、そうか師匠は元々男だった……。だから女の子が好きって……  
そっか。なるほど」

「ルキ、独り言なんだろうが話の腰折るのやめてくれねえか!? お前  
まだ俺が男だつて認識出来てねえのかよ!」

ぼそつと弟子がこぼした一言について反応してしまったが、恐縮する  
弟子を横目に咳払いしてシャティの反応を待つ。

「……………」

「シャティ?」

しかしいつも明朗な答えを返してくれるシャティとしては珍しく、  
沈黙が続く。うつむいていたので確認するように下からその顔を覗  
き込んでみると……………」

「……………あの、その。ミサオ様に男が近づくと思ったら、とても嫌  
で。…………それ以外、なにも考えていませんでした…………」

「おや。聡明なシャティにしては珍しいね」

「もうっ、ガーネット。からかわないでください」

いつもの余裕のある笑みや暴走している時の圧がすごい満面の笑  
みではなく、恥じ入るように顔を赤らめぼつぽつと話すシャティに胸  
が疼いた。

「……………」

女の子のガチ照れ顔。アシユレの時も思ったけど、破壊力ありすぎ  
だと思う。

とか思ってたら。

【メスキュンりんっ♪】

「これは違うだろおが!!!!  
ときめいてるが!!!」

きゅんとしたけどさ!! ちゃんと男として

『今さらでしょ』

(お前がそれ言うなよ腹立つなこの元凶野郎!!)



普段とのギャップにときめく。それは恋として実に王道だと思う。でも今のは違うだろ？ 初めて聞いた音だけど、違うだろー!? もともとの判定ガバだけど!

俺がずっこけるように地面に頭突きしたままめり込んでいると、それを助け起こしたシャティがキラキラとした目を俺に向けてきた。

「まあー、もしかしてミサオ様、また女子力があがったのですか？

わたくしにときめいて？ まあ。まあまああ！ 嬉しいですっ！」  
「もぎゅっ」

感極まったシャティに抱き着かれてその幸せ谷に顔をうずめることになった俺。シャティ語である女子力（メス堕ちポイント）に一瞬混乱したため避けられず、その柔らかさに一気に思考がぶっ飛ぶ。

【メスエロリンっ♪】【メスキュンりんっ♪】【メスエロリンっ♪】【メスキュンりんっ♪】【メスエロリンっ♪】【メスキュンりんっ♪】【メスキュンりんっ♪】【メスキュンりんっ♪】【メスキュンりんっ♪】【メスキュンりんっ♪】

「シャティ、やめっ、やめて。うきやつ!? ほんとやめ、変な声出……っ」

「ミサオ様〜!」

幸せ谷に挟まれたまま体中を撫でまわされてバグが起きたようにメス堕ちポイントが溜まっていく。感極まっているのかシャティは俺の声など聞こえていないようだ。

「あわっ、あわわわわわ! そんな、ししよ、シャティさ……っ、わっ、そんなっ、あわ」

視界の端で弟子が顔を真っ赤にしてこちらを凝視している弟子が見えるがお前は見てないで止めろよ!!

しかし俺を助けてくれたのはそんな頼りない弟子ではなく……。

「シャティ、やりすぎだよ」

「ぴゃっ」

「シャテイ、やっぱりあつくるしい」

シャテイの脳天に涼やかな笑顔でチョップをかましたアシュレと、俺をシャテイから引き剥がしたモモ。おかげでやっの一息つけた。

「はあ……… はあ………ッ!!」

荒く息をするが、火照った体は一瞬で「これ、大丈夫？ また職業階級上がっていい？」という思考でざあつと冷め切った。

おそろおそろ魔王を顔を確認するが、奴は意味深に笑うばかりだ。このやろつ。

「終わったかい？」

唯一見物をしていたガーネツタはまるで子猫のじゃれ合いを見ているように笑うと、ついつと指を動かした。

「だったらそろそろ迷宮へ行こうじゃないか。シャテイ、この裏側だろう？ 入口は」

「……こほん。さすがですね。その通りですよ、ガーネツタ」

先ほどまでの興奮っぷりが嘘のように鳴りを潜めたシャテイは、俺にぱちんと可愛らしくウインクだけ投げよこすと滝へと向けて手を伸ばした。

【有翼族が元巫女、シャテイ・テイシエールが望みます。猛き水の本流よ。緩み綻び花開き、我らを迎え入れなさい】

それは絶対的な命令の言。単純な言葉の並びの中には幾重にも重ねられた魔術の音が混ざっていて、この一瞬で高度な術が構築された。

激しく流れ落ち水煙を上げていた滝の一部がたわむように揺れ、一瞬後に膨らんで中心から睡蓮の花のように開いていく。そうして一部だけぽっかり口を開けた滝の向こうには、封印紋が光る迷宮ダンジョンの入り口。

「ようこそ、天空都市の迷宮へ。……といっても、場所と難易度のせいでなかなか人は来ないんですけどね」

## 50話 ▶ 天空迷宮く馬鹿と弟子と密室



現在俺が手記をしたためているのは天空迷宮の中である。というのも迷宮を出て宿に泊まることも出来ず、一晩この中で明かすことになつたからだ。

一晩で済めばいいんだけどな。

滝裏の入り口から入つたこの迷宮。仮称として天空迷宮と呼ぶことにしたのだが、単純に天空都市の近くにあるからという理由ではない。

文字通り迷宮そのものが天空に浮いているからだ。

これはこれで単純だろと自分でも思うんだけど、ここまで見事に浮かれてるとそれ以外思いつかない。

そもそもこの天空都市が存在するエリアの土地は大小の違いはあれど全て空中に浮いているのだが、迷宮があるとしてもほとんどが「その土地内」に留まるはず。だが滝裏の扉……それは本当にただの入り口に過ぎず、そこを抜けた先にあつた階段を下りて驚いた。

土壁に挟まれた暗い迷宮内だというのに下から風が吹き抜けてくると思つたら、螺旋階段を進むと目の前に広がつたのは広大な空。

歩く場所そのものは魔術結界で覆われていたので落ちる心配は無かつたが、螺旋階段とそこから続く先。現在俺達が居る建造物まで伸びていた回廊は見通しが良すぎて、情けなくも再びシャティにしがみついて歩く羽目になつた。情けない。

でもつてたどり着いた空に浮く建造物だが、真つ先に思つたのは「なんだこの形」というもの。初手に選んだ迷宮がなかなかの曲者であることは、この時点から伺えた。

迷宮の形は端的に言うところ「真四角の匣が連なつたような物」である。いくつもの硬質な立方体キューブが無造作かつ無軌道につながつており、建造物というよりなにか生き物のようにも見えた。それにしちや角が

多いけど。

その形を見て真つ先に「迷宮に入ったらこの立方体が動いてパズルみたいに移動するのでは？」とゲーム脳で仮説を立てたのだが、一応ここは未踏の迷宮ではなく過去にそんな記録はないらしい。……とは、以前俺に生理レクチャーする片手間で事前にしつかり下調べをしてきていたシャティの言だった。

のだが。

忌々しい事に現在俺たちは迷宮内で分断されている。

俺が予想した通り、立方体ごとにブロックが分かれている迷宮が動いたことよって。

【俺のチートハーレム記、○ページ目の記録より】

■ ■ ■

そこまで記録をしたためた所で、俺は荒々しく手記を閉じた。

「どうした、浮かない顔をして。マリッジブルーというやつか？ 心配しなくともいい。俺様に任せておけば未来は薔薇色間違いなしだ！」

そりや薔薇色Bで間違いはないんだろうが、そんなもんお呼びじゃ無いんだよとブチギレながら俺は相手の腹に拳を叩き込んだ。

「……………ッ!!! あ、相変わらず愛情表現が過激だな君は。だがそこがいい。先ほどの攻撃もなかなか効いた。ところでそろそろ名前を教えてくれても良くないだろうか？ 俺様は未来の夫なのだし」

「だ・れ・が。未来の夫だよバーカ!! テメエわかってんのか？ お前のせいで眠ってた迷宮が作動しちまっただろうがよボケ!! イージーをハードにしやがって!!」

俺の目の前で寝ぼけたことを抜かしているのが誰かといえば、自称

俺の宿敵で魔王軍幹部でガーネツタの弟である馬鹿魔族だ。さつきから散々名乗られて「アルマディオ・カーネリアン」という長いフルネームまで覚えてしまったが、絶対に呼ぶもんかと思ってる。馬鹿で十分だ馬鹿で。

遡ること数時間前。

高難易度の迷宮だけあって出現する迷宮の守護者……迷宮魔物の強さは他に比べて明らかに強かった。油断すればいくら周りを強者で囲おうとルキレベルはすぐにやられてしまうだろうと、ルキには探索の他に「絶対に俺の手補離さないこと」を厳命した。

まあ、俺にかかれば？ この程度……せいぜい平均レベル五十程度の魔物なんて片手で倒せるし？ 弟子一人守りながら動くななんて楽勝よ。

敵を切り伏せるごとに間近からルキの尊敬の念がこもった眼差しを向けられ、俺としては師匠としての威厳を取り戻せてめちやくちや気分が良かった。

ルキを除いて仲間内では一番レベルが低いモモも、シャテイやアシユレ、ガーネツタと協力して問題なく魔物に対処していた。罨に関しては主にアイテム探索に気を裂いてる探索者のルキより早く気付いてくれてたしな。

だからこの迷宮の難易度が示すものが魔物の強さの場合、問題なく最奥まで行けると思っていた。強力なアイテムの気配を探っていけば、最終的に最奥へ最短で！ たどり着けるだろうしな。だいたい強いアイテムってのは迷宮の奥にあるものなのだ。

さくつと今日中に到着してさくつとアイテムゲット。それが俺の求める「あらゆる職業の可能性を開く宝物」だったら最高だ。

……そう思っていたのだが。

探索の途中、突然迷宮が揺れた。

地震かと思っただけど、ここは空に浮く迷宮。そんなことはあり得ない。

そして俺達が動揺している間に……”迷宮が目覚めました”。

「!! いけない。これは魔力を行き渡らせるための回路だ!」

そう叫んだのはガーネットで、彼女の視線の先には壁、天井、床にわたってびっしり浮き出ている魔術文字。先ほどまでは無かったものだ。それらは全て発光していて、ガーネットの言葉と合わせてそれが何を示すか理解した。

魔力を行き渡らせて起動させるもの。それは世間に流通する魔術術で作られた製品全てに共通する仕組みだが、それがこの場所に当てはめられるとなると……。

「ミサオ、ここは迷宮であると同時に古代に作られた魔術技術の結晶……魔導製品のようだ。まさかこの規模の大きさが本当にあったとはね。……動くよ!」

「ええっ!?!」

ガーネットが言う通り、その後すぐに迷宮は本来の動きを取り戻し動き始めた。

ちようど俺とルキが立っていた場所とガーネット、アシュレ。シャティ、モモが居た場所が別ブロックだったのを知ったのは迷宮が動いてから。

……俺達は見事に迷宮内で分断された。

しかし迷宮が魔導製品だったとしても、シャティが調べた記録を振り返るに動かなくなっただけかなり長いはず。

それを動かす馬鹿みたいな魔力をそそいだ奴は誰だ!? ……そう思っていたら、壁を破壊して外から侵入してきたのが馬鹿ことアルマデイオである。

壁の破壊時に「ふふん、やつと壊れたか! 俺様の魔術攻撃を何度も受けて無事とは、なかなか骨のある迷宮だ!」とか言っていた奴の言葉で俺は全てを悟った。

まあ、まず殴ったよな。奴がゲロ吐いて気絶するくらいの強さで。

それから数時間。おそらくもう深夜だろう。

「ししよ……」

「お前はそのまま寝てろ」

寝ぼけ眼の弟子の頭を犬を撫でるようにしてから促すと、ほとんど気絶同然にルキは意識を失う。さっきまで頑張っていて起きていたのだが、どうやらアルマディオの放つプレッシャーに気おされているようでありストレスを溜めているようなのだ。

……まあ相当の格上相手に殺気に向け続けられたら、本人の感受性が高いのも手伝って溜まるモンも溜まるよな。今俺が撫でたことで更にルキへの殺気は強まったが、俺がそれ以上の意気を込めて馬鹿にメンチきればにこにこ笑顔になった。おいそこはビビれよクソが。

そういえば相手からの好感度が激高つてのはめちやくちや嫌ながら理解したから、レベル測定の場合は満たしてるなど試しにこっそりレベルを測ってみた。

そしたら馬鹿のレベルは九十一。

おい、思ってたより前の俺に迫ってたじゃねーか。そんなに強かったのかこいつ……。

『まあ、僕の部下ならそのくらいはね』

（お前はあいつの名前忘れてたし現在進行形でかたき討ちすつぽかされてんだろ。上司が上司なら部下も部下だな）

俺が驚いていると魔王がどやったのでジト目で見れば、俺にしか見えない魔王の立ち位置がちょうどアルマディオの方で奴が消えると視線が馬鹿とかち合った。そこからまた口説かれる羽目になったので、「やられた」と苦虫を噛み潰した気分になる。

あああ、もう！ マジ性格悪いなこの魔王!! だから魔王なんだろうけど!!

仲間と離れ離れになった俺とルキなのだが、現在厄介なことに身動

きが取れない状態にある。

というのも馬鹿アルマディオが破壊した迷宮の壁は現在迷宮の機能と思われるもので修復され、強固な壁が上下四方を塞いでいるからだ。

切り取られた立方体の密室からの脱出。

それが現状で最も優先される事項だ。

そこそこ広いとはいえこんな密室で戦やりあつたら俺はともかく余波でルキが死にそうだから、嫌々ながらこうして戦わずに過こしていい。同じ理由で壁の破壊も不可能。

レベル九十一の奴が何度も攻撃してやっと破壊出来た壁を内側から？俺の方が遥かに強いしやろうと思えばできるだろうが、力の反射と余波でこの密室内がどうなるか分からない。

更に言うならよしんば外に出られたとしても、忘れちゃいけないのがここが空の上だという事。力加減を誤って部屋ごと破壊したら底の無い空へ真つ逆さまだ。

転移魔術に関しては以前ルリルが使っていたような妨害結界が迷宮の機能として発揮されているらしく、使用できるのはせいぜい2メートルほどまでに制限されている。この機能もまた迷宮が目覚めましたことで復活したものだから、つくづく馬鹿が恨めしい。

一緒に閉じ込められている敵……アルマディオだが、こいつはもとと戦う気はないらしく延々と口説いてくる。鬱陶しい。

それにしてもこいつ、どうやって俺の居場所を知ったんだ？流石に魔王城に残っていた魔力の残滓も消えたはずなのに……。

(まあ、会話するの嫌だし聞かぬーけど)

『かわいそうじゃないか。あんなに健気にアピールしてるんだから、構ってあげたら？くくっ』

(誰が。それよりお前、ここを出る方法なにか知らねえのかよ)

『それ、僕に聞く？』

(あいつに聞くよりマシ)

『随分嫌われたねえ、あの子も』



ダメ元ではあるが、いい加減あの暑苦しい馬鹿と一緒に空間に居るのも飽きた。気分転換に手記を記録を試してみたがいまいちはかどらない。

……。  
こういう時はいつもシャティかガーネットに頼ってたからなあ

アシユレやモモだったら知識が無くても機転や洞察力で突破口を見つけるだろうし。

(あれ。もしかして俺、火力以外の取り柄が……ない!?)

『うわ、自虐始めるための助走やめてくれる？ 気持ち悪い』

(自問自答で落ち込む暇も無いのかよ俺)

気持ち悪いとぼつさり言葉の刃で袈裟切りされて、少し落ち込む予定がぱあになった。まあ非建設的なことで時間を無駄にするのもあれだし、いいけどさ……！

『ふむ。まあ僕としてもこれの仕組みに興味はあるかな。結構パズルゲームとか好きなんだよね』

思いがけず協力的な魔王に目を見開く。

こいつ的には気まぐれかつ暇つぶしなんだろうが、もしここから出られたら初めてこいつが役に立つ。

『初めてなんて、ひどいなあ。僕はこんなにミサオに尽くしてるというのに』

(どの口でそれ言う?)

『ははっ』

俺の恨めし気な視線を軽やかに笑い飛ばすと、魔王はゆっくり部屋の中を見て回り始めた。

それを目で追いながら、ゆるやかな眠気に抗うべく頬を叩いた。こんな奴の前で眠れるか。

しかし、その時だ。

どろり。

「……………」

いついかなる時でも最悪のタイミングというものがある。それはどんなに強くなっても変わらない。

俺は今まで感じたことの無い感覚に嫌な汗をかきながら腹に手を添えて下腹部と……股の間に意識をむけた。

意識した途端。”始まった”からか、それともこれまで緊張で感じていなかったのかは分からないが……じくじくと腹が痛み始める。

(よりにもよって、このタイミングで!?)

『あ、なに。やっと生理始まった？ おめでとう。お赤飯炊く?』  
(じゃかましいわ!!)

目の前には忌々しい求婚者。同伴者は弟子。両方男。場所は迷宮の密室。

……………どうしろと!?

51話▶窮地く自分を追い詰めるのはいつだって自分だが納得は出来ない

俺が予期せぬ事態にうろたえていると、アルマディオが巨体をかがめて顔を覗き込んできた。

「む？ ……怪我をしたのか!? 血の匂いがするぞ!」

「死ね」

「何故だ!? 俺様は心配をだな……」

最悪のタイミングで来た女特有の例のあれに、なんとか平静を保とうとしていると馬鹿が不躰なセリフをよこしやがった。無駄に鼻良くて気持ち悪いな!

モモ並だ、と思ったがそういえばこいつも魔族の中でも半分が魔獣みたいな体の構造してるからな。嗅覚も優れているのかもしれない。(ほんつとに、なんでこんな時に!)

これはいよいよ脱出を急ぐ必要が出てきた。

一応迷宮に入る前、高難易度の迷宮ということもあつて分解紙を用いた探索用下着は身に着けた。だからしばらく服の汚れは気にしなくていいが、問題は腹部の痛み。……だんだんと痛くなってきている気がする。こう、ただの腹痛でなく……腹よりもつと下の部分というか。

俺はガーネットタからもらっていた痛み止めの薬をがりつとかみ砕く。が、これでどこまで抑えられるか分からない。生理がもたらす不調は個人によつて違うらしいが、アシユレは俺の場合その症状が重そうだと言っていたし。……重いつて、具体的にどんな感じなんだよ!? 今感じている痛みがまだ序章であると考えると恐ろしい。

おそらく俺が身動き取れ無くなれば、現在こうして鬱陶しく口説いているアルマディオはルキになど目もくれず部屋全体を破壊するだろう。こいつは飛べるからな。そのまま俺を連れて迷宮からとんずらする様がありありと予想できる。

現在は俺が牽制しているからこうして大人しく……はないが、口先

で口説くにとどめているのだ。

……つーか、俺も飛べないことは無いんだよ。現に前こいつと戦った時は飛行魔術を使っていたわけだし。ただ長時間飛行するには向かず、戦闘など単発的な使用が主。こんな空が大半を占める場所での使用は考えたことが無い。だからさつきもシャテイにしがみついたんだし。

それでも自分一人ならいくらでも無茶できる。だが弟子の命を預かっている今、下手なことは出来ない。

まあ飛べようが飛べまいが、どつちにしろこの密室から破壊以外の方法で出る必要があるんだけどな。

昼から何か仕掛けはないかとアルマディオをいなしつつルキと共に調べているのだが、一向にそれらしきものは見つからない。探索者のルキに期待したかったが、アルマディオが発するプレツシャーの中で張り切り過ぎたらしく現在ダウン中。

俺は急ぐ気持ちで部屋を見て回る魔王に目を向けた。

(魔王、なにかわかりそうか?)

『今のところは、なにも。……というか暇つぶしに引き受けはしたけど、僕に任せていいの? 僕が本気で君のために探してあげてると思ってる?』

(ダメもとに決まってるだろうが)

そう言うど魔王はどこか不満そうに鼻を鳴らすと部屋の中の観察へ戻って行った。え、なにこいつ。まさか「ああ、信じてるぜ!」とか言っただけだったのか? そのうえで俺の事もっと馬鹿にしたかったとか? うわ、めんどくさ……。

だが半ば継ぎのような気持で魔王を見てしまったのも事実なので、複雑な気持ちになる。強制的に憑依してるだけの害虫に何を期待してんだか俺……。

俺が深くため息をついていると、こりない馬鹿が再び話しかけてきた。

「なあ。そろそろ名前を……」

「だからアイゾメミサオ。ミサオだよ」

「兄の名前ではなく君の名が知りたい」

「お・れ・の!! 名前なんだよ! なんだよ兄って!! いや、兄貴はいるけどさ! 俺じゃねえよ!! というかよしんば俺がアオゾメミサオの妹だと仮定するなら兄を殺そうとしてる奴に好意向けるわけ無いだろうがそういうところ含めて馬鹿だなお前!! いいか? 耳かっぽじれよ。この前だけでなくそれまでもさんざお前をボコってきたのは、俺!! てめえらのボスのせいでこんなことになってんだよ!!」

いい加減耐え切れず、俺は何度目かになる主張をアルマディオにぶつけた。奴は一向に信じようとしないが、今度はついポロリと理由も添えてしまう。

「ボス……魔王様のことか?」

「そうだよ!」

イライラしつつ肯定すると、アルマディオは何やら考え込むように口元に手を当て目を伏せる。黙っていればイケメンであるため、その無駄な顔の良さで余計にムカついてきた。

俺は女になってもこんな地味顔なのに、異世界顔面偏差値高すぎて嫌になる。

「つーかよ。お前はさつきから自分の事ばかりでつまんねーんだよ。それで自分のプレゼンしてるつもりかあ? 思いあがるな」

イライラついでに吐き出すように言えば、キョトンとした顔で奴がこちらを見てくる。

ふんっ。どうも理解してないようだな。

さつきからやたらと口説いてくるものの、その内容はといえば自分がいかに優れている男で俺の伴侶に相応しいかという自慢話、自分語りばかり。俺自身は現状を除き(く……ッ!)モテたことは無いが、俺の間近にはアシュレさんという無意識にスパダリムーヴを発揮するお人が居るのだ。それと比べたらこいつの口説き方がまったくなくていい、ということとは分かる。俺が男じゃなくても嫌だろこれ。

まず振り向いてほしい相手を褒めるのが基本なんじゃねーの？  
アシユレなら息するようにそれをするぞ。

……まあ、どうせ【職業・女】のスキルである魅了チャームで俺の事好きになってるにすぎないんだろうしな。褒めるところなんてないか。

(くそ。腹痛のせいとか油断すると気分が後ろ向きに……)

いざこいつに褒められたところで気持ち悪いだけだろ。そう思いつつ、痛み止めを飲んだにも関わらず変調をきたしていく体を意識すると嫌な気分になる。

俺は先ほどよりも深く長いため息を吐き出すと、渋々ながらアルマディオオに向き合った。

「おい」

「なんだー」

散々邪険に扱われているにも関わらず、奴は俺に話しかけられるとぱつと笑顔になった。普段の顔色が悪いだけに血色がよくなる人間以上に分かり易く、目もキラキラしている。犬かな？ うわ。魅了チャームマジで怖え。

「この際だからとことん説明してやる。お前に迫られ続ける地獄より恥晒した方がまだマシだからな」

俺はそう前置くと、身を乗り出して傾聴体勢バツチリの馬鹿に俺が誰であるか。何故こうなったのかを懇切丁寧に説明し始めた。

「この時背後で魔王が「あゝあ」という顔をしていたことを、俺はまだ知らない。

「本当に貴様がアイゾメミサオ……なのか!？」

説明し終わると奴がそんなことを言うので、俺は満足げに頷いた。よしよし、ようやく理解できたか！

「だからお前の嫁になることなんかありえないし、お前も魔王の仇として討たないといけない相手なんだろう俺は」

「そ、それは……」

魔力が同質であること。今は壊れてしまっているが、魔装アーティファクト工芸核を用いた一点物オーダーメイドのはずである魔術装甲のデザインがこれまで何度も戦ってきたアイゾメミサオと同じである事。ここは俺のプライドのために性欲反転云々は端折ったが、魔王の振りまくはずだった厄災が呪いとなった結果……女になった事。これまで、男だった頃に馬鹿と戦った詳細。などなど。

大人しく聞いていたので、思いつく限りの材料を並び立てた。

ちなみに満足したはずの俺だったが、現在冷や汗だらだらである。

俺がアイゾメミサオであることを納得させることは出来たつぽいが、話している途中で「あれ、これ俺が倒す相手だつて認識したらこいつ普通にここぶつ壊して攻撃してくるんじゃないやね?」と気づいたからだ。

奴が俺の牽制で攻撃を仕掛けてこなかった理由には、奴が俺に好意を抱いているという前提がある。それを今俺自分でぶつ壊さなかった? 俺が倒すべき相手だつて認識したらこんな場所どうなつたつて知ったこつちやねえだろ。

そうなたらぶつ壊される時の余波でルキが死にかねないし、現在外がどんな状態か分からないため足場を確保できる保証も無く空中ダイブの危機でもある。

部屋を破壊される時ルキを守り、長時間の持続的な飛行が難しい飛行魔術でその弟子を抱えつつ、未知の不調を抱えたまま格下とはいえ十分に強い魔王軍幹部と戦わなければならない。

……難易度おツ  
!!!!!!!

普通のフィールドなら何にも問題ないけど、今は場所も間も同行者も! 何もかもが、まずい!!

少なくとも弟子の命が風前の灯火!!

『判断力にぶってるねえ』

いつの間にか横に戻ってきていた魔王にケラケラ笑われるがぐうのねも出ない。これは完全にタイミングをミスった。

しかし頭の中でぐるぐる思考を巡らせる俺とは裏腹に、アルマディオが攻撃を仕掛けてくる様子はない。

見れば奴も奴で混乱しているようだった。

「彼女が本当にアイゾメミサオ!? ならば俺様は彼女を倒さなければならぬのか……! せっかく出会えた人生の伴侶を!」 しかし、彼女がああの大雑で粗野粗暴で忌々しいアイゾメミサオだとするならばそれを伴侶とするのはあまりに……男だし……。いやだが待て。僕がこれまで生きてきた中で奴以上に強い者はいなかった。僕が宿敵と認めた者も奴ただ一人。僕は奴を倒そうと考えると同時に己より強い者が居ることに喜びを感じていなかったか? 好ましく思っていないかったか? ふむ。そうなると僕……じゃない。俺様の伴侶に相応しい者は逆に奴しかいないのでは……いやだが男……ん? だが今は女……? しかも魔王様の呪いを受けてその姿になったとあらば、魔王様の呪いは逆に魔族の俺様にとっては祝福では? ふむ……ふむ!」

待て。攻撃してこないのは良いが雲行き怪しくないか!?

「おいおいおいおい。お前、俺を魔王の敵討ちで殺すつもりなんだよな? な? 今は間が悪いかよ。ちゃんと日を改めてちゃんと戦うからさ。真正面から戦おうぜ。だから何か納得するのやめようぜ。な?」

ライバルとの正々堂々とした決着! というシチュエーションに持っていくため出来る限り刺激しないように言葉を選んで話しかけてみるが、アルマディオの瞳はどんどん星を宿したように輝きを増している。

頼む。錯覚であつてくれ。

「アイゾメミサオ!」

「ひっ!」

ブツブツと独り言をつぶやき続けていたアルマディオがぱつと顔をあげて俺を見た。その勢いに魔王をも倒した英雄にあるまじき引





## 52話 ▶ 貧血く最強の俺、体調不良が今のところ一番の敵

俺が元男かつ上司の仇と知ってなお求婚の手を緩めない姿勢を見せた馬鹿を前に、俺には殴る以外の選択肢はなかった。本日三回目のマジ殴りである。

一回目は気絶。二回目はなんとか耐え、三回目の今は再び気絶。もうガーネットに申し訳ないとか考えないで気絶してるうちに息の根止めてやるべきでは？ と思わなくもないが、どっと疲れている今そんな気力はない。

とりあえず気絶したアルマディオを蹴る様に押し壁際に追いやると、真つ青な顔で眠っているルキの肩を揺さぶった。

「おい、ルキ。悪いな。そろそろいいか？」

「あ……ししよ……はい……」

ルキは思ったよりすぐ目を覚まして、ぼやけた声を出しながらも頷いた。

「少し、休めました。すみません。僕が足手まといなばかりに、身動きとれなくて」

そう言いながらルキは視線を彷徨わせ、壁際でのびているアルマディオを見てほつとしたように息を吐いた。

こいつ自分が居るから俺が思い切った破壊やら出来ないのを察して気にしているようだが、気にするなと言っても気にするんだろうな。だったら。

「その分期待してんぞ、探索者」

「……！ はいっ!!」

期待している。それを聞いた途端ルキはぱっと目を輝かせて、気合を入れるように頬を叩いた。

うくん。こいつの扱い方、ちよつと分かってきたかも。

「……そういえば師匠。顔色が悪いようですが、大丈夫ですか？」

「んあ。あー……。おう。平気だから、気にすんな」

思いがけない言葉に反応が一瞬遅れる。

一応迷宮の壁が鈍く発光しているため最低限の明かりは確保できているが、顔色を見破られるとは思わなかった。

「本当ですか？ 動きもどこかぎこちないような……」

「何でもないから！ 気にすんなー！」

ルキは変なところで頑固なのか疑うような目を向けてくるが、それ以上は聞かずに室内の探索を再開した。

ちなみに例の腹痛だが、痛み止めが遅効性なのかそもそも俺の体に薬の効きが悪いのか……あまり改善されておらず、段々としんどくなってきた。さっさとここを出たい。

『運がいいね。ちょうど少し気になる物を見つけたよ』

(マジで!?)

魔王の言葉に思わず体ごと反応すると、唐突なそれに驚いたのかルキの視線もこちらに向く。

「師匠、どうかされました？」

「あ、えつと。だな。その辺に……」

魔王の姿は俺にしか見えないためしどろもどろになりつつ、何かを見つけたらしい魔王に視線を送る。すると奴は肩をすくめてある場所を示した。

『魔力を介さない純粋な仕掛けのようだね。先ほど仕掛けが魔力で作動した先入観もあって、探すあてを間違えていたんだろう』

魔王が何やら解説を添えているが、俺はそこに何かあるかもわからないまま指をそちらに動かす。するとルキが目聡く何かに気付いたのか、飛びつくように床にしゃがみ込んだ。

「！ 本当だ。こんな所に溝が……！ よく見つけましたね、師匠」

「ま、まあな！ 俺にかかれればこれくらいどうってことないぜ！」

「この仕掛けなら……うん。なんとかなりそうです」

「おお！ 流石だな!？」

「いえ、そんなことは……。……！ もしかして、僕を試して……?？」

「ん?？」

「なるほど、そういうことですか！　そうですね。あんなに強そうな魔族を一撃で気絶させられる師匠が閉じ込められたくらいでうろたえるはずがありませんもんね！　本当はすぐに出られたのに、僕に役目を与えてくれようと……！　だというのに結局は助言を頂いて、僕は自分が恥ずかしい！」

何やらルキがすごい勢いで勘違いし始めた。

いや、普通に困ってたんだけど……？　それにルキの實力はすでに試し終えているんだし、こんな場面で試したりしないけど……？

(……ま、いいか！)

せつかくいいように解釈してくれてるようだし、無くなり続けた威厳を取り戻すため俺は鷹揚に頷いた。

「ふつ。バレちゃしようがない。よく気が付いたな」

「さすが師匠！」

素直く。俺の弟子、素直く！

「でもそういうのは気づいても言わないでおくもんだぜ」

「！　すみません。せつかくさりげなく教えてくれたのに余計なことを……」

「ま、いいってことよ！　仕掛けや本命のお宝さがしの方は頼むぞ」「お任せを！」

弟子のいい返事に満足げに頷いていると、魔王のジト目が俺を見ていた。

『貸しひとつだよ、ミサオ』

(貸しも何も体の家賃だ家賃。たまに役に立ったと思ったら凶々しい奴め)

『凶々しさなら君には負ける』

魔王の言葉に反論したかったが、手柄を横取りしたのも事実なのでそれ以上は黙っておくことにした。

いやでも、こいつに気を遣うのはおかしくないか？　今は腹痛に襲われているから本調子でないとはいえ、俺はもつと毅然とした方がいい。この体は俺のもので、俺は被害者なのだから。

その後ルキは魔王が見つけた溝を調べ、見事その仕掛けを解いてみせた。

どうも魔王が言うようにその仕掛けは魔力がなくなるとも迷宮を少しばかり動かすものらしく、ルキが推察するには「動力が切れた時の予備」らしい。

迷宮は誰が作ったものなのかはわからないが、作ったやつもこうして閉じ込められた経験があったのかな……。なんて思いを馳せてみる。

ちなみにアルマディオだが、面倒くさいので元密室から引きずり出した後は空に突き落としておいた。死んだら死んだでそれでスツキリおさらばできるのだが、きつと死なないんだろうな……。という諦念に似た確信がある。

まあ次回来た時は体調を万全に整えておいて、俺自ら二度と立ち上がれないように丹念にボコしてやんよ。不法投棄程度じゃ安心できない。

「……念のため、迷宮から出たら魔術装甲も使えるようにしておくか」「え、師匠って魔術装甲まで使えるんですか!? あ、魔術工芸核アーティファクト、持つてるんです!?!」

「ん? ああ。ほら」

ルキが興味を示したようなので後ろ襟を引っ張ってルキから背中が見えるようにしてやる。そこには刺青のような見た目で体の表面へと収納されている魔術工芸核アーティファクトが見えるはずだが……。

「ししう! だから、そうやって軽率に肌見せるのやめてくださいってばあ!?!」

悲鳴のような叫び声と共に後ずさった。おいおい、背中程度で初心な奴だな。

「まっ、今は壊れてるんだけどさ」

無くても問題ないといえは無いが、万全の状態を整えておいて損はない。

この迷宮を攻略したら職人の所へ修理依頼に行こうと、今後の予定

に組み込んだ。

そして密室から脱出し仲間達と合流すべく複雑怪奇な迷宮を進んでいた俺達だったのだが……。

「すまん……」

「い、いえ。そんな、お気になさらず」

現在俺は弟子に背負われぐったりしている。何故なら先ほど目の前が真っ暗になって、そのままぶっ倒れたからだ。

『貧血だねえ』

魔王が隣をびよこびよこ歩きながら俺の状態をそう判断する。おそらく間違っていないだろう。

すぐに意識を取り戻したはいいものの、酷くなってきた腹痛も合わさってなかなか最悪の気分を味わっている。

現在は自分が背負います！ と申し出てくれたルキに甘えている状態だ。取り戻した師匠の威厳、すぐ吹き飛んでしまうのなんなんだよ……！

「ひっ」

「ちっ」

ルキの引きつるような声が聞こえてから、舌打ちしつつ腕を横薙ぎにはらって雑に魔術を打ち出す。その先では俺の魔術で焼かれ消し炭になった迷宮魔物の残骸。すぐ粒子になって消えてしまったが、ルキの反応を見るまで気づけなかったのは失態だ。

さつきは密室だったのに加えて、アルマデイオという明らかに上位のオーラを放つ魔族の気配が魔物避けになっていた。しかし一步外に踏み出せば、ここは高難易度迷宮。初心者冒険者相手にはなかなかキツイレベルの魔物がうろついている。

ちなみにどうも今の俺は弱っているからかなんだか知らないが、魔

物に舐められてるっぽい。あの馬鹿より遥かに強いんだが??? ちよ  
くちよく襲つてきやがつて! もつとビビれよ!

これがあるから休んでいるわけにもいかず、仲間達との合流を目指  
して急いでるってわけだ。今のところ片手間で対処できる魔物ばか  
りだが、さつきみたいに貧血で意識がぶっ飛んだらルキだけでは対処  
が厳しい。

俺は情けなく弟子の背中に張り付きながら「俺は最強……俺は最強  
……魔王を倒した男……」と、自己暗示をかけ腹痛を紛らわせるの  
だった。

### 53話 ▶嫉妬心とガールズトーク（パーティ視点）

ミサオが腹痛と貧血に喘いでいるところ。はぐれた仲間達……シヤテイ、アシユレ、ガーネット、モモは早々に合流を果たし、迷宮の奥へと進んでいた。

「ミサオ様、大丈夫でしょうか……」

「心配いらないんじゃないかい？ ミサオだからね。早々に傷つけられる魔物は居ないよ」

「それはそうなんですけど、ミサオ様っておつちよこちよいじゃないですか。そこも可愛いんですけど、こういった場所だと心配で……」

「はぐれた位置的におそらくルキも一緒だ。ミサオがうっかりして窮地に……ということもないだろう。あの子はしっかりしているもの。戦力ではミサオが、観察眼ではルキが。お互いに助け合えば問題はないさ」

「……………」

自分より遥かに強い事を承知の上でシヤテイがミサオを心配するのは、こういつた搦め手の迷宮に彼がとんと弱い事を知っているからだ。それをガーネットがカラツと元気づけ、アシユレが根拠で捕捉する。

そんな中、モモだけは押し黙ったまま迷宮の道を進んでいた。

「モモ？ ……大丈夫？」

「ん。へいき」

モモは口数こそ少なくマイペースだが、現在明らかに気を立てている様子。

つきあいの長いアシユレが声をかけるも、その態度は頑なだった。

「あら。もしかして、ミサオ様がルキと二人きりなのが気になりますか？」

「ふふ。部屋わけの時も駄々こねていたものねえ」

「……………」

内心を容易く見抜かれモモの頬が朱に染まる。それを年長者たちは微笑ましそうに眺めているため余計にいたたまれない。



モモはパーティ内でこれまで最年少だった。加えて記憶喪失というハンデも背負っている。

それゆえに甘えのようなものが無意識下であったことは自覚しているし、パパ、もしくはママと慕うミサオに対しては大っぴらに甘えていた。

しかしそんな自分でも”一緒の部屋で寝る”はこれまでに許されたことは無い。野宿の時に出来るだけ近くで寄り添う事はあっても、ミサオが女になる前まではそれもままならなかった。

どうあっても立ちふさがるのは”性別”だ。

モモは奴隷として捕らわれていた時の影響で、どうしても男という生き物には嫌悪感を抱く。最近でこそ普通に接する分には問題なくなつたが、肩をたたくなど軽いもの以外の接触を伴うとダメなのだ。それがミサオ相手であっても。

本人にとつては不幸でしかないだろうが、ミサオの性別が女になつた時モモは密かに喜んだ。これでもつと近くに居られると。

だが今度はミサオ側からの問題で「メス堕ちポイントが溜まってしまふから」と一緒に寝られたことはない。甘えられる距離は近くなつたし隙あらば抱き着いているが、それだけは物足りなかった。

……だというのに、最近仲間になつたばかりの新人は「男だから」という理由であつさりミサオと同じ部屋で過ごすことが許された。

モモにはそれが気に食わない。たとえ同じベッドで寝るわけでもないと分かつていても、気に食わないと思ったら気に食わない。

更には役割がかぶっていることも気に入らないポイントの一つだ。

一応ルキが「アイテムの探索や迷宮のマッピング」向きの探索能力を買われている事は理解しているが、これまでパーティ内の戦闘能力で劣る自分の役割が種族特性を活かした探知、探索。

どうしたつて対抗心が湧いてしまう。

そのルキが今、ミサオと二人きり。

(もやもやする……)

嫉妬心。

仲間の女性たちには抱いたことの無いそれを、モモは男相手には発揮してしまうのだと自覚した。

弱いうえにモモ先輩などと呼んでくるためなかなか可愛い奴とも思っているが、それとこれとは話が別なのだ。

以前もルリルベレス相手に不快さを抱いたことはあれど、これで二回目。さすがに分かる。

賢者に関しては食べ物に目がくらんでいたからか、もしくは奇妙な生物として見たがために男と認識しなかったからか気にならなかったのだが。

ルキとルリルベレス。この二人相手には明確に対抗心が燃えている。

ちなみに余談だが、アルマディオについてはミサオが明確に拒絶しているため嫉妬の対象にすら入っていない。

(ミサオママは絶対に渡さない……!)

モモはメラメラ燃える心を秘めて、迷宮を進むのだった。

現在ははぐれた仲間同士。互いに迷宮内での位置が分からないため、奥に進んでいけばいずれ合流出来るだろうという意見の一致の元に進んでいた。

外側から見た歪な外見の通りというか、立方体キューブが連なった形の迷宮内は複雑な形をしている。

先ほどそれが移動して更に奇怪な形となった事で、難易度は増していた。

死角も多く、並大抵の冒険者なら迷宮魔物の不意打ちでたちまち死んでしまうだろう。

だが。

「アシユレ、右」

「承知した」

「ガーネツタ、斜め左前。距離馬八頭分」

「はいよ」

「シャティ……は特に何も無い」

「ではなぜ名前を呼んだんですか!? いえ呼ばれるのは嬉しいのです  
が!」

各々が経験豊富な強者であることに加え、モモの的確な探知で魔物が襲ってくる前に対処が可能となっていた。

アシユレの剣戟が角から現れた一本角の鬼を切り裂き、ガーネツタの弾丸が前方から迫っていた魔物の群れを狩りつくす。シャティは自身の目視による全体のサポートを得意とするため、あえて何も言わない。名前を呼んだのは反応が見たかったからだ。

「こうしてミサオ抜きで進んでみると、無意識下で普段彼に甘えてしまっていることがわかるね」

「確かにねえ。迷宮魔物も強くなってきたし、なかなか気が引き締まる」

「本来、この天空迷宮は有翼族の古き試練の場としても使用されていたと聞き及びます。気軽に最奥を目指せる場所ではないですからねえ」

軽口をたたきつつも各自油断はしていない。

共通している認識は「このまま進めばいずれミサオと合流できる」というもの。

普段頼りなさそうな一面ばかりが目立つミサオだが、パーティからの信頼は厚かった。

「ところで皆さん。この迷宮で例の宝物が見つかったら、どうします?」

そんな中、シャティが魔術の雷光で敵を貫きながら世間話のノリで話題をふってきた。

アシユレが首を傾げる。

「どうする……とは？」

「ミサオ様が男に戻ってもいいか、ということですよ」

「それは本人が望んでいる事だし、私達もそれを助けるためにこうして迷宮を進んでいるのだろう。問答することでもないと思うが」

「感情の話ですよ。アシユレはお堅いですね。そこがまた素敵なんですけどもー」

きやはつと身をくねらせるシャティにアシユレは疲れたようにため息をつくが、ガーネットは可笑しそうに笑って話に乗った。

「ははっ。まあ、暇つぶしの与太話……くらいで受け取って良いという事だろう？ そうだね。私は極論ミサオが男でも女でも、どちらでもいいと考えているよ」

「ですよね！ ミサオ様、女性のままでもぜんぜんいいですよね！むしろ女性になることで完璧になったというか！ いえ完璧というにはぬけてるんですけど、その隙を含めて完璧といえますか！」

「シャティ、シャティ。言ってることがおかしい。理解はできるけど」人が聞けば話題の主が認められているのか舐められているのか分からない内容だ。

「モモは？」

「ミサオママは、ミサオママ」

「そうなんですけど。男性の姿と女性の姿、どちらが良いですか？」

「……雌。くつつけるから」

「ではミサオ様女性のままが良い派が二、中立意見が二ですね！」

我が意を得たりとばかりにシャティが満面の笑みでぱんつと手を叩いた。

「私の意見は中立として扱われているのかい!?」

「じゃあミサオ様の意志を尊重する、といった意味で男性派寄りの中立ということですよ」

「結局中立なんだね？」

シャティはそれぞれの意見を聞くなり「むふふ。よい参考意見を聞けました。つまりミサオ様に絶対男性に戻ってほしいと思っている

者はいない、と。むふふ」と怪しげな笑みで笑っていた。

アシユレはそれをペしんと叩く。

「きやんっ」

「シャティ。これはミサオの希望が優先される話であって、私達がどうこういう物ではないよ。本当に彼の事を想うならね」

しつかり釘を刺してくるアシユレに「はあい」と返事こそしたシャティだが、本当に分かっているかは怪しいなどアシユレは半眼で彼女を見た。

そうこうしている内。

危険な迷宮魔物が闊歩する高難易度の迷宮の中とは思えない華やかな声が響く中、周囲の雰囲気が変わった。

地味で煤けたかび臭い道は終わりをづけ、白く艶やかな壁面が続くエリアに足を踏み入れたのだ。

「どうやら最奥が近いようですね」

それまできやつきやと騒いでいたシャティもさすがに気を引き締め直す。すつと細められた橄欖石かんらんせきのような瞳が見据えるのは、清廉な色とは裏腹にプレツシャーを放つ迷宮深部。

「さあ、行きましょう。もしかしたらミサオ様が来る前に目当ての物を見つけて、驚かせられるかもですしね！」

「！」

それを聞いて張り切るモモがやる気をみなぎらせる。宝物を先に見つければミサオと一緒に居るルキを出し抜けるのだ。ミサオもきつと褒めてくれる。

華やかな女性四人は頷きあい、その奥へと進むのだった。

……それを陰から見る者がひとり。

「おや、本当に来た。……ここまで無傷とは、さすが魔王様を倒したパーティといったところか。少々てこずりそうではあるが……あの馬鹿が一番厄介な相手を止めている間に……私はこちらを狩らせてもらおうか」

ぽつり。

誰にも拾われない陰鬱な声が、迷宮内に落ちて消えた。

## 54話 ▶ 罨くさよなら神秘的な迷宮

「うぐええ……」

「師匠、大丈夫で……はないですよ。すみません。僕が魔物の撃退も出来るくらい強ければ……」

「きにすんな。それもできなくなったら、いよいよおれのししようとしてのいげんとそんげんがしぬ」

『息も絶え絶えでよく言うよ』

(うるせー……)

腹痛と貧血で意識が飛びそうになるのをなんとか堪えながら、ルキに背負われたまま迷宮を進む。

襲ってくる迷宮魔物の他に罨も多かったが、それに関してはルキが頑張ってくれた。今のところ発動前に完璧に無効化又は避けて進んでいる。

背負われている至近距離だからこそよくわかるが、ルキの体はかなりの緊張状態にあるようだ。相当きばって集中力上げてくれてんだろうな……。

『それだけじゃないと思うけど』

(あん？　じゃあほかになにがあんだよ……いやいい。よけいなことしゃべんな。つつこむよーがねえ……)

魔王の奴が気になる事言うもんだからつい癖で聞き返すが、変なことを言われて突っ込んでも無駄な体力使うだけだと思いなおした。

「ぐ……。よいせつ」

「!!」

ほらやっぱりな。一瞬でも気を抜くとずり落ちそうになる。

抱え直す手間をかせさせるわけにもいくまいと、俺はなんとか自力でルキの背中に乗り上げた。今度はもっとしっかり腕を回してくつついておく。

うう……情けねえ。俺はこなきジジイかよ。弟子がいなきや移動一つままならねえとは。

「~~~~~!」

『あーあ……かわいいそうに。ふふっ』

魔王が横からルキを覗き込みながら何やら言っているが、俺は色んな意味でそれどころじゃない。

腹部の痛みには耐えつつ、真横から飛び出してきた一つ目の蛇めがけて風の斬撃を飛ばして輪切りにしてやる。ルキは道の選択と罠の発見に意識を割いているから、魔物に関しては俺が先んじて気づき対処しなければならぬのだ。

しかし俺は元々そこまで探知に優れているわけでもないというか、若干の気配の察知と目視によってしか敵の位置を把握できない。

だから実のところ、さつきから対処はギリギリだ。距離が近い。

今も近距離ゆえに輪切りにした蛇の血が危うくかかりそうになり、もしこれに毒でもあつたら事だ。

クソッ！ 炎で焼き払っておけばよかった。判断力も鈍ってやがる。

こんな時にモモが居てくれたらな……。

モモの狼耳と兎耳、計四つの耳は生物や魔力の探知に関して非常に優秀だ。特にこうした入り組んだ迷宮ではいつも助けられている。

「……………」

やべえ……。魔術使ったら余波の風で腹が冷えた……。

下腹部に内臓を引き出されているような（いやそんな経験ないんだけど）鈍痛。少しでも温めようと体温の高いルキの背中に腹を密着させ、隙間を無くして温めようと試みた。

あああああ！ もう！ なっさけねえなクソッ!!

え……アシユレ達女の子って、今までこんな痛みと付き合っただけで冒険者やってきたのか？ マジで？

個人差があるとは言ってたけど、毎月こんなデバフ受けながら冒険してたの？ 俺、これからの冒険者業にかなり不安を覚えてるんだが

……!

やはり、やはり早急に男に戻る必要がある!!



焦りを覚えつつ、俺達は迷宮を進んでいく。

途中俺というお荷物を背負ったルキの体力も心配になったが、健気な弟子は「大丈夫です！ 師匠は気になさらず、どうかお体を第一に!!」と答えてくれた。

その言い方に「あれ、もしかして俺の体調とその原因バレてないか？」と気づきざつと青ざめたが……うん。考えたら負けな気がしたので俺は考えるのをやめた。

俺の心のヒットポイント、そろそろゼロじゃねえかな……。

(と、ともかく今は先へ！)

一瞬入り口方面へ戻ることも考えたが、きつとモモは俺達を探しながら迷宮の奥へ進んでいるはずだ。他のみんなも位置的に単独で分断はされていないだろうし、もしかするとすでに全員合流してるかも。

近くへ行けばモモの探知能力で俺達に気づいてくれるはずだし、このまま進もう。合流さえできてしまえばこっちのもんだ。

そうしてしばらく魔物達や罫を退けながら奥へ進むと、途中から雰囲気が変わった。

これまで色も空気も辛気臭い墳墓の中のようなだった迷宮が、いきなりあか抜けたというか……白くてつるつとした壁と床、天井に変わったのだ。

よくよく見ればうすうすく発光する魔術文字が浮かび上がって、模様みたいに壁面を埋めている。どうやらここはまだ迷宮本来の機能が衰えていない場所のようだ。

これはいよいよ最奥が近づいて来たな。

「すごい……」

「な。随分と綺麗なもんだ」

「それもですけど、ここまで来られたのが、です。皆さんとはぐれて僕みたいなお荷物が居ながら、師匠はこんな所まで連れてきてくれた」「いや、連れてきてもらったのは俺なんだけど……宝探しに突き合わ

せてるのもこつちだし……」

現在絶賛お荷物中の身としては持ち上げられると非常に居た堪れないんだが。

しかしルキはといえば、ゆるく首を振った。

「この天空迷宮。先輩方が当たり前のように対応していた再序盤の区域だけでも銀金級ぎんがねが複数いてやつと攻略できるかどうかという魔物の強さでした。現在居る場所については迷宮魔物との力量差がありすぎて、どれほどの実力があれば踏破可能であるのか判断すらできません。少なくとも赤金あかがねの僕程度では命を保つことからまず不可能です。なのに僕は今、この場所に立っている」

ルキの緑色の髪が揺れる。

振り返った少年の顔は、感動と歓喜に彩られていた。

「ありがとうございます。僕を弟子に、仲間にしてくれて！　こんな、古代の魔導技術が未だ動いている場所を目に出来るだなんて……！」

感動です」

その素直な喜びのように、一瞬腹の痛みを忘れる。

「そりゃ、よかったな」

そう言つて俺も笑った。

明らかに自分より強い化け物に囲まれて、お荷物師匠抱えて走る迷宮は怖かっただろう。だっていうのにこんな顔できるなら、こいつ結構大物かもな。

と。

ちよつぱり和やかな雰囲気になりかけた時だ。

『感動している所悪いけど、何か来るようだよ』

「!!」

魔王の発言直後、しなる鞭のように迫ってきた何かをルキの背中から飛び降りて叩き切る。

「黒星草……!?!」

襲ってきたものの正体は、魔王の死と同時に枯れたはずの黒星草だった。

しかも野に広がる様に平たく群生していた時と違い、茎が伸びて蔓のようになってる上に意志を持っているかのごとくうねっている。花も心なしかデカくなっているように感じた。

それが俺の切った物のみに留まらず、うねうねと湧き出るように迷宮の通路を埋め尽くしながら押し寄せてくる。

まるで頭部だけ花に挿げ替えた蛇の群れだ。

少なくとも植物がしていい動きじゃねーよ!!

「ルキ、下がってろ! 焼き切る!」

「は、はい」

剣を構え前を見据える。数は多いが一方通行の通路からまとめきられてんだ。このまま正面から一網打尽にして焼いちまえばいいだけのこと!

しかし俺が剣に魔術付与を行おうとした、その時だ。

「おや、いいのかな? あまり強い攻撃をすると、お仲間がかわいそうなことになってしまうが」

粘つくような声が耳を這う。

俺は全身に鳥肌を立てながら、俺たち以外誰もいないはずだった背後を振り返る。

そこには黒いローブを身に纏った何者かが立っていた。

次いで言葉の内容に思考がたどり着き、前方から迫ってくる黒星草の群れに目を凝らす。

怪しい奴から目を離したくなかったが、今はそちらを見なければいけない気がした。

そして俺が目を向けると、目前まで到達した黒星草が突然動きを止める。すると黒い花と緑の蔦の間に、何やら別の色が見え隠れしているのを発見した。

色は青、白、桃色、赤。見覚えのありすぎる色に、俺はまさかと叫ぶ。

「アシユレ、シャテイ、モモ、ガーネツタ!？」

うっそだろ！ あの四人がこうも簡単に捕まるとか、ありえるのか!?

信じられない気持ちで確認するが、やはり大量の黒星草に捕らわれているのは仲間達だった。

口元をさるぐつわを噛ませるように草で覆われているため声を上げられないようだが、意識はあるようで何かを訴えるようにこちらを見ている。

「テメエツ、何者だ!!」なにもん

我ながらひねりが無いなと思いつつ、これを成したであろう元凶……背後の怪しい黒ローブを振り返り誰何する。

すると応えるように奴はローブを脱ぎ……その下にあった小さな角を露わにすると、怪しげな笑みと共に名乗りを上げた。

「私の名はバシユトレーゼ。魔王軍幹部、千里眼のバシユトレーゼだ。魔王様より受け継ぎしこの力でもって……英雄よ。魔王様の祝福をうけた貴様を、我ら魔族の物とする。どうやらあの馬鹿、案の定失敗したようだからな。まったく、姉弟そろって愚か者よ」

「……………」

「どうした？ さすがの英雄殿も、こうも簡単に仲間が捕らえられて

は言葉も出ないか」

「……………」

「……………」

俺とルキはただただ沈黙した。

相手は声こそ張らないもののどこか得意げな様子。だが俺達はその見た目に言葉を無くしている。

そしてやっと絞り出せた一言は……。

「ち、ちようじよ」

「誰が痴女で幼女かッ!!!」

「すげえな言葉の意味を一発で理解した。ってことはお前も自覚あるんだな痴幼女の!!」

「黙れ。貴様にはこの至高のセンスが理解できないようだな」

「いや、至高で……………」

ローブの下から現れたのは長い黒髪のツルペタ幼女。なに、蔓とツルペタでもかけてんの？　ってくらいツルツル幼児体型。ルリルよりも見た目が幼い。

しかもそのツルペタつぶりが丸わりの……………こう。言うなれば、ガムテープが一番近いかな？　そう。黒いガムテープっぽい、ぴったり体に張り付く布を体に巻いてぎりぎり見えない際どきで大事な部分だけを隠している。

なんだか幼い見た目のわりに変態臭がすごい。

これはもう痴幼女って俺の言葉、的確過ぎじゃないだろうか。

「……………まあいい。ともかく、貴様には共に来てもらうぞー！」

「!？」

バ……………なんとか、とかいう痴幼女が吠えようと、それに従うようにシャティ達を捉えていた黒星草の蔓が俺達に向かって飛んできた。

焼き払おうにもシャティ達の位置が近すぎて、咄嗟の事で調整も出来そうにない。そのため剣を振るうに振るえず、持ち手に葛が絡みつ

いた。

(こくなったら直接……！)

わざわざ剣を介さなくとも魔術は使える。だから俺は蔓を直接燃やそうとするが……。

「あ??」

ガクンつと膝から力が抜けた。

(！…しまった黒星草ってことは……！)

すぐに思い当たった事は”魔力を吸われた”可能性。

黒星草は魔王が世界中から魔力を吸収するために蔓延っていたものだという。もしその特性をこの黒星草も備えていて、生物にも魔力吸収が適応されるとしたら……!?

(いや、でも俺の魔力を吸い尽くすってなれば相当時間が……)

かかる。そう思っていた……んだけど。

「一瞬でも隙が出来ればこちらのものよ」

言うなりバなんとか痴幼女は俺の首筋に針を突き刺した。

「!? てめっ、何を」

「くくく。これは感度が五十倍になる薬だ」

「マジで何してくれてんだよ!?!?!」

どうしよう。

高難易度を誇り太古の魔導技術が息づく神秘的な迷宮が、なにやら触手草と感度倍増薬でエロトラップダンジョンに進化したらしい。

ぶち殺すぞ  
!!!!!!

## 55話 ▶ 千里眼のバシユトレーゼ（魔族バシユトレーゼ視点）

千里眼のバシユトレーゼ。

彼女は魔王軍幹部であるが、元々戦う力をほとんど持たないか弱い存在だった。影も薄く、幹部だというのにバシユトレーゼの事を知らない魔族も居るほどである。

しかし千里眼という特異な力を買われ、魔王の側近くへと仕えていたのだ。

そして魔王がたつた五人という数に負け、倒れたあと。彼女にある力が発現した。

自分と同じように魔王の亡骸から権能譲渡により力を授かった者は他にもいたようだが、バシユトレーゼは自分こそが最も魔王の寵愛を受けていたのだと確信した。

何故ならば受け継いだ力は魔王の存在を世に知らしめる、いわば魔王の象徴とも言える”黒星草”のもの。

それを得た時……バシユトレーゼは歓喜した。

嗚呼！ 自分は魔王様に愛されていた!!  
と。

この時、彼女が魔王へ抱いていた”信望”は”愛”へと変わったのである。

愛しい魔王を屠った人の英雄は憎らしい。だが魔王が死ななければその愛を身に受けることも無かったため、感謝もしている。

故に。考えた結果、バシユトレーゼは彼もとい彼女を魔族へ受け入れることで手打ちとしようと考えた。

魔王が最後の力でかけた呪いはどういわけか英雄の性別を変え

るもの。

バシユトレーゼはその意味を考えに考えて……そしてたどり着いた答えでもある。

おそらく魔王は自分を倒すほどの英雄に魔族の子を産ませ、繁栄への礎にせよと残された魔王軍に示したのだ。

さて、ならばそのための種馬は誰にする？ と考えた時。都合よく英雄に惚れた馬鹿が居た。

女になった英雄の正体に気が付いていなかったようだが、そこはさして重要ではない。これは使わない手は無いと彼の行動を視野に入れつつ、バシユトレーゼは暗躍を始めた。

「ああ、ああ！ 最愛なる魔王さま！ このバシユトレーゼ、魔族の繁栄をもってあなた様の弔いとさせていただきます！ 他の薄情な者どもとはわけが違うのです！」

恍惚とした表情で叫んだバシユトレーゼの英雄ミサオ観察は、その日から幕を開けた。

まず相手は魔王を倒したほどの猛者。女になったからといって、それは弱くなったと同義ではない。普通の方法で手籠めにするなどまづ不可能だろう。

現に魔王が倒された後、すぐに仇をとろうと英雄ミサオを追いかけたアルマデイオは無様に敗北している。その力を見るに、下手をしたら魔王と戦った時以上に強くなっている可能性すらあった。

ゆえにしばらくは千里眼を用い様子を見ることにしたバシユトレーゼである。

英雄ミサオ。

この男の何が怖いかと言えば、その成長速度だ。

数年前にぱっと現れたかと思えば、各地で魔王軍の邪魔をし続けた男。



見ていた限りたまたまその場に居合わせたから、といった理由が大  
半のようで特別正義感から戦っていたわけではなさそうだが、次第に  
その存在は魔王軍の中でも広まっていった。

強い相手との闘争を好むアルマディオがまずミサオをつぶしに向  
かったのだが、あえなく敗北。持ち前のしぶとさで生き伸びたもの  
の、その後も敗北記録は積み重なる。

そんなアルマディオを試金石にしてミサオの実力を測っていたバ  
シユトレーゼは、その力が日を追うごとに強く、大きくなっていった  
ことに戦慄していた。

——この男、何かしらの祝福ギフトを受けている。

そう確信する程度には、その強さは尋常ではなかったのだ。

女になってからのミサオはそのまま複数の土地を回っていたが、そ  
こには規則性を感じていた。案の定最終的に彼らが行きついたのは  
特殊な手順を踏まねば入れないであろう、半異界の精霊が住まう街。  
そこから先はより強力な結界が施されていたため、バシユトレーゼ  
の力をもってしても覗き見ることはできなかった。

が、その後の彼らを更に追う過程で、目的地の書かれた紙を手にし  
ている場面を見られたのは僥倖である。目的地さえ分かれば先回り  
して色々仕込むことも可能だからだ。

彼らが目指していた先は五つの迷宮。どれも恐ろしく難易度が高  
い。

(まあ、魔王様の力を授かった私にとっては何れも脅威ではないが)  
バシユトレーゼのそれは慢心でなく、事実。

現にこうして英雄一行を捕らえ、ミサオに薬を打つことも成功して  
いる。

これも先回りし、アルマディオにミサオの居場所を教え上手く使っ  
たからこそ。

単独で籠絡に成功すればよし、しないならそれはそれで最高戦力で

あるミサオを足止めし仲間と分断する一助となれば良し、と。

バシユトレーゼはアルマディオを利用した上で、先にこのこのこ迷宮の奥へとやってきたミサオの仲間を人質にするため捕らえたのだ。

この高難易度迷宮では自身の千里眼も効果は薄れるが、それは最奥で待ち受けていれば何も問題は無い。バシユトレーゼは、ただ待つているだけで良かった。

彼女らの抵抗は激しかったが、あらかじめ罫を仕込み、更には迷宮最奥の高位迷宮魔物すら黒星草の養分とし蔓の物理攻撃力を上げていたことで勝敗は決した。

……それもミサオ用に用意していた薬を一部用いなければ危なかったが。

感度を五十倍にする薬。

それは快樂を高める意味合いの他に、痛み膨れ上がらせる効果がある。

媚薬とよく混同されがちだが、”感覚全てを鋭くする”のがこの薬だ。

使い方によつては己へと用い、あらゆる感覚器官を鋭くすることで高スピードの敵に対応するための諸刃の刃ともなりえる。

精製方法が極めて難しかったため惜しくはあったが、それを使わねばミサオが来る前に彼女らを無力化するのとは不可能であろうと……薄めて霧状に立ち込めさせ、使用した。

効果はその分薄れるが、節約と的確に効果を与えるための賢い選択だったとバシユトレーゼは自負している。

突如として膨れ上がった痛み。その不意打ちは、強さゆえに痛み鈍感になった強者にほど効く。

目論見通りミサオの仲間達にも効果は靦面で、生じた隙に黒星草の物量でもって圧倒した。残念なことに相手の強さと黒星草自体の攻撃力を考えると殺せこそしないが、動きを奪うには十分。更には捕ら

えてさえしまえば魔力を吸収できるため、そのうち抵抗らしき抵抗も出来なくなるはずだ。

あとは捕らえられた仲間には動揺したアイゾメミサオに原液に近い薬を打ちこみ、こちらは快樂で封殺する。そのために黒星草が精密な動きを出来るよう練習もした。

「う……………つ。あう」

「あはははははははは！ どうだ？ 英雄、アイゾメミサオ。女の体で受ける快樂は気持ち良いか？」

「し、師匠！」

現在アイゾメミサオは太い蔓に拘束されており、細い蔓が服の間から入り込みその体をまさぐっている。その間魔力吸収も同時に行っているため、そのうち立つことも出来なくなるだろう。

もう一匹仲間がいたようだが、こちらは雑魚。薬を使うまでもなくとらえることが出来たので、現在は師匠らしいアイゾメミサオの痴態をよく見せてやろうと上からつるしてやっている。特等席だ。

(さて……………あの馬鹿が生きていれば蕩けたこいつをくれてやればいい。もしかたばっていたら他の魔族だな。誰が良いか)

先ほどアルマディオが空に落とされる場面が見えたが、生きていようが死んでいようがバシユトレーゼにとってはどちらでも良い事。

出来るだけ優秀な魔族を種馬にあてがうに越したことは無いが、なにもそれはアルマディオでなくともよいのだ。

バシユトレーゼは頭の中で有力な候補を絞ろうといくつかの顔を思い浮かべ始めたが……………

ブチリ。

「ん？」

何かを引きちぎったような音に尚を上げる。

すると目前には何かの影が迫っており、避ける間もなくそれはバシユトレーゼの顔を強かに打ち据えた。

「ぶべゅッ!」

無様な悲鳴を上げてしまった事にかつと頭に血が上がるが、自分の顔を打ったものがなんであるかを確認して「え」と困惑の音が零れる。

それは鳶だった。

アイゾメミサオを拘束していた太い鳶。

それが無残な断面を晒し転がっている。

「……………え?」

尻もちをついている自分に影が差す。

バシユトレーゼはおそろおそろ顔を上げ……………。

「ごんの、クソガキい……………! お仕置き of 覚悟はできてんだろ  
うなあああ!! お尻ぺんぺんじやすまねえぞテメエコラアツ!!」

「びゃああああああ!! お前、なんで!」

魔族のバシユトレーゼが言うのも変だが、悪鬼もかくやという表情をしたアイゾメミサオがそこに立っていた。

拘束していた鳶も、体をまさぐらせていた鳶も全て引きちぎられて  
いる。

(ば、馬鹿な! それほどの力、出せるはずが……………!)

しかし現にアイゾメミサオは拘束から逃れている。それもかなり  
の怒りを持ってバシユトレーゼをねめつけていた。

(まずいまずいまじゅい! この距離は、ダメだ! す、素の私に戦う  
力は……………!)

慌てて残りの黒星草に指示を飛ばしミサオを襲わせる。だが。

「しゃらくせえ!!」

襲う先から千切られる。千切られる。千切られる!!

ついには守るものもなくなって、バシユトレーゼは胸ぐらをつかまれ持ち上げられた。

「な、なんで」

時間稼ぎにもならない問いかけは単純に混乱から生じた疑問。

この作戦が完璧たりうるためにバシユトレーゼはここまで準備を費やした。薬の出来も完璧だ。

だというのに何故動ける!?

バシユトレーゼの問いかけに、ミサオは額にびくびくと青筋を浮かべながら叫んだ。

「ごちとら腹が痛くて死にそうなんだよこのスカタンがああッ!!!  
しかもメス落ちポイントまで溜まっちゃまっただろうがよどう責任取るんだこの痴幼女!!!!」

(あ)

よくよく見れば、いきり立っているわりにミサオの顔は今にも死にそうなくらい、青い。

……………どうやらバシユトレーゼは、相手の体調まで考慮に入れていなかったらしい。

## 56話 ▶ 窮地の後にく腹痛で死んでいます

この世で最も素晴らしいものはなんであるか。

富か？ 名誉か？ 愛か？

俺は今現在、この瞬間だけ。それは「ぬくぬく温まった布団」であると答える。

いや、この瞬間だけでなく冬の朝も「お布団最高！」と答えるかもしれないが……。今まで生きてきた中でこの瞬間こそが最もぬくまった布団は素晴らしい！ と声高に叫べる自信がある。

まあ、叫ぶ余裕は無いんですが……。

「ううう……」

体をまるめ、出来るだけ腹を温められる体勢になる。

「よしよし、ミサオ様。痛いですねえ」

布団の上から安心させるようなリズムでシャティが体をぽんぽん叩いてくれる。

その横では鎧を抜いたアシユレが茶器を用意していた。

「水分はしっかりとった方が良い。温かい薬湯は用意してあるからね」

ベッドの横からひよこつと顔を覗かせているモモの耳はしょんぼり垂れており、とても心配してくれている事が伝わってきた。

「ミサオママ、かわいそう……」

「こればかりは痛みについても、薬の効きについても個人差があるからねえ……。特にミサオは毒だけでなく薬への耐性も高いんだろう。良い効果も効きにくいようだ。……そのミサオに効果を出したんだから、バシユトレーゼが用いたあの薬は恐ろしいものだね。驚いた」  
「あれはもう勘弁ですね……」

ガーネットが困ったように自分が調合した薬を見る。

先ほど飲ませてもらったが、多少痛みが和らいだ気がしないでもないものの……。それもプラシーボ効果のようなものかもしれない。痛

い。

腹が……痛い！ あとなんか、腰もむず痒いような妙な痛さが……ある！

(うう……情けない)

美少女美女に世話を焼かれる状態だけを見れば美味しい案件だが、その理由が情けなくて泣けてくる。

しかも今、マジで立てない。火事場の馬鹿力的に苦難を乗り切った自分を褒めたいぜ……。

「ごめんねえ。僕がもう少し早く魔王軍の情報を掴んでいれば良かったんだけど……」

「いや、急なことだったしね。気にしないでおくれよシヤスビス」

「そう？　ありがとう、ガーネットちゃん。ミサオちゃんも遠慮なく寛いでいってね」

「あ……あざす。じゃない。ありがとうござい……ます」

こちらを気遣うようにそう述べたのは優しそうな魔族の男性。

……彼はガーネットの夫の一人である。

現在。天空迷宮を攻略した俺たちは、ガーネットの家でお世話になっていた。

ああもう……。天空迷宮、思い出すと本当に気が滅入るぜ。

魔族の痴幼女に妙な薬を打たれると、ドクンと体が脈打った。

力が抜けそこをまんまと黒星草の蔓に捕獲された俺は、今までこっそり読み漁ってきた(異世界に来る前は十六歳だったので大っぴらに十八禁本を手に入れられなかったのだ)エロ漫画みたいに触手もとい動く鳶に凌辱されるのかと血の気が引いた。

そんなマニアックなプレイ求めてねえんだよ!! いやノーマルでも願ひ下げだが!!

(触手はもう結構人権得てなかった? 表現が過激か、そうでないかだけで。メジャージャンルだよ)

(ここにきてお前の触手モノ評価とか聞きたくねえんだよなあボケがよ!!)

(わ、脳内だと元気。でも体は? ねえ、どんな感じ?)

案の定ニヤニヤと物見遊山を決め込んでいる魔王の言葉に、体へ意識が向いてしまう。

太い蔓は俺の腕と足をまとめて拘束し、細い蔓が服の隙間からしゆるしゆると侵入してきている。

蔓の表面が肌を触れるか触れないかの絶妙な距離感でかすめ、あるいはじらすように柔く締め付けながら恥部へ這い上がってきているのを感じた。

「……………」

【メスエロりんっ♪】

(がああああああっ!!)

唇をかみしめることで妙な声が出そうになるの堪えようとしたが、下されたメス堕ちポイント増加判定に発狂しそうになる。



妙な薬を打たれたからって、こんなモンにメス堕ちさせられてたまるかよ!!

焦った俺はどうか打開策を探そうと考えたが……間を置かずして、”それ”は来た。

「いッ!？」

先ほどまでの比ではないほどの激痛。それが……腹部から。

(こ、こんな時に波が……!)

生理の痛みをじくじくと継続して感じてはいたが、それには波とも言える周期があった。比較的ちよつとマシかも? となる時と、そうでないとき。先ほどまでは前者だった。

それがよりにもよってとんでもないタイミングで「痛みの周期」が俺を襲ってきた。

このまま痛みで気絶でもしたら、本格的に詰む!!

しかし。

(痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い!!!!?)

気絶すら許さない激痛が一気に膨れ上がり、俺の体と頭を塗りつぶした。

内臓を直に捕まれ引きずり出されているような感覚に、もうこのまま死ぬでは? まで考えたよ俺は。

しかし結果的にあまりの痛みにはバーサーカーと化した俺は自分を捕らえていた蔦を全て引きちぎり、その勢いで術者である魔族を捕らえることに成功したのである。

怪我の功名って使い方こういう時でいいんだっけ……?

……結局、その後仲間を助けたら気絶はしちまったんだけど。

シャティ達によれば魔族痴少女は「覚えていろ! 次こそは貴様を

連れ帰ってやる！」とお手本のような捨て台詞を残して逃げていったらしい。次なんてあつてたまるか!!

逃がしてしまった事をすまなさそうに謝罪していたシャティ達だったが、捕らえられた直後だったのだし仕方が無いと思う。今回は追っ払えただけで良しとしよう。

そして天空迷宮だが……最後に思わぬトラップがあつたものの、無事攻略と相成つた。

だが最奥にあつたお宝の中には求めていた宝物は無く、ただ散々な目に遭つただけだったと肩を落として帰路についた俺達である。

その後。転移魔法が仕える場所まで来ると、ガーネットの提案で俺たちはある場所へと移動した。

それがここ。ガーネットの家がある、フルリット砂漠。

(空調魔術使つてもらつてるとはいえ、外はあんなギンギラに太陽が照つてると言うのに……俺はなんで布団にくるまってしかも丸めた布団を抱えてるんだ……?)

太陽光を照り返し黄金に輝く砂丘が、窓から先に広がっていた。

## 本編を読まなくてもだいたいわかるかもしれない四章のあらすじ

「本編を読まなくてもだいたいわかるかもしれない四章のあらすじ！」

男に戻るためのアイテムを探すために賢者カリユキオスに示された迷宮の一つを目指したミサオたち。

その迷宮の近くということもあり、まず訪れたのは天空都市マシユラバだった。

マシユラバはシャテイの故郷でもあり、彼女はここから英雄を探し出し、その補佐に努め厄災の魔王を倒すことを使命として旅立ったのだ。

天空都市を訪れたのは、魔王を倒した報告をするためでもある。

そして到着するなり長の居城へ招かれ、公的な場に緊張するミサオの前に現れたのは有翼族族長、メルバティア・エラルディア。

彼女に報告をすませたシャテイだったが、それが終わると「巫女姫」の任を下りミサオと共に行きそのまま添い遂げると宣言した。

そのすぐ後に慌ただしくシャテイに連れられ迷宮へ向かう事となったが、訪れた迷宮で魔族アルマディオに襲われ、その攻撃によって起動した迷宮の機能によりミサオとルキは他の仲間達とはぐれてしまう。

その上アルマディオを含めた三人で迷宮の密室にとじ込まれる始末。

更にはそのタイミングでミサオに初めての生理が訪れ、それが引き起こす体調不良で身動きが取れなくなってしまった。

そんな中でも口説いてくるアルマディオ相手にようやく自分が魔王の呪いで女になってしまったアイゾメミサオであることを伝えることが出来たのだが、なんとアルマディオはミサオが元男だと分かっただうえでなおも求婚する。どうやらミサオを伴侶とし、自分が一生監

視することで魔王の仇を討つ代わりとしたらしい。

当然拒否した上でアルマディオを殴り気絶させた後、密室を脱出したミサオとルキ。

なんとか仲間と合流しようとするが、最奥近くで迷宮の奥から何かが押し寄せて来た。それは魔王が倒れたときに同時に枯れたはずの黒星草。しかしその姿は植物として群生していた時から変化しており、まるで意志を持って動く蛇のようになっていた。しかもその黒星草の中には拘束された仲間達の姿。

動揺するミサオたちの前に現れたのは、魔王軍幹部である”千里眼のバシユトレーゼ”。変化した黒星草は、彼女が魔王から受け継いだ力によるものだった。

かつて世界中から魔力を吸い取っていた黒星草の特性を引き継いだその能力によつて、ミサオは魔力を奪われ一瞬の隙が出来る。その際バシユトレーゼに”感度が五十倍になる薬”を打ち込まれてしまった。

そうして感覚を鋭くされたうえで蔦による拘束と籠絡するための快楽を与えられ、わずかな間行動不能となるミサオ。しかしそれは本当にわずかな間の事だった。何故なら生理による腹痛まで倍増されたがために、快楽墮ちなどしている暇など無かったからである。

増幅された痛みで死にそうになりながらもバシユトレーゼを撃退したミサオは仲間達を助ける事にも成功したが、苦難を乗り越え攻略した最初の迷宮には求めていた宝物は見当たらなかった。

迷宮を脱したミサオたちは休める場所を求めて転移。

その先はガーネットの家があるフルリット砂漠だった。

【ざっくりキャラ紹介】

※新規キャラ分のみ。

■メルバティア・エラルディア  
■種族：シャティと同じく白翼族。はくよくぞく 有翼族全体の族長を務めている。

■性別：女

■年齢：二百五十歳

■バシユトレーゼ

■種族：魔族

■性別：女

■年齢：三十五歳

■備考：

・二つ名は千里眼のバシユトレーゼ。

・魔王軍幹部。戦う力は弱いが、遠くを見通せる千里眼の能力を見込まれ幹部の地位を与えられていた。

・魔王が倒された後、その力の一部を受け継いだことで「自分は魔王に愛されていた」と歓喜。魔王を倒した英雄ミサオに報復するため行動を開始した。

・報復の方法は「ミサオを魔族に受け入れその力を子に受けつがせることで魔族に更なる繁栄をもたらす」こと。魔王の最後の呪いでミサオが女になった事を、そうするための魔王からの指示だろうと解釈した結果である。

・見た目は幼女だが服装センスが変態。黒いガムテープを巻きつけたような姿で、大事などころだけ隠している。ツルペタ。

【世界観、その他メモ】

■ 天空迷宮

- ・立方体が連なったような姿の空中に浮かぶ高難易度迷宮。
- ・迷宮そのものが古代に作られた巨大な魔導製品。普段は経年劣化とエネルギーの枯渇により機能を停止しているが、強い魔力を注ぎ込むと機能が回復。各立方体がパズルのように動き、探索者たちを惑わせる。

■ 白翼族<sup>はくよく</sup>：

- ・ 厄災の魔王を倒せる可能性を持つ英雄を探し出し、その英雄を補佐する使命を担っている。
- ・ 世界救済という目的の他、英雄を助けることで優先的にその血を一族に取り入れるという有翼族の生存戦略を行っている。

■ 他種族間の婚姻、子作りについて

- ・ 基本的に同族以外、他種と子をなせるのは最も弱く最も数における繁栄を得ている「人族」のみである。
- ・ 同族間でも例えば「草食獣」の獣人と「肉食獣」の獣人の間で子供が生まれることは稀有。生まれた場合、一世代に限り親の特徴両方を併せ持つ（二代目には引き継がれない）。
- ・ 個体値の水準が身体、魔力共に高く寿命も長い竜族などは同族間でも子が出来にくく、種族存亡のため定期的に人族の血を迎え入れる必要さえある。

■ 過去の英雄：

これまで厄災の魔王を倒してきた英雄や、災厄の後に現れ種を救った「職業：女神」の力を得た者は全て人族である。

■ミサオの能力：

・”レベルアップ”は他対象のレベルも測定できるが、相手からの一定以上の好感度が無ければ視認できない。自分のレベルを見る時は「ステータスオープン!」と言わなければならない。(ノリで試したらドンピシャ正解だった。一人の時はノリノリで言うが同郷の魔王に見られていると恥ずかしさにキョドる)。

・レベルは【身体能力】【魔力保有量】【技量】、その合計値である。

■ミサオパーティの四章現在のレベル

- ▶ミサオ：156 (魔王討伐前は99)
- ▶シャティ：88
- ▶アシュレ：75
- ▶モモ：67
- ▶ガーネット：84
- ▶ルキ：25

## 五章

### 57話 ▶留守番くガーネットのハーレム家族

現在俺は顔のいい男三人を前に、コンプレックスをぐさぐさ刺激されながらも曖昧な笑みを浮かべていた。

……薄々思ってたけど、この世界って顔面偏差値高くない？ いや俺の周りに偏差値激高人間が多いだけといえどそうなんだけど!! 錯覚しそうになるし、俺は現在自慢の筋肉を失ってるので劣等感がヤバい。

うう……! 女の子なら見惚れるし、アルマディオみたいな馬鹿ならそんな事考えずにすむのに……!

けどお世話になっっている手前、そんな事を考えているとはおくびにも出してはならないのだ。うむ。

ちなみに彼らだが、三人ともガーネットの夫である。

「ねえ、ミサオちゃん。旅の間はガーネットちゃん、どんな様子だった？」

「妻は面倒見がいい分、自分の事を後回しにしがちなので……。体調を崩すなどということとは、なかったですか？」

「あいつ、頼れるけどよくからかって来るだろう？ 苦労はかけていなかったか」

「えつと……」

彼らからの質問にしばし言いよどむ。

顔面偏差値の高さに圧倒されていて、思考がワンテンポ遅れたのだ。

気さくで穏やかなシャスビスさん。

丁寧で知的なルーファンさん。

兄貴的な雰囲気な親しみやすいライルバートさん。



現在俺の世話焼いてくれている彼らの名前である。

ガーネットの夫はまだいるが、彼らが今週の家事担当、らしい。他の旦那さんたちは仕事などで出かけているのだからか。

子供たちの行動もそれぞれで、まとまりがありながらも個人が自立して過ごす家庭だなと感じる。家庭というか、ガーネットを長とする部族って言った方が近いかな。印象としては。

いや、にしても本当……二人ともすげえイケメン。これは他の旦那さんも揃ったら高級ホストクラブなんて目じやないくらいの絵面になりそうだ。高級ホストクラブよく知らんけど。

容姿に自信の無い俺はそのことに悔しさを覚えるが、自分の器の小ささを自覚するだけだったのです。ごすと胸の奥にしまっておいた。

『しまえてないけど?』

(俺の思考駄々洩れのお前にしたらそうだろうけどよ! 表に出ないようにしてるって意味だっつーの!)

考えてることまんま伝わるのマジで嫌だなクソがつ!!

『……その程度の拒絶ですませてる、君がおかしいんだけどね』

(ああん? なんか言ったかよ)

『今さらなんだし慣れたらどうだいと言ったのだよ。君と僕の仲、だろ?』

(ぜっつってー嫌だし!! いいか? 今度こそ元に戻るアイテム見つけてー! お前ともおさらばしてやっからな!!)

『ふふっ。そう。なら、せいぜい頑張るといいさ』

魔王に噛みつきつつ、それがバレないように笑顔を取り繕う。

俺、この短い期間でめちゃくちゃ表情筋鍛えられたんじゃないか?

今のところ魔王に話しかけてる時に周りから変な顔されたこと無いし。……多分。

えくと、とにかく答えないとだな。

聞かれたのは旅の間のガーネットの様子……だっけ。

「んー……体調崩したりとかはしてなかったつスね。むしろ今みたい  
に俺が世話になるばかりで……奥さんに甘えちゃって、すんません」  
人妻と旅。字面にするとかなりイケナイ雰囲気だ。

しかも魔王を倒した暁には筆おろしをお願いします！ と頼んで  
いたなんて、さすがに言えない。

『なにを今さら』

(うつせ。一応……その！ 旦那さんたちご本人を前にしたら、なん  
か申し訳なくなんだろうが！)

『ほほう？ ハーレムしたいだなんだ言ってる奴が実に安い罪悪感  
じゃないか。笑う』

(く……っ)

『ミサオは、あれだよね。「望みの反対」を作用させる呪いで性別が反  
転するくらいに性への欲求が強い割に、そっちへ梶切り出来るほど思  
いきれてないんだよ。全てが中途半端。その微妙すぎるゴミみたい  
な価値観、矛盾がありすぎて僕からしてみたらほんつとお笑い。く  
くっ』

(二回も笑うって言いやがったなテムエ……！)

『うん。いつも最高の娯楽を提供してくれることに感謝しているよ』  
(~~~~~！)

あいかわらず魔王の奴、魔王の癖に妙に倫理観的に納得せざるを得  
ないツツコミしやがって。

ええい、無視だ無視！

俺が密かに魔王に対し威嚇していると、それを落ち込んでいると勘  
違いしたのか旦那さんたちは気さくに声をかけてくれた。

「ああ、世話とか……そういうのは気にしなくていいって。ガーネツ  
たちちゃんが好きでやっている事だろうしね。僕らとしても魔王様を  
倒してくれた君には感謝しているし。……大変だったろう？ 男な  
のに女にされてしまうだなんて。魔王様も死に際に妙な呪いをかけ  
たものだね」

「だった、というより現在進行形で大変そうですね。薬湯はどうですか？」

問われて体調を顧みる。

まだ体は重いが、死ぬような痛みはすでにない。ここ数日ずっとガーネット特製の薬湯を飲ませてもらっていたが、ようやく効果を発揮してきた様子だ。

あの痴幼女魔族の妙な薬のせいで必要以上に消耗した分、マジで余計な体力使っちゃったからな。よく休んで体力自体が回復してきたのも大きいんだろう。

今回の事でいくらレベルアップチートがあっても、純粋な体調不良には無力って事を思い知った。

奇妙ことに先日に限ってはそれが窮地を脱するきっかけともなったのだが、これが毎月来るのかと考えると鬱になる。ぐああああ!!

「あー……と。はい。今はわりと、大丈夫になりました。もらった薬湯もだいぶ効いてるみたいです」

内心で呻きつつ、俺は現在の体調を伝える。

「それは良かった。……というより、そろそろ生理の期間が終わるのでしょうね」

「でもまあ、無茶せずくつろいでくれや。俺達としても世界を救った英雄様を持って成せて嬉しいしな」

「お、お世話になります。はは……」

気遣ってもらえるのはすごくありがたいんだが……。

元男と知られながら生理痛に苦しんでいるこの状態を、同じ男である彼らに知られてあまつさえ面倒まで見られている。死ぬほど恥ずかしい。どんな羞恥プレイだよ。

ほんつとに、ありがたくはあるんだが!!

……。ちなみにこの旦那さん三人の内の一、シヤスビスさんなのだが……。彼もガーネットと同じく元魔王軍で、その時に築いた人脈を

使って現在の魔王軍について調べてもらえるようガーネットがお願いをしていたらしい。そのことを俺はここに来てから初めて聞いた。

シャスビスさんは例の襲撃してきた痴幼女のことを聞いて「情報に合わずに申し訳ない」と謝ってくれたが、とんでもねえ。俺達の考えが至らない所を補い、動いてくれるガーネットとそれに応じて調べるため動いてくれた彼には頭が下がるばかりだ。

……特に単純な力だけでは乗り切れなさそうな場面を経験した後では。

痴幼女が手に入れた能力……黒星草の特性を引き継いだ魔力吸収って、普通に厄介なんだよな。

単独ならまだしも、奴は「薬」を使って搦め手にしてきた。痴幼女の目的が俺の死だった場合、「感度を五十倍にする薬」とかいふ馬鹿みたいな（いや、これはこれで洒落にならねえのだが……）ものを使わず即死級の毒を使えば事足りる。

いくら強くなったって、一瞬でも隙を作られるってのはそれだけ怖い事なのだ。

すでに「そういう力を持ったやつが居る」と分かった分、まだ意識は変わるが。

けど二人目が出て来たって事は、あれだ。

厄介な魔王の”権能”を受け継いだ奴が、他にもいる可能性はぐんと上がる。

シャスビスさんが調べてくれたのはまさにその件。

魔王の権能をギフトとして授かった者が何人いるか、というのが調査内容だ。

痴幼女……千里眼のバシユトレイゼとか言う奴が天空迷宮で新たに分かった権能保持者なわけだが、彼が言うのは確認できただけでもあと四人はいるらしい。結構多い。

その力の内容までとは行かなかったようだが、わずかな期間で情報を入手してくれた手腕には舌を巻く。

これからの程度俺にちよっかい出してくるのかは分からねえけど、人数だけでも分かったのは何も知らないより遥かにまだだから

な。

今後もし引き続き調べてくれるようだし、ありがたく頼らせてもらおう。

色々世話になったしなってるしで、次に来るときはお礼に何か土産持つてこなきゃだなあ……。

……とまあ、そんなシヤスビスさん含む三人にお世話になっている俺だが、なぜそうなったかといえば。

仲間達が現在出かけており、俺一人ガーネットの家で留守番と相成っているからだ。

俺が元男であると知った彼らは「アタシたちがママたちの代わりにお世話する!」と張り切っていた娘ちゃん達を遠ざけて、自分たちが様子を見ていると引き受けてくれた。……ちなみにガーネットの子供はほとんどが女の子である。

これは、うん。あれだよ。

俺が元男だから娘ちゃん達に変な事しないか心配っていうより、俺の事を考えての行動なのでマジでありがたいんだよな……。

娘ちゃん達、すげえ可愛いんだけどさ……今の俺にとっては……うん。

俺は娘ちゃん達に絡まれた時のことを思い出し、虚無に心が支配されそうになったので首を横に振った。

今は深く考えるの、よそう。

ガーネットの夫達はやたらと嫁……ガーネットの事を聞いてくるが、そこに元男と一緒に旅していた俺に対して向けられる嫉妬心のよなものは見受けられない。

話には聞いていたが、ガーネットんところはめっちゃくちや穏やかに逆ハーが保たれているようだ。

なんていうか、一人の女を囲う男達っていうより……家族っていう

大きなくくりの中で生きているんだろうな。それぞれガーネットを愛している事はしつかり伝わってくるんだけど。

魔族にとつてはこれが通常なのか、それとも他はもつと嫉妬心ピシバシだったりするのか。

造詣の浅い俺にはちよつとばかりわからないぜ。

でもこれはハーレム主に憧れる俺にとつてだいふ理想だ。

俺は美女や美少女にいつぱい愛してもらいたいけど、よくよく考えれば恋だの愛だのという感情には「嫉妬」や「闘争」がつきものである。

フィクションとして見る分には美人たちに愛されて羨ましい！とか、ハーレム主を取り合う女の子たちの挙動が可愛い！とか思えていたけど、実際に自分を取り合つてギシギシされたら浮かれるどころじゃなくなるだろうし。

……ん？ でもそうになると、今の俺の環境もなかなか理想なんじゃないか？

みんな俺の事を慕ってくれてはいるけど、それぞれが仲良くて信頼しあっている。

このまま俺が男にさえ戻れば、憧れかつ穏やかなハーレム生活が……！

『今のまま、ならね。夢で見ただけの女に惚れるくらいチョロい君が、男に戻って今後他の女に惚れない保証なんてないじゃない。……今のメンバー以外の女を求めた時、彼女たちは黙っているかな？』  
(うゝっ)

この魔王、正論パンチしかしてきやがらねえ……！

俺は今日も今日とて魔王に口で勝てない事に歯ぎしりしつつ、意識を旦那さん達に切り替えた。

こんな奴と話してるだけ、時間の無駄！ 無駄！

「あの。そういえば、仲間達が探しに行っている迷宮についてシヤスビスさん達は何か知ってました？」

迷宮。

……そう。

何故転移先にガーネットの家近くを選んだって、この近くにも俺達が目的としている迷宮が一つあるから。

ガーネットはそれを加味した上で、俺が自分の家で良く休めるようにとここへと転移を勧めてくれた。

しかし”場所が場所”だけに正確な位置が分からず、彼女たちは現在探索者であるルキも連れて場所の特定に出かけてくれている。

「いや。君たちから聞くまで、この周辺にも迷宮があるとは知らなかったな」

「世界一の大賢者……カリユキオス様、でしたか。名前こそ存じておりましたが、本当に知識が豊かな方ですね」

なるほど、と頷く。

だよなあ……。賢者が目的地を示してくれるまで、迷宮近くに住んでいるガーネットも知らなかったくらいだ。

こんな見通しだけは良いだっ広い砂漠に迷宮があるだなんて、迷宮マニアと言いつい換えてもいいくらい迷宮を踏破している賢者くらいしか知らないだろう。

件の迷宮は、この見通しの良い砂漠の“見えない場所”にあるのだ。

次に俺達が目指す迷宮は、太陽光で黄金色に輝く砂に埋もれた地下迷宮。

天空から地下とは、またふり幅がデカいもんだぜ。

俺も探索についていこうとしたのだが、慣れない体調の後に慣れない気候の中出歩くのは危険だからもう少し休んでいろと布団に押し

込められてしまった。

『彼女達もなかなか過保護だよねえ』

魔王がくすくす笑うも、それについては俺も同意見。

気遣いは嬉しいけど、なんかこう……！ モモとルキ以外みんな年上だからか、俺に対する扱いがいちいち子ども扱いなんだよな！

お姉さま方に甘えられることは大変美味しいものの、男としての矜持が素直に受け入れることを邪魔する。

過保護と感じるのは俺が女になってからのため、さらに心情は複雑怪奇だ。

このややこしい状態も、男に戻れたらいい感じの所に納まるのかな……納まるといいな……。

バタバタバタツ

「！」

俺が仲間達の俺に対する対応に複雑な思いを抱いて悩んでいると、部屋の外から賑やかな足音が聞こえて来た。

「も〜！ パパたちばかり、ずるい！ アタシたちもミサオさんのお世話手伝うのに、自分達ばかりおしやべりして〜！」

「そうよそうよ。私達も色々お話しきたいのです〜！」  
「ね〜」

足音のあと、どかんっ！ と弾丸のように部屋に飛び込んできたのは、ガーネットタによく似た赤髪に褐色の肌を持つ少女“達”。

（うわあ！ 来た!!）

思わず布団を顔の位置まで上げて隠れるような動作をしていると、ルーファンさんが「やれやれ」といった様子で彼女達を嗜める。

「おや、いけない子ですね。他の子まで来たがるから、部屋には入らないようにと言っていたはずですが。客人にご迷惑です」

「だってだってだって〜！ ずるいんだもんっ！ ねっ！ ミサオさん。アタシ達ともお話ししようよ。体調もよくなってきたんでしょ



? 英雄さまのお話、聞きたいなあ〜」

「わたしも!」

「聞きたいのですう〜!」

「わあ!」

彼女達は言動こそ幼げだが、そのボディは実った果実の様にたわわというか、ボリユームーミーというか……!

ぽんつとベッドの上に飛び乗られたと思ったら、腕をとられてその豊満な胸を押し付けられた。

……更に、キラキラした目での上目遣いである!!

控えめに言って可愛さの化身!!

「あー。レイニイたちが抜け駆けしてってる。いけないんだー」

「私も是非ミサオさんとお話してみたいのですが」

「わたしもわたしも! ねえねえ。お部屋入ってもいい? あ、もう入っちゃったけど! キャハハハ」

口々に言い、ぞろぞろ入ってくる美女美少女美少女美少女……。

あつという間にベッドの周りに(見た目だけは)ハーレム完成である。

だが彼女らの眼は完全におもちやを前にした子供のそれだ。

俺の反応を楽しみながら口々に話題を振ってくるも………全員、距離が近い!!

日焼けも気にしないとばかりに服装もなんかみんな薄着だし!

アングルの胸の谷間とか大胆な太もとかめちやくちや見えるんですけどおおおツ!!

天国だけど地獄!! 俺の理性がピンチ!!

今めっちゃ男として鼻の下伸びそうなんだけどメス堕ちポイントの野郎がガバ判定だから少しもデレデレできねえんだよクソが!!

絶対これにデレついてもメス堕ちではないんだけどな!!

実は一度、ガーネット達が出かけてから似たようなことになったがために旦那さん三名が出動してくれたのだ。

それでも我慢できなくなったらしく、こうして押しかけられてるわけだが!!

『ガーネツタの子、思ったより大きい子ばかりだったね』  
(それな!!)

ガーネツタが魔族で人間よりも長く生きるって事は承知していたつもりだけど、なんとなく子供たちはもう少し小さいと思っていた。だけど今思い出してみれば「娘たちの生理の時も薬湯を煎じてた」的なこと言ってたもんな!? そりゃ大きい子もいるよ! 最年少っぽい子は五歳くらいに見ただけど! 上と下の年齢差すげえけど!!

俺は必死にきらびやかで可愛らしいガーネツタの娘ちゃん達を前に、メス堕ちポイントが溜まらないよう堪えながら……危険地帯の中で身を震わせるのだった。

あああああ! 早く男に戻って素直にデレデレした  
iiiiiiiiiiii!!!

## 58話 ▶ 地下迷宮を求めてく馬鹿が死ぬほどしぶとい

天国と地獄って両立するもんなんだな……と俺が知ってから数時間後。

「ミサオ様く！　ただいま戻りましたわ！　お体の様子はいかがですか？」

「ん。そっちは大丈夫」

「それはよかったです！　わたくし、いっぱいいっぱい、心配していましたのー！」

きゆるくん！　と星やらハートやらを飛ばしている幻覚が見えるような満面の笑みで俺に抱き着いてきたシャティ。

それと同時に無敵艦隊級の柔らかく豊満な幸せ谷が俺に体に押し付けられるが……それに照れるよりもまず、しみじみ呟いてしまった。

「シャティに慣らされてなかったら危なかった……」

「？」

「こつちの話」

半笑いで答える。

先ほどまでガーネットの娘ちゃん達によるメス堕ち耐久ヘヴンヘルでなんとか耐えられたのは、常日頃からこの国宝級のおっぱいに慣らされていたおかげである。

物量に押し切られそうになったが、それでもなんとか耐えた。

いや本当……凄かったな……押しが……。

ガーネットの娘ちゃん達の好奇心は凄まじく、シヤスピスさん達三人が窘めてもなかなか部屋から出て行ってくれなかった。

つまり俺は数時間、あの楽園で耐えたのである。

幸いなことにメス堕ちポイントは溜まっていらないが、改めて考えると女の子にデレつくのはメス堕ちとは違うんじゃないか!!　って

思う。

「けどそんなものはこの職業様ククラスには関係ないらしく、こんなことで!? って場面で溜まるので片時も油断できない。」

俺が男に戻るためには、鋼の精神が要求されるのだ。

「どうやら娘たちが迷惑かけたようだね」

なにがあつたのかを察したのはガーネットタで、愉快そうに笑っている。

わ、笑い事ではないが！ いえ大変お美しく愛らしい娘さん達でしたが！

と、ともかくだ。そのことはもういい。それより気になるのは……。

「迷宮はどうだった？」

気を取り直して仲間達に問いかけると、それに答えてくれたのはアシユレだ。

眉尻が下がっているので様子はかんばしくなかったことが窺える。

「完全に入り口が砂で埋もれていたよ。賢者殿の導きが無ければ、この辺りに迷宮があると知る事すら叶わなかっただろうね」

「だねえ。長年近くに住んでいる私が知らないくらいだ」

ガーネットタが頷く。

「一応ギルドで記録に残っている事は事前に確認しましたが、それもかなり昔で……というか、おそらくその記録を残したのがカリユキオス様でしょうね。もしかすると、天空迷宮以上に手つかずの迷宮である可能性ががあります。場所が分かっても現状があの様子では大抵の者が諦めるでしょうし……」

「入るだけでも苦労するとくれば、割に合わないからね」

熟練の冒険者であるアシユレの他、シャティとガーネットタの眼から見てもなかなか場所自体が困難らしい。

でもそれは見方を変えれば希望でもある。

攻略者がいなければいけないほど、迷宮にお宝が残っている可能性は高いのだから。

……にしても。

「よくそんな場所見つけられたな……」

今の言いつぶりだと、だいたいの場所しか記されていない賢者のメモから入り口の場所を完全に特定したっぽい。

その「完全に埋もれている」という入り口をだ。

「それは、この子達が頑張ってくれたからね」

そうガーネットが肩を押して前に出したのは、誇らしそうに胸を張るモモと照れくさそうなルキ。

「モモの感知で封印結界の魔力を感じ取っておおよその位置を割り出してから、ルキが詳しい位置をつきとめたんだよ」

「おっ!! すっごいじゃん、二人ともー!」

素直な感嘆の声が出る。

するとモモの尻尾が嬉しそうに左右に揺れた。

「……ミサオママ、大変そうだったから。元気出してほしくて、頑張ったの。ね、ルキ」

「はい! モモ先輩の力が無ければ難しかったですが……」

「それは、こつちもおなじ。どれくらい下に埋まつてるかまでは、わからなかった」

「そ、そうですか……? へへ……。お役に立てたのなら、嬉しいです」

そう顔を見合わせ笑ってから、二人は誇らしげに俺へと報告してくる。

つーか知らないうちに仲良くなれたみたいだな。どうも共同作業したことでモモからルキに対する壁が少し下がったらしい。

モモ、なんだかんだ「先輩」って呼ばれて喜びつつもまだルキのことを微妙にライバル視していたっぽいから、ちよつと安心だ。

……俺が見てない所でつてのが寂しいけど。

『なに。ミサオ拗ねてるの?』

(は、はあ? 拗ねてねえし)

魔王め、変な事を言うなよ! 俺はそんなに心が狭くない。

……………ま、まあ?

俺を親のように慕ってくるモモが弟子とはいえ同じ年頃の男と仲良くなったり。

俺の事を師匠と慕うルキが俺以外に尊敬の念を向けたり。

その二人がなんだか「やったね!」という仲良しな雰囲気なことに、まったく思うことが無いわけでは…………。

『うっわあ。心狭いねえ』

(だああ! もうお前、本当に嫌!)

く、くそう…………! 考えが隠せないのマジで嫌だぜ。さつさと男に戻ってこいつともおさらばしてやる…………!

ええいつ!! そのためにも迷宮攻略だ!

しかし今聞いた限り、どうも天空迷宮とは違った意味で厄介な迷宮のようである。

「…………にしても、砂に埋もれてんのか。どうすっかな」

「魔法で吹き飛ばそうにも、生半可な力ではすぐに砂が元に戻ってしまうでしょうし…………」

「強すぎても入り口ごと吹き飛ばしてしまうだろうからね。そうなれば中の迷宮魔物が出てきて、この辺りに住む者の迷惑になるだろう」

アシユレの言葉に最もだと頷く。

「……………」

「ん?」

ルキがなにやら顔を青くしていたので、少し考え…………頭をわしゃわしゃかき混ぜておいた。

おそらく以前のパーティで攻略した迷宮から解き放たれた魔物もたらした被害を思い出しているのだろう。今は元気なようにみえるが、まだつい最近の事だ。

その時の仲間も死んでしまったし、思い出すには酷だろう。

アシユレが「しまった」という顔をしていたけど、まあ……こういう事もある。

こういう時にフォローするのは師匠の役目だよなと、俺は言葉を選んでルキに告げた。

「強くしてやるから、強くなれ」

言うてから「シンプル過ぎるし特にフォローになってねえ!!」と内心膝をつく俺だったが、ルキはきゅつと唇を引き結んでから相好を崩してくれた。

……師匠、頑張らないとなあ……。

そして迷宮への入り方について頭を悩ませる俺達だったが、ガーネットが口元に手を当てながら何かを思い出すように呟いた。

「……砂喰いが居れば、あるいは」

「砂喰い？」

「ああ。滅多にいないんだが、砂の成分を好んで喰うミミズに似た魔物が居てね。そいつの体表から出ている粘液は砂を食いやすいように固める性質があるんだよ。だからそいつを連れてこられたら、砂を食い固めて入り口までの道を作ってくれるだろうさ」

「へー！ 便利な奴がいたもんだ。じゃあそいつをとっ捕まえてくればいいんだな？」

「いや。……希少な生物でね。野生を探すのは難しい」

「そうなの？ じゃあ……。………ん？ 野生？」

ガーネットの言葉に引っかけかりを覚え、そこからピンっと思いつく。

居たわ。

魔物を好きに召喚できる奴。

ガーネットは察した様子の俺を見て、ひとつ頷いた。

「アルマディオが魔王様から受け継いだ眷属召喚。それが一番手っ取り早いだろうね」

「！ やっぱりそうか！ ……よし」

俺はガーネットに笑顔を浮かべ、ぐっとガッツポーズを作りながら言った。

「この迷宮、後回しにしようぜ！」

即決だった。

あんな奴の協力を得るくらいなら、他でアイテムが見つからなかった時の最終探索地に残しておいた方がマシだ！

第一、協力とか……ねえよな。

あいつ俺の事好きとか妙なこと言ってるけど一応魔王軍で、敵なわけであって。

つかせつかく空から突き落とすんだし、死んでないにしても二カ月くらい重傷で居てほしい。

だが俺の願望は秒で否定されることとなる。

「はーっはははははははははははははははは！ 話は聞かせてもらったぞアイゾメミサオ！ 俺様の力が必要らしいな!?!」

「ふっふっ」



耳に煩い高笑い。ここに居ないはずの声が思いのほか至近距離で聞こえて素直にむせた。

なん、なんだあ!?

俺が声の方向を見ると、堂々と部屋の入り口に立っている馬鹿が居た。

なんでお前ここにいるんだよ!!

狼狽しているとバタバタと複数の足跡。多分娘ちゃん達だ。

「お母さまー! アルマディオおじさんが勝手に入ってきたー!」

「おじさんと呼ぶな!! おじさまと呼べ!!」

「ええ〜? たいしてかわらなくなーい?」

「俺様は様付けされる方が好きだ!!」

「あははっ。おじ様、相変わらず面白い方ねえ〜」

親戚とはいえ何故だかこの不法侵入者に娘ちゃん達はどこか歓迎ムードだ。俺としては今すぐに帰ってほしい。

というか叔父姪の親戚付き合いとかあったんだ!?

賑やかになった室内にしばし思考が持っていかれるが、はっと我に返る。

「テメエ、アルマディオ!! なんて居やがる!!」

「おお! ついには俺様の名前を憶えてくれたのか!!」

し、しまった。つい。

いや今そんなことはどうでもいいわ!!

「空から落としただけじゃやっぱ足りなかったか! 表出るやぶつとばしてやる!」

「み、ミサオ様。少々落ち着かれては? ここはガーネットの家の中ですし……」

どうどう、とばかりにシャティにおさえられる。

そ、そうだったな。つい気が立ってしまった。人んちの中で暴れるもんじゃねえや。

……でも、アルマディオの方は大丈夫か? 前の襲撃の時は姉であるガーネットを普通に攻撃していたし。いやでも姪っ子たちに懐かれてるっばいしな……距離感が分からねえ……。

「ところで！ 俺様に何か頼むことがあるのではないか？」

うわヤメロ。めちやくちや期待のこもった目を向けてくるな。

「無い」

「あるだろう！ 砂喰いが必要なんだろう!!」

「全部聞いてたんじやねえかテメエ」

やっぱりあの痴幼女何が何でも潰しておくべきだった。こいつが俺の場所を特定できるのってあの痴幼女の力だろ？ 千里眼が使えららしいし。

「ミサオ。本人は張り切っているようだし、せつかくだから頼んだらどうだい？」

「ええ〜……？」

「そう嫌そうにしないで」

渋る俺にガーネットは可笑しそうに笑っている。

「フン。あなたのためではないぞ？」

「はいはい、わかってるよ」

「アルマディオくん、相変わらずみただねえ。魔王軍の幹部だっけ？ いやあ、出世したようで義兄さん感動だな」

「元幹部の貴方に言われてもな……」

しれっと会話に入ったシャスビスさん、あんた魔王軍の幹部でいらした!?! 道理で人脈残ってるはずだよ。

……にしても、こうも目の前で普通に会話されると意地を張ってる俺が恥ずかしい奴みたいにな気分になるな。なんつーか、ダサイ。

……しようがねえ。ダメもとで頼んでみるか。

「おい馬鹿」

「……………」

「……………おい、アルマディオ」

「なんだ！」

め、めんどくせつ。

まあこれから頼みごとをする相手に馬鹿って言う俺も俺なんだけど。……って、なんでそんな気遣いの心をこいつにもたなきやいけな

いんだよ！

あああ、もう!!

いいや、さくつと言っちまえ！

「砂漠の迷宮へ入るために砂喰いって魔物が必要だ。眷属召喚、頼めるか?」

「はっ、容易い御用だ！ 当然その後は結婚式だな?」

「なあ、こいつ砂に埋めようぜ」

第二の迷宮、やっぱり後回しにするべきかもしれない。

## 59話 ▶ モテとはく惚れた弱みに付け込もうとしてみた

フルリット砂漠の地下に埋もれた迷宮。

入り口を掘り起こすためには「砂喰い」という魔物を使うのが有効のようだが、その魔物は希少だという話だ。

そこで「眷属召喚」という魔王の権能を引き継いでおり、魔物を従えるor自らの魔力を糧に新たに魔物を生み出せるアルマディオの力を借りるのが手っ取り早い……と。

余談ではあるが、魔王の能力に関して「権能」って表現されてるの前から気に食わねえんだよ……。誰になんて権利を与えられてるってんだよあんな奴に。

この辺は異界渡りの際に身についた自動邦訳の兼ね合いかもしれないから、文句を言っても仕方ないのだが。

ともかく、ざっくりまとめるとこんな感じである。

しかもアルマディオはめちやくちや乗り気だ。

本当にこいつ、何？ もともと敵対関係のはずなんだが？

(これで結婚式だ何だとほざいてなければな……)

そりや自分の上司を討った宿敵の頼みを、見返りも無しにきく義理は無いだろうが。見返りの内容がおかしいんだよ。

本当に何度考えてもこいつは俺がこうなる前の姿も知ってるのに「嫁としていける！」って思ったのか理解に苦しむ。職業技能クラススキルである

【魅了チャーム】があったとしてもだ。

初対面時から何度も何度も棒を投げたら拾ってくる犬みたいな勢いで付きまとわれてはいたが、これまで男として接してきた相手にそう簡単に嫁だ惚れただのいう感覚は俺には理解できない。

元、でも男は男じゃん！ 男の姿を知ってるじゃん!!

俺の仲間に関してもそうだけど、この世界マジで性認識というかそ

の辺の寛容性凄すぎないか？ それともこれって俺の周りにそういう人たちが集中的に集まってるだけ???

賢者が示してくれた俺の求めるアイテムが存在する可能性がある  
迷宮の残り数は四つ。

(……やっぱ、無理にここから攻略する必要もないかあ……？ わざわざ入り口を探し出してきてくれた皆には悪いけど、こういう形であれこいつに借りを作りたくねえし……)

『いいの？ 君の可愛い愛娘や愛弟子くんが、頑張って探してくれたんじやあないか』

すかさず俺の思考に罪悪感を植え付けようとするな魔王テメエこの野郎。

『あんなに誇らしげで、嬉しそうにしていたのにねえ』

囁くように俺の耳元へ良心の呵責を刺激する言葉が流し込まれる。  
こ、こいつ……！

俺は苦虫を五百匹くらい潰したような顔でため息をつくつと、渋々とアルマディオに声をかけた。

「おい馬鹿マディオ」

「罵倒と名前を混ぜるな！ ……………。いや、しかし愛称と思えばなかなか……」

抗議しつつもすぐに自分のいい方向に捕らえる前向きさが怖い。  
ポジティブの塊かよ。

くそつ、しょうがねえな。やっぱり普通に呼ぶか。

「アルマディオ。お前、俺が元男で魔王の仇のアイゾメミサオってのは理解したんだよなあ。その上で俺を落とそうってのが、どれだけ難しいか分かってるか？ 俺は女の子が好きだし、俺より弱いお前じゃ力づくも出来やしねえ」

出来るだけ見下すように事実を述べる。

せめてマウントだ。マウントをとるんだ。俺のが上つて事をしつかりすりこんでやらねえと、こっちのメンタルがやられる。基本構造がネガティブ思考の俺にとってポジティブ野郎は天敵なんだよ。

「む……失礼な。愛した女を力づくでどうこうするような無粋な輩と思つてほしくないものだな」

「男！ 男な！ 俺、男!! 愛した女とか言うな鳥肌立つだろ！」

「？ ならば愛した人間とでも言えばよいのか？」

「なんなんだよその無駄な包容力！ 性別の概念すら超越して来るな!!」

だ、駄目だ。プライドをぼこぼこにしてやろうと思つたのに向こうのポジティブさが上回ってくる。ちよつと分けてほしいくらいの前向き力だぜ……！

陰キャの俺はその前向き加減に慄きつつ、必死で仕切り直そうと試みる。

「と、ともかくだ！ お前が俺とどうこうなりたいなら？ いやどうこうなるつもりはねえけど。……ゴホン。結婚だなんだ飛躍する前に、俺の好感度を稼がなくちゃいけねえよなあ!? つまり俺の要求にお前はどうかあつても領くしかねえってわけだ！」

何が言いたいつて、こっちの要求は呑んでもらうがその報酬は「俺からの好感度が上がるかもしれない」可能性。結婚などもつてのほか、という事である。

すつげえ嫌だけど、惚れた弱みに付け込ませてもらおうつてわけだ。

「むう……。いいように使われるだけのよな気が……」

気が、というよりまさにその通りだよ。

だけどほんの少し。……ほんの少しだけ、罪悪感がある。

それはこいつが【魅了】の力で俺に惚れている錯覚をおこして、こうなっているからだ。俺がその立場だったらと考えると、同じ男としてはなんだかな……。

だからだろうか。

こんなことを聞いたのは。

「とういかさあ。お前、こんなに美女美少女が居る中でなんで俺に求婚できるわけ？ しかも俺の元の姿と性別知っておきながら」

そうやって俺は自分の仲間達を示す。

正直、俺は性別が変わる前も今も地味で華の無い見た目をしていると思う。二次元の美少女美女を崩さないまま綺麗に現実に再現しました！ みたいな仲間達と並べば見劣りもい所だ。

男のルキにだって顔面偏差値では負けているだろう。エルフの血を引いてるのは伊達じゃないっつーか、女装が違和感なく似合っちまうお綺麗な顔だ。

容姿が全てでないにしろ、内面で惚れられるような場所所有るか？ と考えると悲しい事に特にならない……と思う。

現状俺の【魅了】はもともとから好意を抱いてくれていた相手のそれを強める程度、とは初めの頃にシャティやガーネットが言っていたので、何かしら琴線に触れるところはあったんだろ。でもそれが魅了の力で強化されて思い込みが激しそうないつがそれを直に受け止めてるだけなら、やっぱりそれは錯覚だ。

『……………。ミサオってさ、イキってるわりに本当に性根がネガティブだよね』

(でえいつ！ 言うな言うな！ そんなもん自分でもわかってんだから！)

魔王に心底憐れみの眼を向けられしみじみと言われてしまった。

く、くそ。せめて以前の身長と筋肉さえあれば……………！ 俺はあれでこつちの世界で自信を保ってたんだぞ……………！ なんて性別変えるどころか身長と筋肉まで奪っていくんだよこの職業チエンジ……………！

ともかく、この問いかけで俺に魅力を感じてるのは間違いだって気づいてくれないものか。

「？ 俺にはお前が一番美しく見えるが」

「はいはいはいはい、魅了おつ」

お世辞もいい所な答えが返ってきた。彫り深めの顔立ちくつきり美麗顔に言われても嫌味だろ。

そして俺の言葉を聞いたアルマデイオはキョトンを目を見開く。

「？ 魅了<sup>チャーム</sup>？ なんだ、そんな力まで備えていたのか」

「あー……」

うっかり口を滑らせたが、考えてみたら別に黙ってる必要もないな……。俺が今投げかけた「何故」のアンサーも、「スキルで惚れたから」ですむ話だし。

遠回しに俺に魅力感じてるのはおかしいって気づけ!! と言ったつもりだったが、遠回りする必要性がまずなかった。さくつと説明した方が楽しやねーか。

多分タイミングと……呪いの詳細、性欲が反転した結果が今の姿って事実を知られたくなくて詳しい説明を避けていたんだろうが、そんなもん俺が言わなきゃすむだけだ。

妙な事で無駄な思考リソース裂いちまったなとため息をつき、頷く。

「ああ。でもってそれは、俺が女になった呪いに付属してた嫌なオプシヨン。言っておくけど発動には俺の意志は関係してないからな!! ……まあ、つまりだ。今お前が抱いている俺への気持ちはスキル由来の勘違いってわけだ」

流れで話してしまったが、これでいいんだと思う。

勘違いの好意で利用し協力を得るってのは自分が気持ち悪いんだよな、やっぱり。

だから俺への感情を否定した上で、必要なら他の方法で協力を取り付けてやる。

しかしアルマデイオは自分が「魅了」というスキルに踊らされていたことを聞かされても不思議そうに俺を見るばかりだ。

な、なんだよ。



「ふむ。それは分かった。認識してみれば確かにそういった気配も感じる。……だが何か問題でもあるのか？」

「は？ 大ありだろ。自分の意志とは関係ないところで好きになるはずもねえ相手を好きになってんだぞ。気持ち悪くないのかよ」

しかし俺の思惑に反して、アルマディオはニヤリと笑った。

「なるほどなあ。自分へ向けられる気持ちがり偽りのものではないかと拗ねているのだな？ ククククク。なかなか可愛い」

「なんつでそうなる！」

「ははは！ そう照れるな！ 不安ならば述べさせてもらうが、俺はきっかけが何であれ角を折られた瞬間に熱い想いを抱いた。そこに何かしら作用する力があつたとしても、今抱く感情に偽りなどない！

だから安心して俺の妻となるがいい！」

「何処から出てくるんだその自信！ もうヤダお前！」

もうこいつ相手になを言っいいいか分からず叫ぶと、ぐいつと横から腕をとられた。……シャティだ。

「ミサオ様、そろそろ口出ししてもよろしいですか？ 話は進まないの」

「えつと……うん」

仲間達は俺とアルマディオのやりとりを見守っていてくれたのだが、俺が話を脱線させ始めたのでシャティが軌道修正に入ってくれたっぽい。

俺も馬鹿を相手して疲弊していたので頷くと、シャティは我が意を得たりとばかりにアルマディオに向かって口を開いた。

「魔族アルマディオ。貴方はわたくしたちに協力すると……そういうことでよろしいのですね？」

「ああ。惚れた相手の頼みだからな」

「結構。ですが勘違いなさらないように釘を刺しておきますが。ミサオ様は体が女性になっても心は男性のままなのです。ご本人も申されていましたが、ミサオ様は女の子が好きなのです！ なので！ どんなに役に立とうと、どんなに愛そうと。過大な期待はなさらない方がよろしくてよ？ ……ね！ ミサオ様」

「お、おう。そうそう」

内容には同意なんだがシャティからの圧が強い。がつつり釘を刺している。

アルマディオはそれを鼻で笑った後……マントを翻して無駄に派手なポーズをとってみせた。

「ふんっ！ 心などいくらでも変わろうというもの！ アイゾメミサオよ、覚悟するがいい。いずれはこの俺様が貴様を惚れさせてやる！」

「ふん！ 威勢だけはよろしいようですね！ でもミサオ様はわたくし達のです！ ぜえったいに、そんなことありえませんか！」

バチつと見えない雷が両者の間で散った気がした。

『よかったね、モテて』

(素直に喜べないのは何でだろうな……)

どうせ取り合われるなら、両方女の子が良かった。なんで片方男なんだよ。

まあ、なにはともあれ。

アルマディオの協力を取り付けた俺たちは、砂に埋もれた第二の迷宮を目指す事となるのであった。

## 60話 ▶ 灼熱迷宮く立ちはだかる環境脅威

『ひとつめ』

ほつりとつぶやき、幼い美貌に人外の瞳の輝きを宿すそれ……魔王と呼ばれる存在は、自らの手を眺めた。

左手の小指。白く細い指先に納まる貝殻のような爪は、現在黒く染まっている。

『僕の事なんかよく見てないだろうし、ミサオは気づかないだろうなあ』

嘲笑うような。そして……ほんの少し残念そうなその声は、昼間の疲れでぐっすり眠っているミサオには届かない。

『さて、ふたつめはまだ放置しておこうか。まったく、こんな仕掛けが用意されていたなんて。我がことながら不思議な体だ。いや、体はもう無いんだし魂かな？ ……本人すら知らないというのはどうかと思うが。これまでの厄災の魔王はどうしていたのか興味があるね。僕みたいに肉体が減びても現世に居座る例が珍しいのか』

首をかしげて思考するも答えを掴むことまでは求めていない。ただ「そういうもの」であると、魔王となった魂に用意された本能が教えてくる。

さらりと。触れられないミサオを頬を撫でる仕草をすると、魔王の王は謡うようにささやいた。

『君が解呪への手がかりを手に入れたように、僕は復活へのカードを手に入れたようだよ？ これでイーヴンだ』

うつそり笑う魔王の声は、夜闇に紛れて消えた。



賢者に示された迷宮二つ目。その名称は“灼熱迷宮”とすることにした。

理由は天空迷宮の時と同じというか、特徴そのまま。地下迷宮でもよかったのだが、こちらの方がじっくりくるような場所だったからな。

表層はともかく地下にあるなら迷宮内は涼しいのでは？ と考えていた俺だったのだが、迷宮は予想をあっさり裏切ってくれた。

とにかく蒸し暑かったのである。もう完全にサウナだよあれ。

壁は全部目に優しくない赤色。その色の印象通り迷宮内はとにかく全てが熱くて暑かった。一部は熱された鉄板のようで、うっかり触れると大やけどである。

俺もみんなもレベルや技量でいえば強者なわけだが、それでも弱い”環境”というものがある。

蒸し暑い日本の夏を知る俺としては多少ましだったが、アシュレ、シャテイ、モモが特に辛そうだった。

アシュレは重装備だからその中に熱がこもるし、シャテイとモモは単純に熱さに弱っぽい。後者は二人とも軽装なのだが、シャテイは翼、モモは毛皮があるからだいぶ蒸れたようである。取り外しのできない種族特徴としてのものだから大変だ。

ちなみに余談だが、シャテイは白を基調とした服なので一部透けてだいぶセクシーなことになっていた。眼福。そこだけは迷宮に感謝したい。いつも距離感の近いシャテイだが、こういったふとした瞬間に垣間見える無防備さからしか得られないものだ有るのだ。あるつたらあるのだ。

砂漠住まいのガーネットや、その弟のアルマディオ（結局こいつ中

までついてきやがった。頼みを聞いてもらって置いてあれだがそれでいいのか魔王軍）は比較的平気そうだったが、それでも”湿度”を伴った暑さには眉根を寄せていた。耐性はそこそこあるものの、だいぶ不快に感じたようである。

ルキは意外にも蒸し暑さに強さを発揮して、水分補給など甲斐甲斐しく仲間の世話を焼いていた。

そう、水分だ。

灼熱迷宮の何が辛かったかって、水分不足。

滝のように流れて体から失われていく水分と塩分に、結局は慣れている勢も途中で苦しくなり止む無く引き返す事となった。

水魔術で何とかしても良かったのだが、迷宮の構造や深度も分からないまま常に水分補給用に魔力を消費するのは流石に無計画だし、あと水魔術で出した水って飲料用にはちよつと向かないんだよな。そのまま飲めるといえば飲めるが、出来れば煮沸した方がいい。生だとワンチャン腹を壊す。

どうも灼熱迷宮はその熱さそのものが迷宮攻略を阻む大きなトラップのようだ。

他に目立った罠こそ無かったが、シンプルだからこそ強いつてのを思い知らされた。

空調に任せそうな魔術についてはピンポイントで阻害する魔術式が組まれているみたいで効きやしねえし。

だから灼熱迷宮の攻略に関しては熱源となっているトラップをどうにかするか、こちらの阻害をしている魔術式をどうにかして空調魔術が効くようにするか、水分塩分を大量に持ち込み補い続けて力技で突破するか、の三択と思われる。

明日はその対策についてみんなと話し合う予定だ。

見つけにくい、入りにくい、強さだけで攻略できない。迷宮という名にふさわしい場所なのかもしれないが、少々難儀しそうである。



「あふ……ねつみ……」

あくびをかみ殺しながら寢床から出て行くと、もうみんな先に起きていた。

昨日は手記をなんとかまとめたまでは良かったんだけど、俺も思いのほか暑さにやられていたらしい。疲労でいつもより多めに寝てしまった。

「おあよ〜」

「おはようミサオ。ふふつ、眠そうだね？」

ナチュラルな動作でアシユレに頭を撫でられた。どうも跳ねていたらしいな。

そのまま自分ではとても扱えないような長い癖毛を、アシユレが器用に編んでいく。朝はだいたいシャティかアシユレが髪を整えてくれるのだ。

そのままぼくつとしてしていると、飲み物に口をつけていたガーネットが苦笑する。

「あの迷宮には参ったね。暑さに慣れてる私ですら辛かったんだ。みんな大変だったろう」

「はい……さすがに」

昨日の疲れを引きずっているのか、ややぐったりとした様子のシャティ。他のみんなもだいたいそんな感じだ。

やはりいくら体を鍛えようと、強くなろうと……慣れていない環境に適應するのは大変である。

「空調に関する魔術が一切使えないのが痛いね……。シャティ、あれ

を解析するのは難しそう?」

俺の髪を整えてくれつつも、珍しく精彩を欠いた様子のアシユレが問いかける。

砂漠に行く際はシャティの空調魔術を用いてどうにかなっていた鎧の問題。それが迷宮では大きな壁となつて立ちふさがっているため、彼女としてはなかなか参る案件だろう。

軽装の鎧もあるにはあるが、それでもあの空間はきつい。

「このシャティにおまかせあれ! ……と言いたいところなのですが、残念ながら、はい。難しい……かもです」

シャティはアシユレに頼られて嬉しかったのか勢いよく立ち上がったが、そのまましゅんと肩を落としてしまった。

「だろうね。解析と解除そのものはシャティならどうにか出来るだろうが、その術式を発生させている魔術機関を迷宮内で見つけださない事には無理だろうさ」

空調魔術を阻害している魔術機関。それさえ見つけだして破壊もしくは効力の解除をすれば迷宮攻略は一気に楽になる。

でもそれを探している間にも体力を消費するわけだから、行って戻つてを繰り返しての長期戦になりそうだ。

現状では一番確実そうな方法だけど……うん。地道。

首をひねつて考え込む俺だったが、シャティがぱんつと手を叩いて表情を明るくした。

「……そうだ! ……もしかすると空調魔術そのものは邪魔をされても、その効果を宿した品物ならば妨害をかくぐれるかもしれない!」  
「根拠はあるのか? そのような安易な対策でどうこうなるような迷宮には思えなかったが。貴様ら程度ならともかく、この俺様の魔術すら妨害するというのに」

真横から水を差されて笑顔を引きつらせるシャティ。それを巨体から嘲るように見下ろしているは赤髪の魔族……アルマディオだ。

なんか昨日迷宮の中までついてきたし、その後もずっと我が物顔で近くに居るんだよなこいつ。

俺達が世話になっているのはこいつの姉であるガーネットの家な

ので、他人の俺達より親戚のこいつがいて当たり前と言われたらそれまでなんだけど……いや、でもなあ……。ちよつと前は姉でも容赦しないとか敵対を厭わない感じだったのにどうしてそう凶々しく寛げるんだよ。なんか釈然としねえ。

「あなたは何故普通に会話に混ざってきているんです？　迷宮の入り口係として以外お呼びではありませんわ」

協力してもらっている反面、どう穏便に追い出したもんかと頭を悩ませているとシャティがぎっくり反撃した。

「世話になっておいてなんだその言い草は！　おい、アイゾメミサオ。やはり俺様にしておけ！　こんな乳だけデカイ女より！」

「は？　大きな乳はステータスだが!?　それにシャティは可愛いし頭もいいし強いし可愛いんだぞ」

思わず反射の域で返したら可愛いと二回言ってしまった。事実だが、自分の深刻な語彙力不足に悔しさを覚える。

それにしてもこいつ、こんな美少女を前に乳デカイだけとか眼球なののか？

「な、なに……」

なにやらシヨックを受けているようだけど、まずお前は比べる土俵にも上げてねえんだよなあ。

そしてシャティはいえば、勝ち誇った表情でおかえしとばかりにアルマディオを嘲った。

「まあ。まあまあまあ！　先日わたくしが申し上げたことが頭からすつぽりぬけてらっしやるのですかあ？　ミサオ様の性認識は男性のままなのですよこのおまぬけさん。はなからあなたなんて相手にされていけないんです。可愛いと言って褒めてもらえたわたくしと違って！」

胸に手を当ててどやああつと背後に擬音が出てきそうなシャティだったが、はたと気づいて更に噛みつく。

「いえそれもそうですが誰が乳だけ大きい女ですか!!　色んな意味で失礼じゃありません!?　また雷をぶち落とされたいんですか!？」

「フンッ！　あんなもの対して効いておらんわ！　この間はタイミン



グが悪かったのだタイミングが！ アイゾメミサオによる攻撃の後だったからな！ 調子に乗るな雑魚め！」

「へええ〜！ そうですかー！ なら試してみますーう?!」  
「……………」

魔王討伐直後のアルマデイオ襲撃。その時の嫌な出来事を一瞬思い出しかけたが、きつと気のせいである。俺は何も覚えていない。あの時の思い出はガーネット姉さんとの初チューという美しい思い出に彩られるばかりだ。俺もシャテイもブチ切れる事になった妙なことなんて無かった。断じて。

『……………』

(無言でリプレイ画像を脳内に流すなテメアツツ!!)

『いや、面白いかなって』

すっかり忘れていた魔王が見たものを俺の脳内に流せるリプレイ機能。それにより他人視線から野郎にキスされる瞬間を見せられ、頭を搔きむしりたくなる。抹消した記憶を鮮明に思い出させるなよ!!

ま、魔王の野郎。あいかわらず俺が嫌がることをノータイムで実行してきやがるぜ……………!

今すぐ床を転げまわりたい衝動を抱える俺だったが、シャテイが本当に雷魔術を放ちそうな雰囲気醸していたのでなだめ入る。待て待て待て!

「しゃ、シャテイ！ ムカつく気持ちは分かるがここガーネットの家の中だから!! ご迷惑だから!! あれ、これこの間俺が言われる側じゃなかったっけ!?!」

「あつはつは！ 私は構わないよ？ おもしろいからね」

「そこは駄目って言ってくれよ家主!!」

ガーネット、寛大過ぎないか？ まあシャテイも本気でやるとは思わないけど。……………。思わないけど、それでもひやひやする。

『一瞬、間があったけど?』

(思考の間にまでつつこんでくるんじゃないやねえよ)

「…………チツ、ここはミサオ様に免じて矛を収めて差し上げますわ。

……それで？ 根拠でしたか。当然あるに決まっているじゃないですか」

「シャティはそう前置くと、灼熱迷宮のトラップにもも物……アイテムなら対抗可能と思われる根拠を述べ始めた。」

「あの迷宮に巡らされた魔術式。術式発生源が分からなかったのも魔力の流れを手繰り寄せて遠隔解除しようとしたのですが、それ自体は不可能だったものの……分かった事が一つあります。妨害は生物に対しては大きく影響を与えますが、半面。無機物にはその効果を発揮しないようでした」

「いつの間……。やはりシャティは頼もしいね」

「まあ！ アシユレ。お褒め頂けて嬉しいですわ！ ……もつと褒めてくださってもよいのですよっ！」

「シャティ、すごいけどすぐ調子に乗るのはよくないと思う」「そんな!？」

モモから冷静なつつこみを受けてショックを受けるシャティ。

優秀な魔術師であり知識も豊富、切れ者と旅では常に頼りになる彼女だが、こういう所とか可愛いと思う。

女になるまですっかり清楚な子だと信じ込んでいて、その性癖や最近の暴走っぷりにはちよつとたじたじになることも多いけど……まあ、女になって唯一。唯一!! 無理くりいいことがあつたとひねり出すならば、こうして仲間の新たな一面を知れたことだろうな。

にしても、アイテムか。

「そうすると、その品物を仕入れる必要があるわけですが……。僕、持ち歩けるほどの空調魔術道具って知らないです」

そう言ってルキが視線を向けたのは、砂漠のど真ん中にあるガーネット宅の空調を一挙に担っている据え置き魔導器具だ。元居た世界で言う所のエアコンなわけだが、実を言うところこれが滅茶苦茶デカい。

見た目的には縦長の直方体で、冷蔵庫で表現するよりはスパコンみてえって言った方がしっくりくる。どっしりと重そうで、とてもじゃ

ないが持ち歩くような代物ではない。

一応俺なら出来なくも無いが、入り口はともかく迷宮内の狭い通路なんか通れないだろう。

「それは……」

「わーっははははは！ やはり詰めが甘いようだな有翼族！」

「あなたは黙ってください?! それか人の詰めが甘いというなら、代替え案を出してはどうです。でなければただのやかましいヤジですわ」

むっとしてアルマディオを睨むシャティだったが、奴は素知らぬ顔だ。

時折俺の方をチラチラ見ている期待のこもった目で見てくるのでもしかすると聞かれるのを待っている……いい案があるのかもしれないが、絶対聞いてやるものかと黙殺した。

お惚れた弱みにつけこんでいるとはいえ、これ以上頼って借りを作るのはごめんだぜ。

さて、そうになると……どうするか。

あとちよつとでいい考えにたどり着きそうなんだけどな。

「エンチャント魔術付与して作るの駄目？」

「ううくん。難しい、でしょうね……。付与時間が過ぎたら魔術をかけなおさなければなりません、そうすると迷宮内です。空調魔術なら、きつと道具に付与する前に効果が散らされてしまいますねえ」

「ああ……それもそうか」

「となると、軽量化した空調魔術道具を作ってくれそうな技師を探してオーダーメイドでもするしか……」

そこまで考えて、ぴんつと来たものがひとつ。

「ん？ 技師？ オーダーメイド？」

あつと口を開く。

「なら俺の魔術装甲を直してもらいがてら、ロハルドさんの所へ行ってみねえか？ あの人ならどうにかしてくれるかも」

「ロハルドさん？」

「天空迷宮で言ってた魔装工芸核の技師だよ」

「!!」

そう。今は壊れているが、以前俺の魔術装甲に使う魔装工芸核を仕上げてくれた人だ。

俺の言葉にルキが限界まで目を見開いて頬を紅潮させる。そこからは期待と憧れの感情が窺えた。

でも、わかる。わかるぞ、ルキ！魔装工芸核を用いての変身もとい魔術装甲ってかっこいいもん。憧れるよな。

俺は初めて魔術装甲という物を知り、その足で張り切つて魔装工芸核アーティファクトの材料となる素材を集めまくりロハルドさんを訪ねた時の事を思い出した。

始めは全然取り合つてくれなかったのだが、俺が魔装工芸核アーティファクトにこめたいこだわりを話し始めたら早かった。

途端に乗り気となつて、二人であーだこーだ言いながら性能やデザインについて話し合い、たった一つの魔装工芸核を作り上げたのはいい思い出である。

ロハルドさんは優れた魔装工芸核技師だ。その技術は何も専門としているものに留まらない。

彼の腕ならあるいは……。

「ほうー！ アイゾメミサオ、お前の魔装工芸核アーティファクトもロハルド製だったのか！」

「……」も!?!」

アルマディオが再び意気揚々と会話に入ってくるが、苛つくより前にその内容に虚をつかれてしまった。

「……まさか、お前のも?」

「無論！ 最高のものを求めたならば奴の元へ行くのが当然だ」

ふふんつと胸を張って誇らしげなアルマディオだったが、俺はと言えばがっくり肩を落としていた。

……ロハルドさん、自分の眼鏡にかなえばどんな相手にも品物を

作ってくれる人だとは知ってたけど。せめて魔王軍に優良アイテム渡すのやめてくれ。こいつ含めてちよつと前まで魔王軍の被害とかシャレにならなかったからな!?

絶対脅されたとかじゃなくて嬉々として作ったに違いない。想像がつく。

『おや、僕の可愛い部下にも力を貸してくれるとはなかなか素晴らしい人物じゃないか』

魔王はなにやら技師に興味を持ったようだ。

ロハルドさん、かつこいい大人かつ優れた技師ではあるんだけど……同時に自由過ぎる趣味人という印象も強い人なのだ。アルマデイオの話を聞いてより一層その印象が強くなった。

……会いに行ったらその辺のことも聞いてみようかな。

「ふふふふふ。これもまた運命。ならばともに赴き俺様とアイゾメミサオの婚約指輪をロハルドに作らせ……」

「だりやあッ!!」

「ぬわぁー……!!?」

たわけたことを言っていたので窓から砂漠に放り出しておいた。しばやく太陽に焼かれてろ。

「ま、ダメもとだけどき。気分転換も兼ねて行ってみないか?」

気を取り直して仲間達に提案してみる。

実は冷凍魔術の体系化を行った賢者カリユキオスに聞くのが一番手っ取り早い気もするのだが、それはロハルドさんの所へ行つて駄目だったときでも構わないだろう。

あの賢者の住処は軽く行くには手順が面倒すぎるのだ。

ロハルドさんのところならちよつと足を延ばせばすぐだし、俺の魔術工芸核の修理の事もあるからな。ルキもこうして興味を持つている事だし、まだ師匠らしいことをしてやれていない身としてはこういった機会を作るのもいいだろう。なんつーか、社会見学的な?」

「いいですね! 確かロハルド様のお住まいは……」

「うん、そうだね。私もあそこに行くのは賛成だ」

シャティとアシユレ、そして視線を送れば他の仲間も頷いている。暑さでやられていた所だし、ここは療養の兼ねてな。

なんといったってロハルドさんが住まう地域は気分転換にはもってこいな場所なのだ。

ともかくだ。どうやら俺達は地下迷宮攻略のために、もうひとつ過程をはさまなければならぬらしい。

「よし！ じゃあさっそく行こうぜ。……汗をながしがてら、な」

## 61話 ▶ 娘のような息子の花嫁候補（竜王視点）

雲海の中で屹立する、人の足で登るには非常に困難であることが窺える険しい岩山の群れ。

その周囲を旋回するように舞うのは鳥ではなく陽光に煌めく鱗と逞しい、あるいは優美でしなやかな肉体を持つ種族……竜だ。

そこは竜族達が住まう、天然の要塞ともいうべき領域だった。

更に地形に加え、各山の頂からは属性の違う結界が網の様に張り巡らされ外界からの干渉を阻んでいた。

中でもひとときわ背の高い山には見事な彫刻が施された入り口が存在しており、その最奥……剥き出しの武骨な岩肌を宝石が彩る”玉座の間”。

中央に坐するのは金色の鱗と体毛を持つ黄金の竜だ。その神々しいさまは目にしたものをひれ伏せさせる力がある。

瞳は左右色が異なっており、深い青と鮮烈な赤のオッドアイはその威容を際立たせる一因となっていた。

『そうか。ルリルベレスは”つがい”となるべき人間を見つけたか』

竜の口から発せられたのは猛々しい咆哮ではなく、威厳に満ち落ち着いた声。現在そこには喜色が入り混じっている。

その前に跪くのは灰色の髪を持つ竜人。彼は恭しく頭こっぺを垂れて頷いた。

「それも飛び切りお強い方です。私は一撃で沈められました」

『ほう！ お前をか！』

黄金の竜はますます機嫌を良くする。

『それは良きことだ。新しい血を入れる必要はあるが、それが優秀であることに越したことはない。……とところで一応聞くが、相手は女だな？』

「もちろんです」

『そ、そうか。いや、なに。あやつは紛らわしい姿を好むものだからな。時々雄だか雌だか分からなくなるのだ……』

「心中お察し申し上げます。竜王様」

竜王。それは強靱な竜族をまとめ上げる、唯一無二の存在。

そして彼はミサオに求婚する竜族、ルリルベレス・ファーレンの父でもあった。

現在は息子につけた付き人に、彼についての報告をさせているところである。

『うむ。ではマイヨール。引き続きルリルベレスの世話を頼んだぞ。くれぐれも私にこつそり定期報告へ来ている事を悟られることが無きよう』

こつそり、などと可愛らしい言葉を選ぶこの竜王。実は少々お茶目である。

「かしこまりましたごいいます」

(返事だけは有能そうなのだよな……)

流麗な所作でもって応えた息子の執事を見て竜王はそう評価する。実際有能ではあるのだが、すつとぼけたように直情的な動きをするのもまたこの男の性質なのだ。

真面目な上での天然なのか、それとも真面目なふりをしてわざとぶざけているのか。それは長年付き合いのある竜王でも理解が困難なところだ。

そんな事を考える竜王だったが、ふむとひとつ頷く。

『しかし……そうか。そんなに強いのか。古代竜の先祖がえりであるお前を一撃とは、見上げたものだ』

古代竜の先祖返り。それは現在より力の純度の高かった竜族古代種の性質を受け継いで生まれた者の事を指す。

世代の積み重ねにより洗練され磨かれてきた竜族の血筋と、祖先の力の両方を併せ持つ存在は竜族の中でも稀だ。



竜王族ほどでないにしろ通常の竜族より強い持つ力を言われており、まず普通ならそこいらの人間に負ける事などない。だが息子が見つけた嫁候補はその男を一撃で沈めたのだという。

すつとぼけてはいるが、この男は相手を害する動作をする時に躊躇などしない。常に全力の一撃を叩き込む。それをいなして叩きのめしたとあらば素晴らしい力の持ち主だ。

『その者の名は?』

「ミサオ様、でございます」

『聞きなれぬ響きだな。……うーむ。これはもしかするとだが、ヘルベルの占いが当たったかもしれないな』

「占い、ですか?」

竜王の言葉に竜人、ルリルベレスの付き人をしているマイヨールは首を傾げた。

ちなみにヘルベルとは竜王の二番目の娘の名である。

『本人曰く予言、らしい。二割当たればいい方のものなど、よくて占いの域だろう。とても予言などと呼べぬわ。……だがその二割の当たりは、だいたいが我らにとって重要なものとなる』

「そういうえばルリルちゃん様の旅立ちの前にも、ヘルベル様は何か言いたそうにしていましたか。それですか?」

『いかにも。あまり先入観を持たせぬようにと口止めしておった』

「……その内容とは何か、伺っても?」

竜王はしばし逡巡した後、長い首をもたげて頷く。

『時々いるのだよ。"界渡り"をして我々が住まうこの世界へとやってくる異邦人が。肉体付きか魂のみかはまちまちだがな。そしてだいたいその者達は強い力を授けられている。……ヘルベルは、ルリルベレスが出会う運命の相手はそれだと申しておった。何億……否、何兆分の一の確率だと一笑にふしていたが。聞きなれぬ響きの名を耳ぬすれば、もしま、とも思えてな』

竜王は鋭い爪の生えた逞しい前足で顎をさするといふ人間じみた動作をすると、マイヨールを見下ろした。

『加えてヘルベルの占いにはもう一つ無視できない情報が含まれて

おった。……マイヨール、心して聞くがよい。もし占いが当たつておれば、そのミサオとやはらクラスは【職業：女神】アーケレディへと至る可能性を秘めた女だ。それほどの資質を備えているならば、強者と聞いても納得がいく。なれば益々持つて、我が竜族に迎え入れたい』

なにやら熱心にそう語る竜王の前に、マイヨールは「ふむ」と頷いた。

「【職業：女神】とやはらはわかりかねますが、ルリルちゃん様ならば問題ないでしょう。ご本人がいつになく本気のようなようですので」

『ほう？ あの自分にしか興味がないようなルリルベレスが、か』

「ええ。……少々気になる点として、厄介な恋敵がおりますが」

マイヨールの言葉に先に述べられていた報告を思い返しつつ竜王は苦々しく言葉を吐き出す。

『魔族の小僧だったか。しかも魔王の権能を受け継いでいるなどという。……厄災の魔王め。死したあとまで迷惑な奴よ。あやつらには関わるだけ損をする』

竜族は長い寿命と強い力を誇りながらも、世界に危機をもたらす厄災の魔王相手には基本関わらない姿勢をとっている。その理由は竜王が先に述べたとおり。

もしこれまでの歴史の様に他種族から厄災の魔王を倒す英雄が出てこなければ動かないわけにもいかないが、ここしばらくはそんなことは無かったがために完全に傍観の姿勢をとっている。

厄災の魔王が現れても誰かに倒されるまで引きこもりをきめるのが、竜族のスタンダードなのだ。

そしてつい最近、ようやく厄災の魔王が何者かに倒されたことを契機に末の息子を花嫁探しの旅に送り出したのだが……。さつそく良い相手を見つけことは僥倖だが、厄災の魔王に縁のある恋敵がいるとはよろしくない。

『ままならぬなあ。……して、ルリルベレスがその魔族との戦いで負ったという傷は？』

「もう間もなく癒えるでしょう」

『ふむ。ならば傷が癒え次第早々に花嫁を追いかけさせよ。そしてす

ぐその伴侶を連れて里に戻ってまいれ』

「言わなくても本人そのつもりでしょう。むしろ私が留めなければそのまま追っていたというか、実際一度傷を負った直後に追っていました。……ですがミサオ様を籠絡したとしても、すぐに帰るのは嫌がると思いますよ。外の世界がとてもお気に召したようなので」

『………………。分かつてはいたが完全に物見遊山をしているようだな』

「ええ、それはもう。竜王様からのお小遣いも湯水のように使っています」

『小遣いなどやった覚えはないのだが…………』

言いながら竜王はちらと玉座の間を装飾する宝石たちを見る。どれも竜王に相応しい極上の品だ。

その多くは献上品の他、竜王自ら集めたコレクションでもあるのだが…………。

『減っているなどは、思っていたが…………』

どこか哀愁を含んだ声色に、自分もまた”お小遣い”の恩恵にあやかっているマイヨールはしれつと無言を貫くのだった。

## 62話 ▶ ルルナリアス温泉街へ技師を求めて

次の目的地が定まった俺達であるが、魔装工芸核技師アーティファクトの元へ行くことはしちめんどくさい場所に住んでいる世界一の大賢者様とは違い非常に簡単である。

というかシャティの転移ポイントのひとつに設定してるからな。マジで直に行けるから楽。

だというのに何故今まで壊れた魔装工芸核アーティファクトを修復しに行かなかつたかと言えば、俺が特別魔術装甲に頼らずとも戦えるからだ。

魔王を倒した今、俺が武装しなければいけないような相手は早々いないだろう。……単純な力だけで言うならば、という前提つきではあるが。

ともかく男に戻るための過程の中で、まず必要なかつたんだよな。ついでが出来たら行けばいっかくくらいに考えてた。

でもって今、そのついで用の向きが出来たわけである。

用向き。それは俺達の求めるアイテムを作ってもらおう事。

魔術工芸核の修復は、いわばおまけである。

これから尋ねる予定の彼は非常に優れた技師のため、俺達が求める品……持ち運びできる空調魔術道具を開発出来る可能性は高い。

まあ、半分ダメもとなんだけれども。でも行ってみる価値はあると思う。ルキも魔装工芸核アーティファクトには興味津々みたいだしな。

そんなわけで俺たちはシャティの転移魔術で技師の住まい近くへと飛んだわけだが……もつと言えば、目的はもう一つ。

転移のポイントは何処でも、いくつでも設定できるわけではない。その数には限りがある。

その中で魔装工芸核技師アーティファクトの住まい近くを転移ポイントのひとつに設定してあるのは、技師への用向きの他にも魅力的なところがあるからだ。

その魅力的、というのが……。

「わあっ！　もしかしてここ、ルルナリアスですか!?　温泉で有名な！」

「その通り！　いいところ住んでるよなあ〜」

到着した先の光景に歓声を上げ、ぱっと表情を明るくしたルキ。

「つか来たばかりのぱっと見でよくわかったな。……まあ、ところどころ特徴的だから知ってれば気づくか。」

「そう、目的地は魅惑の温泉街なのだ！」

日本人としてはどうしたって好きにならざるを得ない場所である。

風光明媚な自然と建造物が見事に調和した街並み。その中には各所から湯気が立ち上り、活気に満ちたざわめきが心を浮き立たせてくれる。旨そうな食い物の匂いも鼻をくすぐり、胃が刺激された。

「ここ普通の料理屋の他に屋台飯も多いんだよな。普通の日なのにいつもお祭りみたいで楽しい。」

ちなみに当然のような顔で転移について来ようとしたアルマデイオはガーネットの娘ちゃん達が「おじちゃん、遊んで！」と引き留めていた。彼女達には滞在中困らされもしたのだが、これは非常に助かる。

癒しも兼ねて来たのにあいつが居たら鬱陶しくてしようがねえからな。

「……まあ協力してもらってる手前、何か土産くらいは買って行ってやるか。娘ちゃん達へのお土産のついででだけだな。」

『へえ……。建物は西洋風なのに、どこか懐かしい雰囲気だね』

「おや、と魔王の様子を窺う。」

「……懐かしい、か。」

(ふくん。お前にもそういう感性あるんだな)

『……………』

めずらしつ。なんも言い返さずに黙っちゃまった。

なんだなんだ、ノスタルジーに浸っちゃまったのが恥ずかしいとかか  
く？

普段口達者な魔王がだんまりするのが珍しくてからかおうかとおも思ったが、よくよく考えると少し不気味である。ここはわざわざ藪蛇することもないだろうとそれ以上は突っ込まないでおいた。

……にしても今の口ぶりだとこの場所、凶暴化した魔物とか以外では魔王軍の被害を受けてないよなあと思ってたけどまず魔王が認識してなかったのか。

まあ、世界広いしな。見落としの一つや二つあるだろう。それかここ周辺に結界的な何かでもあるのかもしれない。よく知らんけど。

「さっそくひとつ風呂あびるか？」

ルキに問えば目に見えて表情を明るくする。

分かり易いよなこいつ。素直で大変によろしい。

「いいんですか!?! で、でも用事は……」

「いいっていいって。というかな、最初からそのつもりだ。技師の所へ行くのも明日くらいでいいだろ。みんな蒸し暑い迷宮の後で疲れも残ってるだろうしき。風呂入って美味しいもんでも食おうぜ」

「まあっ! ミサオ様、お気遣いありがとうございます」

「ふふっ。君も出会ったところと比べてずいぶん気配り上手になったね」

「これも女子力ポイントの賜物かもしれませんね。すばらしいですわ、ミサオ様!」

「シャテイ、その評価の仕方はやめてくれねえかな!?!」

本人的には褒めてるつもりなんだろうけど俺はただ落ち込むだけだからな!?

ともかく、まずは宿だ宿。落ち着ける場所を確保してから散策でも宿で風呂でもすればいい。

ここ、アシユレが湯治に利用してきた昔なじみの店があるからいき

なりでも結構いい部屋に泊まれたりするんだよな。先輩冒険者、頼りになるぜ。

これまで稼いできた金はまだまだあるしな！ わはは！

色々焦って旅路を進めて来たけど、付き合ってくれてるみんなのためにも休息は必要だろう。

しかし意気揚々と宿へ向かおうとしたところで、ふと野暮用があった事を思い出す。

「わりつ、ちよつと用事済ませてからいつもの宿行くわ。先に部屋取っておいてくれ」

「まあ。でしたらわたくしたちも……」

「ほんと、大したことないから」

半ば無理やり押し切ってひらひら手を振りながら仲間たちからそそくさと離れる。ふう……。よしよし。流れで押し切れたな。

シャティ達と一緒に来たなら前回の二の舞になりそうだし、ここは一人で仕入れに行きたかったのだ。

『なに、やましいものでも買いに行くのかい？』

(ちげえわ!! 必要必需品だ、必要必需品)

いつもの調子でからかい始めた魔王を(もう少し大人しくいてくれたらよかったのに)どやしてから、目的の店を探してきよろきよろしながら大通りに行く。

ここは観光地だけあって色んな店がある。その中には当然仕立て屋もあり、数も多い。だから今のうちに今持っている物よりもっとシンプルな下着を仕入れておきたかったのだ。

以前ベテルキクスで仕立ててもらった下着は一番シンプルなものでもさりげなく華やかな刺繍が入っており、どうもそわそわ落ち着かない。ボクサータイプにしてもらったパンツにしてもそうだ。

……というかな。女の子の下着ってもんには、常にドキドキワクワクムラムラする自分でありたいんだよ!! テーマパークみたいなんだ。それくらいロマンがある。だってのに自分使いで慣れ切つてその気持ちがなくなるのは、あまりにも大事なものを失いすぎでは

ないだろうか!? 俺はそう思う。

だから女の子の子した下着とはここでおさらばだ!

俺が決意を胸に固く拳を握っていると、魔王が心底馬鹿にしきった表情でせせら笑った。

『あつはは。くっだらな』

(くだらなくないが!? これは切実な問題なんだよ!!)

脱童貞する前に女の体や女の下着を自分の体で慣れてしまう悲哀がお前に分かるのか!? このどクソ元凶がよ!!

それにこれから灼熱迷宮を攻略するにあたって、代えの下着は沢山あるに越したことはないからな。

……とまあ、そんな思惑で一人行動をした俺だったのだが。

近道にと、いかにもな裏路地に入ったら思いがけない事態にぶち当たった。

ありていに言えば、ナンパである。

『君に声かけるなんてセンスの無い連中もいたものだね』

(んだとお!?)

『自分でも「こいつら正気か?」って考えてたじゃない』

(お前に言われる筋合いがねえってんだよ)

イライラしつつ目の前で狭い道を塞いでいる野郎どもを見る。なんといかいかにもチンピラですといった風貌で、細身のノツポとごつめのハゲだ。

こいつらはたった今俺に「なあ、そこの姉ちゃん。暇そうだなあ?

俺たちと遊ぼうぜえ」なんて、その誘い文句って実在したのか!?

レベルの安い言葉をかけてきたのである。

にしてもこういう輩、美女と美少女しかいない我がパーティーで行動



している時は殆ど声をかけてこないから新鮮ではある。

まっ、あれだけ高嶺の花揃いだとのこのこ惹かれるより気おされて声かけられない気持ちも分かるから納得ではあるんだけどな。もし声をかけてきてもアシユレ、シャテイ、ガーネットという経験豊富なお姉さま方が俺が何かする前に華麗にあしらってしまおうし。

TSしても華が無い俺に声かけてきたのは、そういう美女ファイルターが無いからだろうな。適度に隙がある様に見えたってどこか舐めやがって。

とにかくこんな奴らに使っている時間ないし、俺もさくつとあしらうか。さくつと。

「いや暇じゃねえし、遊ばねーよ」

ざっくり断るが、相手はこちらの言葉などまるで聞いていないように馴れ馴れしく肩に手を置こうとしてくる。め、めんどくせえ〜！

(やつぱこういう時は言葉より拳だよな)

『暴力への移行が早すぎじゃない?』

(いいんだよ! やりすぎない程度の力加減は心得てるから! つーか魔王のお前がそれ言う?)

舌打ちしてぐつと拳を握る俺に納得いかないつつこみを入れてくる魔王野郎である。暴力どころか厄災の化身だったやつに指摘されるのマジ納得いかねえ。

というかだな! お前には分かるまい。”そういう”対象として同性から生々しい視線を向けられる気持ちがい!! さつきからこいつら俺の顔一切見ないで胸とかケツ見てんだよ!! ぞわぞわするわ!!

あと自分でも冴えない顔立ちなのは分かっているが、いざ言われると気に入らない上にそう考えてる思考がなんか嫌だ。もうこのモヤモヤは目の前の障害物兼生きたサンドバックで適度に解消するしかない。

そう考え再度拳を握り、目の前の野郎どもにふるおうとした時だ。

「? あれ。もしかして、ミサオくんか？」  
「え」

聞きなれた声に振り返ればそこには色素の薄い髪を三つ編みに束ねた丸眼鏡の青年。一番の特徴は、その額から生えた大きな角だ。  
「んだあ? てめえ。この女には俺達が先に声かけたんだ。引つ込んでろ!!」

細ノツポのチンピラが怒鳴るも、青年はそれを意に介さずスタスタ近づいてきてその長身をかがめ俺の顔を覗き込んだ。すると青年の体が意外と大きくがっちりしている事と角の存在に気が付いたチンピラたちが「お、オーガ!」とビビっているのが視界の端に入る。

俺はといえば不意打ち気味の邂逅と即座に正体を見破られたことに(いや隠しては無いんだけど)戸惑いが勝って、咄嗟に言葉が出てこないでいた。

「どうした、その姿。それではワタシが君の体の隅々まで考えて調整した最高の作品が馴染まないだろう。由々しき事態だ」

むうつと眉根を寄せて俺がミサオであることはすでに決定事項として話している青年。

彼こそがここ、ルルナリアスへ来た一番の目的である魔術工芸核技師……ロハルド・ハウである。

見た目青年だが、中身は結構いい歳をした鬼<sup>オーガ</sup>人族だ。

住んでいるとはいえ街中エンカウントすぎない?

「お、おいおいおい。色男さんよお。こっちを無視して勝手に話しをすすめてんじゃねえよ。なあ?」

完無視をかましているロハルドさんを前に、ビビり気味だった細ノツポが同意を求めるようにごっつハゲに声をかけた。そういやさつ

きから喋っているのはこっちの細ノツポだけだな。ごつハゲは寡黙にたたずんでいる。

そしてごつハゲだが、やや間をおいて俺とロハルドさんを見比べた後……。

「その地味ブスとだったら、俺あそつちの男の方がいいな」

「殺されてえのかテメエオラアツ!!」

こ、こいつ！ そつちからナンパしてきておいてなにを!!

そりやあロハルドさんは男だが顔が良くて比べて俺は自分でも地味だし目つき悪いし黒目小さいしそばかすあるし、モテる顔だとは思わないけどよお！ 人に言われるとすげえムカつくなあおい!!

『ミサオって本当、思ってた以上に自分の容姿に自信ないよね。TSしたのに可愛くなれなかったの、そんなに悔しかった？ あつはははははははははは！』

(黙れや!!)

魔王の茶々で二倍腹が立つなクソが!!

シャティは磨けば光るって言って……いや今それはいいんだよ!!

「そつちから声かけて来たくせにずいぶん好き勝手言ってくれんじやねえか!! 言っただけの覚悟はできてんだろうなあ!?!」

「見ろよ。その女、まず品がないぜ。俺そつちの駄目」

「どの口がそれを言ってるんだよ!?!」

『まあミサオの口調って基本チンピラだよね。そいつらと大して変わらないよ』

(こ、このやろつ)

内と外の両方から貶されて一瞬「口の悪さって直した方がいい?」と考えてしまったが、どうして俺がこんな野郎どもに言われたくらいで口調変えなきゃいけないだと思っ直した。

「んんん? お前から見る目が無いな。ミサオくんは可愛いぞ。今は何故か女になっているが、女になってくるくせにまずまず可愛い」

「女になってくるくせにどういう事っスか!?!」

ワンテンポ遅れてロハルドさんが妙な言い回しでフォローするも

んだから、余計に場が混ぜつかえされる。俺はこのモヤモヤと怒りをどう表現すればいいんだ。

「ああ、それと。ワタシの見目に美を見出し好んでくれたことは光栄だが、ワタシが君を好みじゃないな」

「そこきつちり振るんだ!?!」

「振られた……」

失礼極まりないごつハゲにきつちり引導を渡すロハルドさんと落ち込むごつハゲ。男だからとかでなく好みじゃないって理由で振るのか……。

「……………」

「……………」

場が何とも言えない妙な空気となり、俺は何故か細ノツポと見つめ合ってしまった。

どうするんだよこれ。

「もういいか？ ではワタシたちは行かせてもらおう」

「えっ」

そんな中、あくまでマイペースなロハルドさんがぐいっと俺の肩を引き寄せたかと思うとスタスタ歩き出す。

「ちよ、待てー!」

このグダグダな空気の中でなおも食い下がろうとする細ノツポには怒りや呆れを通り越して逆に感心を抱いてしまったが、ロハルドさんはそんな彼にビツと一枚の紙を突きつけた。

「!?!」

「ワタシ達はこれから忙しい。文句があるならここに来い」

威圧的に渡された紙を細ノツポのチンピラは挙動不審に受け取ると、そこに書かれた文字を読み上げる。

「” 魔術工芸核工房るるびっぴはうはう” ……え、店名だせえ……」

(あ、それは俺も最初思った……)

内心同意していると、くるりと向き直ったロハルドさんが大きく腕

を振りかぶった。そして。

「へぶっ!？」

(り、理不尽!)

鬼人族の剛腕から振るわれた張り手が細ノツポを裏路地の壁にたたきつけ、先ほどまで拳を振るおうとしてた自分を棚上げして憐みの眼でぴくぴく痙攣しているチンピラを見た。

なんというか……冷静になってみれば特に悪いというほど悪い事してないのに憐れだな……。鬱陶しかったし馴れ馴れしいやら貶されるやらで腹立たしくはあったものの、それとはまったく関係ない部分でオーガの一撃を食らうとか最早事故だろ。あの店名は初見でだっせえと思うの仕方ねえよ。

俺は流石に可哀そうになって、隣でドンびいていたごつハゲに「まあ、これで治しとけよ……」と薬を投げ渡しておいた。

それを見たロハルドさんは片眉をあげる。

「君は優しいな」

「いや、そういうわけでは。なんかこのまま放置するのは微妙に人として終わってる気がして……まあ自己満足なんで……」

ロハルドさんが現れなければチンピラに拳を叩き込んでいたのは俺だったわけだし、褒められると座りが悪い。

にしてもさつきからこの人、俺の事を自分の知り合いであるミサオであるとマジで疑ってないな。俺まだ肯定してないんだけど。

「ではミサオくん、行くぞ」

「店つすか？」

「もちろんだ。あたりまえだろう。早急に魔術工芸核の調整が必要だ」

こちらからお願いする前に自分のペースで話を進めてこちらの行動まで決めてしまうマイペースさ。賢者といい、仕事のできる奴らにはマイペースが多いのだろうか。

俺はそんなロハルドさんの様子にあいかわらずだなど考えつつ、まあ「話が早い」と納得することにした。どうせ店は尋ねるつもりだっ

たんだし。

そう思いつつ目当てだった知り合いについていく俺だったのだが……。

「まあミサオ、あなたいつも別の相手を連れているのね？ 流石はこのルリルちゃん様がお嫁さんに認めただけあるわ！ でもでもお、ちよおつとだけ妬けちやうかも？」

「げっ」

ぬるり。

まさにそう形容するに相応しい動きで前触れなく俺の腕に巻きついてきたのは、チンピラからのナンパなんて蟻みたいに可愛く思えるほどの厄介な相手だった。

### 63話 ▶ 消えた力の行方（バシユトレーゼ視点）

主のいなくなった魔王の居城。その一室で幼女が頭を掻きむしり、部屋の調度品をめちやくちやに壊しながら喚いていた。

……とはいえ、幼いのは外見ばかりで中身は魔族としてそこその年齢であるのだが。

「あああああああ!! 何故!? いったいどうして……! 何故、魔王様から授かった力が消えているのだ!!」

魔族、千里眼のバシユトレーゼは焦っていた。

天空迷宮にてまんまとアイゾメミサオに返り討ちにされた彼女だったが、それでもたった一度の失敗。次の手を考えればよいことだと、空から落とされた癖に早々に復活してきたアルマディオに再びアイゾメミサオの居場所を教えた後に再度作戦を練ろうとしたのだが……由々しき事態が発覚した。

バシユトレーゼが魔王から受け継いでいた“黒星草”こくせいそうを操る力が、彼女の中から綺麗さっぱり消えていたのである。

最初は心身的ダメージが抜けきっていないからだと思っていたが、それが落ち着いてからも自身の内にあつた心地よい魔王の力の脈動は感じられない。迷宮から帰るまでは確かにあつた力が。

「ああ……ああ! 魔王様の愛が! 私の内から消えてしまったというの!?! そんなことって! アイゾメミサオの籠絡に失敗したから!?! そんな。お隠れになった後も魔王様は私を見ていたというのですか? だから愛想をつかされたと? そんな!! ならばせめて痛みとして罰をこの身に刻みつけてくれれば良いのに! なぜこうも無慈悲なことをなさるのです!?! あなた様の存在を感じられなくなる以上上の苦痛がありませんか!! ああああああ!!」

暴れ散らかし疲れ果て膝から崩れ落ちるも、依然として力は戻らない。その無力感に打ちひしがれるバシユトレーゼに声をかける者が居た。

「見苦しいぞ、バシユトレーゼ」

「ガルドウド……」

牡鹿のように枝分かれした角を持つ魔族は、見目幼いバシユトレーゼと対照的に大きな体躯を持つ男だった。ちなみにバシユトレーゼの角は髪の毛に隠れてしまうほど小さい。

バシユトレーゼはこの粗野な男が嫌いだった。

「どういった理由で暴れているかはその駄々洩れの独り言で察せられるが……くくつ。もともとのぞき見しか能がないお前にやつと備わった力だったのになあ？ 残念なことだ」

「うるさいうるさいうるさい！ 黙れ！」

嘲笑うその声に噛みつくが、男……ガルドウドの言う通りバシユトレーゼの取り柄は千里眼。戦う力は乏しく、魔王の力を失った今は抵抗する手段もない。ひとたびガルドウドが機嫌を損ねれば、バシユトレーゼの命など軽く消し飛ぶだろう。それを理解できているため、癒癒の後には悔しそうに押し黙ったバシユトレーゼである。

ガルドウドはそんな彼女を愉快そうに鼻で笑った。

「ふんっ。もともとお前には過大な能力だったというわけだ！ その身に宿ったのも何かの間違いであろうよ……この俺と違ってなあ」

ガルドウドは見せびらかすように腕を前に差し出す。その肌は一見普通の魔族のものだったが、瞬く間に硬く黒い表皮に覆われた。

黒光りするその装甲は、かつて魔王の巨軀を覆っていたものと同種。……この男もまた、アルマディオやバシユトレーゼに同じく魔王から権能を受け継いだ魔族なのだ。

「バシユトレーゼ。なんでもお前、魔王様を倒した男を魔族に迎え入れようとしているらしいな？ そのような軟弱な考えだからこそ魔王様に見限られるのだ。殺せよ」

「魔族のために何かを成す気も、魔王様の仇を討つ気もない貴様にどうこう言われる筋合いはない！」

自身と同じ幹部でありながら魔王が打たれた後も特に動こうとせず、のうのうと魔王城の自室に居座って気ままに過ごしているのがこのガルドウドという男である。だからバシユトレーゼはこの男が嫌



いなのだ。

「ははっ、違いねえ。……それにしても、その体で誘惑は無理があつたんじゃないか？」

「私が誘惑するわけないだろう!! 熱をあげているのはアルマディオだ!」

「それはそれでなんでだよ」

ガルドウドは魔王の仇が男から女に変化している事を知らない。それゆえの勘違いであるが、バシユトレーゼとしては不服極まりなかった。

「……まあ、お前やアルマディオ、爺さんのような忠誠心や狂信は俺にはないが。そろそろ城でごろつくのも飽きて来たし、この力も試してえ。例の英雄様にちよつかいだしてくるのも楽しいかもなあ？」

「……魔王様の守護を任されていた俺を素通りしていった屈辱も晴らしたい」

「素通りされた無能は貴様の罪だがな。生きているのも烏滸がましい」

「言うねえ」

「……しかし、なぜ今さら」

「ん? さあな。理由は今言つたとおりだが、気が向いたというか……そういえば、なんでだろうな」

「はあ? 私に聞くな」

腹の立つ言葉を投げかけに来たかと思いきや、どうやら今さらアイゾメミサオを襲撃する気になつたらしい。それを察して嫌味を口にしつつも、バシユトレーゼはすぐさまガルドウドを利用する算段をつけ始める。……動機に関しては妙に菌切れが悪く引つかかる所はあるものの、使わない手はない。アルマディオを負かす相手にこの男が勝てると思えないが、隙を突く手駒くらいにはなるだろう。

自身でアイゾメミサオを襲撃する手段を失つたバシユトレーゼにとって、それは格好の機会だった。

「……呼ばれた気が、したのだ」

ぼそりとこぼされた一言。それは拾うにはあまりにも小さく、本人すら口にした自覚のない言葉。

知覚されない音の並びは、更にバシユトレーゼの声で上書きされる。

「ではアイゾメミサオの居場所を貴様に教えればよいのだな？」

「……………」

「おい」

こちらの問いかけに応えないガルドウドに苛立たし気に声をかけた。すると我に返ったようにはつとしたガルドウドであったが、すぐさまそれは相手を馬鹿にする笑みへ変化する。

「ん？ ああ。そういうことだ。ありがたいだろう？ お前が活きる機会を作ってやったんだから」

世話になる側が何を偉そうに。そう叫び散らかしたい気持ちをぐっと抑えて、バシユトレーゼは千里眼にて現在のアイゾメミサオの居場所を探知し始める。

どうやら転移魔術で結構な距離を移動したらしく、現在は天空迷宮からも、そのあと移動したフルリット砂漠からも遠い場所に居るようだ。

（ああ、魔王様。何故……）

新たに出来た仕事に多少気は紛れたものの、心の空虚はぬぐい切れない。

魔王からの権能はどこに消えてしまったのだろうかと思いを馳せ、バシユトレーゼは深い嘆きに沈むのだった。

## 64話 ▶ 技師の工房く余計なおまけ二人付き

突然現れ一見華奢な腕で簡単には外せそうにないホールドをがちりかましてくるのは、金の巻き毛に赤い瞳、フリルたっぷり青いドレスという最高級品のドールもかくやな見た目の超絶美少女。

だが男である。それも俺よりずっと年上のおっさん。

「またお前かよ……」

満面の笑みで見上げてくるぱつと見美幼女な竜人ルリルベレスにげっそりしていると、途端にその薔薇色の頬がぷくりと膨れる。

実際の性別と年齢を知らなければ非常に微笑ましく思えた事だろう。

「なによお、その態度！ 未来の夫に対して失礼じゃなくて？」

「誰が未来の夫だ」

べしつと軽めに脳天チョップを入れてやる。……ここで軽めにしてしまうとところが「可愛いは正義」という概念に敗北している気がして落ち込むぜ。見た目はマジで可愛いからなこいつ。

にしても、他に気をとられていたとはいえこんな至近距離で腕を組まれるまで気づかないとは不覚。

……つーか前に別れた場所から結構距離離れてんのにどうしてこう簡単に突き止めてくるんだよ!? アルマディオの方は千里眼持ちの仲間が居るからとタネが割れたが、こっちはどういいうわけなんだ。簡単には逃がしてくれなさそうな雰囲気だし、どうすつか……。

「知り合いか？ 竜人とは珍しいな」

「！ よくわかりましたね。こいつの正体」

街中のためか人間へと擬態しているルリルの種族名を即座に当たったロハルドさんに驚く。しかし彼はなんてことないように俺達の後ろを指差して答えた。

「竜人の付き人を従えた人族など早々いない」

「あ」

指差された方を振り返れば、こちらは一切擬態していないルリルの執事。確かマイヨール……だっけ？ 何故かダブルピースをしている。

「お久しぶりでございませう」

「ど、どうも」

初手で殴り殺しにかかってきた相手とは思えないほど丁寧にお辞儀されてしまい、悲しきかな日本人。挨拶されれば返してしまうというもので、俺も軽く会釈した。

……この人も良くわからん人だよな。ダブルピースもど丁寧なお辞儀も全部真顔。こういう感情なのかまったく読めねえんだわ。

……あ。

（こ、こいつかああああ!! そっぴいこいつも長距離転移魔術使えたわ!!）

『やっとなつづいたのかい?』

クスクス馬鹿にしたように笑った魔王が久しぶりな”魔王から見た視界におけるリプレイ機能”である映像の流す。

それは以前ルリルがアルマディオとの戦いの後に突撃してきた時のもので、この付き人はその時確かに去り際に「マーキングをしておいたからいつでも来られる」とか発言していた。

疑問は解けたがゾツとする。……場所でなくて個人に特定した長距離転移魔術とかさらつと恐ろしいことやってんじゃねえよ!!

「……つーかよ。俺は忙しいんだ。お前に構ってる余裕はねえぞ。もちろん嫁だ夫だつて与太に付き合うつもりもない」

ともかく相手をしてやる意志はないとぼつさり切り捨ててみるが、それでルリルが引くわけもなく。

「つれないわねえ。でもそんな態度も嫌いではないわ! 簡単に手に入るより愛着がわくもの! ……ああ。でも、このルリルちゃん様より他の男を優先するのは気に食わないのよねエ。お弟子くんは子供だし弟子だし? ぎりぎり許さなくはないけど……この鬼<sup>オ</sup>人族<sup>ガ</sup>は誰なのかしら」

そう言つてロハルドさんを睨みつけるルリルだったが、ロハルドさんは気にもかけていない様子で小首をかしげる。

「気になるなら一緒に来るか？　これからワタシの工房に向かう所なのだが」

「工房？」

「ロハルドさんは魔装アーティファクト工芸核技師なんだよ」

渋々説明してやれば、ルリルの瞳は途端に好奇心で爛々と輝いた。

「まあ！　話には聞いたことがあるけれど、魔装アーティファクト工芸核つてまだ見たこと無いのよね！　興味あるわ！　……ふむふむ。なるほど、ミサオはこの男に仕事を頼むところだったというわけね？」

「ん……まあ」

「そう！　ならいいわ！」

何やら勝手に一人で納得したルリルは「じゃあ早く行きましょ」と、ついてくるのが当然とばかりに俺達をせつつく。ええ……来るの？

しかし工房の主であるロハルドさんが誘った手前、俺が渋るわけにもいかず。……今度はどうやってこいつを撒けばいいのか考えつつ、余計な連れを二人も伴つてロハルドさんの工房へと赴くこととなった。

温泉に入る前に余計な疲労溜まりそうだぜ……。

ちなみにロハルドさんがルリルに声をかけた理由は「見学の礼に鱗（素材）のひとつもくれたらいいな」とかいう理由だと思う。

その後、街の各所で湯気をあげている温泉を指をくわえて見送りながらロハルドさんの工房へ向かう。

ルナナリアスは自然の地形を生かした街であるため、整備されているとはいえ場所によっては移動に力を使う。このメンバーでへばるような奴は居ないが、ロハルドさんの工房はそんなルナナリアスの街中でも特に難所にあった。街中で難所ってなんだよって気がするが、実際そうなのだから仕方がない。

綺麗に舗装された道を横に逸れてから待ち受けていたのは、急こう配のごつごつした岩の路。人が通ることなど考えられていない坂道を使わせと上った先の、見晴らしだけは良い台地に建っているのがロハルドさんの工房だった。

この場所、ちよつと先の崖まで行くと真下に広大な森が広がっている。(一応)街中にある生活面での利便性と、森へ素材を採取しに行く際の交通面での利便性を考慮した結果だそう。

……交通面つつつても、それが適応されるのはロハルドさんだけなんだけどな。崖はほぼ垂直でも人も動物も魔物も登れそうにないのだが、ロハルドさんは指先の力だけで上下を行き来するらしい。

ガタイと角の他はエルフで通してもいいような顔立ちをした人であるが、こういう所を知っているとやっぱり鬼人族なんだな、となる。

「お邪魔しま〜す」

「あら、意外と小奇麗ね」

久しぶりに入るロハルドさんの作業場に背筋がのびる。ルリルの野郎は無遠慮に入り込んでいくが、技術を持った職人さんの職場というの独特の空気があつて緊張するのだ。

古そうに見えるのにまったく音が鳴らずにスムーズに開く扉や、動きやすさを追求した作業同線。材料を兼ねた観葉植物が配置されている様子は目に優しいし、柑橘系のいい香りもする。

明り取りの窓の位置や魔道具の照明にもこだわりを感じるその部屋は明るくて、こう……なんとというか、職人の工房ってよりはデザイン

ナーのオフィスといった感じ。デザイナーのオフィスとか見たこと無いけど、なんつーかスタイリッシュ。

そう思い部屋の中を眺めまわしつつ、ロハルドさんの涼やかな横顔を見る。俺と同じく眼鏡をかけているからか、その美麗顔にもどこか親しみを覚えてしまう。眼鏡の同族意識ってすげえよな……。

ついでだから眼鏡の調子も見てもらうか。戦闘中に外れないようにしてある特別製の眼鏡も、実をいうと細工を施してくれたのはこの人だ。

生活においても冒険においても戦闘においても視覚の確保は非常に重要なため、それだけでもかなり助けられている。

「ここへ来るのも久しぶりだなあ」

「アモネとルツプル、どちらの茶葉がいい?」

当たり前のようにお茶を淹れてくれる上に、お茶っぱまで選ばせてくれるらしい。

アシユレがお茶好きのため、よく旅の間振舞ってもらったり新しい町へ行くとそこ特有のお茶を飲んだりする。だから俺もそこそこ詳しくなってしまうたので、提示された中からずっと好みの茶葉を選んだ。

「えーと……。じゃあ、アモネで」

「ルリルちゃん様はルツプルがいいわ!」

「私はアルサムで」

当然のようにマイヨールまでお茶を所望してきた。おい。

普通こういう場だと付き人って控えるもんじゃねえの???

しかも  
選択肢外の茶をねだってやがる。  
しかしロハルドさんは気にしたふうもなく頷いた。

「心得た。茶菓子もつけようか?」

「お願いします!」

茶菓子、の言葉につい飛びついた。この人お菓子を作らせても天才的に美味いからつい……。

「ふふっ。そう喜んでもらえると嬉しいものだ。ミサオくんはワタシ

が作るものはみんな好きだものな」

「いやあ……ロハルドさんの作るお菓子、甘さ控えめなのに、こう、コクがあるっていうんですかね？　美味いんですよ」

「それはよかった」

食い気味で返事してしまった事に少々恥ずかしくなるが、ロハルドさんは引くことなく微笑を浮かべて頷いた。

うくん……。掴めない所も多いけど、所作やさりげない気遣いが、アシユレとかとはまた別の格好良さがあるというか……。かつこいい大人なんだよなあ……。

俺もああいう余裕のある大人になりたいもんだと思いつつながら、洗練された所作でお茶の用意がされていく様子を眺める。

あ、そうだ。

「そういえばよく俺がミサオだってわかりましたね？」

流れでここまで来てしまったが、まだロハルドさんがどうして俺がミサオだを見抜けたのか聞いていなかった。顔はともかく背丈も体格も髪の色や長さまで違っているのによく気づけたもんだよ。

賢者同様、魔力の質で気づいた……。とかかな、やっぱり。

俺はなんとなくの予想をつけつつ、目の前に出された茶にありがとう口をつけながらロハルドさんの答えを待つ。

そして。

「ん？　なんだそんなことか。好きな男が多少姿を変えたくらいで気づかぬほど、ワタシの愛は軽くないぞ」



口に含んだ茶を全部嘔き出し、目の前の男にかけることとなるの  
だった。

65話 ▶ 性別つて誤差らしい〜現実逃避が追い付かない

「ふっ、げはっ!!」

予想外の言葉に盛大にむせていると、横を青と金色の軌跡が横切った。反射的にそれ……ルリルを羽交い絞めにした俺、なかなかグツジョブである。

「油断させておいて目の前で宣戦布告とはいいい度胸じゃない!

ちよつとミサオ、離さない! もし捕まえるなら体の前に腕を回してギョツとしなさい!」

「捕まえ方に注文出されることってあるの!?!」

こいつの要求に応えるのは癪だがこのままひと悶着起こされて口ハルドさんの工房が滅茶苦茶になったら大変だと、渋々ルリルを子供がぬいぐるみを抱きしめるような形でつかまえ直す。

するとひとまず落ち着いたのか、ルリルは満足げに笑みを浮かべた。……鋭い視線は口ハルドさんに向けられたままであるが。

「……というか、求愛もそうだけど、なに。男? ミサオは女の子でしよ」

(そっぴいよこいつに話すタイミング無かったな……)

会う奴全てに俺の現状を話していたらそのうち噂が広まって面倒なことになるのでは、という懸念があるもののアルメイオやルリルなんかの厄介な相手には情報を開示してしまった方がいいのかもしれない、という気もする近頃の心境である。そうすれば興ざめして俺に付きまとわなくな……いやつい先日メンタルオリハルコンポジションティブ野郎が俺を男と知ったうえで更に求婚してきたわけだが……いやそれよりもまず口ハルドさんのさっきの発言はなんなんだよ。

混乱したまま思考に収集がつかなくなってきたので、俺はとりあえずひとつひとつ処理することにした。

「……口ハルドさん、妙な冗談やめてくださいよ。ははっ」

とりあえず面倒くさいルリルへの説明は後回しにして、まあ俺をか

らかう冗談だろうな……と思われるロハルドさんの発言の対処にあたる。

しかし。

「？ 冗談ではないが。ミサオが再びここを訪れたら告げようと思っていた。どうも以前は忙しかったようだからな」

「……………」

表情は真顔に近いのに照れくさそうに頬を染めながら言われてしまった。

鼻からスウーッと息を吸い深呼吸する。目の前に丁度ルリルの金髪があつたので顔を押し付けて吸ってみた。ペット飼ってる人が動物を吸う時の気分ってこんな感じか？ あ、めっちゃいい匂いする……これで相手が女子だったら大勝利なんだけだな……。

だがロハルドさんは現実逃避をキメる俺を気にする風でもなく、淡々と持て成しの用意を続けている。

「それと竜人。ミサオは男だぞ？」

「はあああああああ〜ん？」

俺の思考をおいてけぼりにしつつ律儀にルリルの疑問に答えたロハルドさん。ルリルは心底「馬っ鹿じゃねえのこいつ」みたいな声を出す。その次の行動が予想外だった。

「ぎゃあああああああ!？」

頬を膨らませながら体をひねったルリルが、俺の胸を鷺掴みしてきやがったのだ!!

「ば、おまつ、ちょ、ふざけっ、そのみツ！」

馬鹿お前ちよつとふざけんその見た目じゃなかったら即座に脳天かち割ってるからな。……そう言おうとしたのに、ポンコツとなり果てた俺の口はその全てをぶつ切りに放出する事しか出来ない。

こんな真正面から鷺掴みにされること、ある!? 堂々としてるにも



段が今すぐほしい!!

ワンチャン、ロハルドさんが実は筋骨たくましいだけの女性である可能性にも賭けてみた。けど? ワタシは男だが」と無慈悲に叩き落されました。はい。

そして、数十分後。

「まあ! あの魔王を倒したのがミサオなの!? すごいわすごいわあ!  
! ふふんつ、やっぱリルルちゃん様の慧眼に間違いはなかったわね。そんな相手と運命の出会いをするなんて〜」

「冒険者協会で駄々こねてたお前を押し付けられたただけだけだな」  
「なるほど、魔王の呪いでその姿に。それは災難だったな……。君自身に戻りたいと考えているなら、ワタシに出来る事なら何でも協力しよう。今の君もミサオくんであることに違いは無いが、元の君の方が好ましい容姿だ」

「今までで一番素直に協力申し出てもらってるのに素直に喜べないのはなんなんスカね……。あの、俺は普通に女の子が好きなんですけど……」

「ミサオ? 性別なんて可愛さの前に意味は無いのよ?」  
「ミサオくん。性別など誤差だぞ? 大切なのは互いの相性だ」  
「お前らなんでそこだけ息が合うんだよ」

ルリルの勢いに今度は下半身を掴まれかねなかった事もあり、この姿になった経緯をなんとか説明し終えた俺。現在はぐったりと応

接用のソファ―に身を任せていた。……疲れた。

「……ところでよ、ルリル。お前が俺を好ましく思う理由は職業技能、クラススキル魅了”の影響なわけだが……」

もう「性欲が反転して今の形の呪いになった」という部分だけ触れせば洗いざらい話した方が楽じゃね? と【職業・女】という状態にあることまで説明した俺である。最近事情を話すハードルが確実に低くなっている気がして我ながら危うい。でもこれ以上男にモテたくない。いや今日は男の時に男に好かれていたという知りたくなかった事実が判明したわけだが!!

でも少しでも俺の心の負担を減らすために、スキルの影響下で俺を好きになったのだとルリルが理解して不快に思い離れてくれればかなり楽に……。

「?」それが何か問題あるのかしら。いくらスキルの影響があるからって、好ましくない相手をこのルリルちゃん様が愛するはずないわ。ミサオは安心してこのルリルちゃん様の愛に身を委ねればいいのよ? ふふっ」

だよなあああああ!! 知ってた!!

アルマデイオの時の事を顧みるに、こういった自分自身に圧倒的自信がある奴らには「スキルで惚れるとかヤダくね?」みたいな通じないと薄々思ってたよ!! ただ俺の精神力が削れただけだったわクソが!!

「ほう……竜人をそこまでタラシ込むとは流石がミサオくんだな。まあ本来のミサオくんを愛している分、ワタシの想いの方が深いが」  
「ああん?」

ロハルドさんはロハルドさんでこっちの心境を複雑にしつつルリルを煽るし! しかも本人に煽ってる自覚ないし!!

俺はただ馴染みの技師に魔装工芸核アーティファクトの修復を頼みに来ただけなのに、なんでこんな心労を……。

そこまで考えて、俺は思考をぶん投げることにした。

現実逃避に次ぐ現実逃避で一向に問題は解決しないが、今は一刻も早く用事をすませて可愛い女の子たちの元へ帰りたいたいのだ。

こんな見た目だけは一級品なのに性別：雄共の俺を挟んだ恋愛ごとのバチバチとかいう地獄みたいな状況から早く脱出したい。可愛くて柔らかくていい匂いのする女の子に囲まれながら美味しいもの食べて温泉入りたい。

ルナナリアスには半分回復目的で来たのに現状全く癒されていないのマジで最悪なんだが。

俺は鋼の意志でもって意識を切り替えると、背中を指し示して口ハルドさんに申し出た。

「あの。とりあえず、アーティファクト魔装工芸核の状態見てもらっていいスカ」

## 66話 ▶ 再戦タイムリミット（魔王視点）

（あく、おかしい。……ミサオに憑いてから笑ってばかりだな僕は）

魔王は未だに笑いで痙攣しそうになる体をおさえる。この体はあくまでイメージであり実態が無いというのに、不思議なものだ。

そしてこの魂の拠り所ともいうべき人間……無理やり本来の目的を遂行しようとしている健気な英雄様<sup>ミサオ</sup>を眺めた。

どうやら今までの流れを全部ぶつちぎり、魔装工芸核<sup>アーティファクト</sup>の修復という自分の要求を通すつもりの方である。

このアイゾメミサオという（元）男、とにかく娯楽として優秀だ。

これが少しでも現状に流されるだけならば途端に興味を無くすだろうが、ほぼほぼ空回りしているとしてもなんとか抗おうとしている姿は面白おかしく好ましい。

やはり死出の旅路のお供にはこの愛玩動物もといミサオこそが相応しいな、と魔王は思考する。ここまで飽きない連れが居るなら、潔くこの世界を去るのも悪くはない。

しかしそう思うからこそなおの事……現状は楽しいが、少々問題を抱えていた。

ミサオは元の姿に戻るための手段を掴みかけている。そして今のままでは魔王にそれを妨害する術はない。

紆余曲折があろうとも順調にその過程を辿っている今、指をくわえて見ているだけではいずれこの関係性も終わるのだ。魔王とミサオを繋いでいるのは、彼が解こうとしている呪いだけなのだから。

今の魔王に出来るのはせいぜいミサオの神経を逆撫でしてその反応を楽しむだけである。

少し前にその状況から多少の変動があったのだが……それでもまだ弱い。

（……少し、沈むか）



このままミサオの愉快的現状を眺めていたところだが、少し思考をまとめようと魔王は自らの深層心理の世界へと意識を移動させることにした。

ほんの少し。実態を留めようという意志を弱くすれば、魔王の魂は容易くそこへ、”底”へと落ちていった。

前世の世界を想起させる建物の残骸に囲まれた、様々な時間が混在している狭間の空間。それは「魔王」と呼ばれる彼女の深層心理。

全てが壊れていて、全てが曖昧。

荒廃的、排他的でありながら、それでも何かへ縋るように空は美しい。

その空間の中央。

瓦礫の王座に座すは、白い面おもてに黎明色の瞳、射干玉ぬばたまのような黒い髪を持つ美しい少女だった。セーラー服を身にまとう少女と女性の間まに位置する見た目と、中身と外見のアンバランスさをもってして無垢かつ背徳的な魅力を備えている。

ボロボロの王冠を頭に、普段は子供の時の姿しか維持できない彼女は自らの空間を睥睨する。

この光景を見るたびに「自分もたいがい中二病だな」とため息をつきたくなる。

かつてミサオに対し「転生物ジャンル」が流行った要因として『みんな一から人生やり直したい、つまらない人生送ってる奴らばかりってことかな?』などと皮肉を述べたが、実際の所それは自分の事だ。

魔王としての本質を失わないながらも、紛れもなく存在する前世の

自分。その記憶。

どこまでもつまらなくて、意味もなく、自分で生きる目的も見いだせないままの人生だった。

その上で死後、”舐め腐ったこと”を言われたがためにブチ切れて起こした行動の結果がこの「厄災の魔王」という体である。

ブチ切れたこと自体には押し付けられかけた運命に抗ってやったという爽快感こそあれど、後悔はない。ただ全てには抗えきれなかった事もまた事実であり、その忌々しさは涙さえ滲ませる。

その涙は悲しみではない。魔王は前世人間であった時から、怒りで涙を流す人種だった。

この空間が形成されたのはミサオに憑りついてからである。その時夢と勘違いして入り込んできたミサオの意識に涙を見られたことは不覚であるが、もうここも慣れたものだ。

「ああ、今日も元気だねえ」

ざわざわと這いより纏わりつく数多の黒い手で縊われた髪の毛のようなそれ。少女の黒髪と同化しているそれらは彼女をすぐさま死の淵へと誘いたいようだが、それを成すには彼女の魂が強すぎた。

最初こそ弱ったこの魂を縛るように深層心理内に現れたそれを少女は厭わしく感じたが、今では片手で戯れる程度には愛着がある。

あくまでこの空間の王は魔王その人。排除は出来ないが、力でもって抗う事は可能だった。

怨嗟の声にまみれた黒い集合体はこれまで魔王として屠ってきた者達の叫び、残滓。おびただしい数のそれらは直接にせよ間接的にせよ、彼女がこれまで手にかけて来た魂である。

常人ならば一時間とせず気が狂うような声の集合体が、常に耳へと流し込まれている状態だ。

だがそんな声も魔王たる彼女にとっては心地よいBGM。

すでに魔王という器に魂が納められてから長い。前世の年齢を数回、数十回繰り返し返しても足りないほどに。

人を殺める事すら蟻の巢に水を流し込む程度の行いに過ぎない。基礎とする感覚がすでに違う。

しかし。

……敗北し全ての力を失って、かつての生と同郷の者の魂を寄る辺としている現状が「以前の普通」を押し付けてくる。が、その二つの価値観は奇妙なことに融和し、同居していた。

「この姿を得てから、多少なりとも僕も変質してきているという事かな。ふふっ」

魔王としての姿に人間体は無く、数百年不変だったもの。それがミサオの魂に同居しこの空間を得ることで、じわじわと変化が進んでいく。

不快でこそないが、このままではよろしくないなど感じるのも事実。

このままミサオの無様さを眺めるだけで満足するようになってしまったのは目的が果たせない。

……魔王はなんとしても、ミサオを道連れにするつもりだった。

(さて……。そのためにも、彼が見出している希望をつぶさないかね) 先ほどまで散々ミサオを笑っていた魔王であるが、細められた瞳から温度は消え失せている。

小さな手のひらをかざし、小指のみ黒く染まった爪を眺めながらルナリアスに向かってくる気配に口端を歪めた。

——やあ、来たね。いい子だ。

出来るか不確定ではあったが、取り戻した一つの力を介しての呼びかけには成功したようだ。

染まった爪。それはかつての力の一端。

……魔王は天空迷宮にて、魔族バシユトレーゼから自らの権能の一部を回収していた。

「……それにしても、この体も難儀だね。本人が知らない所で復活の手段が用意されているなんて、悪趣味としか言いようがない。僕自身でさえ気づかなかったのはお笑いだよ」

体に備わった機能とはいえ、自分の認識しない所でお膳立てされるのはあまり趣味じゃないんだよな、と吐き捨てる。

そう。ここ最近気がついた事なのだが、実のところ魔王の魂が現世に留まっている時点で「魔王復活」の目途はたっているのだ。

それを可能とするのは「権能を受け継いだ」魔王軍の部下たち。

これまで半ば眉唾物として扱われていた魔王の死後での権能譲渡。それがはつきり確認できる形で複数名に現れたわけだが、魔王はそのうちの二人を見て直感で感じた。「あ、食えるな」と。

なにもまずそうな魔族を直接喰らうわけではない。だがその者達に「預けた」状態にある魔王の力を全て喰らえば、おそらく魔王は蘇る。

魔王は自分の権能を引き継いだ部下二人を思い出した。

一人目。アルマディオ・カーネリアンは眷属の生成と召喚、使役。眷属召喚という総称で纏められているが、実質三つの能力を有している。

二人目。バシユトレーゼは魔王存命の間、世界に蔓延っていた黒星草の力……魔力を吸収し、相手から力を奪い己の糧とする能力を得ていた。

それらを続けて見た時にひっそりと覚えた、飢餓感に似た感覚。きつと元の自分を取り戻すため厄災の魔王の本能が求めているのだろう。

今の魔王が無力であると信じ切り、油断したミサオを復活と同時に不意打ちで道連れにすることなど容易いはずだ。だがその分、今はま

だこの力の回収に気付かれてはならない。

アルマディオにミサオが触れた（殴った）時には回収されなかった。魔王自身の心構えなど何かしらの条件はあるのかもかもしれないが、現状ミサオたちに協力しているアルマディオから力が消えればさすがに鈍いミサオでも怪しむはずなので回収できていないのはむしろ好都合だ。

まずは”呼び寄せた”他の権能保持者で条件を確認すればいい。

「♪」

らしくもなく鼻歌が零れる。

災厄の魔王としての役割はミサオに敗北した時すでに潰えた。故に今さら世界をどうこうする気はないが、かつて抱いていた目的意識は現在一人の人間へのみ向けられている。

世界を滅ぼす厄災の魔王が、たった一人の人間を道連れにするために思考を巡らせているのだ。

ずいぶんちっぽけな存在に成り下がったなど感じるが、特に悪い気分はしない。むしろ遠足前の子供のような気持ちを抱いている。

「ああ、ミサオ。なんて恵まれた人間だろうね？ 君は。僕の寵愛を一身に受けられるんだから」

最初は「まあこいつ一人道連れでも悪くないかな」程度だった気持ちだが、気づけば執着という段階まで成長している。それは確定していたはずの勝利に障害とタイムリミットが出来た故だろうか。それとも共に過ごすうちに、思った以上にミサオ自身を気に入ったからだろうか。

こうした疑問を抱きながら暗躍するのも存外楽しいものだなと、魔王はほくそ笑んだ。

己を負かした英雄もどき。自分の中に忌まわしい呪いのような魂が同居していると知りながら、（ミサオは否定するだろうが）本質的に

は嫌悪していない変わり者。

いくら魔王がうるさいとはいえ話しかければ必ず答えてくるし、この間などは「ダメ元」とはいえ魔王に協力さえ求めた。

望む願いの反転で女になるような奴であるため絵物語のような英雄ではないと思っていたが、その強さに反していつも何かしら間抜けなりアクションをしている姿がとにかく飽きない。

陰鬱な死の世界も、きつと彼が居れば楽しく過ごせるだろう。

「いい加減、僕にも呪いの焼きがまわってるのかな」

ミサオの魅了は未だに効果はさほど強くはなく、まず彼に何かしら好意を抱かなければ発動しない。だからこそ魔王がもし自身の呪いが引き寄せた職業スキルの影響下にあるとすれば、それは「好意」を認めたことになる。

だが無理に否定するよりも、これに関しては受け入れた方が愉快な気もした。

人へ向ける好意とその意味を考えるなど、何百年ぶりだろうか。

「ああ、楽しいなあ。ねえミサオ、この僕に惚れたんだろう？ 安心したまえよ。君は僕が必ず連れて逝く」

夢と勘違いした魔王の深層心理の空間で、この姿に惚れたとぬかしたくせに未だにその正体に気付きもしない間抜けな英雄。

ミサオが万が一にでも元の性別に戻る力を手に入れるまで。

それがひっそりと始まった魔王と英雄の、再戦のタイムリミットだった。

## 67話 ▶ 魔術工芸核く変身はロマン

野郎どもからの俺への好意( )についてこれ以上考えたくもないので無理やり本来の目的へと軌道修正を図ると、意外にもあつさりそれは受理された。

「！・ワタシとしたことが。そうだな。ミサオくん、まず魔術工芸核アーティファクトの現状を見せてくれ。その体に合わせて調整をしよう」

「お願いします!!」

た、助かった。ひとまずあの気まずく地獄のような話題から逃れることが出来た。

……：そーいや、本来の目的って魔術工芸核アーティファクトじゃないんだよな。あくまで今回それはおまけなわけで、本命の本命な目的は持ち運びできる空調装置だ。

しかしロハルドさんはすでに職人としての顔になっており、先に魔術工芸核アーティファクトの調整をしなければ気が済まないだろうことが窺えた。

まあ順番が前後したところで問題はないだろう。俺としても、とりあえず壊れた魔術工芸核を預けて一度みんなが待つ宿に行きたいところである。

空調装置については話すだけ軽く話しておいて、詳しくは俺より魔術に精通しているシャテイ達を連れてきてからの方が良いだろうし。

俺は先ほどまでのやり取りを必死に頭から追い出しながら、今後の算段をつけはじめた。

腕にがっちり抱き着いたままの美少女おっさんについてはもう無の境地で考えないようにしている。

さて、この魔術工芸核アーティファクトというもの。

元は立体なのだが、常に身に着けていられるように皮膚に格納できるようにになっているのが仕様だ。格納された後は格好いい刺青のよ

うになる。

初めて入れてもらった時は刺青デビューにドキドキしたものだ。憧れはあったけど、もとの世界じゃ入れる温泉とか限られそうで刺青とか一生入れないと思ってたしな。

『君、またあの重苦しい鎧にするの？ デザイン変えたらどうかかな。というかそもそも今の君にはそんな防具必要ないだろう。無くても強いんだから』

馬鹿笑いしていた後しばらく静かだった魔王がセンスのない事を言ってくる。

(はあく？ 分かってねえなお前……。重苦しい？ あの重厚感ありながらも機能美に優れたスタイリッシュユさがわからねえかな。かっ！)

『……。ひよつとして僕、面倒くさいスイッチ押した？』

(面倒くさいとはなんだ面倒くさいとは！ あのなあ、お前も男なら、こう、わかるだろ？ ……変身のロマンが！ 鎧とかもさ、格好いいじゃん！)

『ああ……。そういう。悪いけど僕はそんなに』

(マジ？ マジで言ってるそれ？)

心底鬱陶しそうに言われてしまい衝撃を受ける。

この世界で唯一俺が抱く変身への憧れを正しく理解するだろうと思っていたお前が！

魔王お前も男の子だろ！ 変身のロマンが通じないなんてある！ というかお前って魔王としての姿にこだわりなかったっけ！ 装甲とか自分でかっこいいって言ってたじゃん！ あれはいいの！ 何で変身の良さが分からないんだよ！

俺の衝撃具合がダイレクトに伝わっているはずだが、魔王はあくまで冷めた目で俺を見る。

その温度差にちよつとだけ心が折れかけたのは秘密だ。

『あいにくと、特撮？ や魔法少女？ とかの、変身ものの類は見たこと無くてね』

(はあああああ!? も、もったいねえ！)



『そういうの見る家庭じゃなかったから。自由に何かを見られるようになった年にはもう周りはみんな子供向けの番組は卒業していたし』  
珍しく前世について触れた魔王。どこかぼんやりとしつつ過去を思い出していたようだったが、はっと我に返ったように目を細めジト目で俺を見てくる。

『まあ、好きにするといいさ。僕は興味ないからひっこんでおくよ』  
と。そんなことを言い残して、本当に綺麗さっぱりあのこまっしゃくれた美ガキとしての姿を消してしまった。実体化してないだけで前みたいに普通に俺の中に居るんだろうけど、最近はずっとあの姿でうろちよろしていたから奇妙な感じだ。

……いや、視界がすっきりしてめちやくちやいいじゃねえか!! 快適!

今のうちにさくつと魔術工芸核の調整してもらつちまおう。

ふんっ! ロハルドさんにすっげえカツコよく新生魔術装甲を實現する調整をしてもらうからな! あとでその格好良さにひれ伏すがいいわ!

……にしても、あれか?

子供の頃は自由にテレビ番組を見られなかったみたいない言い方してたな、魔王の野郎。厳しいご家庭だったのだろうか。

(……ま、今はそんな事どうでもいいか)

「ミサオくん、どうした? 背中を」

「あ、すみません」

お願いしますと言った方がいいが、魔王との会話で微妙なタイムラグができていたらしい。

ぼーっとしているように見えただろう俺をロハルドさんが促す。

俺は慌てて言われた通りロハルドさんに背中を向けた。

「……………。はあ。貧相な背中になったものだ」

「う、うす」

襟を引つ張って背中を覗き込んだロハルドさんにため息をつかれた。

自分でも気にしている事だから少々落ち込むぜ……。俺だって自慢だった広背筋が恋しい。

「ちよつとミサオ！ 他の男に簡単に肌を見せるものではないわ！  
しかも未来の夫の前で！」

「さつき胸を掴んできたお前がそれ言う!？」

「ルリルちゃん様ならいいのよ！」

「よく堂々と言い切れるなお前!! ……はあ。あのなあ、魔術工芸核がそこに格納されてんだよ」

「まあ、そうなの？」

いちいち全部の相手をしていては俺が参ってしまう。

ツツコミを途中であきらめて説明すれば、興味津々といった風にルリルもまた俺の背中を覗き込んできた。

……………いや、背中くらいならいいんだけどよ……………なんか腑に落ちねえな。

そして俺の魔術工芸核を見ていたロハルドさんは少々唸ると、表皮に収納されている魔術工芸核の模様をなぞる。するとわずかになぞられた部分が熱くなり、俺の皮膚からじわじわと物体がせり出てくるのを感じた。

核を取り出す時の感覚は魔術装甲を展開する時とは少し異なり、かさぶたが剥がれそうで剥がれない時に似たむず痒さがある。

「取り出したぞ。…………調整どころの話ではないね、これは」

「ども。…………うわあ」

取り出された魔術工芸核は水晶の原石に似た見た目だが、もの見事にまっぴたつに割れていた。ロハルドさんの手のひらの上でごろんと転がったそれに申し訳なくなる。

こんな状態になってたら、そりゃ魔術装甲も砕け散るし維持できねえわ…………。

「すみません。こんなふうにしちゃって……」

「まあ、これとて物だ。そのまま使用していても、いつかは壊れる。多少扱いに気を付けてほしくはあるがな。……しかし装甲のみならず核まで碎けるなど、いったいどんな戦い方をしたんだ？」

「うつつ。けどこれって魔王との戦いとかで壊れたわけじゃないんですよ。突然碎けたというか、なんとというか……」

ロハルドさんは割れた魔術工芸核を眺め透かし、その後で俺を見る。

「そういった要因か。……考えてみれば当たり前だな。これはワタシが男のミサオくんのために調整しあつらえた代物。そこまで体が変わ化してしまえば身に合うはずがない。小さな服を体の大きな者が着れば千切れる。これもそんな理由で壊れたのだと理解するといい」

「俺、体的には縮んだんすけど」

「普通の服と同じに考えるな」

「はい……」

至極真面目な顔でそう述べたロハルドさんに肩が落ちる。

……さつきまで男の俺を愛してるとどうのこうの言ってた人なんだよな、この人。調子自体はいつもと変わらないからどういう感情で接しているのか反応に困る。いや態度変えられてもそれはそれで困るけどさ!?

例の事に関しては改めて丁重にお断りするとして、この人どういった理由で俺をす……うぐ……好きになったんだろう。魅了が備わる前からつぼいし。そういう趣味だつて事はこの際置いておくとして、なんで俺？ お世辞でも男の俺は可愛くないだろうと考えても。

趣味が合ったからとか？ 俺もロハルドさんと魔術装甲に関して話すのは好きだけどさ。そこは友愛でいいんじゃないかなあ!?

かつこいい大人として尊敬してた人から愛の告白された俺の気持ちを考えてくれ。

ともかく俺は魔術工芸核をあずけ、その後で制作を頼みたいものが

ある事だけを告げてそそくさロハルドさんの工房を後にした。

すでに魔術工芸核の調整……もとい修復に大半の意識を裂いていたロハルドさんは生返事だったが、今はそれがありがたかった。

「お前はいい加減離れろよ！」

「いやー」

でもって、俺の腕には未だに余計な重りがついてるわけで。

ルリルの奴、このまま宿までついてくる気らしい。これじゃまともに買い物も出来ねえだろ。わざわざ仲間達から離れてまで下着を仕入れに来たっつーのに！

「せつかくだもの。ルリルちゃん様、ミサオとデートがしたいわ」

「俺にも予定があるの！」

「ええ〜？ やだやだ。ミサオと遊ぶの〜」

くっ……！ 中身が分かっててもこの見た目で甘えるように駄々こねる姿は可愛い。強く振り払えない自分が情けないったらねえ。

そうして悩みによる頭痛が収まらない中。

「……………あらっ？」

何かに気付いたようにルリルが空を見上げた。それとほぼ同時に視界を黒い何かが覆いつくす。

それが間近に迫った巨大な鉄柱らしき物体だと気づいたのは、片手ではじいてからだった。

「……………」

「ここは街中である。」

咄嗟に謎の鉄柱に対処できたのは良かった。

俺は動体視力も反射神経も筋力もスキルのおかげではちやめちやに優れているので、人のいない方向へ弾き飛ばす事も出来た。

うん、それは良かった。

しかし。

「ふん、流石にこの程度ではどうにもならんか。さすがだな、英雄アイゾメミサオ」

「……………」

家屋の屋根上から聞こえて来た声にぎぎぎと首を動かせば、そこには一人の魔族。

そして同じ方向にある、たった今俺が弾き飛ばした鉄柱で無残に崩れている建物。ぴゅーぴゅーと上がっている水飛沫からは湯気が出ており、それが温泉であることが窺えた。

……………うん。

俺は視線をスライドさせて、もう一度魔族を見た。

「我が名はガルドウド！ さあ、魔王城で素通りしてくれた礼をしてやろうか。ついでに魔王様の仇を……」

「これから温泉楽しもうって時に余計な事してくれてんじやねえよクソが町の人の心象悪くなって出禁になったらどうすんだ teme エこの野郎!!!」

俺は魔族の言葉を最後まで聞くことなく屋根の上まで一足飛びで近づき。その顔面に渾身の右ストレートを振るうのだった。

アルマディオといい魔族共、襲ってくるのは良いが街中はマジでや

めろ。

## 68話 ▶ 権能回収（ガルドウド、魔王視点）

ガルドウドは眼前の華奢な女から感じる”圧”に、体が震えている自分に気が付いた。

同時にスウ……と体を満たしていた全能感が消えていく。

それは極寒の中、分厚く着込んでいた衣服を全て剥ぎ取られた上で氷塊に覆われるような心地であった。

殴打された部分から伝わる振動が脳を冷やし、絶対的な”実力差”という現実が目の前に高くそびえる。

（俺は何を勘違いしていた？）

自問する。

この”元”男は自分たちの王を倒してみせた存在だ。

あの絶対的な力と恐怖の象徴であった”魔王”を。

魔王が倒されたと知った後、素通りされたことに自分は安堵していたのではなかったか？ バシユトレーゼの手前、屈辱だのなんだのと言葉を並べたがそんなもの全部ポーズだ。

魔王の権能を授かったとはいえ、たったひとつの能力を手に入れただけで全ての力を所持していた魔王本人を倒してみせた英雄にどうして立ち向かえると考えたのか。思い上りも甚だしい。

真正面から挑むアルマデイオとかいう馬鹿も居るが、自分はそこまです無謀ではないし主君への忠誠心もない。

だというのに、何故。

何故あの馬鹿のように自らのこのこと真正面から出向いているのか。

「そうだねえ。確かに君は僕に対してそこまでの信望は抱いていなかった。でも、いい子だ。よく来たね」

羽でくすぐるように軽やかな声が一瞬脳裏をかすめたが、ガルドウドはそれを言葉として認識できないままに自らの焦燥に沈んでいく。

初手で奇襲に使った鉄柱は硬化させ切り離れたガルドウド本人の腕を巨大化させたものだったが、アイゾメミサオはそれを生身ではじめてみせた。まるで虫でもはらうかのように。

もともと備えている魔族としての個人能力でガルドウドの腕はすでに再生しているが、それを何本投げようとアイゾメミサオを仕留められるビジョンが見えない。

「おらっ！ どうしたよ！ さっきまでのイキりはどこへいった!？」

それは自分が聞きたいと、襲撃した身でありながらガルドウドは吐きそうになる気持ちで体を硬化させアイゾメミサオの猛攻を前に呻いていた。

拳による初手はあまりの速度に対応できず生身で受けたが、以降は魔王の権能である硬化させた表皮で攻撃をしのいでいる。さすがにそれを生の拳で殴り続けることは辛かったのか攻撃を武器に切り替えているアイゾメミサオであるが、その膂力は呪いで女になっているにも関わらずまったく衰えている様子はない。

切るといっても殴打のような斬撃が内臓をえぐるように内側に響いた。

撤退。

その判断が脳裏をよぎる。

少なくとも単独で挑んでよい相手ではない。

そう判断し体を動かそうとしたが、気づけば無意識のうちに”攻めの体勢をとっている自分に気が付きガルドウドは戦慄した。”

これは自分の意志ではない。なにか別のモノからの干渉が行われている。

【おや、流石に気付くかい。ごめんねえ。まだ逃げられると困るんだよ】

再び何者かの声。しかしガルドウドは気づかない、気づけない。



「僕が力を回収できるまで、ミサオの相手を楽しんでくれたまえよ。  
親愛なる僕のしもべ」

+++++

「はあ……はあ……！」

荒く息を整えるミサオだったが、それはけして戦闘による消耗などではない。

足元に転がっているボロ雑巾のような魔族を前に、先ほどまでマウントポジションで殴りまくっていた事に対して向けられる周囲からの視線に冷や汗が止まらないのだ。

「見たか？ 一方的過ぎてひっでえ……」

「痴話喧嘩かしら」

「若いのお」

「にしても勘弁してほしいよな……。怪我人は出なかつたけど、見ろよあの建物。ぶっ壊されちまって……弁償できんのかね」

ひそひそ。ひそひそ。

周囲を遠巻きに囲うルナリアスの住民たちの言葉に、その内容をしっかりと拾っていたミサオは四方八方にあわあわと弁解じみた声をあげる。

「ち、違くて!!」

『一方的な強さというのは、時として被害者と加害者を逆転させる。君に分かり易く例えるなら飛び出してきた歩行者を轢いたダンプカーかな。ああいうのって、原因はどうあれ基本的に大きい方が悪くなるだろ? それを学べてよかったじゃないか』

(テメエ他人事だと思って!! もとはお前の部下だろ責任取れよ!!)  
『そう言われてもねえ。僕は君の体に間借りするしか出来ないか弱い魂であるからして……』

(よくもしやあしやあと……! だああつ! しょうがないだろ!  
アルマディオ相手くらい気持ちでやったら意外とこいつ弱くて……!)

『泣くよ、その子』

普段よく小物臭い悲鳴や怒声をあげへタレている所を見ているため忘れそうになるが、こうして魔王軍の元幹部……それも魔王の権能を一部受け継いだ者を容易く一蹴するあたり、この元男は一応。一応、自分を倒した英雄なのだなど魔王は他人事のように感心する。

そして叩きのめされた上に止めとばかりに弱いと言われた元部下、ガルドウドを見て……己の爪がもう一枚、黒く染まっている事に気が付いた。

(なるほどね。回収に必要な条件は“心が折れる”ことか)

バシユトレーゼの時と合わせてそう結論を出す。

このガルドウドは魔王が彼の内にある自分の力に呼びかけ、意志に干渉し呼び寄せた者。目的は受け継がれた力の回収とその条件の把握。

どうにも接触するだけでなく、その時に権能保持者の心が弱っている必要があるらしい。それを踏まえるといくら負けてもフられてもしぶとく前向きにミサオへのアピールを辞めないアルマディオからの回収が現状で為されていない事にも納得がいく。

「あら、ミサオ。終わったの? 流石ルリルちゃん様の未来の伴侶だ

わ！ 逢瀬デートの邪魔をした不届き者をルリルちゃん様に先んじて排除するなんて、素敵！」

「伴侶？ 逢瀬？ あの小さい子と？」

「年齢差と性別どっちに反応すればいいんだかわからんがとりあえずあの姉ちゃんがヤバいのは理解した」

「ふおっふお、若いのお。愛の形は色々じゃよ。年齢や性別など誤差じゃ、誤差」

「じいさん寛容だな」

「ルリルお前大人しく見てると思つたらここぞとばかりに周囲に余計な追加情報と誤解を与えるのやめろよ!! とうかそこのご老体は急にどうした!? この世界、性別と年齢差にガバな奴多すぎない!」

「ええっ、誤解？ 何が？ 事実しか言つてないわよ？」

「虚偽しかねえよ!!! ちゃっかりすでにデートしてることになってるし!!」

「ルリルちゃん様、あれは“照れ”というものです。よかったですね。ちゃんと意識してくださいようですよ」

「マイヨールさんちよつとあとでお話しようか？ 拳で」

「お話ならケーキとお茶を添えてください」

「凶々しき青天井かよ」

「あ、ケーキはルリルちゃん様も食べたいわ！ 片付いたならこの後お茶しましょうよミサオ。美味しいケーキ屋さんに連れて行きなさい」

「気分的には甘さ濃い目の甘味が食べたいところですね」

「このマイペースちゃん達がよ!! 俺は今この状況どうするのか考える方に忙しいんだよ加減しろ馬鹿共!!!」

それまでミサオの戦いっぷりを観戦していた竜人の少女の姿をした少年（ミサオいわくおっさん）が駆けよれば、彼の周りは更に賑やかになる。

仲間と別行動をされていてこれなのだから笑ってしまうなと思いつつ……魔王は慌てふためく宿主を愉快そうに、愛し気に眺めながら黒色に染まった爪に口づけるのだった。

## 69話 ▶ 感情の名前（パーティ視点）

一人別行動をとったミサオがてんやわんやしている頃。

町の中でも遠方だったため事態に気付かなかったパーティメンバーは、ルナナリアスの町を楽しんでいたのだが……。

「ねえルキくん。君って、ミサオ様のことが好きですよね？」

出店などを楽しみながら和やかに宿へ向かう途中。

一人行動を申し出た師匠が早く追い付かないかとチラチラと後方を気にしていたルキは、シャティの発言に足をもつれさせて盛大に転んだ。

「あびゅっ!？」

「まあ、いい反応。ふふふっ、ルキくんは可愛らしいですね」

「こら、シャティ。あまりからかわないであげなよ。……ルキ、大丈夫かい？」

くすくす楽しみに笑うシャティをたしなめ、アシュレが流麗な仕草で服に土がつくこともいとわず膝をつきルキを抱え起こす。その所作は正に高潔な騎士であり、周囲の観光客（の主に女性）や地元民（の主に女性）から視線を集めた。

しかし投げかけられた質問と、転んだ衝撃で眼を白黒させていたルキは、アシュレに感謝をする余裕もなく魚のように口を開いて閉じてを繰り返している。

「ルキ、変な顔」

「ちよ、モモせんぱっ、つつかないで」

その顔を容赦なく指でつつくのはモモである。灼熱迷宮探索時に少し仲良くなり距離感が近くなった分、そこに一切の遠慮はない。遠慮自体は最初からなかったかもしれないが。

「あははっ！ 初々しいもんだねえ、若者の恋愛は。若い頃を思い出すよ」

そして微笑ましそうな目を向けてくるガーネツタ。

思春期真っ盛りのルキにとって、現在の空間はなかなか堪えがたいものだった。

「あ、あああああああああのあの！ 皆さん何を言ってるんですか!? 僕が師匠を好きなんて、そんなッ、恋愛てっ!」

「あれ? あれあれあれ? なんでそこまで動揺するんですか?」

大切な師匠ですもの。尊敬して好意を抱く事に不思議はありませんよ? でも……もしかして、ルキくんが受け取ったのは違う『好き』なんです? それこそガーネットタが言ったような

「?!?」

弁明するようにしどろもどろで言葉を重ねたルキは、シャティの追撃で完全に言葉を失った。その顔は茹で上がった蛸のように赤い。

それを憐れむようにアシユレが少年の肩をぽんつとひとつ叩いた。

一方、いとけない少年に爆弾を投げつけたシャティはいえ、腕を組んで何故か得意げにうんうんと頷いている。

「……まあ、ルキくんはミサオ様の元の姿を見た事ありませんしね。元々男性だと聞いても、本質的に理解することは難しいでしょう。わたくしですら性別の反転なんていう現象、見るのはミサオ様が初めてです。なので、ですね? 君がミサオ様を女性として好きになっちゃうのもわかるのですよ。命の恩人でもあるわけですし、あんな出会い方をしたら運命感じちゃいますものね。魅了チャームに耐性があるうが関係ないと思いますよっ」

ルキがミサオの事を好きだと決めつけたまま話を進めるシャティに、少年はどう言葉を探して返せばいいのか途方に暮れてしまった。先ほどまでルナナリアスの名産や宿の話で和やかな世間話をしていたのに、なぜ自分は今こんな街中で赤裸々な気持ちを暴かれているのだろか。

こうした思考に至っているあたりルキはミサオへの好意を肯定したに等しいが、それについては本人にとって幸いか不幸か、まだ自覚していない。今は混乱と羞恥が勝っているようである。

そして慌てふためく姿があまりにも憐れだったからか、気遣い屋で紳士のアシユレがどうかフオローしてやろうと考えを巡らせる。

結果。

「ミサオはルキが同性だから結構な隙を見せているんじゃないかな？ 距離感も近いし。あれは……うん。良くないね。すまない、これは私が注意をするべきだった。無自覚にでも年頃の男の子を誘惑してはいけないよ、と」

人の事を無自覚と言いながら本人も無自覚で追撃をかけた。

「誘惑なんかされてませんけどおツ!?!」

ついには悲鳴のような声をあげたルキである。

様子を見ていたガーネットが「これじゃ私は乗っかれないね……」とからかいを自嘲する程度には盛大な慌てっぷりだ。そんなルキは周囲のまったく関係ない他人からも「なんかよくわからないけど初々しいねえ」みたいな視線を向けられていることに気付いていない。

「ルキ、ミサオママが好きなの？ でもミサオママは、モモのだからね。あげないよ」

「だ、だからあ……! もう!」

せつかくガーネットが控えたというのに天然その二からの追撃おわかりである。

モモの言葉に赤くなった顔を押しえてへたり込んでしまったルキは、この場に居る女性陣の誰よりも乙女であった。

「なんで急に、そんな話を……」

指の隙間から恨めし気にシャティを見上げるクウォーターエルフの視線を受けたシャティは、束ねた白髪を手でくるくると弄びながらぺろりと舌を出した。

「ごめんなさい。でもミサオ様がない時でないと、こんな話は出来ないかなって思っています。まあ恋バナしたかっただけですね!」

「こ、恋バナ!? いや師匠が居る前でされたら確かに気まずいどころじゃありませんけど、そもそもする必要がありました!」

「ですから、わたくしがしたかっただけ!」

「私欲!!」

行動を共にする中でその清楚な見た目に反する灰汁の強さは知っていたつもりだが、その矛先が自分へ向けられるところも厄介なのかとももの数分で思い知ったルキである。

更に。

「うふふつ、それとですね？ 君の事は嫌いではないし、とつてもいい子だと思っただけですけど……ミサオ様と同室じゃないですか、いつも今日とる宿でも多分というか確実に。いえ、弟子を気遣うミサオ様の優しさだと理解はしていますけれどね？ えーと。だから若さゆえの暴走を考慮してですね、先に自覚させた上で、お話しておいた方がいいかな……って思ったりなんかして」

お話しておいた方が、という言葉が自然とルキの脳内で「釘を刺しておいた方が」に変換された。

「暴走ってなんですか暴走って！ それに方が一……方が一ですよ？ たとえ僕が変な気をおこしても、師匠をどうこうできるわけないじゃないですか。力の差を考えてくださいよ。それに前提として僕にそんな不純な気持ちはありませんッ!!」

「ふふつ、今日はこの辺にしておいてあげましょうか。ちよつとからかいすぎましたし。で、ルキくんはミサオ様のどんところが好きですか？」

「今この辺にしておいてあげましょうかって言っただけですよね!!」

話が終わって無いんですけど！

「ルキ、あまりいい反応を見せるとシャティが喜ぶだけだよ。君のそういうところ、ミサオによく似ているから」

「そ、そうは言っても……。アシユレ先輩い……」

尊敬する師匠に似ている。

本来なら喜ぶべきところだが、あまり似ていてほしくない部分をそう言われても嬉しくない。

「えと……そういえば。皆さんは、師匠の事をどう思っているんですか？」

これは受け身になっているだけでは逃れられないなど、ルキは対応を質問へ変えた。

「もちろん愛していますとも！」

胸を張り真っ先に自分の気持ち主張したのはシャティである。天空都市マシユラバでもそうだった流れは見ていたので納得するルキだったが、その時の情報によりもとの男性としてのミサオが好きだったのか、それともたたくさんの元恋人を見た限り女性としてのミサオが好きなのかいまいちわからない。

「ミサオママは、ママ」

続いてふすーんっ！ と鼻息を出しつつ胸を張るのはモモ。表情は乏しいが、そこにはたたくさんの愛情が詰め込まれている様子が窺えた。こちらは言葉の通り家族愛なのかもしれないが、嫉妬心が人一倍なのはルキ自身が身をもって知っている。

「ミサオは放っておけないからね。ずっと共に居ようと考えているよ」

涼やかに笑みを浮かべながらさらっと答えたのはアシユレである。このパーティ内では特に理性的な人物だが、こういった質問を流さずしつかり答えるところにミサオへ向ける感情は大きいように感じた。

「次は私かい？ 抱いてもいいと思っっているよ」

「抱っ!？」

ルキの視線を受けて悪戯っぽく妖艶な笑みで答えたのはガーネット。その答えにはルキの方が動揺してしまい、本心は掴み損ねてしまった。

「し、師匠は愛されていますね……はは……」

ともかく矛先もズレたことだしここで一度話を終わらせようと、そう締めたルキだったのだが。

「ミサオ様は寂しがり屋ですからね。たたくさんの愛の受けるべき人です」

「そうだね。彼の故郷と同等になれるかは、わからないけれど。少しでも埋まってくれたら嬉しく思う」



「え？」

ルキがまだ知らぬ師匠の事で聞き返そうとした時。

「うおー！ みんな、待たせたー！」

待ち望んでいた師匠の声が耳に届いた。

## 70話 ▶ 温泉宿くたまにはうま味も欲しい

襲撃してきた魔王軍の残党っぽい魔族を名前も聞かないうちに返り討ちにしてしまった俺は、そのあとなんとかルナナルアスの町の人に弁明して自分は被害者であると理解してもらえた。

目撃者がまったくいかなかったわけではないからな。丁度俺が襲われる場面を見ていた人から証言を貰えて助かった。

……それはそれとして魔族の攻撃を弾き飛ばして建物を壊したのは俺なので、肅々と弁償代は払わせていただきましたが。ハイ。

あの襲撃魔族野郎に払わせようと思ったら、俺がルリル達に絡まれている間に姿を消していやがった。ファツ〇である。

黒金級冒険者として荒稼ぎしていたころの金がある俺としても、建物級の弁償ってなると懐が痛い。俺はただ下着を買いに來ただけなのに、なんでこんな余計な出費を……。

ともかく逃げられてしまったものは仕方がない。

俺にデートと称してケーキを奢らせようとするルリル達をかわしつつなんとか下着の購入を終えると、仲間達と合流すべく宿へと向かった。

「うおーい！ みんな、待たせたー！」

宿へ向かう途中、美人ぞろいの目立つ集団を見つけて遠くから呼びかけた。

荷物をまだ全部持っている所を見るに、どうやら散策を楽しんでいたらしく宿へチェックインもしていない様子だ。

「し、師匠」

何故かルキが狼狽えるような、そして縋る様な目で俺を見てきたが……きつとシヤテイあたりにからかわれでもしたんだろう。

苦労ように軽く肩を叩くと、腕に引っ付いているものをどう説明し

ようやくと思いつつ仲間達を見た。

……魔族の襲撃と弁償代についても話さないとなあ……。

「ミサオ様、用事はすんだのですか？ それと……また貴方ですか」  
「はあい。お久しぶりだわ〜」

俺に腕を絡めて気さくな挨拶をするルリルことルリルベレスだったが、やはりドラゴンである。簡単に腕を絡めてと言ったが、身長差のある俺の腕にくっついて体を浮かせられている腕力が恐ろしい。なんとたつて俺が振り払えない強さでがっちりホールドした上でこれだからな。

いや、本気になれば振り払えるんだけど……ただでさえ変な目立ち方したのに、この見た目幼女を無理やり引きはがす場面をルナナリアスの人たちに見られたくないのだ。まだ噂こそ立っていないものの、それも時間の問題かと思うとますます肩身が狭くなる。

くっ。ルナナリアスには半分休養目的で来たのに何故こんな疲労感を……！

そしてモモ、すかさず対抗心を燃やして腰にしがみついてくるのは可愛くていいんだけど、もうちよつと力を弱く。弱くして！ 結構腕力強いんだから！

「もう仕方ないから飽きるまでこのままにすることにした……」

「ミサオ、お疲れ様。頑張ったね」

ルリルに関してはまだもう面倒くさいので事情説明を省いて自分の心情だけを吐露する。

げんなりとする俺に、アシュレが苦笑しながら労ってくれた。ああ、お姉さまスパダリ冒険者先輩……癒し……。

あ、そうそう。ルリルやら魔族の襲撃の前に言う事があった。

「そーいやあ、用事は二つ済ませてきたぜ。実はさっき街中でたまたま目当てだった魔術工芸核技師アーティファクトに会ってさ。空調に関してはシャティ達が居た方が説明しやすいと思って、とりあえず壊れた魔術工芸核だけ修理に預けて来た」

「まあ！ そんな偶然があるのですね。ふふっ、では宿と温泉で疲れをとったら、明日くらいに伺ってみましょうか。ご一緒いたします

わ

「ミサオは運がいいね。……ところで、何か変な事でもあったかい？  
覚えのある魔力の残滓を感じるが」

流石同族である。騒ぎ自体はここから結構離れていたし、俺が秒で片付けたから襲撃には気づいていないと思いきや……ガーネットに言い当てられてしまった。

「実はさあ……」

「いらしやいませ、アシユレ様」

「やあ。世話になるよ。すまないね、急で」

「とんでもない。皆様方ならいつでも歓迎いたします」

さつきまでの事情を話し終え、ようやく宿に到着した俺達。エントランスで恭しく宿の主人に迎えられ、無事に部屋も用意してもらえた。

ちなみに凶々しくくつついてきたルリルだが、モモがめちやくちや不満そうだったけど俺と同じ部屋に泊まることになった。だつて面倒くさいし、こいつ見た目美少女だけど中身おっさんだからモモたちの部屋に押し付けるわけにはいかないし……。

自分で普通に部屋取ってくれたらよかつたんだけどな!!

「料金は払えよ」

「もちろんだわ！ なんならミサオ達の方も払ってあげてよくつてよ？」

「いらんいらん。お前に借り作つても怖いだけだ。つーかそんな懐の温かさがあるなら俺にケーキをたかろうとするなよな」

「いいですか、ルキくん。あの小娘オヤジがミサオ様に変なことをしないよう、ちゃんと見張るんですよ」

「ルキ、託した。ミサオママを守つて」

「僕、さつきの今でこの状況をどう受け止めればいいんですか？」

ルキがシャティとモモに肩を掴まれてなにやら言い含められている。多分ルリルに気をつけろって心配でもされてんのかな……。前に構われた時、うっかり頭をつぶされそうになってたし。

そしてルリルの付き人のマイヨールだが、ちゃっかり自分は自分で最上級の部屋（高すぎて滅多に人が入らない）を確保していた。やっぱりこいついい性格してるよ。

そんなこんなで、本当によろやく……。第二の目的である温泉に入る段階になったのだが。

温泉。

温泉だ。

温泉である。

温泉……。なのである！

俺は仲間達にはれないよう表情筋を総動員すると、心の中で高らかに拳を天に突き上げた。

（メス堕ちの危機があろうとも!! 特別イベントとしての温泉だけは

!! 譲れねえ!!)

そしていつものごとく、俺の熱く滾る想いに水を差すのは魔王である。

『ドンッ！　みたいな擬音背負う勢いで言う事がそれ？　僕と魔王城で相対した時より真剣じゃないか』

(うるせえよ！　女になっちまったならせめてこれくらいのおま味はすすりてえだろうがよ!!　男のロマンだぞ!!　もう俺、疲れたの！

今日は今日で色々あつたし！　癒されたいの!!　たまにはいい思いしたっていいだろおツ!?)

『ふーん……』

(だからお前はその興味の薄さは何なんだよ！　同じ男じゃん！　温泉でのドキツとイベントに興味ないわけなくない!?)

『正直に言ってもいい？　どうでもいい』

(チンもタマもねえのかてめえには！)

『ははは。引く』

(あ、ガチトーンのドン引きやめて。冷静になっちゃうから。お前が相手でも自分が恥ずかしくなるから)

……気を取り直そう。

俺は普段、シャティの妖艶な攻めにも屈せず宿の部屋も女性陣と別室、着替えだつて別室を貫いている。紳士だからな！

けして判定ガバガバのメス落ちポイントが溜まることを恐れてだけじゃないんだぞ。紳士だからだ!!

けど温泉だぞ？　……温泉、なんだぞ!?

今の俺は合法的に!!　女湯へ!!　入れるんだぞ!!

『思考がうるさいよ。そのいちいちクラメーションマークで区切る暑苦しさやめてくれない?』

(おめえが勝手に人の思考を読んでるからだろうが！　つーかクラメーションマークとか久しぶりに聞いたわ!!)

『感嘆符って言った方が良かった?』

(いや別にそこでこだわりはねえよ。ああもう、この同郷!!)

『罵倒みたいにただの事実言うの阿保っぽくておもしろ』

(ぎいいいいっ!!)

ともかく、ともかくだ。

多分だが女になってから初めての温泉だしシャティあたりが「一緒に入りましょうよミサオ様!」とか言ってきてくれるはずだ。

俺はそれにちよつと嫌がるふりをしつつ、なし崩しかつ流されるよう形で……。

『欲望の塊の癖に実行手段は他力本願なの、ほんとヘタレって君のたぬにあつらえたような言葉だよね』

(う、うううううううるっせえやい!)

こつちだと同性とはいえ裸体を人前で晒すのに抵抗ある奴が多いから、公衆浴場や温泉施設では温泉着的な物を着て入ることが許されている。だからまるつきり人の裸を見るわけでも自分のを見られるわけでもない。

しかし……しかしだ! 俺は”着エロ”文化を推奨している人間でもある!! 時として布地は人体を更にエロい領域へ押し上げる神器と化す!!

温まり紅潮する頬。汗ばむ体。

そしてお湯に濡れて体のラインにぴったり張り付き、うっすら肌色を透けさせる……布地!

俺はそれだけ見られたら満足だ……!

『性的犯罪者の思考ってこんな感じなのかな』

(全人類の宿敵だった大犯罪者に英雄が性的犯罪者扱いされるのおかしくない???)

『君の思考が気持ち悪いのがいけないんじゃない? ああでも、なんかミサオって精神年齢が高校生くらいで止まってるみたいだし、ちよつとかわいそうだったかな。童貞の男子高校生。いや、中学生? 小学生?』

(どんだん年齢を下げるな下げるな! あと童貞ってわざわざ付け足

すなよ腹立つな本当に!!)

魔王の憐みを含んだ視線が気に食わないが、それでも密かに高まる期待で胸が躍る。

しかし俺はこの時すでに発生済みのイレギュラーを忘れていた。

「ミサオは男の子なんでしょう？　だあつたら、ルリルちゃん様とお風呂に入っても、なくんにもおかしくないわよね？」

「……………」

「……………」

温泉宿に到着してから、少しあと。

ぐうの音も出ない事実を述べるルリルに連行される俺とルキの姿があつたりした。



71話 ▶ なすがままに洗われてくなんか思ってたのと違う

「ミサオ様はわたくし達とお風呂に入るんですー!」

「ダーメー! ミサオは男の子だつて自分で言つてたじゃない! なら当然、男湯だわ!」

「だ・め・で・す! ミサオ様、髪が長くなってからうまく洗つたり乾かしたり出来ないんですよ!? このシャティがミサオ様の御髪にどれだけこだわっているとお思いですか! 他の人になんて任せられませんわ!」

「あ、こだわるのまさかのそこ!? いつもお世話になってます!」

少し前、俺の予想通り俺を女湯へ連れ込もうとしていたシャティと、ド正論で武装して俺を男湯へ連れて行こうとするルリルの間でこんな攻防が行われていた。

ちなみに髪の毛についてなのだが、本当に何から何まで……洗うのも結んでもらうのもみんなにお任せしっぱなしである。

一度自分で出来るから! と洗って乾かし(たつもりで)寝たら次の日えらいことになった。大爆発の絡まりまくりもいろいろあったぜ。

女になってから何故か長く伸びた髪の毛。本当なら切っちゃえれば一番楽なんだけど……。

『うくん。もしかするとですが、髪の毛の長さは女性になることによって男性時に所持していた何か別の形で反映された結果なのかもしれませんね。女性の髪には魔力が宿ると言われているので、ある意味特別な部位なのです。実際直接魔力の質にも影響が出ているのはカリユキオス様の研究結果などでも出ておりますしね。……ですから、先に述べたような変化が起きてもおかしくありませんわ』

……というのが、以前聞いたシャティの仮説である。つーか賢者、髪分野でも研究結果出してんのか。本当に色々やってんなあの人。

髪の話聞いた時は「あ、だから髪の短い女の人って少ないんだ」と妙に納得したもんだ。冒険者みたいに旅したり、戦士みたいに荒事をこなしたりする女性なら短い髪の人もそこそこ居そうなのに、そういうえぼぼ見たことが無い。

シャティもアシユレもガーネツタも、結構手入れが大変そうな長さをしてるからな。一番短いモモでも二つ結びをとけば肩甲骨くらいまで長さがある。

しかし納得したと同時に、シャティの言葉に隠された意味にぶるりと震えが走った。

だつてよ……。男の時にあつて今は無いものつて、それつてちん……。……。

つまりそういうわけで、無暗に髪の毛を切るわけにいかなくなつてしまつて居るのだ。

もし切つて、男に戻つた時にアレがアレして短くなつたら最悪だろ!?

でも髪の手入れは本当に大変なので、こればかりは一から十までシャティをはじめみんなのお世話になつて居る。

ともあれそんな風に俺を女湯へ連れて行きたいシャティと、男湯へ連れて行きたいルリルの攻防が続いていたのだが……。

「ルリルちゃん様、一般の入浴施設では他の方にもミサオ様の肢体を見られてしまうかと。プライベートな浴場をおさえましたので、こちらに転移させますね」

させますね。主人に伺いを立ててる途中みたいな台詞が、発言主の決定事項で締められる事ある？

そう感想を抱いた時にはすでに遅く、気づけば転移魔術の範囲内。一瞬の転移魔法の揺らぎの後、おそらくルナリアスのどこかにあるであろう高級そうな浴場施設に放り出されていたのである。

ちなみにルキをルリルに対する盾代わりに肩を掴んで前へ押し出していたので一緒に転移してきていた。

一人よりマシだが……男である。

男である。

俺、ルキ、ルリル、マイヨール。

野郎しかいねえツ!!!!

うっそだろ！俺、あとちよつとで桃源郷へ行けたはずなのになんでこんな男ばかりの温泉大会会場に居るんだよ!? ドキツともしねえわ！判定ガバガバのメス堕ちポイントもピクリとも鳴らねえわ！万が一鳴られたら絶望するから鳴らなくていいんだけども!!しかし。

「ミサオは男の子なんでしょう？ だあつたら、ルリルちゃん様とお風呂に入っても、なくんにもおかしくないわよね？」

「……………」

「……………」

ど正論をかまされてしまった上で俺が文句を言えば「女湯に入れたかった」俺がバレてしまうわけで……。弟子の前でそんな醜態見せられないわけで……。

口を開く前に封殺された俺は、ルキと共に湯気の沸き立つ浴場へ連行されるのだった。

「っーかよお。わざわざ転移まで使いやがって、置いていかれたシヤ

テイ達が心配して風呂に入れないだろ。風呂には一緒に入つてやるから一度返せよ」

「ししょっ!! 一緒にお風呂はいいんですか!？」

「あ? んなもん、別に温泉着を着れば素っ裸見られるわけでもねえし……はあ……」

ルキに答えつつ、俺はあとちよつとでたどり着けた夢の光景を想像してため息をついた。

「いやよう。そしたらせつかく移動した意味がないじゃない。あ、でも君は帰つていいわよ? ほら、さつさとお行きなさい。しっしっ」  
「犬でも追い払うみたいに言わないでくださいよ! ……分かりました。僕も腹をくくりませす。シャテイさんたちが変わつて、師匠の貞操は僕が守つてみせますとも……!」

「貞操とか生々しい言葉使うなよ!?! つーかそんな間違いは万が一にも起きねえよ!」

「どうでしょうね? ……どうもさつきから、ルリルさんはともかくマイヨールさんから不穏な気配を感じるんですよ」

耳をぴくぴくさせながらジト目でマイヨールを見るルキ。

え、そっち? でもエルフって勘がいいんだよな……。

「なにをおっしゃいます。私は純粹に皆様に温泉を楽しんでいただきたく、こちらへご案内した次第でございますー」

そしてマイヨールの奴が一気に怪しくなったんだが!

お前真顔の癖に嘘が下手つてどういうこと? そのポーカーフェイスは張りぼてか?? 言葉がめちやくちや白々しいんだけど!?

色々と不穏な気配を感じつつ、あれよあれよと引つ張られて気づけば湯気が立ち上る浴場だ。

プライベートな場所に、と言っていただけあつて他に人の気配はない。

マジでこれが出来たら人にケーキをたかろうとするなよ、こいつら。

「……この姿にも慣れつつある自分にマジで危機感覚えるな……」

浴々着替えた温泉着に包まれた二つの山を見下ろして、すでに自分  
のものでは動揺しなくなった事に哀愁を感じる。

まあ流石に毎日見てるし……。

「……………」

そして顔を赤くさせてうつむき、もじもじしている弟子に憐れみの  
視線を向けた。

俺みたいな女もどきが初混浴とか可哀そうに……。どうせなら男  
の姿で喜び勇んで二人で堂々と混浴へ行きかけたよな……。

「み・さ・お・お！ 温泉よ〜！」

「おぎゃー!?!」

そしてこいつはよおっ!!

登場するなり人の頭にお湯ぶっかけてるんじゃねえよ！ 苦労し  
て暴れる髪の毛を頭の上にまとめ上げたのに何してくれてんだ!?!

「あら、なによその不満そうな顔。せえっかくルリルちゃん様がミサ  
オの髪の毛を洗ってあげようと思ったのにい」

「それにしたって声もかけずぶっかけるやつがあるかよ！」

頭からぼたぼたお湯を滴らせながら文句を言うが、ルリルときたら  
どこ吹く風だ。

こいつ俺を好きとか言っておきながらマジで自分のしたい事が一  
番だよな！ 嫌われないようにとか好かれるようになって気持ちで相  
手を慮るとかしねえの!?!

「……………」

そしてルキはルキで顔に両手を当てて蹲ちまうし！ 乙女か!!

なんだ!?! お湯に濡れて服が張り付いた俺はそんなにセクシーか  
!?! やめろやめろ！ 空しくなるだけだぞ！

「……………というか」

水を吸ってずっしり重くなった無駄に長い髪の毛をかきあげなが  
ら、無礼千万を働いてくれたルリルをまじまじと見る。

「本当に男……」

「やだ、ミサオったらスケベねえ。そんなにまじまじと見られたら恥

ずかしいわ」

とか言ってる割には腰と頭に手を当ててウインクまでしてくるサービス精神は何なんだよ。恥じらいの意味って知ってる？

浴場に居るため当然ルリルもあのふりふり〜でふわふわ〜なドレスを脱いでいるわけだが、大胆にはだけている温泉着の間から覗く胸は少年のもの。いや、おっさんなんだけどな？

これはこれである意味センチティブ判定入りそうなのだが、俺にそっちの趣味はないのでただの事実確認である。

……でもその顔で下までしつかり確認したら自分の中で何か大事な一線が壊れてしまいそうな気がしないでもないので、顔の良さは罪である。

いやだ、俺は同性にドキドキする体になんてなりたくねえツ!! 顔がいいなら男もありかもしれないって考えるようにはなりたくねえツ!!

とか考えてたら。

【メスどきりんっ♪】

(なんで!?)

『まっとうな「メス堕ちなんかしたくないっ!」ムーブしたからじゃなくっ♪』

(まっとうって何が!? 正しい事なんか一つもないが!?)

最初から比べれば、ここ最近是比较的鳴らなくなったと思っていたメス堕ちポイントの音。一瞬絶望しかけるが、自称呪いナビゲーター(最近忘れてた)魔王の言葉に「セーフ」判定を出す。

そうだ。これはルリルにドキドキしたことから来るメス堕ちポイントではない。メス堕ちなんかしないんだからっ! というドキドキから来るポイント追加だ。メス堕ちしないという意志を強く持つことはそれもまたメス堕ちポイントなのだということだろう。自分

で言つてて訳わからんがそういうことなのだ。だから絶対ルリルにドキドキしてしまったからではない。断じてない!!

「さっ、ミサオ。座りなさい? ルリルちゃん様が洗つてあげる」  
「……………」

開幕に嫌なドキドキを味わつた疲労で逆らうのも馬鹿らしく、大人しく言われるがままにしゃがみこんで頭を前に差し出す。ここ風呂の椅子とかないの?

「ふふっ、いい子ね。……つてミサオ! あなたちやんと髪の手入れはしてる!? 普段結ばれてるから気づかなかつたわ!!」

「いたいたいいたい!! やくめくろっ! 引つ張るなよ!

髪は! シャティ達にも言われたけど! 手入れしてもらつて最初よりはましになつてんだよこれでも!!」

「ホントにいく? しまつたわね。濡らす前に櫛で解きほぐすべきだつたわ」

思いのほか俺の髪の毛を真剣にいじくりだすルリル。

様子を見るにそのうるつやブロンドヘアは本人の努力あつてのものである。こだわりが強い。

……そう。女になつて髪が伸び分かつた事の一つ。それは長い髪の手入れの大変さだ。

特に俺は癖毛らしく、三つ編みにしないでいたらめちやくちや広がるわ絡まるわで酷い有様になる。

長さが短い……男の時はそれでもがーつと洗つてがーつと乾かして、あとは整髪料代わりの適当なオイルで整えればなんとかなつてたんだけど、女の体になつて髪が伸びてからはそうもいかない。

まず手櫛でざっくりほぐしてもらつて、その後は櫛で整えつつ丁寧に埃を除かれて、お湯で頭皮から順に入念な下洗いがされて絡まりがほぐされ、泡立てられた洗髪剤でこれまた丁寧に洗ってもらつて、乾いた布で軽く水分をとつたあとにコンディショナー的な物が塗り込まれて、それを毛先まで浸透させたら洗い流される。その後はこれま

た乾いた布で水分が吸われ、シャティによる絶妙な調整が施された風魔術で温かい風と冷たい風を交互に吹きかけられ櫛で整えられつつ乾かされたら、いい香りのするオイルで保湿してもらおう。

……ここまでのクソ長い工程を日々お願いしているので、それを自分たちの分を含めて行ってくれている仲間には頭が下がる。

されるがままになっている最中は「洗われてる犬ってこんな気分なのかな」とか考えているんだけど。

シャティに説明してもらったように、この世界の女性か……まあもとの世界でもそうなんだけど、魔力の質に直結するという理由があるからかとても髪の毛を大事にしている。

その影響か、俺の世界でもいつごろから一般的に使われるようになったのか分からないシャンプーコンディショナーの類がすげえ発達してるんだよな。

でもって目の前の女の子じゃない見た目女の子中身おっさんにも相応のこだわりがあるのか、マイヨールに持ってこさせた多種多様な洗髪剤の類を真剣な目で吟味している。

俺？　しゃがみこんだ体勢のまま動けなくて膝抱えてるよ。そろそろお湯で濡らされた髪が冷えて寒いんだが。

「うゝん。これだけ癖が強くて傷みもあるなら保湿が優先かしら。ミルク系？　でも香りはこつちがおすすめなのよねゝ」

「……あ、あの。あまり長く悩んでいると、師匠が風邪を引いてしまうかと……」

「まあ！　ごめんなさいねミサオ。ちよつとお弟子くん、あなたそっち半分ほぐして洗いなさい。一人じゃ骨が折れるわ」

「ええええええええ!!」

「なによう。大事なお師匠様が風邪ひいていいのゝ?」

「う、うう。わかりました……」

そんなわけで。

『なに? ハの図』



(俺にもわかんねえ……)

俺が女(仮)になってしまってから初の温泉は、温泉に入る前に美少年と美少女に見えるロリおっさんに左右から囲まれて髪を洗われるところからスタートした。

なんか……色んな意味で思ってたのと違う。

72話 ▶ 温泉雑談タイムくスライム風呂って本当にあるんだ……

「うおおあ〜」

『唸り声はおっさんだよ、ミサオ』

（おっさんじゃねえし！ 俺まだ二十代だし！！ 温泉に入ったら誰しもこういう声が出るもんだろ!?!）

『僕はおっさんじゃなかったけど』

（けっ！ けっけっけー！ 気取りやがって。さぞ高貴な前世様だったんだろいな！）

『なにそれ鶏の真似？』

（こ、この……!）

ふんつと鼻息荒く俺にしか見えない美幼児を睨む。足を組んだ気取ったポーズでふよふよ浮きやがってからに。

けどそんなもの、温泉の前では秒で気にならなくなった。

湯船に肩まで浸かって、ぐぐつと組んだ腕を出して伸びをする。じんわりと体にしみこんでくる湯の温度に、自然と力が抜けた。

マンホール転移で飛ばされたのがこの世界でまだ良かった……と思えるのは、場所にもよるけど飯がガチ中世みたいな代物でなく普通に美味くて、こうしてお湯に体を沈めて身を清める文化も存在したからだろう。

ああ、温泉……ああ温泉。温泉いいよ温泉。気持ちいいよ温泉。語彙力なくなる。体全部ふにやふにやになっちゃう。やっぱ体を拭いたり魔術で清めたりするだけじゃ得られない満足感が温泉にはあるんだよなー。

あー、最高……。疲労と心労が溜まった体がほぐれていく。

……………。

でもなあ。

気になることが無いわけでもない。

だってこの温泉って……。

(マイヨールがなんか怪しかったの、これか……)

ルリルに頭をめちゃくちゃ丁寧に洗われ、お風呂に入っている間に集中補修よ！ と、何やらヘアパック？ みたいなもんが塗り込まれ頭にタオルがぐるぐるに巻かれた俺。

その後ようやく湯船につかることが叶ったわけだが。

温泉は気持ちいい。確かに気持ちいいんだけど……。

俺は無言でお湯を手にすくう。

すると片栗粉でも入れたのか？ ってくらいの餡かけ具合で一瞬お湯がまとわりついてから、ぷるんつと揺れてするんつと手から逃れて湯船に戻っていった。

驚きの粘度と弾力である。

「……………」

「わっ、お湯がトロトロですね!? ルナナリアスの温泉ってこんな水質なんですか……」

「んなわけねえだろ」

さっきまでドギマギしていたくせに、現在は見慣れないお湯に好奇心を刺激されていくらしいルキの頭をすばんつと軽く叩いて突っ込む。

あのなあ……………。

スライム風呂とかさあツ!! 女の子と入りたかったよなあ! 俺はさあ!! なあ!!

そう。現在俺達が入浴しているのは、トロットロでプルップルなス

ライム仕立ての特別製の風呂である。

あれだ。入った事は無いけど、ローション風呂って多分こんな感じだと思う。完全に色が濁ってて体を隠し隠されてくれるのだけがいだ。

それにしても噂には聞いていたが、実在したのか……！ なんとるファンタジーエアアイテム。

しかしながら、現在この場にいやんでうふんなピンクの雰囲気は微塵もない。あつてたまるかかって感じたが。

「おかしいですね。この湯に入れば男女の仲が深まると評判だったのですが……」

「そしてお前も普通に入るのな？」

ふーむと顎をさすりながら首をかしげている竜人マイヨール。腰にタオル一枚だけ巻いた上での堂々の入浴である。

もし俺とルリルの仲を深めたいのなら、そこは遠慮してしかるべきじゃねえか？ それでもルキが居るので二人きりにはならないし、おっさん幼女と仲を深める気も無いけどよ。

つーかお前の主人は俺そつちのけで普通に温泉楽しんでるよ。

「はあく。きーもちいいっ！ 温泉って、いいものだわ！ 治癒の湖は美しいんだけど、冷たいのが難点よね。こんなふうに温かければ満点なのに。今度湖の地下に火山から溶岩でも引っ張ってきて温めちゃおうかしら」

「ルリルベレスぼっちゃま、それは本当に竜王様に怒られるやつなのでやめてください」

「ルリルちゃん様よお呼び！ ええ？ お父様だって絶対喜ぶわよー」

なんか竜らしくスケールでかい話してんなこいつら……。溶岩ってそんな田んぼに水ひくみたいに関張ってこられるもんだっけ……。我田引水ならぬ我湖引溶岩?!

「そーいやお前、怪我してたんだな。大丈夫か？」

治癒の湖ってワードと、温泉着からちらりと見えたルリルの白い肌に目立つ怪我の跡っぽいを見つけたので問うてみればルリルが顔

をしかめた。

「しまったわね……隠すのを忘れていたわ。ほんつとにあの魔族、忌々しい……」

（あ、アルマデイオと戦った時に怪我してたのか）

ぶつぶつと呟かれた恨み言の内容なら察する。

以前俺を巡って（事実だけど自分で言いたくねえ……）アルマデイオとルリルが戦った事があったけど、そのあと普通にびんびんして俺達の進路妨害してきたから気づかなかったな。

しかし顔をしかめていたのはほんの一瞬で、すぐにぱつと表情を明るくしたルリルがすり寄ってきた。

「ミサオったら、心配してくれるの？ うふふつ、優しいのね！」

「うわお前いきなり寄って来るなよ！」

なんだかんだ距離をとって入っていたからこのローション風呂もといスライム風呂も平気だったわけで、流星に肌を触られたらその気が無くても変な気分になりそうだ。なつてたまるか。

「怖がっちゃって、かゝわいいっ」

「はあく？ 怖がってねえし！」

「虚勢も愛らしいわね！ ふふつ、でも安心なさい。こんなふうには準備されたいかがわしい手で体から落とそうだなんてしないわよ。今は単純にミサオと温泉を楽しみたいだけだわ」

からかい調子だったルリルは一転して、唇に人差し指をあててどこか大人びた……蠱惑的とでもいうのだろうか。幼い見た目にそぐわない、そんな顔で笑う。

不覚ながらそのギャップに少しドキツとしてしまったのだが、俺が何か言う前にルリルの矛先はくつろぎまくっている付き人に向かった。

「マイヨール。協力的なのは褒めてあげるけど、手段が直接的過ぎて下品だわ。もう少しロマンチックに出来ないの？」

「ルリルちゃん様に直接的という点で咎められるとは……。このマイヨール、不覚であります。少しでもお役に立てればと思っただけです」

「なにかひっつかかる言い方ね。まあいいわ。次から気を付けるようになさい」

「かしこまりましたございます」

付き合いがまだ浅いながら「本当に分かってんのかなあ」という視線をマイヨールに向ける俺とルキである。

つーかスライム風呂、普通に入る分には新感覚で気持ちいいんだけど、ルリル目線でも「いかがわしい」ジャンルにふりわけられるのな。というかこれ、どういう成分？ トロトロでプルプルなところ以外は完全に温泉なんだけど、スライム溶かして混ぜるところなる感じ？ だ、だとしたらちよつと気持ち悪いな……。成分の事はあんまり考えないようしておこう。

ともかくルリルとしては本当に俺と温泉を楽しみたいだけのような。本人的にはデートのつもりなんだろうな。

まあ変なことしないってんなら、これ以上なにかがあつてメス墮ちポイントが溜まるといった事もないだろうと危機感は薄れた。

シャティ達には心配かけて悪いけど、しょうがねえからこのままひとつ風呂だけつきあうか。

『君って変なところでおおらかというか、開き直り方が潔いよね』  
(うるせー)

魔王の感心したような、呆れたような声が屈辱である。

つーか俺がおおらかなんじゃないやなくて、周りの押しが強すぎて自己主張しても空回るんだよ！ ある程度こっちが折れるしかねえだろうがよ。

あゝあ。俺って謙虚。

『謙虚とは違うんじゃない？ 僕がもつと的確な表現を教えてあげようか』

(いらねえ)

『へタレ』っていうんだけど……』

(いらねえって言っただろうがよ!!)

つたく。こいつ本当に余計な事しか言わねえ……！

そして、しばらく。

「そういえばミサオって、あの子達の中なら誰が一番好みなのかしら？」

「は!?!」

つきあうと決めたからにはしつかり温まるぞと、顎まで湯船に沈めてくつろいでいたらルリルからまさかの雑談が飛んできた。

あの子達って、アシユレ達の事だよな？

「もちろんルリルちゃん様の美しさ可憐さ愛らしさにはこの世で誰もかなわないのだけど、好みの傾向として気になるわ」

「自分をセルフよいしよした遥か高みの超絶上から目線で質問出来るお前、すげえよ」

あんな美少女美女引き合いに出しておいて微塵も揺るがない自信、マジでそこだけは羨ましいな……。これだけ堂々と自分大好きで生きてたら人生楽しいだろうよ。

けどいざ聞かれても、それは答えの出ない質問だ。

「え、はっ、好みい〜？ あのかなあ。お前それ、花と空と宝石と蝶どれが一番綺麗？ って聞いてるようなもんだぞ」

「すごく自然に彼女達を最上級に持ち上げたわね。ちよつと、そのノリで何故この美の化身であるルリルちゃん様を褒められないわけ？ 不満だわ！」

「へーへー」

いちいちルリルの不満に付き合っていたらキリがないので適当に流す。

それにしても誰が一番って聞かれても……。

「アシユレは俺が冒険者初心者頃からずっと面倒見てくれてる頼れる先輩、相棒だし一番かつこよくて可愛い。シャティは色んな意味で積極的過ぎるけど、知識が豊富で聡明で一番愛嬌あつて可愛い。モモ

は俺みたいな頼りない奴の事を親みたいに慕ってくれてる最強に愛しい愛娘みたいな子で、一番純粋で可愛い。ガーネットはお色気ありつつ抜群の包容力でいつも安心感あるし、一番華があつて可愛い」

「ルリルちゃん様は？」

「見た目だけはいい」

「そこは内面を褒める流れじゃない!? もう! まあ真っ先に出てきてしまうほどルリルちゃん様の美貌は魅力的ということね」

「すげえ。何もフォローいれなくても全部自己解決して自分を上げていきやがる。強いて言うならその前向きさは美点だと思うぞ。長所と短所は紙一重って言葉もそえておくけど」

「あらー。ありがとう」

「絶対最後の所は聞き流したろお前」

きゆるんつとポーズをとるルリルを呆れながら眺めつつ、ふと言われたことで気付く。

……俺、みんなの内面に惹かれてるんだなあ。

我ながら出会った当初は見た目ばかりにふらついてたし(シャティがいい例だ。あの見た目でお願いされなかつたら絶対魔王退治とか引き受けなかつた)今でも彼女たちの事は綺麗で可愛いって思ってるけど、なんかこう……一緒に居て安心できるんだよな。

振り回されることも多いけど、根本に俺の事を大事に思ってくれている気持ちがあるから落ち着ける。頼もしい仲間達だ。

ずっと一緒に居られたらいいな……。

「……………」

そんなことを考えていると、隣で肩をすくめて俯いているルキに気付く。

あゝ……この感じは。

「礼儀正しくて真面目で、素直。それがお前のいいところな」  
「!!」

仲間達を褒めた流れでのけ者は寂しいんだろうなとルキにも言葉を投げかければ、ぱつと顔を上げてこちらを見てくる。

好みがどうたらって流れで出すのはちよつとなつて思ってたけど



……こんな嬉しがるなら、機会があるごとに褒めるのは大事かもな。  
俺も褒められて伸びるタイプだし、弟子はほとんど褒めていこう。  
師匠らしいことまだなんもできてねえから、それくらいはな。別にお  
世辞で言ってるわけでもないし。

「あ……！ その。あ、ありがとうございます」

「ところでルキの好みの女ってどんな感じ？」

「ぶ?!?!」

あ、お湯に沈んだ。

なんだよく。せっかく男同士しかいねえんだからお前のも聞かせ  
ろよ。そして適度にルリルの興味を俺から反らせよ。

「ルリルちゃん様は強くて可愛くて面白い子が好きよ！」

「いやお前には聞いてねえじゃん。っーかそれ、俺はあてはまんねえ  
だろ。この顔のどこが可愛いんだ」

「ええ〜？ ミサオは可愛いわよ」

「お世辞をどうも。綺麗で可愛いルリルちゃん様」

「まあ、やつと認めたわね？ いい心がけだわ」

「嫌味が通じね〜」

温泉の効果なのか、適度にほぐれてぐだぐだしてきた。こういう時  
はだらつと雑談したくなるよな。

「で？ 好みの女のタイプは？」

「あ、話題続くんですね!？」

「だっってお前答えてねえし」

「なんでシャティさんといい、こう……雑にそういうことを聞いて  
……ッ」

「え、なに。シャティとそんな話してたの!？」

なんだよそれ俺知らないぞ。めっちゃ気になるな。

急かすよう足先でルキのわき腹をつつけば面白いように飛び上  
がった。

「~~~~~！ 教えませんっ！」

「えー。なんだよ、教えろって。あ、でもモモはいくら仲良くなったか  
らって嫁にはやらねえからな？ まだ早い」

「なんでモモ先輩の話が出てくるんですか！ しかも嫁ってなんですか！」

「だってお前ら、俺の知らない所で仲良くなってたみたいだし……こう、モモの保護者としては気になるっーか」

「大丈夫、ミサオママ。ミサオママがモモのお嫁さんだからルキは娶らない。モモは、一途な女」

「また変な言い回しをどこで覚えて……って」

ん？

あれ、今ここに居るはずのない声が聞こえなかったか？ 幻聴？

それにしてもハッキリ聞こえた声にキョロキョロまわりを見渡していた俺だったのだが……一瞬後。目の前のお湯にどっぽんと何か落ちて来た。スライム質感のお湯のため水飛沫こそあがらなかったが、ずいぶんな勢いだったようで大きく水面が波打ちスライム波をかぶる羽目になった。

待て待て待て!! これ浸かる分にはいいけど口に入ると喉塞いでやばい!! 窒息する!!

「げぼっ、げぼっ」

なんとかスライムを吐き出してせき込んでいると、目の前にひよっこり桃色の髪と黒い毛並みの獣耳が現れる。

え……も、モモおツ!?

「ミサオママ、お迎えにきた」

「お、おう。よく見つけたな……」

「モモは、探すのが得意」

ふんすつと鼻息をはいた獣っ娘は、そう言っ得意げに胸を張るのだった。

### 73話 ▶ 取り合いっこ〜本体じゃなくて髪

頭上の黒い毛並みの狼耳と、人間と同じ位置に生えている髪の毛と同色の兎耳。

その両方がぴよこぴよこ動いており、無表情だというのに渾身のドヤ顔だということが伝わってくる。

どうやらモモは転移で連れ去られた俺を探してこの場所を突き止めたらしい。

温泉で臭いも落ちてるだろうに見つけるだなんてすごいな。まずは探索が得意になったってことか。うちのこすごい。

そんな風に俺が親ばか思考を展開していると、俺と同じく唐突に飛び込んできたモモによるスライムスプラッシュを喰らったルリルがむすつとしながらモモをたしなめる。

「ちよつとモモ。温泉に飛び込むのはよくないことよ。あと入るなら服を脱いで温泉着を借りてきなさい」

「ここにきてお前がまつとうな事を言うんだ……。ところでモモ、どこから落ちて来た？」

「あそこ。シャティに運んでもらった」  
「え」

上を指差すモモにつられて上を見れば、純白の翼を羽ばたかせてクルクル旋回している見慣れた姿。

ちなみにここ、屋内ではなく屋外……。露天風呂である。  
「ミサオ様〜！ お迎えに上がりましたわー！」

ブンブンとよく手を振るシャティにどうしたもんかと思いつつ、とりあえず手を振り返した。

降りてくる様子は無いな……。

「シャティは男湯に入るの気まずいって言うから、モモが来た」

「あ、そういう……」

普段の勢いで忘れがちだけど、シャティって一応清楚な一面もあるわけ。一応。

温泉着着用中とはいえ、ルリル、ルキ、マイヨール、俺の入ってい

る男湯へ入るには恥じらいが勝ったようである。

モモはその辺まったく気にしておらず、乙女のように体を抱いて隠しているルキなどを前にしても仁王立ちの堂々とした佇まいだ。いやルキ、お前はもうちよつとしっかりしろよ。裸じゃないんだからそんな恥ずかしがるなよ。

そんなことを考えていると、モモが俺の腕を掴んで引つ張った。

「ミサオママ、早く出よう。宿に帰るの」

「あ、こら。ミサオはまだルリルちゃん様と温泉デートするの！一緒に入るならいいけど、連れてつちやダメ！」

（一緒に入るのはいいんだ……!?!）

「む。勝手に連れてつたくせに、ルリルちゃん、わがまま」

「あら、言うじゃない。でも譲れないわ。だってまだミサオの髪の毛の手入れも途中なのよ?」

「ミサオ様の髪の毛の手入れですって!?!」

「おわ!?!」

ルリルが発現した途端、恥じらいを秒で投げ捨てたシャティが上から直角に降りて来た。驚きの素早さである。

男湯に入ることを躊躇していた清楚さは何処へ!?!

「ミサオ様の髪のお世話するのは、このシャティの役目ですよ！

勝手にとらないでくださいまし!」

ぷんぷんっ! といった擬音がぴったりな様子のシャティに、ルリルは竜人らしいギザ歯を口からのぞかせながらクスクスと笑う。

なんとというか、こう。こいつマジでメスガキ感がすごい。雌ではないんだが。

「まあ、可愛らしい嫉妬なこと。でもおろ。もう丁寧に梳いて流して洗って集中補修までしちゃってるのよね」

「な、なんですって……!」

いや、シャティさん? なんでそんな「寝取られた……!」みたいな顔するんだ? 髪の毛だよ?

「ミサオの暴れん坊な髪の毛は、このルリルちゃん様が蝶や花のように丁寧に扱ってあげたわ! ほーっほほほ!」

「~~~~~！ でも、まだ補修剤は流してないですよね！！ でしたらここからはわたくしが引き継ぎますわ！ どうもご苦労様っ！」  
「はあく？ 横からかつさう気というわけ？ ふざけないでもらいたいわ。手順や使う洗髪料によって手入れの方法も違ってくるのは、あなたもご存知じゃない？ ルリルちゃん様が何を使ったかも知らない相手に途中で委ねるなんて、とても出来たものではないわね！ ミサオの髪の毛はルリルちゃん様が乾かすところまでやるんだからっ！」

「ミサオ様の頑固な髪の毛の事はわたくしが一番知ってますもんっ！ それこそ他の人になんて任せられませんっ！」

「……………」

『……………』

なんか…………うん。

シャティとルリル、俺っていうより俺の髪の毛の手入れについて激しい取り合いをしているな…………。自分の一部の事なのに、なんだろうなこの蚊帳の外感。

ルリルVSアルマデイオの時はネタでも言わんからなって思ってた、人生で一度は言ってみたい「俺のために争わないで！」を今こそ言うタイミングなのでは？ と一瞬思ったけど、取り合いされてるのは俺の髪の毛なんだよな…………。

『君の髪の毛、本当に癖が強いからね。髪にこだわりがある人から見たら放っておけなくて、変なスウィッチ入るんじゃない？』

(そ、そういうもん？)

『多分？ 僕は手入れするまでもなく一度も絡まったことも傷んだことも無いからよくわからないけど』

(めっちゃくちゃ天然美髪マウントとってくるじゃんお前…………)

ふふんつとばかりに短いながらサラサラの黒髪をかきあげる魔王に「お前はお前で髪にこだわりあるじゃん。めっちゃ誇ってるじゃん今」って感想を抱きつつ…………。

俺は白髪的美少女有翼人と、金髪おっさん幼女竜人の争いが収まるのをルキ、モモと共に待つのだった。

ちなみにマイヨールは一人で勝手にアイス食ってた。おい風呂の中で食うなよ自由か。

そして、しばらく。

「まあ、この花の蜜を使用しているのですか？ 希少種ですね。すごくいい香り」

「でしょく？ 竜の国近くでしか採取できない特別なもののな。よかったですし抽出液を分けてあげるわ。洗髪料や保湿の油にちよびり混ぜるだけですごくいいんだから！ 香りがいいのはもちろんだけど、美髪効果抜群よ」

「いいのですか？ ありがとうございます！ では私からはこれを……」

「櫛？ ……！ もしかしてこれ、材質は月華樹かしら？」

「ふっふっふ。さすがお目が高いですね。その通りです！ 地上では育ちが遅い月華樹ですが、天空では採取が可能なほどよく育つのですよ！ 故郷の特産品のひとつですわ」

「そうなの！ 素晴らしいわね。いいわねえ、天空都市。行ってみたいわ。……くれるの？」

「ええ。希少な蜜をくださったのですもの。そのお礼です。あ、未使用品なのでご安心くださいね？」

「ありがとう！ 嬉しいわ。細工もきれいなえ」

「ふっふっ。でしょく？」

「……………」

『……………』

浴場での争いから、数十分後。

何故か俺は意気投合しながら俺の髪をいじりつつキヤイキヤイはしやぐシヤテイとルリルに挟まれていた。

ガールズ（半分ガールではない）トークに入れな俺は大人しくお人形さんになる他ない。

（さっきまで言い合ってたのに、なんでこんな仲良くなってるの……）『ごだわりがあるって事は共通のものに深く興味をもっているってことだからね。ちよつと歯車が噛み合えば、仲良くもなるというものなのだろうさ』

（知ったかぶった物言いしてるけどお前も困惑してんじゃねーか）

さっきまでさんざん俺の髪を巡って争っていた二人が、今では仲良く共同作業である。

鏡が目の前にあるが、俺の癖毛が驚きの艶を見せ始めてるんだが。女になった時に何故かオレンジなんていう派手な髪色になったので、艶が増すともとからのポリウムもあって我ながら華やかだ。その分髪に囲われた地味顔の地味さが際立つわけだけど……。

「ミサオママ、牛の乳飲む？」

「おー。ありがとな、モモ」

にゅつと目の前に差し出されたのは陶器の瓶に入った牛乳。そしてそれを差し出しているモモはすっかりホカホカな湯上りだ。衣服も宿が貸してくれたゆつたりした貫頭衣に着替えており、腰のあたりを鮮やかな桃色の帯でとめている。

布面積が少ない服とはいえ、モモには毛皮がある。流石にそれが温泉（しかもスライム仕立て）で濡れたままというのはいただけないので、普通の温泉に入っって着替えることを勧めたのだ。

「やあ、私達もすっかり温まらせてもらったよ。同じルナナリアスでも、場所が違えば温泉の質も変わるものだね。気持ち良かった」

「ああ。スライム温泉でないほうも肌をしっとりさせてくれるいいお湯だ。スライムの方も気にならないわけじゃないけどね。残念なが

ら、もう次の客が入っているそうだよ」

そう言つてモモと同じくホカホカ仕立てで、しっとり浮かんだ汗をぬぐいながらやってきたのはアシュレとガーネツタ。色つぼいぜ……！ 入浴中の温泉着姿は拝めなかったが、これを見られただけでもルナナリアスに来た甲斐はある。

温泉に強行突破で侵入してきたモモやシャティと違い、この二人はちゃんと入浴施設の正面から入ってきたからさつき合流した。めちゃくちゃ当たり前の事なんだけど、大人である。

現在俺達が居るのは、ルナナリアスの中でもかなりプライベートな高級宿。一般の観光客はあることすら知らないようで、実際に俺どころかアシュレさえ知らなかったとのこと。

温泉内で騒がしくしてしまいあとから追加人数が入ってきたにも関わらず、宿の対応は丁寧だった。料金はまあとられたけど、お願いしたところモモたちを普通の温泉に入らせてくれたし。そんなところにも高級宿らしいサービス精神を感じる。いや本当、騒がしくしてすみません。

にしても、マイヨールのやつどんだけ大枚はたいだんだよ。宿の人に聞いたらスライム風呂、一定時間貸切るだけでかなりの金額のようで、そもそも一年以上先まで予約でいっぱいらしいのに。知る人ぞ知るポジションの宿で一年先まで予約でいっぱいとか、具体的な金額を想像するのが恐ろしい。

ルリル達と知り合ったのはつい最近だから、そんな前から予約していたわけもないだろうし。想像するに宿自体だか先の予約客かは知らんが、金の暴力に物を言わせたと思えないんだよな……。怖……。

まあルリルは一応竜王族とかいうやつらしいし。そりや俺達なんかとは比べ物にならないブルジョアなのかもしれないけど。

でもそれならますますもって、人にケーキやらをたからないでほしい。



ともかく色々疲れたけど、しばらく寛いたら自分たちの宿に戻る予定だ。

「え、こちらに部屋はとってありますけど？ ルリルちゃん様とミサオ様用に」

「お前はさらっと恐ろしい事言うんじゃないよ」

この後の予定を話していたら付き竜人が何か言ってきた。色んな意味でお断りだわ。

いや、それでもルリルが俺の部屋に泊まることは決定事項だったな……。

「でしたらこちらのお部屋はもつたないので私が泊まりますね」

「お前も人生楽しそうだよな」

断つたら秒で自分が泊まることを決定しやがった……。恐るべき人生エンジヨイ勢である。

主人が主人なら付き人も付き人ってか。いやそこは似るのおかしくねえか？

『僕からしたら君も人生楽しんでるように思えるけどね』

（あん？ ……まあ、そりゃあな。なんだかんだで俺も楽しんでるのは否定しねえけど）

髪の毛を手入れをされながら、賑やかな空気に顔が緩む。

理由も分からず放り出された異世界だけど、こうして人に囲まれてるってのは幸せなことなんだろう。

最近は悲鳴しか上げてない気もするが、まあそれはそれとして。顔の良い美少女と美少女もどきにいたれりつくせりで世話を焼いてもらってる現状、呪われた自分の状態やらを顧みなければかなり恵まれてるし……。

ふふふ。これが極楽ってやつか……。多少の事に目を瞑れば……。瞑れば……。

そんなことを考えていると、いつもならもつとつこんでくる魔王がどうも静かだ。奴は後ろにいるのか、髪をいじられている今は首を動かせず顔は見えない。

まっ、静かなのはいいことだよな！ 内心で会話しながら表面上の

リアクションおさえたりするの大変なんだぞ。

『本当に、いい人生を送っているよ』

だから俺は、それをつぶやいた魔王がどんな顔をしていたのか見ることは無かった。

74話 ▶それはとある”誰か”の過去語り（魔王視点）

ねっとりとしたコールドタールがへばりつくような、そんな夢だった。

登場人物の顔はみんな黒い。表情すらも読み取れない。

そして夢だと認識しているはずなのに、”俺”の思考は”誰か”の主観へと沈んでいく。切り替わっていく。

やがてその夢は、完全にその”誰か”の視点で進み始めた。



そこかしこからカビの匂いがするような家だった。

古い因習にとらわれた名家。今思えば推理ものの殺人現場にはおあつらえ向きの場所だったように思う。

先祖からの血脈を代々繋ぎ、世継ぎは男児しか認めない。そんな家。

その家で僕は女兒として生まれた。……双子の兄と共に。

しかし兄は生まれつき体が弱く、長くても十とおまで生きられるかどうかと言われたらしい。

生まれたその日に言われたのなら、当時のかかりつけ医は相当に盛って話していたのではないだろうか。

本当は数か月生きられるかどうか、怪しかったのではないだろうか。

あの家が男児の世継ぎに対して狂った執着を持っていたことを当然知っていた医者には、余命あと幾ばくか、なんてとても言えなかっただろうしね。

いい人だったから、自分の保身よりもきつと母の事を憂いてくれたのだと思う。兄を弱く生んでしまった母を。

そのいい人も、いつの間にか見なくなっていたけれど。

しかし本当に伝手と権力と金のある奴というものは厄介で。

保育器の中で亡くなってもおかしくなかった僕の兄上は、その後あらゆる手を尽くされて生き延びることとなる。

本来なら喜ぶべきことだ。血を分けた最も近しい存在を失わずにすんだのだから。

ただあの家のせいで僕は生まれた時から、自分の人生を生きられないことが決定づけられていた。

『男児として生きよ』

それが物心ついてから、初めて父にかけられた言葉だった。

兄は生き延びたがとても表舞台に出て行けるような状態ではなく、いつも青い顔と浅い呼吸で寝台に横たわっていた。その薄い体に繋がるおびただしい数の管や計器が、本来彼岸の住民であったはずの彼を現世うつしよにつなぎとめている楔なのである。

その隣には一切の欠陥なく、顔がそっくりな双子の僕。

男女の双子でこれほど似てしまう所に、狭い血族の中で血を重ねて来たおぞましが煮詰められているようだった。

兄の体が弱いのだって、きつとそれが一因である。

男として生きる。

それは僕に兄の影武者をやれということ。何時代の人間だよ。

僕に拒否権は無く、その日のうちに僕と兄の立場は入れ替わった。重病を克服した世継ぎの男児として僕が。兄と入れ替わるように体調を崩した妹として兄が。

全てはいずれ兄が健全な状態になった時のため。そこに僕の人生は無く、僕は幼い頃の長い長い時間を「僕」として過ごすことになったのだ。

うっかり「私」とこぼした日には折檻されるのがあたりまえで、僕は少年としての顔を張り付けて生きていくしかなかった。

それでも一度割り切ってしまうえば、「僕」として過ごしていれば家族は優しくかった。けして「私」に向けられた好意ではなかったけれど。だけど「馬鹿な奴らだ」と見下すことで、適応していった。慣れていった。滾る様な憎しみと悪意に”諦念”のラベルをつけて整理して、己の心を保ったのだ。

こんな話の通じない奴らと同じ目線にいることこそが屈辱だと、幼子の中にわずかに残った矜持でもって。

寢床から恨めし気に向けられる兄の視線だけが、唯一心に重くのしかかるものだった。

しかし奇跡というものはあるらしい。僕にとっては奇跡的な不幸でしかなかったのだが。

奇跡というのはなにも、希望に満ちたものだけを指す言葉ではないのだ。

第二次性徴を迎え、だんだんと兄のふりが難しくなってきた頃。兄は本当に重病を克服してみせた。

まず患者自身の生きようという精神力がなければ、どんなに手を尽くされても回復は難しかったとは当時のかかりつけ医の言だ。

奇跡と称しはしたが、げに恐ろしきは執着と怨みの力である。妄執に憑りつかれた親の力に加えて、兄は健康体で自分の代わりとして生きる妹ほぐが相当憎らしかったらしい。居場所をとられたとも思ったのかな？ それは僕の方なのね。

『ご苦労だった。今後は本来の役目を生きよ』

兄が寝台から自分の力で立てるようになった日、父から投げかけられた言葉である。

安い労いの言葉一つで、僕がこれまで積み上げてきたものは全て兄のものとなった。

日頃僕から友好関係を聞き取り、病床でも執念で勉強に励んでいた兄が僕の作った居場所になじむのを見ているのは砂を噛むような思いで……。

今度は「私」と言わねば折檻される日々が始まった。

それまで知り合ってきた人間と他人のように接し、気づかれもしないままに僕は「私」として生き始める。浅く広く接しろと教え込まれたとはいえ、本当に誰にも気づかれないのは思いのほか心に鈍く響いた。

誰にも求められず。

誰にも気づいてもらえず。

ただただ「役目」などというものに縛られて消費されていくだけの人生に、意味を見出す方が難しかった。

しかしお利口に過ごしていた甲斐はあったらしい。

高校へあがると、僕には通信末端が与えられた。スマートフォンである。

お利口にしていたからというより、もう僕が何に影響を受けようとも問題ない。それくらい価値に落ちたからだろう。

小さな板からつなげたインターネットの世界は、思いのほか僕の価値観を広げ娯楽となった。

それまで制限され監視された中で情報収集にのみ使用していた頃

には考えられないことである。

中でも僕の心を掴んだのは多種多様な創作。アニメに漫画、ゲーム……小説。

馬鹿みたいに自由にならない人生で、空想の世界を楽しむことを知った。

実際に手に取れるものは少なかったけど、可能な範囲で入手し、読み込んだりプレイしたり視聴した。

もともと凝り性のけはあったから、オタクとよばれる類のものになるのも早かった気がする。

僕は優秀だったからね。最速効率で自分が求める物を探して消費してのめり込んでいった。

ついには商業に飽き足らず、ネット小説の類にも手を出した。

文字媒体というのは家の者にバレず創作物を謳歌するには適していたから、僕が最も慣れ親しんだ趣味といえる。

その中である時を境に急激に流行り始めたのが「転生」もの。それ以前は異世界転移が多かったように思えるが、現代での生を終えて異世界で生まれる「転生」が一気に増えた。

それまでも転生を扱う作品が無かったわけではないけれど、その比ではないほどに。

「みんな一から人生やり直したいつまんない人生送ってる奴らばかりってことかな？ あはっ。僕みたい」

ほどほどに楽しみつつどこか冷めた目で見ていた僕は、近い未来で実際に自分がそれを体験するだなんて思いもしない。

悪夢はいつだって現実にある。そして突然だ。

いつも僕の人生を容易く左右する父の一言。  
三回目のそれは、さすがに許容できないものだった。

『■■■■■■■■■■』

——  
見るな

■■■■

「おっも!!!」

ベッドから飛び起きたミサオだったが、その表情はすぐに寝ぼけたものへ変わった。

「重い……重い？　なにが重いんだっけ……いやこいつだよ……」

ぼうつとしながら疑問を口にするが、真横どころか自分の腹の真上に乗っかってすやすや寝息を立てている見た目だけ美少女を見る。これは夜這いとかではなく普通に寝相だろう。

外を見れば山の稜線の向こうがほんのり曙あけぼのに染まっていた。まだ起きるには早い時間だろう。

「寝直すか……なんか変な夢見た気がするし、寝た気がしねえ……」

よく覚えていないながら意味深な夢を見た気がするなあと考えつつ、ミサオは美少女おっさんを横に落とすと目を瞑る。

曖昧な記憶は次に起きた時、さらにおぼろげなものへと変わってい



るだろう。夢とはそういうものだ。

『……………』

そして呑気に寝息を立て始めたミサオを見下ろす、能面のように表情が抜け落ちた顔。

濁った赤い瞳が射干玉ぬぼたまのごとき髪からのぞく。

『……………。都合よく僕側からだけミサオの心を読めるわけじゃない……………。僕の世界に入ってくるくらいだから、当然これくらいは予想してしかるべきだった』

自分を納得させるように一人ごちる魔王だったが、その後ぎりっと食いしばられた口元は激情を隠しきれていない。もし”彼女”が実体であったなら、唇を歯で割いて血を流していただろう。

『ミサオのメス堕ちポイントが溜まってきたから？ それとも……………僕側の影響もあるか』

そう言つて、二枚だけ黒く染まった自らの爪を眺める。

普段ならば「メス堕ちポイント」という単語だけで笑えてくるのだが、あいにく今はそんな余裕はない。ひどくシリアスにその単語を口にかけている自分が滑稽である。

ともあれ「現代の陰キヤ高校生を五年で魔王を倒せる英雄に仕立て上げた」レベルアップのチートスキルは伊達ではなく、ミサオのメス堕ちポイントは着実に溜まり、それに伴い魔王との魂の結びつきが強くなっていた。

加えて力を取り戻したことによつて、無力な魂としてミサオに間借りしていた部分に変化が生じているのだろう。

その結果が夢の中でのリンクとして現れたと魔王は推測する。

『ああ……………でも、よりにもよつてなんであんな古臭い記憶を……………ほんつとにム力つくなあ。僕、悪役にかわいそうな過去とか語られると

イライラしちゃうんだよね。不可抗力とはいえこの僕がそれをしたのと近い状態だなんて、不愉快だ。最悪。僕がしてきたことは全部僕のもの。かわいそうだから仕方ないね、なんて一ミリも思われたくない。吐き気がする。僕が起こした行動の結果はどんなものでも全部全部全部僕のものだ。過去がなんであろうと関係ない。同情の余地を挟むな。僕はそれ以上の悪徳を積み上げて来た。事實は事實でしか無いんだよ。……………まあ、ミサオは馬鹿だから忘れちゃうだろうけど』

しかしそれだけでは安心できない。

一番見られたくない所は障害できたが、またいつこうして己の記憶を見られるか分からないのだ。

『……………しかたない。やりたくないけど、念のため上書きするか。どうもミサオ、夢は自分に都合のいい所だけ覚える奴みたいだし』

以前多少の揺さぶりをかけようとミサオがお気に入りの姿で皮肉って見た所、その皮肉を全部忘れていい部分だけ切り取って覚えていたミサオ。人生楽しそうな男である。今は女だが。

今後の不安はぬぐえないが、ともかく今回見たものだけは確実に忘れさせる。そのためなら多少の屈辱は飲み込もう。

魔王はその後、ミサオの精神を自らの深層心理で構築された世界へ招き……………引きつった愛想笑いでもてなすのだった。

## 75話 ▶ 夢のあとく賑やかで、だけど静かな一日の始まり

おはよう世界。

温泉に癒されに来たはずがスリリングな朝を迎えた俺だよ。

起きたら一見美少女にしか見えないおっさんに頭を抱き込まれていたのだが、その見た目にドキツとするよりも「これ俺じゃなかったら頭潰れてるんじゃないか？」という方のドキドキで肝冷えたわ。

ルナナリアス到着早々、密度の濃い一日になってしまったが……それだけに夜はぐっすり寝られると思っていた時期が俺にもありました。

なのに妙な夢を見て疲弊して目覚めたと思っただらこれだよ。

いや、まあ……その後にもうひとつ夢を見て、例の夢の美少女に会えてだな……ぬふふ、しかもこれまでにないくらい親し気に接して笑顔でもてなしてくれる超いい感じの夢も見られたんだけど……むふふ。

でもなあ……その前に見た夢が、どうも重かった。内容全然覚えてないけど。

まあ悪夢なんて覚えていてもいいこと無いから問題ないけどな。

つか、もしかして悪夢の方の原因って、これ？ この締め付け？ 納得しかねえ。

抱き着いてるのは意図的か寝ぼけたのかどうかはともかくとしてルリルの奴、竜としての力が一切抑えられてねーんだわ。めっちゃ頭イテーツって起きたもん。頭ぎっちぎちに締め付けられてたもん。

ルリルは無駄に良い匂いがするから目覚める前に見ていたい夢の方はその効果かもしれんが、トータル的に見たらマイナスどころ。

だって方が一ルリルが寝ぼけてルキの方に抱き着いてたら大惨事になってたぞ。その場合、俺の弟子は今頃首から上が潰れたトマトだよ。怖っ。

ともかくこの化け物起こさないとなと、ため息をつきながらルリルの肩をつかんで揺さぶる。

「おい、おい起きろ。頭いてえ。離せ」

「いやあ。もつと寝るのおく。ミサオ、いい香り……もつといっしょにいて……」

「ぐうッ」

くっ！ 甘えた声を出しよってからに！

こいつはおっさん。美幼女に見えてもおっさん。どんなに可愛くても股につくものついてるおっさん!!

「ふあ……ししよ……おはようございま……」

自己暗示してたらルキが起きたようだ。

しかしルキは俺の現状を見ると、さつと顔を青くする。

「!! ごめんなさい！ 僕、寝ちやってました!? あああああ！

シヤテイ先輩と約束したのに……！ る、ルリルさん、師匠から離れてくださいー！」

「寝ちやってました？ って……まさかお前、一晩中起きてたのか!?

寝ろよ！ いや寝たのか！ いい、それでいい。でも起きてようとしたってことだよな？ そういうのいいから。お前まだ成長期なんだから寝てるマジで。気を遣うな」

「で、でも！ ルリルさんが変な事をしないと監視を頼まれていたので！ とに、とにかく！ ルリルさん起きて。はくなくれくてくくくだくさくいく！ そんなふう抱きついて胸を押し付けるなんて、ふ、ふしだらですよ！」

「いや、ふしだらも何もまっ平なんだけどさ……大平原だよ……」

そういうのとは別のピンチさはあるけども。主に竜の膂力による命とかの。

ぐいぐいルリルを引き剥がそうとするルキだったが、クウォーターエルフの腕力では竜には勝てないらしい。ピクリともしやがらねえ。

そこからルリルを起こすのに一時間を要したので、俺達のルナナリアス二日目はそこそ遅いスタートとなった。

今日は口ハルドさんところ行かなきゃな。

……………。

あゝあゝ！

行かなきゃだけど行きたくねえなああああゝゝゝ！

「待っていたぞミサオくん」

「ど、ども……………うす……………」

昨日とんでもないカミングアウトをかましてくれたわりには泰然  
自若とした様子のロハルドさんに迎えられた俺達。

ちなみに当然、みんなにはロハルドさんからの告白について話して  
いない。

そんな暇なかったし、どう説明すりゃいいんだよ！ 自分で男から  
男の時の自分が好かれてて昨日告白されましたとか言いにくいわッ

!!

(ん？ いつもならこの辺で空気読まない茶々が入るんだけどな  
……………)

慌ただしく脳内思考していると、すっかり居る事に慣れてしまった  
お邪魔虫が俺の心を的確にえぐる横やりを入れてくるのだ。けど今  
日はその様子が無いというか、そもそも実体化すらしていないよう  
である。あのこまっしやくれたムカつく美シヨタの姿を朝起きた時か  
ら見ていない。

まあ実体化と言っても、俺にしか見えないんだけど。そーいや声も  
聞いてないな。

その事にほんの少しのひっかかりを覚えつつ、でもあいつがたまに  
静かな時はその後、倍ドンでムカつく事言ってくるからなと警戒を怠  
らないよう気を引き締めた。

これも俺の神経のためである。毎回ブチギレてたら老後まで血管  
が持たんわ。

「ロハルド殿、お久しぶりですね。ご健勝そうでなによりです」

「アシュレ嬢か。久しいな」

俺がそんなことを考えているとアシュレがロハルドさんに先んじて挨拶して、今回の目的を告げていた。

「昨日はミサオがお世話になったようで。……ところで、我々は今回魔術工芸核以外の目的もあってロハルド殿をお尋ねしたのです」

「それについてはわたくしからご説明しますわ」

「ああ、頼むよシャティ」

アシュレから流れるように説明役を引きついで、シャティが現在俺達が攻略を行っている灼熱迷宮の特性について説明をする。ロハルドさんはそれを興味深そうに聞いていた。

よしよし……！ 昨日の妙な発言<sup>台</sup>については今のところ話題に出てこなさそうだ。このまま一生出ないでほしい。

「へえ。特定の魔術のみを阻害する術式か。シャティ嬢でも難しいとあらば、たいていの魔術師はお手上げだろうな」

ロハルドさんの言うとおりである。

シャティほどの魔術師は、それこそ世界一の大賢者……カリユキオスくらいしかぱっと思いつかない。

「そこでロハルド様に、空調の効果を備えた魔導具を作っていただけないかと伺いに来たのです。……お願いできますでしょうか」

「そう言われてもね……。ワタシの専門は魔術工芸核だ」

「あ、やっぱり駄目か……」

ダメもとだったとはいえ、いざ聞くと少し落ち込むな。

しょうがねえ。行き方がめんどくさいし時間かかるけど、また賢者の元に出向いて知恵を借り……。

「出来ないとは一言も言っていないが？ フリというやつだよ、ミサオくん」

「わっ!？」

さつきまでシャティとアシュレの前に居たのに、にゆるんつと鬼人<sup>オ</sup>族<sup>ガ</sup>のでかい図体で俺の横にまわると肩に腕を絡めて来たロハル

ドさん。

ちよつ、近い近い近い！

「そ、それって……？」

動揺しつつも、たった今耳にした内容に食いつく。その言い方だと可能って事だよな？

「ワタシは今言ったように魔術工芸核が専門だ。だからそういった細工を施された小道具は作ることはできない。……だがね。そもそも魔術工芸核そのものが叡智と魔術の結晶なのだよミサオくん」

「あ、はい。重々承知しておりますが……」

ずいっと顔を近寄せられて思わずかしくまる。魔術工芸核にかける情熱で爛々と輝く目の圧が強い。

つーか、その前に！

「ロハルドさん！ もうちよつと、もうちよつと離れてくれませんか!!」

あんた額から角生えてるタイプの種族だから刺さりそうなんだよ！ あと俺の眼鏡とあんたの眼鏡がぶつかってガツチャガツチャいってるから！ 近いてー！

「そうよ、近いわよー！」

ずずいっずいっ！ とばかりに距離を詰めて来たロハルドさんと俺の真ん中に割って入り、両腕をつっぱって距離をとらせたのはルリルだった。

流石、竜。鬼人族の腕力をもものもしない。

「……つまり、魔術工芸核ってやつの方に、ミサオたちが欲しい機能をつけられるってことかしら？」

「ほう、なかなか察しが良いな竜族の。その通りだ」

「ルリルちゃん様とお呼び」

ロハルドさんを落ち着かせるためか、何故かルリルがまとめた。

けど、そうか。なるほどな！ 誰でも使える魔導具として作ることには出来ないけど、使用できる者が限定されるとはいえ魔術工芸核に追加機能としての設置は出来ると。

「じゃあ、俺の新しい魔術工芸核に空調機能をつけてもらえたり……？」

「ああ。というか、もうつけてある」

「え」

まさかの発言にロハルドさんへとみんなの視線が集まった。

「一度ワタシの魔術工芸核を渡した相手……しかもそれを使って厄災の魔王をも倒してくれた相手に、以前と同じものを誂えるのはワタシの矜持に反する。当然、より良いものをと考えるさ。そのために追加した機能の中に”常に自身と周囲の気温を一定に保つ”ものがある」

「おお〜！ それです、それ！ 俺達が欲しかった機能！」

まさかの一足飛びで目的達成である！ つーか、一石二鳥!? 一つの目的で二つの用向きが済ませられた！ これは昨日が散々だった分、その揺り戻しで運が向いてきたか……!?

「ありがとうございます！ ロハルドさんっ！」

「なに、気にするな。……これは推測だが、その迷宮攻略もミサオくんが元の姿に戻るためのものだろう？ それならばワタシは協力を惜しまないよ。今回はたまたまだったかね」

「……………あ、あはは……………ッス」

嬉しいはずなのに、その言葉に含まれた意味を察して背筋をぞわぞわしたものが這いあがっていった。

ロハルドさんの丸眼鏡の向こうから覗く瞳が、どこかねっとりとした熱い光を帯びているように感じる。気のせいであれ。

「それはありがたい。感謝します、ロハルド殿」

ロハルドさんからの視線にビビっていると、さりげなく俺を後ろに下がらせながらアシユレが前に出る。

さ、さすがお気遣いが出る紳士スパダリ系美女……！ ロハルドさんからの視線の意味こそ分からなくとも、俺のビビりを察知して守ってくれたらしい。

女性に守られる情けなさに落ち込みこそすれど、その安心感についてときめき……【メスめろりんっ♪】あ、あ、あ、あああああああああああああああツツツ!! ゆ、油断したアッ！

『馬鹿じゃない?』

(あ、魔王)



内心頭を抱えていると、今日初めて聞く声に怒るより先に「あ、居た」という感情がこぼれた。

……ナンデ？

静かな方がいいに決まってるのに、なんだかな。

俺の内心に魔王がムカつくけどわりとまっとうなツツコミを入れて、俺が怒鳴り返す。そんな脳内バトルが普通になりすぎていたのか、俺は朝から一言も発しなかった魔王に物足りなさでも感じていたのだろうか……って、今の無し無し無し!! そんなわけあるかッ!!

『……………馬鹿じゃない』

(……………?)

二度目の同じセリフは、何故か妙にしおらしく聞こえた。



と口と口がぶつかると？」

「?!」

ビクツと肩が跳ねた俺は無言で手を開いてロハルドさんの胸倉を解放した。

く、くそう……。今の俺とロハルドさんじゃあ身長差がありすぎて、それを引き寄せる斜めの直線は確かに危ない。勢い余った時が危ない。低くなった身長が恨めしい……!

俺が悔しがっていると、やっと笑いが収まったらしい魔王が口を開く。

『あのさ。見てて思ったけれど、彼って女の君にはさして興味なさそうだね。一向にかまわんと言われつつ、すぐく平坦に対応された気分ってどんな？ ねえ、どんな気持ち？ ちよつと屈辱感あつたりするの？ ねえ』

(うつるせえよバーカ!! お手本みたいな煽り台詞いいよつてからにツ!!)

『あはは〜』

魔王にしおらしさのようなものを感じた俺はマジで幻でも見ていたんだと思う。

こいつの何処がしおらしいってんだクソがよ。心臓に毛どころか針金生えてるような奴だぞ。

(にしても……ッ)

魔王の事は置いておくとして、俺は非常にしよっぱい気持ちで自分の体を見下ろす。正確にはその体に纏っている”衣装”をだ。

そんな俺に声をかける仲間達だったが……。

「ミサオ様! とつてもとつても、とおつても、お可愛らしいですわっ! ロハルド様はとつても良い仕事をしてくださいましたね!」

「ワタシは今のミサオくんにとつての最適解を作り出したにすぎないけどね。残念ながらワタシの趣味ではないが、そう手放しで褒められると嬉しいものだ」

「うん。似合っているよ、ミサオ。……それにしても、流石ですねロハルド殿。あの見た目で以前と防御力など変わらないのでしょうか?」

「もちろんだとも、アシユレ嬢。というより、修理とは違うが壊れたミサオくんの魔術工芸核を材料にしているからね。先ほど述べた機能に加え、全体の性能が増していると思ってくれて構わない。戦いの経験を積んだ分、中心核そのものが進化している。……やはりミサオくんはワタシの作品を持つに相応しい人間だった」

満足そうに頷いているところ悪いけど、普通だったら嬉しい評価も今は全然嬉しくない……!」

ロハルドさんの趣味じゃないなら、これに作り直す必要なくねえか!? もっと前の形に近づけることもできたんじゃない?!

今の姿にとつて一番いい形にしてくれたってのは、まあ理解してもいいけどさ。それもまたロハルドさんの職人としてのプライドによるものだろうから。……でも納得できるかどうかは別の話なんだよなあ!

あと、身にまとう本人の意見も大事じゃない!? 前はとことん話し合って二人でデザイン決めたのに、なんで今回は勝手にやっちゃうの!? 俺、ロハルドさんだから信じたのに!

せめて、せめてもつと別の……!」

というか今の俺に一番合っている調整がこれってのは流石に違うんじゃないか!? 似合うわけないだろうが俺みたいな三白眼そばかす地味眼鏡野郎に!

「……。ふふっ。ミサオママ、かわいい」

俺がプルプル震えているとモモが尻尾をパタパタさせながら近づいてきて、俺の姿をいろんな角度から眺めはじめた。

「も、モモ。お世辞とか別に言わなくていいからな? むしろ似合わないから別の形にしろってパパと一緒にロハルドおじさんに言っただけ……!」

「へえ、華やかなもんだ。娘時代にそういう格好に憧れたこともあったねえ。でも私にはそういうの似合わないから、ミサオが羨ましいよ」

「はっ!」

「ふうん、なかなかじゃないの鬼人。褒めてつかわしてあげてもいい

わよっ。」

「ちよっ」

「し、師匠。僕も、その。とつてもお似合いで、可愛いと思いますー!」  
「ルキまで!? おいせめてお前は味方であれよ! 同じ男だろ!? 俺も男なの! お前、これ自分で着てみたいって思うか!」

「……………」

「目をそらすな!!」

ガーネットタにルリル、ルキまでロハルドさん側ってどういうことだよ。唯一口を開いていないマイヨールに関しては真顔で拍手している。こいつが一番ムカつくなオイ。

でもみんなさ。着てる本人がこの反応ってことを加味してくれないか? 俺、めちやくちや嫌がつてるよね? なに、みんな目が節穴つちやつてる???

みんな褒めてくれてはいる。

褒めてくれるけど……………!

でもさ、この姿って……………!

「どう見ても魔法少女じゃねえか……………!」

……………そう。

ロハルドさんが俺のために新たに誂えてくれた魔術工芸核が作り出した魔術装甲。その姿は想像していた元のハイパーかつこいいたイリツシユ鎧ではなく、キラキラ魔法少女のような衣装だったのである……………!

唯一同じなのが色味だけ。

黒を基調として差し色に赤が使われているのだが、なんだかすごく……………敵側から仲間になった追加戦士枠の魔法少女っぽい趣!

ビロードのような生地にキラキラと輝く星のような飾りが散っていて、レースやフリル、銀糸と金糸で模様が描かれた刺繍など非情に繊細な作りは俺みたいいな素人から見ても金貨何枚分？　って感じの超一級品な衣装だということがわかる。わかるのだが、問題はそれが俺の魔術装甲ってことなんだよな。

妙にスカートの方は短いしよ……！　代わりとばかりに太ももまで覆う二―ソックスのフエチ感も何なんだよ。絶対領域とかいらんわ!!　俺が主に魔法少女みを感じたのは特にここだよ！　魔法少女ってすごいよな。スカートの中身を絶対に見せないまま動き回らんだから。

『ミサオ、少女という年ではないだろ?』

(んなこたあ今どうでもいいんだよ！　みたいだなくって思ってるだけで！　ただの感想だよ！　まさか自分が魔法少女だとは思ってねえよ思ってたまるか!)

魔王の野郎は相変わらず余計な茶々をいれてくるし！

でも本当になんて!?

シャティ達ならともかく俺がこんなの似合うわけないだろうが！  
いやそもそも鎧が服にジョブチェンジしてんのがおかしいんだよ!!　最早別ジャンルだろ!!　ロハルドさんいわく性能は前以上らしいけど納得いかねえツ!!　魔術装甲って言ってるじゃん。装甲！  
これ布じゃんか！

「だああああああああッ！　もうツ!!」

俺はたまらず頭をかかえて、掻きむしるのだった。